收容書目

家道訓

農業全書自序

農業全書附錄

律原發揮

律尺考驗 幷三器攷略

飬山秘策

日本經濟叢書

卷二

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷一目次

解題

家道訓

著者貝原益軒は有名の鴻儒なり、名は篤信、字は子誠、益軒一に損軒と號す、筑前の人にして、家世々福岡侯に仕ふ、寛永七年生れ、正德四年歿す、著はす所、本書の外に一世財用記一卷、五常訓五卷、初學訓五卷、養生訓八卷、愼思錄六卷、克明抄一卷、大疑錄二卷、初學知要三卷、筑前續風土記二十九卷、自娯集六卷、其他數十種あり、多くは國字を以て平易に解說し、就中厚生利用の事を記述するもの鮮からず

本書は一、二、三卷を總論とし、四、五、六卷を用財とし、主として一家の治め方、即ち家事經濟を說きたるものなれども、東洋經濟學說の特徵たる、道德と經濟との關係を、最も切實に說明したるもの丶一として、大に參考に資す

べきものあり、故に編者は著者の數十種の良書中、特に本書を撰んで之を採録せり、本書の原本は、正德二年の刊本に據る

（參考）前記著書目中の一世財用記は、井上博士（哲次郎氏）の注意に依り、編者始めて益軒に此書あることを知り、且つ博士よりその寫本の一見を許されたるが、固より片々たる短文にして、宛も家訓の如きものなれども、坊間に得難き珍篇にして、而かも著者の經濟思想の一斑を見るに足るべきものなり、他日更に博士に請ひて謄寫する事を得、且遺族に向ひて本叢書に採收の許諾を得るの機會あらば、後卷に採收すべし

農業全書自序

農業全書は一部十卷の大著作にして、農事總論を始とし、五穀菜草果木生類等の各條項に分類して、詳に論述したるものなるが、今此には著者が元祿九年即ち全書出版の前年に、執筆したる序文のみを採錄したり、序文は固より

片々たる短篇なれども、著者の經濟思想の一斑を窺ふに足るべし、著者は元和九年を以て藝州廣島に生れ、元祿十年筑前に歿す、農業全書は著者が少壯の時より、日本諸國を周遊して、徧く各地の農業を視察し、且廣く老農等に就いて見聞したる事實談を綜合し、殆ど四十餘年の辛苦を積んで著述したるものにして、我邦徳川時代に於ける農學の鼻祖なり、然れども全書は、純乎たる農書にして、經濟書にあらず、故に此には其の本文を收めず

〔參考〕貝原益軒は農業全書を以て「我邦農書の權輿なり」と評したるも、是れより前百二三十年、即ち永祿年中伊豫に松浦宗案といふ人あり「親民鑑」なるものを著はし（意見書十五卷中六、七、八の三卷なり）詳に我邦の農政を切論せりと云ふ

農業全書附錄

本書は宮崎安貞の農業全書第十一卷として、全書に附刻（元祿十年）したるもの

なり、著者は貝原樂軒、名は義質、字は子實、善太夫と稱す、有名なる益軒の兄なり、寛永二年を以て生れ、元祿十五年に歿せり、安貞の全書は、實に樂軒の加筆是正を待ちて、始めて成書たるに至りしものなりと云ふ、而してこの附錄は全書を補正したる後、更に其の遺漏を拾集記述したるものにして、全く樂軒の著作に成れるものなり

律原發揮

著者中根璋は京師の人にして、通稱は丈右衛門、字は元圭、白山と號す、算數天文の學に精通し、著述は本書の外に、異體字辨、授曆俗解、算法不作集、其の他數種あり、天和、元祿頃の人なり

本書は支那の十二律を論じ、それより步法、田法、都制、衡量の制等を古今の尺度に徴して、詳細深切に說明したるもの、原本は元祿五年の板本なり

律尺考驗 并三器攷略

本書は中村惕齋の著す所なり。惕齋名は之欽、字は敬甫。寛永六年平安に生れ、元祿十五年、歳七十四にして歿せり。惕齋元と商家の子にして、市井賈竪の間に生長すと雖も、幼より學を好み。門を杜ぢて心を典籍に潛め、研鑽講究到らざる所なく。經史。禮樂。音律、天文。地理、尺度。量衡の類。皆其の精蘊を極め、當時伊藤仁齋と並び稱せられて、博識の名ありと云ふ、著す所、周易程傳詳說一卷、同啓蒙翼傳一卷、筆記周易講義十六卷、同讀易要領四卷、同書經集傳十二卷、同詩經集傳十六卷。同禮記集說十六卷、同春秋胡氏傳四卷、四書鈔說十二卷。同示蒙句解二十八卷、小學示蒙句解十卷、筆記大學或問一卷。近思錄鈔說十四卷、同示蒙句解十四卷。筆記律呂新書。家禮訓蒙疏五卷、朱子爲學要言九卷、醫方三器通制一卷、三器通考六卷、天文考要二卷、五緯行度圖譜一卷。古今州郡圖六卷。姫鏡三十二卷、增補訓蒙圖彙

十五卷、惕齋閑話四卷、同筆錄十六卷、同文集十三卷、日抄三十卷、其の他數十種あり

本書の主意は、和漢古今に於ける十種の尺を對比考驗して、其の異同を辨じたるもの、此等尺度の寸法如何を詳にするは、經濟上に關する古書を閱讀する者の、最も必要とする所にして、本書は古來學者の信據する所なり、諸家著述目錄、及國書解題等本書を以て、新井白石の著述とせるは誤なるべし

本書は福田博士の收藏に係る寫本を底本として、帝國圖書館本等を對比校正したるものなり

兼山秘策

著者室鳩巢は備中の人なり、名は直清、字は師禮、木下順庵の門に遊び、新井白石等と名を齊うし、出でて加州侯に仕へ、加賀に遷り、人の舊宅を購ひて之に居る、因つて自ら號して鳩巢と稱す、正德元年白石の勸めに依り、江

戸に歸りて、將軍の侍講となる、時に吉宗、精を勵まし治を圖り、屢々名儒碩學を延きて、時事を咨詢す、鳩巢其の職に在りて獻替する所、尠からず、幕府特に邸を駿河臺に賜ひて、之を寵遇す、世人稱して、駿臺先生と云ふ、享保十九年、歳七十七にして歿す、著す所、本書の外に、周易新疏十卷、大學及中庸新疏各二卷、西銘詳義一卷、大極圖述一卷、六諭衍義大意一卷、義人錄二卷、鳩巢小說（一名可觀小說又鳩巢逸話）二卷、駿臺雜話五卷、獻可錄三卷、不亡鈔四卷、鳩巢先生文集十三卷、同後篇十四卷、同補遺十一卷、其の他十數種の小作斷篇あり

本書は鳩巢自から編輯したるものにあらず、加賀の人、靑地齊賢（字伯孜號兼山）及其の弟禮幹（字貞叔號麗澤）が、自分等に寄せられたる鳩巢の手簡を、年月順に輯錄したるものにして、題して兼山秘策とせるは、齊賢の手錄に係るが故なり、本書第八册に記する所に據れば、本書は齊賢禮幹兄弟が、各々自ら一通づつを寫し、兄は之を兼山秘策とし、弟は之を麗澤秘策として、各々

之を自分の篋底に珍藏し置き、齊賢の歿後、禮幹は生前の誓約に因て、兼山秘策を燒棄すべかりしを兄の手蹟を見て之を燒棄するに忍びず、却て自己の寫したる麗澤秘策の方を燒棄し去つて、此の兼山秘策を存し置きたるを、禮幹の歿後、はしなくも世上に寫傳さるゝに至りしものなり、而して今日世上に流布する本書の寫本は、多くは兼山麗澤秘策と題し、冊數は同じく八冊本なれども、それは本書の第七冊までを八冊に分本したるまでにして、本書の第八冊は概ね之を逸するものゝ如し、但此の第八冊は禮幹が兄の歿後に手錄したるものにて、內容は頗ぶる亂雜にして、ほんの覺書に過ぎざるが如くなれども、文中本書の由來を知るに足るべきものあるを以て、茲には特に之を採錄したり、第八冊をも合せて兼山秘策とするは、聊か其の當を得ず、寧ろ此の一冊は、麗澤秘策とする方、適當なるべしと雖も、編者の收藏に係る本書の底本は之をも合せて、兼山秘策と題しあるを以て、其の儘茲に收採し、二三の他本と對校して、原書の眞面目を失はざらんことを期せり

又本書を室鳩巣の著作とするは、少しく不穩當に似たれども、其の内容は勿論、主として鳩巣の手翰を集めたるものにて、同人の意見を表明するものなれば、從來の所傳に隨ひ、鳩巣を以て本書の著作者としたるなり

大正三年七月　　瀧本誠一

解題 終

家道訓

貝原益軒著

家道訓卷之一

貝原篤信著

人の世にある、たかきいやしきみな、身をおさめて、家をとゝのふるを以ってつとめとす、家のもとは身にあり、ゆへに家をおさむる主人は、先づわが身をたゞしくして、家をとゝのふべし、身おさまらざれば、家とゝのひがたし、家とゝのはざれば、身を安くしがたし、君子はつねに身をつゝしみて、のちのうれへをおもんばかる、こゝを以つて、身やすくして家たもつべし、家の主人たゞしければ、家人ををしへみちびくべし、主人たゞしからざれば、家人の則なく、善をすゝめ、悪をいましめがたくして、家法おこなはれず、ゆへに主人の身の行ひは、家人の見ならへる手本となれり、つゝしむべし

凡身をおさめ、家をとゝのふるに禮を以てすべし、禮とは人倫の作法也、心につゝしみあり、身に則有を禮と云、つゝしみなく則なければ、人の心を失ひ、身のわざあしく、人にまじはれば人倫の道たゝず、それ人の禽獸にかはれるは禮あればなり、禮なければとりけだものに同じ、禮を行なふは、むつかしくくるしき事にあらず、事ごとに行なふべきすぢめにしたがひて行ふ故に、心安くして身の行おだやかなり、正路なる平地をゆくがごとし、故に人禮あればやすし、禮なければあやうし、こゝ

を以て、人たる者は禮を行はずんばあるべからず

常に禮を守りて內行をたゞしくすべし、內行たゞしからざれば、ほかに善を行なふも、皆いつはりとなる、これ禮を行なふ初めなり、內行をたゞしくするとは、父子、兄弟、夫婦の間むつましくうやまひあり、家人をあはれみて恩あり、人をつかふにせはしからず、いるかせならず、財を用ふるによきほどにしておごらず、やぶさかならず、色慾をつゝしみ、恥を知りて淫行なかるべし、これ內行のただしきなり

父母につかへてつねにちからを盡し、時々の見まひ、膝下のつかへおこたらず、古語に、夕にさだめて朝にかへりみるといへるかごとくすべし、ひまなき人も朝夕のあひだ、時々つとめて、父母の前に侍べりつかふべし、つねに養ひをかへりみ、飮食のあぢはひよくして、みづから寒溫の節をこゝろみてすゝめ、冬は父母をあたゝかにし、夏は凉しくすべし、外に出れば必ず父母に對面し、內にかへれば、必ず父母をかへり見る、父母に對しては、顏色を溫和にして、言をあらくすべからず、父母のこころをよろこばしめ、父母の身をやしなふ、二のつとめ闕くべからず、是れみな人の子たるものの定りたる法なり、此の法にそむくべからず、父母のことをつねに思ひしたひて、心にかけてわすれざるを孝とす

兄弟にむつまじく、夫婦和して別あり、妻をみちびくに禮を以てし、子弟ををしへいましめて愛を過

さず、彼是につきて愛惜の私なく、子弟をみちびき、禮をつとめ書をよみ、藝をならふに、おこたりなからしむべし、凡子弟の教は必嚴正なるべし

凡家の主として家をおさむる人は、まづ父母によくつかふるを第一のつとめとし、次に妻をみちびき、子弟をおしゆるを以て要とし、其次に下部(シモベ)をつかふに心を用ひて、禮法を正しくすべし、くるしめあなどりて、しゑたくべからず

子をそだつるには、おごりとほしゐまゝなるを、はやくいましむべし、衣服器用以下萬の俸養、わが身の財祿より、かろくうすくばうそくなるべし、愛を過して、ものごとにゆたかに華美なるは、是子におごりを敎ゆるなり、いとけなき時よりおごれば、年長じてます〳〵甚し、はじめゆたかにして、後におさゆるはあしく、はじめかゞみて後にやうやくのぶるはよし、いとけなきよりいましめて、僞なくして誠を本とす、よろづの事質朴にすべし、又おこたりわがまゝなるを、はやくいましめて、へりくだりゆづる事をおしゆべし、子をそだつるに、はやくおしゆると、左右の人をゑらぶとにありといへるは、賈誼が名言なり、此二に心を用ゆべし、はやくをしえざれば惡にうつりやすし、付きしたがふ人あしければ、あしき事を見聞て、一生のわざはひとなる、幼よりあしき事を見聞しては、先入の言主(アルジ)となり、後に善事を見きゝてもうつらず、あしきくせつきては、後にならひとなりて改りがたし

外人にしたしきは逆なり、國法をおそれ守り、上たる人の行なひ、國家の政をそしるべからず、上をそしり國政をそしるは、是大なる不忠不敬のいたりなり、つゝしむべし、そしる人ありとも、雷同せず、口をつぐんで云べからず、およそわが身をかへりみおさめて、つねにわが過をせむべし、人をせめ人の不善をいふを、いましめとすべし

凡家をおさむるに、先父子、兄弟、夫婦の三親をあつくすべし、古語に、父子したしみ、兄弟和し、夫婦正しきは、家の肥たる也といへり、若三親和せずんば、富といへども家のやせたるなり

凡家にありて家人にまじはるには、善を行なひて、惡をいましむる是を要とす、善を行はざれば人の道たゝず、善を行ふには愛敬を本とすべし、愛とは人をあはれみて、おろそかにせざる也、敬とは人をうやまひてあなどらざるなり、此二はすべて人倫にまじはりて、善を行なふ心法也、善をするは愛敬の外になし、父母を愛敬するを本として、兄弟夫婦親戚下人に對するも皆しかるべし、各其人の品によつて愛敬すべし、うとけれどもおろそかにすべからず、いやしけれどもあなどるべからず、是敬なり

毎日つとにおきて、手と面(オモテ)をあらひ、先父母の氣色をうかゞひ、飲食のこのみをとひてとゝのへすゝめ、其もとめあるを聞てつとめ行なひて、父母の心にかなふべし、子弟に其日のつとむべき課程(ヤク)をさ

づけをしえ、奴婢に其日の所作を云つけおこたりなからしめ、外事あらば使を命じ、人の附託(タノミ)あらば滯なくとゝのふべし、朝は早くおき、門戸を早く開かせ、家內の塵をはらひ、門の內外庭中を掃除して、皆いさぎよくすべし、朝おそくおくるは、家のをとろへとなる、いましむべし、古人、家の盛衰は、朝おくる事の遲速を以て試むべしと云ひし、むべなるかな

凡家內の平日の用心はかねてより早くすべし、第一に來年の秋までの糧米をそなへ、次に鹽醬(エンシヤウ)をたくはへ、脯醢(ホシモノヒシホ)なつゝり、薪、炭、油をかねてよりあつむべし、右の貯なければ家の計たらず、奴婢をあはれみ、其衣食居處を察して飢寒せしめず、其所を得せしむべし、男女內外の別を正しくし、武士は鎗、長刀、弓、矢、鐵砲、杖、棒等を、常に便よき所におくべし、常に用る器をとゝのへそなへ、器のそこなへるをば修補し、屋宅、藏庫、牆壁の破損せるをはやく修理し、材木、竹、茅、土石を求め貯へ馬をよく飼ひ、其外家にかふべき畜類をやしなひ、菜蔬、草木時に順つてうへやしなふべし、藏のあけたて出し入れを察し、盜賊と火災との用心、つねにきびしくしておこたるべからず、火をふせぐ器なども平日備ふべし、凡家內の事、つねに心を用ゐておこたるべからず

四民ともに、常に、家業をつとめておこたらず、其上儉約にして諸事つゞまやかにし、家事に疎かなるべからず、勤ると儉なるとの二は、是家をおさむる要法なり、勤儉の二つをつねに行なふべし

家に居ては陰德を行ふべし、心に仁をたもち、身に善を行ひて、其善を人のしらん事を、もとめざる

を陰徳と云、まどしき人も、其力に應じて善を行ふべし、うゑたる者に食をあたへ、こゞえたる者をあたゝかにし、かはける者に湯水をあたへ、老たる者をたすけ、幼をいつくしみ、病人をいたはり、人の子弟に孝弟をすゝめて行はしめ、人の善と才能をほめすゝめ、人のあやまりをそしらず、人の惡をかくしてあらはさず、人の過惡をいさめ、道にあるいばら、からたち、くいなど人を害する物をさり、道にをちたる物をひろいて、其ぬしをたづねてかへし、いける物を、小なりとも故なくしてみだりに殺さず、つねにかくの如くにして、陰徳を行なふべし、年をへて久しく行へば、其の善つもりて大なり、樂しむべし、貧しき人すらかくの如くなるべし、況富める人をや、富て財あまりある人は、天道みてるをかく理なれば、人にほどこさずして、財を多くあつめおけるは、後は必わざはひ出來て、財をうしなひ、子孫に其財をのこしがたし、財多き人は尤父母にあつくし、親戚朋友の乏しきをにぎはし、貧しき人をたすけ、飢寒をすくひて、廣く人を愛し、善を行なふべし、夫人をすくひたすくるは天の好み給ふ處、天道は善にさいはいし給ふ理なれば、かくの如くひろく人を愛する事久しくは、天のよろこび給ふ事ふかくして、福をうくることうたがひなかるべし、天道は還す事をこのむといへり、善を行なへば天よりさいはいを下し、惡を行なへば天よりわざはひを下し給ふ、善惡につきてむくひあるをかへす事をこのむといへり、此理かならずたがはず、是天道のまことなり、こゝを以善を行ひて久しければ、彼道なくして神佛にへつらひいのり、其さいはいをうけわざはひのがれんとするより

も、百ばいのしるしあるべし、愚なる人は天道の善にさいはいし、悪にわざはひし給ふ理をしらざる故、天道をおそれずして天道をうたがふ、天道の善にさいはいし、悪にわざはひし給ふ理、古今からやまと共ためし多し、其理あきらけし、即時に其しるしなけれど、後必むくひあり、うたがふべからず、悪を行ふと、財多くして人にほどこしすくはざるとは、天のにくみ給ふことはりのがれたし、天道おそるべし

武士たらん人は、武備に心を用ひて、兵具をとゝのへそなへ、そんじたるをは修補し、常に帶佩せる大小刀、其外の刀弓矢鎗長刀など、時々ぬぐひみがきちりをはらひ、きよらかにすべし、又金銀米錢なども、武備のため別にたくはへ置べし、若常の時財用不足して急用ありとも、武備のためにたくはへ置しを取て用ゆべからず、凡武具は他の器よりきよらかにし、にはかに事有時、事かけつまづかざるやうに無事の時かねて調置べし、おこたるべからず、にはかの時に陣用意に及ばずして、事にのぞんていそがはしからず、心しづかなるべし、武具も無用の華美なる飾を爲すべからず

家の主はつねに仁愛にして、善を行ふを以て樂しみとし勉むべし、餘財あらば兄弟親戚の貧窮をにぎはし、朋友の乏きを助け、わが采地の農人の饑寒をすくひ、わが家に久しく來れる貧困なる者にほどこし、窮民のより所なき者あらば、わがちからに随ひてすくふべし、乞人の内にて、老人、病者、畸(カタ)人(ワ)、殊に盲(メシヒ)、蹇(アシナエ)、痴(チシ)、老て子なく、幼(イトケナク)して父なき者、養なはるべき親族なくてみづから食を求めかね、

せんかたなくて乞人となる者あり、是皆窮民のより所なき人也、あはれむべし、かゝる急難なる者あらば、ちからの及ぶほどすくひめぐむべし、うゑたる者はやしなひやすし、かくのごとく人をすくひ善をする事は、人間世の最樂しむべき事也、心を用ゆべし、漢の明帝の弟東平王の都に來朝せられしに、明帝の汝國にありて何事か樂しきと問給へば、東平王國にありて善をする事、尤樂しと答へられし事むべなるかな、凡富貴なるも貧賤なるも、其位に應じて善をなすべし、志だにあれば貧賤にしても同く善行はる、善をする程樂しき事なし、つとめて善を行ひて此樂をしるべし、財をおしみては善を行ひがたしと、古人いへるもむべなり、又無益の事に財をついやすは愚なり、是善を行なひ、人を救ふに志なければなり

家をおさむるにも忍の字を用ゆべし、忍とはこらゆる也、堪忍するを云、おごりをおさへて、慾をほしゐまゝにせざるもこらゆる也、又わが家の貧なるをこらえて、人をむさぼらざるべし、凡の人君子にあらざれば、わが心にかなはざる事多し、堪忍せざれば人の交りは和がず、然るに父兄は子弟のわれにつかへやう不足して、心にかなはざれば子弟をせむ、子弟は父兄のめぐみうすくして、あさたらざれば父兄をうらむ、其餘夫婦親戚も亦しかり、たがいに堪忍せざればいかりうらみ出來て、父子兄弟夫婦親戚の間むつまじからず、此ゆへに人の行ひのわが心にかなはざる事を、たがいに堪忍してうらみいからざれば、一家の内やはらぎしたしむ、是家をとゝのふる道なり、又人のあしきをばゆるし

て堪忍し、わが身には道をつくして、人に堪忍せらるゝ行をなすべからず

凡家人をつかふには、人の心をおしはかり、うれひくるしみをしりて、人のくるしみなきやうにほどこすべし、奴婢は主人をたのんて、身をやしなふ者也、心を用ひて情あるべし、刻薄にして情なく、かれをくるしむべからず、およそ人をつかふ者は、下人のうれひくるしみをよくおもひはかりて、かんがへしるべし

家をおさむるに四の教あり、一には家業を勤めて生業をおさむ、二には倹約にして財用を足す、三にはつゝしみてわが身をたもつ、四には恕にして人を愛す、是王凝が語也、恕はわが心にて人の心をおしはかりて、人のこのむ事はほどこし、きらふ事はほどこさず、およそ家をおさむる人は、皆此四を守るべし

子弟のいとけなき年より、よき師をゑらび求めてはやく、聖賢の書をよませ、善をおしえ悪をいましめ、孝弟、忠信、禮義、廉恥の道をしらしめ行はしむべし、かりそめにも、悪しき友に交はらしむべからず、是第一いましむべし、あしき事見きかしむべからず、いとけなき時は、ことに悪き事に早くうつりやすし、よき事もあしき事も、先入の言はやく主となる、よき友を求めてまじはらしめ、よき事を見きかしむべし、善悪皆習馴るよりうつりやし、習馴る事つゝしむべし

身をおさめ家をたもつに、約の字を守るべし、約にすとはつゞまやかなる也、ほしゐまゝならず、取

ひろげざるを云、是を以情慾をふせぎ、財用を節にするは、身をおさめ家をたもつ道なり、論語に、約を以て失ふものすくなしとのたまへり、約なればあやまりすくなしとなり

家の主となりては、三族をしたしむべし、三族は第一に父族、第二に母族、第三に妻族なり、父方の一族は本族と云、先祖より傳はれる血脉同じ、親疏のかはりあれど、われと同氣なるゆへ、あつくしたしむべし、父族をあつくしたしむは、是又先祖へつかふる道なり、次には母方の一族は、是父族につぎてしたしむべし、次に妻の一族は、母の族につげり、三族をしたしむ、其次第輕重かくの如し、これ古の法なり、今の人は妻族をもはらしたしみて、父族、母族にうとし、輕重あることをしらず、父母への不孝なり、おろかなりと云ふべし、妻族をしたしむべからずと云ふにはあらず、輕重の次第あるべし

わが身、朝夕飮食の俸養はかろくして、身をば勞動すべし、おごりて酒食の美をこのみ、おこたりて身を安逸にすべからず、おごらずおこたらず、かくのごとくすれば、第一德を養ひ、つぎに身をやしなひ、次に財をやしなふ、三の益あり、飮食淡薄にして、身を勞動すれば、食氣とゞこほらず、氣血めぐり、脾胃やぶれずして、生をやしなふによろし、又身を勞すれば、艱難勞苦にたへて、忠孝の行ひ、學問、藝術を習ふにつとめよし、もし身體を勞動せずして、安逸にならへば、艱難に不ㇾ堪して、忠孝のつとめをくるしみ、學問、技藝におこたり、ことに士は武勇のたしなみなく、軍陣にて艱苦に

たへず、病おこり身よはりて用にたゝず、武勇をはげみがたし、およそこゝろを安靜にし、身は勞動せしむべし

家道訓卷之一　終

家道訓卷之二

家のわざをよくつとむれば、利養は求めずして其内にあり、士は奉公をよくつとめてへつらはず、農は田畠をよく作りて、公(キミ)をおそれて公役をよくつとめ、工は器物に心を用て、よく作り出し、そさうなる物をつくりて人を欺かず、商は交易をつとめて僞らず、高利をとらず、四民共にかくのごとくなれば、あながちに利をむさぼらざれども、福祿はをのづから來たる、つとむべきわざを、正路につとめずして、ひが事をして利をむさぼる者は、一旦は人により幸ありといへども、天道のにくみ給ふ理なれば、後は必禍あり、愚人は當時早く利を得んとして、後の禍をしらず、四民共に只正直に、

わが家のわざをよくつとめ、天道をおそれて、僞なかるべし、これわざはいをのがれ、福を得る道なり

人の家の禍は、多くは利を求るよりおこる、利をむさぼれば、かへつて財を失ない、わざはひ來る事多し、利を求めんよりは、只家業をおこたりなくつとめ、家財を妄に費やさずして、分外の利をむさぼらざれば、禍なく財を失なはず、凡利をむさぼるは禍の本也、いましむべし

古語に、つとむれば貧にかち、愼しめばわざはひにかつといへり、此の語甚人に益あり、家のわざをよくつとむる人は必富む、身の事をよく愼めば、必わざはひなし、勤愼の二字、つねに守り行ふべし、みづから行ひて、家人にも行はしむべし、勤るは天の道也、天はめぐりてやまず、愼むは地の道也、地はしづかにしてうごかず、つとむるとつゝしむとは、天地の道にしたがひて則とす、是人の行なふべき道なり、此事ふかき理あり

わかき子弟のともがら、父母の家にありて、いまだ君につかへざる者は、父母につかへていとまなきをよしとす、又家事をよくつとめて、怠らず、父兄の勞にかはるべし、かくつとめ行ひて、少もひまあらば、書をよみ學問し、或文藝、武藝をならひつとむべし、如此つとむれば、いとまなくして妄念をこらず、ひが事を行なふべきひまなし、子弟わかき者のひが事あるは、ひま多くしてすべきわざなきゆへ、無賴の惡少年にまじはり、妄念おこり、妄行をなす、たとへば人をふむ馬も、はせゆく中に

はふまず、つい立て居る時は、足にいとまある故に、人をふむがごとし

客をまねきて饗せば、たゞ眞實に客の心にかなふをむねとすべし、かざるべからず、食品すくなく、いさぎよくし、味をよくしてすゝむべし、酒をすゝむるに、心得あるべし、多少はのむ人の分量にしたがふべし、少ししゐるはよし、しゐても猶辭せば其心に任すべし、酒をこのんでのむ人にも、分量の多少あり、其量をしらずして、たらざるは害なし、みだりにしゐ過して、人をくるしむべからず、大に酔ぬれば、禮義を失ひ亂に及ぶ、放言を發し病を生ず、古人、酒を狂藥と名付し事むべなり、酒をこのむ人は、あながちに辭せず、大かたは、其人の心にまかせたらんこそ、客の心にかなひて、宜しかるべけれ、酒は以てよろこびを合すといへば、只人の心をよろこばしめ、興をやるほどにすゝむべし、古人も酒は微酔にのみ、花は半開にみるといへり、主も客も少たらざるほどにのむべし、十分によふは、必後のうれひとなる、殊に下部は、ほしゐまゝにのめば、狂してわざはひとなる、吉田兼好がいへる事むべなり、をよそ酒をほしゐまゝにすれば、たかきいやしき、家をやぶり身を失なふ、いましむべし、人の家をやぶり、命をうしなふは、多くは酒の禍なり

親戚をば時々まねきて、饗應すべし、しからざれば、情意うとくなる、食品はうすくし、情意は厚かるべし

家をおさむるに、法なくいるかせにして、家道みだりなれば、其家の奴婢もおこたり、無禮にして、

わがまゝになるゆへに、身のならはし悪くなる事をばしらて、其家風のいるかせなるをよろこぶ、又主人儉約ならざれば、奴婢のためゆたかなるやうに思ひてよろこぶ、此二は無道にして、かへつていやしき愚なる者の、ほまれを得るもの也、故に奴婢のほまれを得る人は、かへつて其家法みだりなる事多ししかれば、いやしき者と愚人との、ほまれをよろこぶべからず、そしりをくるしむべからず、又いやしきものと、愚なる者のほめそしりをきかば、信ずべからず、是を信ずれば、あやまりてひが事あり

家をおさむるに、奴婢尤おさめがたし、これをつかふに、尤道あるべし、遠ざけてきびしければ、うらみそむく、近づけているかせなれば、おごりおこたる、恩愛を以てなづけ、禮法を以て正すべし、如レ此すればうらみなく、おごりなし、仁愛と禮法と、二の者ならび行ふべし

奴婢は才力ありて質實なるこそ、ねがはしけれど、かゝる者はまれなり、才辯にして利口なる者は、多くはまことすくなくして、主をあざむき、かだましき事を行なふ、家主たる人、もし是をよろこびて、家事をまかせては、必大なる禍となる、才德二ながら得がたければ、才にぶくとも、質實なるを好むべし、にぶくしてはかゆかざれども、質實なれば主人の敎にしたがひやすく、後の禍なし

いにしへの諺に曰、不レ癡不レ聾、不レ爲二家翁一、云ふ心は、家の主となる者は、家人の過あるを勘忍して、おろかなるやうにあるべし、かしこだてして、明察にすぐれば、家人くるしみて家おさまらず、

又家人の人の悪をつぐる事をとりあげて、聞川ゆべからず、耳きかざるがごとくなるべし、かくのごとくならざれば、家の主人と成りがたし、此ことわざよく心得べし、大かたはしらずがほにてすぐすは、わざはひなし、是智者のする事なり、ことに小人婦人の云ことを信ずれば、必あやまる、是を聞て信ずるは愚なり、かゝる智なき者にたぶらかさるゝは、まことにあさまし、よく心を用ゆべし

下人利口にして、わが心にかなひたり共、愛し過すべからず、愛すぐれば、必おごりおこたりて、家法をみだし、私を行ひて、主人の禍となり、其身もほろぶ、凡利口なる者は、必佞奸なるゆへ、かへつて主人の心にかなひやすし、是を愛すれば、わざはひとなる、おそるべし、このむべからず

奴婢に罪ありとも、いかりにくむ事を過すべからず、にくみ過せば、必うらみそむきて、禍となる、愛するも、にくむも、よきほど有べし

凡物、各職分あり、犬の夜を守り、鷄の晨をつかさどるも、亦職分なり、禽獸猶かくの如し、況人をや、人各職分あり、家の主となりては、其家人をあはれみ、其ひがごとをいましむ、是職分なり、民のつかさとなりては、其民をあはれむを以て職分とす、其職分をつくして、其位に居るべし、其位に居て其職分をつとめざるは、名ありて實なしといふべし

家の主となりて、初につとめて苦しまざれば、後に樂なし、父のゆづりをうけしはじめ、又祿を初て得たる時より、家をおさむるに、約にしておごらず、慾をこらえて、ほしゐまゝならず、家財を用る

に、倹にして費やさず、家業をつとめておこたらざる、是皆初にくるしむなり、如レ此すれば、財ゆたかにして、一生の間身をおはるまでともしからず、是後に樂むなり、かくの如く、はじめにつとめて苦しむは、是家をたもつ要道也、凡の事、はじめにつとめざれば、後の樂なし、わかき時、くるしんでつとめまなべば、一生の間老後までの樂となる、わかき時、いたづらに日を過せば、一生の間愚にして身をおはる

婦人と小人の言、奴婢の讒言、間言(ナカゴト)を聞べからず、父子、兄弟、夫婦のいたれるしたしみも、此等の人の間言(ナカゴト)を信ずれば、必不和になり、婦人と小人との讒を信じて、とがもなき子をころし、妻をころし、臣をころしたるためし、和漢古今すくなからず、おろかなる事のいたり也、凡讒言おそるべし、かりそめの事にも、片口をきゝて信ずれば、必あやまる、つゝしむべし、周子曰、家人の離るゝ事、必婦人におこる

家の主人たる人は、讒を信ずべからず、凡讒言は小過を大過に云なし、小悪を大悪に云なし、似たるを實に云なし、無きを有るに云なし、或其人のきらふ所をしりて、いからしむる、皆讒者のたくみなる言なり、きく人明らかに察すべし、まよふべからず、才力ある人といへども、讒者には迷やすし、かなしむべし、只智者はまどはす

富貴の家に、貧賤なる親戚の出入するは、主人の仁愛のあつき事あらはれて、其家の面目とすべし、

かゝる人の來るをはづべからず

わが身の大事ありて、思慮決しがたき事あり、又おほやけに申事、皆思慮ある人にとひはかり、其人の評論にしたがふべし、わが身の事は私欲ある故、才ある人も心くらくなりて、善惡の理見へがたし、わが思慮する所、十分によしとおもへど、傍よりみればあしき事多し、人の上のよきもあしきも、わきよりはあきらかに見えやすし、碁をかこむものは、まよひて手見えず、かたはらよりみる者は、眼あるが如し、すべて人は、一世の内大事ありて、我思案にていかゞせんと、ひとり決定しがたき事多し、知慮ありて能く是非を分別する朋友を、平生もとめて常にしたしく交り、大事ある時、其人の思慮をかり用ゆべし、わが身又は子弟などの身に大事あらば、われひとりはからひて、決定する事なかれ、知慮ありて其事を能く心得たらん人に、とひはかるべし

人家の内、子弟婦女のそしりを、云つたへしむる事なかれ、人の心の同じからざる事、其面の如し、人のなす事わが氣にあはざる事多くして、かげにては人の事を、そしりかたる事あり、それをかたりつたふれば、きく者必いかりうらみ、間隙是より生じて、不和になる、智ある人は、かやうの言をききいれず、耳にきゝたるまでにて、心にかけずして、うらみいかりをおこすべからず、およそ小人婦女しもべの云ふことば、道理にちがへる事多し、わが心にかなへばほめ、かなはざればそしるは、かかる人のならひ也、必みだりに取あげて聞き入るべからず、信ずべからず、是を信ずれば、父子、兄

弟、夫婦も必不和になる、おそるべし

妾（シャウ）を求るには、其性行のよきと、良家の女とをゑらふべし、良家とは族姓いやしからずして、風俗そだちよきを云ふ、其人品のよしあしと、家法のよしあしをゑらぶべし、人の子は、父よりも母によく似る理あり、故に其心の賢愚も勇怯も、多くは母に似る例しあり、勇者の女子のうめる子は勇あり

養父母となり、養子となる者、人ごとに賢者にあらず、養父母となりては、わが生める所にあらざれば、養子にまことの愛なし、養子となりては、我をうめるおやにあらざれば、まことの孝なし、父愛なく子孝なくして、養父、養子心にかなはざる事を、たがひにうらみいかりて後、義絶しあだがたきとなる者、世に多し、子なくんば其同姓の内にて、年長じて、後よき性質の人をゑらびて養ふべし、同姓の子弟によき人品なくんば、遠慮あるべし、又はじめは養子を愛すれども、實子をうんでのち、私欲をこり、養子をうとんじにくむ者多し、是又はなはだ見にくし、心かろくして、みだりにはやく他の子を養ひて、後悔すべからず、故に養子をするには、よくゑらんでおそきに宜し

家をおさむるに、男女の別正しく、內外の防ぎをきびしくすべし、混亂ならしむべからず、男女の別なく、家法正しからざれば、子弟のともがら禮儀なく、風俗みだりにして、淫行おほく、家風をけがし、罪におち入る、子弟をゆるして、淫邪におもむかしむべからず

婦人女子のしば〳〵外に出て禮節をつとめ、遊觀をこのむはいま〳〵し、婦人は內に居て家を治る

を職とす、外に出る事しげきはよろしからず、親戚の間も、只使を以て音信を通ずべし
婦女はむまれ付、陰柔にして智なく、多くは姦邪なり、正道にしたがひがたし、奴僕はならはしいやしくして、義理にうつりがたし、ともに愚にして道をさとしがたし、故に道理を以て其過を一々にたゞさんとせば、うらみそむき、不順にして家道和睦しがたかるべし、只つねに、家法を正しくし、禮を以て相對せば、おのづからひが事すくなかるべし
家人はかねて禮儀を正しくして、惡事をふせぎいましむべし、惡事出來てのち、いましむるはおそし、禮は未然をふせぐ、法は已然にいましむといへり、未然はいまだ事の出來ざる前也、已然はすでに事出來て後也、禮はたとへば、無病の時よく養生するが如し、病なき時、よく養生すれば、病おこらず、法は病おこりて後、藥をのむがごとし、病おこりて藥を服せんより、無病の時、よく養生すれば病なし
家のさかへ衰は家法の正しくなるを盛とし、家法のすたるを衰とす、富貴なるとて、盛とすべからず、貧賤なりとて、衰とすべからず、家の盛衰は禮儀の行はるゝと、行はれざるとによれり、是古人のいへる意也、今の世の人も、亦かくの如く心得べし
奴婢をつかふに、心はめぐみふかくして、禮法はきびしく立つべし、法いるかせなれば、あなどりて罪をおかし、とがにをち入る、いやしき者は法いるかせなれば、おこたりて惡におち入り、とがをおかしやすし、あはれむべし、およそしもべなどをつかふにも、心を用ひてあなどらず、又しもべにあ

などられず、法をおかされず、おこたらしめざるがよろし、又不慈にしてかれをくるしめ、所をうしなはしむべからず、陶淵明が一僕を子にあたふるふみに、これも亦人の子也、よく遇すべしといへり、法とすべし

もし惡性なるしもべありて、不忠をなさば、うちたゝき、せめはたるべからず、事なくして、はやくおひ出すべし

子孫のあらそひを慮りて年いまだ老ざるに、はやく書置をする人あり、又書置をいつはりて、作り出す者あり、是又遠慮すべし、人の父祖となる者は、死後まで子孫のためを思慮すべし

喪祭の禮は、おはりをつゝしみ、遠きをおふ道なれば、心を用ひてあつくすべし、おろそかにすべからず、然れども國法にそむくべからず、時宜にしたがふべし、國法と風俗にそむかざるかぎりは、其心をつくすべし、先祖は子孫の根本なり、年數へだたり、遠しといへども、思ひしたひてわするべからず、時節の祭、つゝしみあつくし、本に報ずるの心おこたるべからず、木の根につちかひ養へば枝葉しげる、先祖にあつくすれば、子孫さかふる理あり、しかれども、君子の先祖にあつきは、さかへを求るためにあらず

もろこしの諺にかねて後の用心なき事をそしりて曰く、三月に桑をうへん事をおもひ、六月に塘をほらん事をおもふ、いふ意は、三月蠶をかふ時にいたりて、はじめて桑をうへん事をおもひ出し、六月

旱(ひでり)する時にいたりて、はじめて塘をほらん事をおもひ出すは、かねて後の用心をせざる人のゆだんなる事をいへり、遠き慮なければ、必ず近き憂あり、家をおさむるには、萬の事、後を慮りて、かねてはやく其用意をすべし、如ㇾ此すれば、時にのぞみてにはかに行きあたりくるしまず、中庸にも、凡事前に定むれば、不ㇾ跲(ツマヅカ)といへり、初にうれへざれば、おはりに樂なし

わが身、事たる事をしらずして、人をむさぼる者は、身とめりといへど心はまどし、わが身事足る事を知りて、むさぼりなき人は、身貧しけれど心はとめり

訟(ウッタヘ)をば俗にくじと云、くじは人と理非をあらそふなり、凡初におゐて證人を多くむすび、證文を詳に取おき、初めをよくつゝしめば、終に訟なし、初めおろそかなれば、人よりひが事を云ひかけられて、後に悔あり、後に悔なからんことをおもはゞ、初めに心を用ひてつゝしむべし、をよそわが身正直にして、人に邪曲ありとも、なるべきほどは堪忍すべし、わがとるべき財を人にかすめらるゝとも、わが家の亡びにならざるほどは、損失を堪忍すべし、小人とあらそひて、奉行に訟へ對決し、人をとがにおとしいるゝも快からず、其の上われに十分理ありとおもへど、又彼に理ある事あり、われのみ理ありとおもふべからず、我身には私ある故、非をも理と思ひあやまる事あり、一偏に思ふべからず、もし彼に理あるをしらで訟ふるは、わが恥なり、又訟をきく人、ひとごとに必ず賢明ならず、きゝあやまりて是を非とし、非を是とし、或はかた口を聞て信じ、聞きあやまる事多し、又親類、權貴の人に

賴まれ、或は賄賂にふけりて私する事、古來其例すくなからず、さればいかなる正直の人、道理明白にして、證據分明なれども、終に其理を得ずして本意をとげず、返つてとがにおち入事多し、われに理あるをたのむべからず、やむ事を得ば、訟をなすべからず、十分に我に理ありとも堪忍すべし、もしやむ事を得ざる事ありて訟へば、只其一事のみ言ひとわりて、其人の他の惡事をとばにあらはすべからず

人に五計あり、一生の間十歳より六十まで、時につけてなすべきいとなみある事をいへり、まづ十歳の比は、ひとへに父母の養によりて成り立てり、父母のをしえにそむくべからず、是を生計と云、二十歳はもとより身をつゝしみ學問し、藝をならひ家學をつとめて、身を立つる計をなすべし、是を身計と云ふ、三十歳より四十歳にいたりては、家事をいとなみて、家をたもつ計をなすべし、是を家計と云ふ、五十にしては子孫のためにはかる、子孫は年わかく、世事になれず、父まづ其ために計をなすべし、是を老計と云ふ、六十より以上は、わが死後の事をいとなみはかるべし、死後の事を早くいとなまざれば、死にのぞんてくやしけれどかひなし、此五計はもろこしの人、朱新仲が語なり、是よのつねの人も及ぶべき計なり、もし此年に應じて計をなさずんば、おこたれる也、ちからなしといふべし

家道訓卷之二終

家道訓卷之三

人の子孫たる者は、其家の先祖の家法をよく守りて失なはざれば、たとひ其の子孫才力なしといへども、よく其家をたもちて、いつまでも長久なり、其故は、其家をはじめて持立てたる先祖は、それほどの才智あり、其上わかき時より事に多くなれ、艱難をへて萬事に熟し、世のありさま人の心の善惡、人のうれへ苦みをよくしれり、此故に其人の立てたる家法は、必ず堅固にしてやぶれなし、子孫よく其法を守ればやぶれなくわざはひなし、其子孫才力聰明すぐれたる人ありとも、はじめて家を持立てたる先祖には及び難し、もしその子孫利口にして、先祖のさだめ置きたる法は、むかしの事にて、今の世にあはざるとて、其先祖をないがしろにして其の法をやぶり、新法をたつれば必ず其家亡ぶ、先祖の法を手本にして守り行はば、其家いつまでも長久なるべし

家人に對するに、嚴正にして厚重なれば、おのづから威ありて人あなどらず、かくの如くなれば、いかりてはげしく、惡言を出さゞれども人おそる

子弟はいふに及ばず、下部に對すとも、其罪あるをいかり、惡言を出していやしむべからず、又うちたゝきはづかしめて、犬馬の如くいやしむべからず、下部も又人の子にして人倫なり、人倫の交りかくのごとく、情なかるべからず、いやしくとも人倫の道を以てつかふべし、いはんや天地のうみて子として、あはれみ給ふ人なれば、いやしめにくむべからず、又人の過惡をせめて、人のためにわが心を亂して、怒りにやぶらるべからず、是己をおさめ、人をおさむる道を失なへりといふべし、怒り甚しければ、必ず目をいらゝげ、ことばをあらくして、人をいやしむるにいたる、君子のしわざ、かくの如く心をとりみだして、見ぐるしかるべからず、又せめらるゝ者は、わが惡きをわすれ恥辱にあひたるを本意なくおもひ、いかりうらみて心服せず、下部にあやまりあらば、只從容として、誠を以ていましめ正さば、彼若し人心あらば感通すべし

家をおさむるにも、下情上に通ずるをよしとす、下情上に通ずとは、下つかたの人のうれひくるしみ、善惡曲直のありさまを聞きて明らかに知るを云ふ、下たる者のうれひくるしみ、よきあしきをしらざるはをろか也

權勢ある家の賓客を司るやつこは、必ず主人の權勢にほこり、無禮にして賓客をあなどる、主人より時々心をつけて無禮を戒むべし、其やつこにまかせおくべからず、やつこの無禮なるは、せむるにたらず、只其主人をそしる、主人是をしらざるべけんや

人のいましめは防のごとし、大水をふせがんため、かねて日でりの時、つゝみをつきをけば、洪水のわざはひなし、人もかねての防なければ、うれひの來る事はかりがたし、人家の内、年わかき子弟、婦女、奴婢のともがらは、いまだ惡事出來ざる時、かねて禮法を正しく、内外上下のへだてありて、家法をきびしくすべし、ことさら酒色のつゝしみをきびしくすべし、又無賴の惡友にまじはる事をかたく禁ずべし、打ちまかせ置きて放逸をゆるし、姑息の愛を專にすれば、不意なるわざはひ出くるもの也、惡事出來て後は、おさへがたし、きびしくせむれば、うらみそむく、顏之推が、婦を初來におしえ、子を嬰孩にをしゆと云しも此意なり、はじめにはやくふせげば、ちからを用ひずしてしるし多し、末をすくはんとすれば、ちから及ばず

古語に、一物あれば一累をそふといへり、草木、鳥獸、器物など、何にても一向にこのみ過せば、必其物に心をうばはれ、心に一のわづらひをそふる也、其上事をこのめば、ひまと財とをついやし、下人をなやます、このまざれば事すくなくしてよし、君につかへていとまなき人、父の家にあつて、孝行にひまなき人、官職をあづかる人、藝術の家業ある人、此四等の人は心を淸くし、事をはぶくを宗として、さし當りたる職分をつとむべし、事を好み物を玩ぶべからず、事をこのみて隙をついやせば、わが身にさしあたりたる職分のつとめには、必うとくなる

小兒をいましめて、もろ〳〵の虫魚など、およそ人の害にならざる、いき物をころさしむべからず、

又生類をくるしましむべからず、犬、猫、鷄、鴨などをなやますべからず、不仁にして、みだりに物のいのちをたつは、天道にそむく事を、幼少の時よりはやくをしえいましむべし

常に居る處は、陽に向ひ陰に背くべし、如ㇾ此なれば、日の光明らかに、月にむかひ、夏すゞしく、冬あたゝかにして、身を養なふに宜し、又居室も庭中もつねに掃除して、いさぎよくすべし、かくの如くすれば、氣を養ひ、心をいさぎよくす、くらくけがらはしければ、心氣の養とならず、又居る處くらければ、元氣をふさぐ、甚明らか過ぐれば精神をやぶる、居る處かざりをこのめば慾を生ず

人の家居は貧富によらず、身の分より少しせばきがよし、せばければついゑすくなく、事すくなくして住よし、富貴なりとも、無用の屋作ひろくすべからず、ひろ過ては通行なやみ有、掃除に家人のつとめしげく、修理もむつかしく財の費多し、されど又、無用の用とて、常に用なき所少有てよし、事有時のためなり、家居は只堅くいさぎよくして、かざりなきが心をやしなひ目を養なふによし、財を多くたくはへてとめる人、もし生れ付て仁心なくとも、わが身のため、子孫のためをおもひて、善を行なひ人をたすくべし、財寶を多く子孫に殘さんよりは、財をすてゝ廣く善を行なひ、父母、兄弟、親戚にあつくし、其餘の人の貧をすくひ、飢寒を助くべし、是後のさいはゐ、子孫のため、財をのこすに甚まされり

子孫弟姪のともがら生れ付きて愚不肖なれば、いかに教えいましめても其不德改らず、いさめをふせ

ぎてうけ用ひず、いさむればかへつて心にさからひ、うらみそむき不和にいたる、時々いさめてきかずんば、いはずして和を失はざるにしかず、かくあしく生れ付たるは、聖賢といへども、いかんともすべからず、堯舜の子の不肖なるを以て、しるべし、聖人頑なるを、いかりにくむ事なけれとのたまふ、赤子の井におち入がごとし、あはれむべし、にくむべからず

およその人、各其心に生れ付たる偏性あり、わが妻子、しもべにくせあらば、時々つげをしゆべし、あらためぬればよし、もし其性つたなくして、あらためがたきをしりなば、堪忍してしば／＼せめとがむべからず、人の生れ付たるくせ、おほかたなをらす、とがめても益なし、されど教えにはおこたるべからず、只心ながくいさめ教ゆべし、にわかにさとさんとすべからず

衆人と下部は、人の恩をあつくうけてもわすれやすし、是其人のつねなれば、いかりとがむべからず、かくのごとき人は、必かくの如く恩をわするるものぞとしるべし、うらみとがむるは、わがをろかなるなり、われ年のつもりに、世の人を多く見るに、恩をうけてわすれざる人は、きはめてまれなり、十人に一人も有りがたし、是衆人のつねのならひぞと思ふべし、もし恩をわすれざる人あらば、善人なるべし、人の恩をうけば、長くわするべからず、必むくふべし、恩をほどこしてはわするべし、恩をたのむべからず

吉事をいはひ、凶事をいむは人情なり、正月、五節句の俗節と、元服、嫁娶をいはひ、死亡を忌む事

むべなり、然れども愚人は吉凶につきてははなはだかゝはり、いはひ過しいみ過して事に害あり、天命をしらずして、福を求め、禍をのがれんとする私心よりおこれり、是禍福の理をしらずして、おろかに迷へるなり、神佛にみだりにへつらひいのりて、さいはいをもとむるも又同じ

年わかくては、いまだ世變をしらず、又知慮なき人は、老人の言はまはり遠く、今時の風俗にかはりて、時にあはずとおもひて、きく事をきらひて、父祖をないがしろにしやすし、年わかき者は、たとひ才力ありても、世變をしらず、知慮熟せざれば、老人のをろかなるにも及ばず、わかき時は其理をしらず、久しく事になれ、年老て後、父祖の言理ある事をしる

凡家の主は、四民ともに其身をおさめて、家をおこさんことを志すべし、まづ親先祖より傳はれる祿と財とを失はずして、よくたもつを孝とすべし、つみなけれど、災ありて失なふは、ちからに及ばず、不德にしてみづから財祿を失なひ、或は財祿をへらすは大なる不孝なり、家業をよくつとめておこたらず、儉約にしておごらず、萬の事つゝしみて、あやまりすくなくし、家をよくおさめておこたらざるは善士なり、其志ある者は、其事ついに成といへり、其の志しの如くなる善士は必ず家を興す

居る處の室の內にある、器物、衣服、調度をば、年老たりとも、猶も立居くるしからずば、十たびの內五六度は、みづから立ちて用事を調ふべし、奴婢を用ゆべからず、是まづわが身をうごかし勞して、生を養なふ道なり、其上奴婢も又、しばしば立ちうこかず、勞せずしてよし、富貴にして奴婢多くとも、

かくの如くすべし、况や貧家ならば、おほからぬ奴婢を、しば〳〵よびて勞せしめんより、みづから立つて心のまゝに、ことを調ふるが心のなやみなくして快し、又奴婢をよんで、一事を云ひつけなさしめば、其時になをつかふべき事あらば、思ひ出して退ぞかさる內に、其ついでを以て、二も三も事をなさしむべし、奴婢のわが前にある時は、心を用ひずしてあだに過し、なさしむべき事を云つけずして、退きて後おもひ出し、しば〳〵よんで事を命ずれば、わが身も奴婢も事しげく、いたづかはしくしてひまなし、是人をつかふ道に心を用ひざるなり、奴婢も又主人の前にいでて、一事をつとめおはらば、又何事ぞあらばつとめんとおもひ、用なくともまづそこについゐて、主人の命をうかゞひ、しばしまちて後、用なくんば立てしりぞくべし

もろこしの古き諺に、「萬事從寛、其福自厚」といへり、寛とはせはしからず、急ならず、心ひろくゆたかにして、人の過をゆるすを云ふ、かくの如き人は福あつし、急にしてせは〳〵しき人は福すくなし、おきてひろき器にはさいはいあり、心寛かになだらかなる人は、さいはいながき例し多し

家に居ても國にありても、善を行ひ道にしたがふほど、樂しむべき事なし、はじめはつとめならひて、善を行ふべし、久しく行ひてならひなれぬれば、賢哲にいたらざれども、善を行なふ事樂しくなりぬ、才藝は雜事なり、初は面白からざれども、久しく習馴れぬれば後はおもしろし、いはんやよき道を行ひ熟せば、あに樂しからずや

おろかなれば人をうらみやすし、故に史記に曰はく、知あればかるく人をうらみず、此言むべなるかな、知ある人は、人のわが心にかなはざる事あるをば、故あるらんとおもひ、人をとがめず、或は人のしわざの道にそむけるは、生れ付ておろかなる故と思ひて人をゆるす、たとへば赤子の井に入らんとするが如くなればなり、又人の生付偏なれば、其行正しからず、智者は其偏なる病、あはれむべき事をしりていからず、家の主となる人は、此心得あるべし、親戚家人わが心に叶はざるをうらみいかりて、堪忍せざれば家道和睦せず

園に草木をうへて愛するも、又心を養なふ一助なり、いとまあるとき、少し心を用ゐて、あるにまかせて、求めやすき物をうふべし、得がたき物をしゐて得んとし、みだりに人にこひもとめ、あたひ多くついやし、其品の多きと花のすぐれたるにほこり、花のよきをあらそひたゝかはしむるは、事多くなり、心のわづらひとなり、心術をそこなふ、是樂みにはあらず、苦みを求るなり

園にうふる草木、異なるを好むべからず、又しげきはむつかし、作リ木すべからず、只ひろきそのには、果樹、花木、薬樹品々植て、四時の推移るを觀るべし、又果を數品うへて家祭にそなへ、賓客をもてなし、人にあたへて用多し、草は薬草花草を少しうへて、その名をしり其の花を玩ぶべし、居室の小園には、しげらざる常葉（トキハ）なる小樹を少しばかり植ゑて石に伴なはしむべし、小園の內は草木多ければむつかし、又庭に草木しげれば陰氣ふかく、夏は豹脚（ヤブカ）多くして人をさす

家園をおさめ、草木をうふるは、もとより氣を養ない、心を樂しまんためなるに、心を用ひ過して心を勞し、功を費やし、家僕を勞せしむるは、心を養なふ物を以てかへつて心をくるしめ、隙を費やすは、損ありて益なし

花草などをうつしうふるは、勞なく活きやすし、されども初うふるに、うふべき所をゑらんでうふべし、如レ此すれば、後日にうつしうへずしてよし、草も木もうつしうふるは、事多くむつかしく功をついやす、木をうふる事、尤はじめにうふべき所をゑらんで、其上長じて後までよき所に、他木との間遠くうふべし、はじめに所をゑらばずして、みだりにうふれば、後に長じて處を得ず、處をゑさせんとて他所にうつせば多くは枯る、枯れざるもかじけてさかへず、所を得ずとも、年久くしてさかへ長じたる木をば、やむ事を得ばうつすべからず、所を得させんとして事を好むべからず、もし小木をはじめうへて、所を得ざるをば、長茂せざる時早くうつすべし、小木はうつしても活きやすし

宅にはじめてうつらば、先づはやく果木をうふべし、次に他木に及ぶべし、十年の計は木をうふるにあり、樹木をうふるには菓を先とし、花を次とし、葉樹を又其次とす、果は尤も人に益あり、多くうふべし、取わき橘、柑、柚を多くうふべし、みのりて熟したるはうるはしき事花におとらず、柿、梨、栗、椒など好き品をもとめうふべし、花木は梅を先とす、紅梅もよし、櫻亦よし、早くちるうらめし、つばき花久しくさきて葉うるはし、挾ば活きやすく、花早くひらく、海棠、躑躅、杜鵑花もよし、葉樹は杉、

檜、樅、金松、羅漢松、冬青樹などよし、竹を北方に多くうふべし、火と風をふせぎ、又きりて時用に備ふ、前庭には柳、櫻、松、栢などうふべし、しげきをいむ、陰氣ふかく、夏は蚊多くしてうるさし、又菜は日用の助となり、宅中にうふるは新しくて、市にかふにまさり、其藥さかへてうるはしきは、目をよろこばしむる事、花草におとらず

家道訓卷之三終

家道訓卷之四

用財

萬の事皆法あり、法にしたがへば其道立ちて其事成る、法を守らずして、只わが心にまかせ行へば、必ず其事やぶる、家ををさむるに尤も法あるべし、法なければ必ず財用つき、困窮して家を保ちがたし

凡家を治るに、財を用る法をしりて、かたくつゝしみ守るを要とす、是を知りて守ると、しらずして守らざるとは、家の盛衰存亡の本にて、其のかゝる所いとおもき事なれば、常に心を用ゐ、よく其法をしりて守るべし、おろそかなるべからず、其法をしらず、おろそかにして、心を用ざれば必困窮にいたりて、家をやぶる、今の人家の主となりて、多くは家をたもつ道におろそかにして、財を用る法をしらず、故に困窮にいたる、貧窮なれば、みづから苦しむのみならず、親を養ふ事うすく、君につかふるにつとめがたく、人にほどこしめぐまず、禮義を行ひがたし、人に乞かり、かひおぎのりて、おひめをつぐのひがたし、百行かけて行はれず、不意なる變にあへば、困苦していかんともすべからず、貧苦のわざはひ子孫にいたりてやまず、或は一代にて家をやぶるかなしむべし、諸の細事雜藝をば、さほどしらずともありなん、まづ家をたもつ道をはやく知りて守るべし、是れ人生至要の事也、おろそかなるべからず

家ををさむる主人は、日夜家事をよくつとめて、おこたらず、おろそかならず、財を用るにをごらず、つひやさず、もつぱら儉約を行ふべし、勤と儉との二は、家ををさむる要道なり、此の二の道行はるれば貧窮にいたらず、財用にともしからず、勤と儉と二の道を行ふに、心を小にしておろそかならざるをよしとす、是れ勤儉を行ふ心法也

勤儉なれば必貧窮にいたらず、わが財祿にて家をたもち、財を人にもとめ、からずして事足りぬ、人の

貧窮をすくひ、音信、贈答、饗應の禮義をとゝのへ、其上餘蓄ありて、不意のわざはひにあへる時の、變にそなへあるは、是よく財を用る也

家を保つの道は、勤と儉との二にあり、四民ともに勤むれば、家業よくをさまり、財祿を得るの基となり、又家事よくとゝのほり家をさまる、勤むるは是財祿を得るの本也、本はつとむべし、儉約なれば、財を失はずしてよく家をたもつ、儉約は財をたもちて失はざる道なり、二の者ならび行はれて家道たつ、一もかくべからず、四民皆同じく是を行ふべし、又勤と儉との工夫は忍にあり、忍はこらゆるなり、苦勞をこらえてよくつとめ、私欲をこらえて、儉約を行ふべし

飲食、衣服、家居、器物など、わが身の分よりかろくするが、よきほどなるべし、身上に相かなへりとおもふは、分に過たるなるべし、只親をやしなふは、本に報ずる道なれば、わが身をわすれて、財ををしむべからず、又禮義を行ひ、人をすくひ助くる事は、分にしたがひ力を出すべし、財ををしむべからず、是人をあはれみ、人にまじはる道なれば也

家の破れたる所は、はやく修理し、家具をとゝのへ備へ、ふるくして損じたるは、改め補ひ、父よりゆづれる器などの、かけ損じたるは、はやく修覆すべし、凡そ小破の時、修理をくはへざれば、大破にいたりてはむつかし

仕る者は、君より給はる祿あり、農工商は父より得たる田地あり、家財あり、其財祿の多少によらず、其

分内にて儉約を行ひ、家人を養ひ、家をたもつべし、是君父よりうけたるのみならず、天より給はる所の、定分の財祿なれば、大身、小身、貧富共に、其家の財祿を用ゐて、事足りぬべし、是天命を安んじて、外を願はざる也、やむ事を得ば、外の財を借用すべからず、若家祿の分限に過てつひやせば、財不足して、外に借用ゆるにいたる、是財を用ゐるに法なくして、天命をやすんぜざる也、よく財を用る人は、財祿の多少によらず、其家に得たる所の、財祿の分量にて事足りぬ、家の困窮するとせざるは、家祿の多少によらず、又時の風俗の奢れると、儉なるにもよらず、又わが幸不幸にもよらず、只わが一心の儉なると、怠り奢れるによれり、「以レ約失レ之者寡矣、」と聖人ののたまへる事信ずべし、是家をたもつ法なり

古人の財を用ゆるは、其財祿の分限に應じて、過分の事なかりしかば、困窮する人すくなし、後の人は分限に過ぎて、下士は上士のまねをし、上士は大夫のまねをし、大夫は諸侯のまねをす、事によりて士たるもの、甚分を越へて、諸侯のまねをする事多し、かくの如くならば、何ぞ困窮せざるべきや、事により上より下にひとしくかろくするは害なし、下より上を僭して、貴き人のまねするは、大なるとがなり

財を用ふるに、小をつんで大にいたる故、少の費をもをしむべし、然れどももしやむ事を得ずして、少しの費はなすとも、大なる害なし、一時に大に財を用ゐんとおもはゞ、必猶豫してよくはかるべし、

やむことを得ば、こらえて費すべからず、小の費をつんで百にいたりても、猶大なる費一事は、それより甚しく財をやぶる、つゝしむべし

家ををさめ財を用ふるに、事ごとに心を用ゐて精しくし、こまやかにして、疎略なるべからず、をごらず、やぶさかならず、過不及なくよき程にすべし、用ゐ過ごすはをごれり、不及なるはやぶさかなり、心あらくして大やうにおろそかなれば、財の用やう過不及にして、或はをごり、或はやぶさかなり、あたふべきものを與へず、あたふまじきものにあたへ、多く與ふべき者にすくなくし、すくなかるべきにおほくするは、事そむきて理にあらず、是心を用ゐず、用ゐても精しからざる也

君より祿と位とを得るは、まことにかたき事なり、されど得る事かたきよりも、たもちて失はざる事尤かたし、祿位を得る事は、幸にしても得る人あり、財祿をたもちて失はざる事は、徳なければ成がたし、幸ありて得れども、徳なくして失ふ人多し、故に財祿ある人は、徳行をつゝしんで、其財祿をたもつべし、又財祿をむさぼり、分外の富を求めて、子孫にのこさんとせんより、家法を正しくし、子孫に道のをしへをのこすにはしかじ、子孫無道なれば、財祿をのこせども、必失ふ、四民皆かくのごとし、わが財祿をたもちて失はず、子孫長久ならしめん事をねがはゞ、只仁心を以て人をあはれみめぐみ、善を行ふをつねの樂とし、子孫に善ををしへすゝむべし、是天道にかなふ理なれば、當時目に見えたるさいはひなくとも、後に必天のめぐみをうくべし、是萬金をすてゝ、神佛にへつらひ、いのる

に百倍せる所なり、是れわが私言にあらず、いにしへのかしこき人のをしへ、古今のためし明らかなり、うたがふべからず

財を用る法を禮記の王制にいへり、曰はく、財用を制するに、入ることをはかりて出だす事をなす、云ふ意は、年の暮に、今年得る所の財の分限をかぞへて、其分限の多少にしたがひ、其年の豐凶によりて、それに應じて、來年までつかひ用る分限を定めて、時々にかへり見て、つかひ用る事を節にすべし、得る處の財の分量より、すくなく用るはよし、得る所より過ぎて多ければ、財不足して困窮となる、いましむべし、是を入るをはかりて、出だす事をするといふ、其上費をはぶき、をごりをいましめて、成べきほど餘財を多くたくはへ、凶年、火災、盜賊、疾病、死亡等の變に備ふべし、是萬世財を用るの良法なり

いにしへは、三年耕して必ず一年の食ありといへり、此意は農人は三年田をつくれば、一年の食の餘計あり、たとへば四町の田地をつくれば、三町のふるまひをなし、一町のなりはひを殘して用ゐず、三年すぐれば、三町のなりはひの餘計出來るゆゑに、たとひ水旱風蟲の凶年にあひて、五穀みのらざれども、飢饉の患なく、財用事かけず、士と工商の家も、此計をもつてしるべし、是をもつてはかるに、いにしへの法は、士は君より給はる所の祿を毎年四にわかち、三分を用て、一分をばたくはへ置て用ゐず、一分を三年かさぬれば三分となる故、もしは凶年にあひ、變にあひても、困苦のうれへなし、

三分の一をたくはへ置くは、凶年のため、或は水火盗賊不意の變をたすけ、又鰥寡孤獨、其他人の困窮をすくはんがためなり、是いにしへ財を用るの法也、此法を行へば、四民ともに財ゆたかにして、貧窮のうれへなし、是古今通用すべき良法也

凡太平の世の勢は、年々に萬の事、必ず華美におもむきて、をごりつひえ多くなりもて行く物なれば、儉約をむねとして行はずして、只其まゝにて世の成行にまかせぬれば、人々困窮して家をたもちがたし、俗にながれ、時にうつりゆかば、儉約の道立たずして、後には必家をやぶるにいたるべし、家主となる人は早くはかり、遠くおもんぱかるべし、萬の事は、遠き後の事を早くおもんばからざれば、必ずちかきうれへあり、はじめ憂勤すれば、後は必安樂なり、初におこたりて心を用されば、後は必うれへくるしみとなる、此理をよくおもんぱかるべし

財の用やう、よきとあしきとは、たとへば今兄弟二人あり、其家の財祿の分限も、人の口數も同じく、父のゆづれる財も同じく、父の借物のおひめのなきも同じ、然れば家の貧富も又同じかるべきに、一人は家とみゆたかに、萬不足なし、一人はまどしくせはしく、つねにたからをかりて、利に利を加へて、人にあたへうばゝれて、財をつひやしつくし、後には其のかれるものをつぐのはず、年々にやうやく貧困にいたる、是れなに故ぞや、財の用やうよきとあしきとによれり、よきとは後をおもんぱかりて、今をつゝしむなり、あしきは此うらなり

天地の氣滯れば、必ず變をなして、風雷、水旱、地震などの災となる、世間の物久しくあつまれば、必散る、人の氣血飮食めぐらずして滯れば、必病となる、財寶もおほくあつめて、人に施しめぐらざれば、滯りて後日のわざはひとなる、老子も多くあつむれば、必あつくうしなふといへり、是必然の道理なり、財多くあつまらば、貧苦なる人にほどこすべし、財を多くあつめて人にほどこさず、永く子孫につたへんとすれども、火災、盜難など不意の災變にあひて、財をうしなひ、或は子孫の不德によりて、財をうしなふ事、古今世上に其ためし多し、財をあつめて、さいはひとせんとすれど、財をあつめたるまでにて、人にほどこさゞれば、必ずわざはひとなる、鹿臺の財、鉅橋の粟、をごりてはたもちがたし、鄧通が銅山の財、石崇が金谷の富も、不德なればつひに失へり、又官祿をむさぼり、財寶をあつめて、子孫にのこせども、わが身に仁愛を行はずして、積善なければ、天道にそむきて、後の餘慶なし、其上子孫不肖にしては、其官祿と財寶をたもちがたし、只陰德を行ひて、つねに善をなし、ひろく人をすくひ、子孫に其餘福をのこし、又義方の敎をなして、子孫の行を正しくせんこそ、子孫のさいはひとはなるべけれ、わが身一人にて福祿を多くうけ過せば、天道みてるをかきて、子孫には福のこらず、わが身みづからさいはひのみてるをかきて、わがため、子孫のため禍をのがるべし、是自ら福をうけ過ごさずして、子孫に福をのこしあたふるなり、是智者のする所也

財を多くたくはへて餘りあらば、人に益ある事につかひ用ゆべし、無益のいとなみをなして財をつひや

すは、いたづら事なり、をしむべし、君子の財をみだりに用ゐずしてをしむは、人に益ある事に財を用ゐんが爲也、たとへば百萬錢をつひやして、萬燈をともさんよりは、十萬錢を出して、飢たる者萬人を養ふは益多し、又百萬錢を出して、女子を嫁せしむれども、十萬錢を出して、子を教ふる人なしと古人いへり、又大富の人は、一日の内にも千金をつひやして、無益の驕樂をなせども、百金を出して、飢たる人をすくふ人なきはなんぞや

わが身の養をうすくして、父母の奉養をあつくすべし、次に兄弟、親戚、朋友の貧窮なるをすくふべし、其外飢寒艱苦する者をたすくるを以て、樂とすべし、親戚のむすめ、嫁すべき時にいたれども、貧窮にして嫁する力なき者あり、われ若しちから有らば、財をたすけて嫁せしむべし、凡財あらば、かくのごとく有益の事をなすべし、財をしむべかず、我がちからにしたがひてほどこすべし、かく善を行ひて人をたすけば、家とみ財多くもてるかひあり、善をする事、かくのごとくならば、あにたのしからずや、道理をしらざる人は、多くの財をつひやし、無益の事をなして、義理にそむく事多し、財寶を多くつひやして道理にそむくは、むげに愚なり、よくわきまへて無益の事に、財をついやさず、益ある事に財を用べし、かくのごとく善を行ひて人をすくふ人は、必ず天道の御めぐみ深くして、わざはひなく福長じ、無益の祈禱をして、みだりに神佛にへつらふには、はるかにまさりてしるし大なり、無智の人は此理をしらず、道なくて神佛にへつらふは、神佛を愚にし、私ありとして、あざむきあな

どる也、是神佛の心にそむけり、なんぞかゝる人に利生あらんや

凡財ををしみては、善を行ふ事成がたく、功を立る事も成がたし、又人の心を得ずして、人思ひつかず、人の和なき故、事を成しがたく、なすことはかゆかず、軍にも賞をよく行へば、士卒身をすて勇戰をはげます、三略にも香餌の下には懸魚ありといへり、賞うすければ、士卒はげみなく、軍功も立がたし、是皆吝嗇のわざはひなり、俗語に、小欲大損と云、是也

人もし、富貴にしてたからを多くたくはへもたば、是天より我一人にあつくし給ふにあらず、多く人をすくはしめんために、われにさづけたまふとおもひて、天命にしたがひて、つねに仁愛の心をもちて、貧苦なる人をめぐみ、飢饉する者をすくひて、善を行ふを以て、樂みとすべし、是天の御心にそむかざる也、かくのごとくならば、富貴なるかひありて、大なる樂なるべし、財を多くもちても、わが身ひとりの俸養にをごり、人にほどこさずして、善を行はざるは、無用の物なり、石瓦を多くもてるに同じ、かゝる人を守錢虜と、古人の云けんもむべなり、財をもてるかひなくして、貧賤の人と同じ

財を用うる道をしらで、貧窮なれば、父母をやしなふにうすく、人にあたふべき物をあたへず、人をめぐむ事なりがたく、人のおひめをかへさず、廉恥の道行はれがたく、人のめぐみをうけてむくいず、官となりても、貧なれば民をむさぼりやすく、忠義をつとめがたし、禮義にそむき、心術に害ある事、

皆是れ困窮よりおこる、困窮は儉約ならざるよりおこれり、しかる故に、儉約は家ををさむる要道なり

およそ人家になくてかなはざる物の外、無用の物をもとめたくはへざれば、心のわづらひなく、財のつひえなし

器物は朝夕用ある物を寶とすべし、無用の奇物を寶とするは、價は多く費えて、わが用にたつ事はまれなり、常に用ある器は、價の費はすくなくて、用にたつ事多し、得がたき寶をたふとぶは、古人のいましめなり

士として財利をむさぼり、吝嗇にして廉恥の志なく、親戚故舊の貧窮をめぐまず、我にしたしき人、わが郷里の人の飢饉などを見ても、心つよくしてすくはず、親戚、朋友の禮義をつとめず、或はあたふべき者にあたへず、とるまじき物をとり、人の財を用ゐてつぐのはず、若し此事わが身に一もあらば、是をいましむべし、人のよきあしきを見るも、皆わが身のかたみなり、善を見ては是を學び、惡を見てはわが身にも是ありやと、かへりみるべし、如ㇾ此すれば、人の善惡を見て、皆わが身の益となる、人のあしきをそしらずして、我身をかへりみるべし、およそ鰥寡、孤獨、貧窮にして、たよりなき者を、わが分にしたがひ力の及ぶほどはすくふべし、これをすくふに財ををしむべからず、いかんとなれば、わが身彼をすくふほど財あるは、天よりひとへに、わが身にさいはひ給ふにあらず、貧苦

なる者をすくはしめんとて、われにたからをあたへ、富ましめ給ふ理なれば、天の御心にしたがひて、貧人をすくひほどこすべし、もし是をすくはざれば、天の御心にそむきて、其わざはひおそるべし、天道にそむきしわざはひ、たちまちに目にみへ來らず、其むくいおそけれども、のがれがたし、此理必たがはず、うたがふべからず、天道おそるべし

易に、天道はみてるをかくといへり、又物みつればかくともいへり、又古語に、多く藏むればあつく失ふともいへり、財多くあつめたるまてにて、人の貧窮をめぐまざれば、みちては必かくるわざはひあり、天道恐るべし

人の器物をかる事をこのむべからず、人を妨ぐる事遠慮すべし、入用ありとも、なるべきほどは、不自由をこらえて、人の器かるべからず、若しやむ事を得ずして器をからば、そこなふべからず、用ゐをはらば早く返すべし、久しくとゞめ置て、かせるぬしに事をかゝせ、乞ひ使をうけて、おそくかへすべからず、もしかれる物損ぜば、よくおぎなひて、其過を謝し返すべし、およそわが家に、人の財寶、器物、書籍等をかりて、かへさゞる物ありやと、時々みづからかへり見るべし、もしかれる物ならば、すみやかに返すべし、是又、家をさむる道の内の一事なり、おろそかにすべからず

物を買ひてかひたるおひめをわすれ、或はおこたりておひめを返さゞる事あらば、かへり見て早くかへすべし、是又心を用うべき事なり

商人は日々月々に財をめぐらし用て、其利を得るを以て世わたるたづきとす、若し商人の物をかひて、其あたひをおそくつぐのへば、商人其財をめぐらさずして、利を得がたし、たとひ後日に、殘りなく返しあたふるとも、其つくのはざる間は、日々月々に得べき利を得ず、其商人のうれへ思ひやるべし、大やうはかはりの財なくば、不自由をこらえて物をかはざるべし、凡かれる物を返さず、かへる物のあたひをつくのはざれは、其財主のうらみおしはかるべし、人のうらみいかり、つもりての天禍おそるべし

人の書をからば、わが書をさし置てまづ人の書を專一に見て、早く返すべし、人の書をかりて見ずして久しくてとゞめ置くは、おこたり也、大册なる書も、二日に一册は見やすし、中册の書は五册からば五日に見て、早く返すべし、十册からば十日に見て返すべし、久しくとゞめ置くべからず、早く返せば、人も又よくかしてをしまず、是れ學者の心を用べき事也

人の書をからば損汚すべからず、屋漏、水けぶり、猫、鼠、水、火、油、膩、小兒のふせぎをすべし、かれる書は、器に入れ置いて、見る時取出すべし、もしそこなひけがさば、おぎなひて其あやまりを謝して返すべし、是又百行の一なり

およそ人に書をかせば、我用ある時事かけぬ、人にかす事をしむべし、是を以て、書をかれる人、おもんばかりて、早く返すべし、かす人はかれる人の貧にして、書なきをあはれみてかすべし、をしむ

べからず、富める人、もし書を見る事をこのめども、書をかはざれば學すゝまず、我が書にあらざれば、用ある時考へがたし、財多き人は書を買ふ事をしむべからず

わが身の俸養におごる人は、必財をしみて、人にほどこさず、財多けれど人にほどこさゞるは、只吝嗇なるのみならず、不仁といふべし、財をしみては、善は行ひがたしと、程子のいへる、まことにしかり

家道訓卷之四 終

家道訓卷之五

わが家の生業をつとめて、財を生ずるの本とし、また儉約をおこなひて、財をたもつ道とす、もししからずして、家業におこたりてつとめず、財をみだりにつひやして、儉約ならざるは、是れ困窮のもとゐにて、家をやぶるゆへに、家を豊かにし、財を足すの道は、四民ともによく家業をつとむるなり、

また財をたもちて失はざる道は、儉約をおこなふにあり、凡そ士農工商、みな其家職をよく勉めておこたらず、是れ財を生ずるの本なり、また儉約にして、みだりにつひやさゞるは、財をたもつの道なり、此のつとむると儉約との二つは、よく家をたもつ道なり、利養を得ることは、あながちにむさぼり求めざれども、家業をよくつとむる中に、おのづからあり、此の上に儉約を行ふべし、大富貴のひと、家財祿米多しといへども、財はかぎりあるものなれば、儉約ならざれば、のちは必財つきてまどしくなる、わが家にあるところの財をかへり見て、つかひ用うべし、家財の有無を考へしらずして、妄に用ゆるは困窮の基也

家ををさむるは、國ををさむるに同じ、財を用ゐ、人を用う、此二事をつゝしむべし、質實にして、ぬすまざる家僕をえらびてつかひ、財をつかさどらしむべし、財をつかさどる家僕、かだましければ、我が利欲のみいとなみて、主君をあざむきて、主人の家をやぶる、財を用ると人を用るとの二は、家ををさむるの要なり、心を用うべし

およそ人家の必ず貧くなる事、天の禍にもあらず、人の不德によれり、まづ後のうれへをおもんぱからずして、堪忍の心なく、只今の口腹耳目の欲をほしゐまゝにし、儉約をきらひ、分限よりをごりてつひえをいとはず、このんで人の財をかり、おひめ多けれどもうれへず、かへる物のあたひをつぐのはず、それをこひもとむれば、いかりていよ〳〵あたへず、日夜出遊びて、わが家に居る事まれにして、

わが家事をつとめず、家の破損を修理せず、器物の損失をしらず、内に居ては夜もふすべき時、ふさずして時を失ひ、朝はおそくおき、家業をつとめず、常におこたりて時を費やす、財の出入をしるさず、くらの内の財の多少をしらず、家事を家僕にまかせてみづからはからず、酒をこのみてほしゐまゝにし、放逸なる無頼の友にまじはり、遊宴を事とし、器物をこのみ、さま〴〵の物すきして、からのやまとの無用の物を多くかひあつめ、猥褻にしてもろ〳〵のすきこのむ事多し、無益の藝をこのみ、逸樂を好み、衣服のかざりをこのみ、美味をこのみ、饗應をこのみ、營作を好み、無用の器をこのむ、かくのごとくこのみ多きは、すなはち是わざはひをこのむ也、かくの如くなる人は、必人のいさめをきらひて聞き入れず、是皆困窮の基なり

人家の富む事も、又必故あり、其品多し、只天の福にもよらず、其主人の行によれり、先づ家ををさむるに、よろづの事ほしゐまゝならず、口腹、耳目の欲をすごさず、私慾をこらえ、後日のうれへをおもんばかり、儉約にみだりにつひやさず、分外のをごりをせず、家事をみづからつとめて、僕婢にまかせず、家財の多少有無をはかり、家業をつとめておこたりなく、朝は早くおき、夜はおそくいね、おきふしに其時を失はず、酒食をむさぼらず、買へる物のあたひを早くつぐのひ、人の財をかる事をきらひ、わが財祿の分内にて事足りて、外に求めず、財を用ゐること、わが家祿の分限に應じて、過ぎざるゆゑに、財不足せずして人にもとめず、もし故ありて財不足し、やむことを得ずして、

人の財をからば、こゝろにかけて早くかへし、はじめの約をちがへず、衣食、家居、器物の美をこのまず、物ずきをこのまず、氣に合はざるとて、かる〴〵しくあらため作らず、營作をこのまず、無用の器物をこのまず、無益の藝能をこのまず、およそこのむことすくなし、このむことすくなきは、則ち是れわざはひをこのまざるなり、かくのごとくなる人は、かならず人のいさめをよくきゝ用ゐてふせがず

家をよく保つと、よく保たざるとは、夫の德不德のみにあらず、又妻の行の善惡によれり、古人家貧くして、良妻を思ふといひけんもむべなり、夫は外ををさめ、妻は内ををさむるが職分なり、夫よく勤儉なれども、妻もし放逸におこたりてつとめず、驕りて儉約ならざれば、家をたもちがたし、殊に貧賤なり、家はひとへに、妻のちからによつて盛えおとろふ、夫はつねに内に居ずして、妻のしわざをしらず、只妻にまかせ置きぬ、しかるに妻不德なれば、財をうしなひて必家をやぶる、故に家をほろぼすは、多くは妻のとが也、いましむべし、妻の德はつゝしみてをごらず、夫としうとにうけしたがひて、わがまゝならず、もつぱら家事に心を用ゐて、身をへりくだり、女工をよくつとめておこたらざる、是婦人の德なり、かくのごとくにして、よく家をたもつべし、夫となれる者は、愛におぼれず、必ず婦に敎へて、家ををさめしむべし

儉約を行ひて家をたもつ事、必ず早くおもんばかりて行ふべし、行きつまりてはせんかたなし、たと

へばわかき時より、中年まで養生をせず、晩年にいたりて漸く養生をつゝしまんとするがごとし、つつしまざるにまされども、おとろへてのちは益すくなきが如し

財を用うるに、人々身上に相應の分量あり、是を節とす、節とはよきほどなり、節に過ぐれば奢となり、節に及ばざれば吝嗇となる、節を守るは中にかなふ道なり

つひえをはぶき、をごりをおさへて、家財の分限に應じて用うべし、分限の外にこえて用うべからず、をごりつひえをおさへて、私欲をこらゆるには、つとめて力を用ゐざればなしがたし、心よわくしては、欲にひかれて行はれず、人世俗のそしりをおそれては、儉約は行ひがたし、ちからを用ゐて行ひとぐべし、欲にひかれ、そしりをおそるゝは力量なし、欲にかつには剛を以てす、おそれざるは勇者のわざなり

儉約にして財をつひやさゞるは尤も良法なり、然れ共儉約を行ふに事よせて、財ををしみて禮儀をかき、仁愛をほどこさゞるは、鄙狹と云べし、儉約にあらず、是吝嗇なり、不德なり、禮儀をつとめて、財を用うべく、あたふべき時ならば、財ををしまずして、いさぎよかるべし、又貧窮をすくふにおいては財ををしむべからず、わが身には儉約にして、人に施すには財ををしまざるは是善なり、わが身にはをごりつひやして、禮儀をかぎ、人にほどこしめぐまざるは不德なり、財ををしみては、善を行ひがたしと、古人いへり、むべなるかな、又無益の事に財をつひやして、をしまざる人あり、愚なりとい

ふべし、無益の事に財を用るは、淵にすつるに同じ、是れ善を行ひ、人を救ふ道をしらず、其志なき故也、むげの事なり、およそ一と通の衣食の費は多からず、やどりは茅屋一間におきふしてたりぬ、しもべはわが勞にかはる人の外はなくても事かけず、うつはものは只飮食の器、日用の調度のみ助となる、其外の器皆用なし、人の身をやしなふには、此あまたの物にすぎず、是をそなふるは、さほどつひえおほからず、然れば財祿ある人は儉約をだに行はゞ、自俸するに餘あるべし、不足して人に乞ひかるに及ぶべからず、然るに財用を多くつひやし過し、人にこひかり、みづから困窮にいたり、一生身をくるしめ人をくるしめ、子孫まで困窮せしむるは、かなしむべし、是用財の良法をしらざればなり

わが身の私欲をすくなくすれば、身をやしなひ、自ら樂しむに、多くの財をつひやさずして、ことたりぬべし、大富貴の人といへど、人にかはりて大に飮み食ふ事ならず、多く衣をかさね着せず、大なる屋宅にをらずして、身を安くす、しかれば身の養ひは、分外をねがはずとも、事たりぬべし古の賢王は、時々民に土貢をゆるし人のともしきをすくひ、人に多くほどこし給ひしだに、其藏に財穀みち／＼て、後は穀くさり、錢繩くさりしとかや、今の卑賤の士、小祿の家も儉約にして、財をよく用うる人は、財餘ありて不足の憂なくして、人に乞ひからず、然れば人の貧窮すると、豐饒なるとは、財を用うるに、法あるとなきによれり、財の用やうよければ、貧も富むにいたる、用やうあしけれ

ば、富めるも貧しくなる、財を用るに心を用うべし

倹約を行ひ、をごりつひえをせず、華美をこのまずして、餘財をたくはへ置て、或は凶年にあひ、もしは長病、死亡の變、又婚嫁のつひえ、水火盗賊のわざはひなどの用にそなへ、すべて不慮の時の變、又は人の貧苦寒饑をすくふに備ふべし、餘財なければ、不慮の變に應ずる事かたく、人の困窮をすくひがたし

借の一字は家を破るの基也、此一字をかたく禁ずべし、財祿の多少、大身小身に隨つて、其分限の内にて、不足なきやうに財を用うべし、ともしきをこらえて、人にかるべからず、分限の外に用ゐ過せば、必財たらずして人に借る、財をかれば、年々に利足を出し、其利息に又利加はり、後につもりては、其おひめおびたゞしくなり、必家產をやぶる、借りて利息を人にあたふれば、後はわが財は我が用にたゝず、皆人にうばゝれ、人のものとなる、をしむべし、故に家をたもつの道は分限の外に財を費やさずして、分內にて事足るをよしとす、いかに貧困にして、自由ならずとも、力量を用ゐてこらえて、分外の事をなすべからず、如ㇾ此せば、人にもとめずして足りぬべし、故に財ををさめて家をたもつの道は、借る事を禁ずべし、少しかれば多くかるにいたる、多く借れば家をたもちがたし、借る事しば〳〵に至れば、後は必家を破る、然れ共故ありて財ともしき時、やむ事を得ずして人の財をかり用ゐば、なるべきほどは、我身と妻子の俸養を薄くして、艱難をこらえ、財をたくはへあつめて、借れる物をは

やくつぐのふべし、借れる物いまだつくのはずんば、萬の俸養を甚かろくして、艱難をこらえ、身をくるしめて、財をあつめ、返さんと約せし期をたがへず、約にそむくべからず

おぎのり、買ふ物のあたひを、はやくつぐのふべし、人に損失をなさしむべからず、是信義の道を失はざるのみならず、家をたもつ良法なり、かくのごとく、艱難をこらゆる事、堅固ならざれば、必貧窮をまぬかれずして、家を保ちがたし

わが家をたもつ道に、富貴の人もみづから心を用ゐ、微細の事もよくはかりしりて、つゞまやかに行ふべし、むかしの人は大名高家も、家事をみづからつとめ、微細の事にもよく心を用ゐて、おろそかならざりし故、貧困にいたらざるのみならず、餘財多かりし也、今の人、大家にあらざれども、わが家事をむつかしとて、財用をみづからはからず、入る事も出だす事も、多少をしらず、只家の奴僕にまかせて、みづからしらざれば、家の計おろそかにして、分外の費え多く、且奴僕にかすめとらるゝ事多し、如レ此なれば、家産たらずして、終に貧困にいたる、小身の人にも、かやうの家事におろそかなる者多し、一生貧窮にくるしむといへども、わが家計にうとく、おろそかなる故なる事をしらず、只世の成行あしきと、我不幸とのみ思へるはあやまり也、わが身困窮にくるしむのみならず、人の妨となり、はては子孫の災となる、かなしむべし

貧窮の時、艱苦を堪忍する事、つとめて守るべし、世の人多くは、家をたもつに法なく、儉約の道を

しらずして、貧窮を堪忍する事なく、後日のわざはひをはからず、當時の欲にまかせて、分に過て財を多く用る、故に財たらず、古の人はわが身を儉約にし、萬不自由をこらえ、財をみだりにつひやさず、人の財をかる事をきらひて、ふかき恥辱とす、故に財を借る人まれ也、もしやむ事を得ずして人に借ればはぢていはず、かくしてあらはさず、今の人は、人の財をかる事をこのみ、人に借る事をはぢず、かへつて借る事多きを以て、めんぼくとす、財をかりてみだりに用うる人を、無欲なり、心いさぎよきとてほむ、又儉約にして、みだりにつひやさず、人の財をからざる人をば、かへりて吝嗇なりとてそしる、世こぞりてかくのごとき風俗となれり、習ひて風をなせり、一人のとがにはあらず、されど人々わがとがぞと思ひて、身にかへり見て、道を行ふべし、是儉約と吝嗇との善惡をわきまへざる事、雪と墨とを見分けざるが如し、愚なりといふべし

わが身に俸することはうすくして、人にほどこし、禮義を行ふことをあつくする、是れ用財の良法なり、今の人はわが身に俸するにはをごり、人にほどこし、禮義を行ふにはうすくす、是れ用財の道を失へり、わが財祿の分限をわすれ、のちの困窮をかんがへずして、當時の嗜慾にまかせ、分に過ぎて財を用れば、必ず財たらず、財不足するによりて、廉恥のこゝろなく、つとむべき禮義を行ひがたく、父母のやしなひうすくなり、人の貧窮をすくふことかたく、人の困苦をめぐまず、あたふべき物をあたへず、奉公をつとむべきちからなく、非常の備へなきは、是れ家をたもち財を用る道を知らざ

ればなり、然れば貴賤ともに、家をさむるには、必ず財の用ひやうをしるべし、是れ人世の尤も切要なる急務なり

家道訓卷之五 終

家道訓卷之六

用財

親戚朋友に對し、財をやり取する時、わが財を損せざるやうに、我が利運のごとくせんとすれば、快からざる事あり、とるにもやるにも、わが財を少し損失するをいとはざれば何事なく、我も人もたがひに心よし、我が得分にする道理ながら、其理非を論じ、少しの財のためにあらそひて、人をとがめて、人の心をうしなふ事多し、人に財をかして其おひめをとるも、全くわが損失なからんとすれば、事ゆかずして、行はれがたし、少しわが財をすつれば、無事にしていたづかはしからず、是わづかのつい

え、家のため少しも害なし

人と交るに、遠慮ふかくして、人の財を費さしむべからず、人のついえをいとはずして、をのれについえなからんとし、人のついえを以て、わが身の樂とするはいやしむべし、およそかやうの事は、わが心術の害となれり、かへり見ていましむべし、萬の事うるはしくとも、財をやりとるに廉直ならず、むさぼりあれば、むげに人におもひくださるゝものなり

親戚、故舊、朋友のまどしき者、わが財物をからば、わがちからにしたがひて、財を與ふべし、借すべからず、與ふれば我仁愛の道行はれて、わが心に快し、彼もわが恩に感ず、およそかるものは、貧しく財なき故にかる、かりて返せばいよ〳〵まどしくなる故に、きはめて廉直の人にあらざれば、かへす事まれなり、初かさゞるうらみは少しにして、かりて後かへさゞるをこなたより乞ふ時、かれるものゝうらみいかりは甚ふかし、したしき人には、ことさら財をかすべからず、成べきほどはあたふべし、財をかすはわざはひをもとむる也、後にはたがひにうらみ出でき、中うとくなる事多し、いやしき俗のうたに、「しる人に物はしかすなたゞやりね、かさぬうらみはこふほどはなし」といへり、貧窮なるものは、かれる財を償ふ事ならず、後にかへさんとおもへども、其時過ぎぬれば忘れやすくして、つぐのはん事を思はず、いやしき歌に、「うき事もうれしき事も過ぎぬれば、其時ほどはおもはざりけり」とよめるが如し、わが身の難儀なる時、人のめぐみをうけて、後までわすれざる人はまれなり、然に其かれる

財のをひめをつぐのはざる時、此方よりこひ求れば、財をかりたる者うらみいきどをりて、中絶ゆるにいたる、或はうらみふかくて、あだがたきとなるにいたるもあり、こなたよりせめこはざれども、かりて返さゞるものゝ方にひが事あるゆへ、親戚といへども、必われにそむきてうとくなる、いはんや朋友他人はさら也、是財をついやして、かたきを求むるなり、かねてよくおもんぱかるべし

親戚、朋友に、やむ事を得ずして物をかさば、初よりあたふると心得てかすべし、かれる時はよろこべども、時過ぎぬれば、めぐみをわすれて返さず、其時かねてあたへたると心得ぬれば、うらみなし、かせる物を必得んと思ひて、せめはたれどもかへさゞれば、いかりて中絶ゆるは、世に多きならひ也、かねて其心得ありて、かしたる物を必得んとおもふべからず、かせるものを必得んと思ふは、人情をしらざる也、かりて返さゞるは、世俗のならひなり、と心得べし、いかるべからず

衆人は儉約の善なる事をしらず、儉約なれば吝嗇なりとて、そしりわらふは、世俗のならひ也、愚なる人は、世俗のそしりを誠と心得て雷同す、世俗のそしり信ずべからず、世俗のそしりをおそれて、儉約を行なはざるは、力量なし、されども儉約の道をしらで、心鄙細にして財を惜む事過ぐれば心せはしく、あたふべき物をあたへず、用ゆべき財を用ひずして、仁愛をうしなひ、禮儀にそむくゆへ、人の和を失なひて、人もおもひつかず、何事を行ふにもはかゆかず

凡財を用うるには、心を用ひて、よき程の節にかなひて、過不及のあやまりなかるべし、用ゆべき時

は用ひ、あたふべき時はあたふべし、おしむべからず、君子の儉約を行なふは、用ゆべき時用ひんがためなり、費をおしむこと過ぎて、中をうしなひ、心せはしくして、わが樂、人の和をうしなふべからず

儉約は人の美德なり、いにしへよりいみしぎ聖賢、明王、皆儉約を行なひ給へり、よき人の儉約ならざるはなし、俗人は皆儉約をきらひて、鄙吝なりとす、儉約はわが身に俸養する事をうすくして、おごらざるを云、是善德なり、吝嗇とはをしむとも、やぶさかともよむ、財をおしみてあたふべき人にあたへず、用ゆふべき事にも用ざるを云、是は惡事なり、此わかちをしるべし、愚人と下部は、儉約を吝嗇とおもへり

君子はみだりに財をついやさゞる故、餘財ありて、人をすくひめぐみ、財を用ゆべき事にはおしまず、小人はおごりて、みだりに財をついやせども、人をすくひめぐむ事には、財をおしみてほどこさず、故におごりて、みだりに財をついやす者は、必財をおしみて、人をすくひめぐまず

農商の家、父のゆづりをうけて、田地と財寶とを得て、よくたもちて、失なはずして、子孫にゆづるも孝也、家業をよくつとめておこたらず、儉約にしてみだりに財をついやさゞれば、永く父のゆづりをたもちて、子孫に傳ふ、孝と云べし、是を良民と云、もしおこたりてつとめず、財をついやしうしなへば、田をうり財を失ひ、家をやぶりて困窮にいたる者多し、不孝の甚しき也、是を頑民と云ふ

管子曰、人惰而侈則貧、力而儉則富、」およそ人家の貧しきは、惰りて侈るによれり、富めるは勤めて儉なるによれり、此理をよく心得べし、故に家をたもつには、勤儉の二を行ふべし、是要道なり家をたもち、財を用ゆるに、人の生付によりて、此道を得たると、得ざるとあり、心あらくして精細ならざる人は、此道につたなし、かゝる人みづからかへりみて、わが得ざる處をあらため正すべし、生れ付にまかせ置て行なへば、必ず困窮にいたる

大に富る人も、財を用ゆる道をしらざれば、後は必ず貧窮に苦しむ、薄祿の家も財を用ゆるに道あれば、貧苦なし、賢き人は、國天下をだによくたもつ、況や小なる家をたもつ事、成がたきはつたなし、然れば家をもてる人は、財を治めて家をよくたもつ計をむねとして、心にかくべし、今の人多くは家をたもつ計をしらず、貧困にいたりぬれば、世のならはしと、わが不幸をとがめて、わが過をかへりみず、世をとがめてわが身をゆるす人は、此道は行ひがたし、家の困窮するは、ひとへにわがとがぞと心得て、みづからかへりみ、身をおさむべし

財祿はかぎりあり、私欲はかぎりなし、かぎりある財をもちて、かぎりなき欲にまかせては、必ず財つきて困窮す、富める人も貧しき人も、儉約にて物ごとに、嗜慾をこらえ、酒食、衣服、家居など、よろづの用、わが身上よりかろくうすくすると見ゆるが、理にかなひてよきほどなるべし、殊に貧家はかくのごとくにして、やう〳〵わが得る處の財祿を用ひつくして、あまりなく不足なし、不足なけれ

ば、小祿の家も人にかり求むるに及ばず、然るに萬の身の俸養、分限に過ぎて、心にまかせぬれば、富家といへども、後は財不足し、みづからくるしむのみならず、人の妨となり、一生の苦しみ、子孫の不幸となる、貧家は人にほどこし、貧窮をすくふほどこそなくとも、せめて人の妨げとならざるべし

貧窮にして、其うれひたへがたしといへども、よく貧をこらへて習ひ熟すれば、くるしみなし、凡ての事なるゝとなれざるによりて、苦しみ樂みあり

堯の時、八年の洪水あり、湯王の時、七年の旱ありて、野に青草なかりしかども、民うへず、道に乞人なかりしは、かねて蓄あればなり、士庶人のいやしき家、たくはへなくんばあるべからず、人家には不意の變あり、財のたくはへなければ、俄に變にあひては、すべきやうなし、かねてより、はやく變に備ふるはかりごとをなすべし

後の事遠慮なき人は、當時身のやしなひにおごり、酒食をゆたかにし、家居をよくし、衣服をかざり、欲をほしゐまゝにして、費をおしまず、財つきぬれば、人にかる事をうれへず、財をかす人だにあれば、幸にしておほくかる事をこのむ、是眼前を快くして、後の災をかへりみず、然るに只今さへ、わが財なくして、人に借り求るほどなるに、借れる財に、年々利息くはゝりゆけば、いよ〱財つきて、かれる物をつぐのふべきちからなくて、必家をやぶる、初に早く後の事をおもんばかり、後の憂なき

はじめ貧く、後富める人、はじめのまどしき時をわすれずして、おごらざれば、ながく其富をたもちて失はず、はじめいやしく後貴くなりたる人、はじめのいやしき時を、わすれずしておごらざれば、ながく其貴きをたもちて失はず

わが父、人の財をかりてかへさず、又買たる物の價をかへさゞる、是父のひが事也、其子たる者、わがかへすべきちからだにあらば、年久しくへだたりぬとも、其かし主と、うれる主を尋ね求めて、わが財を以て、父のかれるおひめと、買へる物のあたいを滯なく、つぐのひ返へすべし、是を父の過を補ふと云、孝の道也、父の時、人の財をかへさず、あたひをかへさゞるは、わが心に快からず、又かし主うり主も、財を失なへるうらみふかし、然るに、是をかへせば、おやの過を補なひ、わが心を快くし、かし主うし主うり主のうらみなくする、此三つの益あり、必わが身の養をはぶき、ついえをやめて、父のおひめをつぐのひかへすべし、かくのごとく孝を行なひ、道を直くして、あはれみある人は、その故とは目に見へざれども、必ず後に天のむくひありて、ひそかにめぐみたすけ給ふ理あり、君子は其むくひを心にかけて、善を行なはざれども、其じねんのしるしは、必ある理なり、にはかに目に見へざるとて、此道理あるをうたがふべからず

財を用ゆるに、心を用ゆると用ひざるとによりて、財の費の多少甚ことなり、よく心を用ひて無用

の費をはぶき、つゝしみて約なるべし、おろそかにして、多く用ゆべからず、たとへば養生の道は、物ごとにすくなくするをよしとす、酒食をすくなくし、色欲をすくなくし、言と怒をすくなくするの類也、財を用ゆるも、又如ㇾ此なるべし、物ごとに多く用ひ過すべからず、然れども費をおしむ事、あまり緊密にすぐれば、わが心を苦しめ、人に害あり、緊密なる内に、ゆるやかなるがよし、人をつかふも、又かくの如し、日々少しのいとまなきやうにつかへば、人くるしみて其所を得がたし、少しいとまあるやうに、人をつかふべし

おごりてほしゐまゝなる人は、三年に用ゆる財を、一年についやしつくす、たとへば無養生なる人、慾をほしまゝにすれば、百年の元氣を、一時にへらして、身を失なふが如し

山谷の詩、曰はく「深念ㇾ頻ニ鄕里一、忍ㇾ窮禁ニ貸一賖（シャ）一」、此詩の意は、人の財をかり、人の物をおぎのりかひて返さゞれば、わが鄕里人のわづらひとなるを、ふかく思案して、身の艱難をこらへて、人の財をからず、人の物をおぎのらずといへる意也、家を治むるの道かくの如くすべし、財をかしたる者、物をうりし者のうれひ、うらみをおもひはかるべし、むかしの人は、家まどしけれど、艱難をこらへて、わがもてる家財を以て、家をすぐして、人の財をからず、故に今時の如く人ごとにまどしきうれひなし、或は小祿の人も、財のたくはへありて、不慮の時の變にそなへしなり、今の人は、おごりついやして、必ず家財不足す、時の風俗にならひて、當時の慾をほしゐまゝにして、後のうれひをおもんばからざ

るなり

人心はかりがたし、士といへど忠信なき人は、いふ事うけがふ事信じがたし、いはんや庶人はならはしあしくして、信義なし、わが心のごとく信あらんと思ひて、ゆだんして人をゆるせば、おほくは約ちがひて、人に欺むかれ、後悔する事あり、殊に財をあづけさづくる事、はじめにつまびらかにして、おろそかにすべからず、小人は必ず人をあざむき、財をうばふ事をこのむ、其はかり事におつべからず、萬の事、はじめにつゝしまざれば、かならずおはりに悔あり

貧家に男子多くば、かねて早く産業を立つる計をなすべし、貧家に女子生れば、早く心づかひして、嫁する時の装具をととのふるはかり事をなすべし、女子生れし時、杉を萬根うへて、其長ずる時、ひさぎて、嫁する助とせしためしもあり、桐を多くうへて、女子の装を助くる者今もあり、後の事をかねて、早く計りて、にはかにつまづかざる謀をなすべし、家まどしくて、かねて用意なければ、女子の嫁する時にのぞんで、にはかに其ついえの財を、求め得る事かたし

老人は早く棺をこしらへ、葬具をそなへ置くべし、富貴の家も、其時に及んで俄に調へがたき物あり、ことに貧家は早くそなへざれば、時にのぞみ、器物を沽却し、錢財をかり求めて、用脚とすれども、俄に禮そなはらずして事とゝのひがたし、かねて早く心にかけて、そなふべし

貧しき人は、貨財を以て、禮とせず、老ひたる人の筋力を以て、禮とせざるが如し、もし貧賤ならざる人

は、送り物を以て其誠をあらはす、是古人のなせる處、禮の道也、父母、兄弟、親戚、朋友、或は恩をうけし人には、贈り物を以て其誠をあらはし、其情を通ずべし、古人貧しきは、束脩をおくり、富めるは玉帛をおくる、吝なる人は、財をおしみて禮なし、おくるべき人におくらず、是吝嗇なるは、不仁にして、誠なきによれり、いかんとなれば、わが子には多く財をついやせどもおしまず、是愛ふかければなり、しかれば財をおしみて贈答の禮なきは、不仁よりおこる、いはんやおくり物に、さほど財のついえなし

人におくり物をするは、心を用ゆべき事也、すべてあしき物を送るは、送らざるにおとりて、はづかし、魚のあざれ、肉のやぶれ、餒、餌、醬、醢、などのつくりなせる物、味變じ、色あしく、臭あしき、菓などいまだ熟せざる物の、時ならずして、人に害ある物、皆人に送るべからず、送り物によりて、人の心のうすきあつきあらはる、下部にまかせては、うしろめたし、みづからゑらぶべし

家人をつかふに、只ことばの情ばかりにて、賞祿を與へざれば、家人の心悦服せず、財祿をあたふれば、悦んでよくつとむ、一時に多くあたへんよりは、少づゝ時々あたふればおこたらず、多くあたへて、久しくあたへざれば、めぐみをわすれておこたる、ことばの情のみにて物を與へざれば、婦人の仁とて實事なければ、人まことをつくさず、功をなしがたし、軍をするにも、言の情ばかりにて、祿を與へざれば、士卒の戰功なし、然れども、財祿を與ふるにも法あり、みだりに功なきに與ふれば、千

金を與へても人よろこばず、又一言の情も、千金にまさる事あり

儉約にして、わが身におごりなきをば德と云ふ、人これをよろこぶ、もし人に對して財をおしみて、人にほどこさず、人にうすくして、禮にあたらざるをば、人皆いやしみそしる、是不德なり、吝嗇と云、儉約をあしく心得て、吝嗇とする者あり、儉約に事よせて、吝嗇なるもあり、皆不德なり

東坡がいへる蔬食の三養あり、蔬食とは、味の淡薄なる物を食するを云、一には分を安んじて、以て福をやしなふ、是はおごらざる也、二には胃をゆるくして、以て氣をやしなふ、是は肥濃なる美味を多くくらへば、胃の氣をやぶる故なり、三には費を省きて、以て財を養ふ、是淡薄なる物は、財の費なき也、是又家をたもつに益ある法なり

ひろき家に居ては、むかしの穴にすみ、野にをりし時と、今のまどしき人の、はにふのこやのいぶせきをおもひやりて、樂しむべし、穀肉を食しては、むかしの人の木の葉草の根を食とせしと、今の饑になやめる人をあはれむべし、きぬをきてあたゝかにしては、むかしの木の葉をつゞりてきたると、今の衣なくしてこゞゆる者をあはれむべし、わがめしつかふ奴婢あらば、貧き人の水くみ、みづからかしぐ苦をおもふべし、かくの如くならば、樂多くして、上をねがふ外の求なかるべし

凡家をたもつ道は、儉約を行ふにあり、儉約とは、おごりと費なき也、驕とは何ぞや、わが分外を行なふを云ふ、費とは何ぞや、無用の財を用るを云ふ、又家をたもつには豫てするを先とすべし、かねてす

るとは、後の事を早くおもんばかりて、用心するをいふ、かねての計なくしては、行あたりていかんともすべからず、遠き慮なければ、必ちかき憂あり、聖人の言たがふべからず

家道訓卷之六 大尾

右家道訓六卷者、益軒貝原先生之所著也、先生今年八十有三歳、而孜々讀書、諄々授徒、可謂老而益壯者矣、予以販書出入先生之門有年、仍乞此書再四、遂登梓以公于世焉、豈啻家道之訓哉、自家傳家、庶幾於國家治教之方、亦未必無小補云

正德二壬辰年孟陬穀旦

書舖 柳枝軒茨城信清謹書

六角通御幸町西へ入ル町
書林 茨木多左衛門開版

貝原先生編述目次

享保六辛丑歲　平安六角御幸町　書林　柳枝軒藏版

農業全書自序

宮崎安貞著

農業全書自序

宮崎安貞著

夫人世のことわざ必本あり末あり、其本によりて行へば、順にして成やすく、末をとりて行へば、逆にして成難し、凡いにしへ聖人の政は、専教養の二つに出でず、農業の術は人を養ふの本なり、農術くはしからざれば、五穀すくなくして、人民生養をとぐる事なし、孝弟の道は人を教ゆるの本なり、孝弟の教へなければ、人倫明かならず、人の道立たずして禽獸に近し、故に堯舜の御代には、后稷を以て農業を教へしめ、契を司徒として、世に人倫の道を教へ給へり、しかるゆへに民生の養ひゆたかに、人倫の道明かなり、こゝを以て堯舜の政は、天下萬世、帝王の鑑たり、しかりしより以來、代々の聖王賢君、天下國家を治るに、必農をすゝめ、稼穡を教るを以て先とし、人倫の道を正すを以て、本とし給はざるはなし、夫人倫の道は、其教へ上に行はれ、且下位にありて、其書を講ずる人多し、力田の術は、中華の書漸く多く傳れども、我國の農民、殊更に文盲なれば、其事を講習することあたはず、又文學を専とする輩は、其家業にあらざれば、是を講ずるに及ばず、古本朝の賢君、多くは農業を重くし給ふといへども、農術を教るの書は世に傳はらず、故に農法に委しからず、然るに今泰平の御代にして、治上に盛なりといへども、猶農術の下に審ならざるは、ひとへに唯文盲なる民の講辨

へべき農書の、世上に行なはれざるゆへなるべし、古は人すくなくして、且衣食も質素なりしかば、其養ともしからず、人民いとまありて、農功專なりしゆへ、本を務むる事あつし、傳にいはゆる、是をするものは多く、これを食する者は少くして、五穀ゆたかに、民食たりやすかりけり、近世に至りて農は古の農にして、是を費すものは十倍せり、是則衣食の足がたきゆへなり、然れば今世の民は、農術をよくしりて、力田に功を用る事、あつきにあらずんば、いかでか飢寒のうれへをまぬかれんや、我久しく民間にありて、農人の日々に勤る所をはかり見るに、其術委しからずして、其法にたがふ事のみ多し、然るゆへに身を勞し、心を苦しめて、勤めいとなむといへ共、効を得る事すくなくして、やゝもすれば秋のなりはひの、不足を見ることしば〱なり、是土地のあしくして、且其勤めいとなみのたらざるにはあらず、唯ひとへに民皆農術をしらずして、稼穡の道明かならざるゆへなり、是誠に憐むべく、惜むべき事の甚しきなり、凡天下の事、必致知と力行とを兼ざれば、其功なりがたし、故に先よく農術をしりて、後農功を勤むべし、且恒の產なければ、恒の心なし、衣食たりて後、禮義行はるゝ理なれば、民種植の道をよくしりて、五穀ゆたかに、衣食の養ひたりて、各其所を得ば、をのづから貪る心もなく、禮義廉耻行はれ、風俗すなほに、人心和順し、一世安樂ならん事、日々に新に、月々にさかんなるべし、抑日本の地は、南北の中央に當れるにや、陰陽の氣正しく、寒暑も中和にかなひ、甚しき天災地禍もなく、平原多くして、稻麥を種ふるの地廣し、國土又勝れて肥良なれば、萬

づ種植の類、物として成長せざるはなし、高麗唐土の外にかゝる土國はなきとぞ聞え侍る、歐陽子が日本の刀の歌にも、土壤沃饒風俗好と稱美せしもことわり也、然れば百穀は云に及ばず、凡人世有用の菓菜、草木、藥種等に至るまで、民用を助る品々、皆其種を求め、其法に隨て種藝し、各其術を盡しなば、衣食居室財用こと〳〵くたりぬべし、藥種なども我邦にありて、人の見ざる物多し、又知れる物も種ふる事、土地の宜にかなはず、或其うゆる術をしらずして、其性よからぬ物多し、國にある諸品の物をよく見しり、其種る事法にしたがひ、土地の宜にかなはゞ、我國になき所の龍腦沈丁等の數種の外は、皆異國に求めずして、民生の用足ぬべし、然るにむかしより、年毎に唐舟に無益の物まで、多くつみ來りて交易し、我國の財を、他の國に利とする事、豈おしまざらめやは、是ひとへに我國の民、種藝の法をしらずして國土の利を失へるなり、又本邦の諸國にしても是に同じ、各我國に種植の道をよく行ひ、其國の土地に出來る物を取て、國用たりなば、多く我國の財を出して、他國の物を買求る患なかるべし、我村里に住する事、すでに四十年、みづから心力を盡し、手足を勞して、農事をいとなみ、試み知る事多し、こゝを以て常に農民の稼穡の方にうとき事を歎き、我愚蒙を忘れて、種植の書をあらはして、民と共に是によらん事をおもひ、唐の農書を考へ、本邦の土宜に隨ひ、農功の助となるべき事を撰び、或畿内諸國に遊觀し、廣く老圃老農に詢ひ謀り、草稿を集めて十卷とし、農業全書と名付侍べる、されど本より著作の才なければ、たゞ魯魚の誤り、鄙俚の言多きのみかは、其義

理も亦鹵莽にして、疎謬多からん事を恐る、こゝにおゐて我故人貝原樂軒翁に、此書を改正せん事をこふといへども、彼翁たゞ聖學をたしみ、道義を樂むを以てわざとするゆへに、此書を修潤することを、末作鄙事とし、老境の樂を妨げん事をおそれて、あへてうけごはず、予が曰、吾子あやまれり、よろづの事、たすけなくては成がたし、吾子が力を以て予が功を助なして、もし天のさいはいありて、此書世にあまねく行はれ、農功の益となりなば、おそらくは參贊の功の萬が一の補とならん事、いまだしるべからず、これわが願ふ所にして、吾子が志も亦しからずやといふ、翁辭することあたはずして、わが求に應じぬ、しかはあれど、珷玞はみがけども、玉となりがたき理りなれば、翁の改正をへても、猶文詞つたなく、義理明かならずして、見る人の非笑を招ん事を恐るといへども、後來農事に達する智者を待の間、しばらく今の世に農事を業とする人のため、少き補ひあらんことを思ひ、管見の及ぶところを述べ、かへりて自己の鄙陋を忘るといふこと爾り、隱翁宮崎安貞序す、時に元祿九年仲冬の復日なり

農業全書附錄

貝原樂軒著

農業全書附錄

貝原樂軒　著

夫おもんみれば、農業はきはめて卑きわざの様なれども、是則天下國家を治る政事の始にして、殊に人間世の生養をなす本なり、されば聖の文にも、民はこれ邦の本、もと堅ければ國やすしと云、又食は民の天といふ語を合て見るに、甚深き心あるべし

抑天下を穩に上下和順し、萬民各所を得て安樂なりしは、唐堯虞舜の御代にしくはなし、凡聖賢の政事其大體を考に、五倫（君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友なり）の道を敎るを以て先務とす、且奢をやめ費を省き儉約を行ひ

儉約の說は總論に詳也、その〱我分限をしり、其年々に得る所の財產を四つに分ち、其三分を以て、其年の諸用をいとなみ、其一分を殘して不意の變ある備とす、或火災、病、親族の急をすくひ、大身はきゝんの年に民をめぐみ、武事のそなへとする等の類なり、凡王公といへども儉約をわするれば、國用たらずして、下を貪り不仁を行ひ、災を生ず、況四民に至り、財用を愼む事なくば、必うれへをまねき。災をいたさん事、はかるべからず

財用を節にして萬民に施し惠み、賞罰を明かにして衆庶を勵まし、佞惡姦邪の小人を戒め遠ざけ、忠孝節義の誠ある人を賞し擧げて、專ら善をすゝめ惡を懲らし、凡て天下萬民を安からしむるの道なり、

夫五穀は人間の世を助くる生養の本なれば、聖人天下を治め給へるに、先づ民を惠み、五穀種藝の術を敎へ給へり、萬民生養の本立ち、人民飢ゑず寒す、衣食足て後、五倫の道行はれやすく、民の善に移る事かたからざるためなるべし、是古より聖賢の天下を治め給へる大概にして、和漢古今太平をいたす政事の本たり、それより後、代々の明王賢君の政治、必これによらずといふ事なし（それより下國郡の主にいたりても、少智あり德ある輩、必この道によらざるはなし）是則世平かに民安く、財用たりて、子孫ながく繁榮するの道なるべし、又夏桀、殷紂、秦始皇、隋煬帝等の惡主は、其政事其行ふところ、皆以て是に違ひ、忠孝、節義の正しき人をにくみ退け、姦邪佞惡のよこしまなる小人を近づけ愛し、五倫の道を修めず、賞罰正しからず、身を安佚にし、私欲を恣にして奢をつくし、費を厭はず、財用たらざれば貢物を重くし、下を貪り民を苦め、或所々に多く臺榭（今云、茶屋別業などの類なり）宮殿を造り、花美を盡し、皆億萬の民をつかひ、甚だ農業を妨げ、民の饑死をも顧りみず、かく暴逆日々に長ずれども、諫めとゞむる臣なく、天下の萬民其の苦にたへず、恨みいきどほるの心、則ち天の怒りを招き、飢饉、疫癘、盜賊、火災、兵亂等の天災人殃、日々月々に起り、天下亂れて遂に身弑せられ、子孫も斷絶す、其の殃たる本是れ天より下すにあらずして、自ら招くの災也、それより以下、代々の汚君暗主の行ふ所、皆同じおもむきなり、其の天下國家を亡ぼし、身戮せられ子孫絶果ぬる事も、多くは右惡王のためしのごとし（國郡の主といへども、惡事をかさね不義を行ふ事おほければ、其國家を亡ぼし身を殺すにいたる事、これにおなじ）

古よりいへるごとく、世の風俗時のならはしと云は、極て大切の事也、唐の帝王諸侯尤皆文才ありて、諸史をよみ、前代の盛亡ぬる例を見る事暗からず、されば王侯たる人もし中人の才あらば、なんぞ前車のくつがへるを見て後車の戒とせざらんや、然れば萬の事理賢のごとくこそならざらめ、凡五倫の道を亂らず、政事に大なる失もなく、民をめぐみ農業を敎へ道びきて、五穀世にみち、天下おだやかに子孫さかへ、長久ならんやうを執行はるべき事、何の心遣ひもなく、いと成やすき事なるべけれども、前に記す時世の風俗といふは、極て大切の事なれば、代々の天子諸侯まで、其職分をしらざる事ども、又世の風俗のやうになりぬ、しかるゆへに民に農業を敎へ導びき、賞罰を明かにし、萬の政事に心をとゞめらるゝ事はなくして

職分とは、たとへば弓人の弓造り、御者の馬に乘り、畵工の繪をかくたぐひなり、帝王は天の名代なり、天の子として、天に代り、天下の萬民をめぐみ、賞罰を行ひ、萬民に安樂をほどこす職分なり、天道は人のごとく物いはねば、賞罰を行はるゝ事なし、帝王これに代りて、人民を安ぜらるゝ理なり、帝王を天子と號するも、此心によれり、又民の父母ともいふめり、大小こそあれ、國郡の主も又是に同じ、人間のみ職分あるにあらず、畜にも又あり、馬の荷を負遠きにゆき、牛の田をかやし、犬の鹿狸を取又夜を守り、猫のねずみをとる、此たぐひ多し、凡そ士農工商、をの〳〵この理りを思ひて、その職分を勤むべき事なり

天下の君となりては、只天下の米穀財寶をあつめ取、上一人の樂を極め、心のまゝに財を費し奢をなし、下を苦しめ民を貪り、情欲にまかせて不義を行ふ事を、偏に其職分のごとく思ひ誤り、憚る事なきこそ淺ましけれ、其半日安しとしてなせる惡事、心よしとする私欲驕奢、其事ます／＼長ずれば、終に天下國家を失ひ、身弑せられ、子孫も斷絶にいたるの媒、こゝにあらずといふ事なし、しかるを却て身のたのしみ、子孫の榮花これなりとのゝしり思へり、これらの君、皆白痴の人にあらねども、ひとへに世のならはしあしきより、かゝる事漸く君たる人の癖となり行なるべし、されば民を惠み、農業を敎ゆる事などは夢にも見ずなりぬ、殊更我國にて、古のごとく民を撫て惠み、救急料などのすくひ施しの備へもなく、又民も農業をいとなむ所の委しからずなりし事、一朝一夕のゆへにあらず、いにしへは諸國に守護國司あり、國々に聖廟を建られ、儒官を下し置れて、人倫の敎を施させ玉へり、又醫師をも下されて民の横死を救ひ、或國々にて醫術をも傳へけるとなり（此事諸史に見えたり）しかるに白河鳥羽の頃より、人倫の道をたうとばせ玉はざりけるにや、諸國の孔廟も修理なくて、其まゝ廢せられけると見えたり（此事藤原敦光朝臣の文に見えたり）しかれば國々へ儒官を下され、民の救急料などを置るゝ政事行はるべきにもあらず、夫より五倫の道すたれぬれば、頓て保元のみだれ起り、續きて又平治の亂出來、洛中にて大なる合戰ありし事、神代かけてもためしすくなし、淸盛入道猶暴逆を行ひ、上を犯し奉り、木曾義仲、又不義の戰を起しぬ、是皆五倫の道やぶれて此のごとし、かやうに打つゞきた

るみだれなれば、民を惠み、救急料などの事、沙汰に及ぶべき様なし、此の後、又漸々我國の民、農業のいとなみ寔しからず成りにけるは、足利將軍義政俗に東山殿と號す文武の道を取失ひ、安佚遊興を事とし、連歌茶湯にふかく溺れ、日夜古器書畫を弄び、政事をしらず、萬何事も下臣にまかせられて、天下の權下にうつり、山名、細川、數ヶ國を領し、權威に募り、兩雄互に權を爭ひ戰をなせり、諸國の武士十四五萬、思ひ〳〵に兩家に與し、洛中にて戰ふ事、七年に及べり、多年の軍なれば、洛中洛外の宮寺人家悉く兵火にかゝり、九重のかしこき宮所さへ、渺々たる野原となれり

古より洛中所々に有し學校も、此時皆炎上して、其後再興の沙汰なく、今は其跡さへさだかにしれる人すくなし、誠になげかしき事どもなり

此時、義政はいきおひなければ、かゝる大亂をも、よそ事の樣に見物して、是を治めんと思ふ心づかひもなし、此後より諸國の武士、漸々に公方の命を用ひず、天下我々持となり此間を俗に國代と云ふ國郡を領する者、大は小を合せ強は弱を亡ぼし、互に其地を合せんと計り、隣國近郡皆敵對し、日々月々に其戰止時なし此時農人田を耕し、稻麥を刈にも、必田の畔に兵具を立置て、其事を營めりとなんかゝりければ、百姓も家業の耕作の事は疎くなり、朝夕弓馬を勤として、偏に武道をのみ嗜めり、兵亂世を重て治らず、應仁より天正の末に及べり、其間年は百年に餘り、人の世繼は六繼七つぎに越しかば、此農業に疎き事ども、かく代々をへてをのづから民の風俗とぞ成にける、抑今の世のめでたく

治れる事、おそらくば人代の後、又類ひなくや侍らん、彼仁德の御門の我邦の聖君にてましますと聞えしも、遠き國山の奥島の果までも波風靜にして、大に治れる事

今五尺の童子よるひるとなく、遠き國にゆきかよひ、諸國の商人金銀うり物を、多く馬に負せ櫃に入れ、一人是を司り、はるけき旅しらぬ山路をこゆるに、奪ひかすむる患ひなし

かうまでやはあらじとぞ、おろかなる心にもをしはかられ侍る、されば今此御世に生れあへる事、千(ちゞ)の年を經て、花開實ると聞る仙(ひじり)の桃の花の春にあへるこゝちして、すゞろに老の涙を催ほし侍る

我國の人は文詞にうとければ、和漢のみだれし世のわざをもしらず、近く本朝應仁より天正に至るまでの大亂には、晝夜干戈を枕とし、或親うせ、子うたれなどせし時節を思ひかへせば、今かゝる安樂の世にあへる事、まことに生るかひある事かなと、貴も賤しきも朝夕に樂み悦ぶべき事なれども、喩にひける遠き世の佛のちかひなど聞ては悦ぶ事あれども、今此御武德により、かゝるめでたき事ぞと辨へ思ひ、深く悦ぶ人まれなり。是たとへば都の人の都に生れながら、洛中の名跡洛外の勝景靈地をもくはしく見ず、九重の風氣ゆたかに、人物やはらかに、よろづの事めでたく、其樂み餘ある事を覺えず、又溫泉のほとりに住人は、溫泉のしるしにて、やまひのすくなきことをしらざるがごとし

此時にあひあふ人、貴も賤きも各其程にしたがひ、かく生涯の安樂を得る事、甚しき幸に非ずや、是

皆武君の御大徳より出たれば、誰か恐みくも仰ぎたうとばざるものあらんや、こゝに異しきは農家のわざのみ、かの亂世の殘波民俗にうつれるにや、耕作の術、畿内に近き國々は皆詳なりと聞ゆれども、遠き國には猶所々農法の委しく備らざるも多しとかや、いと歎かしき事なり、是疑らくは、亂世の風俗の遺れるにやと覺え侍る○夫前代いづれの世といへども、天下國家の政事に預り、權をとれる輩は、必十にして六七は、皆其時にあたりて才ある人を擧用らるゝ事也、此人ども、もし彼世の風俗におぼるゝ害なくは、必皆政事に心を用ひ、聖賢の遺法をかへりみ、民を惠み、農業を教へ道びきて、五穀世に多く、上には財用餘り有て、民は家々とみ、飢寒の憂なく、上下大に安かるべし、此上に少こゝろを用ひて、大かた五倫の道を正し、賞罰明かならば、をのづから侫惡の人すくなく、漸く忠孝節義の風おこり、子孫安樂に、天下國家、長くめでたかるべし、されば代々政事にも預り、才ある人人、たとひ時の風俗に迷ふといふとも、かく上下めでたく大なる幸ある事を、などか少心を用ひて行はれざりけん、凡代々の君臣、中才の人のみ多く、殊に臣は多ければ、其中には才力すぐれたるも多かりなんに、かゝる人どもの、農業は人間世第一の大事にして、政事の根本たる理にくらく、、上も下も大なる福となる目前の利を會得せざりし事、返々遺恨といふべし

夫人の生質品々多し、しかれども其大躰は上中下の三品あり、上智の人は、たとひ惡人とまじはれども其惡にそまず、又下品の人は知足らず理にくらくして、聖賢と一所に居ても善にうつる事なし、

此上品と下品の人は、世に稀なり、中品の人は道をまなび、其ならはしよければ善にうつり、賢人ともなり、又ならはし惡ければ惡人にも變ず、此中才の人世に多し、是なを善を行ふべき才ある人なり○又農業をすて世に五こくなくは、貴きも賤きも、半月餘にして、命絶て人間の世つきぬべし○又王公より國郡の主に至るまて、皆五こくによりてこそ天下國家の人民を保ち、あるいは都を立、城を築き、宮殿をおほく作りみがき、妻子をゆたかに養ひ、一族諸臣を安らかにかへりみ、衣服をかざり、食物を調へ、牛馬を飼ひ、もろ〳〵の器物を集め、總て万用を達し、榮花ゑようにほこる事皆心のまゝなるは、其本こと〳〵く五穀より出てずといふ事なし○善人君子は、財穀を下に施し、賞罰をなし仁義を行ひ、天下とともに樂み○惡人小人は是を以て心のまゝに奢をなし、欲をほしいまゝにし、惡逆を振まひ樂みとす、されば君子小人、其行ふ所樂む所はかはれども、凡て是其本皆五穀より出でずと云事なし○然れば民をいたはり、五穀種藝を敎へ道びき、五穀世に滿るの政事は見識だにあらば、善人はさたに及ばず、たとひ惡人小人といふとも、同じく好み行ふべき理ならずや、殊更善心によりて民を憐み、五穀種藝をつとめしめば、皆天心に叶ひ万福日々に來り、五穀財產月々に彌增し、天下國家の豐ならん事、是君臣上下万民の福に非ずや

希くは後來の賢者、右に云古今の失を鑒みて、世々の風俗に溺れず、時勢の癖を去て各明智をひらき、農をめぐみ種藝の術を敎へ道びき、五こくみち滿て、上下の福日々にまし、一世年を重てゆたかなら

ん事を○又古來近世までの風俗に、大なる失一つあり、天下國家の主はいふにも及ばず、其事ふる長臣又は時の權をとる輩に、才智ある人も多かりしと聞ゆれども、よく下の情に通じ、農業を道びき治る事などをば極めていやしきわざとし（下情に通ずるとは、すゑ〴〵民の悦よろこびをよくしり、民のうれへをのぞき悦びをほどこし、或は末の役人等の、民をむさぼり民を苦しむるたぐひを委しくしりて戒を加へ、萬民下にて無理ひが事にてくるしむ事なく、すべて上の人よく民の心をしることなり）小士下官の勤る役とす、しかればかりそめにも、天下國家の長臣などの心を用ひ取計るべき事にあらずと、心得ぬるも多かりしとかや、是ひとへに文盲にして、古今にうとく道理にくらきゆへなり、夫五穀は天より人世の施として生ぜる生養の本にして、人間生命のかゝる所いはずして知べし、夫上古より世界にならびなく大德の至て貴きは、唐堯虞舜の君にあらずや、兩君の天下を治め給ふに、先農業を敎へ道びきたまひ、次に五倫の道を示し給ふ、又我國神代の始、天照大神田を作る事を執行はせ給ひ、人代の始つかた本朝中興の神君神功皇后も武內の臣に勅し、土地をひらき神田を作らしめ給へり

天照大神は地神五代の始めにて、則神孫永々の今に至るまで我國の帝位に備り、日月と共にめでたく榮させ給ふ、其の神德の有がたき理り、あまねく人のしれる事なれば記すに及ばず、神功皇后は我邦のみだれを治め、長く御子孫の帝業をかたくし給ひ、又異國の我國を犯せるをにくんで、是れを退治せさせ給ひ、我朝の武威を後代まで四方の國に輝かし給ひしかば、それより後、異國我國を窺ふ事なし、又いこくより年ごとに貢物をさゝげ、聖人の書をも奉れり、是により御子孫

御子八幡宮、御孫平野大明神仁義五倫の道をまなばせたまひ、これを以て我國の神道ををしひろめ、天下萬民に敎へほどこさせ給ける、此の時より我朝の人道明らかに禮儀正しく、夷國にして夷狄の汚れなく、却て君子國のほまれ四方の國にあまねし、其御餘澤今なほさかんなり、又我國の武德ありて、四國恐れあなどらざることは、神武天皇と神功皇后の英武の御德ましますに感じて、天下人民の生質をのづから武にうつりて、武國となれるゆへなり、また五倫たがはず人の道正しき事も、神后の御武德によりいこくより聖經を奉り、御子孫、應神仁德の帝是を弘めさせ給へる故なり、扨又天照大神神功皇后の御子孫、其御嫡流は代々帝位をふませ給ひ、また御庶流は武家の公方として、永く天下の權をとり給ひ、此の外今にいたり公家武家にも、源氏、平氏、橘氏、紀氏、江氏なをおほく、王氏より分れたる國主、郡司、天下にみちみてり、是れ皆大神宮神后の御末葉にて、各御血脈をうけ來れる神孫たり○又神功皇后は、我朝に神德を施し給へる事重ければ、香椎大神と號し、そのかみよりあがめ祭らせ給ひ、天下のみだれ、又いこくより我國を窺ふ聞へあれば、皆勅使をして祭らせ給ふ、御即位のたびに、伊勢と當社に告まいらせ給へり、大嘗會などにも、賀茂春日に先だち祭らせ給ふ、すべて神德神恩の後世に及び、我が國の守りかるめでたき御神なれば、代々の帝も大神宮に相つぎ、筑紫まで勅使を奉り給へるならし、此事國史につまびらか也、亂世に至り公武の衰へ甚しきより其事絶ぬ、今は其神德神恩の忝き事を知る人さへもまれなり○天地ひらけし始より今日に

いたるまで、神孫かくの如く天下にみち繁榮し給へること、凡て天地の間の國々に似たる所もなし、唐聖人の御末今にありといへども、天下を保てる事は、十六七代、廿六代、卅五七代、年は四百餘年、六百歲、七百餘年などがきはめて久しく、めでたき事のかぎりなり、其外四方の夷の國々おらんかい、南蠻、だつたん、朝鮮、天竺、ゑぞ、りうきうなどのたぐひ、數かぎりなくおほし、其の國王の子孫、五代七代と相つゞき、國をたもつことまれなり、日本人は文盲なるゆへ、なんばん、天ぢくなどゝきけば、數千萬里あなたの事なれ共、みだりにありがたしとて、命を失ふことをかへりみず、唐、朝鮮などには耶蘇の制禁なけれども、少も彼にたぶらかさるゝ者なし、是もんまうならざる故也、夫れ我神國神德の有がたく大なる事、神孫の天地ひらけしより今に帝位に備りましく〱、其御末葉は武君より下つかた、國郡の主として天下にみち榮へ給ふを見て、人間世界に似たる國もなく、我が神德のありがたきをしり、つゝしんで大神の御をきてを守り、正直忠孝を心にかけ、五倫の道をたがへず、奢をやめ費を省き、專儉約を用ひ、扨各々力を盡して其家職を勤むべし

かく類なき唐の大聖、堯舜の帝は、農業を敎へ道びくを以て、政事の始とし給ひ、殊我邦始祖の大神人代中興の尊神皆執行はせ給へる農業にて、殊更人間生養の本たる五穀なれば、唐日本にをいてもいきとしいける人、貴賤となく誰かこれをたうとばざるものあらんや、しかるを亂世の後近代に及び、大小政事を行ひ權を執れる輩、かゝる事をしらぬより、農業はいやしき事にて、上官の人はあづ

からぬことのやうに、思ひ誤りけると聞ゆるこそくちおしけれ、是又中古以來風俗の癖なるべし抑世人利を貪る事甚深き中について、大に過れる一つの風俗の癖有、夫凡俗の利を貪り邪惡をなす事、たとへば小民義をしらざれば倉を穿ち、墻を踰て盜をなし、或火をはなち强盜し、頓て身の殺さるゝ事を辨へざるもの多し、又大人義をしらざれば、逆を計り上を犯す事をいたし、或父子、兄弟、伯姪、各天下國家を爭ひ戰に及べる事、實に肉を爭ふ獸のごとし、かく淺ましき行ひをなし、身心さながら畜類となり、又は其命に換ても利欲を希ひ貪りぬるは、世に多き凡俗の心なり かく淺ましき惡行をなしても、百に一つも其利を得る事まれにして、身をほろぼし子孫を絶事のみおほし 是に於て大人も小民も心を引き換へ、善に徙り人欲の眠を覺し、本心の誠にかへり、大人身に禽獸の行をなす事を恥、心には人欲の私に溺れて、忽に命を失ふ災を自から招く事を恐れ、大人は則五倫を正し、民をめぐみ、よく農業をすゝめ道びき、下民も又農事の工夫委しくし、力を用ひ勤めはげまば、五穀豐かに榮へ。上には財用の不足なく、民家は富み家々にみたん事、たとへば囊中の物を探るごとくなるべし 農事を勤めて利の多き事は、これより與につまびらかなり 然らば凡利を貪る人、誰か身を殺すの災を捨て日の前に福あるの利を求め、己に禽獸と成の身心を轉じて誠の人となり、しかも又大なる福を得る道を勤ざる事あらんや、かく利を求て福あり、慥に安き事なるを知る人稀なるも、是又世の風俗時のならはしのあしきによれるゆへなるべし○かくくり返し農事の貴重なる理を記すにより、五穀は人世生養の本にして、人間貴賤の命のかゝる所、藝術は大なる業にして、神聖の至て重んじ給へる理をば略會

得する人ありとも、農事をよくしらざる人は、當世の風俗にならひて、耕作の勤いたれば大なる福ある事を深く辨へずして、老翁が說を唯よしなき昔語の譫語なりと、よそに聞る事も有なん、農民も又秀たる才なきはしか有べし、是により翁が年ごろ耳にふれ、目に見し事ども多き中に、其内二三を擧て、其事を記し、農術の勤よく熟すれば、必大なる福ある理の證となすべし○こゝに市中にかくれ閑居し、世の外なる老人あり、若年より諸家につかへ、或浪人として國々を經歷し、ひろく世事をしれるものなり、此翁語りけるは、ある國にて少の祿を得て片山里に住者あり、其勤も僅の事にて、常にいとま有りければ、早年より下人に耕作せさせ、をのれも農事を考へ計て樂みとし、又渡世の助ともしけり、此男少才ありて、年老ぬるまで久しく農事に手馴ければ、農業にをいて妙を得たる事おほし、又一年の內に二三度も、其國の長臣に出てまみえける、田舍に居て別に語るべき事しらねば、己耕作に熟し、多く穀物を得たる事のみを語りける、生質陽氣なる男にて、其詞さへゐなかびていかめしければ、聞く人みなかれが放言僞りなりと、面にくげに覺え、長臣も又疑ひ思ひて、さらば己が心の如く、我采地の田を一段作り見すべしと云て、取分地味のあしき村にて、惡田をゑらばせ渡しぬ、はげ山の谷あひ、極て磽地の常に赤土色の水ありて、かなけのさび出る地なり、彼老人此惡田をうけ取て、つく〴〵打見て、其田の一方に、深さ三四尺に大溝をほらせ、彼の惡水を落し、其跡をたび〴〵すきかやし、春中日に晒し干田となし、五月雨に苗を種けるに、年久しき水田を、春中晒してなして、

陽氣をこめ、雨を以てくさらかし、柴草を多く入てつくり立げれば、稲の榮へさながら淀のあたりの蘆のごとくいでき、秋の實りもことによくて八俵餘の米を得たり、此田農人常に作りけるには、十年にもあまり、其實り二俵に及ぶ年あれば奇代の滿作とて、甚悦びけるとかや さればをよそ三ぞうばいほどのできましなり 又ある國の田舍に浪人の居けるが、渡世のたすけに田畠を一年ぎりに買て下人に作らせける、ある時其里近き湊に、干鰯をつみたる船泊りけるを聞、農民ども打むれてほしか買に行ける、彼浪人は價なかりければ、富人の買たるを一俵もらひて、それを木わた、たばこの糞しとし、其餘の少有けるを五畝六畝ばかりなる田に入て、苗をうゑぬ、下地を能こなし調へける故にや、僅の糞しなれども、暑氣に及び稲大に榮へて、秋の實り米六俵餘を得たり、此里きはめて地味あしく、其年貢四ッ物成にあたる事稀なり、しかるに右の田實り甚よろしとて、其年十一なりの年貢をかけゝるとかや 是も三そうばいに近し 又小身なる士ふかき山里に住けるが、下人の隙あればとて、少し田畠を作らせける、五月雨の比、遠所に有ける子のもとより見まひとして、下人に酒肴などもたせ遣しける、親甚悦び、耕作の最中閙敷折節、來るこそ幸なれとて、使の男を一日とゞめをき、田に入る草を刈せける、山中草多き所なるゆへ、よき草を二十五六把切出しける、前より刈置たる草に、是を加へて田に入れ、時分よく苗を種へければ、大に榮へはびこりて、秋にいたり米の五俵半を得たり、此田も農人前々より作りては、きはめて豐年にあひても、漸く米二俵半など出來ぬれば、まれなる幸とて、悦びける事となり 是も一ばい半ばかり、凡一そうばいに近きでき増なり

右の事語りける老人は、一代一事の虚言もいはず、少佛學などこゝろざして、其心ばせ浄きものなとて、あひあふ俗人迄いとをしみを加へ、敬ひあへるもの也、此翁なのあたり見たりし事なりと、
又愚老が所々にて見聞しにも、是に同じき事多けれども、一つ事今更書付んも、いたづかはしくてやみぬ○いはでもしれたる事なれど、右の三品の作徳の多きを數へみれば、なみ〳〵の年に増ぬる事二そうばいばかりなり、是を大小にかけていへば、田一段よく作たる利、つねの實りに増事、二段程の米を得るものなり（是は定りたる一段の實りをばのけて、其外なり）一町の田にては、別に又二町許の米いでくるなり、又大にしていへば、十萬石にては、外に二拾萬石餘の穀物できまし、百萬石の地にては別に二百萬石餘の物成をまし、たとへば一ヶ國は三ヶ國餘にあたる物なり、但是は貧にして、耕作も下手なる農人のつくり來れる田を、極めて耕作の方に才ある者、少人夫をも入たる事なれば、是を以て國郡なべて此つもりに當るべしとは云がたし（もし多年の功を用ひは加へも有るべきか）しかれば右のつもり半を去てかそふれば、一段の田は平年の實の外、別に八畝九畝程の作徳まさり、百町には又八九十町ばかりの穀物まし、百萬石は外に又八九十萬石ほどの米粟いでき、一ヶ國は二ヶ國にも及べし、但是もなを甚多く聞ゆれば、此内を又三分一さりて云へば、一町の田には定れる實の外に、四五段許の實まさり、百萬石の地にては、四五十萬石程の米穀できまし、凡一ヶ國は一ヶ國半にも及ふべし

右は只穀物の高を云也、是を年貢につもらば、一倍は二双倍、二双倍は三四双倍ともなるべし○

凡分限の大小にかぎらず、少才智あらん人は、たとひ道をしらず、偏に利を貪るに志ありとも、前の說は皆上に益ある事なれば、かならず民を惠み、農業を敎ゆる方に、深く心を用ひらるべき事にこそ○抑々そのかみ、和漢神聖の君、皆農業をおもんじ、天下を治むる政事の本としたまへるも、かやうに大なる福ありて、天下國家の財用あまりあり、且人民家々の富となり、敎て人間世あんらくの甚たるわざなればなるべし

右は段々に其あたりをへしたるつもりなれば、いづくにても上下の心得さへよく調たらば、偏に只倉に入たる物のごとくこそ、たしかに覺え侍れど、農の事しらぬ人は、是も猶過當の事なりと、疑ひも有なん但是は畿内などの上の農人にあてゝ云にはあらず しかれば其類を推はかり、證據を以て世人のうたがひを委しく解すべし、先小身の士又は少才ある農人、或市町にある人までも、此理を推て考見るべし、面々宅のうら、園や圃に食物に用ゆる菜を種るを見るに、少富る人の菜園にすき、人づかひ多して地ごしらへも委しく、時時の糞を用ひ、折々の手入時節にをくれず、萬心のまゝに作立たる菜園と、又貧なるものゝいとまなく、しかも菜を作るすべもしらず、人遣なく地ごしらへも調はず、折々の糞しもせず、時節なれども手入たらず、只あら〳〵作り捨たる園菜と、其善惡多少をくらぶれば、右にしるす耕作の實りの多少のちがひよりは、又はるかにたがふ物なり、されば智ある人、心を用ひて勘へ見ば、わづかに五間三間の地に菜を種へ、穀物を蒔て、其よしあしを試て、廣く國郡天下の五こくをはかるとも、實りの多

少、居ながら是をしれらん事掌を見るがごとくなるべし、○又云あるは、堂上の貴人、國家の大人にをいては、農事の末の事を、たはやすく知らるべきにあらずといへども、或は花をこのみ、なべて草木を弄べる人多し、中について牡丹、芍藥、菊、近來世に取はやし愛する、つゝじ、椿、百合、其外萬の草花、皆其養の術あるを見て、了簡し給ふべし、其地をゑらび、土をかへそれ〳〵の糞し、夏冬のあつかひ、時々の色を見て、こやし手入の術多し、其養ひよく調へば、花大に色をまし、葉の重ね厚く葉だち葉づき、甚だうるはしく見事なり、又貧きものゝ人づかひもなく、地ごしらへ土をかゆる才覺もなく、凡て花の養ひ手入をしらず、或は濕ふかき所も、其濕氣をぬく事もなく、樣々の糞を求る才覺もならず、萬の仕立やしなひもしらて、只種ゑつけたるまゝなるは、上花ほどいたみつよく、りんも付かず、或は花付てもひらかず、もし開きたるも紅は色うすく、白きは底まで淸からず、りん小さく重なりも少くなり、本の花とは見えず、終には根ともにかれて、跡もなくなるものなり、これを以て見れば、花木の養ひによれる事は、又農人の上手下手によりて、こく物の實り多少の替るよりは、甚大にかはれる事なり、しかれば前にいふ菌菜と草花のみ、手入養ひにより、大にかはりて、五こくばかりは大にかはる事有まじといふ理あらんや、○凡下いやしきものゝ諺に、上の上は下の下をしり、下の下は上の上をしらずと云ふ、是を以て考ふるに、譬へば貴人大人なりとも、右のいや言どもにて、米穀は人間貴賤生養の本にして、農業は神聖の重んじ給へる天下國家の政の始なる理り、又五こく其糞し養の

術によりて、實りの大にまされることも、皆會得あるべし、却て下つかたなる農民の內には、猶十分に心得ざるもあらんか、されば愚老が見聞きし所を、老の繰言に述て、民家の疑ひを委しく解すべし、我れ若かりし程より、邦君に事へて暇なく、田家の事を深くしらず、然ども冬春の間、もしは田野に出でし事もありて、麥の事をば多年よく聞きふれ見馴れたれば、其あらましを左に記す

麥を作る事、上の地に巧者なる農人、鬼あかどなどいへる麥を、地ごしらへ糞し、手を盡し、時分よく蒔きて、折々の糞養したてよく調へたらば、一段の圃に其實り六石五斗、七石あるべし、其次五石七八斗より六石五斗、其次四石七八斗より五石五斗、中の下の農人は、四石五石の間なるべし、其下は二石七八斗より、三石四五斗なるべし、下の農人は一石五六斗より、二石三四斗、其下は壹石より二石の間、猶其下は七八斗より一石一二斗

右は皆同じく上々地也、各作人の上中下により、如レ斯替り有る事を云ふ也、右の內壹石五斗より以下は、種うる時分遲く、地ごしらへもたらず、糞しもなく、後の手入れもしか〳〵せざるゆへ、此のごとし、但前にしるす六石七石といふをば、遠國にて或土地のあしき村里に住み、他所をしらぬ農人はうたがひあるべし、都の邊にてさへ、麥のできに多くかはれるもみゆれば、遠方田舍にては、作人により甚善惡あらんか、村により同所に畔をならべ、又は同じ地を分て作れども、一倍も三ぞうばいも變りて見ゆる麥あり、皆其作人によるものなり、是は村により所によりいか程も多き事なれば、農人こ

こにはうたがひなかるべし（是畿内近き國の事にあらず、遠方にておほき事なり）稍や、其餘の五こくの類をば我れ委しく心みしらねば、それ〳〵につき、さゝしき替りある事を云ひ難し、しかれども麥ばかりは、作人により遙に善惡のかはりありて、其餘はみな手入よくしても、できは變らずと云ふ理あらんや、我れ麥の事をば、かねてよく聞覺え見覺えたれば、記す事かくのごとし、是を以て考へ見れば、その餘の五こくも皆此類なるべし、其上前に記す苗葉の多少、花の出來の善惡を以ても、彼の老人が物語、一つも僞ならぬ事をしりぬ

夫れ五穀は、天の人世に下し施し給へる大寶にして、則ち人間生命の本なり、農業は和漢神聖の重むじ給へる道にして、天下安全なる政事の始め也、もし此書を見ん人は、よく心をとゞめ、天の施しと神聖の教を鑒みて、上としては下をめぐみ、民に種藝の術を教へ道びき、農民も又日夜心にかけ、耕作の理を工夫し力を盡して勤め營まば、上下の人氣通和し、五こく茂盛し、米粟の多きは水火のごとくにて、上下富豐ならん事、實に月を數へて待べし、我れ農業は人世第一の重き道にして、心を用ひてよく是を勤れば、五こくみち〳〵、其利一世を賑はし、上下の富となる事ども、見聞をまじへて、其理をくり返し、いや言に述ぶる事こゝにとゞまる

或る老農の云ひけるは、田に稻を植うる株數の事、地の肥やせによりて、しげきとうすき植ゑやう有りといへども、其村里の地味相應を空には定がたきものなり、よく計り考て定法とすべし〇同田の内を、一歩は中分と思ふ程にうへ、一歩は少し多く取てうすく種へ、一歩は能程に取うすく種ゑ、一歩は少

し取て繁く種ゑ、かやうに同じ田つぼの内に品を變へて種うる事、右の如く同じ様に、三ヶ所ばかりに種へて、秋の實りを心見たらば、其里の地味にあひたる程がよくしるべし、それを以て其村所の定法とすべし、是一度心見て、長く其所の相應をしる事なりといへり、いとやすき事なれば、考へこゝろむべきことなり

麥を作るすぢのこと、春になりてすぢの間に木わた、瓜、夏大豆(なつまめ)、さゝげ、又芋、茄子などをも作る、其種物により、それ〳〵の定れるほどあり、又麥を刈て後、其跡に物を作る地あり、是にも又其すぢの切やう、しな〳〵ありと見えたり、麥をまくすぢを少し廣くして、すぢとすぢとの間を一尺五六寸にするあり、すぢのはゞをよき比にして、間を一尺一二寸をくもあり、又少し小筋にて間八九寸一尺ばかりなるあり、猶七八寸にうゆるもあり、是段々地により、農人の才覺により、其かはりあり、是もよく心見て考へ見たらば、其所の相應やす〳〵としるべし、其村の庄屋頭分の輩、才あるものよく心見て、其里にかなひたる定法をきはめ、すゑ〳〵の不才なる農人に委しく敎ゆべし○或る上手の農人のいひけるは、すぢの間二尺四五寸にし、筋のひろさをば八九寸一尺にも作り、濕氣なき所ならば、すぢの深さを三寸餘にこしらへ、種糞を置ても、猶二寸程もすぢふかく作り、麥を薄く種ゆべし、是はうへ時分も九月初にうへ、尤も地拵へ糞をもよくして、鬼あかど、六角麥、米むぎやすなどを蒔くべし、糞四度ばかり、小便一二度もかけ、よく〳〵中うちし草とり、春になり土をくだき、雨方よりたび〳〵に

かけ、葉のび出るにしたがひ、次第に多く土をかけ、後には中をほり、其土をくだき、ぜん〳〵に根によせ、終には根の土八九寸もたかくなるやうにかくべし是はすぢひろきゆへ、鍬にてみだりに土をかくれは、麦おれいたむ物なり、念を入れ手にてかくべししかれば茎大てきして、雨風にあふといへども、傾きたをるゝ事なく、過分に實りおほし、但是は下農人は成りがたき事とかや〇麦蒔やうのあつさ薄さは、土地と蒔く時分による事也、了簡すべし、凡て薄きかたに利あり〇夫れ天の人を養ひ給ふため、生ずる穀物さま〴〵多しといへ共、中に就て人間の生養の備と見ゆる物二種あり、稲と麦と也、稲は秋實りて夏の初迄人を養ふ備なり、米の盡る時分には、麦又一様にいでき、四月半ばより中秋まで、人民の食となる又夏秋の間に、粟、きび、蕎麦、稗、大小豆、さゝげ、などのこくもつありて、稲、麦のたらざる助となる、又大豆とひへは牛馬の食物ともなるなり凡て天道の人を養ひ給ふそなへ誠にありがたき事、いはんやうなし、たとへば小児生れて、食する事ならねば、母の食物が乳となりて、是を養ひ其子生長し、其母又子をはらめる時は、其乳とまりて次の子の養ひとなる、或は四足のある獣は翅なし、翅ある鳥類は皆足二つあり、角あるものは牙なく、牙あれば角なし人は生類の長なれば、智ありて諸用を計り、両手ありて、萬用を調ふる事自由なり此天の施しの委しき趣を鑑て、五こく皆人の爲に生ずる理を知るべし、右の内取分稲と麦とは、他の穀物の類をはなれたる重き物なるゆへ、聖人の春秋といふ書をあらはし給へるにも、稲や麦の損亡を擧げ給へり、此二種の損亡は、人世の大なる災なればなり、農人たらん者、よく此天道の理を仰ぎたうとび、慎て天意をうけ、殊更稲と麦を作るに其術を盡し、力を用ゆべし、是則農民天道をたうとぶ道にして、命を保ち福を受る術なり

いにしへ賢王の御代に始まりて、民のため諸國郡郷迄、救急料とて倉を建て穀物を蓄へ、饉飢其外民の災を救はせ給ひし事、皆國史に見へたり、かうやうの事も、白河院の比より絶え、亂世の後は公武の衰微甚しくて、かゝる善政も聞えず、末代は昔に替り世の事わざ繁く、萬財用の費多く成り行けばにや、國用の不足せぬ所もなしとかや、さればこそ凶年に逢へば、所により小民餓死を免かれ難く侍れ、往年或る領主是を憐み、兼て飢饉の備として、凡麥を作る田畠一段に麥二升、年により一升五合納させ、又秋は一段より籾七合を出させ、其上領主よりも此始に少々麥を加へ置れけるとなん、年々納たる麥もみを奉行を立て、毎年利を加へ借しければ、後に甚だ多くなり、飢饉を救ふに餘りあり（此きゝんをすくひたる穀物を返納すべきものには、二三年に元分にて納めさせ、極貧のものは救ひすてたりしとかや）又農人仕合あしく竃をたをし、所をも去る者あれば、其事を僉議し、僞りなく餘儀なき事なれば、竃をたをすにいたる難儀も、飢饉に同じ理なればとて、彼が多年出し置きたるを考へ、皆返し與へられければ、かやうのものまでも、難儀の時の扶けに成ぬるを悦びけるとかや、是かねて心を用ゆれば、飢饉をすくふの良法となん、夫れ民はこれ邦の本となり、凡そ祿あるものは平生民の力を食みて、大小ともにみな生涯を安んじながら、時あつてかれが死を顧みざらんは、人倫の心にあらず、仁心有ん人は、かゝる術を以てなりとも、窮民を扶くる遠き慮有べき事にこそ

凡飢饉年の兆をば、智ある人は夏の中にもはや見及ぶべし、尤も七月末八月初めには、慥に見ゆる物也、されども民は愚なるものにて、其年なみ五こくの色を見て飢饉を悟り、早く身持を引替て勤る事

をしらず、先秋の實り出來ぬれば、悦びいさみて、春のきゝん餓死すべき事をも辨へず、心にまかせ飲み食ひ、萬の貢物を心まゝに買求るゆへ、春の蓄へたらずして、年明くれば頓て飢ゆる者おほし、しかれば秋に至り、凶年の兆見えば、農の惣司たる人、心を用ひて詳に察し、民をよく〳〵さとし道びきて、春の餓死を救ふ心遣肝要なり

又ある所に、領主より飢人一日一人に付きて、米一合或は一合餘も救米を與られしが、夫れにて餓死のものなし、是を以て思へば、飢饉の兆見えたらば、民の惣司たらん人、其下の役人に懇に云ひ含め、春のきゝん餓死に及ばん事を小兒に物をしゆる如く、細かに民に云ひきかすべし、扨秋一日の食物を飢饉難義の時は、五六日にも食ふべし、小民つく〳〵と、前々きゝん年のなんぎを思ひあはせたらば、秋の食物一日の分を三日に用うる共、少しも苦勞有まじ、されば秋一日に食ふ食を、春のなんぎを遁るゝために、二日半程に食ひ合すべし、是は菜、大根、萬の摘菜を加へて、此のごとくすべし、遠國は所により農人一日の粮に、白米一升餘も食ふ所あれど、七合充ての積りにすれば、二ヶ月にははや二斗餘の粮米のこれり、十一月までもかくの如くせば、三斗餘の米を得べし、これを右に云ふ、一日に一合餘の飢米にすれば、二百日許の飯米いでくるものなり、若し又初秋のつもり違ひ、さまでのききんならずは、此分が儉約となり、家內五人七人もある家にて蓄へたらば、大分の穀物を得る事なるべし、凡きゝん年の備へは、農に近き役人に能く云ひ含め、末々民を懇に敎へ諭すにあり、農人

をのく得心し、はや早田の時とりかたく愼み、食物に菜や芹なづなごとき物を加へて、春の飢を恐るゝ心深くば、いか程凶年なりとも、麥のまへに餓死するものあるべからず、只是末の役人此事を能く會得し、偏に妻子をさとすごとく、眞實に心を用ひて、云ひ聞かするにあるのみ

前に記るすごとく、飢饉の兆は初秋には必しるゝ物なり、農の惣司より其下なる役人に委しく云ひ示し、農民の食物を倹約せしむべし、蕪菁(かぶな)を多く種へさすべし、畠の地ごしらへ段々念を入れ、少し延引すとも、糞もかれ地もきれたるよし、凶年には虫多き事あり、其ゆへ殊に地ごしらへよくすべし、若圃のなき所ならば、早田中田の跡を、委しくこしらへ用ゆべし、必ず力をつくし、人々相應に多く蒔くべし（ころを農人じぶんにもとめかぬる事あらば、役人より借銀才覺してつかはすべし）尤も後の手入れ、糞しに心を用ゆべし、次に大根をも多く蒔くべし、地ごしらへ右にいふごとし、蕪と大こんは、小さよりまびきて汁にもし、長ずるにしたがひ食物に加へて、穀物の助とすべし、よく農人をさとし、秋初より覺悟し、蕪大こんを多くうへなば、たとひ領主のめぐみ薄しといふとも、貧民までも餓死の憂れへなかるべし○又凶年には、そら豆をも多く種ゆべし、麥より少し早くいできぬれば、麥に取つく時の助と成るべし○農人つねぐ、蕪大根のたねを餘分に蓄置べし、なみの年にも必ず多く作り立て、農人これを用ひて、冬春麥に取つゞくまでの穀食の助けとすべし○前に述るごとく、稻と麥とは、天より人間を養ひ給ふ二種のそなへなれば、農民ふかく心を用ひて、取分麥作を勸むべし（麥多く蓄れは、民衣食のうれへなし、誠に農人の富をます事、是に過る物なし、取分力を盡すべきものなり）

凡農民を司る惣官たらん人はつねに心用ひ、五穀種藝を教へ道びき、よく下の情に通じ（下情に通ずる事は前に注す）凶年の兆有ば、前に記す如く深く工夫し饑死を救ふべし、時宜に依上よりも力をそへ惠有べし夫れ萬民の患をのぞき悦びを施し、或は饑死を救ふに心を用ひ、仁心あらん輩は其善政天心に叶ひ、君も臣も長く其祿をたもち、福年月にしたがひていたり、子孫長く繁榮あらん事、鏡にむかふがごとくならん、或は其職分に有ながら下の愁をしらず、民をしへたげ苦め、其饑死をも憐む心なく、不仁を日にかさねば、天責を招き災を迎へて、子孫に及びなん事逃るゝ道なからん、賢者これを愼むべし

何れの處にても、四木、三草、或は木わた、たばこの類の利の多き作り物、または杉檜のたぐひの用材の木、或は果樹なんど、凡て前かたより、其所になき物を、其利を計て新儀に仕立てんとならば、先づ其事を執行ふべき才ありて、慥なる役人を撰び定むべし、其上にて、其仕立べき物の多き名物の所に人遣し、其の仕立つるやうを委しく習ひて（たとへばうるしならば吉野、紙ならば安藝、みの、吉野、木わたは大和、河内、津の國、播磨、きぬわたは丹後、但馬、東國にては武州、上野、甲斐などの類ひをいふ也、）先づ少し宛二三ヶ所も作り立見るべし、地により其物の合ふとあはぬ事あれば、左やうの所をよく心見、其上にて又多く作り考へ、十分に地心手入の樣を得心して、後廣く是を仕立つべし、其時には名物の所より人を雇ひよせ、三四年も仕立てさせ其手入養ひ、萬の事を委しく見習ひ、仕覺えて後、いか程も廣く取行ふべし、此のごとくなれば、其事さはりなく行はれて、利用福年を追て多し、若し其始を愼まずして、輕々しく麁略に事を始むれば、多くの費損ありて、後悔はかりなく物ごと疑ひ多く、其事終に

成りがたし

右の類の事、或は地を開き田畠をなし、又何ぞ事を始て仕立るに、昔より其事を執る人利欲を先とし、事いまだ調はざるより、頓て利をとらんと計り、今年始て出來、其まゝ運上を納めさせんとたくむ、かやうの心あれば、民皆上の貪りの重きに恐れて、其事を勤るに心なし、又下を貪る心は、天意にたがふゆへ、其事多くは成りがたし、或は少しも民を利する仁心ありてする事は、民の心進み、天氣も又和する故事調安く、利も又其内に有、凡民の事を司る人は、此心を愼むべき事にや

農家に籾麥を費し、物を買事多し、取分定て費の多きは、茶とたばこに過る物なし、されば何とぞ此費を止たらば、農家の富となるべし、凡何方にても、一村の中に必たばこを少作る人一二人あるものなり、役人より村中に云付て、十二月の比家々より少し宛たばこを出し、右の農人にあたへ、たばこの苗地を廣くしたてさすべし（もし其農人の方によき苗地なくば、餘人の畠を、村中より買て渡すべし、）或は人手間入らば、其の里の本役となして勤むべし、春になり苗よくさかへたる時、少づゝ分て村中に渡し、作樣をも敎ゆべし、百姓めん〳〵心にかけて作るべし、一二年手馴たらば、作りやうあらせし得心すべし、其後は苗をも面々に作り立て家家に作るべし、閙（いそが）はしき折なりとも、多くの籾麥を失はぬ重寶なる事なれば、女わらはべも少しのひまに虫をとり芽をもかくべし、時々心づかひし、僅の手間を入れたらば能くこそなからめ、家々年中用ゆる程は、たやすく作り出すべし、是少しばかりの心づかひを以て、家々大分のこくもつを蓄る

手立なり、又茶を種うる法は、茶の條下に委しく記せり、是又其村の庄屋頭、百姓に才覺あるもの、他所にも開合せ心を用ひ、種へ立る事いと安かるべし、野地あらば地をひらきてうゑ、さなくば上田畠の内を以ても、家々に用る程の茶を種ゑ立つる事は僅の手間にて成るべし、是は一度種置けば百千年も年々に利をうる物なり、此二種を役人より心を付けしたてさせたらば、毎年に大分の麥粮を費さずして、民家々の富となるべし、かくはいへども、農人は愚なる者にて、目の前の利を見ても、心をはげんてする事まれなり、只民の惣司たる人、よく此心得を以て農人をさとし、此事を執行はゞ、喩ば年貢なき田畠を多く仕立てゝ、民の家々に末代まで、與へたると等しかるべし此心づかひは、所によりさまざま工夫あるべし我れ此事を行ひて、慥にしるしを見たるゆへ、委はしく記レ之、諸賢者民をめぐみ民を利し、農家うるほひ、上下の福あらん事を思ふ人は、必ず是を捨置事なかれ

農民其人數より、田畠を多く作る事、大に悪し、少しすくなきに利多し、此事本書にあれども、肝要の事なれば農人に心を付け、又こゝに記すものなり

其の國の物をもて、其の國の諸用を調ゆる様にと、心づかひの所ありと見えたり、尤もの事なり茶、紙、うるし、やき物、ぬり物、食物、織物、酒、酢、萬のうつは物等のたぐひなり急にはならずとも、年をつみ心を用ひたらば、大抵の物其の國の産を以て事たるやうあるべし、からも日本も、世々に才覺ある人出來て、人世の用をたし造り出せる器物なども、漸々に多し、世の人數もやうやく多くなれば、夫程に麥を蒔く事なども、五六十年このかた多く、

其術も詳なり、又昔のごとく綿ばかりならば、貧きもの冬にいたり、寒に堪へざるべきを、天又木綿を生じて、世界の人皆寒を防ぐにたれり、返す〳〵天道の施しをたうとぶべし、されば國所により、木綿のよからぬ地もありと聞ゆれど、畿內邊のごとく、其法を得たらば、大方にそだゝぬ所あるべからず、天の御惠みをかへりみ、たうとび、必ず木綿を多く作る術、ねがはしき事なり

前に書すごとく、青き事は藍より出て、藍よりも青き理なれば、喩ば此書は聰明の人におゐては、只かりの道しるべにてこそあれ、才あるひと心を用ひて其術を勵まし、千萬の功を立らるべし、いはゞ深山の道しらぬ明智達者の人老人に道をとへるに、翁は麓に立ち、そこ〳〵の程ぞと指さし示すに似たり、剛强の人をしへにまかせ、山に入り珍寶などを得たらんに、白髮の老人、遙の山下より打のぞみて、ほめ美むが如くなるべし、諸賢者希くば此しるべによりて深く心を用ひ、其功を立てられん事をぞ

此書は前年たび〳〵改正すといへども、老眼うとくして、烏焉馬のたがひをも見分かず、假名は「いゐひ、ゑへ、うふ、やうよう」のたがひ、猶ほ多かるべし、まして奥口の一を、お一もわかたず、又書寫のあやまりも有なん、只偏に老人のよむにたよりありて、さとうやすきをのみ、本意とし侍る

農人のわざに、緩急、前後、輕重と云ふことあり（是は萬にある事なれども、耕作の法にて、取分大切にする事なり）緩はゆるく、急は早く、前はまへ、後はのち、輕はかるく、重はおもき也、まづ麥を早く取あげ、水田を犂（すき）かき、糞しを入、早

苗をうゆる、秋は田をかり上げ、あとをすき、麥をはやく蒔くなど、いづれもいそぐわざ、是急の類なり、冬春田をかやし、山の薪をこり、縄をなひなどするは常の事にて、十分の力を用ひがたし、是緩の類なり、此外先きにし、後にする事、皆次第あり、又前後緩急の内なほおもきかるきの分あり、一一皆よく此理を考へ、前後、緩急、しだいを以て勤めいとなまば、五こく熟して、福を得る事はかるべからず、又輕重前後を取ちがゆれば、たとひ力を盡し、勤るといへども、作り物よろしからず、農人こゝにをいて心を用ひ、日夜のはたらき時にをくれず、順を以て其法にたがはず、民のかまどの煙にぎはしく、上下富たりて安樂ならん事、永く萬世の幸をも引ぬべし

いにし年の冬より、愚男が遊學にぐせられて、京師に寓居せしが、よはい已に希古に餘ぬれば、歳の寒かりしほどは、唯爐火のみ友としてうち過しぬ、さて鳥の聲など春めきて、花もやうやうけしきだつ頃より、老が身も氷のとけゆく心ちして、王畿のくまぐまをはじめ、奈良、よし野まで遊歷し、花にあかぬたのしみのみぞおほかりき、又京師に歸りて所々遊觀のいとまに、此農業の書を校閲せしに、昔年いくたびか訂正のつとめを用ひしかども、猶意趣明かならず、こと葉したがはぬ事のみなりき、今又補正せんも已に梓に刻めりしかば、只一二の餘意をとり拾ひて綴錄せしに、覺えず數十葉になれり、くだくだしき贅言、みづからもいとはしくて、かいやり捨つべかりしを、書林これを編末に附錄せんとこふ事再三にをよびぬ、歸期こゝにせまり、精撰に暇なければ、妄りに注

せし草藁ながら、再見をだに加へ侍らて書林にあたへ、われは京を出てぬ、むかしより書をけみする事は、塵をはらふにたとへ侍るとや、はらひても跡よりつもるばかりなるに、かゝる倉卒のしわざには、なにか誤りの多からざらんや、むべみる人のわらひをとり侍らむ、元祿丁丑の年季夏の日、筑州隱老貝原樂軒、京師御幸町の僑居にして記之

元祿十丁丑年七月穀日
武江書林　富野松雲齋
京都書林　茨城多左衛門
壽梓

農業全書附錄終

律原發揮

中根璋著

律原發揮序

醫子曰、有道而後有理、有理而後有數、既有數也、度量權衡所因生也、四者一不正、則民害甚矣、故管仲以施度土地匡天下而民害除焉、又醫之用藥分數微誤、則害民命也尤甚矣、然今醫用元明方用本朝秤計之大非也、我意一納着身雖不足於一身萬分之一、噬膚則不能寢焉、毒藥分數雖誤一絲着於藏府間、積而久則害命也必矣、豈可不謹耶、我曾具記四者之本朝不同及東漢至明各異者、而付於續方考後、以與門人、庶幾不誤焉、今也此書一出民害除焉、然則與我醫同仁道也、故序

元祿癸酉季穐日　　雒丹水子

律原發揮目錄

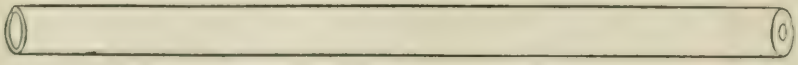
度解

目錄終

律原發揮

洛涎中根璋元珪著

律度量衡四者、皆本於黍而生於黃鐘之管、所謂律者始於黃鐘終於應鐘、其上下相生皆以三分增損之法、度者起於黃鐘之長、爲分寸尺丈、量者起於黃鐘之實積、爲勺合升斗、衡者起於黃鐘之實積、爲銖兩斤鈞、歐陽子曰、造律者以黍、一黍之廣積而爲分寸、以著於度、一黍之多積而爲龠合、以著於量、一黍之重積而爲銖兩、以著於衡、三者皆起於黃鐘、故曰黃鐘爲萬事之本



○黄鐘律管之圖

張介賓類經附翼曰、按律呂精義管制有三、依縱黍尺、黄鐘（又作鍾古字通用）管長八寸一分、（即一尺也）外徑四分零五毫、內徑二分八釐六毫、吹口廣一分四釐三毫、斜黍尺長九寸、（即一尺也）橫黍尺長一尺、（璋）雖未曾見律呂精義、姑以算術補空圍及依二品尺度之數曰、依縱黍尺空圍九分、依斜黍尺外徑四分五釐、內徑三分一釐八毫有奇、吹口廣一分五釐九毫有奇、空圍一寸、橫黍尺外徑五分、內徑三分五釐三毫有奇、吹口廣一分七釐六毫有奇、空圍一寸一分一釐一毫有奇、算法各置縱黍尺度進一位九約之得斜黍尺度、再進一位九約之得橫黍尺度、（璋）按律呂精義所記之寸分釐毫、皆以十爲率、所以者何、縱黍尺者九分爲寸、九寸爲尺、（九九八十一分即一尺也）所謂八寸一分、當直曰一尺或八十一分、然改曰八寸一分、此以十爲率也、可見故今所補之斜黍尺度亦以十爲率、橫黍尺、從來以十爲率、依商尺（唐尺明營造尺本邦舊尺並同）長八寸、又三分寸之一、外徑四分一釐六毫有奇、內徑二分九釐四毫有奇、吹口廣一分四釐七毫有奇、依周尺長一尺二寸五分、外徑六分二釐五毫、內徑四分四釐一毫有奇、吹口廣二分二釐有奇、依本邦曲尺長八寸二分零二毫有奇、外徑四分一釐有奇、內徑二分九釐、吹口廣一分四釐五毫

○十二管長 以二本邦舊尺一算レ之

△黄鐘八寸三分三釐三毫有奇　△大呂七寸八分零三毫有奇　△大簇七寸四分零七毫有奇　△夾鐘六寸九分三釐六毫有奇　△姑洗六寸五分八釐四毫有奇　△仲呂六寸一分六釐五毫有奇　△蕤賓五寸八分五釐二毫有奇　△林鐘五寸五分五釐五毫有奇　△夷則五寸二分零二毫有奇　△南呂四寸九分三釐八毫有奇　△無射四寸六分二釐四毫有奇　△應鐘四寸三分八釐九毫有奇

○別法十二管長 此法倣二黄帝尺寸分以至絲忽一、皆以レ九爲レ率而記レ之、出二于律呂新書一、今附二其算法一

度起二於忽一、九忽爲レ絲、九絲爲レ毫、九毫爲レ釐、九釐爲レ分、九分爲レ寸、九寸爲レ尺、○下生者隔レ七 前書曰レ隔レ八、隔レ八則不レ中、今改レ之 二一因三一歸、上生者隔レ五 前書曰レ隔レ六、隔レ六則不レ中、今改レ之 四一因三一歸

○二一因法 因法者始二於下位一終二於上位一、其中得レ九則進爲レ一

一退爲レ二　二退爲レ四　三退爲レ六

四退爲レ八　五留一一　六留一三

七留一五　八留一七

○四因法

一退爲レ四　二退爲レ八　三留一三

四留一七　五留二二　六留二六

七ハ留テ三一トス　八ハ留テ三五トス

○三歸ノ法　歸法ハ者始テ於上位ニ終フ於下位ニ、其ノ中得レハ九ヲ則チ進テ為レ一ト

一ハ留テ為レ三ト　二ハ留テ為レ六トス　三ハ進テ為レ一ト

四ハ進テ一三トス　五ハ進テ一六トス　六ハ進テ為レ二ト

七ハ進テ二三トス　八ハ進テ二六トス

○右因法歸法、所-以ハ與ニ尋常之法ト異ナル者、以レ九ヲ為レ率ト也

△黄鐘一尺（即九寸也、八十一分也、七百二十九釐也、六千五百六十一毫也、五萬九千零四十九絲也、五十三萬一千四百四十一忽也）　下生ス林チ

△大呂八寸三分七釐六毫　下生ス夷チ

△太簇八寸　下生ス南チ

△夾鐘七寸四分三釐七毫三絲　下生ス無チ

△姑洗七寸一分　下生ス應チ

△仲呂六寸五分八釐三毫四絲六忽

△蕤賓六寸二分八釐　再上生ス大チ

△林鐘六寸　上生ス太チ

△夷則五寸五分五釐一毫　上生ス夾チ

△南呂五寸三分　上生姑

△無射四寸八分八釐四毫八絲　上生仲

△應鐘四寸六分六釐　上生蕤

算法如太簇下生南呂、置八寸依二因法、（八留／一七）爲一寸七分、次依三歸法、先一寸（一留／爲三）爲三寸、次七分（七進／二三）爲二寸三分、共得五寸三分、又如南呂上生姑洗、置五寸三分依四因法、先三分（三留／一三）爲一分三釐、次五寸（五留／二二）爲二寸二分、共得二寸三分三釐、次依三歸法、先二寸（二留／爲六）爲六寸、次三分（三進／爲一）爲一寸、次三釐（三進／爲一）爲一分、共得七寸一分、餘倣此

○逆生法（此法有自一律以後不以之／分説之、直曰幾寸分釐毫）

下生者隔五三因四歸、上生者隔七三因二歸、其法若始仲呂下生無射、無射上生夾鐘、夾鐘下生夷則、夷則上生大呂、大呂下生蕤賓、蕤賓再下生應鐘、應鐘上生姑洗、姑洗下生南呂、南呂上生太簇、太簇下生林鐘、林鐘上生黄鐘

張介賓説律管上下生算、立別法曰、上生者一百乘之、七十五除之、下生者五十乘之、七十五除之、嗚呼此何之謂乎、數之可約則約之、可半則半之者爲治其繁也、然張氏戻二因三歸四因三歸捷法、古一申爲二十五、與其繁曰四分之二、孰若其約曰二分之一也

○本邦十二管名

壹越（越音忽）　平調　下無（下史姥ノ二音、又名ニ龍吟ト）　鳧鐘　鸞鏡　神仙

斷金（斷音短、金音吟）　勝絶（絶音雪）　雙調　黃鐘（鐘音式）　盤涉（涉音式）　上無（上可美ノ二音、又名ニ鳳音ト）

○上下相生論

璋按諸律可上生者強令下生者、其生來律長得本律半、可下生者強令上生者、其生來律長得本律倍、古所謂全律半律者此之謂也、且試截空圍平均者二管、其短管如長管半、（假令長管四寸短管二寸之類）吹之考其音、雖有高下皆歸一律、然依三分增損之法、則仲呂三分益一、亦當再上生黃鐘、古所謂變律者是也、此從仲呂生來、黃鐘長九寸八分六釐九毫有奇、（依橫黍尺而言之）而與本原黃鐘微不同、其長不同在於倍半之外、則其音何得同乎、且視各管袤法、大呂、夾鐘、仲呂、夷則、無射五管者各前管二千一百八十七分之二千零四十八也、太簇、姑洗、蕤賓、林鐘、南呂、應鐘六管者、各前管二百五十六分之二百四十三也、如此袤法不齊、則音聲次序、豈得平均乎、璋欲令之齊朝思夕慮、創爲之法、雖如京房六十律之多、皆當依此法造之、其法置一、（全律也）折半之得五分、（半律也）

爲實、一十一乘方開之、得一律衰法九分四釐三毫八絲七忽四三一一六八餘、是生次律之法也、（以乘黃鐘長、即得大呂長、以乘大呂長、即得太簇長、餘倣此）又前實五乘方開之、得二律衰法、（以乘黃鐘長、即得太簇長之類）又前實三乘方開之、得三律衰法、（以乘黃鐘長、即得夾鐘長之類）又前實立方開之、得四律衰法、（以乘黃鐘長、即得姑洗長之類）又前實四自乘一十一乘方開之、得五律衰法、（以乘黃鐘長、即得仲呂長之類）又前實平方開之、得六律衰法、（以乘黃鐘長、即得蕤賓長之類）又前實六自乘一十一乘方開之、得七律衰法、（以乘黃鐘長、即得林鐘長之類）又前實自乘立方開之、得八律衰法、（以乘黃鐘長、即得夷則長之類）又前實再自乘三乘方開之、得九律衰法、（以乘黃鐘長、即得南呂長之類）又前實四自乘五乘方開之、得十律衰法、（以乘黃鐘長、即得無射長之類）又前實十自乘一十一乘方開之、得十一律衰法、（以乘黃鐘長、即得應鐘長之類）○若使之六十律者、亦五分爲實、五十九乘方開之、得一律衰法、（以乘黃鐘長、即得包育長之類）又前實二十九乘方開之、得二律衰法、（以乘黃鐘長、即得執始長之類、下倣此）又前實一十九乘方開之、得三律衰法、又前實一十四乘方開之、得四律衰法、又前實一十一乘方開之、得五律衰法、又前實九乘方開之、得六律衰法、又前實六自乘五十九乘方開之、得七律衰法、又前實自乘一十四乘方開之、得八律衰法、九律以往倣此、雖幾律當依此法製之

○變調（俗謂吟變）

異邦之法有變調、曰變宮、（在宮之前而近、在羽之後而遠）曰變徵（在徵之前而近、在角之後而遠）本邦亦有變調、但其位不同、曰在商

之後角之前、而有二調、(章)按本邦民俗倚歌和之者之商與羽者皆變調而已、曰如何而知之、曰假令以宮調謂之則壹越者宮(母調)之宮、(子調)平調者宮之商、雙調者宮之角、黃鐘者宮之徵、盤渉者宮之羽、以此五律和歌不令其商(子調)退一律有半、其羽(子調)退一律、則音不和也、故知尋常之商羽皆變調

〇母子調

五音各又有五音、即母子之調也、以俗調箏言之則以第一第五弦定母調、即爲子調宮、其商角徵羽者次第配之、但第一第二弦之交兩三音而已

母調	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	爲	巾
子調	宮	角	徵	羽	宮	商	角	徵	羽	宮	商	角	徵
宮調	壹	雙	黃	鸞	壹	斷壹交	雙	黃	鸞	壹	斷壹交	雙	黃
商調	平	黃	盤	神	平	勝平交	黃	盤	神	平	勝平交	黃	盤
角調	雙	神	壹	斷	雙	鳧雙交	神	壹	斷	雙	鳧雙交	神	壹
徵調	黃	壹	平	勝	黃	鸞黃交	壹	平	勝	黃	鸞黃交	壹	平
羽調	盤	平	下	雙	盤	神盤交	平	下	雙	盤	神盤交	平	下

(Column numbers 一–巾: 箏絃)

右一與五同調、(律皆全)二與七同調、(二ハ律、七ハ下徵此)三與八同調、四與九同調、五與十同調、六與斗同

調、七與乙爲同調、少〔半律〕八與巾同調、巾少〔半律〕庸俗全律稱乙、半律稱甲〔諫音〕又半律稱乙則少半律稱甲、又曰或曰全律稱乙、半律稱中、少半律稱甲又曰商羽主秋冬、秋冬爲陰、陰常不足、故令商羽庳、又曰宮角徵爲陽、故各三絃商羽爲陰、故各二絃俱得十三絃、已上以子調論之

○本邦俗調七音之圖

母調

宮調　商調　角調　徵調　羽調

子調	宮調	商調	角調	徵調	羽調
宮	壹	平	雙	黃	盤
商	壹断交	平勝交	雙鳧交	黃鸞交	盤神交
變	平	下	黃	盤	上
變	勝	雙	鸞	神	壹
角	雙	黃	神	壹	平
徵	黃	盤	壹	平	下
羽	鸞	神	断	勝	雙

○樂箏

樂箏者以第二弦定母調、亦以母調爲子調宮、然璋未學樂箏、今任或者說擧商一調、餘可類知也

調子	徵	宮	商	角	徵	羽	宮	商	角	徵	羽	宮	商
○商調	盤	平	雙	黄	盤	壹	平	雙	黄	盤	壹	平	雙
箏結	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	爲	巾

○五音異同

異邦所謂五音與本邦五音、所在有異同、其宮商徵羽無異、惟至角有異、異邦以姑洗(當本邦下無)爲角、本邦以雙調(當異邦仲呂)爲角、故有一律差、若強以雙調配宮、(母調下同)黄鐘配商、盤涉配角、壹越配徵、平調配羽、則次序與異邦無異、然未嘗聞雙調爲母調宮也、或曰一說次序雙調爲先、下無爲後、依此則與異邦配位無異矣、曰依雙調下無次序、而以雙調配角則音不和、然則當以下無配角、如汝所謂者、唯雙調與下無、名有異而位無異矣、仍知本邦與異邦之人、其音襲水土有差矣

○黄鐘實積算法

古謂黄鐘長九寸、空圍九分、積八百一十分、所謂空圍九分蔡氏胡氏俱以爲一面平積、(即空圍平積也)且說圍徑之數悉用古率附會、皆所以不中也、彭魯齋偏依沖之密率以諸家說爲誤、此非誤、蓋依古率也、又非不誤、蓋以九分爲空積也、魏孟康以爲黄鐘圍九分、林鐘圍六分、太簇圍八分、每

管圍長有差者誤、孔穎達以爲諸律雖短長有差其圍皆以九分爲限者得之、朱子曰、古者只說空圍九分、不說徑三分、蓋不啻三分、猶有奇也、璋按以上諸氏、多以曰空圍九分爲面羃、既曰長九寸空圍九分、何遠算計空積曰之乎、圍之爲言環繞也、依字可知、故曰黃鐘積八百一十分者皆誤、張介賓未覺知之、故類經脫漏之、夫黃鐘實積者量之所起也、無乃昧於本原而考求、豈得其正乎、雖不得其正、此之謂自慊、經曰其本亂而末治者否矣、於是璋雖不敏布算、以使後學粲然無疑、其法置依橫黍尺內徑三分五厘三毫有奇、自相乘得一分二釐五毫、（自方一寸爲積一箇若自方一分爲積一箇則一十二分半也）以長一尺相乘得一寸二分五釐、（以分言之、則一千二百五十分也）又依冲之密率、一十一乘之、一十四除之、求圓積法者家々不一、古法徑羃取四分之三、魏劉徽取二百分之一百五十七、張介賓取四千八百八十二万八千一百二十五分之三千八百五十三萬五千一百六十八、本邦吉田光由取二百分之七十九、璋按、圓之爲形也、生於天道自然、故不能極其蘊奧、其數不遠者、無出於冲之之率者、故今依此得九分八釐二毫微強、（以分言之、則九百八十二分、又七分之一）是爲黃鐘一龠半合實積、倍之得一寸九分六厘四毫微強、是爲兩龠一合實積、進一位得一十九寸六分四厘二毫大強、是爲二十龠一升實積、再進一位得一百九十六寸四分二厘八毫強、是爲二百龠一斗實積、〇依縱黍尺實積五分二厘一毫大強、（以分言之、則五百二十一分、又一萬一千二百分之一萬零六百五十一）依斜黍尺實積七分一厘五毫大強、（以分言之、別七百一十五分、又五十六分之五十五）於是可知、謂八百一十分者誤也、今算以橫黍尺者、爲合嘉量實積也、縱黍斜黍倣此算之

○依錢生尺

黄鐘律管造之以黍、雖然本邦之名黍者也、甚細小而不足以考之、（本邦黍有三四種、其中者百粒重一分二厘五毫、積至千二百黍、一錢五分大率居異邦之半）唯依開元通寶（璋按大學衍義補、以爲開通元寶、或曰、凡錢文多以年號、此開元亦然也、曰、此錢唐高祖武德四年鑄之、開元玄宗年號也、距武德九十余年、何先用此年號乎、可讀開通元寶也）錢、則度可考知、量衡亦倣此、而可知、張介賓曰、唐會要曰、唐高祖、武德四年行開元通寶錢、徑八分、蓋唐尺之八分也、夫一錢徑八分十錢徑八寸、即孫氏所謂夏家古尺之一尺也、（不與今所考同上）開元錢今固有之、以錢考尺則尺可知矣、本邦亦間有此錢、但大小厚薄不均、以舊尺校之、其徑大率八分、排十二錢半當一尺、

錢之圖

仰圖



覆圖



徑八分、厚四釐、重二朱四絫、十錢重一兩、累二十錢、其厚與一錢徑同、

○本邦舊尺之圖



前書載尺多用縦圖、縦即所彫版之横也、故經日不可不縮、故今用横圖、此恐愈久愈失其眞也

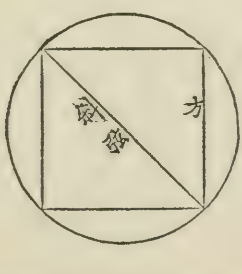
（此縮圖ノ長今ノ曲尺ニテ三寸五分）

此尺自魯般家傳以至於唐、自後聖德太子傳之本邦、至今在和州法隆寺、即木匠所用曲尺、雖然家傳寫其尺長短不一、皆失之長大、璋昔日往彼地寫此尺、故今著於茲、以便後學、以今之曲尺校之、當九寸八分弱半分（即一百二十七分尺之一百二十五分）

(此縮圖横曲尺ノ三寸五分、縱一寸七分五厘)

○本邦曲尺之圖

此ノ尺本テ二於京升之徑及深ニ一而所レ圖也、庸俗知テ唯有ルヿヲ二此ノ尺一、未ダ嘗知ヲ三別ニ有ルヿヲ二舊尺一、故ニ制スル二升及步法等チ一、皆依ル二此ノ尺ニ一、以ニ舊尺ヲ一校ルニ之ヲ、當ル二一尺零一分六厘ニ一、即チ俗ニ所レ謂カ子鐵尺也、○曲尺有ニ稱スル二裏尺ト一者上、即以ニ方一尺ノ斜弦ヲ一强テ爲ニ一尺ト一、當ニ表尺ノ一尺四寸一分四厘二毫有奇ニ一、算法一尺自乘シテ得ニ一百寸ヲ一、倍レ之ヲ平方ニ開テレ之ヲ而得レ之、嘉量ノ腹徑合スニ此ノ數ニ一、圓ノ內ニ容ルヽ方ヲ以テ二其斜弦ヲ一直ニ爲ス二圓徑ト一也



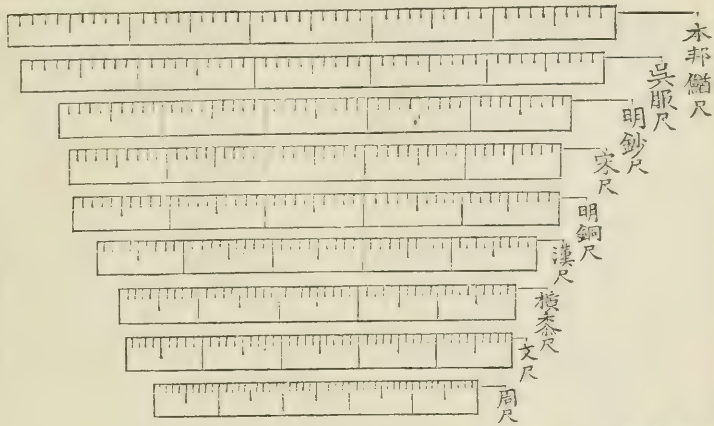
△度解

○黃鐘生度

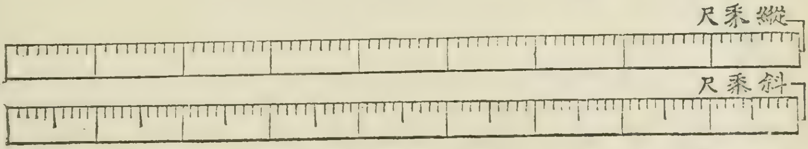
歷代ノ尺度皆本ニ於黃鐘ニ一、雖レ有リト二縱橫斜黍之異一、皆以ニ黃鐘管長ヲ一爲ニ一尺ト一、○縱黍尺ハ者一黍ノ之長ヲ爲ニ一分ト一、舊尺一分零二毫余、即四百八十六分尺之五 九分ヲ爲ニ一寸ト一、舊尺九分二厘五毫余、即五十四分尺ノ五 九寸ヲ爲ニ一尺ト一、舊尺八寸三分三釐三毫余、即六分尺ノ之五

九而九之得八十一分、是爲律本、此黄帝命伶倫始造律之尺也、故名古律尺、○横黍尺者一黍之廣爲一分、（舊尺八厘三毫余、即一百二十分尺之一）十分爲一寸、（舊尺八分三厘三毫余、即一十二分尺之一）十寸爲一尺、（舊尺八寸三分三厘三毫余、亦六分尺之五）

十而十之得一百分、是爲度母、此虞舜同律度量衡之尺也、故名古度尺、○斜黍尺者非縱非横、而斜倚相俳爲一分、（舊尺九厘二毫余、即一百零八分尺之一）十分爲一寸、（舊尺九分二厘五毫余、即五十四分尺之五）九寸爲一尺、（舊尺八寸三分三厘三毫余、亦六分尺之五）十而九之得九十分、張介賓曰、本無九十分爲黄鍾者、至劉歆班固、乃以九十分爲黄鍾、是又合於斜黍度者也、推原其悞、蓋自京房始、房時去古未遠、明知古法九分爲寸、以其布算頗煩初學難曉、乃創爲之法、而變九爲十、故前後漢志皆云九寸、○右三法分數雖異、而其長則一也、皆當本邦舊尺八寸三分三厘三毫有奇、（即六分尺之五）曲尺八寸二分零二毫有奇、此即黄鍾之長也、○夏尺者即虞舜横黍尺、（孫思邈曰、夏家古尺、即江淮吳越所用八寸小尺是也、當唐尺八寸矣、不與今所考同、）○商尺者以黄鍾之長加五分之一而爲尺、十分爲寸、十寸爲尺、（已下諸尺皆倣此、）適當夏十二寸、合本邦舊尺、當曲尺九寸八分四厘二毫余、張介賓說商尺曰、以黄鍾之長均作四段、加出一段而爲尺、適當夏尺十二寸五分、傳曰成湯十二寸爲尺、蓋指此尺也、（章）按張介賓算法、與所引用傳相矛盾、何漫布算使後人生惑乎、張介賓本昧於算術、昧於算術則間有差失、不亦宜乎、○周尺者以黄鍾之長減五分之一而爲尺、適當夏八寸、傳曰、武王八寸爲尺、當舊尺六寸六分六厘六毫有奇、（即三分尺之二）曲尺六寸五分六厘一毫有奇、○周景王尺者即横黍尺、（律氏所謂周尺、）



右九種尺以紙上狹隘圖五寸各兩之則一尺也(本圖便宜上更ニ縮圖セリ)



指此尺也、間得洛東泉涌寺僧俊芿入宋所傳來之周尺而校其長與此橫黍尺全同、絲毫不差、至今量裁袈裟用此尺也、張介賓曰、斜黍尺十黍爲寸、九寸爲尺、周景王尺矣、璋按此恐誤乎、姑存焉俟後哲是正。○

漢尺者以黃鐘之長加九分之一而爲尺、當舊尺九寸二分五厘九毫有奇、(即二十七分尺之二十五)曲尺九寸一分一厘三毫有奇。○唐尺者即商尺、釋氏行事鈔(中卷)引唐令(資持記曰魏徵之所撰二十卷)曰、尺者以尺二寸爲尺、(前日以延周尺爲定、即景王尺也)劉宋尺者以黃鐘之長加八十一分之一十九而爲尺、當舊尺一尺零二分八厘八毫有奇、(即一尺又二百四十三分尺之七)曲尺一尺零一分二厘六毫有奇。○明曲尺(即營造尺)者即商尺、又唐尺、比鈔尺短六分二厘五毫、(此以鈔尺言之)○鈔尺(即裁衣尺)者當舊尺一尺零六分六厘六毫有奇、(即一尺又三分寸之二)曲尺一尺零四分九厘八毛有奇。○銅尺(即量地尺)者當舊尺一尺零二分四厘、曲尺一尺零零七厘八毫有奇、比鈔尺短四分、(亦以鈔尺言之)○本邦曲尺者比舊

尺、長一分六厘、（以舊尺言之）以鐵制之、故又名鐵尺、○吳服尺者以曲尺一尺二寸（舊尺一尺二寸二分弱）爲一尺、量裁衣服、用此尺、故名、○鯨尺者以曲尺一尺二寸五分（舊尺一尺二寸七分）爲一尺、以鯨魚鬚制之、故名、○文尺者曰曲尺八寸爲一尺、算韈子用之、其寸大率合錢一文徑、故名、○此外有稱吳服尺者、即機杼之家所用之尺也、或曰、此尺不許妄傳人、故今不備錄、○或曰、天竺之今尺者、當曲尺四寸一分、隋志載十五等尺、事詳于性理大全及書經通考、不追考算

○步　法

唐虞及夏以六尺爲一步、（適合舊尺五尺）○商以五尺爲一步、（亦合舊尺五尺）○周以八尺爲一步、（當舊尺五尺三寸三分三厘三毫有奇）○明以銅尺五尺爲一步、（當舊尺五尺一寸二分）○本邦以曲尺六尺五寸爲一步、（俗稱一間、算路程用之）又以六尺三寸爲一步、（俗稱京間、每閾席二間置閾一箇、其濶四寸、折半之配一間則得二寸、以減六尺五寸、余六尺三寸爲席一間之法、算田積用之）又以六尺爲一步、（俗稱夷間）

○畝法不同

周以方八尺爲步、百步爲畝、（或作晦、又曰畮）百畝爲夫、三夫爲屋、三屋爲井、井九百畝、○後漢趙氏曰、古以百步爲畝、今以二百四十步爲畝、古百畝當今之四十一畝也、金仁山曰、古者方六尺爲步、步百爲畝、以九百畝爲一井、八而皆百畝爲私田、古所謂畝其廣六尺、長六百尺、是爲一畝、若以今大畝計之、則古百畝、當今四十一畝、古者二畝半當今一畝十步、璋按二氏之所說、以爲畝有古今之

異而步無古今之異、璋雖不以爲然、生于千載之後、且異域於日本、而何得知之、又按禮記王制曰、古者以周尺八尺爲步、今以周尺六尺四寸爲步、古者百畝當今東田百四十六畝三十步、古者百里當今百二十一里六十步四尺二寸二分、疏曰、古者八寸爲尺、以周尺八尺爲步、則一步有六尺四寸、今以周尺六尺四寸爲步、則一步有五十二寸、是今步比古步、每步剩出一十二寸、以此計之、則古者百畝當今東田百五十二畝七十一步有余、與此百四十六畝三十步不相應、又今步每步剩古步十二寸、以此計之、則古之百里當今百二十三里一百一十五步二十寸、與此百二十一里六十步四尺二寸二分又不相應、經文錯亂、不可用也、陳澔曰、愚按疏義所算亦誤、當云古者八寸爲尺、以周尺八尺爲步、則一步有六尺四寸、今以周尺六尺四寸爲步、則一步有五尺一寸二分、是今步比古步每步剩出一尺二寸八分、以此計之則古者百畝當今東田百五十六畝二十五步一寸六分千分寸之四、與此百四十六畝三十步不相應、里亦倣此推之、璋按陳註亦誤、當云古者百畝當今百五十六畝二十五步、古者百里當今百二十五里、又強令之合王制所謂之比算者、依畝數則今步得六尺六寸一分四厘零五絲五忽餘、即四十三尺、又一千四百六十三分尺之一千零九十一爲實、平方開之得數　算法列百四十六畝、通步內子三十步、得一万四千六百三十步、寄位布天元一爲今步、自乘以寄位相乘寄左列古步八尺、自乘進四位與寄左相消得開方式、平方開之得六尺六寸一分四厘有奇、依里數則今步得六尺六寸零零五毫四絲四忽餘、即六尺六寸、又一十八萬一千八百分寸之九百八十九算法列百二十一里、通步內子六十步得三万六千三百六十步、寄位布

天元一為今步、以寄位乘之、內子四尺二寸二分寄左、列古步八尺、三万之、與寄左相消得商除式、九歸法除之、得六尺六寸微強、依件數者當云、今以周尺六尺六寸微強為步、王制文不可信、張介賓引鄭世子語、以王制今以周尺周字為夏字、豈非誤乎、何者周尺八尺與夏尺六尺四寸其長無有差、若然何以下曰古今比算乎

○里法　朱世傑算學啓蒙曰、里法三百步為里者、當以六尺為步、若三百六十步為里者、當以五尺為步也

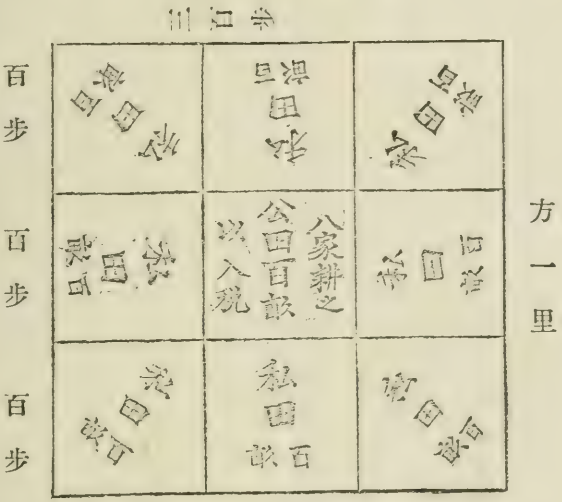
明以五尺為一步、三百六十步為一里、計一千八百尺、以銅尺算之依舊尺一千八百四十三尺二寸、曲尺一千八百一十四尺一寸有奇、以本邦町法三百九十尺約之、得四町、不盡以步法六尺五寸收之、得三十九步有奇、然明一里當本邦四町三十九間余、和俗以六町為異邦一里誤也、十里當本邦一里十町三十一間余、百里當本邦十二里三十三町十間餘、茅元儀武備志、載本邦之事、註曰、名二十里有百里、璋按此謂其大約、不必致詳也千里當本邦百二十九里七町四十三間余、本邦以曲尺六尺五寸為一間、六間為一段頭、六十間為一町、計三百九十尺、三十六町為一里、古以四十八町為一里、或曰勢州路程至今依此、又關東以六町為一里計一萬四千零四十尺、依銅尺一萬三千九百三十尺、又十六分尺之五、以算法推求之、本邦一里當明七里二百六十六步余、十里當明七十七里一百四十步余、百里當明七百七十三里三百二十六步余、千里當明七千七百三十九里二十二步余

○田畝法　世傑曰、畝法濶一步、長二百四十步、當以方五尺為步也

趙氏曰、古者六尺為步、百步為畝、今以二百四十步為畝、古百畝當今之四十一畝三分畝之二、依此

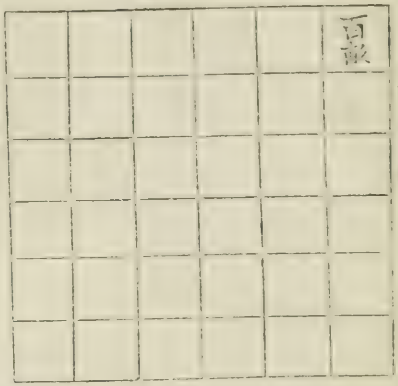
古與今於一步無異、孟子曰、方里而井、井九百畝、此三百步爲里、一夫所受百畝之田、當本邦今三町七畝三步余、一箇井田當本邦二十七町六段四畝三步余、依明里法所算也 四井爲邑、邑方二里、四邑爲丘、丘方四里四丘爲甸、時正切音盛又作成 旁加一里、則方十里、四甸爲縣、縣方二十里、四縣爲都、都方四十里、四都爲一同、旁加十里、則方百里

井田之法圖



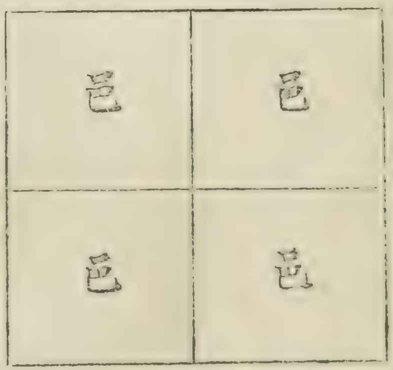
四井爲邑圖

六百步



四邑爲丘圖

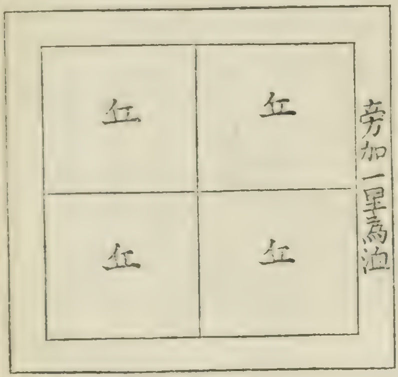
一千二百步



四丘爲甸圖

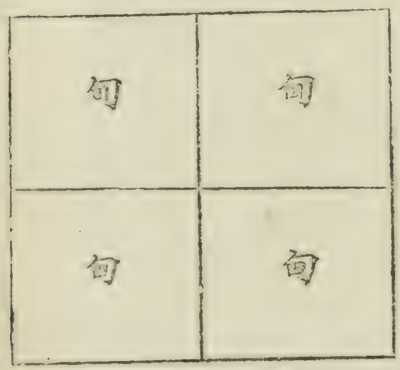
甸又作成

三千步

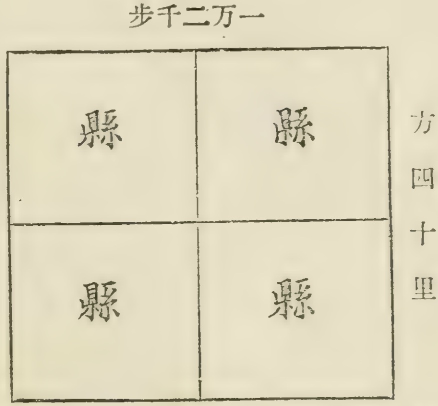


四甸爲縣圖

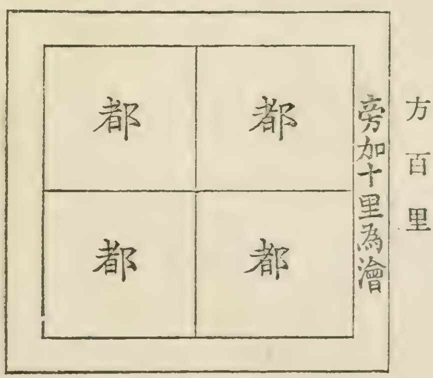
六千步



四縣爲都圖



四都爲同圖



○夏時一夫受田五十畝、而每夫計其五畝之入以爲貢、今算十分之一也、○商時始爲井田之制、以六百三十畝之地、畫爲九區、每區七十畝、中爲公田、其外八家各受一區、而助耕公田、今算九分之一也、○周時一夫受田百畝、亦中爲公田、公田百畝之中、以二十畝爲廬舍、每家二畝半、今算四十一分之四也

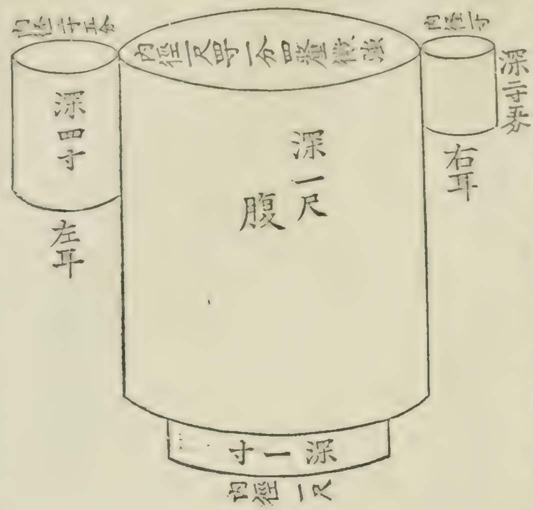
本邦以方六尺三寸（以曲尺算之）爲一步、三十步爲一畝、十畝爲一段、（計三百步）十段爲一町、（計三千步）古者以方六尺爲一步、七步二分爲一代、五代爲一畝、（計三十六步）十畝爲一段、（計三百六十步）十段爲一町、（計三千六百步）璋按

古有代名、今無此名、當以六歩爲一代、○稱十代者二畝也、五十代者一段也、五百代者一町也

○尺度起率　五度者分寸尺丈引也

度起於忽、十忽爲絲、十絲爲毫、十毫爲釐、十釐爲分、十分爲寸、十寸爲尺○十尺爲丈、十丈爲引

嘉量圖



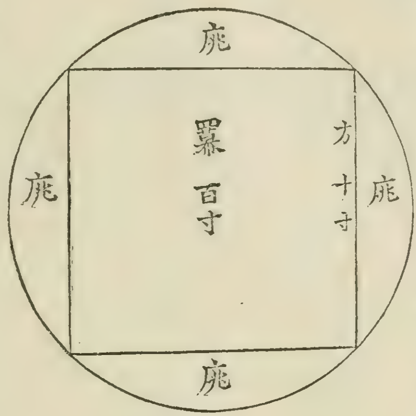
△量解

○黄鍾生量

量本起於黄鍾、一龠所容秬黍一千二百粒之多、是爲半合、周禮曰、㮚氏爲量、深尺内方尺而圜其外、其實一鬴、或作釜八斗也、爲二十斗或六斗四升者俱非也　其制以銅、形圓、下有圈足、曰臀、上有兩耳、量腹内徑一尺四寸一分四厘微强、高深一尺、容二十豆、是爲一鬴、臀内徑一尺、高深一寸、容四升、是爲一豆、左耳内徑二寸五分、高深四寸、容二十龠、是爲一升、右耳内徑一寸、高深二寸五分、容兩龠一合、造用夏尺

○嘉量實積算法

置腹內徑一尺四寸一分四釐微强、自乘之得二百寸、以深一尺乘之得二千寸、又依密率一十一、乘之一十四、除之得一千五百七十一寸、又七分寸之三、是爲黍量八斗實積、（臀及耳算法倣此）臀積七十八寸、又七分寸之四、是爲四升實積、左耳積一十九寸、又一十四分寸之九、是爲一升實積、右耳積一寸、又二十八分寸之二十七、是爲一合實積、右腹臀耳實積與前黃鐘實積相應、○舊說以爲方十寸、則冪百寸四庣旁六十二寸、共一百六十二寸、今比冲之率、其數大過、當徑冪一百分之八十一



以夏尺積直求銅尺積、置古以二億四千四百一十四萬零六百二十五乘之、以四億五千二百九十八萬四千八百三十二除之（夏尺七尺六寸八分、與銅尺六尺二寸五分適等、各再自乘爲乘除法、）得之再爲實、滿鐵斛法二百九十四寸而一爲一斗、不滿、退約爲升合、○腹容二斗八升八合零七撮微强、臀容一升四合四勺微强、左耳容三合六勺微强、右耳容三勺六撮微强、○以夏尺積直求本邦曲尺積、置古以二億四千四百一十四萬零六百二十五乘之、以四億四千二百四十五萬零七百二十八除之、（夏尺七尺六寸二分、與曲尺六尺二寸五分適等、各再自乘爲乘除法、）得之再爲實、滿本邦斗法六百四十五寸半、（用六四八二七者誤、至下可說）而一爲一斗、不滿、退約爲升合、○腹容一斗三升四合三勺三撮微强、臀容六合七勺一撮半强、左耳容一合六勺七撮大强、右耳容一勺

六撮大强

○新制黍量一升（用曲尺）而算之

口内方二寸五分（底亦同）深一寸七分三釐四毫二絲微强、積一十寸八分三釐八毫大强、容水棱其重八十二錢許、京升一合六勺七撮大强（京升一升容水秤之有四百九十錢、雖然隨地輕重不同、如劉伯芻謂當水之宜茶者有七等、韋秀卿論水次第有二十種、皆以有清濁輕重也）

强

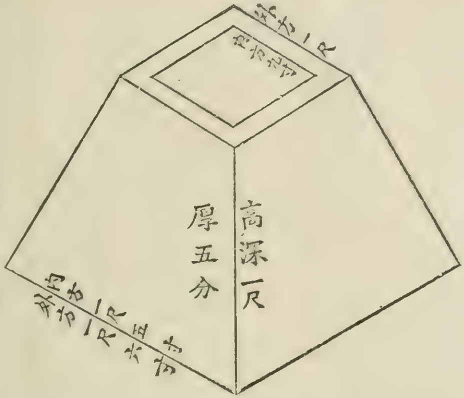
○斛斗起率

六黍爲圭、（舊云六十四黍、十四之二字衍文今削之）四圭爲撮、（廿四黍也）十撮爲勺、（二百四十黍也）十勺爲合、（二千四百黍也）十合爲升、十升爲斗、（俗作㪷）十斗爲斛、（又作石、或作碩、鄭世子曰、按古人未嘗以五斗爲斛、五斗爲斛蓋自唐宋始也）○張介賓曰、六十黍爲圭、四圭爲撮、（三指撮之云撮）（二百四十黍也）十撮爲合、璋按三指之所撮、當有粳粟、本邦之黍甚細小、猶不能撮二百四十粒、況於羊頭山秬黍乎、此蓋爲使一合所容二千四百黍、强脫勺之名、又孫氏及世傑算法曰、以六粟爲圭、十圭爲抄、十抄爲撮、十撮爲勺、十勺爲合矣、若然則一合有六萬粟、誠流俗之鄙談也、不可用、梁陶隱居曰、九散云刀圭者、十分方寸匕（方寸匕者正方一寸、抄散不落爲度、當三撮半）之一、準如梧桐子大也、四圭爲一撮、（梧桐子大四丸）十撮爲一勺、（四十丸）十勺爲一合、（四百丸）十合爲一升、（四千丸）時珍曰、梧桐子大如胡椒、璋造黍量之升、容糊調之藥而試之、毎一升分四千丸、恰如梧桐子大、密合陶氏說、足以解惑

○量數不同（五量者龠合升斗斛也）四豆爲區（烏侯切、四升曰豆、區一斗六升、○區或作鏂）五區爲釜（八斗也）二釜爲庾（一斛六斗也、○庾或作斞、又曰籔、蘇后切）五庾爲鍾（八斛）二鍾爲秉（一十六斛也）○又朱子曰、釜六斗四升也、又左傳曰、十釜爲鍾、鍾六斛四斗也、○小爾雅曰、匊二升、二匊爲豆、豆四升、四豆爲區（一斗六升）四區爲釜（六斗四升）二釜有半爲庾（一斛六斗也）二籔有半爲缶（四斛也）二缶爲鍾、註八斛也、○陳氏三量、（與漢制頗同）五豆爲區、（二斗也、比舊多四升）五區爲釜、（一斛也、比舊多二斗）十釜爲鍾、（一十斛也、比舊多二斛）

○明朝鐵斛

鐵斛圖



平秤百斤、計鐵積三百三十六吋、毎吋重四兩七錢六分條

鐵斛法依量地銅尺、口内方九寸、底内方一尺五寸、高深一尺、○算法置口九寸、自乘得八十一寸、置底一尺五寸、自乘得二百二十五寸、又口底相乘得一百三十五寸、三數相併得四百四十一寸、以深一尺乘之、三約得一千四百七十寸、是爲鐵斛五斗實積、倍之得二千九百四十寸、是爲一斛實積、○以銅尺積直求曲尺積、置古以二百零九萬七千一百五十二乘之、以二百零四萬八千三百八十三除之、（銅尺一尺二寸七分與曲尺一尺二寸八分適等、各再自乘、爲乘除法）得之再爲實、以本邦升法約之得升數、○鐵斛五斗、當京升二斗三升三合一勺六撮微强、

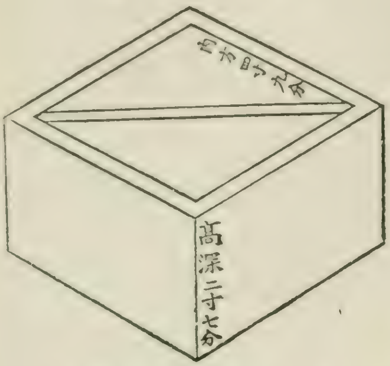
○新制鐵斛一升用曲尺而算之

口內方三寸七分底亦同　深二寸二分微弱、積三十寸零一分微弱、容水校其重二百二十八錢許、當京升四合六勺六撮半弱

○本邦京升造以曲尺

口內方四寸九分、底亦同、下倣此　深二寸七分、於口內斜有鐵弦、○實積算法、置口四寸九分自乘得二十四寸零一釐、以深二寸七分乘之、得六十四寸八分二釐七毫、庸俗升法直用之　內減鐵弦之積、凡三分弱　餘得六十四寸五分半、是爲京升一升實積、本邦以算術鳴世者不爲不多、皆作書述諸術、然至升法、未有減鐵弦之積者、此不委試之所致也、一升之所差也、雖至微積至一斛、則差幾五合許、不可不辨也

京升圖



弦上闊三分、下闊七釐、高二分、長七寸弱、鐵積二分半強

又有稱昔升者、口內方五寸、深二寸五分、實積六十二寸半、容京升九合六勺大強、○又有稱武者升者、口內方四寸六分半、深二寸三分八釐半強、容京升八合、無餘無欠、故又名八合升、○又有私升、村民多用此升、以京升四斗爲四斗七升、又名遣升、○千金方所載、藥升上徑一寸下徑六分、深八分、此升甚小、未知何代之制、疑是如

方寸匕之類、爲抄散之器乎、又明月湖全九集曰、開元通寶一百二十四錢、水一升之重也、口方三寸二分、深一寸八分、（積一十八寸四分三釐二毫、折半之不合下五合升積、）五合升口方二寸七分、深一寸四分、（積一十寸零二分零六毫、倍之不合上一升積、）今以一百二十四錢重造升、大凡得京升二合五勺强、本邦醫家多用此升、又世傑以二千五百寸爲斛法、而且謂此依唐時斛法、璋按唐時斛法造可依唐尺、今算一升、大凡得京升三合八勺大强、又武備志載本邦之事曰、每米一石常價一兩、中國斛可三石矣、是亦以大量謂之

△衡　解

○黃鐘生衡

衡本起於黃鐘、一龠所容秬黍一千二百粒之重、是爲半兩、二龠爲一兩、張介賓曰、考羊頭山秬黍以時制等子秤之、其中者百粒、得二分五釐、積至兩龠二千四百粒秤之、重六錢、可見今之六錢爲古一兩、○本邦所制之法馬、（所謂分銅也）又曰衡馬、俗呼十錢曰一兩、是知與明制金同、璋家幸有明所制之法馬數箇、各秤之每兩得九錢九分半强、微不滿十錢、其所以不滿者、蓋依人手之褻翫耳

○古今衡數不同

淮南子、十二粟爲一分、十二分爲一銖、則一銖者一百四十四粟也、○漢志、一千二百黍爲十二銖、則一銖者一百黍也、○後漢志註、十粟重一圭、十圭重一銖、則一銖者一百粟也、○張介賓曰、漢之一兩當今三

銖半強（本邦秤亦同）且曰、參差無度、此明猶不能詳、況於本邦乎、又王宇泰曰、今之三兩得漢唐十兩明矣、依此則每兩得三錢、梁陳依古秤（以今六錢為一兩）齊以古秤一斤八兩為一斤（以今九錢為一兩）後周玉秤四兩當古秤四兩半（以今六錢七分半為一兩）隋以古秤三斤為一斤（以今一十八錢為一兩）唐以開通元寶十錢為一兩、吳人以古秤二兩為一兩（以今一十二錢為一兩）

○斤秤起率（五權者銖兩斤鈞石也）

衡起於黍、十黍為累、（或作絫、力委切）十累為銖、六銖為分、或（曰錙、又八兩曰錙、今不用之）四分為兩、十六兩為斤、十斤為衡、三衡為鈞、四鈞為石、四石為鼓、○小爾雅曰、一兩半為捷、倍捷為舉、倍舉為鋝、鋝謂之鍰、（鍰六兩）○國語曰、二十四兩為溢、○事林廣記曰、三斤二兩為一裹、十五斤為一秤、

○古秤（神農秤也、梁陳皆依此、○註文者本邦秤數也、下倣此）

一銖（二分五釐）　一分（一錢五分）　一兩（六錢）　一斤（九十六錢）

○齊秤

一銖（三分七釐五毫）　一分（二錢二分五釐）　一兩（九錢）　一斤（一百四十四錢）

○後周玉秤

一銖（二分八釐一毫二絲五忽）　一分（一錢六分八釐七毫五絲）　一兩（六錢七分五釐）　一斤（一百零八錢）

○隋秤

一銖 七分五厘　一分 四錢五分　一兩 一十八錢　一斤 二百八十八錢

○唐秤

唐孫眞人千金方曰、古秤惟有銖兩而無分名、今則以十（十當作百、傳寫之誤）黍爲一銖、六銖爲一分、四分爲一兩、十六兩爲一斤也、此與古秤無異、大學衍義補二十六卷曰、唐高祖武德四年、廢五銖錢、鑄開通元寶錢、毎十錢重一兩、計一千重六斤四兩、得輕重大小之中、（璋）按此俗所謂開元錢也、以本邦等子秤之、輕重不均、其至輕者八分許、其至重者一錢一分許、孰取孰捨、本邦寛永年中、鑄寛永通寶錢、毎一箇重一錢、故民俗稱一錢重、謂一文目、雖然猶有輕重大小不均、其至輕者八分許、其至重者一錢二分、則與開元錢頗同、不必皆中法度、故唐秤與本邦秤不可有差、醫學辨害秤開元錢、以倭八錢爲唐宋一兩、蓋誤耳

○呉秤

一銖 五分　一分 三錢　一兩 一十二錢　一斤 一百九十二錢

○宋秤 廣秤也明同之

一字 二分五釐　一銖 四分一釐六毫半强　一分 二錢五分　一兩 十錢　一斤 一百六十錢

○晉秤 半秤也、蘇恭曰、後漢以來分一斤爲二斤、一兩爲二兩、張仲景用之

一字 (一分二釐五毫)　一銖 (二分零八毫半弱)　一分 (一錢二分五厘)　一兩 (五錢)　一斤 (八十錢)

○本邦斤兩不同

本邦唐俗稱斤兩者多矣、一兩或四錢、(商支那產物用之) 或四錢三分、(白銀) 或四錢七分六釐有奇、(以一百錢爲金二十一兩) 或五錢 (本邦產物) 一斤或六十錢、(山椒) 或一百錢、(紅花) 或一百三十錢、(五倍子) 或一百六十錢、(支那產物) 或一百八十錢、(地黃當歸之類) 或二百錢、(宇治之茶) 或二百一十錢、(沈香) 或二百三十錢、(本邦產物) 或二百五十錢、(鉛錫之類) 或二百六十錢、(煎茗) 或三百錢、(棉花帶核者)

○白銀一十兩名一枚、(四十三錢也) 黃金一十兩亦名一枚、(四十四錢也、當有四十七錢六分有奇、其所以不足者後日可考) 黃金一錢一分九厘名一分、(唐俗作歩者誤、蓋爲別十分爲一錢之分強改書乎、即倣四分爲一兩之法) 錢九十六文名百文、十百文名一貫文、(九百六十文○又十文名一匹、百文名二十匹、一貫文名百匹、千匹万匹以往以遞而增) 布帛三丈四尺爲一端、倍端爲一匹、(以曲尺算之)

○本邦合藥之分兩

一字一分　一銖 (俗省作朱、二分五厘) 一分 (有大分小分之異、大分之分者一錢也、小分之分者十分一錢之一也、故大分之分無過三分者、小分之分一分以至九分、大分之分俗書武)

一兩 (四錢) 一斤 (一百六十錢、雖然無以一決之、)

凡方書有稱一觔者、字彙曰、此字無所考、今俗多作斤字矣、疑是斤字乎、全九集曰、諸方云某草一束、以重三兩爲正、云一把、重二兩爲正、每兩今十錢也

○藥一貼水一盞

虞天民曰、凡古方分兩重數太多難憑修合、今悉改爲小劑、且如一料十貼之數、原方用藥一兩一貼止該一錢、從其輕重以十取一矣、今考正傳方一劑、大者不止五六兩、小者不過四五錢、方後皆曰水一盞或二盞、退按如謂其藥一錢其藥二錢、蓋唯爲使某藥倍某藥、而非謂必用一錢二錢、故和劑局方凡例曰、是書原宋之御局、惠民者故銖兩太多、若今修合不必執泥、或十分之一、或百分之十、十當作一、皆可矣、又如回春、或唯曰各等分而不說銖兩、其方後曰右挫一劑生薑幾片棗幾枚、因傳寫之誤此思焉、一貼重別有定法、未見書之可徵者、天民又曰、凡云用水一盞、卽今之白茶盞也、約計半斤之數矣、依此則一盞水重本邦八十錢也、全九集曰、凡方書謂一大盞者準一升、一中盞者準五合、一小盞者準三合矣、是與新制黍葉升所容水重頗同、醫學辨害以爲六十四錢、曰用倭秤八十錢、而爲一盞誤也、郤非是、蓋因以開元錢重齊爲八分之弊、明秤與本邦秤全同、無毫釐之差、如上說、今見本邦醫家貼數、總秤七八分以至一錢七八分、每貼入水一盞半、煎至一盞、查再入水一盞、煎至半盞、此既爲民俗通用之法、且無論盞大小、任意用之、事治療者不可不辨、以一錢重爲一貼者曰、是從天民所謂一貼止該一錢之言矣、拙哉此言、此非謂一貼總秤用一錢重、原方有用二兩者、一貼止用二錢、有用三兩者、一貼止用三錢之謂也、故曰、從其輕重、以十取一

○生薑一片

聶尚恒奇效醫述、四時感寒發散方後曰、生薑三片爲引、約重二錢矣、總秤其藥品十三種、得八錢一分、是加生薑大凡居總藥四分之一、此是發表之劑也、依此思焉、若以一錢爲一貼重、當加二分半者乎、姑記備遺忘

○金銀箔

金銀箔百片者一錢重也、今本邦金箔方三寸四分、毎百斤重大率三分五釐、以此當方書百片、當用二百八十五六片、銀箔方四寸、毎百片重大率四分、以此當方書百片、當用二百五十片、此依天和年中來于本邦朝鮮醫人言記之

元祿五年歲次壬申冬十月十七日

維陽五條橋陌書林梅村彌白藏

律原發揮 終

律尺考驗

幷三器攷略

中村惕齋著

律尺考驗上

惕齋中村欽著

余嘗テ古尺ヲ考ヘ定メケルニ、其證驗トスル所ノ者アマタアリ、一ニハ漢ノ古錢、二ハ唐開元錢、三ニハ頖宮禮樂疏ノ尺式、四ニハ朝鮮五禮儀ノ尺式、五ニハ明ノ朱之瑜ガ尺、此五種ハ華韓ヨリ渡リキテ、今ノ世ニアルモノナリ、六ニハ御府ノ竹周尺、七ニハ尚衣局ノ裁尺、八ニハ上宮太子ノ古尺、九ニハ生駒寺律衣ノ尺、十ニハ通行ノ工匠尺、此ノ五種ハ本朝傳來ノ古物ナリ、其從來ヲ尋ルニ、亦皆中華ヨリ流布シタル者ト見エタリ、今一々ニ其説ヲ記ス、中ニ古尺ト云ハ今考ヘ出シタル周尺ナリ、大尺ト云ハ、古尺ニテ考ヘ求メタルニ、唐ノ大尺ナリ、匠尺ト云ハ即今ノ曲尺ナリ

○漢古錢　古錢ニ半兩ト云ハ、宋ノ董逌ガ錢譜ニ云ク、古文錢半兩、漢志曰、秦始皇鑄、質如周錢、重如文、其文曰半兩、漢呂后鑄、重八銖、文帝鑄、重四銖、應劭曰、今民間、半兩中最小輕者、是四銖錢也、」今見存ノ半兩錢ハ、內外輪廓ナシ、其文隷書ニテ、右ニ半、左ニ兩アリ、重サ今ノ唐秤ニテ七分五厘ニヨハシ、其徑リ大尺ニテ七分七厘餘アリ、凡漢錢四銖五銖ノ重サ、並ニ漢志ニ所謂黃金方寸而重一斤ノ積リニテ考ヘ見ルニ、大約古ノ一兩ハ唐秤ノ四錢半ニ當ル、古尺ハ歷代諸方ノ尺ヲ以テ合セ考ルニ、唐ノ大尺七寸八分三厘二毫强ニアタルナリ、然レバ此ノ半兩錢ハ、文帝ノ鑄サセラレタ

ル四銖錢ト見エタリ、四銖ハ一兩ノ六分ナレバ、即今ノ七分五厘ナリ、其徑リ七分七厘餘ハ古尺一寸ノ七分八厘餘ナルガ、少シチビタルナラン、半兩錢ノ大小古志ニハシルサヾレ𪜈、凡漢以來通行ノ錢、大概其徑リ古尺一寸ヲ法トス、又其重サモ法ニ合タル故ニ、是モ古尺ノ一證トスルナリ○大泉ト云錢ハ、漢書ノ食貨志ニ云ク、「王莽居㆑攝、變㆓漢制㆒更造㆓大錢㆒、徑寸二分、重十二銖、文曰大泉五十、」此錢彼方ニハ明ノ世マデモ法ニ合タルアリテ、古尺ノ左驗トス、今此方ニアル大泉ハ皆小樣ナリ、其中ノ大ナルモ、徑リ大尺ノ八分二三厘ニスギズ、其文ハ古文ニテ、上ニ大下ニ泉、右ニ五、左ニ十、又五ヲ左、十ヲ右ニシテ、左ヨリ右ヘヨミカヘサセタルモノアリ、錢譜ヲ按ズルニ、大泉ニモ折ニ小鑄ナドノ品アリ、今ノ小樣ハ此類ナルベシ、凡ソ後世ノ錢、唐ノ開元錢出來テヨリ、大小ノ中制ヲ得タリトテ、皆コレヲ法則トス、ソレヨリ大ナル、古錢ハツナグニ妨アル故ニオノヅカラスタレ、開元ト同ジホド、又ソレヨリモ小ナルハ、一ツニツナギ合サレテ此方ヘモ來レルト見エタリ、大泉ノ小ナルハ古尺ノ證ニトル所ナケレ𪜈、漢錢ノ殘リタル者ナレバ是モ記スナリ、又王莽ガ時ニ、錯刀貨布ト云銅幣アリ、彼方ニハ今モアリテ尺兩ノ證トスレ𪜈、此方ニハ見エヌナリ○貨泉ハ漢志ニ曰ク、「王莽天鳳元年、作㆓貨泉㆒、徑一寸、重五銖、文右曰貨、左曰泉、」此錢ハ今モ多シ、其本數ニヨリテ考レバ、徑リ大尺ノ七分八厘强、重サ唐秤ノ九分四厘弱ナルベシ、然ルニ今アル貨泉文ハ、古文ニテ志ニシルセルガ如シ、ソノ大ナルモ徑リ七分八厘ニ及バス、重サ八分五厘ニ過ギス、コレハ年代久シクナリテ、輪廓モ

スレチビ、マタ人ニスリトラレテ、秤目モヘリウセタルナリ、サレドモ、ソノ徑リ古尺一寸ノ徵驗ト云ヘルニ足レリ、マタ貨泉ノ中ニ、徑リ八分餘、重サ一錢二分アルアリ、是レハ制作本別ナルベシ、コレイヅレノ世ニ造リタリトモシレズ〔〕マタ北朝齊ノ常平五銖、周ノ五行大布ナド云フ錢モ今アリ、コレハ曹魏ノ五銖錢ノ法ツタハリテ、ソノ大サ、時尺ノ一寸ニ作リタルト見エタリ、魏ノ尺ハ、古尺ニ四分半長クシテ、大尺ノ八分二厘强ニアタル、ソレ故ニ、今此等ノ錢、ミナ大尺ノ八分ニ少シツヨキナリ、是レモ古尺ノ一證トスベキナリ、五銖錢ハ古來ノ制一樣ナラズシテ、品多キ故ニ、徵トシガタキナリ

○唐開元錢　杜氏通典ニ云ク、「大唐武德四年、廢二五銖錢一、鑄二開通元寶錢一、每二十錢一重一兩、計一千重六斤四兩、輕重大小最折衷、遠近便レ之、」又唐會要ニ云ク「唐高祖武德四年、行二開元通寶錢一、徑八分、」此錢ヲ開元ト云ハ年號ニ非ズ、錢ノ銘也、其文歐陽詢ガ作リテ書タリ、回旋ニモ縱横ニモヨマル丶ヤウニシタルニヨリテ、開通元寶トモ、開元通寶トモ云ナリ、其徑リ八分ト云コト、歐陽公ノ唐書、董氏ガ錢譜ニモ皆如レ此、明ノ鄭世子ガ律呂精義ニモ、是ヲ唐尺八分ノ證ニトレリ、今精ク考ヘ見レバ然ラザルナリ、是モ其カミノ古尺ノ一寸ヲ法トシテ造リタレバ、大尺ノ八分三分分之一ニアタレリ、會要唐書等ハ、タヾ其大數ヲ記スノミナリ、何トテカクハ知ゾトナレバ、凡銅錢ノ大小、漢ヨリ以後モ皆古尺ノ一寸ヲ用ヒタリ、宋ノ太宗ノ御書ノ淳化錢ヲ、宋志ニハ其徑リ一寸トアリ、然レモ今其大サヲ開元錢

ニクラブレバ同ヿナリ、是宋ニテ景表尺ノ一寸ヲ用ヒタルアリ、景表尺ハ即唐ノ小尺ニテ、唐宋皆古尺ニ用タル者ナリ、唐ノ大尺ハ小尺ノ一尺二寸ナレバ、小尺ハ大尺ノ八寸三分寸之一ナリ、然レバ唐ノ八分三分々之一ハ、即宋ノ古尺ノ一寸ニアタル、其説コトナリトイヘ𪜈、其度ハ同ジヿナリ、又宋ノ醫陳言ガ三因方論ニ云ク、「唐武德年、鑄ニ開元錢一八分、當ニ十二錢半一得ニ一尺、排レ錢比レ之、十一箇、已及ニ一尺一、又不レ知ニ唐用ニ何尺一」コレモ開元錢ヲ、徑リ八分トキ、フレタル故ニ如レ此イヘリ、是宋ノ南朝浙西ヲ都トシタル時ナレバ、其地ニテ用ヒ行ハル、浙尺ニクラベテイヘルナリ、浙尺ハ大尺ノ九寸四分弱ニアタル、開元十一錢ニテ其一尺ニ二分餘アマルニヨリテ、已ニ一尺ニ及トイヘリ、其徑リ八分ト云時ハ、十二錢半ニテコソ、一尺ニハ合フベキナレ、唐朝ニテハ何レノ尺ノ八分ヲ用ヒテ、此錢ヲ鑄タルゾト却テ疑ヘルナリ、又其論中ニ樂尺ノ度ヲモ載タリ、今考ミレバ即景表尺也、宋ノ樂律、コレニテ作リケル故ニ是ヲ樂尺ト云、其樂尺ニテクラブレバ、開元十錢ニテ的ト合フヲバ、コレハ知ラヌナリ、又律呂精義ニハ、其律大尺ノ八寸四分半强ニアタリタルヲ、開元錢十枚ニアテタリ、其少シ大ナルヲ以テクラベタラバ、ソレホドニモ及ベキゾ、皆是開元錢徑リ八分餘アル證據ナリ、今ノ世ニ開元錢尤多シ、其形正クシテ物ニスレザルヲ以テ驗レバ、皆其徑リ大尺ノ八分三厘餘ニシテ、其重サモ唐秤ノ一錢ニ合フ、是分明ノ證跡ナリ、今俗ニ一錢ヲ一文目ト云、千錢ヲ一貫目ト云モ、皆此ノ重サヨリ云ヿナリ

○頖宮禮樂疏尺式　明ノ李之藻ガ頖宮禮樂疏ニ云ク、「鄭世子、以ニ今營造尺、累寶鈔尺之外單邊、而又以ニ古錢及累黍、相與考較、以爲ニ工部營造尺、去二寸、當ニ大泉九枚、當ニ開元錢十枚、當ニ縦黍八十一、當ニ廣黍百、爲眞黄鐘、」頖宮トハ諸侯ノ學宮也、禮樂疏ハ是學宮ニテ聖賢ヲ祭ル釋奠ノ禮樂ヲ記タル書也、鄭世子ガ説ハ律呂精義ニ在、明朝ニ用ル營造曲尺ハ、即宋ノ布帛尺也、寶鈔トハ明ノ初ニ用ヒ行ヘル錢札也、其長サ浙尺ノ一尺二寸ニシテ造レリ、此寶鈔ノ長サニテ造レル尺ヲ寶鈔尺ト云、明ニテハ是ヲ正尺トスル故ニ、コレヲ以テ更ニ營造尺ノ度ヲ點檢ス、工部ハ工匠ノ官府也、此營造尺ハ浙尺ヲ八分益一シタル者ナル故ニ、鈔尺ノ九寸三分七厘五毫ヲ以、營造尺ヲ定ル也、其二寸ヲ捨ル時ハ八寸也、營造尺ハ古尺ノ一尺三寸五分ナレバ其八分ハ一尺八分ナリ、大泉ノ徑古尺ノ一寸二分ナレバ、九枚ナラベテ即是ニ適當ス、開元錢十枚ハ、古尺ノ一尺六分四厘ナレバ一分六厘タラズ、是ハ大數ナリ、縦黍横黍ノツモリハ、古法トチガヒタレバ信ジガタシ、布帛尺ノヿ宋ノ程沙隨ノ三器圖義、蔡西山ノ律呂新書ニ、皆古尺ノ一尺三寸五分ニ比ス、即浙尺ノ八分益一也、禮樂疏ノ説如此ニシテ、其左ニ尺ノ圖ヲ載タリ、刻鏤嚴整ニシテ信從スベシ、今御府尺ニテ求タル古尺ニテハカレバ、一尺八分ニシテ二三厘弱シ、尚衣尺ニテ求タル古尺ニテ度レバ則適當ス、是亦明證ナリ、宋ノ布帛尺ヲ、明ニテ營造尺ニ用タルヿモ、亦是ニテ信スベシ、然レ𪜈明人ハ是ヲ知ラズシテ、是ヲ唐尺ナリト思ヒ、或ハ成湯ノ尺ナリトイヒ、魯般ガ尺ナリト云也

○朝鮮五禮儀尺式　明ノ成化中ニ、朝鮮國王儒臣申叔舟等ニ命ジテ、五禮儀ヲ作ラシム、其序例ニ尺式四條ヲ刻ム、一ニハ周尺、二ニハ營造尺、三ニハ造禮器尺、四ニハ布帛尺、左ニ其長短ノ序ヲ一々ニ記ス、其制皆中華ノ尺ニ異リ、殊ニ刻鏤精密ナラザレドモ、其度數ニヨリテ由來ハ皆推サルヽナリ、四種ノ外黃鐘尺ニ圖ナシ、サレドモ左ノ説ニ依テ其度ハカクレナシ、大槩皆明ノ鈔尺ヨリ出タルト見エタリ、今其説ニ依テ校レバ、營造尺ハ宋ノ大晟樂尺也、造禮器尺ハ即浙尺ナリ、布帛尺ハ其營造尺ノ一尺五分ニシテ、鈔尺ノ一尺三寸五分ニ比ス、猶宋朝ニ古尺ノ一尺三寸五分ニシテ布帛尺トスルニ似タリ、此諸尺今尙衣尺ニテ求タル古尺ニテ度リミレバ、布帛尺ノ式其ノ本度ニ適當ス、是亦明據トスルニ足レリ、其他ノ尺ハ三四厘ヅツ短カシ、又其圖ニ就テ彼此參校スルニモ相應セザル所アリ、是ソノ刻鏤精シカラザルガ故也、又近キ比朝鮮ノ銅周尺ヲ得タリ、禮樂疏ニ定メタル律尺ノ八寸ニ適合ス、是モ徵トスベキ者ナリ、然レドモ五禮儀ノ周尺ニ異リ、又其出處モ未審ナレバ、シバラク疑ヲ存スルナリ

○明朱之瑜尺　先年明ノ遺俗、浙江道紹興府餘姚縣ノ人、朱之瑜字ハ魯璵、舜水ト號スル儒者、此邦へ渡テ江府ニ居レリ、余其知ル所ノ人ニツケテ、鈔尺ノ度幷ニ彼國ニ通行ノ尺ヲ求ム、之瑜長短兩尺ヲ摹シテ其人ニ授ケ、コレニ告ゲテ云ク、長キヲ官尺ト云、衣服ヲ裁縫スルニ用フ、鈔尺モコレニ近シ、短キヲ鄕尺ト云、宅ヲタテ器ヲ造ルニ用フト、尺來テ是ヲ檢スレバ、短カキハ長キガ八寸、長キハ短キガ一尺二寸五分ナリ、其鄕尺ト云ハ卽浙尺ナリ、官尺ト云ハ、浙尺ヲ其八分ニトリテ造リタル者ナリ、

猶此方ノ俗、大尺ノ一尺二寸五分ヲ以テ呉服尺トスルニ似タリ、此尺他ノ書ニイマダコレヲ見ズ、鈔尺ハ其九寸六分ニ當リタル故ニ、コレニ近シト云ケル歟、凡ソ明朝ノ通尺三種アリ、寶鈔尺ハ裁縫ニ用フ、量地尺ハ檢地ニ用フ、營造尺ハ工作ニ用フ、浙ノ人官尺ヲ裁縫ニ用ルハチカシ、鄉尺ハ營造尺三寸五分短キヲ工作ニ用ルヿ、コレ彼一方ノ風俗ニ用ヒ來レル浙尺ナレバナルベシ、今考定ノ古尺ニテ其尺ニ比校スレバ、皆其本度一尺ノ九寸九分强ニ及デ少ヅツ短キ、是本尺ニ古今ノ差アル歟、又ソノ摹シヤウノ誤歟、未審ナリ、是ハ皆浙尺ノ沙汰ナレ圧、古尺ノ旁照トナルベキ故ニ、コレヲモ一證ニトレリ

○御府竹周尺　隋書ノ律歷志ニ云ク、梁表尺、實比二晉前尺一一尺二分一厘一毫有奇一、蕭吉云、出二司馬法一梁朝刻二其度於影表一以測レ影、」此尺ハ古ノ司馬法ヨリ出デタルヲ南朝梁ノ時ニ、日景ヲハカル表臬ノ下ニ刻ミタル尺度ナル故ニ、梁表尺ト云、晉ノ前尺トハ晉ノ荀勗漢ノ古物ヲ考テ作タル律尺ナリ、是ヲ周尺ト云、今余ガ考定ノ古尺即是ナリ、是ヲ晉ノ前尺ト云ヿ、其後東晉ノ世ニ用タル尺コレト同ジカラヌ故、後人荀勗ガ尺ヲバ晉ノ前尺ト稱シ、東晉ノ尺ヲバ晉ノ後尺ト稱ス、隋志ニ古尺ノ品々ヲ載テ、皆晉ノ前尺ヲ以テ、其長短ヲシルス、蕭吉ハ隋朝ノ人ナリ、杜氏通典ニ云ク、「周文王在二岐建一司馬法、六尺爲レ歩、」按ズルニ司馬法トハ、古ヘ司馬ノ官ニカ子ツカサドル法ナリ、本ハ文王岐周ヲ治メ玉フ時ノ田畝ノ制法ニ出テ、其度後世ニツタハル、今ノ司馬法ノ書ハ、齊ノ景公ノ時司馬田穰苴周

ノ田制兵書ニ編ミイレテ作レルナリ、軍兵ヲ田賦ニカケテ出ス故ナルベシ、此尺ヲ司馬法ヨリ出タリト云ハ、古ノ歩法六尺度、此尺ニ合タリト云義ナラン、蕭吉ハ博學ノ人ナレバ、必ソノヨンドコロ有ベシ、又律呂精義ニ云ク、「梁陶弘景撰本草序錄、一用ニ累黍之法一、孫思邈從而用レ之、其書言レ尺、則用ニ夏家古尺一、而又參ニ諸司馬法ニ六尺爲レ歩、以互證レ之、孫氏云、夏家古尺、即江淮吳越所レ用八寸小尺是也、當ニ唐尺八寸一、」按ズルニ此尺モ即梁ノ表尺ナリ、孫思邈ハ唐朝ノ道人、其書トハ思邈ガ作クル千金方ヲサス、昔ヨリ江淮吳越ノ南地ニ夏後氏ヨリ傳ハルト云テ用ヒ來レル八寸ノ小尺アルト也、思邈司馬法六尺ノ歩ヲ以テ其尺ノ參證トスルモ、蓋又蕭吉ガ意ト同ジ、唐尺ノ八寸ニ當ルトハ精義ノ詞也、思邈唐人ナレバ其時尺ニ校ベテ云フト也、唐尺トハ唐ノ大尺也、今唐ノ大尺ヲ以テ梁ノ表尺ヲ度レバ、八寸ノ外ニ六毫餘餘レリ、正シク八寸ニ當ルハ即淮尺也、コレ從來轉模ノ差アルヲバ、唐人時尺ノ八寸ヲ以テ定メタルナルベシ、又宋ノ陳言ガ方論ニ云ク、淮尺長一尺二寸、是ハ其時ノ小尺ニ校テイヘリ、此小尺ハ吳尺也、唐ノ小尺ノ八寸ニ當ル、唐ノ大尺ハ小尺ノ一尺二寸ナル故ニ、其八寸ヲ吳尺ニテ度レバ亦一尺二寸也、然レバ此淮尺ト云モ、即思邈ガイヘル江淮吳越ノ八寸ノ小尺ニシテ亦即梁ノ表尺ニ出タリ、此後五代ノ周ノ王朴ガ作レル律尺モ、亦偶然ト淮尺ニ合タリ、爰ニ今御府ノ竹周尺ト云ハ往歲余是ヲ小倉藤亞相實起卿ニ聞ケリ、古來禁裏ノ御文庫ニ竹ノ周尺有、弘法大師入唐ノ時、彼方ヨリ帶テ皈リタル尺ト云傳ヘタリ、竹ニテ作リウラニ周尺ト刻リ、形色ハナハダ舊ビテ、マコトニ千

載ノモノト見ユ、一トセ勅ヲウケテ文庫ノ書ヲ晒シケル時ニ、コレヲ見テ則謹デクハシク摹シトメタリ、其後寛文元年、内裡燒タル時ニ、モトノ尺ハウセタリト、余ハソノ摹尺ヲ亞相ニ請ヒウツシトリテ、漢唐ノ錢ヲ以テハカリ見ルニ、此尺即唐ノ淮尺ニ合タリ、則此尺ヲ一尺二分一厘四毫餘ニワリテ其一尺ヲ以テ古周尺ト定ム、又隋書ニ「後周鐵尺、比晉前尺一尺六分四厘」トアリ、唐ノ小尺即此尺ト同キ故ニ、考定ノ古尺ノ一尺六分四厘ヲ以テ唐小尺ヲ定メ、小尺ノ一尺二寸ヲ以テ唐ノ大尺ヲ定ム、大尺ハ古尺ノ一尺二寸七分六厘八毫ニ比シ、古尺ハ大尺ノ七寸八分三厘二毫ニ比ス、又此ノ古尺大尺ヲ以テ何レノ證跡ニ比ベテモ、皆アハズト云事ナシ、然レバ此尺ノ梁ノ表尺ニ出テ、唐ノ淮尺タルコ其疑ナキ者歟、是ヲ周尺ト云ツタヘタルハ、凡ソ古代ノ尺ヲ佛氏ハ皆周尺ト稱スルガ故ナリ、又今玉斗ノ積分ヲ以テ黃鐘ヲ造リ、黃鐘ヲ九寸ニシテ一尺ヲ求レバ、淮尺ヨリ短キコト一厘ニモ足ラズ、コレ亦此尺ノ古制ニカナフ一證也、ツラ〳〵按ズルニ、凡ソ古尺ノ中土ニ行ハルル者、或ハ其體ヲカヘテ本ノ尺ニアラズ、或ハ亂世ニ亡デ其跡モノコラズ、只此尺バカリ南地ニ流行シテ本質ヲ改メズ、殊ニ唐ヨリ吾朝ニワタリテ、祕府ニノコリ、一タビ災ニアヒツレドモ、其度今ニ存セリ、誠ニ天地ノ間ニ、希代ノ重寶ナリ、モロコシニハ宋ノ後イカヾナリツル、コレヲ聞カズ

○尚衣局裁尺　尚衣局トハ、天子ノ御衣ヲツカサドル官府ナリ、此ノ尺ハ本朝禁裏ノ御衣ヲ調進スル高倉家ノ吳服尺ナリ、其長サ大尺ノ一尺二寸五分ニアタレリ、今俗間ノ吳服尺ハ、只匠尺ノ一尺二寸

ヲ用フ、勢州ノ俗ナヲ古法ヲウシナハズシテ、十二寸半ヲ用ヒ、海鰌ノ鰓骨ヲ以テ作ル、コレヲ俗ニハ鯨尺ト云、世ニ海鰌ヲ鯨トヨブガ故ナリ、高倉家ノ尺ハ、通例ノ鯨尺ヨリモ短シ、委ク考見レバ、唐ノ大尺ノ十二寸半ナリ、今此尺ノウラニ、十二寸半ヲ刻ミテ唐ノ大尺トシ、コレヲ以テ古尺ヲ求メ出セバ、御府尺ニテ求メタル古尺ヨリ、短キヿ二三厘、然レ𪜈禮樂疏ノ律尺ノ圖、朝鮮ノ布帛尺ノ圖ハ尙衣ノ古尺ニテ適當ス、又明ノ徐光啓ガ農政全書ニ、周尺ノ圖ヲ載テ、「當今織染所欽隆金星牙尺六寸四分」トイヘリ、是ヲ尙衣ノ大尺ニテハカリミレバ六寸四分ニシテ、圖式二厘バカリヨハシ、其彫刻尤精細ナリ、コレモ明徵トシツベシ、又唐ノ大尺明ノ時マデ亡ビザレ𪜈、人コレヲ知ラザルト見エタリ、コレ彼方ノ織殿染殿ヘ、オホヤケヨリ降シヲカル丶金ノ星目ヲスエタル象牙ノ尺ヲ云ナルベシ、此尺余ガ見ル所ノモノハ摹尺ナレバ、其ウツシノ疎密サダカナラズ、又御府ノ古尺、大尺ニテ古跡ヲハカリ知ルニ、猶少シ跡ヨリヨハキヿ多ケレバ、大樣御府尺ヲ定則トスルヿ、マサレル方トイハン歟

○上宮太子古尺　和州法隆寺ハ、上宮太子ノ宅、斑鳩ノ宮ノ舊趾ナリ、寶藏ニ太子ノ遺物多シ、中ニ周尺ト云者アリ、余南都ノ相知レル人ニツゲテ、其尺樣ヲクハシクウツシトリテ見レバ、象牙樣ノ物ヲ赤ク染テ、花文ヲエリカキ、机上ノ壓尺造リタル物ト見エ、其長サ御府ノ古尺ニテ、一尺二寸五分ニアタリ、外ニ二厘バカリツヨシ、其星目ハナケレ𪜈、兩ノソバニ四花ノ細點各二十一アリ、其間ヲ五分アテニシテ、首尾一尺アルモノト示シタルナラン、一端ニ五段ノ寸ヲ刻ム、即世ニ太子カネト稱

シテ、大和番匠ノ用ヒ行ヘル、工匠曲尺ノ定本也、其末ハ匠尺ノ五寸ニタラザル故ニ寸ヲ刻マズ、按ズルニ宋ノ劉恕ガ通鑑外紀ニ、古傳ヲ引テ云ク、「成湯以二十二寸一爲レ尺、」律呂精義、コレニ依テオモヘラク、黄帝ヨリ虞夏マデニ傳ハレル古尺ヲ、成湯ソノ四分一ヲマシテ長尺トス、周武ソノ五分一ヲステヽ短尺トス、コノ故商尺ハ十二寸半、周尺ハ八寸ナリト、コレ傳會ノ說ニ似タリ、サレド上宮ノ時スデニ此尺アレバ、是必隋ヨリ以前ノ物ナリ、彼方ノ長尺、古ノ十二寸ニ餘リタルハ、元魏ノ時ニハジマリテ後周ニツタハレリ、然モ北朝ノ風俗ナレバ、イマダ此方ニ通ズベカラズ、其外コレニチカキ尺ナシ、然レバ隋ヨリ前ニ外紀ノ古傳、律呂精義ノ如キ說アリシヲ、上宮コレニヨリテ商湯ノ尺ヲ制セラレタル歟、コレモ古尺ノ一證ナリ、彼寺ニコレヲ周尺ト云コト、浮屠氏古尺ノ通稱ナリ、元祿八年、法隆寺ノ寶器ヲ京都ヘモチ來リテ開キケル時ニ、此ノ摹尺ヲ以テ本尺比較シテ、少モタガフコナカリシナリ

○生駒寺律衣尺　古來釋氏律藏ノ衣尺ハ、唐ノ南山律師道宣ガ四分律行事抄ト云書ニ、隋唐ノ小尺ヲ用ルコヲイヒテ、是ヲ姬周ノ尺ト稱ス、宋ノ靈芝山律師元照資持記ヲ作リ、コレヲ釋シテ、亦其小尺ヲ周尺ト稱シ、加二ノ大尺ヲ唐尺ト稱ス、此方和州生駒ノ金龍山長福寺ト云律院ニ、裁衣ノ古尺アリ、余密律二家ノ衣尺ヲ、カレコレトリアツメテ參檢シタリツルニ、只生駒ノ尺正度ニ近シ、後南都元釜町法壽庵ノ律尺ヲ得、正度ニ合テ少シ弱シ是モ弘法大師唐僧ノ衣尺ヲウケツタヘタリト云、或ハ南都西大寺ノ睿尊ガ造リタリトイヘモ、

必是唐ノ小尺ヲウツシタルト見エタリ、今御府ノ古尺ニテハ一尺六分六厘ニ比ス、大尺ニ比スレバ八寸三分五厘小ニシテ、大ニ比スレバ一尺一寸九分七厘六毫ナリ、尙衣ノ古尺ニテハ一尺六分八厘ニ比ス、大小ノ互校モ是ニカナヘリ、其本度ハ古尺ノ一尺六分四厘ニ比シ、小ハ大ノ八寸三分寸之一、大ハ小ノ一尺二寸ナリ、然レバ御府チカクアタレリ、コレモマタ古尺ノ明徵ナリ、按ズルニ唐六典ニ云ク、「凡度以二北方秬黍中者一黍之廣一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、一尺二寸爲二大尺一、十尺爲レ丈、」又云ク「凡積黍爲二度量權衡一者、調鐘律、測晷景、合湯藥、及冠冕之制則用レ之、內外官司悉用二大者一」大者トハ加二ノ大尺、三兩ヲ一兩トスル大兩、三斗ヲ一斗トスル大斗ヲ云、是唐朝ノ令文也、本國養老中ニ、藤文忠公令ヲ著シ、延喜中ニ藤貞信公式ヲ撰ス、度量權衡ノ法皆唐令ニ從ヘリ、然レバ其ノカミハ唐ノ大小兩尺、並ビ用タルト見エタリ、何レノ時ヨリシテカ工匠尺バカリ、天下公私ニ通用シテ唐ノ大小尺ハ廢レリ、今只尙衣ノ裁尺ニ大尺ノ度殘リ、律藏ノ衣尺ハ小尺其儘ニ存セリ、博雅ノ君子、コレヲ珍重セザランヤ

○工匠尺　世ニ用ル工匠ノ曲尺ハ、此方ノ營造尺ナリ、展轉多クシテ少々ノ差アリ、宜シク上宮太子ノ尺ヲ以テ斷定スベキナリ、今此尺ヲ御府ノ古尺ニテハカレバ、一尺二寸八分五厘、尙衣ノ古尺ニハ、一尺二寸八分八厘ニアタレリ、此尺ノ來由分明ナラズ、隋唐以前ノ物ナルヿハカクレナシ、其前ニハ元魏ノ後尺、古尺ノ一尺二寸八分一厘ニアタルヲ近シトス、サレ𪜈北朝ナレバ此方ニハ及ブベカラズ、南朝梁ノ俗間尺、古尺ノ一尺七分一厘ニ比ス、是ニ二寸ヲ加フレバ一尺二寸八分半强ナリ、尙衣ノ古

尺ノ比校チカクアタレリ、按ズルニ梁ノ民俗此方ヘワタリシヿ、國史ニ見エタリ、梁ニモ亦尺二ノ度アリテ、コレヲ帶ビ來レル歟、或ハ其俗尺ヲモテ來リタルヲバ、此方ニテ二寸ヲ加テ用ヒタル歟、未審ナリ、其後隋唐加二ノ尺ワタリツレドモ、多キタガヒナキ故ニ、並ビヲコナハレテ今ニツタハレリト見エタリ、此尺ハ古尺ニトル所ナケレドモ、此方ノ舊物ナレバ、旁照ノタメニソナヘヲクナリ

律尺考驗上 終

律尺考驗下

上篇ニハ古尺ノ出處、經由ヲ考ヘ記ス、此篇ニハ古來ノ名律ヲ舉ゲ、各ソノ始末ヲシルシテ、晉律ヲ議スルノ採擇ニソナフ、其尺寸分厘等、皆古尺ヲ以テ比校ス

○周尺黃鐘長九寸 徑三分三厘八毫四絲四忽強 器九分 積八百一十分

此尺ハ即チ隋志十五等ノ尺ノ第一ニ載セタル周尺ナリ、其說晉書隋書ノ本志ニ見エタリ、茲ニ其大意ヲ釋ス、晉ノ武帝泰始中、中書監荀勗、ソノ時ノ樂音和セザルコト、漢ヨリ魏ニ至ルマデノ尺、古ヨ

リ四分餘長キ故ナルヿヲ知テ、周ノ制法ニ依テ古尺ヲ作リ、其尺ヲ以テ樂律ヲトヽノヘ、八音ヲアラタム、則其尺ヲ以テ古昔ノ器ヲ量リ見ルニ、其器ニ銘ジタル尺寸トタガハズ、又汲郡ノ地ニテ、盜賊戰國ノ魏ノ襄王ノ冢ヲアバキケルニ、其中ヨリ周ノ時ノ玉律、並ニ鐘磬等出タリ、其聲ミナ勗ガ新律ニアヘリ、勗ミヅカラ其尺ニ銘ジテ云ク、「晉泰始十年、中書考二古器一揆二校今尺一、長四分半、所レ校二古法一有二七品一、一曰姑洗玉律、二曰小呂玉律、三曰西京望銅臬、四曰金錯望臬、五曰銅斛、六曰古錢、七曰建武銅尺、姑洗微强、西京望臬微弱、其餘與二此尺一同、今尺トハ、魏ノ杜夔ガ作タル尺ナリ、小呂ハ仲呂也、姑洗小呂ハ即周ノ玉律、西京銅望臬ハ漢ノ長安ノ都ニテ、日晷ヲハカリタル銅表ノ尺也、金錯望臬モ其類也、金錯トハ器ニ金ヲチリバメテ、銘ナドシルスヿヲ云、銅斛古錢ハ漢ノ王莽ガ時ニ、劉歆ガ作レル銅斛、並ニ大泉、貨泉、錯刀、貨布ノ類ナリ、其ノ寸法各々漢志ニ詳ナリ、建武ハ後漢ノ光武ノ年號ナリ、荀勗ガ律、ソノカミノ人皆ソノ精密ナルヿヲ稱美シケルニ、陳留ノ阮咸ヒトリ其聲ノ高キヿヲソシリテオモヘラク、高キハ哀思ニチカシ、中和ニカナハズト、勗コレヲイミテ、阮咸ヲ始平王ノ相トシテ外ニ出シケリ、其後アル田父、野中ニテ周ノ時ノ玉尺ヲホリ出シタルヲ、勗コレヲトリテワガサダメタル金石絲竹ノ樂器ニクラベミレバ、皆米一粒ホド短シ、コレニヨツテ阮咸ガ音律ニ妙達スルニ伏シテ、又ヨビカヘシケリ、其後ニ又始平ノ地ニテ、古ノ銅尺ヲホリ得タリ、甚フルキ物ナリ、コレヲ荀勗ガ尺ニクラブレバ、勗ガ尺四分短シ、コレニヨリテ時ノ人、荀勗ヲ闇解ト稱シ、阮咸ヲ

神解ト稱ス、然レドモ荀勗ガ尺正度ヲ得タル事ハ異議ナシ、只後漢ヨリコノカタ、黄鐘ノ管徑リ三分、圍九分ノ說アリテ、人皆コレニ拘ル故ニ、管ノ内ホソクシテ聲タカキナリ、隋ノ時牛弘鄭譯等、前代ノ黄鐘ヲ各ソノ時尺ニヨリテ、長サ徑リヲ定メ、黍ノ容受ヲ度リミルニ、荀尺ノ黄鐘只八百八粒ヲイル、其管細キヿ是ニヨリテ見ルベシ、凡此古尺晉ノ後ニハ、南宋ノ祖冲之ガ作レル銅尺モ荀尺ニ同ジ、趙宋ノ時ニ至リテ諸儒多ク周尺ヲ作ル、今其諸尺ヲ參檢スルニ、司馬溫公ノ韓魏公ト共ニ、ツクル累黍ノ周尺ハ、荀尺ニ八厘程長シ、丁度高若訥ガ尺ハ皆荀尺ニ同ジ、但高氏ハ纔ニ强シ、コレハ漢ノ古錢ヲ以テ作レル故ニ漢錢尺ト云、蔡西山ノ律ヲ朱子稱美セラレタリ、是ハ荀尺ヲ以テ長サヲ定メテ、胡安定ノ孔徑三分四厘六毫ノ說ヲ用ヒタルト見エタリ、今密術ヲ以テ、其徑リヲ改ムルヿ右ノ如シ

○梁法尺黄鐘　長九寸零六厘三毫　羃九分一厘二毫六絲半弱、　徑三分四厘零八絲强　積八百二十七分一厘三毫弱

此尺ハ南朝ニ昔ヨリウケツタハレル周ノ時ノ銅尺一ツ、玉律八ツアリ、尺ハ齊ノ時ホロビタリ、梁ノ武帝ソノ玉律ノ夾鐘ニ、昔ノ題刻アルニシタガヒ、尺ツクリテ律ヲトヽノフ、是ヲ梁ノ法尺ト云、其長サ古尺ノ一尺七厘ニ比ス、晉ノ田父玉尺ト同ジ、然レバ徑リ三分ニシテ、黄鐘ヲ作レバ黍八百二十八入ルト、隋志ニ見エタリ、今本法ニシタガヒ、密術ニ依テ、管長口徑積羃ノ數ヲ正スヿ右ノ如シ、算法其尺ノ長サ十寸零々七厘ニ九寸ヲ乘ジ、九寸零六厘三毫ヲ得テ管長トス、又一分零々七忽ヲ自乘シテ、再九分ヲ乘ジ、九分一厘二毫六絲四忽四初一秒ヲ得テ口羃トス、管長ヲ以テコレニ乘ジ、八百二

十七分一厘三毫弱ヲ得テ內積トス、又其冪ヲ法ノ如クニ除スレバ、口徑三分四厘零八絲强トシル、ナリ○又是ヨリ前、後漢ノ章帝ノ時、零陵郡ノ舜ノ廟ノ下ニテ玉律ヲ得タリ、是ヲ以テ尺作リテ、樂律ニ用タルヲ漢ノ官尺ト云、其長サ古尺ノ一尺三分七厘ニ比ス、始平ノ銅尺ニ近シ、隋ノ時ノ例シニハ其黃鐘徑三分ニシテ黍九百三十九ヲ入ルト有、然共此尺長キニスギテ疑シキ故ニ、是ヲ出サズ

○梁表尺黃鐘　長九寸一分九厘九毫弱　冪九分四厘零二絲二忽弱　徑三分四厘六毫弱　積八百六十四分九厘弱

此尺ハ周ノ文王ノ司馬步法ヨリ出タリ、南宋ノ祖冲之ガ子祖暅、其度ヲ以テ銅圭影表ノ尺ニ用ヒ、梁朝ニテモ景表ノ尺ニ用タル故ニ梁ノ表尺ト云、古尺ノ一尺二分二厘一毫餘ニ比ス、隋ノ煬帝大業中ニ樂ヲ議セシ時、此尺ヲ古法ニ叶ヘリトシテ、律尺ニ用ヒ樂器ヲ制ス、然共隋志ヲ考ルニ、其黃鐘ヲ作レル三管有、一ニハ黍九百二十ヲ入ル、一ニハ黍九百一十ヲ入ル、一ニハ一千一百二十ヲ入ル、其多ク納ハ管ノ腹內ヲ寬ゲタルト有バ、口徑ハ皆三分ニ作レル也、今上ノ條ノ法ニヨリテコレヲ改ム、算法前ノ如シ、其黃鐘ノ長徑積冪、自然ニ玉斗ノ黃鐘ト相近シ、然バ此尺ノ愈々來由アルヿヲ信ズヘシ

○古玉斗黃鐘　長九寸一分八厘四毫强　冪九分三厘七毫二絲弱　徑三分四厘五毫四絲弱　積八百六十分零七厘二毫弱

此律ハ北朝後周ノ時ニ出デタル玉斗ノ積分ヨリ出ヅ、又漢ノ蔡邕ガ銀錯題ノ銅龠トソノ容受相同ジ、皆古ノ嘉量ナリ、隋志ニ載スルノ玉斗ノ斛積、一千一百八寸五分七厘三毫九秒トアリ、コレハ其時ニ作レル玉尺ノ積ナリ、其尺漢斛ノ尺十一寸五分八厘ニ比ス、コレ斗積ニヨリテ律作リ、律ニヨリテ尺

ツクル、但其律徑三分ノ法ニテ作レル故ニ、律ト尺ト共ニ長クナレリ、今玉斗ノ斛積ヲバ玉尺ノ分ヲ三乘シテ求レバ、一龠ノ積八百六十分零七厘二毫弱ナリ、然レバ玉斗ト銅龠ノ容受、漢斛ヨリモ一龠ニテ五十分餘多シ、コレ古斛ニモトヨリ大小アレバナリ、今此律ハ玉斗ノ龠積ヲ本トシテ、空圍管長口徑ヲ皆本法ニ據テ求ルニ、漢斛尺ノ分ニ當レルヿ右ノ如シ、又此律ニ依テ尺ヲ求レバ漢斛尺ノ十寸零二分四毫半弱ニ比ス、然バ梁表尺ヨリ短キヿ二厘ニタラズ、又其律ノ徑長羃モ梁表ノ律ヨリワヅカニ弱キバカリナリ、是ニ由テ見レバ、玉斗銅龠梁表尺皆一源ニ出テ、相符ストイハンモ亦可ナリ、乃此三種ノ共ニ古器タルヿ、互ニ相證スルニタレル者ナリ

右四律各來由ノ據アリ、其少キ長短大小アルハ、古尺古斛ニ元來不同アルニヨレリ、其中聲ニカナヘルヿハ、聞ク人ノエラブ所ニアリ

又按ズルニ杜氏通典ニ載ス、唐ノ初、張文收律度量衡ヲ考ヘ定ム、文收其斛ニ銘ジテ、古ノ玉斗ト相符ストイヘリ、蓋シ玉斗ハ後周ニ出テ隋唐ニ傳ハリ、則天ノ時マデ有ツレバ、文收是ヲ以テ參攷シケルヿ分明ナリ、其尺度ハ又累黍ヲ以テ攷ヘ合セテ作リ、即亦後周ノ鐵尺ニモ合タリ、古尺ノ十寸零六分四厘ニ比ス、舊說ニオモヘラク、後世ノ尺古尺ヨリ長キハ、律管徑三分ト云フ誤ニヨリテ作リ、其管ニ古龠ノ積ヲ容レテ長サヲトレル故ニ、律長クシテ尺モ隨テ長シト、今唐ノ黍尺ヲ以テ管長ヲ定メ、玉斗ノ龠分ヲ容ルレバ、口徑其尺ニテ三分二厘弱ニアタレリ、不レ知ソノカミ如レ此ニ作レルヤ、今又

玉斗ノ龠積ヲ空圍九分ニシテ求レバ、管長荀尺ノ九寸五分六厘四毫弱、尺長十寸零六分二厘六毫半强ヲ得タリ、黍尺ニ比スレバ、短キヿワヅカニ一厘半ニモタラズ、然レバ其時律ニヨリテ出來レル尺ハ、カクノ如クニ作リタルカトモ見ユル也、抑此尺ハ南朝宋ノ時ヨリ出來レル故ニ宋氏尺ト云、ソノカミ錢樂之、コレヲ以テ渾天儀作レリ、其後齊、梁、陳ノ三代、受ケツタヘテ樂律ヲ制ス、後周ノ太祖イマダ位ヲ得ザル時、其臣蘇綽ニ命ジ、古法ヲ攷ヘテ鐵尺ヲ造ラシメ、即コレヲ周尺ナリトシテ、樂律ヲオサメ田地ヲハカル、其長サヲノヅカラ宋氏尺ニアヘリ、武帝位ヲ得ルニ至リテ、音律ヲ議セシムルニ累黍ノ法サタマラズ、其後倉ノ修理ヲスルニヨリテ、古ノ玉斗ヲホリ出ス、是ヲ正器ノ出タル祥瑞トシテ其容受ニヨリテ律度量衡ヲ造リ、大赦ヲ行ヒ、天和ト改元ス、其度ヲ玉尺ト云、古尺ヲ十一寸五分八厘ニ比ス、又其後顯德中ニ北齊ヲホロボシ、南朝ノ樂ヲ得テヨリ、又鐵尺律ヲ用フ、隋ノ文帝世ヲトリシ初ニモ此律ニ從ヒケルガ、開皇中ニ陳ヲ平ゲ、南朝ノ樂ヲキヽテ華夏ノ正聲ナリト云テ、其律ニヨリ之ヲトヽノヘ樂ヲ制ス、其律ヲ水尺律ト云、然レ𪜈尺ノ長短亦鐵尺ト同ジ、隋ノ時諸尺ヲアツメ、各ソノ黃鐘ヲ作リテ、黍ヲハカリミルニ、鐵尺並ニ玉斗銅龠ノ黃鐘ニハ、黍ノ數千二百ノ本數ニ合ヒ、或ハ少キ多少アレ𪜈、皆玉斗銅龠ノ積分ニ出タルニヨリテ、大ヤウ異ナラズ、サレ𪜈皆徑三分ノ法ナル故ニ、玉尺、鐵尺並ニ古尺ヨリモ長キナリ、唐ノ高祖武德中ニ、祖考孫張文收ニ命ジテ黍尺ヲ作リ、樂律八音ヲオサメ、並ニ度量衡ヲ定メシム、然ルニ其尺長サ亦鐵尺ニコトナラズシテ、黃鐘ノ容

受ハ王斗トアヘルナリ、然レ𪜈律ノ長キハ、其音皆メリタルナラン、其後宋朝ニテモ、此尺ヲ唐ノ洛都ノ景表尺ト稱シテ調律ニ用フ、凡ソ古尺古律ノ世ニ行ハルル者、コレヨリ久キハナシ、此外ニハ五代ノ周王朴、古尺モ古器モ考ヘズ、只黍尺ツクリテ律ヲ制ス、其尺タマ〳〵梁ノ表尺ニ合トイヘ𪜈、律徑ホソキ故ニ、其ノ音古ヘニ比スレバ稍スメリ、宋朝ノ諸儒、樂律ノ議論マチ〳〵ナリケレ𪜈、ツイニ一決セザリシナリ、其中ニ李照ガ律ハ布帛尺ニテ作リケル故ニ、音甚メリテ詠歌ヲツケガタシ、歌方ノ伶人ヒソカニ樂器ヲ作ル工人ニ告ゲテ、少シ其聲ヲカラセシカ𪜈、李照其樂ヲキヽテコレヲ知ラザリツルトナリ、明ニ至リテハ協律郞冷謙、命ヲウケテ樂律ヲ定ム、大槩亦李照ガ法ナリ、又賴宮禮樂疏ニ載セタル鄭世子ガ律ハ、十二管ノ口徑黃鐘ヨリ次第ニホソクシテ、律ゴトニ異ナリ、曹魏ノ孟康ガ說ノ如シ、其長サモ三分損益ノ法ニ拘ラズ、其仲呂フタヽビ黃鐘ヲ生ズ、況ヤ共ニメリスギタル律ナレバコヽニ擧ケズ

律尺考驗下 終

三器攷

尺度攷

○古尺　當ニ曲尺七寸七分八氂二毫强一

此尺原出ニ於黃鐘之度一、蓋軒轅氏初製レ之、而唐虞三代相襲、用以逮ニ漢魏一也、漢銅斛尺、晉荀勗尺及漢錢尺、皆與レ此一體、後世亦稱爲ニ周尺一矣

○周尺　當ニ曲尺六寸二分二氂半强一

此周武王所レ製、以ニ古尺八寸一爲ニ一尺一、而與ニ古尺一並行、蓋周家十寸八寸皆以爲レ尺、故周禮起度之璧、袤十寸廣八寸、周藺方尺者八寸之尺也、深尺者十寸之尺也、以ニ十寸之尺一起レ度、則十尺爲レ丈、十丈爲レ引、以ニ八寸之尺一起レ度、則八尺爲レ尋、倍尋爲レ常、一說、寸咫尺尋常仞皆以ニ人體一爲レ法、寸人手動脈寸口也、婦人又手八寸、謂ニ之咫一、乃周尺也、丈々夫也、人長八尺、故曰ニ丈夫一、兩臂長引則亦八尺、謂ニ之尋一、仞亦尋也、（或曰、七尺）此尺後世不レ用矣

○唐大尺　當ニ曲尺九寸九分三釐六毫强一

用ニ其律尺一尺二寸一、此尺出ニ於北周一、歷レ隋至レ唐、而後通用レ之

○唐小尺　當ニ曲尺八寸二分八釐强一

唐人調鐘律、測晷景、合湯藥、及冠冕之制用小尺、其他皆用大者、此尺出於南宋、而北周鐵尺、隋唐律尺、皆與此符、承傳至於趙宋、名景表尺、僧家裁衣用之、亦呼爲周尺也

○淮尺　當曲尺七寸九分五釐弱

比大尺八寸、此尺蓋出於古司馬法、而後世行于江淮吳越之間、孫思邈以爲、夏家古尺、後周王朴樂尺與此同、本朝御府周尺亦是也

○宋布帛尺　當曲尺一尺零五分強

比古尺一尺三寸五分、又名大府寺尺、曰省尺、曰京尺、此尺自宋至明、相承爲木匠營造尺

○景表尺　即唐小尺

○浙尺　當曲尺九寸三分四釐弱

比古尺一尺二寸、自昔行于兩浙之間、未審其始

○明營造尺　即宋布帛尺也

此尺後人誤爲唐尺、而謂出於魯般矣

○量地尺　當曲尺一尺零七分六釐弱

用寶鈔尺九寸六分乃量地銅尺也、亦以制斗斛矣

○寶鈔尺　當曲尺一尺一寸二分強

比ニ古尺一尺四寸四分一、明初造行、寶鈔長爲レ尺也、又名ニ裁衣尺一

○織染尺　當ニ曲尺一尺一寸六分七釐强一

比ニ古尺一尺五寸一、以ニ浙尺一爲ニ其八寸一

本朝昔者、承ニ用唐大小兩尺一、今世所レ用木匠曲尺、比ニ大尺一微長、未レ審ニ其所ニ由出一、試據ニ梁朝俗間尺一、加ニ二寸一則近レ之、其度今以ニ和州法隆寺木匠尺一爲レ正、此書所ニ合攷一者是也、曲尺加ニ二寸半一爲ニ裁縫尺一、今俗用ニ一尺二寸一者

斛量攷

○周漢古斛　一斛當ニ新升一斗一升七合九勺二秒弱一（七秒）

此容實以ニ古尺及漢銅斛一容受、相乘約以ニ新升法一得レ之

○隋唐大斗　一斛當ニ新升三斗七升八合八勺弱一（勺餘）

隋以來大抵以ニ前代三斗一爲ニ一斗一、是爲ニ大斗一也、今因ニ大斗積立方二十五寸一、而以ニ新升法一約レ之爲ニ容實一

○隋唐小斗　一斛當ニ新升一斗二升五合三勺一秒弱一（一勺餘）

今案、此即後周玉斗也、乃三ニ倍之一爲ニ大斗一

○宋大斗　一斛當新升四斗二升六合一秒弱(五)(六勺餘)、

案、宋人以景表尺定度量、即與後周鐵尺量同、當時稱爲古升者是也、因三倍之爲通用之大斗、宋以來藥方亦用大斗矣

○明鐵斛　一斛當新升四斗八升七勺五秒餘

此容實據律呂精義鐵斛法得之

本朝之升、昔者有大小兩樣、其大者割方尺爲十六、而用其一所受在唐斗爲二升五合、猶唐以二百五十寸爲斗積、但量成而小、故退斗爲升也、本度內方五寸、而深二寸半、至於近世、官改其制、謂升口寬敞、則斜槩之間、易容奸巧、於是約其旁各一分、以加其深二分、故新斗方四寸九分、而深二寸七分矣

權重攷

○周漢古秤　一兩大約當今秤四錢半

古秤權重、今以寸金一斤、及漢錢參伍校驗得其大約矣、凡古秤法、一斤爲十六兩、一兩爲二十四銖、但古藥方曰一分(去聲)者是四分兩之一、乃爲六銖、非十釐之分也

○後漢六朝隋唐小秤　一兩當今秤三錢三分三釐强

此秤是六朝之通秤、而後漢張仲景藥方亦已用之、稱爲單秤者、蓋以吳有複秤、及北齊後周之秤、大槩倍之也、唐人制黍秤、而與此符、乃合藥用之、遂三倍之爲大秤也

〇隋唐以來大秤　即今世所行通秤也

隋唐三倍古秤爲大秤、爾後至於元明通行之、唐人鑄開通元寶錢每十錢、重一兩者、用此秤也、後來以十分兩之一爲一錢、（今略作匁）四分錢之一爲一字者、皆出于此矣、宋以後藥秤亦用大者

〇案、大秤之法、十毫爲一釐、（起於一蠶爲忽、十忽爲絲、十絲爲毫）十釐爲一分、十分爲一絫、十錢爲一兩、十六兩爲一斤、三十斤爲一鈞、四鈞爲一石、黍秤之法、十黍曰一絫、（起於黃鐘之實一千二百黍、一黍重四毫一絲六忽奇、三黍適一釐二毫五絲、六黍適二釐五毫、十黍而一絫、重四釐一毫六絲六忽奇）十絫曰一銖、（四分一釐六毫六絲六忽奇、）而六絫爲一字、（即二分五釐）二銖四絫爲一錢、（即十分）六銖爲一分、（即二錢五分）四分爲一兩、（即十錢爲銖、二十四爲絫、二百四十爲黍、二千四百是黃鐘之龠容、一千二百黍而兩龠爲合之重也、）今皆以大秤相準、此二法與古秤易混、須辨而別之

本朝古今大小秤竝用、今世所行天秤法馬及大小等子皆明人所造、而李唐以來遵用不易、萬國通行之法物也

三器攷略　終

三器攷略附錄

田耤攷

○古田法

古者田賦用₌司馬法尺₋ 一尺當₌曲尺七寸九分五釐半强₋(四毫)

一步 長濶方六尺 當₌曲尺四尺七寸七分三釐强₋(二絲四毫)

一畝 長百步濶一步、即百步之地也、長當₌曲尺一町十三間二尺八寸₋(七寸四分)濶如一步、○其田一畝二十四步弱

一夫 即一頃也、長濶方百步、共爲₌百畝₋爲₌萬步₋、 曲尺方面如₌畝長₋、○其田一町七段九畝二十二步弱

一井 長濶方三百步、即方一里也、共爲₌九夫₋爲₌九頃₋爲₌九百畝₋爲₌九萬步₋、 當₌曲尺方三町四十間一尺九寸₋、○其田十六町一段七畝十七步半强(六步半弱)

○秦漢以來田法

用₌古尺古步₋

一步 如₌古法₋

○唐以來田法

一畝　二百四十步爲二一畝一、和田四畝九步半强(四厘弱)

一頃　百畝爲レ頃、和田四町三段一畝(七)八步半强

以二大尺五尺一爲二一步一、即與二小尺六尺者一同

一步　長濶方五尺、當二曲尺四尺九寸六分八釐强一

一畝　二百四十步爲二一畝一、和田四畝二十步强

一頃　百畝爲二一頃一、和田四町六段七畝十步弱

○宋方田法

宋田法、其步及步畝頃皆與レ唐同、下至二於遼金元一、大抵亦仍二舊法一

一方　宋人以二東西南北各千步一、當二四十一頃二六十六畝一百六十步爲二一方一、一方方面當二曲尺十二町四十七間四尺五寸一、其田百九十四町七段二畝餘

○明田法

以二量地尺五尺一爲二一步一

一步　長濶方五尺、當二曲尺方五尺三寸三分五釐(八毫)一

本朝古田令五尺爲レ步、長三十步廣十二步爲レ段、十段爲レ町、延喜式以二六尺一爲レ步、以外如

令、今按、方田法以方六十步爲一町、自中間橫截爲兩端、又各直劃爲五段也、然地不必平方、只以是計其步、則方斜圓曲、皆可以統會耳、其以五尺爲步、蓋唐大尺之步也、方六十步爲町、象古者方百步爲頃也、但其尺仍用大尺、共三百六十步爲町、猶北齊一大畝也、○中葉以來、以曲尺六尺五寸爲步、此步法未審其所始、或謂、昔者量地之竿長一丈三尺、併二步計之、人立提竿、中間兩端迭昂低、遞點地以進行、首尾接續以度之、蓋取其簡捷也、今攷之人立提竿在腰間、去地可二尺五寸、乃以二尺五寸爲股、地步六尺爲勾、而依術求之、其弦適得六尺五寸、故制竿兩頭各六尺五寸、通長該十三尺、後人誤用此竿、就地面度之、竟六尺五寸爲步、而丈三之尺、迄今尚未之改耳、○元和以降、新田法六尺五寸爲步、三十步爲畝、十畝爲段、十段爲町、計方面以六尺五寸爲一間、六十間爲一町、此書合攷並用此法、近歲又檢地用六尺之竿、他如舊法、以其未久故此不取之

路程攷

○古里法

古者六尺爲一步、三百步爲一里、秦漢六朝亦皆同

一里　當曲尺三町四十間一尺九寸（七寸强）

十里　東路（三十六町）一里四十二間六尺（四尺二寸）　西路（四十八町）三十六町四十二間六尺（四尺二寸）

百里　東路十里七町九間餘（六間三尺）　西路七里三十一町九間餘（六間九尺）

千里　東路百一里三十五町三十二間餘（四間四尺）　西路七十六里二十三町餘（四間四尺）

○唐里法

以㆓大尺五尺㆒爲㆑步、三百六十步爲㆓一里㆒

一里　當㆓曲尺四町三十五間餘㆒

十里　東路一里九町五十一間餘　西路四十五町五十一間餘

百里　東路十二里二十六町餘　西路九里二十六町餘

千里　東路百二十七里十三町餘　西路九十五里二十五町餘

○明里法

以㆓量地尺五尺㆒爲㆓一步㆒、三百六十步爲㆓一里㆒

一里　當㆓曲尺四町五十五間餘㆒（七間五尺八寸八分）

十里　東路一里十三町餘（三十九間餘）　西路一里一町餘（三十九間餘）

百里　東路十三里二十四町餘（八町三十間三尺）　西路十里十二町餘（六町三十間三尺）

千里　東路百三十六里二十八町餘（七里三十三町四間四尺）　西路百二里二十八町餘（三里二十一町四間四尺）

本朝古以ニ令五尺一爲レ歩、三百歩爲レ里、延喜式六尺爲レ歩、三百歩爲レ里、蓋皆以ニ五町一爲ニ一里一、而歩有ニ長短一焉、其後以ニ六町一爲ニ一里一者、是隋唐三百六十歩之里法、而尺則用ニ大尺一矣、後又六レ之以ニ三十六町一爲ニ一里一、又八レ之以ニ四十八町一爲ニ一里一、於レ是有ニ長短二法一焉、大抵京東諸州從ニ短者一、京西諸州從ニ長者一、而東陲有ニ六町之里一矣、此書所ニ合攷一者、是六尺五寸爲レ間、六十間爲レ町之積也

本朝ノ古升方一尺十六分ノ一ヲ一升トス、即唐斗二升五合、案唐ノ大斗立方二十五寸ヲ、本朝古升法六二五ヲ以テ約スレバ四トナル、(三九二三トナル)然ル時ハ、唐ノ一斛ハ本朝ノ四斗ナリ、二升五合ニ四ヲ乗ズレバ一トナル、コレ便チ本朝ノ一升ナリ、古升ノ積六二五ハ唐ノ二升五合ナル故、二五ヲ法トシテ六ニ五ヲ約スルトキ、二升五合ト知ルナリ

律尺考驗 大尾

兼山秘策

室鳩巣著

兼山秘策 第一册

起正德元年至三年

室鳩巣著

一　一昨十一日新井氏へ立寄候處幸在宿にて一時計清談仕候、私申候は、御堅固に見へ候間珍重と申候へば、曾て堅固に無之候、此間も氣分相滯候へ共、四花灸など仕服藥等も致し候間續申候、四體麻痺仕頭重く氣配欝塞仕候旨被申候故、私申候は、夫は無心許儀にて候、麻痺などゝ申儀一旦の儀とは不存候、漣々御勤勞にて御氣欝と奉存候、一寸御引込にて御保養被成、末長く御用御勤被成候樣に存候旨申候へば、左樣にも仕り難く候、此間間部越前殿（越前守詮房御側御用人）より、何とぞ私に罷出候樣にとて相談の儀共自筆にて一々調被越候、私罷出候へば、直談の上にて相濟申儀候故、其を宿に罷在書通にて仕儀も難仕候、一日萬機と有之通に候、諸國への機務、古來の例共より相考一々申下し候、先にてつかへ申所は、重て遂僉議申遣樣成事に候、少も未決成儀は御嫌に候故、上より被仰下候趣、下より申上候趣共、一々書立候て僉議候て決し申趣、此末に委細書付老中諸役人諸國へ下し申儀に候、今度朝鮮來聘の儀に付候ても多端成事に候、手傳など有之候へば又勤よく候へ共、手傳仕候へば、其事の筋未決の內、はや外邊へも相知申樣成事に候故、何もかも一人にて先相勤申候由被申候、其體

間部殿と兩人にて、上の御相手に被二罷成一候樣子に相聞申候、御威光にておして取行候得ば諸役人に渡し事濟申儀、御先代抔左樣にて候、夫を少も無理をして被二仰出一事殊の外御嫌に候故、何も角も理を盡され候樣にて御自身御勤被レ成候、上さへヶ樣に候へば、私共隨分御用捨被レ遊候へ共、此方より少も休息仕心得は無レ之旨被レ申候、私申候は、御苦勞千萬成事に奉レ存候、上の御委任被レ遊候へば、御勤は多端候へ共御勤被レ成よき方有レ之候、其故御續被レ成候と奉レ存候、先以君臣御勤政の段天下の幸と奉レ存候、私共外間にて奉レ伺候に、穆々と被レ遊何の儀も無レ之御穩便相聞へ申候得共、奥深く恐れながら賴母敷奉レ存候、只今御物語を承りて扨こそと奉レ存候由申候得ば、新井氏被レ申候は、御代替以後一人も刑罰に被レ行儀も無レ之、そろ〳〵と政を被レ舉候事中々御遠慮有レ之儀と奉レ存候旨被レ申候、私申候は、保山老抔事御代替の砌は、日本一統に何卒可レ被二仰付一抔と申候處結構に被二仰付一候、是等御仁厚成儀と奉レ存候、御淺慮成儀とは相見不レ申旨申候得ば、保山其外御意に應じ不レ申面々皆結構に被二成置一事、悉皆常憲院樣へ被レ對候ての儀候旨被レ申候故、私申候は、されば其故御仁厚之儀と奉レ存候、新井氏被レ申候は、扨政にさへ預らぬ樣に被二成置一候得ば、其を御構に不レ被レ成儀に候、常憲院樣御懇に被レ成候面々の儀に候へば、其を御代に惡敷被レ成候儀は、御本意ならぬ儀との思召に候、惣じて御決斷の御事凡慮の及ばぬ所にて候、美濃守殿隱居は常憲院樣御他界の日に被二仰出一たる事承り及び候哉、是等もはやき儀に候、常憲院樣御他界の日美濃守殿御前へ被レ出、私事常憲院樣御厚恩の儀に候得

ば、追腹も不レ仕候ては不レ叶者に候へ共、御法度の儀に候へば不レ及二是非一候、責て剃髪仕り度旨直に願ひ申上候處、其方左樣に被レ存候處尤に被二思召一候得共、剃髪の儀は先御代より格有レ之儀にて候、奉公の品により賤者迄も剃髪仕者は定り可レ有レ之候、歷々其方など樣なる者剃髪と申儀終に御格無レ之儀に候へば、此度此方代替に、御先代よりの格を御敗り被レ成候儀難レ被レ成候、御葬迄も濟申候はゞ早速隱居被レ致候て、剃髪願の通に被レ仕可レ然と御意に候故、もはや美濃守隱居願不レ申候、は不レ成候、斯樣の儀御はやき儀に候、不レ動二聲色一相濟申候、其後世上にて美濃守事いろ〳〵申沙汰を御聞被レ遊、御笑被レ遊候て御座候

一　私申候は、御代替の砌、落書、狂歌、北地なども大分流布仕候、左樣の儀少も御制禁も無レ之事、是も其節奉レ感候旨申候得ば、夫も只御構不レ被レ成にては無レ之候、其砌老中より餘り甚敷儀に御座候、此儘に被レ遊置候ては、人心も動き申端にも可レ罷成一と申上候得ば、御聞被レ遊候て、夫も尤に候へども、御前には左樣には不レ被二思召一候、是は一段の儀と思召候、此方惡敷事を直には有體に難レ申筈に候故、誰共なしに落書等に出し候ては無二遠慮一候故、善惡に付下情相達候故御聞被レ遊、よき事は御取、惡敷事は御捨可レ被レ成候、御心付被レ成事も可レ有レ之候、其儘被二差置一御用捨候は、此方に有事に候、各も善惡とも外さた聞候ては心付申儀も可レ有レ之候得ば、其儘指置可レ申候、落書等御覽可レ被レ成候間、上げ可レ申旨御意に候由被レ申候

一　又被レ申候は、常憲院樣御遣銀すきと御遣切被レ成、御隱居所御立可レ被レ遊樣も無レ之候に付、砂銀と申儀起り候て、是を以て御隱居所御立被レ遊御入用に被レ成積にて候、其內薨御にて候、其跡御繼被レ遊候に付、金銀拂底仕候ゆへ、老中被二申上一候て、金を惡敷被レ成候て多く致し御遣用有レ之候樣仕度旨被二申上一候へば、金は元より吹替可レ被レ成、惡敷は被レ成間敷候旨被二仰出一候、兼て常憲院樣の御時金銀吹替被二仰出一候て、金銀多被レ成候ゆへ、大地震にて御城中大分破損も御修理被レ成申候、明日にも地震火災等有レ之間敷物にても無レ之候旨、とかく金出來候樣に用意不二仕置一候ては、手支候て如何樣なる氣遣なる事出來も難レ計候由被二申上一候へば、御聞被レ遊、成程左樣の處迄心懸候事尤に思召候、此上は御自分の思召をも先被レ仰候て御覽可レ被レ成候、各金銀吹替等御先代に被二仰付一置候故、地震等の時分無事に相濟申旨申候、然共金銀吹替等の儀無レ之候はゞ、地震等の天災は有レ之間敷と、御前には思召候、左樣の儀不仕何卒將軍宣下等如何樣にも相濟、御取續可レ被レ遊と思召候、その上に不二思召寄一又地震火災等の大變出來仕候はゞ、其時は天下の爲に御一身御つぶれ可レ被レ成と御覺悟被レ遊候旨御意に候、誰とやらん新井殿被レ申候忘れ申候、其人此上意を聞被レ申候て、御身に被レ替候て天下の難儀を御救被レ遊候事、とかく不レ被レ申候とて泣き被レ申候、私も其節は感涙にむせび申旨被レ申候、此事を承候て私も落涙に及申候

一　又被レ申候は、御代始右の通り御勝手御不自由の砌、諸籏本困窮子供養可レ申樣も無レ之旨、御聞被レ

遊、一度に七百人あまり被ㇾ召出ㇾ候、古今に一度にこれ程被ㇾ召出ㇾ候事可ㇾ有ㇾ之候哉、其側十七以上とやらん申儀に候處、十三に罷成候ものを前髪をおろして出し申候、これは如何にしても上を輕んずる樣なることとて老中などは不機嫌に候處、御聞被ㇾ遊殊の外に御機嫌にて御座候旨、これ等も結構なる御樣子と奉ㇾ存候、とかく珍敷寛仁の君に御座候、私儀もかやうの御美德の儀を承り候て、何角理屈らしく先を折申樣に申は不調法なる儀候ゆへ、御もの語承り乍ㇾ恐奉ㇾ祝候、權現樣御再來と奉ㇾ存候、此御仁德にては御家御長久と目出度儀に奉ㇾ存候旨申入候（以上四ヶ條　辛卯五月十三日書）

一　先日一夕新井氏へ參り語申候、佐藤五郎左淺野氏四十七人の義士の評、かな書にいたし置候物を貸被ㇾ申候、新井氏も餘り替たる儀と存候て寫させ置申候由に候、只今御使に進申候、其許にて御寫置被ㇾ成、奥源左衞門殿などへ被ㇾ遣可ㇾ被ㇾ下候、ヶ樣の異見可ㇾ有ㇾ之とは不ㇾ存候處、佐藤氏學術是にておしはかり申儀に候、新井氏も此かな書を見候へば、佐藤氏は君の讐をも見のがし可ㇾ申覺悟と存候など被ㇾ申候、大罪人と申儀如何の儀に候哉、其上泉岳寺にて早速切腹不ㇾ仕候段、名を求め祿を貪り申所爲との申樣など、四十七人泉下にて承候はゞ一笑を發し可ㇾ申候、扨々無ㇾ是非ㇾ評判に御座候、ヶ樣の學者とは努々不ㇾ存候、加州へも遣し候て學友中へも皆々見せ候て知せ申度存候、已後の心得にも可ㇾ相成ㇾ候（此一條　辛卯九月十七日、於江戸ㇾ賜ㇾ小谷勉善ㇾ書、佐藤氏評在ㇾ別紙ㇾ）

一　當上樣御盛德の事、狩野探幽の堯舜より以來代々聖人を書きたる極彩色の六枚屛風あり、録拝に

は鳳凰の來儀を書たり、如㆑形見事なる物なるを、先年御物にも成んかと上覽に入けり、久敷其儘御差置被㆑成、十七日御忌日麻上下召候御時に始て上覽ありて、上意に尤見事なる繪なれども、聖人の像を懸物杯にして床に懸などするは不㆑苦、屛風といふ物は筵席の上にたて置て、平生對坐しても見るものなり、屛風杯に聖賢の像を書て見る事勿體なき事に思召候間、御返し被㆑成候由上意なり、常々聖像には假初にも上下召ずしては御對し不㆑被㆑成候、ケ樣に聖人の貴き事をしらせ奉り申候事は、此方の侍講の力なきにしもあらず、林道春が家康公の御事を譽奉りて、孔子は唐の事は知たれども、天竺の事をば知らず、釋迦は天竺の事は知たれども、唐の事を知らず、我家康公は、唐天竺の事を明に知り給ふ故に、孔子釋迦の及ぶ所にあらずと書たり、箇樣のてれんをいふ儒者世に用らるゝ故に、いとゞ人主己が位にほこりて、聖人などをも直下に思ふ、聖人を直下の思ふ心にては、最早聖人の言葉を信じ用る事なし、大切成所なり

一 今秋（正德二年）四國、中國邊大水の樣子注進有㆑之、新井氏へ御尋の儀共有㆑之、被㆓申上㆒候趣荒增承候、尤なる事共に候、天災を御愼被㆑成候御樣子に御座候、其上兎角上に合せ申者御嫌の旨被㆑申候、此一事何より結構なる御事と奉㆑存候、御中年に被㆑爲㆑及候まで甲府に被㆑成㆓御座㆒、佞臣の仕形とも兼て能御存知被㆑遊、御懲被㆑成候故と被㆑申候、御即位おそく御治世の間末短し、今少早く御繼統不㆑被㆑成事殘念に候得ども、御年若にて御即位候はゞ左樣の御氣付も有㆑之間敷候へば、結句遲きも幸と奉㆑存候

一　世道いまだ少は頼有二之様子に候、當今漢宣帝に比し申案有二之候由、愚意も左様に奉レ存候、中興の主と可レ稱候、恨らくは丙魏の臣無レ之候、周宣王、漢宣帝、唐宣宗何れも中興の主　て候、當今御名宣の字御付被レ成候事、奇事と申事に候

一　九月廿日頃より（正徳二年）當主御不豫被レ成二御座一、廿八日及十月朔日大名衆出仕に御出座不レ被レ遊候、御療治最初は奥山交竹院、其後岡道慶、藪原通玄、澁江通玄院と、段々相替候得ども、御快驗無レ之につき、朔日より又交竹院御藥被二召上一候、御藥一貼に人參五匁つゝ被レ加候、九日夜急に御指重り被レ成、夜中御老中俄に登城、大久保加賀守殿には忌中に候得ども、御免被レ成被二罷出一候、御肝積左の方より強く差込候て、人參の類少しも被二召上一候得ば、殊の外御苦痛被レ成候ゆへ、獨參湯上げ申儀難レ成、醫師中も束レ手居り申候、翌十日晝頃殊の外御煩悶被レ成候ところ、少々御くつろぎ被レ成、夫より御疲れ出晝夜御寢成、をりふし御粥を四拾目餘兩三度も被二召上一候て、成程御靜に御座候ゆへ、十一二日時分は少し頼も有レ之、御本復奉レ祝候處、終に十四日曉天薨御被レ成候、近代に無レ之賢明の君にて、殊に當年より段々御仁政も行はれ可レ申體に候處、此仕合に罷成候段天下の不幸に候、十四日惣出仕にて罷出候へば御老中御出、今曉御他界の段被二仰渡一、其上に御遺書有レ之旨にて林七三郎高く讀み上げ申候、各落涙にて拜聽仕候、則別紙に有レ之候、誠以言簡而義深とも可レ申候、御繼統以來三年の間、日夜天下の事に御苦勞被レ成、御跡までもケ様に被二仰置一候事難レ有御儀に奉レ存候、御葬送の儀

も御遺言にて增上寺へ御越被レ遊候、此儀も被二仰置一候趣乍レ恐御尤の儀奉レ感候、御當家は御代々淨土宗の筈にて、既に權現樣、台德院樣增上寺にて御取置被レ遊候處、大猷院樣はじめて天台宗に御成被レ遊候、それより御三代上野にて御取置申候、この度又上野へ御越被レ成候ては、もはや增上寺の方御由緒絕申にて御座候間、この度は權現樣、台德院樣のごとく增上寺へ御越可レ被レ成との御遺言にて候、金銀の事も秋元但馬守殿へ委細被二仰置一候、その趣大略承り候處、金銀近年拂底相成候に付、澤山に可レ被レ成と被二思召一候て、御先代に吹替被二仰付一候得ども、只今に相成末々難儀仕候樣被レ及二聞召一候に付、御苦勞被二思召一いろいろ被レ盡二御思慮一候得共、急に御改難レ被レ成候に付御見合被レ成候處、此度被レ及二御不幸一候、民の難儀に罷成候儀に候間御跡宜敷致二詮議一、兎角金銀共に權現樣、台德院樣御時代の通罷成候樣可レ仕旨、則十四日此儀も秋元殿其役人へ被二仰渡一候、九日夜急に御指重り被レ成候處、少間有レ之御正氣付候得ば、拍手爲レ致候へとて、御次にて拍子貳番有レ之候、十日晝迄に御息絕へ不レ申内に、此度伺殘し申儀共一々伺候樣被二仰付一、透と被レ成二御聞一、それぞれ被二仰出一不レ殘埒明申候、遠慮閉門も其節透と被レ成二御赦免一候、是も被レ仰候は、此者共畢竟御免可レ被レ成と被二思召一候、只今御免不レ被レ成候はゞ一生難儀に可レ存候間、皆々ゆるし候へとの儀に御座候、右御遺言書も其時分相濟候哉、則九日の御日付にて候、もとより後事透と其前より被二仰置一不レ殘埒明申候、その後御近習衆何も久々御馴染被レ成候者どもに候間、御暇乞可レ被レ成候間、一人一人御前に罷出候樣にと上意

に付、名を名乘候て御目見に罷出候へば、それ〳〵に御言葉を被ㇾ懸候、其内老人壹人餘りに忍び兼て啼申もの有ㇾ之候へば、その時御目を被ㇾ明候て御しかり被ㇾ遊候、御女中方へも御暇乞可ㇾ被ㇾ成哉と申上候得ば、無用に仕候へ、と御意にて御座候、扨もはや何事も相濟候間おこし立候へ、早御絶被ㇾ成度候由被ㇾ仰候、定て殊の外御苦痛被ㇾ成、とても不ㇾ叶儀に候故、少も早く御絶被ㇾ成度思召候ての儀と御痛敷奉ㇾ存候、去共夫より少づゝ御くつろぎ被ㇾ成候ゆへ、何も相談にて、此間人參にて宜敷無ㇾ之、却て殊の外御難儀被ㇾ遊候段は能存知候故、申上事何共難儀千萬には候得共、此節に罷成人參を上不ㇾ申候て、御隱れ被ㇾ成候樣有ㇾ之候ては、諸人の殘念と存候處も可ㇾ有ㇾ之候、此上は群臣の爲に、被㆓召上㆒候樣に申上見申べき由にて、獨參湯を捧候て右の趣申上候へば、成程尤にも被㆓思召㆒候へども、只今迄人參に御相應不ㇾ被ㇾ成候に付不ㇾ被㆓召上㆒候處、只今御最期に成被㆓召上㆒候はゞ、結句命を不ㇾ知にても可ㇾ有ㇾ之候間、何も志は同事に被㆓思召㆒候間、被㆓召上㆒間敷由にて不ㇾ被㆓召上㆒候、御絶命被ㇾ成候まで透と平生の御樣子にて被ㇾ成㆓御座㆒、扨日夜御草臥被ㇾ成靜に御寢被ㇾ成候間、御近習の衆も後には何も勤申儀も無ㇾ之、只伺候して罷在候由に候、御絶命迄は何れも付て居不ㇾ申儀も成間敷候間、御傍に居候て捨て置候へば、天命にて候由被ㇾ仰、成程安靜に御臨終の由に御座候、如ㇾ斯御英明の儀申に付ても、扨々おしき儀に奉ㇾ存候、東照宮の御神靈も無ㇾ之哉と、餘りの事に恨奉る程に奉ㇾ存候、此上は犬馬の情只嗣君の御萬福を奉ㇾ祝候て、御成立を奉ㇾ待候外無ㇾ之候、右申仲候事は、透と外人不ㇾ知儀

共に御座候、私事は御存知の通り承候筋候故承申候、ケ樣の儀獨承り候を餘り殘念に奉レ存候、畢竟君の美を顯揚仕り候事は、人臣の本意にも候故申進候、（十月十八日書壬辰）

御遺書

不肖の身東照宮の神統を承けしよりこの方、天下の政事常に神德に副んことを以て心とす、然るに在世の日短くして、其志の遂ざる事、今に及ていふべき處をしらず、古より主幼く國危き代々を見るに、其世の人、權を爭ひ、黨をたて、其心相和らがずして、相疑ふによらざるはなし、胡越の人も、舟を同じくして水を渡るに、其心を一ッにして其力を共にする時は、風波の難をも渡るべし、況や今の世の人、當家創業の後、治平百年の間に、相生れ相長ずること誰かは東照宮の神恩によらざるものゝあるべき、人々其神恩に報ひ奉り、世のため人のためを存ぜば、古の主幼く國危き代々の事どもを以て深き戒とすべし、若其心ざしなからんにおゐては、當家の危難といふのみに非ず、尤是天下人民の不幸たるべし、凡天下の貴賤大小、よろしく相心得べき事に思召者也

正德二年十月九日　　御　黑　印

被二仰出一之趣

上古以來我國にて金銀を生じ候事其數少く、天下の財用とぼしく候ひし事ども、世の人傳承りたる處に候、しかるに東照宮御治世の始、慶長七年に及びて天運の時至候ゆへか、神德の感し出され候ゆへ

か、天下の寶山一時に開け、始て金銀を生じ出候事、我國の始より以來いまだ其例を聞ず、是よりして公私貴賤の財用ゆたかに、事足り候のみにあらず、我國の外よりも金銀を求むべきために、渡來候國々其數多く、又我國の費用にゆたかに事足候て今日に至候、是皆東照宮の神恩にあらずとは申べからず、寬永年中我國に渡り來る事を禁ぜられ候國々多しといへども、今日に至る年々に渡し來り候處も其數すくなからず候を以て、我國の金銀は萬國の寶に勝候こと、世の人又推して知べき所にて候、然るに慶長より以來或は異國の中に流れ入り、或は火災の爲に燒失、或は神社、佛閣、衣類、器財の爲に費し用ゐし處、凡九十四年の間我國の金銀大半を減じ候故に、天下の財用相通じ候事其始に及び難し、是によりて、元祿年中金銀の法を改め造られ、我國通用の金銀又其數を表し候、しかれども其金銀の品は、東照宮の定め置れし處には大きに及ばず候によりて、工商の類あらたに造出され候金銀の價を賤しみ、各其利を失ふべからざることを謀り、物價を增し加へて商賣し候に及て、諸物の價は年年に貴く、金銀の價は年々に賤く成來て、終には公私貴賤の難儀には至りぬ、異朝にしては古よりその寶貨の品、高下同じからざる事共にて、就レ中中古以來は、貨錢とて紙を以て金銀に加へらる、天下に通用せしめ候こと今に至るの由相聞へ候、元祿以來の金銀たとひ其品は下り候とも、異朝の寶錢にはくらぶべからず、しからば我國の四民、各其家業を相傳て、其財用を相通じ候こと、東照宮より以來代々の國恩により候處を存候はんには、金銀の價もさのみには賤しからず、諸物の價もさのみは

貴からずして、今日の難儀にも及ばしむべからず、しかれども財を重んじ利を爭ひ申候ことは、工商の間に候まではあながちに咎むべからず、只偏へに其餘公私貴賤の煩と成もの、今更是非を論ずるに及ぶべからず、都てこれ等の事ども年久しく知れ候事に候へば、御代の始より常に御心に被レ懸候處、金銀の品本のごとくに、諸物の價も平かに、いかにもして天下の煩を除かるべき御本意に候へども、凡は物一たびやぶれ候後、本の如くになし返しがたき事は、定れることはりにて、中にも今日金銀の品を、本の如くになし返され候事尤難ニ心得一事に候、若然るべきいはれもなく、今の金銀を以てもとの如くになし返されむには、天下の通用し來候金銀は、俄に其數の半ばを減じ、天下の人各其家財の半を失ひ、又工商の類の利を謀り候心は、本のごとくに候はゞ、其物の價は其半を減じて、商賣し候事も有べからず候、然らば金銀の數は今までの半を減じ、諸物の價貴く候事は、今迄の如くに候はんには、公私貴賤の難儀猶ほ甚しきに至り候べきか、是等の儀によりて卒爾に御沙汰にも及びがたく候て、新金の事は或は火にあひ候ては流失、或は物に觸候ては打損じ、其寶を失ひ候輩有レ之由聞召及ばれ、止事を得ず、これは先其品をもとのごとくに改め造るべき由被ニ仰出一候、其形の少く候ことは不レ可レ然候へども、金銀の法もとのごとくになし返さるゝまでは、天下に通用し候金の數其半ばを減ずべきことゝ、尤以不レ可レ然事に有レ之候故に候ひき、然るに新銀の次第に其品下り候ひて、去年の冬に至りて、銀にて通用の國々貴賤の難儀に及候由聞召れ、殊に不レ可レ然ことに思召れ候を以、新銀を作り

出し候ことをば停止せられ候、この上は猶更に金銀の品もとの如くになし返さるべき事、日々に御心を盡され候、但天下の寶は、天下とゝもに寶とすべき物に候へば、思召にまかせて御決定難レ被レ遊御事に候、たとひ今日金銀の品を元のごとくになし返され、其數の半を減じ候とも、慶長以前の代々にくらべ候はゞ、天下の財用猶ゆたかなるべきことは萬々信じ候べし、然る上は天下の貴賤相ともに存候處、我國の金銀は萬國に勝れ候て、萬代の後までの寶とすべき物に候へば、たとひ各その財寶の半を失ひ候とも、其品を元の如くになし返さるべき事に致し、工商の類も相共に存候處、金銀の品もとのごとくになし返され候は、たとひ其利を失ひ候とも、其物の價は其半ばを減じ候て、商賣可レ仕事に候と存候はゞ、年來の御本意のごとく、速に金銀の品を元の如くになし返され、天下の煩を除れ候べし、若天下の貴賤存ずる處も、今日通用の金銀その數の半を減ぜられん事、不レ可レ然候事と存、工商の數も其利の半を失ひ候はん事はかのふべからずと存ずるに於ては、天下の人とともに其時を御待合可レ有レ之候、只何れの道にも金銀のことは、我國萬代迄のために東照宮定置れし法のごとくになし返さるべき御本意に候間、天下の貴賤よろしく此旨を可レ存候由被二仰出一候者なり

辰十一月十一日

一　二十日申の刻御出棺にて候處、天氣晴候て終日長閑に御座候、供奉警衛の衆まで聊無レ滯増上寺へ被レ爲レ入候、路次萬人愁涙にて、御殘り多奉レ存候體に御座候、御出棺前三日より御出棺の日まで、

殿中夥敷金銀の花降り候て、手にて受け候へば其の儘に消へ申候、器物に受候へば小さき珠にかたまり申候、小珠只今に致二見在一候、かゝる奇瑞終に不レ承儀に御座候、佛者信仰の衆は舍利降り申候、或は雨珠とも申候、かく可レ有儀に候へば諸人は不レ存候、兎角難レ有御明主と奉レ存候、九日夜より十日晝まで、御病氣危急の内少々御くつろぎ被レ成候へば、其のまゝ急に御用の事被二仰出一候、一事も御自分の御上の事は無レ之、天下人民の事と、末の事、東照宮百年御法會の儀に御座候、十日晝までにすきと御正命を被レ絶候を御待被レ遊候由、頃日も新井氏物語にて候、十三日晝過ぎ新井氏御前へ被二召出一候由に御座候、箇樣の御臨終、古今人主には終に不レ承儀に御座候、金銀の花降り申候もことわりと奉レ存候（十月廿三日書壬辰）

一　九日夜被レ及二御危急一候て、夜中御老中方俄に登城に御座候、翌十日御三家御登城御對面被レ遊、御直に儲君へ重器御傳へ被レ遊候間、御後見の儀御賴被二思召一候段被二仰出一候處、尾張中納言殿御請、殊の外御尤成儀と相聞へ候、此儀は曾て無二沙汰一儀に御座候得ども、御三人は格別の儀に候間申進候、御請の趣は、人臣たるもの忠義を存知候と申儀は、よのつねの儀に御座候、御三家の儀は、箇樣の時節の爲に權現樣御たてをき被レ遊候、被二仰置一にも及不レ申儀に御座候、御三家合體仕候て諸事申合、鍋松樣へ御奉公可レ仕候、私身の上惡敷儀御座候はゞ、是に居被レ申候水戸殿、紀伊殿と被二申合一、急度可レ被二申聞一候、若又紀伊殿など手前難二心得一儀も候はゞ、水戸殿など申合急度可二申入一候、兎角天下

の御爲よろしき様可二申談一候間、御心安く可レ被二思召一候由御請の以後、老中列座の方を御覽被レ成候て、此上は各心得大事と存候、各と申も皆當家御譜代の面々に候得ば、忠義を存知可レ申候段は、手前など助言に及不レ申儀おろかは無レ之筈に候、然ども諸事心得肝要に存候、只今御前にてかくのごとく申入候間、忘れ被レ申間敷候旨急度被レ仰候由、さすがの儀と承申人は感じ申儀に候、此儀は誰も不レ存ことに候間他意有間敷候

一　幼主様へ御傳被レ成候儀もとくより御思案有レ之たる儀に御座候、九月廿一二日時分の儀にて候、其時分は御不例輕き儀の様に有レ之、大方平生の通りに被レ成二御座一候へども、御自分はいかか様御氣遣なる様にも被二思召一候、去ども又御本復被レ遊候儀も可レ有レ之とも被二思召一候、其時分筑州を御膝元へ被二召寄一候て仰候は、御氣分の儀、御醫師中も指て重き様にも不レ申候、御自分も左様にも被二思召一候へども、何とやらん御心得難き處も有レ之候ゆへ、人の病氣と申すものの難レ計ものに候へば、はたくと仕たる儀も可レ有レ之候間、御跡の儀、其方了簡御聞被レ遊度候、此儀御一人の御決斷有レ之儀に候得ば、御相談被レ成儀にては無レ之候得ども、其方事は學者の儀、古今治亂をも存知罷在候儀故、了簡御聞被レ成候得ば御安堵にも被レ思召一候、先御正統の儀に候へば鍋松様へ御傳可レ被レ成候哉、是一ッ、但天下の安堵の爲に候得ば、長君を得申度と可レ存候間、尾張殿へ御傳可レ被レ成候哉、是一ッ、但し御幼主御成長の内、御預被レ遊候て、御成長被レ遊候までは、尾張殿天下の政務を被二執行一候様に可レ被レ成

哉、是三ッの内にてはいかゞ存候哉と被㆑仰候、筑州其まゝおつ立て申上候は、天下のため大切に被㆓思召㆒候ゆへ、左様色々に御了簡被㆑遊候にては、乍㆑恐御尤に奉㆑存候得共、何の御氣遣も無㆑之儀に奉㆑存候、古へは先君の子懐孕に候得ば、誕生の内委裘に朝すと申す事候て、平生召候裘を位にすへ置候ても天下を治め申候、況やはや四歲に御成被㆑遊候、御正統の君有㆑之上に、外に御傳へと申候はゞ、天下の人却て何角議可㆑申候、扨甲府よりつき參り候面々合點仕間敷候、御他界の日にはやわれ可㆑申候、まして尾張殿へ當分御渡しなど申儀候はゞ、其内鍋松様少し御吐乳被㆑成候ても、其度ごとに人心そはつき候て、二心出來候様に罷成候ては、却て危亂の端と奉㆑存候、何の儀も無㆑之候、幼主を御立被㆑成、天下の重事は、御三家の方へ老中より相談候て、相決し中外は無㆑之旨申上候得ば、中處一々尤に被㆓思召㆒候、鍋松様御四歲の儀に候へば、水の上の泡の様にも被㆓思召㆒候、自然不慮に御そだち不㆑被㆑成候ときは何と仕ると重て被㆑仰候故、筑州被㆑申候は、其時は尾州殿にて候、其爲に權現様御三家立置れ候、御正統に御子無㆑之ときは、尾張、尾張の家御子無㆑之ときは紀州と、三家の次第を追て參り候事は、人誰か異議に及可㆑申候哉、御先代の様に御連枝有㆑之候處に、姬君御寵愛の餘りに紀州へ御傳など申候ては、天下の亂れ可㆑申候得共、御筋目さへ不㆑被㆑違候ては、誰も違背は仕間敷候、其上に不㆓存寄㆒禍亂の發し申儀は兼て不㆑存儀に候得共、其處は天命に御まかせ被㆑成、御貪着不㆑被㆑成筈に奉㆑存候旨申上候得ば、成程御心得被㆑遊候、此上は御幼主へ御傳の筈に御決定被㆑遊候

て、其餘のことは夫より御もくろみ立被レ成候間、左樣に心得可レ申旨御意にて、此儀は九月より極中儀に候、九月十日御危急の間、一事も御自分の私事に不レ被レ及、すきと天下人民へ懸り申御政事の儀にて候、それより正寢にて被レ待二御終命一候、婦人を終に御近付不レ被レ遊候、十三日夜御絕命被レ遊候事、古今人主の終に箇樣の儀未二曾承一儀と奉レ感候

一　當上樣成程御機嫌よく、御生質も御丈夫の方に被レ爲レ見候由、御目も成程よく御座候由に候、最前御目悪敷樣に申候得ども、夫は當分の儀にて御平癒被レ遊候、此日も承り候へば、とかく御位に御備り被レ成二御座一候と相見へ、格別の儀と皆々奉レ感候、毎日老中御目見に被二罷出一候、御上段の上に御褥を敷、御傍に御腰物懸有レ之、御上段の際まで御もり衆御手を引て罷越候得ば、夫より御褥へ御上り被レ遊、御刀をば御刀懸に懸申候、御脇刺をば御側に指置候得ば、御自身に御取、御左りの脇に、假に御挾み被レ成候て、壹人〳〵御老中へ御逢被レ成、すきと御目見濟み候て座を起被レ申時分、ぢいと御呼被レ成候故、又立歸り候得ば、壹人〳〵へ御側に御座候破子（ヘゴ）などの樣なる物被レ下候、何れも落涙にて頂戴退出候由に候、御敷舞臺の上へ御出被レ遊候て、ゑち〳〵と御呼被レ成候故に、間部殿被レ參候へば、とゝぼん〳〵と御意の由、御とゝ樣此處にて御能被レ遊候との儀を、御かた言に被レ仰候儀を、何れも聞被レ申、此時は惣じて笑出され候體に候、江戶中今以愁傷の樣子にて、隨分靜謐に御座候、此日も悪所へ參り候もの有レ之候得ば、悪所の亭主恥しめ候て、此節客など得候所存無レ之由申候て返し申候

由、左様の所存のものも有レ之處に、夫にはぢき返され候ものも有レ之候、兎角人心不レ一事に奉レ存候、後々御國用もゆたかに相成候はゞ、聖廟々御建立可レ被レ遊との思召にて候由、大方境地も究り候やうに被レ申候、道灌塚か、小石川御殿邊抔よく可レ有レ之と新井氏被レ申候、扨宗廟御建立の御志も有レ之、是は紅葉山に被二仰付一筈に候、天子は七廟、諸侯は五廟の制に御したがひにて五廟に被レ遊、其外に東照宮の御廟は、百歳不遷の廟に被レ遊度との儀に候由に候、若左様の儀有レ之段々出來候はゞ、天下の人耳目を改め、儒教盛に可レ成と奉レ存候、中でも〳〵おしき儀と奉レ存候

一　唯今の御様子萬端御老中方、間部越前殿、本多中務大輔殿、攝政と相見へ申候、井伊掃部頭殿は、一おもて一本には一の字以下一等おもく」とあり相見へ申候、御三家と御老中との間に、此人被二立置一て、一本餘の上に「段々次第を追て御政事等議定の御様子に候間部殿萬端詳御功者候而」數字あり餘の老中方も、畢竟は間部殿の了簡の通りに歸し被レ申候由に候、先上様御遺言にも、越前守事は久々御身近く被二召遣一候ゆへ、御心入をも此もの能く存候間、御跡にても萬事相談可レ仕旨被二仰置一候由、さて間部殿は、筑後へ何事も相談可レ仕旨被二仰置一候由に候、只氣遣に存候ことは賄賂の一事追付もとのごとく可レ成かと被レ存候、頃日はや間部殿へ音物差越候人有レ之候、定て殘りの衆へも遣し申候哉と存候、殘の衆は不レ存候、間部殿は返し被レ申候、脇を御聞合被レ成候べき哉と家來申候へば、手前事は脇は如何様にても候へ、受け申事は成不レ申候、聞合に及び不レ申旨にて被レ返候、上の御存生の内は、上を恐れ候て受不レ申候得ども、實は音物仕候をば悦被レ申との料簡に

て、頃日の御他界早々如レ斯に候、苦々敷風俗に罷成候、大久保加州より後藤四郎三郎末子への事、此事當春の事歟京都に居宅を構申候先日筑州見へ申候得ば、夫れはとくに此方知申儀に候、此儀に付間部殿相談にて、投レ鼠忌レ器と申事有レ之候、鼠へ投打申度候得共、秘藏の道具に當り候はんかと氣遣候、後藤事は近衛太閤出頭人にて、太閤へ日頃馳走仕、江戸へ御下向の時分にも、道中にて殊の外馳走仕候由、然れば太閤より、御内意も候て、大久保も、京の所司も、斯様に後藤へ馳走仕候かと存候ゆへ、卒爾に御僉議候て、ゆるし難き儀も可レ有レ之哉の間、大久保へは間部殿より御尋御覧可レ被レ成候、その被レ仰様は、先年なたや十右衛門聖護院殿峯入の時分先達に罷越候さへ、町人の山伏の眞似仕事、驕の所爲に候とて急度罪科に被二申付一、況町人の武士の眞似仕事至極法外の儀に候、後藤事比日沙汰承り候、若其通りに候へば不レ可レ然儀に候、御了簡可レ有レ之儀と存候ゆへ御尋申入候間、所司へは筑州より内處に尋に遣可レ申旨筑州被レ申候由、その段委細達二御聽一候處、なる程大久保へは間部より尋可レ申候、相尋候はゞ先可レ申候、箇様の儀尋常の役人などに有レ之候ては、急度被二仰付一候へども、老中ども事は平生も天下の政事打わつて御相談も被レ成儀に候ゆへ、若又了簡も有レ之候ての儀に候哉と御尋被レ成候由申候て、相尋可レ申旨被二仰出一候、大久保被レ申候は、扨々忝御儀に奉レ存候、私成程後藤四郎三郎へ扶持遣申候、何をかくし可レ申哉、先年富士燒の時分、小田原の砂何程のけ候ても埒明不レ申、人力大分入り申候、是を除け不レ申候ては城下も立不レ申候、其上に大地震にて城廓及二大破一修理可レ仕やう

も無レ之、ひしと難儀仕候ところ、此者日頃念頃に仕候故、此度の儀に候間金子才覺可レ仕旨にて、過分の金子才覺くれ候て、それにて小田原城取立申候間、此恩を近頃過分に存候て報じ可レ申樣無レ之候ゆへ、此禮に扶持方遣し可レ申と申候へば、私此通りにて御扶持方不レ被レ下候ても能御座候、左候はゞ末のせがれに被レ下候はゞ可レ忝旨申候ゆへ、此方はいづれに遣候ても同事、其方心次第と申候て、忰に遣し置申候、武士の眞似仕候儀は曾て不レ存儀に候、只今存候へば、末のせがれに望申候は其心得にて申候哉と存候、此段同役中へ一往相談も不レ申候て、扶持遣し候はゞ不念とかふ難レ申候、早速飛脚遣候て急度しからせ、扶持をも取放し可レ申旨に存候、扨紀伊守殿へは筑後より申遣に不レ及候、越前方より急度申遣候へ、何と仕たる儀にて後藤忰へ馬鐙音信仕候哉、可二申上一旨上意の由申參候、紀伊守殿返答少し難レ聞候、大久保加賀守より扶持遣候て武士に罷成候旨承り候ゆへ、馬鐙遣申との儀に候、先是にて所司よりもしめし、加賀守よりも申參候へば、後藤も右の仕形は仕間敷候、餘り强僉議に及び申間敷候旨にて事濟申候、何も角もすきと上へ達候て、段々老中方も畏伏仕候體に候、常は處女のごとく成程ゆるやかに靜にて、御決斷無レ之樣に見へ、御思案決し申とずはりと致したる儀有レ之君にて御座候、龍の樣なる御生質の由被レ申候、私の所見は、此の君も絕世の主、此人は絕出の身にて候、扨言聽かれ計用られ候儀は、古今に餘り有レ之間敷候と存候、三代は差置き秦漢以後、齊の桓公の於二管仲一、燕の昭公の於二樂毅一、漢の昭烈の於二諸葛亮一、晉符堅が於二王猛一、唐太宗の於二魏徵一、

古今君臣の知遇と申候、新井氏の材樂毅王猛に比すべし、然れども學術の正しき事は樂毅等は及ぶべき所にあらず、兼ては詩人にて詩文の材を好み被レ申候て、道學の志は有レ之間敷樣に存候處、曾て左樣にては無レ之候、對州の雨森東五郎を事の外稱美、此人をも上に御在世にさへ候へば、選擧の筈に候由、殘念の儀と被レ申候、梁田才右衞門事被レ申候て、役に立申ものにて無レ之由被レ申候故、詩は拔群の人に候處おしき儀と申候得ば、李白など詩を作り、韓退之ほど文を書き候ても、曾て珍重無レ之候、この方は箇樣の者入不レ申候、天下の學風を愛し可レ申とて種子迄植置候處、まかずしてむなしく致候こと、返す〲殘念に候由嘆息にて候、かく申候へば、自分の取成候樣に候得ども、老夫など事被二申上一候て、御徵辟も詩文の事は附たりにて、畢竟見處有レ之ての儀と存候、梁田を捨てヽ雨森を取被レ申候にて相知申候、たゞ恨らくは、日外假名書の書を寄せ申候通に候、「至公無レ我、舍レ己從レ人」の志は、いかゞ可レ有レ之候哉と存候、責二備賢者一にて候、近頃の人物と奉レ存候、既被二召出一候筈の處、御意被レ成候は、對馬守小身にて、只今朝鮮來聘の時分、兩三人の內第一の者を此方へ取申候ては、殊の外難儀可レ仕候、今一兩年相立、可レ被二召出一旨上意にて、延引の內今度の事出來、人の幸不幸如レ此の由新井氏被レ申候、私申候は、左候へば拙者抔は先幸と申ものにて候、去共一分の仕合を申候はゞ、只今迄の列に替申儀も無レ之、御直に相成候儀重て望に可レ存儀にても無レ之候得共、上に御仁政段々盛に相成、夫を間近く見聞仕候間、萬分の一は其方の御用も勤候へば、是も大幸とも可レ申候處、此度の凶事

にて、何も角も不レ足レ論候、只百二十里外に罷在草野の人を及二御聞一、遙に御徵辟被レ成候事、是は相應の知己の主と可レ申候、此段は一生難レ忘奉レ存候由申候

一　此書狀五枚、御三人樣御覽候はゞ、早速火中被レ成可レ被レ下候、其外の衆へは學友中たり共、御無用奉レ存候、遠方の草紙にケ樣の儀申遣候事、不愼の樣にも候へども、御三人樣の儀は面談にもケ樣の儀早速御咄申儀に候へば、默止がたく候て申進候

一　小笠原佐渡守殿事、新井氏殊の外譽被レ申候ゆへ、此人事兼て加州抔にても、御老中第一の人の樣に承り候故、御治世以後段々御寵任可レ被レ成と奉レ存候處に、存の外引籠被レ申候、尤この方より願の由には候得共、下にて沙汰仕候は、御上の御意に叶不レ申候故、身を引被レ申候と相見へ申候と、是如何の儀に候哉と尋候へば、曾て左樣にて無レ之候、先上樣にも殊の外おしく被二思召一候歟、後々迄御懇意に御座候、此人西丸に被レ成二御座一候內より、眞實被レ致二御奉公一候て、其時分は色々浮說共有レ之、浮說のみにもあらず、無二心許一儀も少々有レ之候處、此人慥に候て柳澤方より少もおかし申儀杯不二相成一候、御代に相成候て、追付佐渡守殿願被二申上一、役儀達て御斷にて候、此人朝夕武義を不レ忘人に候、然る所兩眼ともに煩敷、かた〳〵はすきと見へ不レ申候、今かた〳〵も纔に見へ申體に候、大役被二仰付一置天下群臣の上に罷在申候處、兩眼見へ不レ申候ては、萬々一の變も有レ之候時分手にあひ不レ申、おくれ候樣に罷成候ては、天下の批判も有レ之、上の御爲にも不レ可レ然候、無事を幸と致し候て變を慮

り不申候はゞ、不覺悟者と申ものに候、それともに上の御身に氣遣成と奉存候儀も有之候はゞ、今暫此分にて可罷在候得ども、推參ながら只今最早天下も御手に入候て、少も氣遣に奉存儀無之候間御斷申上候由被申立候ゆへ、其段被遊御聞成程申處尤に思召候間、役儀は御免の由被仰出候、此度御出棺の日、子息山城守屋敷の前を御通被遊候時分、佐渡守俄に落髮、十德にて路次まで只一人罷出候て、警固の奉行中へ使者を以、何とぞ法體名も付被申候はんか、俄成儀に候ゆへ誰の事に候哉知申間敷と被存候て、其儘小笠原佐渡守入道と名乘被申候、佐渡守入道申候は、私事御存知の通りの者にて御座候、今日悴山城守屋敷前御遺骸御通被遊候に付、路次まで罷出度奉存候と御老中迄御斷申入候處、如何樣共可仕旨御ゆるし候間罷出度候、左樣御心得可被下旨被申入候へば奉行中の姓名忘れ申候、流石の人と見へ返答の趣尤に聞へ申候、其返答の趣は、被仰聞段得其意御尤に御座候、思召の通り被成可然存候、然れども御存知の通り堅く警固仕候間、役人の外は壹人も、他人はゆるし不申儀に候間、御老中は何れへ被仰入候哉、其儀承り置申度段被申候へば、佐渡守殿より重て成程被入御念候儀至極御尤に候、秋元但馬守殿へ申入候て、但馬守殿より右の通り被仰下候由被申候て、扨勿論壹人も供なしに佐渡守殿只壹人、路次に平伏して殊勝の樣子に御座候由新井氏物語にて候、法體は俗法に候へとも、上への志は此節是より外は無之と奉存候て、俄被致落髮候、被致法體候には尤成時節に候とて物語に候、新井氏も其日增上寺へ供奉にて候

一　御遺書は先日進申候、比日新井氏ゟなに被レ成候哉、漢の文章に直し見申候へと被レ申、二通り調進申候、且又先達て評定所へ御出し被レ成候書付、幷金銀の事被二仰出一候書付、定て可レ被レ成二御覽一と奉レ存候、評定所へ御出被レ成候書付、別て承事成儀と奉レ感候、語簡にして意至と申物に候、此度の御遺書は言簡にて義深と申物にて候、尤新井氏筆取にて可レ有と承候へども、上に御直に再三御吟味被レ成、思召を被レ仰候上にて相極り申樣に兼て承り申候、文章は新井氏 文章に候へども、趣向は皆上の思召にて、比日も間部殿と誰やらん、其の姓名は不レ承と被レ申候は、御遺書新井筑後書申には究り申候、御近習に筑後より外にケ樣の事調申もの無レ之候、假令少々學文仕候もの有レ之候ても、文章の體にて、少し日のあき申人は是は筑後守文章と存ずる筈に候へ共、其段は紛も無レ之事に候、去共右御遺書は、とくに御存寄被レ遊候て、思召を筑後守に被二仰聞一、其上にて再三御直に御改被レ成候て相極り申ものに御座候、其外に被二仰出一候物何も左樣にて候、然ば文章は新井調候ても、其趣向は不レ殘上の思召にて候へば、筑後調申と人々申候ても、少も構無レ之事に存候、去共上より被二仰出一候儀を、我調申由人々へ申候筑後守にては無レ之候、夫は手前受合に立可レ申候、左樣の儀輕々敷不レ申ものに候故、上ゟ箇樣の儀被二仰付一候と被レ申候由、尤成返答と存候

一　評定所への書付に、早く仕廻申儀諸事に功參候て、はやく吟味埒明申候哉、若其理を盡し不レ申候て早々仕舞候はゞ、不レ可レ然儀に被二思召一候旨被二仰出一候、結構成被二仰出一にて迷惑成儀痛入申筈

に候處、一圓左樣に無ㇾ之候、とくに其事を仕廻、八ッ時分より暮迄は、唯評定所に空く詰て居被ㇾ申候由に候、上よりは暮過迄も懸り候て、公事の吟味委細にと被二思召一候ての儀に候處、口ふさげ迄に唯詰て居申候、是は筑後殿の御恩故、暮迄罷在候抔と惡口申候由、沙汰の限りと存候、其中に又御尤成被二仰出一にて、扨々迷惑仕と申衆も數輩有ㇾ之由に候

一　加藤越中守殿事、若年寄すぐれて利發成人、その上御先代より久々若年寄にて諸事功者、似たる人も無ㇾ之候、然る處に始終上にあひ不ㇾ申候て、終に其身も欝氣して致二亂心一死去にて候、散々しそこなひ被ㇾ申候子細有ㇾ之候、先上樣西丸へ被ㇾ爲ㇾ入候前日迄曾て沙汰も無ㇾ之、御存知無ㇾ之處に、前日の夜に入候て、甲府間部越前守殿へ、越中より肴一種と、文庫に入申もの壹ッ封候て越被ㇾ申候、披見候へば西ノ丸の繪圖にて候、是は御覽被二成置一候て、御意得にも可二罷成一物に候間遣候由に候、其翌日俄に西丸へ御入の儀申來候、ケ樣の儀殊の外不届に被二思召一候て御にくみ被ㇾ成候、越中は第一の奉公と存候て仕たる事に候へども、御身の爲にはよき樣に候へども、大臣の體を失ひ、且又輕薄成仕形、此所存にて二心有ㇾ之樣にも被二思召一候と見へ申候、甲府の家老兩人、是は眞實成儀も有ㇾ之儀を慥に見届申候故、御治世以後筑後守申上候は、只々甲府より被二召遣一候を以、すきと御取立不ㇾ被ㇾ成候て、何も御本家の臣を其まゝ被二召遣一候事、結構成思召と乍ㇾ憚奉ㇾ感候、左樣にても無ㇾ之儀に候、右兩人のもの抔は、材は無ㇾ之候得ども眞實成心は見届申候間、此者ともと御本家の老中抔へ御任せ被ㇾ

成候て被㆓召遣㆒候はゞ、老中も氣遣成處にて行狀も嗜可㆑申候、ケ樣の處に御手當可㆑有儀に奉㆑存候由申上候へ共、上意には、成程尤に候へども右兩人の者共御見限り被㆑遊候、此兩人の者共常憲院樣御厚恩の者共に候、然るに此者共やゝもすれば御先代の御事を譏り申候、是は此方を褒可㆑申爲に申儀に候得共、本意を忘れ申者に候、士は恩を忘れず、時世にへつらはず、始終かわり不㆑申こそ本意にて候へ、ケ樣の者一向賴母敷不㆑被㆓思召㆒候由被㆑仰候故、新井氏もとからの儀に不㆑及閉口して退被㆑申候由に候、少も諂ひ申事御嫌に御座候、其處明らかに候故其儘御覽被㆑成候、おそろしき事にて候由被㆑申候、是等は中華などにて、餘程の君も及不㆑申儀に候、我爲に忠節の者と計存候て迷ひ申事古今の通患、夫故小人其機を見候て、夫より先上樣の樣に候はゞ其氣遣は無㆑之候、御生質一筋に明らか成儀と奉㆑存候、(以上十條　十一月七日書壬辰)

一　文昭院樣御謚號文字、つゝきはとくと合點不㆑仕候得共、御德義相應の事と奉㆑存候、定て詩魯頌泮水の篇、「允文允武、昭假烈祖」と申文を切申と奉㆑存候、日本の稱號は、文字の順逆を不㆑辨候て、經書の文字を切候て用る事を好候ゆへ、文字つゞき多くは逆にて候、是等も漢人などは昭文皇帝など可㆑仕候、嚴有院樣なども有嚴の筈に候、正德の年號、不吉の例、唐日本の事跡相考朱引迄仕、林大學頭或御老中へ持參、此年號究り申時分より存寄罷在候得ども、御前代はケ樣の儀御相談も無㆑之ゆへ、不㆓申上㆒候由演述の處、御老中方は左樣のこと不案内に候ゆへ、何も御詮議にて尤相極たる儀ながら、

左樣に古今不吉の例に候へば、畢竟國家の御祈にも候間、京都へ御斷申上相改候樣可レ仕など申儀に候、新井氏へ如何と尋被レ申候御方有レ之候處、筑州一圓合點不レ參儀に候、是も古今の例事跡など相考被レ出候由、所詮是は古今の例不吉の證據考申候、指當候て手近く申候はゞ、年號は年の名にて候、月積んて年に罷成候へば、年月は同事に候、正の字不吉に成候はゞ、一年の初の月を正月と申候て別して祝し申候、一年の初月を正月と申候事不吉に當り申儀に候へば、十二月ともに皆惡月と可レ申候哉、是にて相知たる儀の由被レ申候旨、林家新敷儀を申出し何應僉議に及び申候、正の字は、一に止まると書申候、不吉の事、南北朝やらん人の名の事に有レ之かと覺へ申候、それより又大學頭も被二申出一たる事にて可レ有レ之候、御代替りに候ゆへケ樣の事考出候て、翰林の文柄を再び握り申度との儀と見へ、嘲笑申候

一　新井氏被レ申候は、先年甲府にて初て侍講の時分、何にても御聞可レ被レ成の旨被二仰出一候に付、申上候は、當分の御慰に御聞被レ成候哉、但始終經書の義理をも御聞可レ被レ成との儀に候哉、此儀承り候て此方心得有レ之儀の由被二申上一候得ば、曾て一旦の儀にて無レ之候、始終御聞可レ被レ成思召の由被二仰出一候、左候はゞ先詩經を講し申度旨申上、初講に詩を講し申候、講過候て御咄に罷出、新井申上候は、三代の時は上に風化盛に候ゆへ、上の風下に移り申候、後世は上にて風化無レ之故、下ハ風段々上へ移り申候、只今江戸抔の風を見申候に、若き者とも髮の結樣、衣服の模樣、すきと堺町の野

郎を似せ申候、女中の風は、委く吉原の傾城の風を似せ申候、ヶ様の下のいやしき不正の風にて浸淫仕候處を、上より正しく被レ成候こと、中々可レ成儀とは見へ不レ申候處、文王の化閨門より段々外へ及候て、江漢の間迄化し申との儀、扨々聖徳の盛なる事と奉レ存候、唯今風俗を正敷仕候はゞ、先淫風を抑申こと第一と奉レ存候、其子細は唯今堺町へ罷越見物仕者ども、哀れ成事仕形に仕候を見候ては、僞と知なからあらき男も涙を流申候、七情は一つに候ゆへ、あはれ成事計ヶ様に感じ申にては有レ之間敷、淫亂の仕形を見候ては、定て胴へ涙落可レ申と奉レ存候、是程に不正の儀をしみ付申様に致し候ては、如何様に正しき事を申聞爲レ致二合點一候ても受不レ申筈に候、これに付候て聖人禮樂の教御尤至極成事と奉レ存候、樂にて正しき事を歌ひ舞つゝ、只々淫亂の事を堺町にて仕様に人心にしみつかせ候ゆへ、風俗一たび改り候ては、不正の方へ參る儀にては無レ之候、只今樂の教の廢れ候儀殘念至極成事と申上候へば、御うなづき被レ成候て尤成事共の由上意の旨物語に御座候、是は上の御好被レ成候處を此人見候て、ヶ様に諷諫の様に聞申候、さりとは丈夫と感申儀に候、此御好み後までもすきと御除は不レ被レ成と相聞申候へども、勝れて正直にすなほ成御生質に候故、一兩年は此處を隨分御矯揉被レ成候様に及レ承申候

一　服式の儀被二仰聞一候、其砌私も常服にて罷在候儀安堵不レ仕候て、緦麻の服申付候半と存候得共、篤と思案仕候得ば、五服の私親とは品替申儀に候、是は天下へかゝり申儀に候、況御宗室を初服無レ

之候處、私共御爲に麻を着申事、僭禮と被レ存候て止り候、彌思案仕候處是は只今不レ成儀に候、漢土にては短喪の以後に、國恤の時は有司服制を議し候て、官の貴賤によつて違ひ申と見へ申候、夫共に初喪の時、葬送の時抔迄と見へ申候、三代の時分斬衰三年と申も、定て大臣貴戚の類にて可レ有レ之候、群臣一統に斬衰三年と申儀にては決て有レ之間敷と存候、とかく是は當時の制次第に御座候、制に無レ之儀を私に服可レ仕儀とは存ぜず候、夫を五服の私親と同事の心得にて、自分の服を着申事可レ爲レ非禮一候、今度增上寺參詣御位牌拜禮仕候節、一統に熨斗目長上下にて候、御位牌へはヶ樣に仕候て、私家にて麻を着申事不埒成事にも御座候、酒肉の事は只々諸大名衆、旗本家、五十日は素食と相見へ申候、至極疎賤の臣、去年初て被二召出一候儀に候へば、至極輕き方に御座候、夫共厚き方に隨て五十日素食可レ仕心得に候

一　先頃國恤の初、金銀の天花降申儀、奥村氏、青地氏、長公より被二仰越一候、御同意の見込に候、惣じて貴人は物精を用申事左傳伯有が處に見へ申候、是等子産が博物と申者と奉レ存候、譬ば衣服、飲食、居所抔を先として、天下萬物の精華を御用被レ成候上、群臣賢愚を不レ擇、對二御前一候時の至極の敬心に相成候て、自然と誠一の誠に罷成候へば、衆の精華鍾まり候處より平生此養有レ之、上に無類の御生質にて被レ成二御座一候、華奢に御流可レ被レ遊候とは不レ奉レ存候、毫髪も鄙吝の御氣象は無レ之、至極清徹成御氣質に、右の天下の物精合候て、此度此氣散申候故此氣象を現し申候、古來高僧の内な

どに、臨終に異香薫じ花降申事抔申傳候、是れも物精は不レ用候得共、平生俗塵に不レ接、事物を放下仕候て、皮骨至極淸徹に候故、其氣散じ申時は香花の異も不圖有レ之候、去共毎度有事にては無レ之、其時節不圖天氣に感じ申處有レ之候て如レ此候へば、必然と申儀にては無レ之候、其感じ申處は何とも難レ計儀に候得ども、道理はヶ樣にて候、當年は愆陽有レ之候て、冬に至り候てもひたもの電光見へ申候、然ば陽氣の輕浮に不圖感じ候て如レ斯候も不レ存候、愚見はヶ樣に候、總て天に在て氣をなし、地に在て形をなし申理に候へば、地に落候ては珠に成申筈に候、然ば祥瑞にても、怪異にても無レ之、此理有レ之候、其內あやしき方にては無レ之事と存候

一　新井氏被二申談一候儀は、爰に一つ建議の事出來候、某は此儀の相手に候得ば、何としても不幸の氣味有レ之候、其方平心にて承り候てくれ候へと某申建候處、不レ入ものとも存候はゞ差止申候、此等の儀相談仕候者、其方外には一人も無レ之候に付申遣候、昨日御目付長崎半左衛門被レ參候て、御中陰も追付相濟可レ申候、夫に付日光御名代、又は伊勢へ奉幣使など、御例の通たるべき由此間朝議に候、何れ先にて可レ有レ之哉と被レ申候に付、是は不二存寄一儀と存候故、間部殿へ申入候は、五十日御過候はゞ、追付御吉例共段々可レ被二取行一由朝儀の旨承り候、是は如何の儀に候哉、御先代より國喪の節御服一年の間は、神社等御遠慮の儀に候處、此の度に限り左樣の儀は心得難く奉レ存候旨申候處、間部殿にも驚き被レ申より時分に知らせ被レ申候、此の度林大學頭申立候て、元祿年中常憲院樣某へ被二仰付一、

段々御詮議の上、服忌令被㆓相定㆒候て、七歳未滿の小兒は相互に服なく候、然らば當上樣御服は無㆑之候間、諸事不㆑及㆓御遠慮㆒の旨申に付、御老中方いづれも尤の旨にて夫に罷成候、とかく大學頭を爲㆑致㆓合點㆒不㆑申候ては難㆑成候由にて、大學頭呼寄被㆑申候、元祿年中服忌令に、七歳未滿の人無服と申儀は何に依て相定被㆑申候哉、古來倭漢の服制に、七歳未滿の人死去の時は、父兄親族其爲に無服に依て、無服之殤と申儀は有㆑之候得ども、七歳未滿の人其父母等の爲めに無服と申儀は相見へ不㆑申候、此儀承り度旨間部殿被㆓申聞㆒候得は、大學頭以の外氣色損候て、左樣の儀は誰被㆑申儀に候哉、儀禮家禮を初、歴代の服制に於て、七歳未滿の人、父母之爲に無服の事明白成儀に候、それ故常憲院樣御定置被㆑成候處に、只今左樣の說申建候て、常憲院樣御制作の令を敗申候、以の外成御事の由申候、依て新井氏其段被㆓申聞㆒候に、新井氏禮經の趣き大略書出し、七歳未滿の兒も父母の爲に斬衰三年、殊に當室ノ人は、其外の族人の爲にも、緦麻三月の服も、長者に替申儀無㆑之旨に候、其上御幼稚とて上にも御服無㆑之、且つ又元祿令に臣爲㆑君服制も定め置れず候へば、群臣も無服に候、纔かに文昭院樣の御爲に服を被㆑受候は、天英院樣並松平兵部大輔殿御父子計に候、御先代に限り斯樣の儀餘り無㆓御勿體㆒事に奉㆑存候、元祿の例を御破り被㆑成候との事、批判も可㆑有㆑之候へ共、七歳未滿の人其父母のために服あるべし哉否と申迄の儀に候、外の服忌に妨げ申儀も無㆑之候、是れも服は不㆑被㆑受儀に候得共、あなたの心喪と申儀の樣に、御代々國喪の時の如く、責て服の日數の內、音樂御遠慮も

有レ之候はゞ可レ然奉レ存候旨可二申建一所存に候、但いかゞ存候哉、是れは假初の儀ながら、風教へもかゝり候て、ヶ樣の處に心を付申度ものに候由被レ申候故、私申候は、成程至極と奉レ存候、近世武家の服忌と申もの、衰麻をば服不レ仕候て常の吉服にて罷在ながら、神社等への遠慮を仕候樣成るを服と意得罷在、名實の亂れ申儀不レ過レ之候、ヶ樣の儀も段々朝議に洩れ申間敷候間、以後は古に復可レ申と賴母敷奉レ存候處、此の度不慮の國恤にて、何事も空敷罷成候事殘念に奉レ存候、せめて神社等へ御祭事抔を御遠慮と申にて、國喪の印も有レ之候得ば、夫を惜まれ申事、孔子餼羊に禮を愛むと被レ仰の遺意にて御座候、左樣の處御評論無レ之候ては、天下後世の人其元を罪し可レ申候、毀譽得喪は御心に被レ懸間敷候、急度被二仰建一樣にと申候へば、新井氏も思案決し候て、右の趣一々書付出し被レ申候、後日承候へば、其書付を間部殿被レ致二懷中一候て、先何となく諸老中方の心底を尋被レ申候處、先入の者爲レ主候て、何とも難レ轉の勢に候故、右の書き付出し申候共老中合點有まじく候、然ば新井氏の議、初て諸老と遇不レ申の端を開候て以後の害に可二相成一候、其上新井氏も是程に被二申建一候處、林氏の議の通に罷成候ては、不快可レ被レ存と被レ致二思案一、又何卒可レ仕樣も可レ有レ之と、料簡の上默てやみ被レ申、右の書き付を天英院樣へ上被レ申新井氏所存の通り委細被二申上一候處、天英院樣並御實母樣御兩人の御願にて、服忌の御定は如何樣にも候へ、只今急に御吉禮被二取行一御遠慮なきと申儀は、餘り冥加恐敷儀に候間、此節御心喪の例に被レ遊度の旨老中方へ被二仰入一候故、此上はともかくも御尤に

奉レ存候由にて、日光御名代なども止申候、此間鳴物御免の觸有レ之候、然る處に所作に仕候者は御免の由に御座候、終に無レ之事に御座候、然らば慰に鳴物被レ行候事は、いまだ遠慮と聞へ申候、是はいつ迄と申候へば、定て來正月御謠初までの儀と被レ存候由新井氏被レ申候、畢竟不都合成事ども不埒に候へども、先是程にかゝへ置候事も新井氏並間部殿の力にて御座候、右の通に罷成候後に大學頭殊の外憤り候て、七歲未滿の人は、父母に無レ服ことと周禮の禮にて候處、只今御遠慮などと申儀周禮の道に背き、且は天下の御大法を御敗り被レ成候事とて、重て五ヶ條の書付を出し申候、それを間部殿又新井氏へ爲レ見被レ申候故、只今迄色々心を盡し申事も、人倫綱常の敗不レ申樣にとの儀に候處、左樣の儀を申候事風敎の害に罷成のみならず、聖人を不忠不孝の嚆矢に仕ると申ものにて御座候、是は本朝天下後世の患を殘し申候間、急度此方より御聞届被レ成可レ然奉レ存候由にて、三禮初め一々書出し候て此返答急度可レ仕旨、大卷を調へ間部殿迄遣し被レ申候、大學頭へ見せ被レ申候哉、如何返答に候哉、其後の儀は不レ承候、委細明白成事に候、大學頭是にて何とも返答成申間敷と奉レ存候、洛蜀黨の戒あるべき儀に候由、此上にも新井氏へ申儀に御座候、新井氏不レ入事被レ申候由、懇意の中よりも申もの有レ之候、私儀は尤と奉レ存候、不レ得レ止ことに御座候、此事の前に、正德の年號不吉に候とて大學頭老中方へ申立候へども、これも新井氏辨正にて早速老中方も心服有レ之、事止申候、其書付も寫置申候、閒事成事に御座候、是に心喪と申儀も不都合に候、酒肉は五十日以後上下一統に給候ては心喪の詮も

無レ之候て、重て右の服忌の儀申出候と相見へ申候、御老中方御不學にて氣の毒に奉レ存候、新井氏も是程迄には被レ致候へ共、何共志遂し難き勢に相見へ申候、然らば只今間部殿相談相手にて、間部殿たより言をも納れ申樣に罷成候ては、王叔文と申黨の類にても可二相成一哉、勿論間部殿叔文にては無レ之候へども、上に新井氏を被レ用主無レ之ゆへ、間部殿の黨の樣に成候ては快からぬ事に候間、進退出處の間の事とくと料簡仕候て吳候へ、ケ樣の處人の大節目に候間、苟且に不レ可レ存儀と先夜も被レ申候、只今まで勢を間見仕候に、新井氏被レ申處も有レ之候、私申候は、御自分事文昭院樣御寵任の儀に候へば、此御恩愛重き儀に奉レ存候、この御恩を被レ報事、只今は當上樣へ御奉公被レ成、諸事心を盡され候外は無レ之候、此處重き儀に候、其上唯今何も身を引退かるべき事も見へ不レ申候、今少し御見合候て尤に存候、易は變易也、隨レ時變易にて候得ば、明日の事は知不レ申候、今日迄は御辱しめと存事は無レ之候、少にても辱しめと存候ことと候はゞ可二申入一候、尤御自分にもそこは御油斷はあるまじく候、難レ進易レ退は君子の節にて候、吾黨の學彼林家とは似申まじく候、可レ退の時至候はゞ、見レ幾而作、不レ俟二終日一の御心得御尤の由申入置候、此人ケ樣に致し居被レ申候内は未賴母敷奉レ存候、明日にも引退候得ば最早是までと奉レ存候、これは文昭院樣御任用たらぬゆへに御座候、先夜も申候、古の聖人殷湯、周武の伊尹、太公望を被レ用候は、天祿を共にし天位を共にして人の上に立置れ候、さなく候へば天下の人服し不レ申候、本多中務殿を相役に被二差置一、此人を間部殿と同役に被二仰付一置候て、大祿

をも被㆓仰付㆒候へば、此節御老中方も諸事相談にも有㆑之筈に御座候、勿論此人伊尹、太公望にては無㆑之候得共、夫は上も殷湯、文武にても無㆑之候、とかく賢人をば大に被㆑用時は、權威を與へられず候ては用に立不㆑申、此段新井氏に先夜申入候へば笑て居被㆑申候、大方明哲保㆑身の謀可㆑有㆑之體に御座候、尤に存候、うか〱と油斷して禍にあひ申事は智者の所㆑不㆑爲に候

一　新井氏被㆑申候は、前朝御厚恩の人間部殿始め有㆑之候へども、某を第一と可㆑仕候、先日も御近習の衆と出合候て、互に悲嘆の上、右の通申候へば、其人被㆑申候は、其方は材藝有㆑之候て御用に被㆑立候得ば、御恩と申ながら故有㆑之候、手前共御恩派と申者に候由被㆑申候故、某申候は、左樣にて無㆑之候、毎度御顏色を犯し候て御氣にあたり申儀を申上候處、始終御懇意被㆓召仕㆒候事、無類の御恩と申ものに御座候、其人申候は、元曲選の時なども如何樣あぶなき儀に候處、不㆓相替㆒御懇意、其の後は結句前より倍し申候、とかく御自分の事は炙と被㆓思召㆒候と奉㆑存候、あつく候ていやなものに被㆓思召㆒候へども、御身の爲に成申處をよく御存被㆑成候ゆへ、御捨不㆑被㆑成候由被㆑申候て、元曲選とは何の儀候哉相尋候へば、元朝の歌曲を書き申書と見へ申候、何卒其儀に付被㆓申上㆒候哉、其處をば委く承不㆑申候、畢竟御能を御自身に被㆑遊候事御似合不㆑被㆑成御儀に候、古來五代唐の莊宗、爽㆓天下㆒拆の事、御戒可㆑被㆑遊儀に候、夫故唐も亡申儀に候、西丸に被㆑成㆓御座㆒候內は御慰に被㆑遊候ても、最早天下の主に御成被㆑成候て、能拆御自身被㆑遊候事、天下後世の議如何可㆑有㆑之候哉と被㆓申上㆒候

得ば、餘程御氣色損候て其砌は不首尾の様に候得共、追付此事尤に被二思召一候由にて彌御懇意に被レ遊候由、其後又御庭すゝき被レ成候事御諫申上候へば、是も御氣色に少し申り候へ共、追付尤至極に被二思召一候由上意にて候、御すゝき被レ成候事故透と御止被レ成候事は無レ之候へ共、其以後は御扣へ被レ成候て間遠に罷成申候、箇様の事にて新井氏事御究屈にも被二思召一候得共、始終御任用被レ成御懇意にて候由難レ有御儀に御座候、夫故只今に至候て衆心の感服仕候事、兎角誠の不レ可レ掩故と奉レ存候

一　御葬以前に増上寺祐天和尚、駕籠にて御城御玄關迄御免被レ成候様に願申候、前には上野御門主同事に増上寺僧正も御玄關迄乘物御免に候處、常憲院様御時より増上寺は不二罷成一候、此度御葬儀増上寺にて取行候に付右の願申立候此儀、間部殿新井氏へ相談候處、新井氏被レ申候は、成程前々は増上寺申通に候、今度御遺骸此寺へ御越被レ遊候儀に候得ば、台德院様御代の通に被二仰付一候ても可レ然儀に候得共常憲院様上意にて御定置被レ成候事を、各御了簡を以御敗被レ成候儀は罷成間敷候、以後當上様御成長被レ成御聞届被レ成、乘物御免被レ成候は各別にて候、然ば増上寺此度の處尤にも被二思召一候間、此願書をば御預置被レ成候、以後上様御成長被レ成候はゞ、定て増上寺も上野の格に可レ被二仰付一候、夫迄はこの書付御老中の方に御預置被レ成候、只今上は御幼稚に被レ成二御座一候處、常憲院様御定置被レ成候儀を、老中心得を以許し申儀は不二罷成一候由被二仰遣一可レ然旨被レ申候て、其通御老中も御同心にて返答に候處、御出棺以後増上寺の僧和尚初一ッに罷成、右の願御免不レ被レ成候はゞ、御法事勤

申儀不能成候旨申立候、御老中何も行當にて間部殿へ如何と相談候處、間部殿暫被致思案體にて被申候は、增上寺事は、大猷院樣以來既に御三代上野へ御越被遊候處を、先上樣昔の由緒を被思召出、台德院樣計此寺に被成御座候儀を御歎き被成候て、御遺言にてこの度此寺へ御越被遊候儀に候へば、增上寺一派の者どもぐつとも不申筈に御座候、然る處斯樣成申度儘成儀是非に不及候、此上は御法事御差止可被成候、法事と申儀何の益も無之儀に候へども、世法の事に候へば其通に御座候、法事罷ならず候由申候はゞ少も構無之候間、御指止可被成候、扨御棺の事は、此方より急度番人を大勢付置候て、御葬埋の時分迄相待可申候、然上は御詮義を被遂、祐天和尚右の通申儀に候はゞ、和尚を遠島可被仰付候、祐天は左樣に被申間敷候、役者共申出したる儀と存候間、首魁の者五人も六人も曲事に被仰付、其上にても衆徒たてあひ申儀に候はゞ、早速增上寺ふみつぶし可申候、此節諸大名申度儘申候ても踏つぶし可申候、若諸大名箇樣の事申候て、ふみつぶし申儀に候はゞ、騷動にも及び氣の毒に候はんに、幸增上寺の事に候へば、是にて御代始御威勢もふるひ候て一段の儀と奉存候旨、間部殿急度被申候、御老中もとかうの異議無之候に付、僧徒共是を承り候て、御法事可相勤旨御詫言申候て事濟申候、此儀新井氏被申候故、私事不覺落淚に及申候、間部殿是程に可有之とは不存候、是と申候も文昭院樣御手柄に奉存候、只今の棟梁の臣と申者は此人と奉存候、夫程に決斷有之人は難得御事奉存候、仰ぎ願ふ所は間部殿御息才にて、末長く當上樣

を御保護被レ成候樣にと祝願にたへず候、秋元殿智深く其上廉潔成御樣子と申候、新井氏も此人にて考申出被レ申候、文昭院樣御時代より間部殿とあい口にて、今以其通に御座候、何事も間部殿と御相談と見へ申候

此末岩田彥作福吉禍惡の說、此儀は密事にあらず候に付、別紙に秋元殿通鑑綱目被レ開候事有レ之、しるし置候間こゝに省略す

一　此五枚御一覽の後、又火中可レ被二仰付一候書と申ものは、以後落散候て洩申儀も有レ之候故申上候、其上御他見御無用と申進候事は、若き衆餘り箇樣の事に感心なき方には、爲二申聞一候も無レ詮事とも奉レ存候故に御座候、去共小寺武兵衛殿抔は各別に候間、被二仰傳一候て悦ばせ申度候、以上（以上四條二月二十三日書壬辰）

尙以新井筑州事江戶にて何とかあしく申なし候、この度の事に付林家の者ども、別てわる口申候、大學頭此間年號抔の事方々にふれ廻り、宰相樣抔にも申越樣子に候、十分理屈に候處、新井氏意地あしく候て、間部殿へ申候ておさへ申抔申憎候、安藝守樣抔へも大學頭切に罷越候て講談抔致し候由、小谷氏もの語にて候、この節きつく出候て御老中方に用られ、再び文柄を取申度所存と相見へ申候、老姦至極にて候、只可レ惜事は新井筑州と申もの近世絶出の材にて候處、最早是迄にて一生捨られ候はん事殘念の儀に奉レ存候、同上、此末大猷院樣御時、日光御再興御寶塔の事に付、島田幽也名言の事有レ之、

是又非穩密に候間別紙に記ㇾ之、此事畧す

小谷勉善家書の内

一　江戸にて下々沙汰仕候は、東照宮御誕生壬寅年、文昭院樣御誕生壬寅年、慶長六丑年より御治世四年、寶永六丑年より御治世四年、元和二辰年御遠逝、正德二辰年御遠逝、斯樣に東照宮御事蹟と符合仕候旨申慣候、白石被ㇾ申候は、御治世四年と申儀合不ㇾ申候、牽合附會の事に候由、將又當上樣御吉相の事有ㇾ之、目出度事の旨沓付候て、殿中にて奇瑞の旨沙汰仕候處、白石被申候は、御四歲にて先君御遠行被ㇾ遊候得ば、御不幸至極に候、何の奇瑞か可ㇾ有ㇾ之候哉、一大不幸しれ申候旨被ㇾ申候、尤成被ㇾ申樣平生の氣象如ㇾ斯候、

同

一　月光院樣は最前淺野內匠頭奧方に輕き奉公被ㇾ成、御名は小つまとやらん呼申候、（私云、宇治茶師家來の娘なり、）瑤泉院殿（內匠頭御內室）老內匠殿一卷以後暇出候て、其後御城へ御奉公に御出被ㇾ成候、慥成一族無ㇾ之に付、瑤泉院殿御女中の內おばに罷成、その子は徒弟分に罷成富岡助右衞門と申、然る處當君御誕生以後左京殿と稱し候、最早瑤泉院殿御懇意被ㇾ成候故、御厚恩を被二思召一候哉、老女中迄披露狀にて御念頃に候處、今般月光院樣と被ㇾ稱候てより直狀にても無ㇾ之、老女中の奉書にて、瑤泉院殿にも御狀等參り申候、叢葬御祝儀如二例年一安藝御前樣へ御賓敷御番頭西山太郎兵衞殿御使に被ㇾ參候、天英院樣よりも跡々の通御

小人衆御文使にて、歳暮御拜領物等到來仕候、月光院樣よりも初て歳暮御祝儀被レ進、御使は御用人坂部彌右衛門殿被レ參候、此彌右衛門殿何位の人にて何ほど可レ爲ニ御會釋一候哉、宰相樣へも被レ參候旨相聞候故、駒込まで奉レ得ニ御內意一候處、彌右衛門殿御廣式御番頭より月光院樣御用人へぬけ被レ申候、御使西山殿よりは品重く候得共、兎角西山殿同事に會釋可レ仕との御事にて、御門より御廣式御門迄の鋪桶、間番の送迎、三汁八菜の御饗、時服一重の御進物抔に候、天英院樣御使とは各別の違に候、御城女中衆へは老女中衆より以下段々、御表使衆と申まで被レ遣もの有レ之候、天英院樣附人は老女中兩人迄へ、跡々より被レ遣もの有レ之候、然る處今年初て月光院樣衆人へは、老女中三人表使三人へ被レ遣物有レ之樣に申來候、如レ此嫡庶の分亂候ては、事の端にも可ニ罷成一哉と眉をひそめ候

一　林大學士より段々邪說申出候へ共、白石明辯にて埒明申候、又此比家繼公の御名乘字繼の字不レ宜候、繼とは、次第を經候て順々に繼の意にて無レ之候、繼子繼母なども、繼ましき所を持來てつくを繼と申候旨申出候、一向評判にも不レ及ことと不レ足レ論存候、惣て林大學士不興成事どもに候、舊冬金子二千兩封して安藝守樣儒者津村惣右衛門を使とし役人中まで被ニ申越一候は、この金子當分入用に無レ之由に付預申度候、百兩に付壹兩づゝの利足被レ下候樣仕度との賴にて預被レ申候ゆへ、御用に無レ之候得ども御心安御出入の儀故預置申候、依レ之御役人共末々迄、儒者はヶ樣に欲深き者に候哉と嘲申候、惣右衛門も近頃難儀成使仕候と口說く、無ニ是非一申入候由、此儀先生御聞被レ成、大學頭事は兎角可レ申樣

無レ之候、惣右衛門使仕候義も心得難き由被レ仰候

一　當月十五日木下深見と新井氏宅にて宴會、夜半まで罷在候、主人例の快談にて御座候、御袴着の御用意に付、井伊掃部頭殿御加冠役故、御具足拵縅の儀御詮議と見へ、繪圖彩色にて新井氏へ相談に參り候體に見へ申候、それに付被レ申候は、無用の處に華麗を致し候事氣の毒成儀に候、先日も御破魔弓など何の用にも立不レ申ものに飾りしたゝめ、箱等の結構可レ申樣も無レ之候、嚴有院樣御時のはま弓を近頃迄所持致し火事に燒申候、秘藏致し指置申候小弓に候へども、やくに立申樣に本弓のごとく拵申候、夏冬くるふと申儀無レ之弓に候故、秘藏致置候ツル其節迄は御はま弓迄用に立申樣致し、正身に念を入候て、外の飾りは殊の外麁相に致したる物に候、只今とはうらはらの儀に候、先日保科肥後守殿より御用には立申間敷候得ども、故肥後守、嚴有院樣御時、御理髮相勤め申時分、小笠家原へ相尋記置申候古實の書にて候、御考合の爲にも萬一可二罷成一哉と被レ致二献上一、見申候處ニ奉書の紙を折候て象牙にてすり、夫に書付申候はんぞう盥の御櫛箱入と申ものをば繪圖いたし、是は美濃紙の打たるに調へ、右の奉書の上にそくい糊にておし申に付、しかみしはだらけの物に候、夫をこよりにてとぢ申候物を肥後守より献し被レ申候、それを見候て間部殿へ申候、近頃殊勝成物に候、只今時分ケ樣の物を獻じ被レ申候はゞ、紙などを致二吟味一きれ表紙にて、裏は金の布目かすなごなどと申筈に候處、ケ樣のしはより申物を其儘に献被レ申候事、流石保科家の古風なる故と存候て感にたへず候由申候得ば、

間部殿も成程左樣にて候と被レ申候、其に付私申候は、文昭院樣御代御政務の儀ども御詮議も有レ之候へども、此華侈の事には御沙汰不レ承候、如何樣の儀にて候哉、貴賤の節と申處に御なづみ被レ遊、節に不レ及は禮にあらずとの思召より、此處に御氣付不レ被レ遊と奉レ存候、近年天下の困窮此時に候へば、節を拔群御落し被レ遊候て、儉約に被レ成候て時中と申物に御座候、況各別過て華侈に天下一統流れ申事は相知れ申儀に候へば、第一に此處を御改不レ被レ成候ては、天下困窮救ひ可レ申樣無レ之、天下の困窮彌增に罷成候ては太平も續き不レ申候、只今御老中などいかゞ被レ存候哉、御長久の基を立被レ申候處、只今御老中晝夜の可レ爲二御思慮一儀に御座候、新井氏被レ申候は、唯今時分左樣の儀僉議なる物にて無レ之候、私いまだ時務を合點不レ仕候ゆへ、左樣の儀抔は何角申候、只今指當申事務どもにて外の事へは手及び不レ申候、間部殿日夜御幼主樣の抱扶にて、出仕の時分も色々被二申上一御出被レ成候樣にと致し、又はお袴を召させ申候、夫に何の御儀式の、何の御祝儀のと申に付候ても、御幼主樣の御儀に候故、此御介抱寸暇も有レ之者にて無レ之由被レ申候、成程夫は左樣にて可レ有レ之候、左樣の處急務に候へば、それに不レ被レ盡二心力一候ては、差當り申儀共滯申事共出來候筈に候へば、御尤に奉レ存候、乍レ去間部殿の御儀は、晝夜御介抱に御かゝり被レ成、他事に御暇なき筈に候、その外御老中方はいかゞ御心得被レ成候哉と申候得共、是も同事にて唯目前の政事に日を被レ送候、其比無二懈怠一勤方被レ致候由被レ申候、木下氏傍より、一通りの理窟にては不レ參事に候、只今御老中方毎夜の宿番つとめ、

晝夜在城被成候、下にて何角と存候はおろかの儀の由被申候ゆへ、私申候は、夫は筋力の勞にて候得ば、大臣の非本意候、簿書期會を第一に被成候こと難心得儀に乍憚奉存候、勿論只今の儀にて候得ば、私は難心得毎日御在城毎夜御宿番被成候事も尤至極には候へ共、それを以て責を塞き可申候哉、私は難心得の由申候得ば、新井氏被申候は、人情を不知しては支申候、指當日出度の、太平のと申候得ば、一統に悦申候、夫に華奢に候間困窮の本に候抔申儀、只今時分御老中方取揚被申候儀にて無之候、是れ人情にて候、唯今病人に向ひ候て顔色能見へ申候、段々本復抔と申事定りたる事にて候、病人も悦申候、それへ氣遣成樣子に候間養生第一に候などと申事、病人承候ても機嫌惡敷候、今はかうしたる儀にて候、是も人情にて候得ば指とめ申儀は不相成候由被申候、私も人情をはかり不申にては無之候、かく申候私もその通に候得ども、當分は不快にても退て思案致し候得ば、有樣を申ものは難捨存候、只今御老中方一旦は御氣に入不申候ても、社稷の遠慮を申ものをば立退るは尤と被存まじく候哉、然らば折節氣を付申候樣に仕度ものと申候得ば、新井氏被申候は、跡にて直言申ものを尤と思返し候事は學力なくては不罷成候、不學の人は死申候迄も、追付快氣と申候得ば悦候て、不致合點候と被申候故、夫なれば最早可申樣も無之、賴なく候由申候てやみ申候、新井氏被申候は、何を申候ても老中不學ものに候故申甲斐も無之、むかひに相手無之候ゆへ共に談申儀不罷成候、用被申の、又は用不被申のと申までに及不申候、夫に付ても氣味よき御人は文昭院樣にて御座

候、經史御歴覽被レ成、古今の事を御存知被レ成候故、此方より申上候事その儘御合點被レ成候事比類も無レ之儀にて、或時も申上候は、金銀を御費被レ成、結構成儀を以御威光を可レ被レ成と被二思召一候はゞ、乍レ恐御比興と奉レ存候、金銀づくの儀に候はゞ、只今富商大賈も御前にまけ申ものにては無レ之候由申候へば、御笑被レ成候て尤と御意被レ成候、斯樣の君に逢候て一言にても被レ用候こと、今に至ては責ての思ひ出と存罷在候の由被レ申候、是を承り候て私は致二落涙一候て、御自分には左樣にも思召間敷候得共、脇よりは殘念成事にて候由申候、此外新井氏と色々致二僉議一候事有レ之候得ども、大方は此樣成義に候、委くは筆紙に申難く候、新井氏氣くせにて、心に尤と存候ても先は人の申儀をおさへ候て爭被レ申候、是は尤と早速申候へば其分にて止候ゆへ、わざと打もぎ候て人におもはくいはせ可レ申との儀と見へ申候、是程の儀にても新井氏と爭ひ申もの無レ之候、殘の衆何れも聞て居被レ申候

一　權現樣御誕生壬寅藏、文昭院樣御誕生壬寅歲、慶長六年丑年より御治世四年、寶永六年丑年より御治世四年、御他界元和二年辰年、御他界正德二年辰年、御導師觀智國師七十六歲、御導師祐天和尚七十六歲、此頃江戶に申慣事に候、新井氏被レ申候は、權現樣御在位四年と申儀合不レ申候、是は關東より駿府へ御隱居まで丸年四年かと覺へ申候、それに付候て牽合したる儀と存候由被レ申候、當十一日夜山本源右衞門夢を見候て、夜中歌よみ被レ申候、夢中に私申候は、寄レ松祝と申題にて歌よめと申候へば、今一人脇より權現樣遠州濱松城に被レ成二御座一、夫より御繁昌被レ遊候故、今に至て濱松の音はさん

ざといはひ申候間、濱松の音と申事を歌によみ入候へと申候、其歌に

君が代は千さとのはまの濱松の

音なきなみに立かすみ哉

此懷紙を早朝調候て私方へ源右より越被申候て、米津清右衛門の妻夢に歌を見候、夫より權現樣御繁榮の例を被申、上樣御長久無疑候旨被申越候故、右の物語を申候て歌をも爲見候へば、寫置被申候、其夜の前夜御勘定衆の內にも常に連歌抔會て不存人に候處、夢中に發句を見申者有之候、發句は

若みとりヽヽヽヽヽヽ日のはしめ

中は忘れ申候由被申候、源右と兩人にて候由被申笑被申候、扨被申候は、此外にも上樣の御儀に付奇瑞の儀六七事書出し、此日御城にて取はやし候ゆへ、某申候は、御四歲にて御親樣に御離れ被成候御不仕合一つにて、最早祝申儀も入不申候、此御大不幸の上に何をか可申候哉、一向に不用の事と申候由被申候、只今時分の人いはぬ儀に候、尤至極成事と存感入候、又被申候は、其節目出度の、泰平のと申儀申慣候は、油斷の基にて却て不吉の左右と存候、只大事の時節危き儀と申程は能御座候由被申候、流石と存候て今更感入候

一　大久保加賀守殿氣分滯食胸につかへ候て、難儀の由沙汰に候、是は存亡無構人にて候由白石被申候故、私申候は、人は同樣に候得共、其人となりには輕重大に違ひ申儀と存候、只今時分秋元殿

など左様に承候はゞ、私共迄無二心元一可レ存と申候へば、夫は勿論の儀に候、秋元殿は只今大事の人と被レ申候、水野將監殿いかゞと申候へば、先祖よりの氣象有レ之人にて候、自分の才にほこり不レ被レ申様に仕度候、少輕易にて氣の毒に候、此日も五十一歳に成人養子願の事被レ申候へばことの外叱り被レ申候て、其年齡まで養子不レ被レ願事不覺悟の至と被レ申候、其人去年一子病死故、今度願被レ申候由、左候へば只今まで願不レ申筈に候、監物殿手持ぶさたに有レ之候、箇様の事疎略なる儀に候、先如何の様子にて只今迄願不レ申候哉と尋被レ申候て、其後延引の子細有レ之候はゞ咎被レ申筈に候處、頭より疎忽に被レ申事似合不レ申儀に候、此間も去る人に監物殿問ひ被レ申候は、御仕置段々押返し候て改り申様に仕候處に、不慮の御他界殘念至極に候、されども末頼母敷存候へば、何卒可レ仕様も有まじき物にて無レ之と被レ申候、監物殿ヶ様に被レ申候へば、頼母敷候とて其人語り被レ申候由、箇様の事殊の外あしき事にて候、やはか監物殿は左様に被レ申間敷候、最負の衆似たる事を左様に被レ申にて可レ有レ之候得ば、是は最負のころばかしと申物にて監物殿爲にもあしく候、文昭院様御遺書にも黨をたて申ことを御戒め被二成置一候、監物殿壹人にて天下の御仕置改り申ものにては無レ之候、それを一人の材力にて改申様に被レ申候ては、その外の衆不快の筈にて候、左様の事を最負だてに申はやらせ候事大に害に罷成事と存候、ヶ様の沙汰の有レ之事も、其身材にほこり被レ申故と存候由新井氏被レ申候、是も尤もと存候

一　其後雜談に罷成候、安藤右京進殿俳諧をよく被致候由、當年の發句に

日の春や周公旦のせなかより

是は、霍光に武帝より成王を周公旦に背負せられしところを畫て賜り、その後武帝崩御の時分、昭帝幼主にて霍光受遺詔輔幼主候時節、右の畫の事を武帝被仰出候由漢書に見へ申候、右京殿これより被申と見へ申候、おもしろく奉存候、新井氏も若き時分俳諧を好み、隨分よく被致候て、桃青杯とせり合被申候由、桃青も歌人にて、李白を學び候て桃青とつけ申候由に御座候、只今世に板行の内に新井氏の句多出申由にて候、かくし名桐陰と申候、桐陰と有之は新井氏にて候由被申候、或時孟子の出於幽谷遷于喬木の章をよみ候て、たちまちに前非を悔申候て、夫より俳諧をやめ申候、學者は詩文など工夫仕候筈に候處、夫に俳諧好み候ては下喬木入於幽谷と申ものにて候、近比梁田才右衛門あれほどの詩才にて俳諧すべき仕旨承候て、此者は下喬木入幽谷と存候、果して此程逐電致し候由申候、新井氏むかしの俳諧覺へ被申句有之候はゞ承度と申候得ば、白炭の發句に

白炭やあさ霜きえて馬のほね

又玉子の發句に

ゆで玉子絲てひもとく水仙花

此句など人々ほめ申候、或人見物場へ參候て下緒をぬすまれ候ものに、下緒賄り申候て狂歌よみ遣申

候

もらはるゝ身をはおもはすぬすまれし

人の下緒のおしくも有かな

ケ様の儀どん〳〵と咄候て被レ致ニ大笑一候、傍に人なき様に見へ申候、この人の氣象に似申ものも無レ之候、此氣象にて學に入被レ申候事得がたきものと存候、但氣象の弊は今に有レ之様に奉レ存候（以上四條　正德三年癸巳正月廿三日書）

此處坂井氏へそと可レ被レ仰候、俳諧狂歌を好み被レ申人にて候、唯今新井氏詩をも曾て作り不レ被レ申候、是は又一等遷ニ喬木一申とは存候、且恨らくは義理の精潔なる處、體認の功平生なく候故、聖人の學とは一膜へだたりたる様に覺へ候

一　物價追日踊貴、旗本中困窮以の外の儀、宿番の衆夜着の物所持不レ仕もの多有レ之候、國々も次第に窮迫の體に風聞仕候、執政衆憂慮の御様子承り不レ申候、毎日寄合互に被レ申候儀は、萬々年目出度抔と申儀のみと申候、先日も或人申候は、奥方女中局抔申者の申様成口上計被レ申候とて笑申候、文昭院様御代庶政御僉議の內、物價踊貴の事別て御苦勞に被レ遊、諸役人方へ此踊貴の子細、又は只今此弊を可レ被レ改に付て如何被レ成可レ然哉、各存寄の趣封事を以了簡を上候様にと被ニ仰出一候處、諸役人存寄共互に申內升遐被レ成候、然れ共被ニ仰渡置一候儀に候ゆへ去暮面々存寄書付出し申候、其上を新井

氏も一覽にて、是又存寄委細被二申上一候、其紙面比日見せ被レ申候、諸役人より申上候趣は、大方五ヶ條にて、御沙汰可レ有レ之次第は二ヶ條にて御座候、騰貴の子細、一ッには、金銀の品下り候に付物價上り申事、二ッには、近來風俗物毎に華麗を好み候て入用相增候上に、諸物元價高く罷成候故賣出候處の價も高く相成候由の事、三ッには、武家方買求候物の代を返濟不レ仕候に付、賣物の價を增候て其利を償候事、四ッには、江戸屋敷町屋等の數多く罷成、人別も多く罷成候に付、諸國より賣來候物共賣餘ると申事無レ之候て、價も高く罷成候事、五ッには、在々所々農民等過分の振廻有レ之候故、田畑作物等の品々まで其價を增候はずしては其用不レ足候、其故米穀はじめて諸物の價高く罷成候事、次に、只今御沙汰可レ有レ之次第は、一ッには、京、大坂、長崎其外遠國奉行所において、諸物の元價を減じ候樣に仕候はゞ、江戸の價も減可レ申候との事、二ッには、華奢を禁じ儉約を貴賤大小の分限に應じ事輕く仕候樣に可レ被二仰出一候事、この二ッにて、新井氏の料簡は此上に委細成儀に御座候、事長く候ゆへ不二申進一候、右の通詮議も大方相濟候て、經レ時候へ共如何の儀に候哉、今以何の被二仰出一と申儀も無レ之すたり居申候、其外の事共急に辨じ候はねば不二相成一儀ども一統埒明不レ申由に候、如何の儀に候哉、ヶ樣に庶政塞滯仕候ては下民の難儀は不レ及レ申、如何の變も出來可レ仕と心有ものは笑止がり申候、第一は只今御元服、又は將軍宣下前に候ゆへ、餘事は被二差置一被レ申とも見へ申候、此大禮相濟申候はゞ如何樣御初政も可レ有レ之かと存候、秋元殿さへ無事に御入候はゞ賴母敷存候、去ども壹人にて

は如何樣の御存念も難レ成事と見へ申候、萬一老中不和に罷成候ては御爲不レ宜儀に候故、其處を只今第一御愼と見へ申候、是も無二餘儀一事と存候、扨は間部殿存外材力も有レ之其上溫厚成人にて候故、今以諸老共此人を文昭院樣御時の如く推尊被レ申體に候、然共是は晝夜御幼主樣の左右を離れ不レ被レ申候故、外事には先預り不レ被レ申候、大久保殿は氣分あしく引込被レ申候、多分はよく有レ之まじくと申候、是は一統に惡しがり申候、此間も大名衆八人へ自筆にて金かゝりに越被レ申候由、紀國殿へも申參候得ども、御請合無レ之由申候、土屋殿は專茶湯、數寄茶碗、茶入など求め被レ申候、老人故此後隙に成候て自分の樂を專らに被レ致候體に見へ申候、就レ夫承り候事に候得共、先此度は略申候、秋元殿、間部殿兩人の內、秋元殿は御譜代の家に候得ば諸旗本の存入重く、諸大名の望も有レ之候ゆへ、此人別て大切に御座候、去ども六十七歲に候故、勤の間も有レ之まじくと氣の毒に奉レ存候、先日も松平伊豫守殿より老中に音物有レ之候、受納可レ有レ之歟否の僉議にて候處、秋元殿今度增上寺總奉行の儀に有レ之候間、この人次第との儀にて諸老中尋被レ申候へば、何の會釋も無レ之疾に返し申との返答にて、殘の衆もその通に罷成候由申候、隨分潔白成人にて賄賂大成嫌にて候、役人等賄賂の沙汰被レ聞候へば、ひたもの惡敷被レ申候と申候、此人被レ居候內は、賄賂公行の儀は有レ之まじく候

一　柳澤美濃守入道保山近年淫佚至極に候、二十餘の寵房有レ之、其方の用事承り候何の七郎右衛門とやらん申もの出頭いたし諸事亂候故、比日用人の者三人申合强諫仕候處、承引無レ之候に付、右三人

立退申候、其内壹人は儒者にて用人役勤能在候、荻生惣右衛門弟子の由に候、門外に馬引立置候て、長屋には武具餝置き、右の儒者預りの書物有之候處、其書物も餝置候て、保山前へ罷出候て暇乞仕、直に立退申候、右出頭人を申請候て生害仕度との事と申候、立退申候處も書き付置候て、御用も候はゞ可被仰越と申置候由、無殘所立派成事の由申候、保山も殊の外難儀と申候、先右出頭人は閉門被申付候へども、兎角此分にては相濟申間敷候、右用人一人は家老の子弟と申候、萩原近江守も小川町の屋敷急に被追立、外の衆へ被下候（以上二條　癸巳三月九日書）

一　保山家老三人諌言仕立退申候事、用人にて候兩人は家老共不逢者の由、壹人は儒者にて用人役を勤申候平手七郎右衛門と申者、小人にて保山寵臣に候處、此者を右三人申請、爲致切腹たくとの事に候得ども、承引無之候故立退申候、頃日承候へば、右七郎右衛門儀甲府へ遣押込候旨、右三人は如何被申付候哉、此分にて構被申間敷と申候得共、夫は餘り無味にて候間、何卒京、江戸構被申候て事濟可申候哉、保山共當座は殊の外立腹の體に候得ども、此節騷動に罷成事家の禍にも可罷成と被存候哉、兎角家老共宜仕候へとの事にて、右七郎右衛門押込申候、近年保山以の外婚亂放佚の沙汰に候、右七郎右衛門と申者其方の出頭人に候ゆへ、假に權威を得候て家風を破り候故、三人の者不忍見候て右の通と申候、先は忠節と聞へ候得共、血氣成仕形と存候、保山事江戸中に被及沙汰、家も危き樣に仕なし申儀不忠の臣と可申候、七郎右衛門と不和に候ゆへ、申立候處は保山爲と申儀に候

得共、實は私怨より起り申儀にても可レ有レ之候哉

一　旗本中困窮至極に罷成、宿直に夜着を所持不レ仕輩多く有レ之由、儉約の儀僉議にて、衣服の制を初め其外御新令追付出申旨に候、阿部豐後守殿その外大目付横田備中守等と御穩密御用被二仰付一候由、町奉行へは御新令被二仰出一書付を先日見申候、二挺立の船御停止、江戶中駕籠六百挺有レ之候を、三百挺の外不二罷成一候、端々の遊女堅く停止、是等は皆奉公人拂底に罷成候て、旗本中も難儀仕候故、遊民を禁んぜられ候故に候、其外にも有レ之候得共覺不レ申候、遊女御制禁の事、第一風俗に懸り、一段の儀に候、萬一隱置候はゞ勿論曲事、其上吉原の者ども見合次第に取可レ申旨に候、吉原へ取候て傾城に仕候へば、最早一生彼境に沈候故、自然と遊女に罷成候者無レ之筈と申候、其上脇に遊女有レ之候ては、吉原衰微仕候故此被二仰出一候て、吉原の者共無二油斷一見出候て奪取申筈に候、此事は新井氏などの助言有レ之候哉と存候、先日被レ申候は、鼠を猫に取らせ申候理にて候、人の取申よりは直ちに同類にとらせ候へば、殊の外恐れ候て鼠絕申由咄被レ申候、先は發明成儀と存候、衣服の事など追付相知可レ申候、承り申體、旗本衆紬、絹、羽二重よりの衣服不二相成一候、拜領の御紋付は各別、其外は不二相成一候、陪臣も絹、羽二重の外不二相成一候、是も主人より拜領候はゞ各別に候、此度は諸番頭へ被二仰出一、銘々勝手によき儀其方より申出候へとの儀にて候、下より申上候て其上にて被二仰出一由に候、是も御尤成事に候、上より一通り儉約の儀被二仰出一候ても、下にて左樣に不二罷成一儀共有レ之、つかへ申候事

も出來候て、結句難儀仕事も有之物に候、下より申上候て其上にて其の通りに御僉議の上被仰付事、是も一通りの事にては無之事に奉存候、今月廿六日御元服、來二日將軍宣下御用相濟、御政務の事專ら御僉議の段、乍憚結構の御儀に候、近世下の難儀幷に風俗等のとは人主曾て御構無之、如何樣にも不苦儀の樣に罷成候、侯國共に一統の通病にて候、然る處文昭院樣此處に御心を被用候事、難有御儀に候、執政の御衆ヶ樣に御政務に被用心候儀、是皆文昭院樣御遺德故と奉存候、其上井伊殿、秋元殿、間部殿、廉潔正直の御人の由申候、天下の儀賴母敷奉存候、井伊殿初め諸老中何れも間部殿をしつし被申候て、諸事文昭院樣御時の樣子に、少も相替る儀無之由、これも御殊勝成こと見事に奉存候、それとも間部殿御事御手柄と感申儀に候、孝は百行の本と申す儀今更存當り申候、間部殿御親父へ至孝の人と申候、只今見申候へば、日夜御幼主樣御保護の體、且又萬機に氣を付被申候儀、有君を知て有己を不知と申通りに候、至誠人を感じ申と相見へ申候、大臣衆何も倣ひ申候、新井氏へ久々親炙にて、能事ども聞被申候故、常人とは各別成所ども有之候、此頃も一兩事承申儀有之候、感じ入り申儀に候故、殘の衆もそろ〳〵感化仕體に候、先日も御役人御僉議の事にて、阿部豐後守殿或人を被致選擧候處、此人働は無之樣に見へ申者に候得共、阿部殿被申候は、才智は餘り無之候得ども、如何しても正直成人にて候間、此人に被仰付候はゞ相應に働も出可申候、某此人を見込申儀一事有之候、先頃御法事總奉行被仰付候時分、諸役人等へ申談候は、此度御法事に付て、

宿房へも、又は御宅へも不レ參の人は一人も無レ之候、この人計不レ參候、ヶ樣の儀に付ても存合せ候處、心立直に有レ之と目利仕候由被レ申其人に罷成候由、是等は輕儀の樣に候得ども、氣の付申處各別成事に候、子游が澹臺滅明を目利仕と同事に候、井伊殿是も常人にては無レ之と相見、各別の處見請申旨新井氏被レ申候、常憲院樣御代、松平美濃守威勢最中の事にて候、年禮衆多候故、井伊殿例年の外門の內に假屋を打候て、そこへ取次の者出罷在候て禮衆請取被レ申候、玄關まで通し不レ申候、井伊殿屋敷外門の次に中門有レ之候て、玄關迄は遠故にて候、其節阿部豐後守殿飛驒守と申時分、井伊殿緣者に候ゆへ內意被レ申候ば、來年頭の禮に美濃守殿可レ被レ參候、此人無レ隙儀に候間遲可レ有レ之候間、十五日過にても、右假屋を指置候て、兎もかく美濃守殿被レ參候まで被二待合一候樣にと、家老中迄被二申入一候、其後家老の者ども井伊殿へ申候へば、とかくの返答無レ之由にて候、いつも十五日まで右假屋差置候處、其年に限り十日過早々假屋引申樣にとの事に候、十五日過候て、美濃守殿被レ參、玄關迄遙に通り被レ申旨に候、ヶ樣の風儀今以每に相見へ申候、此風儀失不レ申儀は德川の御家のつよみと奉レ存候、間部殿事は長く候間追て可二申進遣一候、天下の事猶可レ爲と古人の申儀只々存當候(此一條　癸巳二月廿八日書)

一　江戶表諸物價踊貴に付御沙汰可レ有レ之次第、新井氏御老中まで被二書出一候紙面の寫、近年諸物價高く罷成候仔細、並御沙汰可レ有レ之次第、文昭院樣御在世の內奉行中に御尋被レ成候に付て、去年十二月被二差上一候書付の趣委細披見仕、彼書付の大要は諸物の價高く罷成候子細五ヶ條にて、御沙汰可

有ㇾ之次第は二ヶ條と相見候、皆々其謂れ有ㇾ之事には候得共、某愚存の處は總じて如ㇾ此の事に付て、御沙汰可ㇾ有ㇾ之次第は、縱へば醫者の病人を療治仕候如くにて、其病の出來候子細をつまびらかに見屆候て、次に藥方をば立べき事に候、若其病源をつまびらかに仕候にも不ㇾ及して、猥に藥をあたへ候においては、事により候て其病勢をたすけ候て、終には治し難き事にも可ㇾ至候、然るに彼書付の趣を見候に、近年以來諸物の價高く罷成子細の事は、一ッに、金銀の品下り候に付て、諸物の價も上り候由の事、二ッには、近來の風俗物每に美麗を好み候て、其入用も相增候處に、諸物の元價も高く成來候故に、賣出候處の價も高く成候由の事、三ッに、武士方にて買求められ候物の代を返濟なく候に就て、買出候物の價をまし候て其利をつくのひ候由の事、四ッに、當地の屋敷、町屋等數多く成來り、人別も多く罷成候に付て、諸國より入來候ものども賣餘し候と申事なく候て、其價も高く成候由の事、五ッに、當地の風俗在々所々にも及候て、農民等も過分の事共有ㇾ之候事に付て、田畑作物等の品々まで其價をまし候はずしては其用不ㇾ足候故に、米穀初て諸物の價高く成候由の事、次に、御沙汰可ㇾ有ㇾ之次第は、一ッに、京、大坂、長崎其外遠國の奉行所に於て、諸物の元價を減じ候仕方も候はゞ當地の價も減ずべく候由の事、二ッに、過奢を禁じて儉約を貴び候て、貴賤大小其分限に應じ、事輕く仕候樣に可ㇾ被ㇾ仰出ㇾ候歟の事、是等其大要にて候歟、某存候處は、近世に至候て物の價高く成來候いはれ、其病の生じ出候處も其端多く、其病の長じ來候事も、一朝一夕の間にも無ㇾ之候得ば、たとひ遠國の諸奉

行中諸物の元價を糺され候共、三四十年來次第に增加り候價を一旦に減ぜらるべき事は、萬々に叶ふべからず、次に、又風俗を正され候て、過奢を禁じ儉約を貴び候御制法候とも、其風俗の破れ來候本源を塞がれ候事於レ無レ之は、其法久敷たちなほすべき事共不レ被レ存候、某愚存の及び候處は、諸物價增加り來候事、其端は三ッ、其大本は只だ一ッより出候とは存候、其大端三ッと申候は、一ッには、御政務により候、二ッには、天災により候事、三ッには、風俗により候事、此等の三ッによりて、物の價は年々に增加り候き、但天災と申事も、風俗と申事も、皆々御政務により候て感じ致處と承り候得ば、其大本は只御政務の一ッにより候とは存候、又御政務と申事も、人主の御心より出候處にて、下にしては其御政務を輔佐被レ成候御方の御心に相係り候へば、是御政務の出來候大本とは存候、然るに唯今の御事に於ては、上御幼稚の御間に候へば、御心より出て候て御政務可レ有レ之御時節には無レ之候得ば、執政の御方に文昭院樣御他界の御時迄、御心に被レ懸候御事を、其御心と被レ成候て、御沙汰の次第有レ之候はゞ、士民の風俗も改り、天地の災變の生候事も無レ之、天下の財用もゆたかに事足候べき御事、何の難き事か可レ有レ之候はんや、況や物の價を平かに被レ成候程の事は、論ずるにも及ぶべからず候、甚憚少からず候へども、某愚存の及候處、諸物價高く成來候大端を擧候て、各其類を分、其下にわかち記し、又御沙汰も可レ有レ之事共をば付紙を以て申入候、甚以恐入奉レ存候事共に有レ之候

御政務によりて、諸物の價高く成候條々

一　金銀の數多く成候事、近年以來世の人申沙汰し候處は、金銀の品下り候に付て諸物價は上り候由申候、奉行中の書付にも、總じて其品多きものは下直にて、少き物は高直成事に候と記され候、某存候處は、金銀も又物にて候、其數多く候へば、其價賤く罷成候事、諸物と替り候こと無ㇾ之候、但金銀の數多く候て、物の價高く成候事は十にして八ツ九ツ、金銀の品下り候て、其價高く成候ものも十にして一ツ二ツは有ㇾ之候　我國六十餘州の地東西南北の限り有ㇾ之候て、其國により生じ出し作り出し候諸物も、其數の限り有ㇾ之事、古今の間定たる理に候、元祿以來天下通用金銀昔よりは其數倍し候て、當時は下賤のものゝ手にも皆々に入り渡候へば、買求候人の數は昔より倍し候得共、諸物の數は常に其限より外に出來るべき所もなく候得ば、諸物の價年々に高く成來候て、是又定たる理とは存候、當時の米の價、昔大飢饉抔申候時の價と相同じく候といへども、乞食非人の類一人も出來候はざるを以ても、金銀の數多くなり候て下賤の手にも入渡り候事、推量せらるべく候て、此事の子細を詳に論じ候には事長く候へば爰に記し盡し難く、先大略をあらはし候

一　諸物の運上を被ㇾ召上ㇾ候事、附長崎表商買の法を被ㇾ改候事、諸物の運上を差上候に付ては、各其買出し候物の價の中より、差上候程の金銀を取出し候はでは不ㇾ叶候故に、其價の增加るべきは勿論にて候、一物の價の高く成候へば、夫に連る萬物の價の高く成候謂は、諸奉行中書付の如くに候に付、運上の事出來候以後は、諸物の價高くならざるは無ㇾ之樣に罷成候、然るに文昭院樣御代始運上の事共御停止に候得共、諸物の價旣に高く成來り候上の事に候へば、指て其價の減じ候程の物も無ㇾ之候、凡諸物の

價一度高く成候後に、元のごとくに賤くなり難く候事、皆々此例に候歟、犬地震大火事の度々に高く成候もの初の價に減じ難く候事、皆々如レ此候次に長崎表商買の法改り候て、白絲の類をはじめ藥種等に至る迄、唐物の價高く成來候事、其大本は御運上の事に起り候と申候、此表の事子細は其事多く候て、詳かにしるし盡し難く候故に、大略をしるし候迄に御座候

一　大錢を鑄られ候事、大錢いまだ盛に行はれ候はぬうちに、文昭院樣御代に成候て御停止の事にて候へども、此事の害は深からぬ樣にも候へば、御料の國により上納仕候處と、御用承候職人町人へ御拂に出候處と、未だ不レ被レ及二御沙汰一候に付て御勘定方難レ立、御引替も不二相濟一候得ば、是等の事によりて其價を增加候ものも可レ有レ之歟

一　當地御倉に納候御米の數減候事、昔は御倉に被レ納候御米の數多く候て、御軍用の備事足候而已にも候はず、御切米の事多くは御米を被レ下候により候て、御切米出候時分必ず賣米の價は安く成候趣、近年以の外米の數減じ候によりて、御切米を初て多くは御金を以被レ下候故によりて、御籏本の人々皆皆其飯米を買求められ候得ば、御切米の出候時分には、必ず賣米の價高く成來候、自今以來も此弊改り候に不レ及候はゞ、當地米穀の價何を以て減じ候時可レ有レ之候はん哉、總て萬物の價は米穀を以て本として、諸國の物の價は、天下の御座所の價に準じ候物に候へば、此儀に於ては、諸物の高下すべき事の至要とは存候

一　御料の御政法ゆるび來り候事、御料の地は國家の大本に候故、御代々御法最詳に候て殘り候處もなき樣に及ㇾ承候處に、近年以來代官の染中と、權勢の人の心だに相應じ候へば、その政務の善惡にもよらず、支配の處も替り支配の地も增し候樣に成來候に付て、其政務に心を被ㇾ留候にも不及、其下にも心懸相勤め候輩は、其名主庄屋抔と申者と心を通じて、不ㇾ可ㇾ然事のみ多く候て各其家を富し候へば、農業などの事力を用候にも不ㇾ及、日々に過分の行跡共有ㇾ之事、奉行中書付の如くに候歟、又是により候ては、一寸の田地を持候はぬものども迄すぎはひをゆたかにし候へば、男女の奉公人など申す者年々に減じ候歟譬へば在々の者共、昔の如く繩にて髮をからげ候など申事は一人もなく候に付、伽羅油元結又は小間物抔商候て妻子心安くはぐくみ申候、此一事によりて諸事の事推量あるべく候歟

一　御城中を初め御普請有ㇾ之候所々其數多く候て、諸大名も增候御手傳の役少なからず候事

一　御本丸を始候て所々の御殿を作られし數も多く、其外御建立の寺社も不ㇾ少、本所の川さらへ、中野の犬小屋等の事に至候迄、上に御物入の事は申に不ㇾ及、夫等の御手傳被ㇾ承候諸大名の物入其數を不ㇾ可ㇾ知候、是によりて諸國の士民及ニ困窮ㇾ候のみにあらず、當地を初め京、大坂の町人等の借金買懸等の公事訴訟も其數多く成來、世の風俗も又破れ候事共も出來候歟此事に付ては、賄賂の風も盛に行はれ、其餘よからぬ事の始まり候歟、殊には又上の御財用不足とて、金銀の品改まり候事を始て、種種の新法出來候事、此事を以て其大體とすべきものか

一　所々御成の事、其家々にて御殿を作り出し、御儲の費有ㇾ之候ばかりにもあらず、諸大名より物を被ㇾ贈候事も、又其費尤以不ㇾ少候ひし歟

一　上より被レ下物の事、其頃一位樣に被レ進候物を始め、姫君樣方へは不レ及レ申、御近習の人々に被レ下候物共に至候迄、其數多き御事の由申候歟是等又御財用盡し候事の大本の一事にて有レ之べく候歟

一　諸大名の常例の外献上物共の事、此事又諸國士民の及ニ困窮一候事の一端にて候歟

一　諸大名火消役を被レ承候所々多く有レ之候事、其頃には諸家にて人數を多く召寄、日傭の者其多く雇ひ置、或は町家を借り、或は屋敷を買候て其人數をわかち置候、其外火消の衣類諸道具を初、提燈蠟燭等に至る迄其費多く候ひし歟

一　當地町役多く成候事、古來職人町人等屋敷を持候を利德有レ之樣に心得候處、犬扶持並生類の事を初め、次第〳〵に公役の物入多く相成候へば、店賃を增候て其費を償ひ候得共、其利古來の半を減じ、又は度々の火災に借屋作り出し候事も叶ひ難く、地代抔申事にて貸候得共、猶々其利薄候て、賣拂置候にも、近年の風俗にて種々の物入など申事共も候處に、近年以來御用承候職人の有德成輩は不レ及レ申、是等の輩の手代等迄も價をも論ぜず家屋しきを買求め、又は武家の者ども買求候者も出來候へば、沽劵も高く成候に付ては、店賃も古來の如くには不レ減の故に、其店借候て商賣仕候者どもゝ、其々賣物に店賃程の價を增加へ候事と相聞候

一　武士屋敷並新町多く出來候事、此事奉行中の書付にも相見へ申候、但事の子細を詳に考候に、古來は諸大名を始め候て、屋敷狹く數も不レ多候處に、五十七年以前の大火事の後、居所燒失の時の爲に

下屋敷抔出來候上に、諸家中江戸詰の人數も相增候樣に成候得ば、此輩を召置候處狹く候故に、屋敷の數も相增し、又此輩の扶持の料を貯へ置候爲に、藏屋敷なども出來候て、次第に屋敷の數は多く成候、是一ツ、近年に及び候て火除のためと申ことにて、御城近くの屋敷を初て他所に移され候こと出來候處に、可ㇾ然處には、諸大名、中屋敷、下屋敷、藏屋敷など申物にふさげられ候故に、江戸の邊地に於て屋敷とも被二引渡一候に付て、次第に御城下も場廣く成候て、是又これ等の屋敷〳〵にて朝夕の便り宜しかるべき爲に、町屋をゆるされ候歟、是二ツ、新に御建立の神社、佛寺等も出來候に付ては、其門前の町屋もゆるされ、又例に準じ候て、古來は門前の町屋無ㇾ之由の寺社にも其願をゆるされ候處も可ㇾ有ㇾ之歟、是三ツ、是等の風俗過侈に至候て、有德の町人又は諸家中の輩までも、下屋敷抔構候て其數も加はり候歟、是四ツ、凡御城下の地年々に廣く成り候事、古來には二三倍にも可ㇾ及候へば、米穀野菜等を生じ出候地の減じ候のみにあらず、家屋敷を作り出し候料、其家屋敷に來り聚り候者へ、衣食、器具の類、其數も亦古來には二三倍し候半歟、然ば六七十年以前の事を以て今日にくらべ候はゞ、昔の江戸とは二ツにも三ツにも倍し候計りに候、然らばいかほどの物共入來共、是等の人數を養ひ立候はんには、其物の數は常に不足して、其價の增加り候事其謂なきにあらず候歟

右十二條、是皆御政務によりて、諸物價高く成候事共にて候歟、但十二條の內、其半は只今其弊を被ㇾ除候事共有ㇾ之候得ども、三四十年以來諸物價は次第に高く成來候子細をしるし候故に書あらは

し候、又是等の事に付て、此後の御沙汰の爲にも可ニ罷成一候歟と存候故に候

天災によりて諸物の價高く成候條々

一 當地度々火事の事、火事の時其災にかゝり候ものは、人々住居をも作り、器財をも求め候に付て、諸職人の工料も商賣物の價も高く成候處に、其災にかゝり候輩は、又各住居をも作り、器財をも求め候程の料を取出し候はんと仕候故に、彼是合て物の價高きことを增し候、其程過候ても一度高く成候價輙く減じ兼候歟

一 大地震附箱根、荒井并長崎等御普請の事、此事近世の大變に候故に、上の御物入も不レ及レ申、諸大名衆御手傳の人數も多、公私の費量り不レ可レ知候歟（公私の費風俗やぶれの事、御政務の條下御普御手傳の所と其理同じく候）

一 京都火事の事、京都火事の後諸物の價高く成候事は、當時の火事の例に同じく候、但諸國にて用ひ候もの、京より出候物共多候得ば、京の物價高く候へば、其弊天下にも及び候事は勿論に候

一 大坂高潮の事、此外火災も候歟、此儀京都の火事と同じく存候

一 東國砂降候事、此儀多くの地荒廢り候のみにあらず、諸國へ御役金を懸られ、又大名へ御手傳被ニ仰付一候て、砂をも被レ除候へば其流弊殊に甚しく候

右五箇條、皆是天災により候て諸物の價高く成候事共に候、但此五箇條とも過去候事に候得共、是又近年諸物の價高く成候て、其後價減じ兼候子細をしるし候に付て書出候

風俗によりて諸物の價高く成候條々

一　御籏本の風俗昔に替り候事、武家の事は商人抔の商賣に付て、不時の利を得候樣なる事は無レ之候て、地方にても、藏米にても、凡一年の入候處各其限り有レ之候て、其限りの外にはわづかにも增加り候ものは無レ之候、然らば其一年の入を以て、上は公役に隨ひ、下は家從を扶持し、中は親族傍輩の付屆を初、衣服、飲食、住所、器財等の用を足候事共に候、古來は御籏本の衆中皆々小身にて、御陣御上洛又は駿府御往來、遠州御鷹野抔申事、一年に一度も二度も有レ之候得共、財用も事足候歟、貧窮し候とて御奉公勤兼候人有レ之とは不レ聞候、この儀當家の御家風厚く候て皆人外の餝り無レ之、每事に付て實を務られ候故に候、然るに寛永の中頃より一倍の御加增をも被レ下、御金をも被レ下、拜領金をも被二仰付一候事ども打續候て、其上又諸大名の子息、舍弟など御番入も有レ之候に付て、是よりして御籏本風俗衰へ來候て、美麗なる事を好み、過分の事ども出來候て、三四十年以來は殊に其衰へ甚しきに至候歟、近年に及び候て、米の價は高く成候へども、諸物の價も又高く成候へば、物成御切米など賣候處の金銀にて事足候にも不レ及して、御切米被レ下候衆中は飯米を買求められ候程の事に候、上は尙々事足らぬ事に候へども、當時の風俗に候へば、每事世に隨ひ候はでも難レ叶候へば、御役料拜領し候衆中を初め、御役を勤め兼られ申候、其外の人々は猶々御奉公も仕屆兼られ候歟、其子細を承候に、其大本は皆其實ならぬ外の餝の事共に事足候はぬ故にて候、夫に付ては又種々承苦しき事も風俗の樣に

罷成候事ども候歟、古來將軍家の代々の事はふるき事にて候、上は今の代の引合にも難㆑仕事に候、信長、太閤兩代の風俗は、外を飾候事を宗とせられ候へば、內の實は少く候て、每事美麗成事共に候、然るに當家の御家風表裏に引替りたる事にて、前に記し候如くに候ひし事、則天道の好み候處にて候へば、上も下も皆々天心に御かなひ候事と相見へ、終には天下は當家に歸し奉り候ひき、然ば御旗本の風俗昔の如くに候はんは、天下の事御長久なるべき基にて候へ共、近年以來の如くに成事返す〴〵も勿體なき御事に存候、只如何にも仕候て昔の御家風の失果候はぬ事は、いか成天下長久の御祈禱にもこえすぐれたる御事に可㆑有㆑之候歟

一　御旗本の衆中當地にて召連れ候供の者を初め、或は御役により、或は御使に付て、遠所へ往來の人數多く成候事、御軍役の御定も有㆑之、又時により事に寄候て、本役、三分一役などの御定有㆑之候き、就㆑中寛永五年九月二日に出仕、江戸廻り召連候人數の御定を被㆑出候時、是より少き事は不㆑苦候、多く召連候儀無用たるべく、此定の儀は人をも致㆓吟味㆒召抱候爲に候としるされ候、乍㆑恐御尤の至成事、此等の事に付候ても、當家の御家風の難㆑有御事と存候、然るに近年は次第に人をも多く召連候はねば不㆑叶樣に成來候、殊に遠來の往來にはその人數も多く成候て、日傭雇の者など申輩を召加へ候得ば、其物入多く出來候事は不㆑及㆑申、道中宿々の爲にも不㆑宜事共も有㆑之候、惣て是等の類輩いか程召連候共、何事の役にか立可㆑申候はんや、乘々非常の變も候はん時分、なまじひに大勢のもの

は逃走り候事も候はゞ、天下の人の存候はん處如何可ㇾ有ㇾ之候はんか、總じて御籏本之衆中、武邊の事におゐて、天下の人に沙汰せられ候事も候はゞ、其身の越度のみにもあらず、上の御威も薄く成候端にて可ㇾ有ㇾ之候、是等の事の如くに外を餝り候て其實もなく候事共は、當家の御家風に相背きたる事に候へば、願はくは寛永の頃の思召の如く、たとひ人ずくなに候共、中間、小者迄も慥成家從をも召仕候樣之御定も有ㇾ之、人にも其心得有ㇾ之樣とは仕度候事に候

一　武家方召仕候輕き輩を始め、町方の下々迄、男女の衣服美麗に及び候て、當地の風俗在々所々に及び候事、此儀奉行中之書付にも相見へ候、此風俗の出來り候事、條々子細可ㇾ有事に候、近年以來現金安賣など申事出來候て、衣服の類其見分の宜樣に仕なし候て、心安く求られ候物共有ㇾ之候、殊には元祿寶永の間、上より被ㇾ下物夥敷事共にて、拂物など申候て其物の恰好より心安物候き、又出仕の度度に、同じ物も着用難ㇾ仕候、又召連候者も見苦しからぬ樣にとの事にて、家從へとらせ候衆も有ㇾ之候を、其家從も亦賣かへ候などと申事も有ㇾ之それらの物を買取候て商賣し候者も有ㇾ之候故、下々の手に入安き事共出來候へば、下々の衣服以の外美麗に罷成候、町方にて召仕男女も又是に準じ候歟、近年以來下々の男女の給金なども增加り候事、是等の子細も可ㇾ爲二其一端一候、然ば此事下々の風俗過分に成候計共不ㇾ被ㇾ申候、上の風俗下々移り候とも可ㇾ申歟、但寛永之中頃にも如ㇾ此事有ㇾ之候て、諸大名出仕の日、大下馬にて下々の衣服を取剝取ちらされ候事共有ㇾ之由、古き者の物語を承候き

一　近年以來現銀安賣と申事出來候て、却て過奢の本と成候事、三四十年以前世之人不勝手之事共に付、買懸りなど濟し兼候に付て、掛賣と申事共難澁に及び、賣候もの買候者も、難儀成樣に罷成候に及び、呉服屋にて始て此事を仕出し候處に、其價も心安く、又買物不案內者の爲には宜しき事にて、此商賣の道はやり出候て、其外の者にも此事多く出來候歟、買求候事の心安く候に付ては、おのづから買求候て用候人も多く成候て、世の風俗美麗成樣に成候得共、衣服の類を始て見候處は宜樣にても、昔の物にくらべ見候へば、次第に麁相に成來候、是又外を餝り候て內の實なき謂たるべく候、又此事により候て、元のまゝに買賣仕候商人共のすぎはひ半を減じ候故に、此等の輩が方より賣出し申候物の價は減じ兼候、何れに付ても宜しからぬ事とは存候

一　近年以來衣服の染物を始め、諸物に珍敷ものはやり出候事、近年の時行物にて、衣服の類にも、染物の色にも多く成、其外膳部の類、皿鉢の類、はな紙袋、たばこ入の類ひにも、年々月々に珍敷物共はやり出し候、昔より是等の風俗の事、以之外に不ㇾ宜事之由申傳候由に候、今日珍敷物流行出候へば、昨日迄も世にもはやし候物は、用ひがたき樣に成て其儘打捨候て、又珍敷物を買求候樣に成行候に付て、只一ッにて用足候物を、幾つも〳〵買求候樣に罷成實に無用之費とは此事を可ㇾ申候

一　近年以來御用承り町人共の內、有德に成候輩其數多く候事、金座、銀座、御普請方に懸り候職人商人を始候て、御用をも承候程の輩共、分限に隨ひ過分の御蔭を蒙り、俄に有德に罷成候者其數多く候、

上之御費も無ㇾ限、御役所〳〵の樣子も、事の體不ㇾ宜事共出來候、子細は不ㇾ及ㇾ申、此等の輩幷其手代抔申者に至る迄、互に過侈を競ひ爭ひ候風俗、よの常の町人にも移り、其害たる事悉くにはかぞへ難く候、近年已來の風俗を破り候事去冬順風無ㇾ之に、廻船ども入不ㇾ來候由にて、炭油の價日々に高く成、下々の及ㇾ難義ㇾ候、其後南風吹いて一日に船共入來、炭六萬俵迄は河岸あげ仕候所に、金座方へ貳萬俵、錢座へ三萬俵取候得ば、炭の商賣仕候者共方へ、わづか壹萬俵ならでは買取候はず、是により船入來候ても、炭の價減じ候には不ㇾ及候、但是等は私ならぬ入用に候へ共、此一事に付ても炭、油、鹽などを始め候て、諸物の價高く候事の端は相しれ候歟

一　近年以來僧俗共に種々の御願と申事多く相成候事、運上又は御請負など申事を初め諸寺諸社の願事種々數多く成、此事に付ては、諸國の輩當地へ入込人數多く、手入、付屆などと申事にて候、風俗をもやぶり、財用をも費候事共に候歟

一　商賣人の召遣候人數相增候由の事、近年武家方幷町人の下人共、物を持運候事を嫌ひ候に付て、輕き商賣仕候ものも、持運爲ㇾ仕候者を、分限相應に幾人も召抱置候はねば、商賣ならず候、其召抱候者の給金、又其衣類飯米の料を、其賣物の中より取出し候程に、豆腐、こんにやくなど申類まて、其價を減じがたき由申事に御座候

一　諸物の價高く候事、誠の價には無ㇾ之候由の事、奉行中書付に、當地の人多く成候に付て、何程の物も賣餘る事なく候故に、其價高く成候由相見へ候、此儀いかにも其謂有事に候へども、是は其一を知られ候て、其外の事を存ぜられぬにて候歟、近年物の價高く成候次第、先づ其價の高く成候上に、尙更價の增加り候子細多く有ㇾ之候、御用を始め諸家の用を承候町人は、近年の風俗にて、其諸役人は

不㆑及㆑申、其役人の召仕候小者、中間、門番などの類も、種々の付屆無㆑之候ては難㆑叶事共候得ば、其物入の費をば、賣上物の價を增してつぐのひ候、是一ッ、（同じ物を公儀へ差上候と、大名に賣申候とはもはや價も違ひ候、小身成家へ物を賣候には、彌價もちがひ候に付、おしはかるべき事に候）又其役人と申合、其代物をわかち取候事など有㆑之候由相聞候得ば、又夫程の所をも增加へ候、是二ッ、（近年は輕きものを差出し、わづかの物を賣候にも町人と申合、賣上の證文には其價を高く記させ候て、代物は町人と分取候事世の常の事に候、左樣に仕候はねば、外の所にて買取候故に、町人共必如㆑此に仕候よしにて候）賣物の代金を濟兼候所を考候て、其利の程の所をも兼て價に差加候て賣出候、是三ッ、此等風俗によりて物の價を增たるにて候へば、其物の元價に相應の利を加へ候と申事にては無㆑之候、然ば縱萬物の元價を正され候とても、風俗改り候はぬ內は其價の減じ候はん事、某抔の愚存には心得難く存候

一　日傭の類多く成候事、日傭の者にも其類あまた相わかれ有㆑之候歟、御普請方の日傭の者、大名火消のやとはれ候鳶の者、又道中上下の者の類、年々に多く成候は不㆑及㆑申、近年武家方不勝手に成來候ては、然るべき大身の人にも、足輕以下の者日雇に仕られ候も有㆑之、まして小身の衆中は、常に人を抱置候事難㆑叶、步士、若黨以下雇者ども、供にも召連、使にも遣候事に成候に付て、町人にも是等の請負仕候者出來、邊土の町々には、此等の輩猶々多く、爰かしこの辻番所にも、五人七人宛寄宿仕候はぬ所も無㆑之候と承候、然ば是等の輩凡八萬を以て算へ候程の事にも罷成候歟、近年奉公人のすくなく候と申も、皆々此類の者に罷成候て、世を心安く渡候故と存候

一　駕籠かき幷二丁立船の事、貳三年前迄は、駕籠の數三千程も有㆑之候歟、然ば駕籠の者は六千人、

其妻子をかゞへ入候はゞ、壹萬には餘るべく候、其後駕籠の數を減じられ候へ共、未だ男女三四千人には可レ及候、次に二丁立の船と申ものも只今七百艘に至候て、是又二千餘人の水手たるべく候歟

一　近年以來狂言芝居の數增候事、古來は堺町、木挽町兩所にて狂言之芝居二間有レ之候處に、中頃より一間宛增候て四間には罷成候、近年は棧敷を二階に仕り、見物の男女早朝より夜に入候迄、充滿仕候由及レ承候、芝居數は元の如く四間にて候得共、見物の場は、昔より八間相增候圖にて候、其外茶屋など出來候て、珍膳美食以の外美麗成事共にて候と申候、此事皆々御用初諸家の用承候町人共の、振廻などと申事よりはやり出候事に候、然るに諸寺、諸社に小芝居と申ものも所々に出來候、此外に又昔は當地にて手も及候はぬ舞子、遊女などの類も出來候歟、都て此等の事長く候ては、世の財用を費し、風俗をも破り候て、よからぬ事のみに候歟

右十二條、是皆風俗により候て諸物の價高く成候事共にて候、此餘こまごまの事共も可レ有レ之候得共先づ此等大だち候事と存候、御政務により候事共は、上つかたの思召次第に事改り可レ申事に奉レ存候、風俗により候事共は、猶更御僉議の上を以て武家方町方、在々への御制禁なくては叶ひ難く可レ有レ之、縱御政務を正されしとても士民の風俗改り候事もなく候はゞ、諸物の價も減じかね候のみにあらず、御政務も世に行はれ難く可レ有レ之候歟、天災により候事においては若其災も可レ有レ之時之事共、兼て其御備有レ之にしくべからず候歟

癸巳二月十一日

一年號辨、一國喪正議、以上二部別冊寫之

兼山秘策　第一冊　終

兼山秘策　第二冊

起正德三年至六年

五月廿八日　以下五條

先日私屋敷へ參候節、乍レ序新井氏へ立寄一時ばかり語申候、今度儉約の儀可レ被ニ仰出一候に付、先達て諸組頭役人等の存寄をも御聞候て、下情を被レ盡候以後、一統之御定も可レ有レ之との儀にて、存寄可ニ申上一旨御申渡候處、壹人も一料簡申上候者無レ之、只一通り儉約相守り御奉公可ニ申上一との紙面にて候、或は自分の借金等申上候者も有レ之候、是とて人材無レ之儀相知申候、然處佐田玉淵と申鍼醫、紙五枚に書立候て御政務へ懸り候儀申上候、間部殿感じ被レ申候て今度の總まくりと被レ申候、又御納戸

頭今井五郎右衛門と申人、當代御政事風俗等の儀被二申上一候由、是は公儀表の沙汰不レ承候、右玉淵を感じ被レ申候に付て存候へば、間部殿には感高にて可レ有レ之と存候、殘の衆いかゞと存候、五郎右儀承候へば、大目付中紙面被レ見申候て、面々勝手の儀御尋被レ成候處に、御政務の事申上候段難二心得一旨にて、たわけざたに罷成、右書付返し被レ申候處、五郎右押返し斯樣の序に無レ之候ては、私共存寄可二申上一時節無レ之候、狂人の沙汰に罷成、又は御仕置に被二仰付一候ても、私壹人の儀に候へば存切申上候、此上無二御構一御上被レ成候へと申入候由承候、定て其上はしゐて抑留被レ成間敷候間上り申たる物と存候、いまだ沙汰不レ承候、然處に昨日も服部藤九郎（是は私共同役にて無レ之候、新井氏弟子木下平之丞殿弟子と罷成、只今奥向の儒者にて候）罷越、五郎右事申候てたわけ者と申候故、某急度いましめ申候、御手前など是を左樣に被レ致批判候事不二似合一儀に候、世上の鼻かけ猿どもが笑申どて、儒者など夫に同じ申事不レ可レ有レ之、藤九郎などは合點不レ參儀とて嘆息の體にて候、此度被二仰出一候趣は、組頭は組切、役人番人等は其役切、番切に僉議致し、無用之費に成候儀可二申上一旨にて候故、支配無レ之又は役儀等無レ之者は勤方無レ之故、可二申上一儀も無レ之候、然れば私共あづからざる儀と存候て罷在候處、私共同役の内人見又兵衛、木下平三郎初として、不レ殘銘々に申上候故承合候得ば、或は借金の事、又厄介人有レ之儀、又火災に逢申儀など申立候、紙面にて候故私申候て、私儀は申上間敷存候、同役の内壹人異見を申立樣に候得共、各とは又わけも違ひ申候、其子細は昨今被二召出一、はや借金等の事申立候事も不レ可レ然候、若何とて上げ不レ申と御目付中御咎め

候はゞ、其節申樣も可ㇾ有ㇾ之候間指除れ候樣と申候へば、木下氏など少し不快と見へ申候、其後新井氏へ右の所存申候得ば、成程尤に候、此度の事無役の者迄觸申儀は、御目付中心得違と存候、其故寄合中にも上げ申者も有ㇾ之候得ども、某は上げ不ㇾ申由被ㇾ申候、源美三宅も私同意にて上げ不ㇾ申候所に、先日御目付中より重て申來、人見、木下など同事に上げ可ㇾ申旨に候故、又新井氏などへ致㆓相談㆒候て申上候は、私共儀御前代被㆓召出㆒、差たる御奉公も不ㇾ仕候內當御代罷成候、此以後如何樣の御奉公も仕候て、乍ㇾ恐御厚恩の萬一をも奉ㇾ報度所存にて候、自餘の輩に不ㇾ可ㇾ準者共に候得ば、別て可㆓申上㆒儀無ㇾ之旨相認遣申候、外に手紙差添最前可㆓申上㆒候處此度被㆓仰出㆒候儀は儉約の儀に付、一統被㆓仰觸㆒候へども、存寄書付候て上げ申樣にとの儀は、勤方有ㇾ之衆に限り可ㇾ申儀と心得候て、何共不㆓申上㆒候處、重て御觸に付別紙の通申上旨申遣候、かふじたる儀に候へば、遮て御政務の儀に及申候は、如何樣少相違の方にも可ㇾ有ㇾ之候、なれ共今井、佐田抔さりとては志有ㇾ之者共と存候、是を皆笑申候處に間部殿感じ被ㇾ申儀、是又殊勝成事に存候、扨は新井氏も流石と存候由、今井五郎右事餘程の學者にて候由、有用の學を好み平生周禮を見申候、佐田などより學問可ㇾ有ㇾ之候間、此度申上儀候も佐田より能可ㇾ有ㇾ之候と被ㇾ申候、此兩人其內知人に罷成申度駿河臺へ罷越候はゞ、今井へも押かけ參り候て逢可ㇾ申共存候、佐田は私駿河臺屋敷同町に佐田養逸と申人有ㇾ之候、定て此人と同家たるべく候、養逸は同町に候へばあれへ罷越候はゞ、知人に追付可㆓罷成㆒候、左候はゞ玉淵等も逢可ㇾ申にて可ㇾ有ㇾ之

候、玉淵は御弓町に居申候、今井氏は牛込に居申候、是程風俗衰へ候得共、未だ斯樣の人有レ之故快
存候、されば歷々御役人の內、壹人も右兩人程の人無レ之段歎ヶ敷奉レ存候
一　新井氏被レ申候は、文昭院樣御在世の時分、諫爭の路を被レ開候樣にと申上候、上にも御同意に被二
思召一何とか可レ被二仰出一筋も可レ有レ之と存候內、御代替に罷成候事殘念の一ッにて候、間部殿此儀兼
て聞置被レ申候故此度儉約の儀に付ても、下の存寄申上候樣にとの儀にて候、是も根有レ之ての儀と被レ
申候、扨被レ申候は、上より諫爭の路を被レ開候ても、下の申上候儀益と可二罷成一儀は有レ之間敷と存候、
其子細は常憲院樣御他界の時分、江戶中の落紙狂歌等限りも無レ之候、餘りの儀に御老中より制禁可レ
仕と被二申上一候得共、文昭院樣上意に制し申儀無用に候、下々申立候事御聞被レ成益を被レ取候儀も
可レ有レ之候、譯も無レ之儀は御捨被レ成候得ばよく候、其儘言はせへと被二仰出一候、其時分某など奉レ感
儀に候、然處に右千萬の落紙等一ッとして上の用に立申儀は無レ之只譯も無レ之事共にて候、是にて存
候へば、只今下々に言せ候ても、一ッも益の有レ之儀を申上間敷存候旨新井氏被レ申候處、私申候は、
それは御心得違ひと存候、諫爭など申上候者は、落紙狂歌など仕候ものにては無レ之候、有志の人は結
句輕卒成仕方は無レ之、且は落紙等に有レ益事無レ之候とて、正義の人有レ之間敷とは不レ被レ申候由申候
得ば、新井氏感服にて候
一　先月初旬新井氏へ參り、具足櫃より一封の物差出候て封を切り私へ見せ被レ申候、私見終り候て

及ニ感涙一候て申候は、近頃珍敷物を見申候、此一事は後日に漢字に直し百世へも傳へ候て、後代忠臣の心得にも可ニ罷成一もの、又は此事には文昭院樣御盛德後世人主の鑑にも可ニ罷成一儀に候由申候、萩原近江守殿扨々あぶなき事にて御座候、新井氏無レ之候はゞ、唯今迄被レ用候て如何樣の害を可レ仕も不レ存候、中々難レ除儀に候處、此人一身にかへて申上候故埒明候て、社稷之福と奉レ存候、此子細を根源より申候に、罪は常憲院樣に歸し申候儀に候、金銀不レ殘用被レ盡天物暴殄にて其罪に當り、急に御他界にて候、一時に府庫空虛にて、文昭院樣御位の初めひしと御つまり被レ成候、外の儀は如何樣ともに候へども、差當り將軍宣下の御入用、且又禁中御即位の御入用に用可レ申物無レ之候、是に御難儀被レ成、何卒つとまり申樣僉議仕候へと老中方へ被ニ仰出一候故、老中方思案にあたひ不レ申候に付、萩原を召候て相談の處、流石材力有レ之者に候故、少も難儀の體無レ之、如何樣にも致し此度の御急用に候間辨じ申樣可レ仕候、御心易候被ニ思召一候樣にとの儀故、老中殊の外大慶、上にも先御安堵被レ成候、然處に金銀を又吹替候て、其出目を以て右御物入の埒明申候、其節は先如何樣に成共致し、右の大禮濟申樣にと上下存する外無レ他候處に、萩原受取申樣被レ申候故、其外に僉議は無レ之候、夫に付萩原は御奉公のものに罷成、上にも御滿足との儀に候故、其砌は間部殿も萬端直に相談候て埒明候故に、諸人皆萩原を恐れ申儀常憲院樣御時之通に罷成候、老中なども一同に譽被レ申、此人なくては不ニ罷成一樣に御座候、然處に新井氏畢竟此人御用被レ成候ては天下危く奉レ存候旨委細に申上、扨畢竟此人御退け不レ

被レ遊儀に候はゞ社稷を滅し申候、左候へば私儀御厚恩を蒙り罷在候上にては、君父の仇と奉レ存候、君父の仇には不レ戴レ天の法にて御座候、左候はゞ老衰のやせ腕に候へ共、彼者刺殺申程の儀は仕兼申間敷候間、打果し可レ申と奉レ存候、然ば恐に若輩より聖賢の書を讀候て、春秋の大義を承候處に、君命も無レ之人臣として君傍の惡人を殺し申儀逆罪同事に候由、急度叱誡有レ之候儀難レ犯奉レ存候、某進退爰に窮り申候、所詮彼と打果し死申候、命を上へ奉り候て幾度も極諫致し、白髮の頭を剃られ申外は無レ之と奉レ存候、某此者と兩立仕覺悟にて無レ之候、此者被レ用候はゞ私儀は御奉公是迄と取極め申旨に御座候、其書付早速間部殿より被レ入二上覽一候處、即時に萩原役儀御取放御座候、右諫書の草案と、間部殿自筆の返答に、諫書早速入二上覽一候處驚被二思召一、即時萩原近江守役儀被二召放一候旨被二仰出一候間、左樣に心得可レ申旨の奉書の兩通見せ被レ申候、新井氏極諫の儀は勿論、上の容諫の速なる儀、とり〴〵不レ堪二感涙一候

一　先頃大目付中へ諸侯の聞番被レ呼候て、御老中へ音信付屆有レ之時分、間部、本多へは差除申由承申候、是は不レ可レ然候、間部、本多兩所へも御老中同時に可二心得一候、且又若年寄中へも其通に候、御老中附屆有レ之時分、若年寄中殘し申間敷旨被二申渡一候由、間部壹人は何方よりも音物受不レ被レ申各別に見候所、扨は間部殿も同事に罷成候哉と申者有レ之候、此儀間部殿曾て不レ被レ存儀に候、右大目付中被二申渡一候趣聞被レ申驚き被レ申由に候、今度阿部氏と婚儀の時分、常々付屆無レ之方よりも不レ殘皆

祝儀物參候故、いづれも斷申候て返し申候、如何の儀と不審に存候處、扨は右大目付中被二申渡一候故と、初て致二合點一候由新井氏へ被レ申候由に候、是等の儀皆土屋相模守殿の所爲かと申候、只今御老中上座にて諸事先此人發端と見へ申候、殘りの衆も土屋に讓り被レ申體にて、御子息婚禮の時分諸大名よりの音物取申故、此度間部殿を同類に被レ致度と大目付中へ左樣に被二申渡一候と聞へ申候、土屋、大久保兩人同事にて候、大久保は氣分兎角本復は有る間敷と申候、土屋は極老に候間、久敷は勤め相成申間敷候、秋元殿御壹人耆の星と申候、井上、阿部は間部殿、秋元殿の風を學び被レ申候歟、然らば以後は只今より能方に可二罷成一とも奉レ存候

一　はや久敷後に候、或時土屋殿壹人御城に居殘り被レ申、間部殿へ逢申度由にて扨被レ申候は、人多きにては如何に候故居殘り申入候、別儀にても無レ之候、我等事御先代より連判なども被二指除一、急度御あいしらひに御座候、前々より連判抔を被二指除一候ては、被レ下物其外之儀迄、自餘の衆とは御格も各別成儀に候、嚴有院樣御代酒井稻葉など其邊にて候、然る處自餘之衆と何の替り申儀も無レ之候、此儀は御自分御心得一ッにて如何樣にも罷成儀に候、且又御當代御幼少にて候得ば、老中威勢付申事上の御爲にて候、我等共輕く候ては上の御威光も無レ之候、此處第一の儀と存候、今以我等共自身に泊番勤申儀不相應之儀に候、若年寄中にても不レ苦事にて、萬一の變有レ之時分は、何も御城邊能在儀に候得ば、手に逢不レ申儀は無レ之候、兎角我等共を人の輕しめ申儀は御爲に不レ宜儀に候間、急度人に重ん

じ候樣に仕度、忝く自分の爲に申上にては無レ之候間、御料簡被レ成候樣にと被レ申候、間部殿被レ申候は、先以左樣の御心付も、上の御爲を被二思召一候故と乍レ憚感じ申儀に候、左候はゞ各樣へ御威勢つき申候て、上の御爲宜可レ有レ之候哉、又は不レ宜儀も可レ有レ之候哉、其處合點難レ仕候、御遺業にも黨を立權を爭儀を御戒置被レ遊候、其上只今各樣に威光付候はゞ、當分上の御爲によき樣成儀も可レ有レ之候得共、畢竟御成長の節に罷成、各樣へ一度付申威勢御取返し被レ成候事上にも難レ被レ成候儀と存候、又は外聞なども迷惑成儀と申候、まして段々に右御威勢付申を、一通りに御取返し被レ成候はゞ、其節各樣にも御難儀にては有レ之間敷候哉、上にも御難儀成事に候へば、其時分は兎角御取返し不レ被レ成候ては御爲不レ宜候、御自分樣儀自餘之衆と品をも替申樣に仕候事、私壹人の心得にて成候由被二仰聞一候は、何共合點難レ仕候、文昭院樣御遺言の由私に申候へとの儀に候哉、一毫疑の儀も私自分の心得にて、御遺令を僞り申儀は不二罷成一候、次に又御泊番の儀各樣御苦勞成儀に候、別て御自分樣の儀は御老體にて御大儀奉レ存候、去共此節御奉公之儀に候得ば、御爲を被二思召一候はゞ、斯樣の儀專一と奉レ存候、其子細は御代替りと申上も御幼稚に被レ成二御座一候へば、無事に候へばこそ其通に御座候、萬一の變も有レ之時は大切至極の儀に御座候、左樣の節各樣御城へ御立合不レ被レ成候ては、下知き、不レ申儀可レ有レ之、本多中務、私兩人儀は、御預口より内の儀を受取罷在、其外の儀は不案内に候、たとへ大變には及び不レ申候ても、少々の儀にてもはや外の沙汰に及候て、御爲惡敷儀を各樣御城に御

有合被レ成、御即時之御下知候はゞ、外へ洩聞へ不レ申候て事濟申儀も可レ有レ之候、若年寄中儀は一段輕く候故、下知さゝ兼可レ申候、勿論泊番之節は、各樣同事に心得候樣と申渡し候こそ可レ仕候得共、常々輕く存候ては、急には難二相成一儀とも可レ有レ之候、然ば各樣御泊番指除申儀御相談次第の儀には候へども、私は不同心に奉レ存候、且同役を御增候て、間等に御勤被レ成候樣に被レ成候事は各別に奉レ存候、定て其元に御覺可レ有レ之、文昭院樣御病中、此節の儀兼て無二御心元一、其思召各樣被二仰出一、總御留守役を御究可レ被レ成由に候處、各樣御請に御尤に奉レ存候へ共、只今急に左樣の役被二仰付一候に及不レ申候、私共罷在候儀に候へば、御氣遣無レ之儀と被二仰上一候處、左樣に存じ候へば老中役を御殖し可レ被レ成と被二仰出一候處に、各樣又被二仰上一候は、夫にも及不レ申候、私共內として隨分相勤可レ申候、御氣遣被レ遊間敷由被二仰上一候處、左樣に存候へば御滿足可レ被二思召一、御安堵被レ成候由にてやみ申候、去共其節老中に被二仰付一候人をば御定置被レ遊候間、只今其衆を御同役に御極め被レ成事、則文昭院樣上意同樣と奉レ存候、扨又各樣只今迄より諸人重んじ候樣に私共心得可レ申旨承届候、右申候通文昭院樣御遺命などと僞り申儀は不二相成一候、左樣に無レ之候て只各樣をおもんじ候へと申渡候ても、諸役人合點仕間敷候、斯樣の節は、只人柄の宜者をば諸人重んじ申物と奉レ存候、輕き役人などにてさへ人物おとなしく候へば、其人の分在よりは人々重んじ申と見へ申候、まして各樣の儀は天下の執政にて候へば、御人柄さへよく諸事輕々敷無レ之候はゞ、おのづから天下の人重んじ可レ申候、誰か輕んじ可レ申

候哉、御人柄にて人々におもんぜられ被レ成候て、御威勢付申儀は何程付申候ても權成儀にて、夫こそ上の御爲何寄と奉レ存候、兎角私心底は如レ此にて、只今被二仰聞一候事外之衆も被二仰談一、又は御三家にも御相談被レ成宜樣被レ成べく候由被レ申候へば、土屋殿被レ申候は、先此趣御自分に御聞候て置れ候樣と被レ申、座を立被レ申候、後日井伊掃部頭殿、又間部殿に老中泊番之儀輕々敷も可レ有レ之候、如何と被レ申候由に候、其時分間部殿被レ申候は、是は定て自分樣御壹人の御料簡にても有レ之間敷と察申候、唯御自分樣へ被二仰入一御方有レ之候哉、先日私へも左樣に申聞候御方候故、斯樣〳〵と返答仕置候由被レ申候へば、井伊殿殊の外感服の體にて、御尤至極と被レ申事やみ申候、此一事にては間部殿の儀御察可レ被レ成候、其外御寄特成事共幾ツも有レ之候得共、委細には不レ被レ申候、如レ山などと申人にては無レ之候、如レ玉の人と可レ申候、只うつくしく溫厚にて、しかも條理わかり候て見事に御座候、此度女中衣服の制禁も、先天英院樣、月光院樣へ急度被二申立一、御城御奧向より改り申候由來り申候、御兩所樣初め自餘之老中も、いづれも此人を執し被レ申體に御座候、間部殿手柄と奉レ存候、只壹人にて手廻り兼可レ申候、秋元殿計にて御座候、其上間部殿遠慮深き御人にて、其上不遠慮にて少も張合被レ申候ては、中々成り申間敷候故、自餘より出申儀などと其分に致し置れねば不二相成一儀も有レ之と見へ申候、夫を間部殿一人を責申事無理と存候、あの地位に罷在候間、此人などの振舞申儀中々難レ成儀と奉レ存候、此紙面いつもの如くに候、以上　（五月廿八日）

閏五月九日　已下六條

當月六日暮前新井氏へ罷越候處、其日新井氏居屋敷坪數不足の分（是は文昭院樣御代、拜領の時分より被二仰出置一候へども、御用地にて急にあけがたく候に付、先其外拜領にて移り被レ申候、此分最前被二仰出一候通被レ下候由にて、則只今の宅の隣にて百七十坪拜領にて候）被二下置一候旨被二仰出一候にて、御禮は最前に相濟候得共、此度無二相違一拜領仕候案内旁御老中へ罷越、夫より直に御城へ被二罷出一、何時可レ被レ歸も難レ計旨家來申聞、私も閑談可レ仕と遠路參候處、殘念には候へども罷歸可レ申と既に立申處に、御城より被二罷歸一候てよくぞ相尋候とて、其夜八ッ時分迄語申候、先屋敷拜領の祝儀申入候得ば、されば重々難レ有仕合にて、御城へ罷出越前守殿に逢候て可二罷歸一と存候處に、御前へ被二召出一、幸登城の次てに被レ下候とて、御帷子御單物抔拜領致し、其御禮申上候處に、けふは目出度いと上意に御座候、乍レ恐御いたいけ成御儀難レ有仕合感涙候由被レ申候、（此頃萩野事記事殊記レ之、可觀小說にも載レ之）

一　今度將軍宣下御祝儀、水戸殿へ土屋相模守殿、今壹人は井上河內守殿、其外若年寄衆、高家衆以下も被レ參候處、よき最中土屋殿御庭見物仕度由にて路次へ出被レ申候、俄の儀にて掃除なども不二仕置一候故、取込被レ申候樣水戸衆被レ申候へ共、實は前日より土屋殿より被二申入置一候由に被レ申候、此度將軍宣下の儀も、目出度と申內に悲を忘れ申間敷儀には、凡御家來としては其心得可レ有レ之儀に候、況や股肱一體の臣として、無二是非一祝儀之座には臨み被レ申候とも、儀式迄にて仕舞被レ申候筈にて候處、庭見物などと申儀一向難二心得一仕方に候由、間部殿抔も被レ存體と承り申候、相伴の老中以下もあ

され被レ申樣子に見へ申由に候、此批判成程尤成儀と奉レ存候、老中方など御仕方は最初ながら大事の儀と存候

一　私申候は、總て御代に罷成被レ仰出レ候儀共、間部殿へ御老中方相談之上、間部殿より御自分へ御示談、一決にて御老中へ被レ仰入レ候體に御座候、是は間部殿御一分の御料簡とのみ被レ仰入レ候儀に候哉と申候へば、新井氏被レ申候は、間部殿より手前に相談の儀は內證の儀に候得ば、畢竟は間部殿御料簡と申物にて候へ共、我料簡を間部殿迄申達の儀は、老中方にもよく存知の儀にて此度も其儀沙汰に及申儀有レ之候、儉約の儀相極り申儀に付、上の御幼稚の間は長く急度定法に罷成儀に候へば、中々一往の事には被レ仰出レがたく儀に候故、今以其僉議未レ相濟レ候、其に付間部殿、井伊掃部殿へ被レ申候は、文昭院樣御代斯樣の儀被レ仰出レ候節は、新井筑後守に御相談被レ遊其上にて相極候て、筑後守へ被レ仰付レ文言など相定り申儀に候、此度抔も其通可レ被レ成候哉、但各樣御僉議の上にて一決致し候はゞ、林大學頭など可レ被レ仰付レ哉と被レ申候處、井伊殿追取て被レ申候は、其儘文昭院樣御時の通に被レ成可レ然と手前は存候由被レ申候へば、御老中の内（多分秋元但馬守の被レ申候か）文昭院樣御存生の時さへ筑後守に御相談被レ遊儀に候へば、まして只今は左樣の人に異見をも承不レ申候ては不レ罷成レ儀に候間、掃部殿御申候通其儘御前代の通に被レ成可レ然候由被レ仰候由に御座候、私新井氏へ申候は、是は珍重の儀に存候、左樣に候ては御自分にも御勤被レ成よき儀に御座候、其上井伊殿、秋元殿など一向愚成人にて、如何樣共只今迄

の通と被レ申にては無レ之候、何も發明成御衆に候處、左樣に御申候儀は、日頃御自分御料簡無二殘所一と信向故にて可レ有レ之存候、然れば行々はあの御衆も、御自分へ御相談有レ之樣に自然と可レ被レ成候樣に存候、童蒙求レ我の時節可二罷成一と存候て、別て珍重成儀に候由申候、此處三美有レ之と奉レ存候、第一は、間部殿無我の人、其上毛頭おこり被レ申氣味無レ之、御老中と和し被レ申候故にて御座候、第二は、新井氏被レ申處理に當り、且又爲レ人も兼て御老中方被二聞及一故にて御座候、第三は、御老中方自分の威を振候て權を專に被レ仕候事少も無レ之樣に御座候

一　金銀吹替之事、何とも急に難レ成儀に付、只今銀十貫に七貫目程赤銅交り候、是を吹拔申に銀夥敷入申儀に候、其上其雜用是又夥敷儀に御座候、第一銀天下に夫程無レ之候、其内不意に鉛かな山より出申候か、又は銀出申候か何とも近年の内に直り申儀も可レ有レ之候、左なく候ては勘定衆などよりの積五六百年もかゝり候て、其後は元の銀に可二罷成一由に候、去とも頃日色々料簡致し、二十年程の内には先元銀可二相成一とつもり申候、此事只今の大難事に候、是に付ても荻原事天下へ害を殘し申事、古今に無レ之程の大賊にくさやつに候由被レ申候、私申候は、左樣に候はゞ銀の相場御あげ被レ成可レ然存候、兎角金銀は天下の寶に候へば、昔のごとく品をよく被レ成候樣に、百年二百年立申ても御捨置間敷儀は御尤と奉レ存候、然ども左樣計にては金銀の直り申時分迄天下の難儀、兎角可レ申樣も無レ之事と存候間、其内銀の相場を先あげ候て、天下一統金一兩に六十目に相定度物に奉レ存候、是は上の御下

知次第の儀に奉レ存候、此相談を被レ成二御覽一候樣にと申候得ば、新井氏只今相場を改申儀も成申候へども、夫にては人を損じ不レ申候ては、成不レ申候、三十人ほども損じ申候はゞ成可レ申候、其樣は銀の相場をさげ申儀、是皆兩替屋共の仕る儀にて候、銀相場を下げ、金と兩替の間に利を取候儀に候、惜きやつ等にても何も申合にて仕候故、僉議仕懸り候ては大勢人を損じ申儀に候、頃日深美新右とも申候へども、新右合點不レ被レ致候、米穀と申ものは、能き米は味うまく、惡敷米はたべにくきに付善惡かへられぬ事に候、其外布帛の類は、能き布帛は濃やかにて膚當りよく、惡敷布帛は着用に惡敷候故に、是又善惡にて價高下仕事尤にて候、金銀と申物、善惡はいろの詮議迄にて候、只今用ひ申す惡銀を用ひ候ても替り申儀は無レ之候、何によつて銀を只今拔群さげ申候哉、たとへば玉などの樣にかざり物などに致し申儀に候へば尤に候、金一兩六十目と申御定候處、惡銀とて八十目にも仕事難二心得一儀にて、夫を申候へ共新右抔合點不レ被レ致候由被レ申候故、私申候は、遠くは申不レ及候儀にて知れ申儀に候、只今の錢永樂通寳抔の古錢に比し候ては、至極に色惡敷品下り候へども、昔永樂錢にては金壹歩を一貫に致し候得共、唯今貳貫文に仕などと申儀は無レ之候、惡敷錢に候得共通用の上は古錢と替り申儀無レ之候、總て金銀貨幣は時王の制令次第に御座候、米帛とは替り申由申候へば、新井氏錢の事は扨て氣付不レ申候、近き事にて能埒明申とて欣被レ申候、扨私申候は、三十人か五十人にも被レ成候へ、此者共故に天下の難儀に罷成儀に候へば、一々はり付に被レ成候ても不レ苦候、これを御用候て天下

の難儀其儘御覽候事、天地の心にも叶ひ申間敷候、天地の全德仁を主と申儀候へども、少しを害して多を養申儀は天地の心にて、況や罪過難レ逃もの共にて御座候、是は合點難レ仕由申候へば、成程其通りの由被レ申候、何卒難レ成儀外にも有レ之かと奉レ存候、さて來年比よりはや少々銀能成可レ申と被レ申候、如何の儀に候哉子細不レ承候、只今銀吹替申事大分の銀入申儀に候、此鉛天下に無レ之候、其上御入用至極大分の事に候、只今上にも金銀無レ之候故何とも不ニ罷成一候、其に付色々工夫致し候處、とかく上に御損不レ被レ成候ては不ニ罷成一候、天下の惡銀をそろ〳〵錢にて御買上被レ成候て、其御買上被レ成候を、段々に吹替被ニ仰付一候樣に仕候はゞ、當分世上に錢も澤山に罷成候て能可レ有レ之候、金銀は只今すきと山に出不レ申候、錢は何程も出來申物にて候由、此料簡も成程おもしろく御座候、色々に工夫を費し被レ申候と見へ申、間部殿にも先日染み〳〵と禮を被レ申候、片うでの如くに存候間、隨分息災に居被レ申樣にとの事に御座候由承候、左樣に可レ有レ之儀と奉レ存候、（段々少しづつよき銀に罷成候へば、此好き銀をおとりにして世間にかくし置、古銀をすひ出し申べきにて候、奉行中吹替候へば有銀へるへると御心得候て、世上にかくれ候古銀を吸ひ出し申事不レ被レ存候由被レ申候）

一　間部殿賢明の事文昭院樣御他界の砌、奧方御三所迄有レ之、就レ中月光院樣御儀御他界の日より御威光自然に各別に罷成候、女中の儀に候へば、色々附く者共中より浮說共も有レ之候、一日天英院樣老女中を以間部殿へ被ニ仰入一候は、御所生の御子無レ之候ても、鍋松樣御儀日比御養子にても有レ之候へば、各別の儀に候得共左樣に無レ之、外に此以後御便りに被レ成候方も無レ之候、京都は御故鄕の儀に

候へば、京都へ御越被ㇾ成御葬被ㇾ成度被㆓思召㆒候、此儀殘りし老中方にも相談致候て給候樣にとの儀に候間、間部殿御時に御返答被㆓申上㆒候は、此儀難ㇾ譯儀ども候はゞ殘の老中抔へも爲㆓申聞㆒候て、其上にて是非の御請可㆓申上㆒候へども、是は僉議にも及不ㇾ申儀に候間即刻御請申上候、鍋松樣御儀、御所生にては無ㇾ之候得共、御嫡母と申候時は、御前樣より外に誰を可ㇾ申哉、其上先上樣御存生の内より御前樣御養子に可ㇾ被ㇾ遊筈に候得共、御夫婦樣御相談の上、兎角只今迄御養子被ㇾ成候へば、御育ち不ㇾ被ㇾ成候間、此度は格を御替可ㇾ被ㇾ遊由にて御苗字を世良田に被ㇾ遊候、是は御前樣にも御相談の上にて、態と左樣に被ㇾ成候御儀に御座候、然れ共此以後御嫡母樣の御儀に候へば、御一生はなれ不ㇾ被ㇾ遊候て御養護被ㇾ遊候儀簡要に奉ㇾ存候、近頃恐入申儀に候へども、先年一度京都を御出被ㇾ遊御一生の内ふたゝび京へ御歸可ㇾ被ㇾ成と被㆓思召㆒候はば御不義と奉ㇾ存候、此處を第一御覺悟被ㇾ遊候樣にと被㆓申上㆒候由、其後天英院樣より又被㆓仰出㆒候は、先日の儀は少御間替被ㇾ成儀共有ㇾ之候故にふと被㆓仰出㆒候、然る處越前守被㆓申上㆒候所一々尤至極に被㆓思召㆒候、左候へば此事すきと思召切られ候間、老中抔へ申儀無用に可ㇾ仕旨被㆓仰出㆒候由、其時間部殿又被㆓申上㆒候は、如何樣の儀私へ被㆓仰聞㆒事有難く奉ㇾ存候、此以後とても思召寄られ候事何によらず私迄可ㇾ被㆓仰聞㆒候、私儀は御存知被ㇾ遊候通、幼少より先上樣御心安被㆓召仕㆒者の儀に候へば、御隔心可ㇾ被ㇾ遊儀は無㆓御座㆒候由被㆓申上㆒候、是等など指當り無㆓殘處㆒御返答と奉ㇾ存候、此度女中方衣服の定出申時分も、間部殿より先天英院樣、

月光院様へ被二申上一、只今倹約の時分に候故老中僉議致、第一女中衣服の儀申出候、然ば第一上より倹約不レ被レ遊候ては法立不レ申儀に候間、向後御近習始め衣服倹素に罷成候様、急度被二仰付一可レ然奉レ存候旨被二申上一候得ば、成程被レ得二其意一尤と被二思召一候、左候へば老中方より急度書付越し被レ申様に致し候へ、夫を以て可レ被二仰付一由に御座候、御兩所様ともに賢女の由申儀に御座候、勝田帯刀殿（月光院様御舎弟）當御代に罷成御加増被レ下候砌、松平兵部大輔殿（兵部大輔満武後改右近将監、文昭公同母弟）招請にて、向後別て可二申合一旨にて色々馳走御座候、其後月光院様御聞被レ成候て、兵部大輔殿へ被二申入一候は、近比存の外成儀と存候、御自分御儀只今時分抔、急度おも〳〵敷被レ成候てこそ御爲にも可レ然候、然る處帯刀事は若輩者の儀に候處私兄弟にて候とて、俄に御呼候て御馳走抔被レ成候儀御似合不レ被レ成儀と存候、其上若き者に候へば、萬一私などをかうにいたし、驕申氣味も出來可レ申哉と是のみ無二心元一存候處、御自分抔より左様に結構に御あしらひ被レ成候ては、此者の爲大きに宜しからぬ儀に御座候、此者の爲不レ宜候得ば、畢竟私爲にも大きに不レ宜、近頃御恨に存候由急度被二申入一、兵部殿殊の外弱り被レ申由に候、上野の准后もとより追從成る人にて、常憲院様御時は松平美濃守に御取入被レ成候て、御前よしにて御座候、文昭院様とは殊の外あひ不レ申候て各別に罷成候、然る處に御他界已後、月光院様へ被二仰入一候は、天台に秘密の祈禱有レ之候、至極御秘法にて御自身にて御執行被レ成儀に候、文昭院様御病中御願も有レ之候はゞ、執行可レ被レ成と被二思召一候得ども、御願も無レ之、其上其節少御別行之御障も有レ之、

御執行不レ被レ成候、當上樣御繁昌の儀祈禱可レ仕樣にと御賴も有レ之候はゞ、御執行可レ被レ成候由被二仰入一候處、月光院樣御返答承事成儀にて候、辱被二思召一候得共御賴被レ成間敷候、第一被二仰聞一樣作二推參一合點難レ仕候、先上樣御存生にて候得ば、天下の爲と申當上樣御爲にも是に不レ過御儀に候、唯今當上樣御幼少にて天下の主に御成被レ成候事、御仕合と申者も可レ有レ之候へ共、御不幸と申物に御座候、然る處先上樣御病中に、左樣の御秘法御執行も不レ被レ成候て、只今當上樣御息災の爲、御祈禱可レ被レ成と被二思召寄一儀私共承り候て、曾て異議とは不レ奉レ存候、其上天下の爲と申又は申にくき儀に候へども、段々武家の御厚恩御請被レ成候儀に候得ば、御賴不レ被レ成候とても、上に御繁昌可レ被レ成儀に候はゞ萬事被二指置一御執行可レ被レ成儀と奉レ存候、御賴被レ成候に及不レ申儀に御座候、兎角思召次第に可レ被レ成候、此方より御賴申儀仕間敷由御返答にて候由、御親父只今隱居にて帶刀殿に一所に居被レ申候歟、是は此以後何程御知人に罷成度と申者有レ之候ても、必御逢被レ成被レ下間敷候、私爲レ被二思召一候はゞすきと外交御やめ被レ成可レ被レ下候、されども只今迄御懇に被レ成候人を御捨被レ成間敷候、新敷御知人御求め不二相成一候樣にと常々被二仰込一由にて、是等皆文昭院樣御遺德故にて御座候、外戚等の勢を強く御抑へ被レ仰候を兼々能御存知に候故如レ此御座候、社稷の福に御座候

一　文昭院樣御質朴成御儀見事成事、いまだ西ノ丸に被レ成二御座一候內、講筵の上にて御咄に罷成候て、誰はしわきものなどゝ僉議有レ之候、新井氏被レ申候は、しわきと申儀聊爾には不レ申儀と奉レ存候、費

をはぶき候て節用申事、しわさに似申ものに候へば、萬一夫をしわきと批判致し候ては大成相違と奉レ存候、つかひ可レ申節に臨で金銀を惜申者は、しわきと申物に御座候、私事少存寄にて人をしわきと申事は、只今迄終に不レ申候、其子細はしわきは臆病の唐名にて候、命と申物は、金銀の様なる事にては無レ之、第一をしき物に御座候、其に合候ては至極輕き金銀をさへおしみ申し候間、まして夫よりおしき命をば捨兼可レ申と存候、左候へばしわきと申批判は、聊爾に不二罷成一候、實にしわく候ては、臆病者と存候間、人をしわきと申儀能心付候へば、大切の一言と奉レ存候旨申上候處に、御驚の御様子にて越前守方を御覽被レ成、向後しわきと申事を被レ仰間敷ぞと上意の由物語にて候、是等にて御生質の美成儀存やり申候、今以て御遺德殘り候て是程に御靜謐に御座候、御老中方の手柄にも候得共、第一は御遺德故にて候、（閏五月九日）

同年五月廿四日　以下四條

一　一昨日新井氏方へ罷越候處後藤參り居候故、金銀等の儀に付御用有レ之對談と存候間、他之座に指控、後藤罷歸候て夜四ッ時迄嘶罷歸候、此間御用の儀差支候て、氣分の養生も不二罷成一候故、氣分も惡敷候由に被レ申候、夫は五七年以前とは各別に可レ有レ之候、私抔も次第に精力衰候て年々に其覺有レ之儀候由申候得ば老衰にては無レ之候、六七年前は如何程晝夜精力盡し候ても、何の證も無レ之様罷成候故氣の毒成のみに候、少々遠き慮り有レ之儀を申候へば、間部殿の外合點いたさるゝ人壹人も

無レ之、曾て心を留めらるゝ事には無レ之候、頃日も土屋殿被レ申候は、倹約等の儀追付被レ仰出レ候とも、去々年出申候武家諸法度の樣成難き文言にては、天下に合點仕る者有レ之間敷候、林大學頭なども合點參りがたき事共有レ之由申候間、左樣に御心得候樣との事に御座候、去々年の御條目程の文言を大學頭合點不レ仕儀にては、儒者とは申間敷候、責て是程の事成共よみ候て、合點仕候樣にとの文昭院樣思召にて、色々御心を被レ盡候て天下の御政令に急度被レ仰出レたるものを、夫を守り申第一の衆ケ樣に被レ申候ては、其下々の人に守り申心無レ之筈と存候、土屋殿、林大學頭を最負に被レ仕候故、某抔をにくまれ候と被レ申儀にて可レ有レ之候得共、上を輕んぜらるゝと申ものにて候、天下の老中抔の被レ申儀にては、無レ之由被レ申候、唯今專茶湯を好被レ申、下屋敷にて每度宴會有レ之、それへ參り候者、御靜謐御繁昌の儀、又は追從輕薄のみ申候故、少も六ケ敷儀は曾て不レ被レ致レ貪着レ候て、一身のみ專に被レ仕候、諸役人などの不屆成儀ども急度責問被レ致事など殊の外嫌にて候、是も日頃ぬし達懇に被レ仕置レ候に付、惡事聞被レ申候ても色々其者のため申わけ被レ致候て、遁し候樣拵へ被レ申候、天下の御爲存知被レ申事は少も無レ之候、秋元殿よく候へども、是も無慾成處は拔群に見へ申候、世に申す上手つくると申類にて何の益も無レ之候、唯今上御幼主に候得ば、土屋殿、秋元殿など、被レ申次第にて候、間部殿力にて及申儀にて無レ之候、畢竟某抔は言用られ不レ申候へば引退候て濟申儀に候、間部殿には各別の身に候得ば難儀至極成事に候、頃日氣分滯申候、人の精根も限り有レ之儀に候間、あの樣

にては、續き被レ申間敷と存候、此人壹人にて天下の事を御苦勞に被レ致候、日夜力を被レ盡儀に候得共、一髮の千鈞を引申樣成事にて危き儀と存候、頃日もあの寸隙なき中に、文昭院樣御時公事沙汰の事を御苦勞に被レ遊、間部殿を評定所へ被レ遣候へば、今以其思召を忘れ可レ申儀にて無レ之とて、十日程の間毎日評定所へ自身被レ出公事聞被レ申候、殊勝なる事と存候て感涙に及申候き、然る處に六ヶ敷公事一ッ二ッ有レ之候が、是を第一間部殿御出の時分及二決斷一候て、役人中の智惠の程も相知れ可レ然儀と存候處、六ヶ敷公事をば指除候て、何の手間もいらぬ事而已沙汰に及申候、彼六ヶ敷事共、役人中の手前あやの有レ之、不審に及可レ申儀共をば差除き申候て、他日に埒明申候、間部殿をも騙し申候、是を後に聞被レ申候ても、老中初評定所諸頭、諸奉行一味に候故、何とも穿鑿不二罷成一候、先日も衣服の御定出申時分、いまだ不レ出以前に、町奉行より呉服所共出入の者方へ內證しらされ候て、急に五百目以上の物賣拂申候、斯樣成事にて無二是非一儀共に御座候由被レ申、大息の體に候、私申候は、難治至極の病人と存候、夫は大承氣湯の症にて、四君子湯用申樣成事にては、死に至り申儀無レ疑候、況や四君子にても無レ之、祈禱まじないの類にて日を送り申樣成事に御座候、去共間部殿壹人有レ之內は、未だ元氣有レ之と存候、何卒此人息災に候樣と念じ申儀に候、其處へ御城よりとて大卷の物二卷に間部殿の書狀相添參候、其紙面も見申候、何やらん一條〳〵自筆にて被二申越一候て、末に此間被レ盡二御精一候事は今に不レ初儀に候、此節別て可レ被レ盡二御精一候由被二申越一候、間部殿只今至極難レ致二處置一處にて

御座候處に、誠意懇切少も倦不被申、御爲を存知被申、大小の事一人して苦勞に被致候儀、扨て難有人と奉存候、秋元殿此砌身を捨て天下の事に任じ被申、殘の衆も嚴憚有之様に候へば、間部殿爲に能き儀に候へども曾て左様無之、少にても外の衆の耳に障候儀は遠慮の體に候由、殘念成事に奉存候井伊殿材力は相見へ不申候得共、家風を守り被申處有之急度相見へ、此人只今柱石の臣に御座候由新井氏被申候、是は文昭院様より御取出し被成置、只今社稷の爲に罷成申候

一 頃日年寄へ町人に材有之者有之候て申候は、物價騰貴の事色々御詮議候へども、左様の僉議にては、枝葉の上に候故中々參り申間敷候、兎角武士には諸役人、町人には金座銀座始め、呉服所等の頭立申者共の人柄御吟味被成候て、相應廉直成者其威權をとり申様に不相成候ては立申間敷由、紙二三枚にて謂れを委敷書立候て見せ申候、尤至極成事に候由被申候、私申候は、是は最初より申儀に候、人材を撰申儀政の第一にて候、何程勇者にても、刀脇指され不申候ては働不罷成候、上より儉約の法度何程水も不洩被仰出候ても、それを守り申人悪敷候ては、法に依て色々姦曲を致申候、先日も申通人材無之とは不被申候、上より御求め被成候はゞ出可申候得共、只今御老中初贔負を以御撰擧有之、間部殿など被仰候ても用不被申様子にては、不及是非候、第一御老中方は只今迄仕來候役人等日頃氣に入罷在候故、指替の儀不同心にて諸役人共も隨分手入を致し置候故、只今動し申儀不相成候、文昭院様には夫を能御存知被成置候、唯今御存生に候はゞ改り可申由被

㆑申候、如㆑此候故人材下に有㆑之候ても、誰有て擧可㆑申樣無㆑之候、其上江戶には人材無㆑之由被㆑申候、是は先よりも左樣承り候、是は如何の儀に候哉と申候へば、新井氏被㆑申候は、畢竟御旗本中不學故にて候、日頃學問會てはやり不㆑申候故、數十年以來此風俗に化せられて、一人も古風を守り申者無㆑之候、國方とは替り申由被㆑申候、私申候は、不學にても性質廉直成者有㆑之間敷とは不㆑被㆑申候、學文はやり不㆑申故人材無㆑之と申儀は一概の論と私は存候、但頃日致㆓料簡㆒見申候に、江戶には國方と替り候て、人材すきと無㆑之と申儀一理有㆑之候、譬ば物を煮申に、火氣盛に候て轉化の力强候得ば、其物能にへ候て殊の外風味よく候、江戶は天下の勢にて運化の力强候故、人材も風化の强さに依て一時に轉化仕候、其故名人伊豆殿、酒井空印等の樣成人材は、國方は火氣弱く候て煮兼申候故にて候、然共只今は餘りに煮過候て、殘の樣に罷成煮くさらせ候て、何の風味も無㆑之樣成物にて候、他國は火氣弱く煮兼申候故、唯今は却て生煮に候へども、いまだ風味殘り申樣成物にて候、此理は成程可㆑有㆑之と申候得ば、新井氏も殊の外感心にて御座候

一　儉約等の御書出の儀、新井氏抔存寄の趣はとくに埒明居申候得共、土屋など何角被㆑申候て于㆑今埒明不㆑申候、定て頓て出申にて可㆑有㆑之候と存候、文昭院樣御時の御格にて、ヶ樣の儀間部殿などへ御相談にて相極り其後孰れ被㆓仰出㆒候、先其分に罷成候へ共、只今は文昭院樣御在世の御時とは替り、御老中の方に政柄有㆑之候故、間部殿方より新井氏など料簡の趣其儘被㆓仰出㆒事、何も不同心の儀有

レ之かと是は私推量にて御座候、只今の時勢左樣に相見へ申候、此上にも御老中方間部殿など隔出來不レ申候樣に仕度候、和順にて候へば十の內二ッ三ッ程は行はれ申儀に候へば、責ての類に存候、金銀吹替の儀、先達にも申入候通、只今何とも不二罷成一儀に候、錢にて惡銀を上に御買上被レ成候て、そろそろ少し宛成とも、吹直し申樣にと申僉議も有レ之と見へ申候、又は只今上に灰吹等の銀中々吹替申體無レ之候、其上金銀共に上にも御拂底に候へば、吹替の雜用も夥敷儀にて不二罷成一候、そろ〳〵改め申にては二三十年も以後はもとへ戾り可レ申積り有レ之由、夫まで上方邊西國などの難儀に候へども、銀の相場をあげ候て可レ然旨私共も左樣と存候、夫共何卒はかどり可レ申仔細も有レ之候哉、とかく御僉議と見へ申候、外に何卒術も有レ之候哉、不二存寄一事にも可二罷成一と奉レ存候、此儀は省略いたし候

同七月廿三日　以下一條

一　昨日水戶樣御屋敷へ罷越、小池七左衛門に逢候處、此間中納言樣御城より御歸被レ成御物語被レ遊候由、御三家方御登城候處に、上樣御上段のきわに間部殿伺候、御三家御目見被レ遊候、宰相樣にも少引さがつて御着座候處、御三家樣へ是へ近ふと御直に上意にて、何れも御禮被二仰上一候處、御立被レ遊候て、御自身に御文庫を御取被レ成候て、右の御座へ御着被レ遊候て、間部殿にあけ可レ申旨上意に候故、あけ被レ申候處、御自身に御文庫の內より御鼻紙袋御取出し被レ遊、尾州樣へ被レ進候、其後紀州樣にも何やらん被レ進、水戶樣へは御巾着を被レ進候由、水戶樣是をさげ候て　わかやぎ可レ申と、一人難

㆑有奉㆑存候旨御禮被㆓仰上㆒候、御尤成御挨拶被㆑申候由、其後宰相様へも右のごとく近ふと上意にて、是も何やらん御取出被㆑成候て、是は間部殿迄御渡し、間部殿御取傳候由に御座候、宰相様御拜領無㆑之様にも申候 其後井伊掃部頭殿より俄に御側衆上使に御越候、何事にて候哉承候へと御城使の者へ被㆓仰付㆒候處、承候て申上候趣は、上様御膳被㆓召上㆒候時分、きすのひらき申候燒物少し御手附申由、掃部ぢいは食事はや仕候哉と御尋御座候、井伊殿歸宅以後にて候故其旨申上候へば、いまだ食事不㆑仕候はゞ此燒物たべさせ候へと被㆑仰候故、俄に二重に家致し候て井伊殿宅へ御側衆爲㆓上使㆒被㆑參候由、掃部殿殊の外難㆑有がりにて家來中迄祝儀の恩賜有㆑之、其後右の上使を招請、料理の上に金五枚、折紙の刀出し被㆑申候由七左衛門物語申候、兎角勝れ申候御性質と乍㆑恐目出度儀に奉㆑存候

一　先日井伊殿へ間部殿招請か、又は間部殿へ井伊殿被㆑參候か、其段はとくと不㆑承候、勝手へ參候衆直に見申候由にて物語の旨、きゝ申六太夫殿と被㆑申候、料理の上に盃臺出申候て、互に辭儀は有㆑之候へ共、終に間部殿先に呑候て掃部殿へさゝれ候由、間部殿御威勢驚入申旨に候、以上

一　七月廿六日の夜、尾張中納言殿御逝去に候、尾侯御事天下の御爲と申御笑止千萬に奉㆑存候、此度饅頭を參り候て御食傷とは申候得共、日比不養生御酒過申候て常々吐血被㆑成候由、當年廿五歲に御座候、夕七ッ時分より少々御滯にて御登城無㆑之に付、其後鳥居伊賀守殿爲㆓上使㆒御尋の處、段々御快候て、廿八日には御登城可㆑有㆑之旨御案內有㆑之候處、廿六日俄に御逝去に候、餘急成事故何角雜說ど

も有レ之候、鄭莊公と姜氏との事に似申儀有レ之、御母堂とも近頃迄御對顏無レ之樣に承申候、是は御家中と彼母氏と不和故より起り申候、實は御母子の間は無ニ別事一候、此度は醫師も手に逢不レ申體に候故、人の不寄も有レ之候、萬一彼母氏方より御近習家老中の方とがめ懸り候はゞ、御僉議なども起り可レ申哉と申沙汰に候、

因奥村子復兄中風の症來示の書

一 此度御病原第一御氣欝より差發り申と存候、氣欝候へばめぐり不レ申候、氣巡不レ申候へば血も滯り候處、一朝無ニ遠慮一御勞力過レ節候故差出申にて御座候、前書に韓文上ニ張僕射一書の儀申進め候、（過之上ニ張僕射ニ論ニ擊毬一有レ之候、是は子復兄中症は劇術より發起仕候故に候、元來人身五臟の繫絡甚微に候處、勞力過レ節候へば必貽レ害候、不レ足レ怪事に候）定て御覽可レ被レ成と存候、先年御要職以後、御氣欝の事無ニ餘儀一御事に候得共、是以御料簡可レ有レ之儀に候、聖人憂レ時の心と樂レ天ものと、並行不ニ相悖一との事能御存知の儀に候、學者は聖人を師と仕候より外は無レ之候、然れば面々相應に人力を盡し候上には、泰然として罷在候外は無レ之候、時勢不レ可レ爲候處は、雖ニ聖人一可レ被レ成樣無レ之候得ば、況や其外之者力及可レ申儀に無レ之候、ヶ樣の處唯今迄書上にて御僉議とは替り、事物に御應接被レ成候て、思召の外成儀も出來、其處にて御工夫も增進可レ仕候、是又能御學問にて候、韓退が攻を受て後、日頃路岐に泣申事を悔可レ申との詩作は致ニ失念一候傳霖が贈ニ張詠一詩かと存候、是は畢

不レ一事を嘆き申は、未だ大樣の分別にて候、魯班が雲梯の攻を受て難儀の時分、日比路岐に泣申候分別にては不レ參儀初て合點仕候と申儀にて面白存候て、人にも咄候得共句を忘れ申候、幹案、傳霖贈レ張詩未レ考、及弟後以レ詩寄ニ傳霖一、逸人云前來失脚下ニ漁磯一、苦戀ニ明時一未レ得レ歸、寄與巢由莫ニ相笑一、此心不ニ是愛ニ輕肥一、是見ニ名臣錄一、但與ニ此所レ言異也

一　金銀吹替の事に付委細被ニ仰越一候趣致ニ承知一候、新井氏頃日改貨議と申物を仕立申候て上被レ申候私に草稿を內見仕候へとて越被レ申候、扨て詳細成もの驚申候、上下二卷附錄一卷にて候、勿論かな書の物に候へども、文章の明白成儀、事情懇成事、しかも忠孝の意を不レ失候て、唐陸宣公奏議の外は見不レ申候、誠以經濟の材と存候、中々行はれ申間敷候得共、文昭院樣此儀は御苦勞に被ニ思召一候儀に候へば、擧て行はれ候樣に此方より申入候間、其上にての用捨はあなた次第の由被レ申候、尤に存候、御奉公も是迄と存候由に候、以後何とぞ寫し置申度存候、後世國史出來候はゞ、是等平準金貨の闕を補可レ申書と存候

小谷兄　七月晦日來書

一　尾公薨去の事兼て御病氣の沙汰も無レ之に付、江戶中上下共相驚き申候、去年御養君御成被レ成候て、此砌又々天下の騷動に可レ有レ之處、責ての儀と存候、去る十三日より少々御痁氣心に付、御近侍の醫何某藥御用被レ成候、輕き御病症と存御家門方は不レ及レ申、御家老抔へも沙汰不レ仕候、危急に相

成候て何れも御越被成候得共、最早御逝去の跡にて、松平攝津守殿抔殊の外立腹の樣子にて、其砌罷越見受候由にて澁江道玄院物語にて候、脇の取沙汰には、成瀬隼人正も立腹仕候間、右侍醫は其分には有間敷と申候

八月廿三日書

一　當十五日夜、新井氏へ晝より罷越深更に罷歸候、十六日亡女忌日に候故、十五日夕は例年何方へも不罷出候得共、新井氏方の會は珍敷と存候故罷越申候、新井氏即席の作始て見申候て驚申候、客と對談指て思案の體も無之處、和歌等段々出來、其上即席の詩に候へども、何も語熟し候て面白儀、即席に斯樣に能仕候儀は中々私共及不申儀とて、其節も感じ申儀に御座候、深見新右、南部權藏、益田助右衛門と申候て、本町五靈膏賣の主人富有成者にて、二十年以來每年仲秋には宴を設候て新井氏を饗應仕候、一兩年は酒食を新井氏宅へ致持參候、當年も右助右衛門亭主にて候、南部權藏始て逢申候、存外老成に御座候て珍重存候、當年十九の由に候得共、利發にて指出候處能奉公人と見へ申候、内に斷申置候由にて是も夜迄居申候、深見以下の即席は疾と覺へ不申候、私作も作り捨に仕留置不申候、尤いづれも見所無之詩に候へば、取集候て此度其元へ進申候に不及候、新井氏詩ばかり書付候て進申候、別記之一昨夕又參りて緩々咄申候、當月四日增上寺御廟出來に付、賣鐘を鑄候て懸け申候、鐘銘内々林家へ可被仰付かと申處、新井氏へ被仰付候、銘は新井氏筆者は深見氏にて候、夫に付

私へ相談の儀有レ之候て參り申候、銘は至極短く候得共成程古雅に見へ申候、只今迄日本にての鐘銘とは各別成ものに御座候、重て寫し候て進可レ申候、常憲院樣御廟の鐘銘をば林家著申候、此度は間部殿より新井氏へ申來候と見へ申候、老中の內林家贔負之衆も有レ之、新井氏とは不相口に候へども間部殿威勢强きと見へ申候、唯今は老中方間部殿へ急度仕たるあいしらいの由、是は流石老中方殊勝成事と存候、然ば籏本中過半は間部殿、次は新井氏を譏り申候故、間部殿を驕り候樣に沙汰仕候、新井氏をば林家より譏り立申候由見へ申候、其故林家と被二仰通一候、大名衆は何も新井氏を能不レ被二思召一候と見へ申候、先日承候へば宰相樣御發駕の砌林大學頭方へ御暇乞御出被レ遊、九ッ時より八ッ時過迄御出被レ成候由、御懇意成儀と皆々沙汰仕候、是も新井氏にて承申候、文昭廟鐘銘著申に付、御代々林家より出し申候銘共見申候處、「奉レ懸二武州東叡山嚴有院殿廟前一」と申題號にて御座候、繪馬の樣に候とて笑ひ被レ申候、東叡山と申候て武州より外には無レ之候、武州東叡山もをかしく候、此度は緣山文昭廟寶鐘と申題號にて、是は一面に大書致し、銘は小さくくるりと廻文に仕筈の由に候、銘も書經詩經の詞を取候て、隨分古雅に相見へ申候、十句程に可レ有レ之候、長くは不レ入ものと被レ申候、成程尤に候、

緣山は增上寺の山號三緣山と申候

一　頃日間部殿增上寺へ參詣にて候故、被レ歸候時分、越前が迎に可レ出と上意にて御玄關まで御出被レ成候、越前殿被レ參候へば越前歸りたるかと被レ仰候て御悅被レ成、越前殿に御抱かれにて入御被レ遊

候由、御城衆の端にて承申候、如何成奇縁に候哉、御親子様共に斯様に御意に被レ應候事、珍敷儀と皆々沙汰仕候、是は御馴染候故可レ有レ之儀に御座候、右之通に候へ共、殊の外越前殿を御おそれ被レ成候、御わやく被レ仰候時分、越前守に爲レ聞可レ申と申候へば其儘御止被レ遊候由、少にても悪敷筋の事は、越前守殿急度被二仰上一候由に候、左様候へば結構成御儀に候、乍レ恐奉レ感候御儀に候、越前守殿好人には極り申様に存候、何とぞ蒙養正しく候様に朝夕被レ致候へば、天下の大幸と奉レ存候、此度尾張殿御逝去の儀も承候へば、御幼少の時分近習之者悪敷候て、十二三より女色の儀有レ之由、幼少にて情實開候ては必夭死仕るものにて候、幼君養護の事大切成儀と存候、此處間部殿壹人の責に候、文昭院様もそれに似申儀ども有レ之と申候、其故御幼少之時分、御傍に舊功の衆後迄御取立不レ被レ成候衆有レ之、人々不審に奉レ存候、是は御幼少の時分御不養生の儀御進め申上候事不届と被二思召一候故にて候、兎角幼少の傍に居る人は、大事の儀と奉レ存候、

一 新井氏被二申承一候朝鮮人、赤穂義士の事聞候て感申候由、夫に付宗對馬殿家來など、五萬石にては千騎も可レ有レ之處に、其中に纔四十七人はすくなきと、是は謙退して申と見へ申候、夫を承候て朝鮮人申候は、左様は不レ存候、孟嘗君、平原君などが客三千人有レ之候得共、鶏鳴狗盗の類迄にて壹人も義士は無レ之候、赤穂侯はいか成人に候哉不レ存候へ共、能家來を多く持被レ申候にて推量候へば、當の君にては無レ之と殊の外感じ候、御奇特成事と存候、夫に付對馬守殿家老平田直右衛門と申者、先日

私義人錄をかり候て自身に寫し候由、是は朝鮮へ渡し候て、事の委細を知らせ可ㇾ申爲に御座候、とくより朝鮮人に此事の始終を知らせ度候へども、假名書の物計にて何とも難ㇾ成候處に、私義人錄にては無㆓殘所㆒通じ申儀に候間、早速寫し候て遣し可ㇾ申旨申候、此度私義人錄を文章に仕置候故、外國に迄四十七人の事相違申候、是は四十七人へは餘程の奉公かと奉ㇾ存候、夫に付義人錄に常憲院樣御儀を將軍と書き申候、外國にて見申候て一圓合點不ㇾ仕儀にて御座候、上樣を將軍と申儀、日本の稱號ながら至て不當の儀に候ゆへ、いか樣にもこの二字を改め可ㇾ被ㇾ給旨新井氏へ賴置候處、先日承候得ば、大家と改め候由被ㇾ申候、其許に有ㇾ之義人錄も、みな〳〵將軍之二字大家に御あらため可ㇾ被ㇾ成候、

(以上三條　八月廿三日)

同九月七日　以下三條

一　當月八日新井氏へ參候て深更に及申候、頃日は隙に罷成緩々休息候故、詩又は細工など致し候て慰申候て、氣分も段々快復候由に候、胄のしがみなど古式有ㇾ之、細工に致し候由にて相見せ被ㇾ申驚ㇾ目申儀に候、繪など餘程成申候、兎角英材と存候、去共英傑に候へば、詩文細工など爲ㇾ致置候事、其身慰には罷成候へども、歎敷儀と存候、先日劣朔迄遣申候私詩に「徒使㆔豪傑弄㆓雕蟲㆒」と申候、此儀に御座候、

一　新井氏被ㇾ申候は、頃日宗對馬守殿儒臣雨森東五郎より書狀差越申候、今度文昭院樣升遐に付、朝

鮮より弔慰の使對馬迄參り候に付、其答禮の爲當表使者被ニ申付一朝鮮へ渡り候て、客館に十日程も致ニ逗留一候て、風俗等の樣子見申候に、民庶耕作に精出し、風俗敦厚に見へ申候、尤都へは入不レ申、境上に罷在候得共、日本の風俗とは各別に御座候、日本は足利家御世之頃より段々華麗を競ひ、太平に成りては日々遊惰に相成候とかく朝鮮は中國に連り、其外外國の恐有レ之候故、油斷不レ仕と見へ申候、敵國外患有レ之候は國の幸と奉レ存候、日本は左樣の恐れも無レ之故、政事も衰敗、風俗も日々下り候事近世別てに御座候、只今賈誼陸贄などを置候はゞ、中々手を空しては居申間敷由申越候、夫より前に御當代に罷成候ても、假名書にては候得共、御法度の條目共見候に、其元の御文法と見申候て賴母しく存候よし申越候、其末に右の通に候得ば、雨森心有て申越と存候、我等返事に御申越候處一々御尤に存候、賈陸さへ見て居不レ申儀に候へば、況や賈陸たらざる者は彌左樣に可レ有レ之候、但昔聖人退居被レ成候て後、陳恒弑レ君と御聞候て、其儘魯君へ御告被レ成、彼三子に告よと有レ之候へば、何共可レ被レ成樣無レ之候故、我大夫の後に從を以御告被レ成と被レ仰迄に候、三子へ御告被レ成候得共、三子も亦合點不レ仕候故、又右の通に被レ仰御歸被レ成候事に候、聖人さへ如レ此御座候、然所に胡安國春秋傳を著し候て、仲尼の此擧先發して後に告は可也と被レ申候を、朱子も同心と見へ集註に取被レ申候、乍レ去我等存候は、聖人は動容周旋中レ禮事に候得ば、聖人の被レ成事に誤りは無レ之事に候へども、胡安國、朱子は少々まだるく被レ存候哉、此評を下し被レ申候、其胡安國、朱子、聖人之擧動に誤り無レ之と申

儀には、我等などさへ存ずる儀に候得ば、とくに合點可レ有レ之候得共、何卒存寄も有レ之候て如レ此被レ申たるにて可レ有レ之候、今其許の御料簡も、只今手を空して不レ居筈と被二思召一候、是は胡安國、朱子も聖人の上をさへ行たらぬ樣に被レ申儀に候へば、御無理とは難レ申候得共、其時分眷に君在てしかも聖人の材にても、勢の不レ成所は可レ仕樣も無レ之、唯告て御止被レ成より外は無事にて候、まして上に告べき君も無レ之候はゞ、御告被レ成儀も無レ之候てやみ可レ申候、高論尤に候得共、末時勢をも篤と御合點不レ被レ成と存候、知レ時知レ勢は易道の第一にて、儒者の心を付可レ申所に候間、御工夫被レ成御尤に存候由申遣旨被レ申候、雨森氏當地の樣子を遠境故とくと知不レ申故、新井氏油斷の樣に申越し候と相見へ申候、去ども志は奇特に奉レ存候、この人餘程心懸け候處、先年長崎へ對馬守殿より學問の事にやり被レ申候へ共、長崎にて致二遊興一、其後在二江戸一の時分も、對馬殿より金子百兩程貰ひ候を、一日に七十兩使ひし由に候、總て宗殿家來遊女町へ不レ參者は無レ之由、一日に大分金銀遣申候とて、大氣者とて三宅氏は感じ申候、此儀は兼て新井氏も能存知被レ申候由、先夜も其儀被レ申、畢竟用に立儒者にては無レ之候、繕ひ者に候由被レ申候故、私も驚申候、斯樣によく其爲レ人を存知被レ申ながら、去年よき儒者と被レ申候事、流石人の長を捨不レ被レ申處感入事に候、中にも榊原事承り俗人にも無レ之作法にて候、死候て能御座候、餘程博學に候故人も信じ申故、左樣にては害を殘し申候、最早此人もすきと賴には無レ之候、言行揃ひ不レ申は誰もはづかしき儀に候へ共、是程に相違候ては不レ足レ道候、風俗惡

敷候故、餘程有識の儒者も俗習に染申て、取ニ失申事無ニ是非ニ儀と存候、其外南部草書、榊原玄輔抔相見申候處は、成程好儒とは見へ候へども、壹人も惡所へ不レ參者は無レ之由、初て承知て驚き申候、此儀其許氣がさ有レ之衆へは、御咄御無用と存候、歷々名儒に左樣に候と申候て、彌不レ苦儀と可レ存候、其元にも此頃一兩輩承及申候

此一條は又例之通、火中被レ成可レ被レ下候

一　諸藩本中へ簡略の御定書、新井氏料簡委細の書付を上置候得共、于レ今埒明不レ申候、日夜唯簡書期會のみ心を付被レ申、左樣の處に及申衆無レ之候、御定五ヶ條にて、其外に委細の斷書など有レ之候由、井伊殿、間部殿拜見被レ申候處、成程尤の儀に候、此上に我等など存寄は無レ之候、但是を一度に出し候ては事多に相成、諸役人合點不レ仕儀も可レ有レ之候間、先五ヶ條を出候、大略皆合點も仕候時分、追て委細の書付を出候樣に仕候て可レ然旨被レ申候由、其内外の事共指つどひ候て、殘の衆とくと不レ被レ致ニ合點ニ候內、又頃日久世殿老中に成被レ申候故、是へ見せ不レ申候ては成不レ申候、何角延引早速同心無レ之故、殊の外難澁の由に御座候、掃部頭殿是程にも奇特と存候、當年諸國洪水、殊に豐前柳川抔は海水溢候て大分の損毛、且又人家失人も夥敷溺死申候、夫故立花殿火消役など御免の由に候、大水よからぬ儀に御座候、兎角冷氣盛なる故に候、此後後宮に威勢抔出來申べき哉、無ニ心許ニ儀と新井氏とも申儀に候

已下三條　十月四日

一　去月廿六日にも土肥源四郎と申同役の方へ罷越、終日夜迄語申候、土肥は新井弟子に御先代被二仰付一候、南部權藏も參申候、詩は無レ之只學問咄共に候、何も經學の沙汰は無レ之候、新井氏も經學第一被レ仕とは見へ不レ申候得ども、兎角經學無レ之ては何事も無レ益事とは常々被レ申候、其身は豪邁に候故、經書の大義は明に候得共、精密なる事はいかゞ可レ有レ之候哉、先日も近思錄殊勝の書に候、今以折々取出し見候て致二自省一申候、同じくは道躰の篇など不レ入物に候、克己爲學のあたり親切成物の由被レ申候、道躰の篇など不レ入物と被レ申候にて相知れ申候、

當月三日增上寺御法事始り、私共は九日に參詣仕申候、十四日以後御靈屋へ參詣の儀も申來、私共は十六日に參詣、光陰不レ留候て小祥忌に罷成、此節去年の御樣子共存出、乍レ恐不レ堪二追慕一候、去共當上樣御機嫌能、御法事等も俗禮ながら無レ滯恐悅の至奉レ存候、先日も御聰明の事承候て奉レ感候、今度日光御作事出來、御遷宮に付、准后にも日光へ御越候に付、爲二御暇乞一先日御登城被レ成候故、兼て今日の御出家樣は御送被レ遊筈のよし被二仰上置一候處、御歸の時分御中段よき程に御送被レ遊候、准后は疊の上に御つふりを御さげ被レ成候へば、上樣は御つふりは御さげ不レ被レ成、ちよと御手を御つき被レ成御會釋被レ遊候、其御樣子老成人も難レ成程の見事成儀とて、土屋殿など被レ致二落涙一候由に候、只今迄式日一度も表へ出御不レ被レ成儀無レ之候、是は間部殿手柄にて御座候、表へ出御の時分、女中老

女一兩輩は御供にて被レ出候、其外わかき女中も御鎖口迄被レ參候、女中のくせにて表へ出たがり候て、其のまゝ供奉可レ致と仕候へば、きつと御立ちどまり被レ成候て、是れにと上意にて候、其の故いまだ乳をあがり候へども、女中衆並御近習の若き衆など殊の外おそれ申す由承り候、一位樣、月光院樣へ御對顏に與へ御入被レ成候時分、必ず御鎖口にて御立ちとまり被レ成、ひしりと立切鎖をおろし申すを、御きゝ不レ被レ成候ては御入不レ被レ成候、御出被レ成候時分も其の通に御座候由、月光院樣書物御數寄、是れは眞字の書を御よみ被レ成候由に候、只今專書物御覽被レ成候、是れは御心あつての儀と申沙汰に御座候、當上樣にも御先代の御遺風御繼被レ成、御學問被レ成候樣に行く行くは可レ被レ成との儀と申儀に候、新井氏うしろ隣は勝田帶刀殿の由、御親父玄哲老も同居にて候、しかとしたる客來の沙汰も無レ之、しん〳〵と相聞申候、少も繁昌の體は見へ不レ申由新井氏被レ申候、月光院樣より日々其儀被ニ仰遣一候由、是等も國家の幸と奉レ存候、又一ッ尤成儀承申候、頃日紀州祇園與一郎より新井氏へ書狀差越申候、先頃中納言樣より被ニ仰遣一、學校と申す程には無レ之、學寮の樣成る所國中に被ニ仰付一毎日被レ致ニ講談一候て、國中の士共に學問はげみ候樣に仕候へとの儀に候、與一郎は頃日は是等一圓不レ得レ隙候由申越候、與一郎外にも故老儒者も有レ之候處に、此の度最初に與一郎へ此の儀被ニ仰付一候事、規模に存候て大慶仕候由申越候由に候、定めて以後は儒者中不レ殘支配可レ仕候得共、最初に祇園を被ニ仰付一候事手柄に候、祇園氏も此後は詩計好では成申まじきと存候、中納言樣平生學問の沙汰不レ承候處、

學問致候樣などの事、此の度の事御奇特千萬奉㆑感候、此節武藝の事抔嗜候樣にも可㆑被㆓仰遣㆒儀に候、然る處御留守の士共あなた方の被㆑成候儀は、天下の人目を付申儀に候故、ヶ樣に被㆓仰出㆒候と奉㆑存候、尤成る御心付に御座候とて新井氏抔感じ被㆑申候、殊の外强力の御生質にて、禮儀進退は御城にてもあらめに見へ申由に候

一　萩原近江守頃日死去の由申候、九月廿五日死、斷食仕候由なり、一生の內天下の難儀を仕出し、萬民其肉を食はんと欲申候、牖下にて死候は大幸と奉㆑存候、保山頃日彌淫亂放逸、無㆓忌憚㆒仕方と申候（以上三條）

一　佐藤氏筆記の物を（山崎嘉右衛門門人佐藤五郎右衛門、赤穗義士四十七人の罪を誹議して、忠臣義士にあらずと云）先日遊佐次郎右衛門へ遣候處、頃日返書來候五郎右衛門議論を餘り捨不㆑申紙面にて候、只意思淺薄成事は不㆑及㆑申候得共、手短く能書取申由被㆓申越㆒、合點不㆑參候、此儀に付遊佐氏至極の議論有㆑之由、大方は四十七人の衆上に敵仕候樣にて、氣に入不㆑申候にて可㆑有㆑之候、只城にて自殺仕たる方至極と被㆑存候哉、それなれば責てにて御座候、若又兎角公儀へあたり申儀を不忠の筋と見被㆑申候て、城を渡し一生隱居にて終㆑身申が當然などと申儀にても可㆑有候哉、此處も先年より私色々工夫仕候得共、兎角默々として一生罷在候ては埓明不㆑申儀と存候、たとひ寵臣にても、大惡人にて國家を亂者は、君の思召を不㆑顧刺殺申すをば、不忠とは申まじく候、況や是は君父の讎と申者に候へば、外の僉議には及申間敷候、遊佐氏は私義人錄餘り氣に入不㆑

申様子に御座候、佐藤氏此ハ筆記義人錄とは格別の議論に候故、私氣に入申まじきと被申越候、何とやらんあなたへ同心の様子に見申候は、下一統忠義の士と褒申人を誹謗仕候事、人情に逆ふと申ものに候、忠義の事は勿論、處置の處も大方義に中り申樂に候、少々出入の事は、又面々の料簡不同も可有之候へども、其儀には及不申儀に候、君子成人之美と申儀も候へば、是種の忠義に難を申事、君子の非本意候

一 國喪正議、同志の人へは見せ候ても可然旨、東前新井氏と申合候に付、遊佐氏事格別の儀と存候て竊に遣申處、斯様の大切成もの見せ申儀別て大慶に奉存候とて被申越候、然共夫に付異論被申越候、兎角議論に及不申儀と存候て、其段申遣候遊佐氏紙面

御著述に王と被遊候、帝王の様に惣體被成置候哉と奉見候、王と申事、漢唐の皇帝と國王との様に臣下を王と申候、此國にては諸王諸臣と申候て、王の字臣に見申候得共、是は王子王孫未賜姓の間は、姓氏の代の様に王と申を、オホキミと讀申候、漢唐諸國王とも違ひ申、我國帝王の外に王と稱し候は尤無之候、然ば御著述の王は、帝王の事と相見へ申候、又王者勅賜にても御座候哉、假令勅賜にても難被爲居候半歟、乍恐御存生の御時に御安んじ御居り被遊候哉、又左様にも無之、勅賜も無之、下として只今推て、實は天下を知給ふ上は、京都は虛位、此方は實位と、只今各御議定の上に王と被遊候ては、別に王の文意をも被相立候哉、新井子御意も尤斯様に御座候哉、乍恐も將

軍大納言二位三位などゝ申、御官位は何と被レ成候哉、王と申に斯樣の官位有レ之ものに候哉、如何被二思召一候て如レ斯御書被レ成候哉、被レ遣候一册を拜見驚愕仕候、手に取候も恐敷奉レ存候、雖二末代一始て如レ此に著述に書候を見申候て、歎息不レ安奉レ存候、此一事にて御喪儀とても入不レ申樣に罷成、天下後世の誹議可レ有レ之と奉レ存候、大事の御喪儀も是にておとされ、後世見る人も無レ之樣に至り可レ申哉、世間に只今迄用來候樣に御書被レ遊候ては、何の御指碍候哉、左候はゞ上には御謙遜の御志德を顯し、下には我國家の事體に合、天下の人心に應し、喪儀の事も後世迄益傳り、天下の人心感服可レ仕かと存候、拙夫抔は日本國中大小の神祇を奉レ懸、此王の字見候ては動轉仕、胸おどり心痛申候、筑州公も御同心に被レ成二御座一と益驚入奉レ存候、朝鮮へ御返翰に王と被レ遊とは及レ承候、此儀は林祭酒も御申候と承申候、乍レ恐も朝鮮の御事は、公儀の御事に候間、兎角申上儀も無二御座一候、貴躰樣御內々の御著述に、推て王と御書被レ成候は如何被二相極一候哉、乍レ憚も重て御示教被二成下一度奉レ存候

私より返書の趣

王の字の事勅許に候哉、但如何樣の御僉議にて相極候哉、其段は不レ奉レ存候、足利家以來、外國の贈答に王と被レ稱候事先例も有レ之儀に候へば、國書の儀は勿論、私共自分筆記の物も遠慮可レ仕儀にも不レ奉レ存候、秦漢以來皇帝を以天子の稱に仕候に付、王號は一等下つて、人臣の號にも罷成候、日本も夫を學ばれ、旣に天皇を以天子の號に被二相定一候得ば、王號は一等下り申候、其故和訓はいかやう

にも候へ、親王又は某の王などと申事に候、皇帝の外に天下の刑政を主り申候人主有レ之事、外國には其例無レ之事に候得共、是は貴公の日頃被二仰下一候神國の風にて候はば、先其通に御座候、然上は皇帝の外に王と稱し不レ申候て、何と稱し可レ申候哉、王と申もの、將軍大臣など申官有レ之間敷と被二仰下一候、成程其通に候、然ば將軍大臣と申ものに、諸侯を朝し刑政を主り申儀可レ有レ之候哉、此儀は先年より奉レ受二主教一儀に候へば今更不レ及レ申儀に候、只聊御返答に及申迄に御座候、私筆記の物御手に御取候儀恐敷被二思召一候、且又日本大小の神祇を被レ懸候て御動轉に被レ及候由、扨て御誠理成事に奉レ存候夫程に被二思召一候處へ、愚見抔申上候事憚多奉レ存候、此度筆記の物御寫置被レ成候はば、早々御燒捨被レ成可レ被レ下候、御留置被レ成候事不レ入物、且は兼ての思召を妨申事に候、但斯申立候とて毛頭不平の氣有レ之候て申上候にては御神慮を以無レ之候、昔武王の征伐をさへ、伯夷叔齊は同心不レ仕、終に餓死にも及申候、其後孟子齊梁の君に王を勸められ候をば、司馬溫公の大賢にてさへ、是を譏り被レ申候、尤忠厚の至には候得共、其故孟子を忠厚を寄せられ候とも難レ申候、兎角道は一偏には難二心行一ものと奉レ存候、右の聖賢大儒さへ議論不同如レ此に候へば、まして近世以來道の宗主無レ之、各其所レ聞を話し、各其所レ見を守候得ば、紛々異同有レ之筈に御座候、百世論定る時を相待申候

右の通有增申分仕候、此等の見にて山崎神道の筋より固滯仕候て、不レ可レ救樣に罷成申候、日本國王の事、日外長公よりも御料簡被二仰下一候、兎角王と稱し申外は稱號無レ之儀と奉レ存候、只今唐日本共

に皇帝を天子の號に相定申候、朝鮮は唐の正朔を奉候故、清の皇帝に遠慮候て、朝鮮國王と稱し申候、左候へばとて朝鮮の刑政は自國の所ㇾ主にて清より構不ㇾ申候、日本の武家も、京都皇帝へ遠慮にて、日本國王と稱し申候、是又只正朔を奉じ申迄にて、刑政は悉く江戸より出申候、朝鮮の格と同事に御座候、若上に清朝無ㇾ之候はゞ、朝鮮も帝と稱し候て何事可ㇾ有ㇾ之候哉、日本も上に天子無ㇾ之候はゞ、兎角刑政を主る人天子と申物に候へども、右の譯に候故帝號は遠慮被ㇾ遊、王と被ㇾ稱候事當然之儀に奉ㇾ存候、日本は神孫の天子百代不易にて、是は政事に御預無ㇾ之其下に武家有ㇾ之候て刑政を御主り被ㇾ成候事、外國に無ㇾ之事に候へば、國家政務に預らぬ主を帝と稱し、政務に預る主を王と稱し、帝王二段に不ㇾ仕候ては不二罷成一候

一　紀國の事成程其通に候、中納言殿日頃勇力の御聞へ有ㇾ之、中々文學の儀抔は御嫌にて可ㇾ有ㇾ之と存候處御奇特成儀奉ㇾ感候、先年御國にて鹿獵被ㇾ成候處、猪を自身二ッ玉鐵砲にて御打被ㇾ成候へども、殊の外大猪にて留り不ㇾ申候て、眞直に御前へ參候處を、右の鐵砲御取直し、只一打に御打殺し被ㇾ成候、御歸の時分、右の猪を御かゝせ御歸被ㇾ成候處に、十四五人にて舁歸候由、御大力と聞へ申候、（臘月四日來書之內）

同十二月四日

一　林大學頭事彌不首尾と聞へ申候、頃日も承候得ば、七三郎、百助不和に候、其外林又右衛門は只

今別に儒家を立居申候得共元來兄弟より別れ申候處、是抔も不和に候、門弟子各見限り申者有レ之候、頃日も承候へば先年孔子堂御建立候事、憲廟に御子無レ之故、大學頭申上候て孔子はもと尼丘山に祈り候て御生被レ成候間、御祈禱の爲に、聖廟御建立被レ成候はゞ、御子出來可レ申旨にて御建立にて候、其身著述の物の內に聖堂開山林大學頭と稱し申候由珍敷儀と申候、其許御家中共林家信仰の人多有レ之候間、ヶ樣の事御沙汰は御無用と存候、熊谷にて足輕の事、其許樣より大學頭方迄被二仰遣一候旨の儀に候哉と申候、其に付ても頃日老中叱に合候て不理屈成返答物笑にて候、委細の事は筆紙に難レ申候

十二月四日

同十二月廿四日　以下二條

一　銀吹替の事、其後樣子不レ承候、段々埒明申儀に候哉、元祿制に罷成候儀は承被レ申候、私承候は、古銀の通に罷成候樣子との事に候、然共段々場所〲僉議替り候故、如何罷成候哉不レ存候、兎角唯今迄三四段の惡銀とも御取上被レ成、精銀に吹替候得ば、銀の數はすくなく成候へども、銀はへり不レ申候、勿論此度吹替候に付、へり目も大分の事に候得共、是は公儀之御損に被レ成候て、御足可レ被レ成との事にて、是に付先日も御勘定方役人衆の內尤成事申人有レ之候、此御足の銀大分御損と見へ候得共、常憲院樣御代に、世上の精銀を被二吹替一候て惡銀に被レ成、其出目を上御取被レ成たる事に候へば、此度御返し被レ成候と申物に御座候、御損と申候得ば、今更の御損と聞へ候へども、畢竟下へ御返し被レ成

と見申候へば、御損と申沙汰に及可ㇾ申儀にては無ㇾ之と被ㇾ申候、諸人感じ申候、吹替申時は、世上の惡銀を不ㇾ殘上へ御取上被ㇾ成候て、精銀に相成候迄は寶錢に被ㇾ成、通用候樣に被ㇾ成候與、又は元祿銀、寶字銀抔四段か有ㇾ之候、惡銀一々吹ぬき候て、精銀の有目を諸人に御見せ、其上にて右三四段の惡銀に位を定め、たとへば元祿銀何貫目は古銀何貫目にあたり、寶字銀何貫目は、古銀何貫目と相定候はゞ、吹替の儀被㆓仰出㆒候日より、最早精銀に罷成たると申物に候由申者有之候、此者名譽のものに候、上方町人に候處、此儀を苦勞に仕先頃當地へ參候て、公儀役人中へも申上候由竊に承申候、必御沙汰御無用可ㇾ被ㇾ成候只今迄は惡銀の古銀も一ッに相成候により、惡銀の通用難澁仕候、善惡の位定り候へば、たとへば、古銀にて百目仕候物を、元祿銀にては貳百目に賣申候、一倍の高き樣に候へども、古銀にて買候時は百目に賣申、是にて物價も踊貴不ㇾ仕候、左候へば今日より古銀に罷成候と申物に候由申候、此儀にては寶錢もむつかしく候て不ㇾ入ものに候、一段好策に存候、先ヶ樣に被ㇾ成通用無ㇾ滯樣に仕置候て、そろ〳〵と金子又は錢にて世上の惡銀兩替被㆓仰付㆒、段々吹替申積に御座候、有增承候處に毫髮も無㆓遺漏㆒事に御座候、何の世にも無ㇾ之材にて御座候、町人などの中にも奇材有ㇾ之事に奉ㇾ存候、委細の事は筆紙に申盡し難く候

一 儉約等の儀被㆓仰出㆒、定て年内か又は來春可ㇾ有ㇾ之候、然共一通りのあしき儀にて可ㇾ有ㇾ之と存候、日頃新井氏より申上候事共、一條も老中同心無ㇾ之由に御座候、間部殿にも何共可ㇾ被ㇾ成樣無ㇾ之樣子

にて御座候、此儀委細の事は箋紙に難㆓申盡㆒候、新井氏よりの手紙此度進申候、是にて御推察可㆑被㆑成候、兎角死病良醫なしと申古語の通に奉㆑存候

十二月廿四日

新井氏手紙寫

冊子等被㆓返下㆒候、依て思召の通縷々奉㆓承知㆒候、近世明季の事を論し候處に、「蓋若是輩有㆓小人之心㆒無㆓小人之才㆒、才能治㆓天下㆒亦能亂㆓天下㆒、惟才能亂㆓天下㆒、不㆑能㆑治㆓天下㆒、殆明季之謂歟」と申事有㆑之候、今日の時勢これにいかんと存候、萬々必奉㆑待候、以上（即時）

正德四年甲午

正月廿三日書

一 少公より先發後聞の御議論、以㆓書付㆒被㆑下忝存候、成程御尤に存候、先日是よりも申進候、愚見誤にて候、虚齋も同事に御座候、兎角朱子或問の說詳備に候、但胡氏の說辭不㆑宜候故此惑出來候、新井氏にも可㆑申と存候得ども、中々被㆑致㆓合點㆒間敷、頃日も格物の事知㆑人を主として申候、明善の儀に候はゞ何卒申様も可㆑有㆑之候、格物の二字僻に候、物は人物の物たるべきと被㆑申候故、色々僉議致し候へども、老夫程朱の說を信じ候故、先入者爲㆑主と被㆑申候、程朱の說と斯様に相違候儀、自見を被㆓申立㆒候所に、常に世事議論抔は大經の筋違不㆑申候、中々稻氏抔の外には無㆑之候、頃日稻氏へ

の序文草稿見せ申候、最前名物の事に、賈誼が改二服色一易二制度一等の事を申懸にて、若水草木の名物に取付申樣子長く書申候處、始終牽合附會に聞へ候て、後人私へも罪を歸し可レ申由被レ申候故、右の序文改候て跡より又若水へ遣申候、稻氏は初稿の方氣に入可レ申と存候得共、後に遣候を被レ用候樣申遣候、斯樣の事尤至極に存候、外人に是程に氣を付候て申吳候人無レ之候、益友にて候、老夫無二の相口にて四五日に一度宛、兩人にて言談移レ時候

一　高階半次郎江戸輕薄の風を殊の外嫌候て、私へ婚をも求め申候、新井筑後を殊の外信仰致し候、熊澤了海其外公家にて舟橋の某此三人の筆跡三幅一對に仕置候、無學にて候へども能き友を得申候、只今朝鮮の記錄御用被二仰付一候て每日罷出候、與御祐筆の中にも、御老中へも直言申者は此者壹人と申候、夫故頭抔とふれ候て勤にくゝ候故、役儀御斷申候て退可レ申と存候て、書付を調候へども俄に國喪に出會申候、只今上御幼少の節、身を引申事不忠と存候間、最早身を引申所存無レ之候、最前の書付燒捨候て御奉公死に相心得申候、人に咄候得ば、立身の望故勤申抔と存候故、誰へも不レ申候、我等式推參の所存に候得共、高きも卑きも御主への志は一つにて、只今時分身を引申候は不忠と存候、國家危難の節と可レ申候、此旨筑後へも申候て、必筑後なども身を引被レ申心得に候はゞ、沙汰の限りと申候、尤成事に御座候、是程の者當地にはきれものにて御座候

一　伴五六郎事見苦敷儀に存候、一度商賈を脫し候て士に罷成候事、一器量有レ之樣に候處、又喬木を

下り候て幽谷に入申事不ㇾ足ㇾ覩儀に存候、小人名利を計較仕候て、色々に變じ申事に候、初は氣象宜しからぬ者にて、合點不ㇾ參候分際より、高尙に心得、便辟の風有ㇾ之者にて候き、如ㇾ案如ㇾ斯に候、若水など譽被ㇾ申候、人を知申事古より難き儀に存候、御自分中村氏へ被㆓仰入㆒候趣、委細承知御尤に候、若水事は不ㇾ被㆓仰付㆒候由、是又御尤に候、若水は御交友の事、其上此人は言語氣象各別にて候、又作抔が論にては無ㇾ之候、舊冬新井氏被ㇾ申候は、在京の時分承候へば、北村伊兵衛を厚禮にて加州より御招候得共、伊兵衛所存候て不㆓罷越㆒候由、私に承候哉と被ㇾ申候故、加州にて曾て不ㇾ承と申候得ば、體成儀と申候、結局加州にては不ㇾ承事も可ㇾ有ㇾ之由被ㇾ申候、私も疑信相半致し候處、此度伊藤氏門派は何程博學にても、御用に無ㇾ之旨に候へば、彌右の說は虛誕、大方は彼徒より名聞の爲に申出したる儀にて可ㇾ有ㇾ之候、京師の儒者共中々風儀惡敷候て、其上に風俗巧僞に候故、色々巧出し候て名を賣申と見へ申候、菅眞靜氣に入申間敷と存候、眞靜儀備前を立退候事、何やらん座席の事にて立退申候、當春は其御地へ引越申候由、其許に知人も少候て山本源右を諸事賴候由、源右より被㆓申越㆒候、其元の風俗に逢可ㇾ申哉難ㇾ計候、去とも其許は御大國故、自然とゆるやかに候故、少々出入は其分に相成候ても目に立不ㇾ申候、眞靜出處耻かしからぬ者にて候とて、高階半次郞褒申候、併刀を御算用場より押へ申事、御意に應じ申間敷と存候、是は多分野村氏など所爲と存候、野村氏奇特存候、其御地はとこふ申候ても、餘程の人才數多見へ申候、賴母敷奉ㇾ存候、御一覽已後御火中〳〵

一　冑のしがみの事御尋候、其後新井氏へ相尋候へば、平之丞殿被レ申候は、しがみは醜女にて可レ有レ之候、鬼面の樣に致候、醜女の事日本書紀に見へ申候、伊弉諾尊を追たる者にて候、すさまじき面に候故、冑の前に付申かと被レ申候、平之丞殿日本の書を能覺へ被レ申候と後に存候、康富記に其說見へ申候、然共某存候は、古き記錄に見へ申候猪頭の冑此事と存候、シカミはシヽノカシラと申事にて候、古はシヽカシラと申候て傳來候へども、近頃よりシカミと申候歟、又は古よりシヽカシラとも申儀に候歟、其段は難レ計由被レ申候、新井氏細工に刻み被レ申候は、古き手本有レ之候て、夫をうつし被レ申候、頃日魚箙を被レ致二細工一候、扨々見事成事にて候、魚箙と申ものは、名は承候て始て見申候、是もよき本にて寫し被レ申候、魚に致し魚口の處に、弓矢を立申物に御座候、樂人は今腰に付て出候得共、弓矢は挾み不レ申かと覺申候、新井氏は半弓幷矢を立て候て上に金箔を置候て、床の柱に飾置申され候、扨て風雅成よき餝にて御座候、稽レ古知レ今とは此人の事にて候、平之丞殿などの中々及び申儀にては無レ之候得共、其元樣の風に逢申博學にては無二御座一候、文昭院樣にも重寶成者に被二思召一、夫故直言も御容被レ成候と相見へ申候、本朝軍器考私も借候て、いつぞ寫置度候へ共、無レ隙候故致二延引一候、只今博くは出し不レ申心得と見へ候間、其御地へ遣し候事は不同心に可レ有レ之候

二月十四日

一　當月二日朝、御城女中年寄江島、宮地と申兩人、其外中老かけ候て九人、下女共に五十人計、增

上寺へ參詣に事寄、木挽町芝居へ參り棧敷かり候て、野郎生島新五郎と申隱もなき美男と申候、其外野郎四五人棧敷へよび寄せ酒宴に及候由、其事相知れ候て、急速に御僉議有レ之、右上分九人は一門へ一生御預被レ成候、於二御城一松平伊豆守御留守居役を以被二仰渡一、白小袖一つ着せ候て其場より直に乘物に乘せ候て、一門方へ被レ遣候由に候、棧敷抔取持申者後藤縫殿助と申候て、奥の御用承り候町人承り候て、棧敷に手代兩人付置候て用事承候由に候、縫殿助も御法に被二仰付一候よし申候得共、未た承り候へば、此者は申分立申抔と申候、奥御用承候故、江島、宮地申付候事いなみは難レ申、二日木挽町見物に參り候間、棧敷等の事賴候由に候故、右兩人年寄女中の儀に候へば、少も氣遣成筋には有レ之間敷と存候て、取持申候由に候、下女不レ殘御追放に被二仰付一候、右江島、宮地共に月光院樣付の女中にて此度御僉議嚴急成樣子に候、是は月光院樣御下知、又は間部殿より出申と推量仕候、是にて御城奥方の御作法少直り可レ申と申候、常憲院樣御代以來、段々不作法に罷成候時分も此類の事有レ之由、江島と申女中隱れもなきはで者にて御座候、年齡も四十に近き人に候由、是は小身の籏本に一門有レ之由宮地は俗姓賤しき人に候由、定て一門もしかと仕たる者は有レ之間敷候、增上寺祐天とくより被レ申候由參詣とてから乘物計寺へ參り候、道より直に參會の宿へ毎々參申由に候、風俗何かも惡敷罷成候故と被レ存候

　　小谷勉善二月廿二日書

一　或說に、先々御代より先御代には、別て踊子等の女中藝を御好被レ成候故、御用の筋にて密に小女

中方より役者どもへ通路在來候處、當御代伎女御用無レ之御暇被レ下候得共、御城女中へは總て其馴染の舊習有レ之、此一卷起申旨被レ申候、是はいやな沙汰に御座候、先年五丸樣年寄女中增見と申すものも、江島同事の行跡有レ之候得共、御先代には役者へ參會不レ珍風俗に候故、ケ樣の御吟味には及不レ申沙汰仕候、今般中村清五郎役者狂言作者申候、御先代には御用の筋にて狂言の仕組每度仕上候抔と申候取沙汰仕候、昨日承候へば、肥後守樣增上寺御宿坊も頃日出奔仕候、是も此一卷の事に付ての事と申候

二月廿九日

御城女中之事、只今御僉議最中、ひたもの御預の物出來申候、交竹院是は奧山立庵と申候、親立庵は水戶樣御醫者にて候、先年被二召出一候、交竹院は奧御醫師にて候、其外に普請奉行抔の中同類有レ之御僉議に御座候、交竹院從弟は奧山左內と申候て水戶樣の頭分の者、頃日御預に御座候、水戶樣殊の外御立腹、萬一公儀より御免候ても、御預候て法度に被二仰付一候旨被レ成二御意一候由、大身の者へ御預候て嚴敷仕候て差置候由に候、其外增上寺の僧、又は町人神主御歩衆抔の內御預の者多く有レ之候、此間江戶中沙汰に御座候、木挽町、堺町兩所の役者野郞も、大分籠舍被二仰付一候由に候、只今迄每度の事に候得共相知不レ申候處、當月二日木挽町へ年寄女中江島、宮地など初め大勢參候て、後藤縫殿助と申御奧方の御用承候町人、棧敷抔の事取持候て終日酒宴野郞役者大勢參會にて候、只今迄斯樣の事每度有之候得共、公儀より女中あるき被レ申候時分は、添番衆と申者を御附被レ成候故、別條無レ之旨被二思召一候て被レ成二御座一候、唯今は彼添番の者へ金銀大分とらせ候て賴

候故、付て參ながら共に遊び候て知不ㇾ申候處、當二日に何と仕候哉江島添番の者を叱り申候て、一座へ罷出候儀は推參成事と申候由添番の者申候は、役者共さへ一座の上は、我等抔推參とは難ㇾ心得ㇾ候由一ッ二ッ申合候て、夫より申出候、され共添番の者も只今迄賄賂取候てだまり申候、此度も二日の事を見合候て、大方例の通音物など致し、江島などより詫言致し候半と存候得共構ひ不ㇾ申候故、間四日にて公儀へ致ㇾ言上ㇾ候、夫故是も同類沙汰に罷成御預に御座候、此江島と申者隱れなき端手者にて御座候、根は御先代より交竹院奥に勤候故、其節より江島心安候て申合、扨右奥山喜内抔江戸惡所切者に候故取持申候、木挽町、堺町、吉原其外茶屋抔にての參會度々の事、此度役者の内拷問に逢申者有ㇾ之候て、段々致ㇾ白狀ㇾ候、餘程之騷動に御座候。二月二十九日

同三月十三日　以下三條

今度江島事於ㇾ評定所ㇾ、大目付仙石丹波守殿被ㇾ申趣書付一々見申候、何も尤成儀に御座候、定て聞番衆より右の書付寫可ㇾ參候間御覽可ㇾ被ㇾ成候、江島遠流と被ㇾ仰出ㇾ候、是は定ていづれぞ大名衆へ御預け候て、領國にて座敷牢抔へ押込置候樣可ㇾ被ㇾ成かと申候、先被ㇾ仰出ㇾ候はゞ、長く遠流と申儀にて一生歸參不ㇾ成事と申候、去共男子の樣に放ち候ては埒明不ㇾ申者に候故、女中遠流と申は大方御預に罷成候由に候、其外江島兄向井平右衛門死罪被ㇾ仰付ㇾ候、尤評定所にても肩衣等剝取繩付申候由に候、是は大御番にて先年大坂にて御普請方に懸り、大方町人の方より金銀押領に付、町人三十人程罷越

候て斷候處に家來を致ニ殺害一此者致したる事と申掠候故、右の者共江戸へ罷越訴申候、其時分結構被ニ仰付一御宥免候處、又此度江島と同道致し、堺町、木挽町、又は吉原抔へ罷越傾城どもにも引合、且又野郎役者抔出合候樣取持候由、重罪によつて死罪被ニ仰付一候、交竹院事も段々被ニ仰渡一候て遠島被ニ仰付一候、水戸殿家來奧山喜內事、江島遊興の宿を致し何の由緒も無レ之處、交竹院と江島事奧にて每度出合候に付、其好みを以喜內事交竹院同姓の親類に付、喜內娘を江島爲レ致ニ養子一候て色々惡事申進め候事、此度悉相知れ死罪被ニ仰付一候、去共是は水戸殿へ御渡被レ成候、水戸殿殊の外迷惑なり、此節手前など家來斯樣ヶ樣の儀仕出し候事御面目も無レ之由、御城にても被レ仰候由に候、勿論しばり首たるべきと奉レ存候（後に承候へは、水戸殿へ公儀より相渡り候と、其儘下屋敷に引寄られて繩かけ候て、打首に御申付候由に候）死罪は此兩人計にて、平右衞門事も其外同類と一ッに遠島被ニ仰付一候ても可レ然候哉、第一此度の張本は交竹院より起り候と申儀に候、然共本人江島女の事に付死罪を御宥免故、交竹院已下も遠島被ニ仰出一儀に候へば、平右衞門も共通可レ然候はん哉と申衆も有レ之候得共、間部殿初秋元殿なども、平右衞門重々の罪科にて候間、兎角死罪たるべきに極り申候、切腹にも可ニ罷成一樣子に候處、又壹人被レ申候は、左樣に候はゞ縛り首たるべく存候、切腹は士を被ニ仰付一事に候、此者を切腹被ニ仰付一候ては、淺野內匠頭家來抔も同事と申者に御座候由達て被レ申候處、尤成事に罷成候てしばり首に極り申候、其外歷々にては、御留守居番平田伊右衞門初め遠島にて候、役者など並後藤縫殿助手代の者などかけ候て四十人有レ之候、後藤縫殿助は呉服所

にて奥方の御用承候に付、此度之事も取持申體に候、是は申譯立候て閉門被二被付一、有増如レ此候、委細の事は無益の事に候間不二申進一候、

一　此度堺町、木挽町へ被二仰出一、向後棧敷一段に致し可レ申候、先年は一段に候處、近年三重にいたし候事に候、扨又役者伎藝相勤候節、絓、紬、木綿の外着申事堅く御停止に御座候、且又棧敷簾屏風など用候事御停止に御座候て、藝相勤め申外茶屋又は外へ出候事堅く御停止に候、此外見物場へ被二仰渡一共有之、絹、紬、木綿の外着用不二相成一候ては見物も餘り有レ之間敷候、其上右の被二仰出一にては、大名衆などへ呼申事は有レ之間敷候へば、半つぶれに候、是は御尤成事と奉レ感候、唯今すきと御つぶし被レ成候事も難レ被レ成候へば、是程の御仕置は可レ有レ之事と奉レ存候、ケ様成事此節可レ承とは不レ奉レ存候處に、人心を快仕候儀と奉レ存候、但人により候て歎き申類も多可レ有レ之と存候、此度の事第一間部殿嚴重に御申候て、秋元但馬守殿御同意にて如レ此候、御先代よりの大弊を御のぞき被レ成候事、餘程の儀と奉レ感候、去共ケ様の事出所は有レ之と相聞申候、兎角君子少しにても政事に預り候得ば、相應の益有レ之事に御座候

五月十七日小谷兄書

一　當月初旬より淺草にて、先頃江島一卷に付流罪被二仰付一候つがや善六、あげ屋敷にて巣の吹抜被仰付一候、然處跡の吹替被二仰付一候銀座の者共へ不レ被二仰付一、何の御沙汰も無レ之に付、畢竟如何可レ被

仰付一候哉と安心不レ仕候處、銀に引替被二仰付一候旨御奉行所より被二申渡一候處、銀座四町の者共何も安堵仕祝など仕候旨、然る處當十三日御奉行所より御用有レ之候間、可二罷出一旨申來候間、彌右御用被二仰付一候と悦勇み候て罷出候得ば、銀座の年寄四人深江庄左衛門、關口善左衛門、中村四郎右衛門、細谷次郎左衛門頭十七人被二召捕一、人々宅へも罷出候跡へ與力同心三百人計急に罷越、家内、闕所、藏へ封付申候、總て銀座京橋より南四丁の間に罷在候、其日は近邊の騷動不二大形一候由、京都も同事の旨なり

五月十七日書

一　荻生惣右衛門作候蘐園隨筆其許へも參り候由、定て御覽可レ被レ成候、牧野氏敬の工夫臍下に意を付候事など書置申候、牧野氏を褒候て置申候、此人至極の高慢ものにて、專ら己が名を賣申體に御座候、此度の隨筆勿論皆淺露成事共に御座候、伊藤、山崎抔世に鴻儒と稱し申候故、專に是等が非を論候て、己が是等より上に立申心得に御座候、牧野氏事など書載候も下心可レ有レ之と奉レ存候、牧野氏加州などにて人の尊信仕候事兼て承及候に付、其御地などへの聞へにも可レ仕ためと被レ存候、頃日右隨筆小谷氏より借候て見申候處へ、三宅九十郎見候て、序文の事を難じ申候、是は九十郎議論尤に奉レ存候、序文は彼が高弟書申と見へ申候、荻生を富士山にたとへ、外の山は富士の兒孫と申候處、諸峯羅立して兒孫に似たりと申杜が句より申にて御座候、天下の學者は荻生が兒孫に致し、扨富士山下に東照宮御出被レ成候て、天下の英雄割據の者共何れも東照宮に歸し申候旨、皆々御當家の美をたすけ申

候、荻生出申候て天下の儒者皆歸し候と、荻生の美をたすけ申由に候、區々黄吻の書生の分として、東照宮と並論し申事忌憚する所なき事と九十郎申候、是は確論と存候、後に禍を得可申者にて候、其上群雄の東照宮へ服し申事は、德に候哉、力に候哉其段は不存候得共兎角来服申候、當代天下の儒者誰有て彼に服し可申候哉、夫を押付て荻生が手下に致し候事、口に申さへ憚く候處、斯様に板行も仕候て出し申事傍若無人と可申候、伊藤が文章の内、文字の用法を論し申事、半は當り半は當り不申候、中々伊藤氏の徒服し申間敷候、是も伊藤氏は當代文章者と世界て稱し申候故、文字の非を論し候て、己が文章伊藤氏の上に立申樣に仕たがりての事に候、小人の情實に不可掩の事と奉存候、稻氏より心術不宜樣に被申越候、さすが稻氏にては御座候、よく見被申候

一 竊に存寄候は、銀座の輩極罪に候處、逢死刑候事刑罪不相當候得共、是は當路の柔忠厚の所致にて可有之候、其故は此輩奸曲獲罪於天下候得共、實は所受命有之候、首罪は遁死刑候上は連坐の者は可爲未減候、且首罪の者も實は所受有之候、然ば至于今臣子の身としては、彼輩處極刑候儀は所不忍施有之候樣に被存候、雖然時權施治の機會は被失候、寧失彼共此に不失の處にても候哉、聊時運の厄にても候哉と竊に歎敷存候旨申候處、淺新若水申候は、某有一策而未著言候、幸爲見一言を可述候間、他日鳩巣先生へ面談の刻試に可申上候、銀座の徒御刑罰何と存候ても不相當候、幸に轉禍爲福の機會と存候、上御幼少に候得ば、罪己の詔を可被下樣も

無レ之時節に候、唯執政の方に不レ殘壹萬石宛領知被二指上一、扨可レ被二申上一候は、常憲院樣御代國家御費用御手支、且下民困窮の儀被レ爲二聞召一、金銀の品下り候共其資用多罷成候はゞ、公私共に其利多く宜候と被二思召一候に付、金銀吹替被二仰付一候、其砌私共遠き慮無レ之、只一旦の利迄に心付可レ然儀と存知罷在候、且又文昭院樣御治世の初、銀の品又以て下り候て、御費を被レ贖候より以來、日々諸物の價甚高罷成、終に四民の大難に罷成候、是比日君上に御存知無レ之趣にて、却て無窮の禍に罷成候、御本心は下民の困窮を可レ被レ救が爲に候處、還て如レ斯に罷成候儀は某共の不明不忠より事起り申候、然上は執政職を差上罪を可レ奉レ待儀に候得共、只今上御幼少の御事、且憖に國家の故事をも存知罷在候某共に候故、職掌を奉レ辭候儀は却て非二本意一候、夫故被二下置一候領知の內各壹萬石指二上之一申候、聊自貶の宿意迄に御座候と急度言上有レ之候、天下の人の視聽を相改め、扨近年以來金銀吹替の儀に付、奸曲の御役人にも相殘候輩は、幾人にても罪科に可レ被レ處候、第一銀座年寄共は磔にかけ、其次は梟首、其餘は壹人も不レ殘遠島流刑に被レ處、凶邪の人の種類國土に遺し不レ申候はゞ、神人幽明倶に可レ扶候、然處只恨らくは君上の御誤を掩隱すべきとのみ主意を被レ立候故、尾をおさへ首を掩の病みにて萬人心服不レ仕候、頃日剩新銀通用の御定書出て、彌以人心合點不レ仕候、子細は銀座の餘孽後藤庄三郎等の輩數人、又此度の新金銀の吹替の總用被二仰付一候故、一臠を炊候て一鼎の味を窺知申候旨申候、此策私共及不レ申候、流石經濟の事被二心留一候程有レ之候と感入申候、此翁常に實論とは違ひ、

其說平易、其辭簡直にて面白御座候、鄙策の趣抔は書生の常談と不レ堪二自笑一候　（後晉書）

一　若水謂、物價騰貴と申候者は小事にて候、此後彌以賄賂公行し姦吏暴横可レ有レ之候、昔唐德宗播遷被レ成候時、陸宣公被二申上一、此時會悔レ過罪レ己不レ被レ成候ては興復難レ被レ成由にて詔の章をせられ候得ば、悍將强卒迄讀者流涙感激仕忠を致し、是を以唐室不レ亡候、一紙の詔百萬の兵卒に勝り候と古人も申候、時勢朝廷の大臣過を謝し己を罪被レ成候はゞ、轉レ禍爲レ福の一大機會に候事、扨々殘念至極乍レ恐奉レ存候、臭物に蓋をなさる樣の數通の御新令に付、天下之人心怨怒を懷き不服朝廷を誹謗仕候へば、上の御威光も輕く罷成苦々敷御座候、先頃於二京都一兩替町の變可レ有二御聞及一候、小兒輩あふれ深江庄左衞門妻も自滅候にても、人心の恚怒發泄する所無レ之故に存候、官より吏人を出され、其場へ見物に罷越候者を數十人搦捕牢舍仕申候、本より數百千人群をなしあふれ候へば、御鎭可レ被レ成事にて可レ有レ之候得共、何卒御處置可レ有レ之事にて候處、右の譯に付是は銀座の者の爲に仇を被レ報事と、取沙汰仕人心不レ悅候、深江庄左衞門小供を京都御追放の時も、官吏擔負の沙汰にて保護仕迄申候、常人の御追放被レ成候とは相替申候、因レ玆世上にて申候は、此輩暫時の間御追放と申事にて、來未年太祖御百年忌には皆御赦免有レ之、如レ本銀座の役儀被二仰付一筈などと、朝廷を測り種々誹謗を仕候、時世日々非に罷成候、齅二野梅一時節と存候

六月八日小谷氏書　以下二條

一　今月三日夜、淺野故内匠頭殿御内所瑤泉院殿御歸泉に候、此人賢行の儀は義人錄にも被ㇾ載候、今般御逝去に付、又御噂承、平生御柔和成義眞の上﨟とも可ㇾ申御容儀にて候、扨何事はと申時分は、屹度被ㇾ成候御樣子、中々尋常婦人の樣には見不ㇾ申候、彼一卷の時分、若上杉家より大人數等參候事有ㇾ之候はゞ、慥に御働可ㇾ被ㇾ成御氣象と申候、尤芝泉岳寺へ御葬禮仕候

一　同日、月光院樣御實父勝田玄哲老も歸泉にて候、扨は月光院樣初瑤泉院殿に御奉公被ㇾ成、其以後公儀へ御出被ㇾ成、段々結構成幸を被ㇾ得候、就ㇾ夫始終瑤泉院殿への御勤被ㇾ盡㆓御慇懃㆒候儀皆に相替不ㇾ申、今度御病中にも毎々御懸意の由に候以上

八月書

一　本多佐州公筆記の物一册爲ㇾ持被ㇾ下、珍敷物御見せ被ㇾ成忝珍重奉ㇾ存候、且又此書の因縁共委細被㆓仰知㆒致㆓承知㆒候、如ㇾ仰佐州公御事、兼て良平の倫と存候處、此錄見候へば格別の儀に奉ㇾ存候、宜哉、神祖を輔佐して百年の泰平を被ㇾ開候事、ヶ樣に可ㇾ有ㇾ之儀と今更存當候、此書先電覽候處、佐州公自筆の記と申事未決に存候、當時學識有ㇾ之人へ、佐州公儒道の有增御尋に付、其人より記候て佐州公へ進上仕たるものを、重て大君より治道の儀など御尋に付被㆓差上㆒たるもの丶樣に被ㇾ存候、右の記中に、此段は筆紙に述盡し難きに依て荒々大筋目を云也、道を知る人に傳受有べし、是等の詞上より御尋に付被㆓書上㆒候はゞ、ヶ樣には有ㇾ之間敷候、末に佐州公へ進上と聞へ申候、佐州公の跋に、

此一冊は珍書也と有レ之も、御自分に被二書立一候ものを珍書なりとは有レ之間敷存候、擬記中の論共駁雜成事も候得共、大要尤成事共に被レ存候、今少留置緩々再覽仕度奉レ存候、是を漢語に譯せられ候事は不レ入ものに候、此通りにては漢語に難レ入候故、增減餘程無レ之候ては難レ讀可レ有レ之候、左候へば事實を失ひ可レ申候、此儘にて假名の誤など御改正被レ成候て繕寫被レ成尤可レ然奉レ存候、序跋などはなくても可レ然奉レ存候、

一　佐州公筆記の物、新井筑州へ物語申候得ば江戸にては先年より取傳候て新井氏も一部寫置申候、佐渡守殿自記無レ疑もの儲成書に御座候、則御先代上へ一部寫候て上候由に候、此邊にては木佐記と題號有レ之候、口の序は無レ之候、唐人に天道の事傳受と有レ之候、いづれにて候哉、其時分李文長と申朝鮮人參居申候、此者に候哉、吉利支丹の徒流、其時分いまだ居申候、彼が法には、天主を立候て天道を表し申候間、佐渡守殿天主の事を天道と御直し候哉、此儀は木下平之丞殿料簡の由にて、私は先日少公より御越被レ成初て見申候、存外成事に御座候、是にては東照宮を輔られ、百年の泰平を被レ開、佐命之臣と申事耻しからぬ儀と奉レ存候、執政の樂に此十分一の思慮有レ之候得ば能御座候

一　頃日上野佐野と申所の百姓體順治と申者井上河内守殿式臺へ罷越、一封之書狀を指出候、披見の內、牢の揚屋へ入申候、扨右之封書の內には、去年以來江戸表甚困窮に罷成候、其儀を御苦惱に被レ成、御心に可レ被レ懸御老中に候處、曾て其御樣子無レ之、御救之沙汰も無レ之候、各樣御苦勞に不レ被レ成

候て誰が任にて可レ有レ之候哉と申趣を長々と書記申候、仁義の義を儀の字に認申程の文盲者に候得共志の處奇特千萬成事、御老中も殊の外感賞にて、近々御褒美抔可レ被レ下御詮議の旨に候、頓治事此後何の御沙汰も無レ之、空敷罷成候

正德五年四月十四日書

一　先日深見新右衞門、此度次男被二召出一候祝儀振舞に、新井氏相伴に罷越、雨森東五郎も參候て終日語申候、僧の學文第一勸學のつゞき成乘候故、出家によきもの出來不レ申候間、何卒續候樣に致二了簡一候へと、金地院住持へ先日申入候由、他語の序に新井氏被レ申候、一座尤たる由に候得共、私存候は、外人は左樣に申候ても不レ苦候、新井氏一世の儒望も有レ之候人にて、不用の儀被レ申候かと被レ存候故、出家によき人出來ても無益の儀に候、左樣の事金地院へ被レ仰候事不レ入ものと申候得ば、新井氏暫有レ之候て夫は其許偏見にて候、只今の僧の仕たる學問は、たとひ成就仕候ても中々不レ足儀に候得共、左樣に申候ては弘法、傳敎如き人も出來不レ申候、學問の道廣く候へば、其内不レ計傑出仕たる者も出來可レ申と存候由に候故、私重て申候は、弘法、傳敎の樣成人出來候ても、何の用にも不レ立事に候、彌害には成可レ申候間、私儀は一向同心に不レ存候旨申候得ば、新井氏被レ申候は、左樣にても儒者に傑出の人有レ之候哉との儀に候故、扨は少いぢに罷成たると存候て議論止申候、其後に又文武の時太公望など無レ之ては成不レ申候、周公、召公に太公望の兵戈に鍛鍊したる人指添候故、王業成就の由にて候、是又

不忍默候て、左樣に候ては文王、周公は聖に候得共、聖にも不足成所有之、兵術の人加り不申候ては成不申と申ものに御座候やと申候へば、愚見はかた過たる由にて止申候、又翌日東五郎私宅へ被參候て、其日僉議承候處に私議論は一毫の雜無之、醇乎として醇なりと存候、異端に傑出の人出來候は、火に火を添ると申ものにて、御當代佛法流布の上にて申候は、出家にも學問よき人出來候樣に仕度と申も、申間敷儀にても無之候得共、本源を究候て議論仕候はゞ、私申通に候由被申候、其座に大勢居申候得共、是程の儀申ものは東五郎一人にて候、餘程賴母敷儒者、只今對州君臣共に信用候て、政事にも少々預り申と見へ申候、私も乍推參褒美の餘り此度進行之序文遣し申候、未發出立申候

正德六年閏二月十三日

一 新井氏へ先夜參候て緩々話申候、老臣中政務にすきと被勞思慮事無之、諸事廢置候事被申候て殊の外憤懣不平之體に御座候、委細は筆紙難盡候、本多殿火事の時分、早速老中の內音物等被差越候て、其後本所邊火事の時分、其身下屋敷延燒致候事など不快にて、火元の者重罪すべき旨被申候、又彼翁被申候は、火元可罪儀に候はゞ本多殿も同事に候、貴臣は貪着無之音物などに被及候ては、火元を被罪事人心愁訴可仕儀に候、天下の御政道にヶ樣の事無勿體事に被申候て止み申候由に承申候、獄中三年四年囚人埒明不申、今度火事に付脫申候はんなど氣遣にて俄に及沙汰申候故、

決斷不レ審事計にて候由顰眉被レ申候、間部殿一人にていまだ少かゝり有レ之候、一髮の千鈞を引にて候へば、是からは天命次第國家の運にまかせ申と存候由にて候、何方も氣の毒成事に奉レ存候、其御地國老の衆御政事に被レ懸二御心一、且又諸奉行の內にも廉直の衆も有レ之旨被二仰下一、珍重奉レ存候、姦佞の人妨レ賢事古今通病にて御座候、是又天命次第と奉レ存候、伴五六郎事も被二仰下一、兼て其樣御目利違不レ申と存候、老夫も先年一見の時分より何共合點不レ參者と存候、あの樣成る者は大方拵へ者にて御座候、小人の至極にて御座候

同日

一 新井氏にて大石內藏助父子の畫像を見申候、松平越後殿家來眞を寫し置候由に御座候、大方後鑑錄の作者たるべきと存候、湊川楠像を見申樣に御座候、夜討の時分の像にて御座候、火事裝束にて內藏助は床机に腰を懸候て、主稅は長刀を携候て前に畏り下知を請申體にて御座候、急に返し申候由に御座候故、留度物に候へ共不レ能二其儀一候、越後守殿家來尋候て、其內知人にも成置可レ申候、是も志有人と存候、先日松平大和守殿へ被レ招候て罷越申候、越後守殿は大和守殿の舍弟にて候、大和守殿家來にも大勢知人に罷成申候、是等へ相尋候ても筋可レ有レ之と奉レ存候

小谷兄閏二月廿三日書

一 先年於二廣島一植田玄節（玄節ハ山崎闇齋門弟也）と別て入魂仕候と申者に頃日逢申候付、其節出所の儀委細承候

處、最前承候とは違申付粗申進候、石川丈山門弟に一萬田三樂と申人能書にて御座候故、玄得院樣御代被二召出一廣島住居仕候、右三樂玄節妹婿にて御座候由付、一年見廻に廣島へ參候時分、淺野甲斐守被レ致二參會一事の外信仰にて廣島に被レ留候得共、京都に老母有レ之に付達て斷申候て致二歸京一候、其後甲斐江戶へ被レ參、歸國之時分京都玄節方へ立寄、是非廣島へ被レ參候樣に被レ申候由、老母嚴島見物がてらに致二同道一候樣にと、達て被レ申慇懃を盡し申候に付、其時分約束にて甲斐歸國の後、以二幣聘一迎の使者を以て被二呼越一候故、老母同道にて廣島へ被レ參候、其時分御扶持をも可レ被レ下旨に候へども、達て斷申候て唯御國內に被二指置一候はゞ居住可レ仕旨に付、其通にて五六年致二居住一又歸京候處、重て甲斐方より幣禮を厚く被レ致又廣島へ被レ招候、其後顯妙院樣御代老母へ被レ下候とて貳十人扶持被レ下候、右の首尾にて候故御奉公と申儀は不レ仕、折々出仕候て相勤罷在候由に御座候、右之趣に候得ば、玄節出所も正敷、扨甲州尤成事と感申候只東髮無レ之一事耳難二心得一奉レ存候

十二月十三日書

一　其御地御國事等依レ舊の段被二仰下一、可レ爲二左樣一奉レ存候、此度本多周防守殿往來行裝華麗成事、姬君樣にも御見物被レ遊候樣承申候、何方も同事の風俗不レ堪二歎息一候、阿部豐後守殿京都往來も驚レ目申樣に申候、且又上京の時分、諸侯よりの音物等結構成事昔の通に罷成候、井上河內守殿日光への時分も、方々よりの音物にて候由相互の事に候故、ケ樣の儀申衆も無レ之相見へ申候、唯今に至て昭穆の

御時分の通に、賄賂曾て受用無レ之は、間部殿御壹人ハ由申候、外の衆も是にて少耻可レ被レ申儀に候處、恬然としたる儀に御座候、結句ケ樣之儀にて間部殿を何角に付候て惡敷申成候體に候へども、又能存知候者は感じ申候、先日も承申候、月光院樣附女中衆のがれぬ人を、壹人も庇蔭を以出し申事堅禁し被レ申候、女謁の類少も行はれ不レ申候

一位樣方の女中は都べて威勢御座候由承り申候、是等の儀尤成事に奉レ存候云々、安藝侯の御事、江戶にても殊の外褒申候、當代の賢侯第一の樣に申候、此頃も承候得ば、廣島にて家來侍中武藝御覽候て勝れ申面々へは御褒美抔有レ之由に御座候、御領地每度御巡行候て、民間の疾苦を御尋被レ成候由に御座候、賴母敷人君と奉レ存候、何とぞよき師儒を被レ得候て、王道の趣きを御僉議被レ成候樣にと奉レ存候、扨は有馬玄蕃頭殿も庸君にて無レ之見へ申候、頃日家中への條目を見申候、いづれも尤成事に奉レ存候、越前の伊豫守殿もとより名譽有レ之候、其外に少身にては松平右近將監殿、酒井勘解由殿など學問の志有レ之候、勘解由殿は殊の外好レ學被レ申由に候、隱居にて候得共、只今の雅樂頭殿へも移可レ申と奉レ存候、是も前より佐藤五郎左衞門を信仰にて候、佐藤事學術は山崎流に候へども、大石內藏助を名敎の罪人などと申者に候へば、定て經義の筋を不レ正義にて可レ有レ之と奉レ存候、殘念成儀に御座候、勿論紀伊中納言樣一統に褒申儀に候、去共御學文御好の儀は承不レ申候、其外指て替申儀も不レ承候、水戶樣には頃日女中に能役者被二仰付一、シテ、ワキ拍子方共に御興行御座候、天下の手本にも御成方に

候處、如何の儀に候哉と取沙汰仕候、太平目出度御世にて、ヶ樣の儀は却て被㆑對㆓公儀㆒候て宜敷被㆓思召㆒候ての儀にても候哉、兎角愚案の及ぶ所にて無㆑之候

正德二年壬辰冬、先生與㆓白石丈人㆒諫書

一 昔延喜年中に有て、菅相公儒家に出て、時に被㆑用權を專にす、時に三善淸行書を奉て菅公を諫るに、身を愼み禍に遠ざかるの道を以てす、夫菅公の材德古今に傑出して、丞相の貴に居れり、本より天下の衆畏服する所にして、誰か敎の間然する者あらんや、然るを、淸行一介の賤士を以て、獨其威嚴を冒して、人のいはざる所をいへり、そのかみ、恭靖先生いませし時に、僕と此事を論じて、淸行を以て天下の奇士とせり、僕おもへらく、淸行豈奇士の名を求る者ならんや、實に菅公を愛するの深きに出るのみ、今吾兄德望の尊き事、菅公に比するに、いかんといふ事をしらずといへども、其學術文章におゐては、恐らくは菅公の及ぶ所にあらず、加之、聖主の知遇に逢て、其材力を振ふ事も、菅公の後いまだ儒臣の如㆑斯成る事をきかず、僕むかしより、同門交を辱ふして、近頃眷顧の厚きを蒙る事日久し、竊におもふに、吾兄を愛するの深き、誰か僕にしく者あらんや、淸行是を疎交の相公にいふ事を得て、僕これを同學の故人にいはずば、旣に切偲の情にそむき、又仁を輔くるの道にたがへり、今吾兄の寃除を開て、來て忠告する者、必いはむ、今より以後、迎接を愼み、權利に遠ざかれとは、是常人の知る所なり、豈吾兄のために論ずるにたらんや、僕がいふ所は、こゝにはあらず、吾兄志氣

の間に有、吾兄朝廷におゐて、奬順匡救の功、頗る赫々として人の耳目にあり、然共、古人天下に大勳勞あるに比せば、恐らくはいまだ並稱するに足らず、吾兄の豪傑なるをもて、胸中に塵芥ばかりもせざるべし、豈是等公要の事をもてみづから滿るの志あらんや唯盤根錯節利刄にのがるゝ事なふして、破竹の勢有によつて、其詞色の間、おのづから剛鋭果敢の氣盛にして、謙退抑損の心すくなし、吾兄も其れかくのごとく成事を覺ざるべし、書曰、有㆓其善㆒喪㆓厥善㆒矜㆓其能㆒喪㆓其功㆒、僕願くは吾兄其善を有せず其功に矜らざらん事を、孟子反が其馬に策うつ聖人に稱せられ、馮異が樹下に辟る、古今の美談とせり、是吾兄法とるべき所也、正考父が鼎の銘に曰く、「一命而僂、再命而傴、三命而俯、循ㇾ墻而走、亦莫㆓餘敢侮㆒」蓋其位愈のぼれば其心愈下れり、譬へば堂を作るに、上壹尺の崇さを添れば、下壹尺の基をますがごとし、然らざれば、必傾覆の禍あり、方今聖明上に臨み、譏毀の患なく、彼延喜の時とひとしからずといへども、盈るを害して謙るに福し、盈るを惡んで謙るを好するは、天人不易の常理也、愼ずんば有べからず、僕願くば吾謙々の心を秉て天人の道にかなひ、よく其譽を終て德音瑕をかゞざらん事を、今吾兄寵錫の新なるを聞て、祝をもてせずして規をもてす、唯吾兄其愚を哀て、これを察納せよ、不備

十一月　日

兼山秘策 第二册終

兼山秘策 第三册

起正德六年至享保二年

一 今度當地の凶變御聞可ㇾ被ㇾ成候、天下一統に奉ㇾ絕㆓言語㆒候儀御座候、去共御相續早速相極、是又一統奉㆓安堵㆒候儀御座候、私儀は御存知の通文昭院樣御徵辟の者に候故、此度の御儀乍ㇾ憚別て御殘多奉ㇾ存候、然共天命不ㇾ及㆓是非㆒候事に候得ば、此上は天下得㆓長君㆒、殊更御賢德の事日比群臣奉㆓仰望㆒事に候へば、國家永祚の御基と奉㆓恭羨㆒候御儀に御座候、只今二ノ丸に被ㇾ成㆓御座㆒候處、此十日林大學頭被ㇾ爲ㇾ召候て、講談御聞被ㇾ遊候由申候、此節早速被ㇾ及㆓此儀㆒候事、天下に學風を御勸被ㇾ遊候半との思召も候哉と奉ㇾ存候、第一儉素の御生付にて華麗の事御嫌被ㇾ成候て、何よりの御儀と奉ㇾ存候、紀州御邸へ被ㇾ成㆓御座㆒候時分に、御厩へ御成被ㇾ遊、馬卒共御厩の二階に紙帳をつり置を御覽被ㇾ成、紙帳の樣成ものは何にて候哉と御尋被ㇾ遊候故、紙帳の事申上候へば、廣屋中にて蚊帳にてさへ暑氣難儀

いたし候處に、難儀の段御察被レ遊候て一々蚊帳を被レ下候事も難レ被レ成候間、二階にふせり申候處に窓あけ候て、風の入申樣に致候てとらせ候へとの御意にて、俄に庇二階に窓を明け申候由承申候、是も下情を御憐察被レ遊候上と奉レ存候、紀州より四十餘人御供致し參り、是も御意に應じ申人被二召寄一と申にても無レ之、其日の用番人を其儘被二召寄一候由申候、惣て、誰出頭仕候と申儀も無レ之、一樣に被二召遣一候由申候、小笠原主膳と申人被レ參候、此人四十餘人の內頭たる人と申候、先以御家老分の人と申候、新番頭松平主馬と申人の兄弟の由に候、實體人と申候、紀州の御家老も其儘被二立置一、左京大夫殿此度紀國樣ととなへ申儀に候へば、紀州御家中は其儘うごき申間敷候、去共被二召寄一人も有レ之候、祇園與一郎などいかゞ可レ有レ之哉、江戶へ被レ出候樣仕度候、此後段々御新政ども可二相違一候、先江戶中落着申候て、別て靜謐成事に候、此上は目出度奉レ存候

一　當地替儀も不レ承候、新井氏とも頃日緩々語申候、此度の御儀、新井氏など別て難儀に御座候、此後は隙に可レ被レ成候間常に語可レ申と被レ申候、間部殿も如何成可レ申候哉、曾ていまだ知不レ申候、移替の事于レ今不レ初儀ながら、傷心申儀に御座候

五月十四日

奥村源右衞門樣

追而私儀も次第老衰其上持病の痛もしか〳〵無レ之、世上の勤も別て難儀に御座候、何卒近年之內悴

今少爲レ致二學文一儀候て、名代に仕候て、私事は隱居願申度と存候、此身の境界何の望も無レ之候間、世間にも何の願も致飾も見へ不レ申候、此上ながら學文もはやり候べしと存候、夫共よき師儒無レ之候ては、學文はやり候ても人主の耳目をひらき可レ申樣も無レ之候、荒川景元と申候て只今紀州の儒臣にて御座候、當年當地に詰候て居申由にて、此人は伊藤仁齋が弟子にて、其故かねてより上にも仁齋事御聞被レ成候由、源藏可レ被二召出一抔と申沙汰も有レ之候、此人など出候て仁齋が學派抔發向仕候哉、無二心許一存候、以上

小谷兄成書、以下四ヶ條

一　藝侯樣二三年前度々寒夜及二深更一候迄御讀書被レ遊二御座一候處、柝の音を御聞被レ成、あの撃柝の者寒氣の時分と申、終夜臥り申間もなく相勤扨々可レ致二難儀一候、夜食爲レ給候哉と御近習衆へ御意に付、夜食は被レ下儀無二御座一候旨被二申上一候得ば、せめて夜食を爲レ給候樣被二仰出一、其後より夜廻り者へは夜食被レ下候事に罷成申候由、乍レ恐奉レ感候事、延喜聖主の寒夜に被レ脱二御衣一候と類し申候て、聖主の民は蒙二其澤一候、右藝侯には仁心仁聞あつて仁政迄御兼備被レ成と奉レ存候、此咄終不レ承候處一兩日以前青山御下屋敷の人咄にて初て承申候、御上屋敷夜廻り者夜食被レ下候に罷成候を、御下屋敷夜廻りの者共承候て、何れの邸にても同事の儀に候間、私共へも被レ下候樣にと願候へば、尤其通りに相成候處に、御屋敷一統に被レ下候由、右の咄承候へ共、實否如何御座候と奉レ存候に付、追付表方の小

役人に何となく相尋、擊柝の者へ夜食を被レ下候と申候へば、成程其通に御座候、先年は無レ之儀にて御座候處、近年被レ下候由申候故、扨は實事と奉レ存候、右の咄を申出、ヶ樣に承り候故尋申儀にて候、然ば右の御意の時分より被レ下候御樣子と相見へ申候旨申入候へば、右の者申候は、されば其事にて御座候、去年御歸國以後は眞浦藏人指圖にて相止申候、跡には無レ之儀にて候を殿樣新に被二仰出一被レ下候事に候へば、御留守中は不レ入儀に候とて止可レ申候由承候、當年御參府以來は又被レ下候哉、其儀は未レ承候由申候、如レ此賢君の御取立被レ成候御家老に如レ斯の者有レ之は、是も又奇妙兎角絕二言語一申候比日世上譬大成物何々、小き物何々、能き物何々、惡物何々などと戲に書集候事流行仕候由御座候、其內に能き物當公方樣、松平安藝守仕置と申由に御座候、全書は未見不レ申候へ共、人の咄に今日承り申候、尤市童の戲言より出たる物にて御座候得共、末々迄公方樣の能を奉レ稱候事、天下一統に大幸不レ過レ之奉レ存候、扨は藝州侯の御手柄、世上にても浮言にては無二御座一候、是又難レ有儀奉レ存候

一　九條故左大臣樣の御簾中樣は、安藝守樣の御妹秀君樣と申候處、二三年前左大臣樣薨去の後、持法院樣と奉レ申候、若君樣御一所被レ成二御座一候處、是も當春御疫病にて御早世被レ遊候、夫より持法院樣御病氣の由御座候得共、御愁傷一通の御儀にて、御不食の儀に候間、追付可レ爲二御快氣一と、此方樣へも度々御樣體申來候處、終には御不食にて御逝去にて御座候、然處頃日密に承候へば、若君樣御早世故九條の御家絕申に付、持法院樣へ御相應の御贅婿を御取被レ成、御相續可レ被レ成候、攝政樣思召に付、

持法院様へも其段被二仰入一候得共、堅御得心無レ之先其分に罷成居申候、去共攝政様には是非右の通と思召候御様子にて御座候由、依レ之先頃安藝守殿京都へ御立寄被レ遊候時分、持法院様委細御物語被二仰入一、其上にて兎角郷國には引取被レ下候様御願被レ成候へ共、其段は難レ被レ成御儀に御座候故、御許容無レ之旨、其時分より思召切候御様子にて御絶食被レ成、終に御逝去被レ成候由申候、未實否は不レ奉レ存候得共、此咄密承大方泣哭仕程に覺申候、彌實事に御座候はゞ、京師邊より相聞可レ申と奉レ存候、尤此儀は尚更御他言被レ下間敷候

一　只今廣島牢屋に禁籠の者壹人も無二御座一候に付、囚獄の番人も被レ止候由沙汰承候由に付、聞合申候得ば、左様にては御座有間敷候、慥壹人禁籠の者有レ之筈かと奉レ存候由申候、壹人弐人は有と申物にても無二御座一候、以上

五月十二日

一　當地御因事以後は、隨分御靜謐に御座候、此十日には林大學二ノ丸へ被レ爲レ召候て、御懇意にて御用など被二仰出一候由に御座候、世上には講談御聞被レ遊候様にも申候得共、講談は無レ之と申候、慥成儀は不レ存候、紀州よりの奉駕の衆四十餘も有レ之候、小笠原主膳と申人御家老の由にて、當地新番頭松平主馬と申人の弟の由にて、能人物成人と申候、紀藩に被レ成二御座一候内、御廐へ被レ爲レ成候ての事先日申進候、又其後承候へば、紀府にて御小納戸役の衆の中壹人泊り番の所に、外へ咄に罷越し御

番忘候て不二罷出一候、翌日御小納戸頭の人此段可二申上一御前へ罷出候處、先達て其段御存知被レ成候て御近習人を御のけ被レ成候て被二仰出一候は、此者平生武藝も精出心懸有レ之樣に被二思召一候、いかゞの由御尋の處、其通に奉レ存候旨申上候へば、左候はゞ此度の儀は某に對し候て免じ候へ、とかく人に全人は無レ之物に候へば、過失はゆるし可レ然候、去共御存知不レ被レ成分に致、扨彼者親類共へ申聞せ、向後を急度愼候樣可レ仕旨御意の由申候、是等も結構成御儀と奉レ存候、以上

五月十九日

一　五月八日の貴翰到來忝致二拜見一候、如レ命上の御儀天下一統奉レ絕二言語一候、當春以來御意の分少々御指引御座候へ共、指て重き御樣體にも無レ之、前月十五日迄も表へ出御被レ遊候處、御變症指出急に被レ爲レ重候て、前月晦日薨過御被レ遊候、當月朔日の朝爲レ窺二御機嫌一私式迄登城仕候處、御老中御列座にて夜前薨御、且又爲二御後見一紀伊中納言樣二ノ丸へ被レ爲レ入候旨被二仰渡一候、追て被二仰渡一儀有レ之候間退出仕間敷旨、暫有て御老中又御出、中納言樣天下御相續に付、紀伊の御家は左京大夫殿御繼候、向後左京大夫殿を紀伊殿と可レ申旨被二仰出一候、最初薨御被二仰渡一候時は間部殿にも御出にて、後に被二仰渡一には間部殿は御出無レ之候、翌日より中納言樣を上樣と奉レ稱可レ申旨一統に令下り申候、夫より毎日諸侯以下直參の面々二ノ丸へ御機嫌伺に罷出候、此度當上樣御承統の儀、第一文昭院樣御遺言の旨に御座候、昭廟薨御の節、御幼君の御儀不慮の御事も有レ之候はゞ、御三家の御中より御相續

被レ成候儀も兼て被二仰出一、其時分の尾州様には御在世にて無レ之、其後御當代迄過申候、其節右の御遺言御請被レ成候は當上様と水戸殿にて御座候故、此度指當り當上様御承統の筈にて御座候、其上に東照宮御曾孫に候へば、尾州の御家よりも御世次も近く、殊に御英明の御聞も有レ之、天意人望の属する所に御座候へば、此上には天下の御長久の基と群臣奉二安堵一候御儀に御座候、第一結構成御儀には、御天性儉素を御好華麗の事御嫌の由、御質素成御儀と申候、驕奢當世の大弊に候處、此後此風改り可レ申と仰望此御事に奉レ存候、間部殿事雁ノ間御詰衆に被二仰付一、中務殿は御譜代大名並に被二仰付一候、其外御小性衆御小納戸衆不レ残、寄合組、又は小普請に被二仰付一候、紀州より隨駕の衆四十餘人二ノ丸へ被レ參、小笠原主膳と申人御家老分の由に御座候、實體成人の由申候、新番頭松平主馬と申人の兄弟の由に御座候、常憲院様以來、御老中方取次を以諸事御窺ひ候へども、向後は何事によらず御老中御前へ罷出候て可二申上一候、御直に御聞可レ被レ成由可レ被二仰出一候、當月十日には林大學頭二ノ丸に被レ爲召候て御懇の御意御用も被二仰付一候旨に御座候是等も遺老御捨不レ被レ成思召と奉レ存候、追々御新政も可二相達一候と奉レ存候、以上

五月廿四日

追て大行増上寺へ被レ爲レ移、御葬禮以後法會有レ之、此廿三日私共迄も參詣仕候、御梓宮の事常憲院様以來御棺中へ御刀掛を致、御戸の後に御椅子を拵へ、御棺の外に御籠を懸、金銀を裝ひ申候、此

度被二仰出一候て、御刀掛、御椅子指止可レ申候、御簾抔も質素に可レ仕候、金銀にて光申候事御爽事には不相應の旨に御座候、其故俄に改り申迚御費用倍申候、其段御聽に達候得ば、御費用の事構申間敷候迚改可レ申旨にて、其通に罷成申候、御留守居杤木和泉守支配の中に、此日手打に致候者有レ之候、此節に候故其分にも難レ致老中へ窺候處、老中も如何裁被レ遊哉、上聞に達候處、手打喧嘩と申者は不二存寄一物にて、是等は時節又は場所の僉議は不レ及候間、少も構ひ申間敷旨被二仰出一候、是等御英明の機見へ申と奉レ存候、紀府被レ成二御座一候內、小納戶衆の中に泊番忘れ候て不二罷出一者有レ之候、翌朝小納戶頭驚き候て窺候て、急度可二申付一と御前へ罷出候處、先達て此儀御聞被レ成、近習の者はのけ被レ成候て被レ仰候は此者常々武藝に心懸候て弓抔は拔群に見へ申候、然れば用にも立可レ申と御覽被レ成候、如何存候哉と御尋故、其段は御意の通に候由申上候へば、左候はゞ此度の儀は我等に對し候て法を枉げ免し候樣にとの御意にて候、其上にて被レ仰候は、兎角人は全人は無レ之者に候へば一方よき事候はゞ、一方は免し不レ申候ては成不レ申候、向後其心得可レ仕候、然し當番を忘れ申は大成過失に候處、御存知被レ遊候ては其分に難レ被レ成候間、御存知不レ被レ成分に致可レ申旨、其方彼者親類どもへ此事申聞せ、向後は急度相嗜申樣にと可レ申旨にて相濟候由頃日承候、是等も乍レ恐道理に當申儀に奉レ存候、紀府の儒臣は荒川景元と申者那波弟子にて、後は伊藤仁齋が門弟に罷成、紀州にて古き儒者にて候、只今景元隱居候由に候、其故兼て伊藤源藏事抔御聞被レ成、御抱可レ被レ成な

どと申沙汰も先年承申候、祇園與一郎など江戸へ罷出可レ申候哉、先は紀州の家臣は動き不レ申筈に候へ共、又被二召寄一候者も可レ有レ之候、御近習、御膳番、御醫者等は此度參申候、新井氏抔は此後彌隙に可二罷成一、是は惜き儀に存候、御書中に、台德院樣御血脈此度御絶被レ成候と被二仰下一候、台德院樣御血脈は松平肥後守殿に御座候、此度大猷院樣御血脈は御絶被レ成候、去年東照宮百年にて、當年百一年目に又御元祖の御脉へもどり申候、是皆天命にて人力の預り申候處には無レ之と奉レ存候

一　今日迄は直參の面々孰も長髮に罷在候、肴商買普請等御免に御座候、服忌の儀はいかゞ罷成候哉慥に不レ承候、先には上に御服忌は無レ之、五十日は只御愼と申沙汰に御座候、先日大學頭被レ召候て御尋の儀有レ之由に候、定て其時分何か被二申上一にて可レ有レ之と奉レ存候、松平大和守殿當月七日發足の筈に候處、今度の變に付何れも歸國の大名衆滯留にて候、先月は阿部豐後守殿月番にて、御暇の衆も御機嫌伺に二ノ丸へ登城被レ成候、樣々と指圖にて、翌日朝より久世大和守殿月番にて、是へ尋候衆は、御暇以後は登城無レ之筈に候間、使者を以可レ奉レ窺二御機嫌一旨指圖に候、其故半分は登城、半分は使者にて異な物の由申候、箇樣の儀は無二相違一候樣に示談も可レ有レ之儀に御座候、いかゞの儀に候哉、此以後は上樣諸事御聞被レ成由に候間、御老中中々油斷被レ成間敷候、不僉議成事候はゞ可レ爲二難儀一と申儀に候、以上

五月廿二日後元遊見書中小谷見以下二箇條

一　中納言樣御儀、如下被二仰下一候上御賢德と申御長久の基と奉レ存候、就レ夫次第を以申上候時、尾張樣の筈と思召候へ共、當尾張樣は文昭院樣御在世の尾張樣にて無二御座一候故と思召候、成程御當地にて其取沙汰御座候、文昭院樣薨御御前に、尾張故大納言樣と當紀州樣へ御遺言被二仰置一候處、大納言樣被レ薨候へば、此中納言樣へ御讓被レ遊候事御尤成儀と申候、併中納言樣達て御辭退にて、御年齡を以申上候へば、水戶樣御續被レ遊候筈に思召候、御家を以申候へば、尾張樣の筈と思召候、中納言樣には、何れの道にも御立可レ被レ成譯にて無二御座一候旨被レ仰候得ども、右文昭院樣御遺言の儀を以、水戶樣急度被二仰立一故、其上にて落着仕候由風聞に御座候

一　中納言樣には、先年の御養君と申儀御座候、御幼主樣にて御座候得ば、いかにも御幼君と申候にては御座有間敷と思召候由奉二承知一候、漢にも此例御座候樣に奉レ存候、天子にては無二御座一候得共、魯閔公の後僖公被レ嗣候、此例と奉レ存候、尤今般も御養君樣と申候ても無二御座一候得共、御讓を受候て重く御座候故、三年の喪にて可レ有二御座一儀と先生なども被レ仰候、頃日世上に申慣候は、今般は跡々と違諸事御遠慮なども輕く御座候、五世にして親盡と申儀に候へば、先主と御當代と御服忌も無レ之故と申候、是は大方林家より出たる說にても可レ有レ之と先生被レ仰候、世上に箇樣には申候得共、御讓を被レ嗣候事重く御座候、重きを受候上は御養君と申にては無二御座一候得共、定式の御服にて可レ有二御座一と思召候由被レ仰候、御昭穆の儀は、魯の僖公の時僉議にて埒明申儀にて御座候かと奉レ存候旨申上

候得ば、成程夫には替儀無之由被仰候、乍然御服忌と申候ても、伊勢、日光等への奉幣使を御延引候迄にて、其外は追付將軍宣下等御能抔も有之、追々御目出度〳〵と申續候世間に罷成可申と奉存候、愼終は人心の所不能自已者、上たる人の所當爲者にて御座候處、若今如斯に候はゞ何を以下民歸厚可申候哉、當十日林祭酒二ノ丸へ被爲召候て御尋の儀有之由申候、林家より出候はゞ相違の儀ども可有之と奉存候、今般は新井氏へは何分御用も無之由申候

一　御當地御凶變の儀乍恐奉絕言語候儀先書にも申上候通に御座候、併御長主樣御立被遊、其上御賢德に候哉、扨々打續度々の國恤にて人心も慣申儀に御座候、何の騷敷儀も無御座候、隨分世上穩に御座候、十六日より於增上寺御法事御座候處、今日四ツ時上樣御參詣四半時還御に御座候、蒸著に御座候得共雨天にても無御座、爰元御表御門前〔田の邸 蓋候樓〕御成被遊候處、何の相替儀無御座候、暫の間に事濟申候、久々にて御成の儀に候間嘸嚴重に可有御座と奉存候處、跡々より終に無之程何のやかましき御儀無御座候

一　於藝州段々御善政の儀申進候處、御感情被遊候由御尤奉存候、頃日に至り候て密に承り候へば、過分の御恩澤には浴し候得共指て人々悅び不申候、其仔細は、隨分過分に被下候得共、家來の騎り道中の入用衣類等の費用に罷成候故、勝手方は自若として蒐候と歎き申者多く御坐候體に相見へ申候、有仁心仁聞而不被其澤と申物にも可有御座候哉、此外持法院樣御忌中幷國喪の内も、

私幹の了簡には雖ニ心得ニ御儀共御座候、毎々祭酒へ御參會被ㇾ遊候故、林家より出候儀にて可ㇾ有ニ御座ニと奉ㇾ存候

一　當廿一日野矢理大夫役儀御免隱居被ニ仰付ニ爲ㇾ代井伊清左衛門百石の御加增にて、大村七郎左衛門同役に被ニ仰付ニ候、廿一日廿二日此外御加增、御役替、御褒美等被ㇾ下候者御座候、雖ㇾ有儀は勿論の儀に候へども、御喪居の內に候へば、今暫御延引被ㇾ遊候てと奉ㇾ存候、此外にも申上度儀とも御座候へ共指扣申候以上

五月廿七日

追て此砌世間一統に上樣の御儀迄を奉ニ稱美ニ候、其內一兩件別紙書附懸ニ御目ニ申候、間部殿事當主二ノ丸へ被ㇾ爲ㇾ入候時分、本多殿と兩人共御老中跡に御附候て、伺ニ御機嫌ニ二ノ丸へ御越候、如何樣の儀御座候ても、御尊骸の御側を離候事は無ニ御座ニ筈に御座候處、早當主へ被ㇾ詰候御樣子と其時分より沙汰にて御座候、御尊骸增上寺へ被ㇾ爲ㇾ入候はゞ、追付隱居にても御願の場にて可ㇾ有ㇾ之旨諸人申候處、其儀無ㇾ之其內あなたより鴈ノ間詰に被ニ仰付ニ候、未威勢を被ㇾ貪候よりの事に申慣候、月光院樣平生の御奢、且又一位樣と御不和の儀餘程憶成沙汰承申候、頃日に成り候て知れ申趣に御座候、是等の儀越前守殿は御存知無ㇾ之事は決て無ㇾ之筈に御座候、越前守殿平生の御勤勞も知申候、有章廟御在世の內は曾て知不ㇾ申儀に御座候、以上　（以上小谷兄五月廿七日來書）

別紙左に記レ之

一　今般御相續被レ遊候事、天下の御政務の儀と被二思召一候故、只今迄の上樣と違申候て、殊により御輕々敷奉レ存儀も可レ有レ之候、存の外成儀をも被二仰出一候事も可レ有レ之候間、兼て其段心得可レ申旨御書通に御座候由

一　權現樣御代よりの御格式の儀においては少も儉約仕間敷候、其外の儀は隨分無用の御費無レ之樣可レ仕候

一　紀州御家より被二召連一候御用人内藤市郎大夫とやらん申人、殿中不案内故、御老中方御列座にて被レ成二御座一候處に罷通候時分、氣付不レ申不禮仕候に付、達二御聽一紀州へ御返閉門被二仰付一候由、先立仕候御道册、是も紀州より被二召連一候者の由、是又無禮の仕形に付、迷惑被二仰付置一候由に御座候、以上

一　紀州に被レ成二御座一候時分、御鷹野に御出被レ遊糞桶の中へ御落被レ遊、御惣身不潔に御汚被レ遊候處、其糞桶の主を呼出候樣にとの御意に付、御前へ罷出候へば、定めて御手討にも被レ遊候哉と何れも奉レ存候處、左樣には無レ之、其方定て大切に可レ存物にて候處、風と思召懸も無レ之、卒忽の儀被レ遊候旨被二仰出一候て、其時分汚れ候御衣類の分は勿論、御腰物迄被レ下候由

一　江戸御屋敷の内二通り程往來仕候へば、一里の道程有レ之處に御座候由、平生御食後には必御歩行

被㆑遊候、然る處一日御步行被㆑遊候時分、御慰に御自身にも御近習も手を振足音高く踏付、供の下々の奴をふり候樣に被㆑遊候て、一通り御行步被㆑成㆓御仕廻㆒候て被㆑仰候は、やつこを振候は手足共に草臥申物にて、箇樣にては何の役にも立不㆑申筈に候間、供の下々のやつこ爲㆑振候事は、向後必無用に可㆑仕旨被㆓仰出㆒、夫より御家中迄も異形成仕形の供廻無㆑之候由

一　頃日も御用聞の呉服屋咄申候由にて承り申候、縮帷子御好にて被㆑爲㆑召候、至極太き縮布にて御座候、常に御帷子も殊の外太布にて御座候由、冬には御膚着は木綿にて御座候、長福樣も綿衣のみ被㆑召候由、御腰物鞘三尺餘、御脇指も貳尺五寸計蔬菜の御料理粟飯御大食被㆑遊候由、御酒も餘程被㆓召上㆒候由、但最前主膳樣と申時分は、御大酒にて御座候處、紀州家御相續の時分より分量御極被㆑遊、御大酒は不㆑被㆑遊候と申候

一　御尊骸未御寺へ御移不㆑被㆑遊時分、何某組與力手討仕候を、此砌如何樣の儀有㆑之候共手討抔は遠慮の砌に御座候處、不了簡の仕合と申評判に罷成、下にて不㆑得㆑止奉㆑達㆓御聽㆒候へば、手討か成敗かと御尋被㆑遊、手討の段申上候へば、喧嘩手討の儀は時節にも場所にもより申間敷旨上意にて、其分に罷成申候由

一　久世大和守殿物語、何の五左衛門とやらん申者贅壻にて、親跡目にて百五十石取罷在候處、當月中旬組の足輕五左衛門妻と密通仕召連立退候を、五左衛門大和守殿へ暇を乞追懸候て、板橋にて兩人

其切留申候由、以上（以上別書小谷見）

一　上様先頃御老中方へ御白衣にて御逢被レ成、上意には白衣如何と可レ被レ存候へども、向後昼夜共毎毎心易諸事不二申談一候へば不レ叶儀に候ゆへ、其度々急度改申儀にも不レ及候に付、如レ此仕合ト被二仰出一候由の事

禁裏御用、日光御用等の時分は、先達て可レ被二申上一其御心得被レ遊候て、御逢可レ被レ遊旨被二仰出一候旨（青賢私記）

一　吹上御庭の内結構成御亭多有レ之候由御聽被レ遊、何もたゝませ可レ申候、出御の節の爲には、小さき御茶屋にても一ッ有レ之候へば宜候由被二仰出一候旨箇様の儀共此外も咄し多御座候、實否は不レ奉レ存候へ共御尤の御事と乍レ恐奉レ存候、但早ゟ御事にても御座候哉と取沙汰も御座候

一　薩摩守殿御檜重上り申候處、其御菓子可レ被二召上一旨上意に付、跡々より獻上物は不レ被二召上一儀を申上候へば、御自身に御覽有レ之候、獻上と申候へば精誠被レ入レ念候、誰とも可レ爲二其通一候、其上薩摩守何の遺恨有レ之毒害可レ仕哉、是非上レ之候様にとの上意にて被二召上一候由

一　御臺子有レ之候處へ御出被レ遊、御茶を被二仰付一可レ指上一旨御直に御意に付、御茶碗を御陪膳衆へ可二相渡一と仕候へば、其儘上候様に御意にて御直に御取被レ遊被二召上一候、其上にて京燒外に葵の御紋付を御覽被レ遊、是は何の爲に候哉と御尋被レ遊候處、跡々より被二召上一候御茶碗、箇様に爲レ調候旨申

上候へば、箇様の儀には及間敷候、御紋を燒付㆑不㆑申常の茶碗に仕候へと上意に付、其後は高原燒とやらんに成申候由

一　御帷子は太き縮御好被㆑遊候由、さらしにても至極ふと布の由、御布上下も其通に御座候由

一　御大食にて至極怪き物を被㆓召上㆒候由御酒も餘程被㆓召上㆒候由、武藝御好被㆑遊、御力量も餘程被㆑成㆓御座㆒候由

一　水戸様へ御對面の時分御會釋、最前紀州様の御時分の御挨拶に付、水戸様御難儀被㆑遊其段被㆓仰上㆒候へば、未宮下も無㆓御座㆒候へば、跡々の通に被㆓思召㆒候由上意の由

一　長福様附人々、別て女中衆は長福様御登城の御供可㆑仕と存じ、其心得にて用意抔仕候事無用に被㆓思召㆒候、只今まで被㆓附置㆒候人々可㆑被㆑爲㆑召も、又は被㆑爲㆑召間敷も相知不㆑申候由被㆓仰渡㆒、依㆑之女中方抔殊の外用意仕候處、ひしと指止候由

一　一位様は御主殿へ被㆑爲㆑入筈と申候、月光院様は吹上の内にて一萬坪御屋敷被㆑遣、御亭御修覆出來被㆑爲㆑入候筈の由申候、法心院様、蓮淨院様は御願にて夫々御附人被㆓指上㆒、一位様に御勤被㆑成度旨に付、其通りに罷成申候由沙汰仕候

一　半藏御門清水御門等の儀、跡々の通往來に罷成、昨日より往來仕候由申候、方々相勤候使者等の爲にも一段の儀と奉㆑存候、以上　（右小谷勉善見來書）

六月廿一日

一　御當地町方疫病被レ行候て、凡八萬人程死人御座候由申候、頃日に到り候ては、棺もきれ申候故、輕き者は大方古樽に入候て葬申候由申候、火葬に仕候所も殊の外せき申候に付、俄に可レ遣と申候ても不レ罷成、帳に付置何れの釜にても十九番廿番過不レ申候へば成不レ申抔と申由に御座候、やき仕廻候ても骨を拾ひ仕廻候て、又葬申候故はかどり不レ申候、依レ之身代も宜候ものは新釜を爲レ拵候へば、殊の外過分の金子費用懸り申候、土葬可レ仕と致候へば寺々寺內すきとふさがり、古き墓は不レ殘切崩候樣に仕候へども、夫とも尺地も無レ之樣罷成候故、火葬にも土葬にも俄には難レ成、其分に難二指置一御座候に付、頃日は輕き者は大方薦に包候て築地、品川の海へ水葬に仕候由、箇樣の事は何とぞ上より被二仰付一候樣可レ有レ之と奉レ存候、當主御賢明の沙汰は御座候へども、中々箇樣の御仕置には決て及申間敷奉レ存候、歎敷儀に奉レ存候、以上　（小谷兄與二小寺兄一書）

七月廿二日

一　昨十三日將軍宣下相濟申候、大雨に候處無二御滯一相濟恐悅の至奉レ存候、其後段々御新令も可レ被レ下と奉レ存候、御儉素の事は古今に珍敷程と奉レ存候、頃日も御印籠出來、黑塗內は梨子地、御緒〆はむくろじ、御帶着は象牙のくさりにて候、御大小皆赤銅、鐵、赤がね拵にて候、是等皆慥成儀に御座候、先日御馬乘袴被二仰付一候、小倉木綿に御座候、是にて御推量可レ被レ成候、先結構成御事に御座

候、御鷹野追付可ㇾ有ㇾ之由頃日御鷹匠頭衆抔被二仰付一候、以上（先生遺跡書中）

八月十四日

一頃日隨分御靜謐何も取沙汰承不ㇾ申候、但虛實は不ㇾ奉ㇾ存候、御相撲の者被二召抱一候由先生御聞候とて御咄被二仰聞一候、扨は町人の者月額の鬢を剃さげ候樣觸申と申候、是も一兩人末々の者の咄にて承り申候、虛實は未ㇾ奉ㇾ存候、町中一統の儀に候へば追付樣子相知可ㇾ申候、是は上より出申儀に御座候哉、但上に御好被ㇾ成故下より申付事に御座候哉、難二心得一儀に奉ㇾ存候、鬢の厚薄の僉議を情の厚薄に移申度ものと奉ㇾ存候、總ての御樣子粗鄙淺露の四字を出不ㇾ申と先生密に被ㇾ仰候、又一統先頃御老中方御前へ被二召出一、相模守殿へ三品御尋の儀御座候處、二品は御覺候て被二仰上一、一色は中々御覺無ㇾ之旨被二仰上一、是は御首尾宜候由、其次河內守殿へ年中御收納高御尋被ㇾ遊候へども、御覺無ㇾ之旨被二仰上一不首尾に御座候處、大和守殿へ御城中櫓の員數を御尋被ㇾ遊候へども、是も不ㇾ奉ㇾ存旨被二仰上一、夫より豐後守殿、山城守殿へも、一色宛段々御尋の儀御座候へども、何も不ㇾ奉ㇾ存候と計被二仰上一候故、上にも御不興の御樣子に御座候由、其以後御老中方より上意に可ㇾ應儀共御伺候へども、なにも遲からぬ事と被ㇾ仰、其以後は何の被二仰出一も無ㇾ之との御事に御座候、此說の通りに御座候へば、深く御思慮も有ㇾ之樣に奧床敷奉ㇾ存候、是は新井氏咄しにても御信用は難ㇾ被ㇾ成候へ共、各別の儀に思召候と先生被二仰聞一候、新井殿は今以越前守殿は賢人の樣に被ㇾ申由に御座候、世上に申候とは各別の事

にて御座候、其内御事情相知可レ申候、以上（小谷見書中）

七月十六日

一一說に文昭廟御遺書には、尾張五郎太様、紀州長福様、鍋松様、有章廟萬一の儀も被レ成二御座一候はゞ爲二御養君一御立被レ成候て、尾張様にても紀州様にても御後見被レ成候様にとの御事に候處、水戸様御建議の趣有レ之、其段一位様へ急度被二仰上一候て此度紀州様御立被レ成、御後見の名も無レ之直に天下を御取被レ成候、但數度御辭退に付、水戸様御手を御取被レ成御上段へ御誘引、尾張様と被二仰談一即刻御拜禮被レ成候て、御位も定り申說有レ之候間、其段潜に先生へ申上候へば、先生御聞被レ成候趣其に御物語被レ成候、如レ右御座候、有章院様四月廿八日頃俄に御病症重く被レ爲レ見、大方其日の内にも被レ絕候様子に申候、文昭廟薨御の前、嗣君御幼稚誠に水の上の泡の様に被二思召一候爲、天下長君を被レ立度候間、其時の尾張様を御立可レ被レ成かと、御内々にて僉議も候へども、御實子様被レ成二御座一候上は、夫にては却て人心も動可レ申候、古人朝二遺棄一候て遺腹の兒を立申儀さへ有レ之候間、只鍋松様御立被レ遊可レ然と申に相極申候、就レ夫御遺書には鍋松様萬一の儀も被レ成二御座一候はゞ、其時に尾張様か尾張様故障有レ之御立難レ被レ成候はゞ、紀州様御立被レ成候様にとの儀御直にも被二仰合一候様と申候此度は上様薨御とは無レ之、御病氣被レ成二御座一候へば無二御心許一儀に候間、紀州様爲二御後見一御城中に被レ成二御座一候様にとの儀を、一位様より土屋相模守殿、間部越前守殿を以被二仰出一候由に候處、紀

州様被二仰上一候は、御家柄を以申候時は尾張殿、御年老を以申時は水戸殿にて候、私事は不二存寄一候間幾度も御辭退被レ成候旨を被二仰上一候處、水戸様只御請被レ成可レ然と御挨拶の處、其外には御老中一人も物を申人無レ之候、然處越前守殿御遺言と申、一位様御意と申、御辭退被レ及間敷儀に奉レ存候旨被二申上一候最中へ、奥より被レ爲レ召候旨にて、紀州様御通被レ成候へば、文昭院様御遺言に被レ任御後見も御願被レ成候、御辭退無レ之日出度御祝被レ成候様にとの儀にて、一位様御手自打あわせ被レ進候處御頂戴被レ遊、御請の儀は表へ罷出候僉議の上にて可二申上一由被二仰上一候處、御辭退に被レ及間敷旨高聲に被レ仰候、御中座被レ遊御請有レ之處へ、一位様御立出被レ成、越前守事は文昭院様御取立の者にて候間、以來御見捨被レ下間敷旨被レ仰候の趣、其儀も兎角表に出で各僉議の上を以御請可レ被レ遊と被レ仰御退被レ遊候趣、水戸様御聞被レ成、尾張様御家は五郎太殿にて先は終り申候、只今は新家同事に候、唯一位様思召に御隨被レ成可レ然儀と被レ仰候、此時も老中の内一人も御挨拶申方無レ之處、越前守殿乍レ恐天下の爲を被二思召一、無二御辭退一御後見に御立被レ遊可レ然と奉レ存候旨被二申上一候、扨水戸様御誘引候て御上段へ御上り被レ成、則水戸様には中段に御着座、尾張様と同事に御手を御つき被レ成、御脇差を御取被レ成候へば、其儘〳〵と被レ仰候て上段より中段迄御下り被レ成、達て御留被レ成候に付、御脇指御帶被レ成候、最早上段へは御上り不レ被レ遊御心安天下の御政務も御相談可レ被レ成候間、只是に可レ被レ成二御座一候由御挨拶有レ之、其上にて上様薨御の御披露有レ之、翌朔日諸大名へも其段被二仰聞一候

由、此趣實說に相見申候

一　御儉素の儀段々世上に申候通にて、創業の君の樣に相見へ申候、先頃御側衆の內北條對馬守殿綸子の單物着用にて伺候の處、ひたと對馬守殿を御覽被レ成、後には御目を注させられ、何とも御目通難レ居程に相成候故退被レ申、於二御次一御同役中へ何歟私不調法の仕形も候哉心附申所は無レ之候へども、各御見分の通、上樣頻に私を御覽被レ遊候て心掛りに御座候間、先退出仕候由被レ申候、何れも心付無レ之に付、小笠原肥前守殿へ主膳殿如何可レ仕哉と被レ申候へば、左樣の儀前々有レ之儀にて聊御心掛の儀にて有レ之間敷候、多分御自分御着用の綸子に御目を被レ留候ものと存候、結構成衣服御好不レ被レ遊候內、別て綸子は女の樣に見へ申候とて御嫌被レ遊候に付、紀國に被レ成二御座一候內より御前へ罷出候もの着用不レ仕候、御自分單物目立候間御着替にて御詰被レ成候はば、何の儀も有レ之間敷旨被レ申候に付、其通に被レ致又もとの處へ罷出被二相詰一候處、平生の御樣子に候間氣遣無レ之被二相勤一候旨先生御物語にて候、先日本多作次郞殿被レ申候は、此頃は誰と申共無二之候へども、綸子はすきと着用不二仕候、後は又出申事も可レ有レ之候とて形付置候旨咄被レ申候間、其儀を先生へ申上候へば、来歷有レ之事とて御咄被レ成候、且又阿部豐後守殿御伺の品十ヶ條を小紙に書記候て御前へ被二罷出一、段々御伺候處夫々被二仰出一、末一二ヶ條罷成候、透と御返答無レ之、唯豐後守殿の衣服をひたもの御覽被レ成、暫間を置候て又被レ伺候へども曾て御意無レ之に付、何事指止退出有レ之、同役衆へ如何樣の儀と談合有レ之

候へども、埒明不レ申に付、又肥前守殿へ被二相尋一候處、其節私も御前に罷在御樣子見受申候、外の儀は聊不レ存候、御自分樣の御着用の帷子のし縮にて結構見事に御座候、蟬の羽の樣成物に御座候旨、上樣御平生に半さらしを被レ爲レ召候、縮御好被レ遊候へども惡敷縮を被レ爲レ召候、御自分樣御着用ののし縮は定て初て御覽被レ成たる物と存候、御着替被レ成候はゞ多分何の儀も有レ之まじくと存候旨被レ申、則其通にて着替罷在殘る一二ケ條被二相伺一候へば、何の事も無レ之被二仰出一候、此二品より人々心得各別に相成候由

一　紀國に被レ成二御座一候內、町廻横目と言もの貳十人計被二仰付一、足輕位の者にて候、何事言上仕候哉相知不レ申候處、尊卑に不レ依小兒を乳母抱あるき候もの有レ之、下着に絹羽二重の類を爲レ着候者を見候へば、必其親を相尋役名を記し參候、門前に立居候ものも同事に仕候、不時に何某が當番に候哉、不二出合一候はゞ出勤の上可二申上一樣との事にて、其者罷出候へば御次へ被レ爲レ召、其方子供養育の仕樣惡敷、內方の者にたらされあまやかし候と見へ、肌に絹羽二重爲レ着申候、小兒溫暖に過候へば、たとへ成長仕候とも病身に相成候哉、柔弱にて事の用に立不レ申候、不心掛第一に候、ケ樣に御目付共申上候、向後布子木綿の類爲レ着可レ申旨每も〳〵被二仰出一候、夫故紀國御家中の子供は隨分疎略の衣類を爲レ着申候

一　江戶御城へ被レ爲レ入候後、御本丸へ火消番と申事御聞被レ遊即日被二指除一候、身共罷在候處失火

の節火消は入不レ申候、あらゆる物ども打寄消可レ申事故、其從人極候には不レ及事に候、主人の家燒申に見遁居申者は無レ之儀と被レ仰候

一 御一門方の儀別て御大切に被二思召一候、紀國に被レ成二御座一候中も、尾張樣、水戶樣抔に御病人方有レ之候へば御詰被レ成、常には如何樣に候とも、ケ樣の節は御在合可レ被レ成事と每々御意に候、松孃君樣などへも、文照院樣御代より結句御懇に可レ有レ之候と申候

一 惣て聲色の御好薄く候事、御臺樣御逝去の後御召仕の女中有レ之、其御腹に長福樣御出生被レ成候、其後御懷孕の處、小產にて死去被レ成候、久々御召仕女中の沙汰も無レ之に付、御家老より其段被二申上一候處、何れに其分にも難レ被レ成候半間可レ然者選可レ申候、但長福樣御袋方不便に被二思召一候、其人のゆかりの者を選候て可レ宜と被レ仰候、ゆかりの者相選書上申候內妹有レ之候、去とも容儀惡敷候に付後宮に備へかたく可レ有レ之と相談にて、其趣被二申上一候處御笑ひ被レ成其沙汰には及申間敷候、病氣にさへ無レ之候はゞ、此者に可レ仕旨被二仰出一、其女中御召使に罷出候處、其人に小次郎樣御出生被レ成候、不幸相果被レ申、其後御召仕無レ之共、又輕き女中被二召使一候へども、紀邸に被二指置一御城中には不レ被レ爲レ召と申候

一 紀國御家老の內三浦遠江守と申人有レ之候、先頃江戶より被レ爲レ召候て、向後は御昵近に可レ被二仰付一旨被二仰渡一候處、遠江守難レ有仕合に奉レ存候へども此儀は御請難レ仕候、天下の者誰か違背可二

申上一樣は無二御座一候、乍レ然私先祖は紀國へ御附被レ成候節、從二權現樣一御條目被二成下一、其內に於二紀州一如何樣の儀有レ之候とも、御異見等も可二申上一候、是則江戶表への御奉公に御座候、然ば紀州に罷在、隨分無二遠慮一御仕置等も御相談仕候事、則私先祖已來御奉公の筋と奉レ存候間御赦免被レ下候樣仕度旨申上られ、其段達二上聞一候處、左樣にも候はゞ尤思召候間其儘紀州に可二罷在一候、御呼被レ成候事別事にても無レ之候、其方事於二紀州一折節人の氣付不レ申事共申上候故、別て只今は左樣の事御聞被レ成度思召候ての事に候、然ども御斷申上候間、向後紀州に乍二罷在一存寄の儀ども可二申上一由被二仰出一候へば、遠江守承り屆是以難レ仕事に奉レ存候、紀州に罷在間は私の職分と奉レ存候て推參も申上候、江戶へ御出被レ遊候ては、又夫々の御役人も御座候處、左樣の儀申上候は職分を超申事故難レ奉レ畏由申上候へば、是も尤に思召候、左候はゞ、先差當り只今何とぞ存寄有レ之事も可レ有レ之候條、無二遠慮一可二申上一旨再度被二仰出一候處、遠江守左樣に御座候はゞ一色存出候事御座候間乍レ恐可二申上一候、御生質御無造作に被レ成二御座一候て、御小袖のゆき丈も御恰好より短く、御腰物等殊の外長く御座候、御好次第の儀御仕置等害にも無レ之事と奉レ存候間、紀州に被レ成二御座一候內は、其分の儀と存不二申上一候へども、天下をしろしめされては又箇樣の風俗にも掛り申事に候間、已來は少し御心得も可レ有二御座一事かと奉レ存候旨被二仰上一候由、此間御城取沙汰にて承候、然ども此咄は不レ慥事の樣に思召候由先生御物語に候、以上（以上七件先生御物語の分禮翰來書）

九月朔日

一　當地何の替儀も無二御座一候、御鷹野の御沙汰のみに御座候、御出は未無レ之候、諸侯より御鷹献上はや十二三居も有レ之由、絶て久敷無レ之事故、鷹の目利など存知申者無レ之候、不案内至極の由に候、御鷹匠は頃日出來候て鷹の事稽古の由に候、上には却て能御存知被レ成二御座一候に付、御尋之事しかじか御請申上候者も無レ之由に候、頃日井上河内守殿より隨分と被レ存鷹献上候處、はい鷹の由に候へ共まぐそづかみにて何の役にも立不レ申物にて、長福樣方へ被レ遣候由、河内守殿殊の外難儀の由申候、大臣專に迎合の氣味と聞被レ申候、去ども御聰明に候故、却て不首尾の樣子に申候、河内守殿舍弟遠江守殿儀も役儀御免にて被レ退申候、如何罷成事にて可レ有レ之候哉、段々御新政も可レ有レ之と奉レ存希望二事に御座候　（十月四日書）

一　當地彌御靜謐、火災もそろ〱有レ之候へ共早速鎮り申候、此以後無二心元一奉レ存候、尾張紀國御邸にて將軍宣下御祝儀の御能有レ之候、此後は御本藩初方々御祝儀可レ有レ之と奉レ存候、昨日は初て濱御殿へ御成被レ遊候、御儉素無造作成御儀は古今未レ承事に奉レ存候、十八日に小次郎樣初て御城へ被レ爲レ召候、御母公樣を御内所樣と申候由、是も同時に御供にて御城へ御入被レ成候處、青漆の塵相なる乘物にて御長刀なしに候、長刀は御遠慮の筋と申候、其次に五六挺も女中乘物にて參候處、いづれも常のござ乘物、しかも古く見え申候由、偖十八日御城へ被レ爲レ入候以後、醫師衆も御守衆も一度も御

機嫌の事御尋も無レ之由に候、先日御城御堀御巡見に御成被レ遊候時分も、御供の人申候、棧留の御袴にて御小袖壹つ被レ爲レ召候故、御白小袖は不レ被レ爲レ召候よし世上に申候、御門に御通被レ遊候時分、請取の諸侯御番所の下へ蹲踞被レ致候處、何れも御言葉掛り候内、（櫻田御門）本多中務殿蹲踞の處へ御乘物すはり候て、是へと上意にて息災にて一段に被ニ思召一候旨被レ入ニ御念一候御意と申候、頃日大番頭御前へ被レ召候て、御直に向後人を撰申上候時分、贔負沙汰毛頭有レ之候はゞ急度可レ被ニ仰付一候、其上唯今迄祿により候て役人申上候旨被ニ聞召一候、向後は祿の高下に構不レ申候て、其人の材さへ其役相應に候はゞ、小身にても可ニ申上一に御座候、此時は御老中も被レ爲レ召候て、御前に入の由に候、其後大目附並町奉行等御前へ被レ爲レ召候て、是又御直に被ニ仰渡一候事有レ之候へども、此時は御老中も被ニ指除一、誰も外の者御前に居不レ申候故、何事に候哉存知申者無レ之由に御座候、十五日には輕き役人被ニ仰付一候、御腰物奉行、御膳奉行などにて、其内に松平右源治と申人、櫻田より文照院樣に御奉公いたし候人にて、其後は小性組にて候處、此度御膳奉行に被ニ仰付一候、近頃昭廟へ奉仕候人は被レ遊ニ御嫌一候樣に專ら沙汰仕候、是は執政の衆始御先代をおとしめ候樣に被レ致と聞へ申候、其故わざと右源治を此度被ニ撰出一且又御膳奉行に被レ遊候と人々申候、只今まで御新政も未レ被ニ仰出一候へども、執政衆始諸役人共に殊の外畏服仕樣子に御座候、御繼統御始に候へば、前朝よりの老臣に御聞せ可レ被レ成筈と乍レ恐奉レ存候其上にて御意に不レ應候はゞ、可レ被レ下ニ御手一と被ニ思召一儀に相見へ申し候、第一、

近來華麗至極に候處、此の大弊追々改り可レ申と存じ候、最早殿中などは華服遠慮仕る體に聞へ申し候、追々御善政とも相違可レ申と奉レ存候（與二奥子復一齋賢書）

十月二十四日

追て前夜新井筑後守へ一夕參候て緩々語申候、筑州屋敷も繪圖取に參候て指出候由被レ申候、是も畢竟屋敷替たるべきと申事に御座候、頃日も松平甲斐守殿御弓町の屋敷上り申候、急に明可レ申由にて餘程騷動に候處、上り候てふらりと何の御用地と申儀も無レ之候、其外ちよろ／＼と致事共存知合候處、皆執政已下の衆逢迎に出て申事共にて、上には屋敷替等の事餘り御心と不レ被レ成樣子に聞へ申候、ひたと逢迎致見被レ申候へば、頃日は合不レ申候て執政衆も畏懼被レ致候樣に見へ申候由、是は目出度御儀に奉レ存候旨新井氏も悦び被レ申候、兎角英明の君と相聞申候、來春に至り候はゞそろそろと御手段も見へ可レ申候、頃日天下一と申諺定て御聞可レ被レ成候、是は目出度諺にて候、天下一の君に御成可レ被レ成と奉二仰望一候、是は君いまだ御聞不レ被レ成儀も可レ有レ之候間申候、東照宮より當御代まで八代にて下字の小點有章院樣に當り申候、此處にて面白御座候

一 此表彌靜謐にて何の替申儀も無レ之候、頃日も新井氏へ毎度出合候、時事失望申儀計にて御座候、委細は筆紙に難レ及候、儉素と申儀も天下之爲に華奢を抑らるべきにて、先人主の御身より儉素に被レ成儀は至極成事不レ及二申上一候、吝嗇成より出候て自分の勝手を專らに仕候は、華奢の弊同事に御座

候、箇樣の儀大學頭抔如何心得可レ申候哉と奉レ存候、頃日承候へば、最早御加增不レ被レ下筈に候抔と被レ申由に候、老耄被レ致かと奉レ存候上下征レ利候樣に罷成候ては國家の利に非る勿論に奉レ存候頃日時服拜領、何も御近習衆へは一ッ宛と申候、御臺所酒食も此間俄に變候て、至極目つまり申儀と申事に候、其外事體を失申儀どもいろ〳〵承り申候、先頃町奉行抔御前へ被ニ召出一御直に被ニ仰渡一候は憐成事に候、何事候やらん其儀は他言無レ之と見へ存知申者無レ之候、其後町奉行中抔出合の時分、おどり子有レ之終夜宴遊の事承り申候、何を被ニ仰渡一候哉と奉レ存候、是にて御推量可レ被レ成候、何事も名計にて實無レ之事、風俗も又困窮も改り可レ申樣無レ之候、乍ニ此上一來春にも至り候て、何卒御善政も有レ之、耳目を新に仕事も出來候へかしと奉レ願候、以上（十二月廿四日來書）

追て敎化なく候へば、風俗急に衰申候者と奉レ存候、新井氏事只今隨分隙にくらし被レ申候、朔望に登城迄にて候、おしき人物に御座候、此人御用無レ之、林大學頭世に用られ候にて時世も相知申候、委細の事は筆頭に不レ被ニ申上一候、以上

享保二年

一　舊冬十月十八日の貴翰も到來拜見仕候、被ニ仰下一候役者加增の說は浮說にて曾て無レ之儀に候、御儉素の事彌憔成事とも承り、とかく驕奢の風俗に候へば、箇樣に格別御儉素に無レ之候ては此病難レ治候、先は能御儀に奉レ存候、是又聲色の御好曾て無レ之此儀も憔に御座候、其故椒房の風各別に罷

成、當分難儀候人も有ㇾ之由に候へども、是以近代の大弊に候へば珍重と奉ㇾ存候、委細は筆紙に[illegible]
申盡ㇾ候、以上　（正月八日）

尙以御鷹匠頭間宮五左衞門舊臘役儀被二差除一候、尤五左衞方より斷には候へども、斷申させ候と[illegible]
に御同意有ㇾ之ての事と申候、五左衞門事親共父五左衞門事、嚴有院樣御代御鷹匠頭被ㇾ勤候故、
度は又々役儀被二仰付一候處、此人平生不ㇾ宜候聞有ㇾ之、此度は御鷹の事に付私欲の事共相聞へ
之、人民を纍役いたし賄賂等取申由、其段早速相達、間も無ㇾ之役儀御免にて候、々樣の儀も御先代
とは替り、其儘上へ相達申躰に御座候、其故に諸役人共戰慄仕躰に御座候、藩國に被ㇾ成御座ㇾ候時
分能々御聞被ㇾ成、此表役人共の事委細御存知被ㇾ遊候と見へ申候、是等何よりの好事と奉ㇾ存候、去
年よりの天氣に近年無ㇾ之長閑に御座候、何とやらん天意に御叶候樣乍ㇾ恐奉ㇾ存候、尙又當春に至り
段々御善政とも可ㇾ承候、傾聽致罷在候事に御座候、以上

一　頃日御條目も出候て、諸侯以下諸役人頭等は登城にて被二仰渡一候、私共抔へは御目付中より廻し
申候、御條目御代々潤色の事に候故、此度天和の通に御從被ㇾ成候旨奥書有ㇾ之候、寶永中文昭廟樣御
代定り申儀は、御代々の條令を多被ㇾ致候に付御用ひ不ㇾ被ㇾ成候て、天和に立歸り申趣と相聞へ申候、
衣服の事抔少々追加の事も有ㇾ之候哉と相見へ申候、いまだ天和條目と引合見不ㇾ申候故篤とは不ㇾ奉
ㇾ存候、十一日諸侯列座の後出御被ㇾ遊、御高聲にて御直に治世久々故擧世美麗に罷成候、此以後隨分

國政の事可二心掛一の旨被二仰渡一候旨、安藝守樣御歸り被レ成御語被レ成候旨承り申し候、然ば結構成事に奉レ存候、只今迄御代替に終にヶ樣に御直に被二仰渡一候事承不レ申候、結構成沙汰に御座候、然ども仁心仁聞有レ之候ても御仁政無レ之候ては、其澤下に及不レ申候、定めて此後段々御善政も有レ可レ之候、仰望此事に候、來月增上寺御法會も、先例は十八日に候處、此の度五日に仕廻候樣に被二仰出一候旨、其に付住持斷申上、已に代々御法事格違候ては、其出家一分難レ立候とて、住持職指上置立去申候、光明寺とやらんより今度新に居申候、是等も御簡略故と聞へ申し候、其外井上殿、森川殿兩人簡約奉行に被二仰付一諸役人手前御吟味の由申候、冗費を省き候事一段の事に奉レ存候へども、又是に付て其弊も不レ少致二難儀一候者も有レ之由申し候、先は常憲院樣以來諸役人私欲を過し候と、不埒成事共と聞へ申候、此度御吟味無レ之候ては不レ叶儀に御座候へば、是れは當時の急務共可レ申候、此上に能人材を御撰擧被レ成、其人を御替被レ成候樣に致度事に候、何程御吟味被レ成候ても、又此の程跡へ歸り可レ申候、森川殿抔殊の外嚴酷成人の樣に諸人申し候、定めて段々樣子相知可レ申候、其上にて御聖斷可レ有レ之候　（三月十八日與二天野氏一）

尙以當地の體、衣服等追々儉素に可二罷成一と奉レ存候、是は近代の大弊に候處、珍重不レ過レ之奉レ存候、何卒敎養兩縮の御政令出候て、四民の困窮を救、且又風俗の頽敗を振ひ候樣仕度計に御座候、當地學者始めヶ樣の事に氣付者一人も見へ不レ申候、勿論執政以下諸頭諸役人不學無術の事に候へ

ば、望も大方無レ之候、以上

一 昨十一日隅田川へ御成にて御座候、向後方々御成可レ有レ之御沙汰に候、御成筋は其心得仕申候、毎度の儀に候はゞ下々難儀と奉レ存候、先日度々御出被レ成候事下々難儀に及申間敷候哉と御尋に候へば、毎日御出被レ成候ても下々難儀仕候儀は無レ之旨誰やらん申上候旨に御座候、本庄抔は大分の蘆出申候處にて、此度俄にすきとからせ申候、責て土用中に苅候樣にと願候へども叶不レ申候、只今苅候ては何の用にも立不レ申候、此砌方々作事有レ之候故、蘆抔は急用成物に候處、此後拂底に可二罷成一と申候、先頃は麥抔も刈申候由承申候、わざに左樣のもの有レ之候ては、御鷹場へ鳥寄不レ申にて如レ此被二仰出一候と申候、常憲院樣御代には生類御憐とて諸人難儀いたし候、此度は御殺生の事に付諸人難儀仕かと存候、萬端常憲院樣御代の事御慕ひ被レ成候御樣子候處、是も格別の儀に奉レ存候、松平右京大夫殿首尾好候由、此間も御前へ被二召出一御閑談時を移し申候、其跡へ林大學頭を被二召出一、また良久御閑談被レ成候由承申候、兩人共常憲院樣御代政事に預り被レ申候衆にて候故、其時分の儀を御聞被レ成候爲と申候、正月廿三日火災の時分、御本丸へも火子など參候て殊の外御さわぎの由、着込被レ召候由世には申候へ共其は虛說にて候、其節火事羽織召候、御立付抔は菖蒲皮にて候由、御頭巾をば帶に御挾み被レ遊大戶を御自身御はづし候て、其さんを御つたい被レ遊屋根へ御上り火の樣子御覽被レ成、其內一位樣御のき被レ遊候とて、女中など出申し候を御覽被レ遊、御自身に御留被レ成候由、御輕き儀御先代に

終に承り及ばざる儀に候故、舊宮人抔目を驚かし申候と承り申し候、御儉素下に近き御樣子に御座候

一　御慈悲等も有レ之由に候へども、下情壅塞いたし人々艱難上へ達し不レ申候へば、何の甲斐も無レ之、其上迎合の衆のみに候故、能々明決に不レ被レ成ニ御座一候ては難レ成と奉レ存候、小笠原肥前守殿も先頃隱居被ニ仰付一、去年大病相煩、其上當年子息死去に付御役儀御免被レ成と被ニ仰出一候由如何の儀と申事知不レ申候、一說には諫言申上候故とも申候、又は肥前守殿手前賄賂抔の事にても候哉と申候、諫言沙汰實に御座候ては、もはや無レ賴儀に奉レ存候、此後段々御樣子も相知可レ申と奉レ存候、[illegible]月十二日

（與ニ修運一齋賢書）

小谷兄四月十七日書

一　小笠原肥前守殿當月三日隱居被ニ仰付一候由、是は紀州御家にて主膳殿と申時分より、能人の樣に申慣御城へも被ニ召連一、御側衆に被ニ仰付置一事賴母敷儀と申たる事に御座候、跡々にて度々諫言も申上、上にも被レ容候と取沙汰仕たる儀に御座候、然處今般隱居被ニ仰付一候は諫言より發たる儀と申候、御醫師吉田宗仲老近き頃より爰許御廣敷へ被レ參候、私は不レ承候、先日此儀に付宗仲老咄しにて候由、同役申聞候は、肥前守殿久敷煩にて御座候處、前月廿八日前廉御老中方へ案內無レ之出仕被レ致候に付、先達て御斷も可レ有レ之候處、斷無レ之出仕の段不念の仕合にて、其事發候て隱居被ニ仰付一候との事に御座候、ケ樣有レ之間敷と奉レ存候、若此儀にて被ニ仰付一候迚も、是に被レ托候ての儀にて可レ有ニ御座一

存候、毎度御酒宴、今程は月光院樣へ被レ爲レ入候ては、女樂抔の被レ行候抔とも申候、是は風說にても可レ有二御座一候、靑山のすへ勢多谷と申處の邊へ、頓て御鷹野に出御の筈にて御鷹野道を造り、又は構に罷成申處麥をも刈らせ申に付、其邊の百姓殊の外迷惑仕候由、勢多谷の者參候て咄し候と承り申候

右の通申上候處、今日增田壽針老被レ來候に付、如何樣の譯にて候哉と相尋候へばしかと知不レ申候、二說有レ之候、一說には養子の儀に付不調法の願有レ之候共申候、又は去年以來病氣故ひたと失念の事多有レ之、先頃より申上候儀に間違申儀共有レ之故とも申候旨被レ申候、御鷹場の事も勢多谷の邊の樣に承り其段申上候處、今日龜井戶天神へ參詣仕罷歸候者申には、あの邊も田畠の道を廣く作り申に付、夥多人足を掛候て普請有レ之候、あの邊の者共は十萬兩程の費可レ有レ之と申由に御座候、左候へば江戶廻所々不レ殘如レ此と相見申候、已上

小谷見五月十七日書

一 當十一日隅田川筋へ御成被レ遊候、江戶廻民家の費不レ可二勝數一と夥敷風聞仕候處、人々申は皆虛說にて指て民家の費も無二御座一候と申候、尤御成前には末々の奸吏の所爲にて、少々百姓難儀仕候事も御座候へども、人の申候十が一にても無二御座一と申候、御成の時分は男女罷出拜み申由に御座候、殊の外御輕き御樣子に御座候と申候、御用船兼て百艘拵置候處、二艘ならでは御用無二御座一候由、是

は體成る咄承申候、此事にても相知申候、明日又千住筋小菅邊へ御成の由に御座候、兼て取沙汰仕候樣には、民家の痛は無二御座一と申候へども、ヶ樣に毎度御鷹野に被レ爲レ成候ては、何の御政務も無二御座一候ては、惣體天下の痛にも可二罷成一候哉と奉レ存候

一　當十一日隅田川へ御成、昨十八日又千住邊へ御成被レ遊候、以後毎度の儀と相見へ申候、遊豫は民の爲にも被レ成儀も可レ有レ之候へども、禽荒は古今の誡むる處にて御座候、十一日御成の時分の儀承申候處、木綿御脚半、かさの麻御羽織にて裳を御かゝげ被レ成、御草鞋を帶に御はさみ、其御體にて御玄關迄御出被レ遊候、御殿に相詰申番人等驚申由に御座候、、途中は御駕籠の戶兩方共に御はづさせ被レ成候て、右の御體にて內々被レ成二御座一候、何とも御不相應の御樣子の由に候、隅田川邊御船に被レ召候て、間も無レ之船中より御鐵砲にて鴻を御打被レ遊候、上に被レ遊候とは不二存知寄一候故、船中の御供中以の外驚候由に候、是は尤に候、路にて御案內も不レ被レ成候故、各驚申由尤に候御意の由申候、大猷院樣品川邊へ御成の時分、何者に候哉鐵砲打掛申候、御駕籠に當申候、其節色々御穿鑿候へども相知不レ申候、博浪沙中の椎にて候、然處に又翌日品川へ御成被レ遊、しかも御馬にて御越被レ成候由に候、御英主の所爲と奉レ存候、ヶ樣の儀も皆々承及たる儀に候故驚申も理に奉レ存候、今度參向の公家衆御禮の時分、出御候へども御禮不レ被二申上一候、こなたより御會釋有レ之候て其時禮に被レ及候由、其故高家衆三人申合惡敷候由にて遠慮被二仰付一候、右公家衆上野へ參詣の筈に候へども、其儀も不二

罷成一御追返し被レ成候、當地へ參り候公家の儀に候へば、威儀に習被一申候事は勿論にて候、左様の失禮は有レ之間敷儀に候へども、餘り御輕き御様子に候故間違被レ申たるものと奉レ存候、何も御暴横の儀は無レ之候、十一日にもせこ出申候、御徒にも一統に時服一ッ宛被レ下候、組頭には二ッ宛大頭には三ッ被レ下候、近年御領本婦人の様に罷成美麗に流候故、態々輕易粗豪に被レ遊候て御見せ被レ成候かと餘の儀に奉レ存候（與三子俊兄一齋賢書）

五月十九日

尙以易履卦に有レ之哉、一眇能視、跛能履、武人爲二大君一と覺申候、眇は全く視る事不レ能、跛は全く履事不レ能候へども、時に當て能履申候、大君の位は本武人の居所には無レ之候へ共、時に依て武人に成申候、中國にても五代の時分天子と成申人武人にて、不學無術に候へども、天下唐末虛文に流候故、人々其弊を厭申時分にて、武人の輕易率直却て時弊を救申益も有レ之候故相應に治り申候、其所則跛能履、眇能視にて候、近代太平によつて人々柔弱に罷成驕奢至極に候へば、格別の事にて無レ之候とは存直し申間敷候、ヶ様の時節を御考被レ成、易に於て如レ此被二仰置一候、奇妙成事と奉レ存候、王侯以下書を讀も不レ讀も、おしなべて不學の人にて候へば、とても正道にて治り申事に無レ之候、一偏の益にて少々取直申にて御座候、無二是非一事と奉レ存候

一 當地何の替申儀も無レ之候、前書に申進候通に御座候、頃日大目附從横田備中守へ千石御加増被二

は慥成る咄承申候、此事にても相知申候、明日又千住筋小菅邊へ御成の由に御座候、兼て取沙汰仕候樣には、民家の痛は無ニ御座一と申候へども、ヶ樣に每度御鷹野に被レ爲レ成候ては、何の御政務も無ニ御座一候ては、惣體天下の痛にも可ニ罷成一候哉と奉レ存候

一　當十一日隅田川へ御成、昨十八日又千住邊へ御成被レ遊候、以後每度の儀と相見へ申候、遊豫は民の爲にも被レ成儀も可レ有レ之候へども、禽荒は古今の誡むる處にて御座候、十一日御成の時分の儀承申候處、木綿御脚半、かきの麻御羽織にて裳を御かゝげ被レ成、御草鞋を帶に御はさみ、其御體にて御玄關迄御出被レ遊候、御殿に相詰申番人等驚申由に御座候、、途中は御駕籠の戶兩方共に御はづさせ被レ成候て、右の御體にて內々被レ成ニ御座一候、何とも御不相應の御樣子の由に候、隅田川邊御船に被レ召候て、間も無レ之船中より御鐵砲にて鴻を御打被レ遊候、上に被レ遊候とは不ニ存知寄一候故、船中の御供中以の外驚候由に候、是は尤に候、路にて御案內も不レ被レ成候故、各驚申由尤に候御意の由申候、大猷院樣品川邊へ御成の時分、何者に候哉鐵砲打掛申候、御駕籠に當申候、其節色々御穿鑿候へども相知不レ申候、博浪沙中の椎にて候、然處に又翌日品川へ御成被レ遊、しかも御馬にて御越被レ成候由に候、御英主の所爲と奉レ存候、ヶ樣の儀も皆々承及たる儀に候故驚申も理に奉レ存候、今度參向の公家衆御禮の時分、出御候へども御禮不レ被ニ申上一候、こなたより御會釋有レ之候て其時禮に被レ及候由、其故高家衆三人申合惡敷候由にて遠慮被ニ仰付一候、右公家衆上野へ參詣の筈に候へども、其儀も不ニ

罷成一御追返し被レ成候、當地へ參り候公家の儀に候へば、威儀に習被レ申候事は勿論にて候、左樣の失禮は有レ之間敷儀に候へども、餘り御輕き御樣子に候故間違被レ申たるものと奉レ存候、何も御暴横の儀は無レ之候、十一日にもせこ出申候、御徒にも一統に時服一ッ宛被レ下候、組頭には二ッ宛大頭には三ッ被レ下候、近年御籏本婦人の樣に罷成美麗に流候故、態々輕易粗豪に被レ遊候て御見せ被レ成候かと餘の儀に奉レ存候（與二子俊兄一齋賢書）

五月十九日

尙以易履卦に有レ之哉、一眇能視、跛能履、武人爲二大君一と覺申候、眇は歪く視る事不レ能、跛は歪く履事不レ能候へども、時に當て能履申候、大君の位は本武人の居所には無レ之候へ共、時に依て武人に成申候、中國にても五代の時分天子と成申人武人にて、不學無術に候へども、天下唐末虛文に流候故、人々其弊を厭申時分にて、武人の輕易率直却て時弊を救申益も有レ之候故相應に治り申候、其所則跛能履、眇能視にて候、近代太平によつて人々柔弱に罷成驕奢至極に候へば、格別の事にて無レ之候とは擬直し申間敷候、ヶ樣の時節を御考被レ成、易に於て如レ此被二仰置一候、奇妙成事と奉レ存候、王侯以下書を讀ても不レ讀も、おしなべて不學の人にて候へば、とても正道にて治り申事に無レ之候、一偏の益にて少々取直申にて御座候、無二是非一事と奉レ存候

一　當地何の替申儀も無レ之候、前書に申進候通に御座候、頃日大目附役横田備中守へ千石御加增被二

仰付㆒候、人々不㆓存寄㆒儀に御座候、舊功を申候へば、仙石丹波守抔備中守より久敷御座候、此人常に御老中へすきと勤不ㇾ申候、外より音物等定りたる格の外受不ㇾ申候、ケ樣の人に御恩賞有ㇾ之事世人氣の付申儀に御座候、一事に候へ共餘程珍重成事と奉ㇾ存候、先頃取替の時分、本多若狹守殿に一萬石御加增被㆓仰付㆒候も其節如何の儀と申候、是も承り候へば能人の由申事に候、とかく前書に申進候御儉素の樣子、且又此處横田抔へ御加增の事風俗を御直被ㇾ成候思召と相見へ申候、常體の儀にては無ㇾ之候、朝鮮來聘の儀も、宗對馬守殿へ被㆓仰渡㆒、來々年參申筈に候、一兩日以前雨森東五郞に逢申候處、宗對馬守殿も御暇を相待被ㇾ居候由に候、此度林大學頭差圖可ㇾ有ㇾ之候間、格式又改候て常憲院樣御代の通に可㆓罷成㆒と申事に候、日本國王の御稱號、階下迎送等の事、先年段々被㆓仰立㆒候儀有ㇾ之候と後々迄被㆓定置㆒朝鮮人も承服致候處、又此度變替候ては、外國への聞へ氣毒成事に存候、頃日はや朝鮮來朝と御書出にも有ㇾ之候、使官來聘の事に候へば、來聘と可ㇾ申旨文昭院樣御代相極候、御尤成事に諸人存候處に、いかに改め申度とて非を遂げ申儀笑止に奉ㇾ存候、執政の衆何れも不學に候故、來聘來朝の差別も不ㇾ被ㇾ存、林大學頭申す通に罷成と相見へ申候、阿世曲學の儒、無知妄作の事無㆓是非㆒存候、以上　（六月三日書）

小谷兄六月七日書

一　小笠原肥前守殿隱居被㆓仰付㆒候儀も其時分取々風聞仕候へども、指て諫爭の儀も相續候ては沙汰

も無二御座一候、病氣にて失念多、毎度被二申上一間敷事共を被二申上一候事多御座候故と申候、左候はゞ
御先代より御代々どなた樣も、御代始の時分より必御寵臣有レ之、後高祿を賜り威勢を振候儀御座候
處、當分只今迄左樣の衆無二御座一候、却て肥前守殿抔被レ寵候事庸主とは相見へ不レ申候由先生抔も
被レ仰候、其外御酒宴等の儀は虛說多御座候故其談も申進候、其以後增田壽針老只今一位樣月光院樣
御用被二仰付一毎日出勤仕候故、何となく先日相尋申候處、月光院樣抔へも御成の儀は、中々不時には
不レ被レ爲レ成候御事に候、御道筋夫々御固めも有レ之筈に候、終に御成の御沙汰不レ承候由被レ申候、壽
針老咄しの樣子に候へば、容易には不レ被レ爲レ成候御樣子に御座候、御鷹野の爲江戶を中に仕、十里四
方蘆葭を刈捨申儀も間違より起申候事の由申候、葭をからせ候て禽を可レ被レ得と上意有レ之候を、數十
年來諸役人衆鷹野の儀不案內故、刈せ抔の上意を、薙せの事と存違申候儀と取沙汰仕候、以上

一　當地の儀何替儀も無レ之候、當月九日傳馬町より出火、下谷邊千住邊にて留り申候、大方長サ一里
程も燒申候、此節珍敷儀に御座候、此間は御成の御沙汰も無レ之、秋までは有レ之間敷奉レ存候、前月十
八日御鷹野時分、松枝に鶴とまり居候、御打可レ被レ成候に付御鐵砲を上げ申候處、御覽被レ遊鶴殊の外
鳴申體は、下に巢有レ之と見へ申候由上意に付、見屆候へば成程巢有レ之候、左候はゞ御打被レ成まじ
く旨にて御止被レ遊候、其近所に鷺とやらん居申候、是を御打可レ被レ成かと又御鐵砲を上げ申候處、右
巢に程近く候間鷺を御打被レ成候はゞ、巢中の雛も驚可レ申旨にて是も御打不レ被レ遊候、是等を考候へ

ば、御仁心有レ之儀は元よりにて、其上二不レ覆レ巢不レ射レ宿一抔との事御存知被レ成候故かと奉レ存候、此間如何の儀に候哉、三日の間御老中御目見無レ之候、御老中の面々の不首尾成事に候哉、沙汰不レ被レ致候旨承り申候、是も御倦怠にて御目見へ無レ之にては無レ之と聞へ申候、横田備中守殿加増の事前書にも申上候通りに御座候、只今當地の大弊は賊吏發向にて、末々迄賄賂行れ申候事商賈姦利にて物價踊貴候事、偖は火災度々有レ之追々困窮に及候事、此三事共根元は風俗惡敷故にて候、火災抔も付火は十に二三にて候、何も家々佚遊にて鎭り無レ之に付致二失火一候、其上火消役人仕方も虛文のみにて御座候、是等の儀急度御吟味無レ之候ては、中々治り申儀とは不レ奉レ存候、第一は人材無レ之故にて候間、人材を御僉議有レ之、諸役人貴賤共に剛明廉直の士を得候樣無レ之候ては、兵具鈍く、きれ不レ申候故、何程の勇力の人も鈍刀にて働不二罷成一候、其御地の儀も當地大略同弊と聞へ申候　（六月十四日賜書）

一　當地世上何の替儀も不レ存候、頃日御坊主頭兩人遠島被二仰付一候、吹上御殿へ御成の時分、御鎭り申付筈に候處不二申渡一故、掃除の者御目通へ入込候て不作法に付、其段御吟味有レ之候處、支配の坊主中へ申渡置候由に申候へども、誰承り候者も無レ之候故、僞を申に相究候て、頭をも仕に似合不レ申由にて遠島被二仰付一候、乍レ恐御尤成儀と奉レ存候、　（同日賜二子復兄一書中）

禮翰來書

一　外國黑船西國海上にて泊り罷在候儀に付、先日申進候趣は一通りの沙汰にて、實正の事頃日承り

候故申上候、小倉城主小笠原右近將監殿へ奉書を以被二仰遣一候趣は黑船あなたより手指も仕候はゞ、目立候樣に仕追拂可レ申候、自身人數召連罷出候に不レ及可レ爲二在城一候、惣て小倉より西浦の諸大名は、江戸よりの御指圖を不二相待一、右近將監指引可レ仕候、五月參勤の時節に向候へば、十月迄可レ爲二東國一の趣に御座候旨、小笠原は先祖以來小倉に罷在、西國諸大名の指引被二相勤一筈の御定に候處、致二中絕一其沙汰無レ之候處、此度黑船の儀に付被二仰出一候、但右近將監殿にては然と御披露無レ之候由、慥成儀にて藤田內藏允殿被二仰聞一候、必咄申間敷由被二申聞一候故、爰許にては物語不レ仕候

六月十八日書

一 頃日新井筑州へ罷越候て久々にて緩々語申候、朝鮮人來聘の儀に付雨森東五郎より示談の事共有レ之被二申越一候、筑州所存に不二相叶一儀共有レ之旨被レ申候へ共、其儀は追て可レ申旨にて不レ承候、何卒東五郎より御先代の儀承合候に付申越候品有レ之と見へ申候、對馬守殿は御暇被レ下歸國の筈に候へ共、東五郎儀は來年まで當地に罷在候筈に候由承申候、從二公儀一被二仰出一候は朝鮮來朝の儀御先代の例僉議致御取捨可レ有レ之候、其內就レ中天和の格御用可レ被レ遊候間左樣に可二心得一旨に御座候、但御老中より被二仰渡一候書出は如レ此に候へ共對馬守殿へ御任せ被レ成候間、兎角宜樣に相計可レ申旨別に被二仰出一候故東五郎抔殊の外難儀仕候事も有レ之旨に御座候、朝鮮來聘の御用一卷は井上河內守殿へ被二仰付一、文書等の事は林大學頭へ被二仰付一候へ共、右の被二仰出一抔を以考候へば來年迄の內如何樣に相極可

レ申も難レ計候、惣て上の被レ遊方必しも天和の通に被二思召一候共相見へ不レ申、第一殺生の儀其外御規式等常憲院様御代とは格別の儀と見へ申候へば、御條目始天和の例にて有レ之儀合點不レ參儀と申候、

一　金地院事、權現様已來寺社の事は代々掌り候て、寺社公事等には御老中又は京所司抔連名致來候、大猷院様御代に至り候て南光坊抔申候歟、金地院寺社役御指除被レ成、始て寺社奉行と申物被二仰付一候、此寺に喝食小僧兩流有レ之候、惣て禪寺は同事と申候、喝食より舊功有レ之候はゞ、小僧より出世仕候者より重く仕申儀候、普濟竹林とやらん兩僧の末流より嗣法仕來候、普濟は喝食方にて候故此流の弟子嗣可レ申處に、竹林方に森川羽州贔負の僧有レ之候て是を羽州居申度と被レ存何かと取持候へども、文昭院様御代御僉議候て、筋目の通に普濟の方へ被二仰付一候、此儀専ら筑前へ普濟方取入候て、其時より被レ仰候様羽州被レ存候て、切齒申旨兼て承申候、然處有章院様御代、右の住僧吉利支丹の末類たるよし羽州被二申出一、終に右贔負の僧を居申候、此僧大千と申候、（文字は不レ存候）近頃大千病死いたし、林大學頭此僧と別て懇意候故、病中大學頭抔相談にて、兎角普濟方の僧役に立申者無レ之候間、後住の事は金地院に重立申僧役者初皆合點不レ仕候て、跡式事久敷埓明兼、羽州様大千遺狀の通り尤至極に候由林家同事に申立候て、上聞にも達申と聞へ申候、其後金地院役者の僧筑州へ參候時より、右大學頭同心の儀申候故、筑州申候は、大學頭には左様有レ之間敷儀に存候、金地院の儀は代々普濟竹林兩流より嗣法仕事に候處、此度其器量の僧無レ之候て、五山より嗣候ては家筋に無レ構、器量次第に嗣申様

に罷成候、只今聖堂は代々林家より持申事に候、則文照院様御代其役被仰出候事に候、器量次第と申事に成候ては、大學頭殿子孫とても、儒の器量無之人有間敷にても無之候へば、五六代も過候て不器量の人出來候て、金地院の格に罷成可申候、是は大學頭殿不思案と存候旨物語申候由に候、右の役者よき事承り候と存候て、早速大學頭へ罷越候て申候へば、大學頭驚候て、早速羽州と僉議申候、とかく金地院は權現様御代御定被遊候て、普濟門流嗣申候、其上文昭院様有章院様御兩代の御黒印も反古に成申間敷候、御兩代の御黒印を指置候て、大千遺狀を用ひ申事甚不可然の旨申候、羽州御兩代の御黒印は必上の思召にても無之、筑州所爲候よし被申候へば、誰が所爲に候ても御印成候て御老中被仰渡たる事に候へば、世に合點不致事にて候、其上五山より被仰付候ては、金地院の僧共一人も寺へも留り申間敷由申候へば、御威光にて首に繩を付候ても引寄申事に候、ぬるき事被申候由羽州返答有之候由に御座候、如此にて兎角長引罷在候處に、上には兎角被仰出無之、先頃御法事の節五山僧共罷下り候時分、内より被仰出候は、金地院後住の事、普濟竹林兩流の僧の中に、住持職可仕器量の僧を五山之長老に申上候へど、銘々に存寄の者名を書付候て指上可申旨被仰出候其内只今の住持を選擧仕候人多候哉、今は住持被仰付候、依之羽州客氣盛に被申立候處、不存寄迷惑の體に候由御座候、五山の僧に選擧を被仰出候て、大千の遺狀の筋も相立申と奉存候、御尤成儀に存候

一　長崎一卷の事は、御先代より井上河内守殿被二仰付置一候處、只今は外の御用同事に月番に被二仰渡一候、御先代被二仰出一候筋不同心に候、此人第一に御先代の儀を打破り被レ申候故、右の仕方と相見へ申候、近來長崎の事何角取沙汰共も有レ之、上にも大事に被二思召一候、兎角長崎奉行罷下り候て、御僉議と申に罷成候處、先頃大岡備前守罷下り申候、此人御先代より被二仰付置一新法の趣能存候故、早速御老中にも段々御聞可レ有かと存候處、格別左様に無レ之、對面の節は長崎表替義も無レ之哉抔と當座の挨拶にて、何の尋も無レ之候故、幸に小笠原肥前守と少由緒も有レ之候付、肥前守に其段申候處、肥前守被レ申候は、外の儀にて候へば、一圓此間見合申候義に相成候へども、是は外國の事に候へば大切の儀に候、左様に延引候ては不レ可レ然候間、可レ經二御意一旨にて被レ申候處、上意にはされば是は重き儀に候故、三度迄老中とも如何致候やと相尋候へども于レ今何共不二申上一候、三度迄被レ仰候儀に候故、其上に又御催促も難レ被レ遊候、其方了簡を以て老中へ長崎の儀如何仕候哉、上にも度々私共へ御意に候間、御詮議被レ成可レ然旨申候へば、御意に候故其段肥前守老中へ申入候得ば、俄に老中列座にて大岡を召申候、其より前阿部豐後守殿月番の節、大岡より有増申入候處、豐後守殿被レ申候は、此儀は成程文照院様御代より御僉議の趣、間部越前守爲二申聞一候て承申事に候へども、只今は鬼居不レ申候故何とも難レ決候、（鬼とは新井筑州が事なり）其方能合點被レ致候事に候間、同役共如何様に申候共急度可二申立一候、御奉公の儀に候間身をかばひ申間敷旨承り、事成被レ申様に候處、列座の節は豐後守殿も井上殿も同事

に新法殊の外悪敷候とて、備前守申處を打破被レ申候、戸田殿は無口成人にて始終何共不レ被レ申候、其節久世大和守殿は幸月番にて、井上阿部と備前と僉議の趣始終聞被レ申候て其上にて、被レ申候は日本の内の儀に候へば豈逆様の儀にても、一旦は御威光にて罷成候、是は外國の事に候へば、そゝうに相改め難く候、御先代の段々御僉議にて唐へも新法の趣被レ仰遣レ候、此度又御止被レ遊候とても、何卒唐へも被二仰遣一候辭無レ之候ては不二罷成一候、日本の勝手却て悪敷候間、又如レ件可レ仕とは難二申遣一候間、何とぞ此譯に候故不レ得レ已との儀を、篤と御僉議被レ成可レ然由被レ申候て其日は止申候、然る處に加納遠江守殿を以大關備前守へ、御内所より一々御聞被レ遊候、御前代に新法被二仰出一候時分、御條目の書付可レ有レ之候間可二差上一旨に候、其條目は七冊有レ之篤と御老中迄出置候へども、御老中被二指扣一候て上げ不レ申候、備前守より遠江守方迄申上候に付、老中へ御尋被レ遊候、最早隠し申儀は不レ被レ成候て上げ被レ申候、逐條御覽被レ成、一々御張紙にて此通尤に不二思召一候旨に候、其定書御張紙共に老中へ御出し被レ遊一々尤に候此外は有レ之間敷候、斯様の良法に何角非難を世に申事は法に不レ叶と被レ思召レ候、然處備前守方より此通り必定宜きと不レ被二申上一候、如何の存念に候哉と被レ仰出レ候、是は御老中へ御あて被レ成候と聞へ申候、其をば合點無レ之、其節に罷成候て、備前守二年成儀申上候抔と申由に候、打ッ雛ッ狂言の仕方に御座候、其後は、備前守を河内守殿始殊の外懸意に被レ申、林大學頭方へ備前守を長崎への暇乞に呼候て馳走けしからぬ事に御座候、不幸にて備前守俄に肺癰相煩當地にて

相果申に付、日下部作十郎を被二仰付一候、此人如何可レ有レ之や不レ存候、長崎の事は兼て承り申候、詮ずる處御先代筑州抔、新法は只今の通にては、日本の金、銀、銅、鐵後には皆唐へ參り申候間、信牌と申物を唐の商人共へ被二相渡一候、此牌所持不レ仕者にはふつと交易不レ仕候樣相定置候、其故衣類、人參其外珊瑚珠、伽羅など拂底に罷成候を、老中始新法故に唐物高直に候ていやがり被レ申候、其上信牌無レ之候商人數多日本へ渡り候て、相對にて交易仕候樣に去年以來罷成、却てぬけ荷〻多罷成候事も是故と、異口御同音に筑州故とて譏申候、兎角日本の爲に永久の害を除申事にて候へば、上意の通良法にて可レ有レ之候、然ればぬけ荷等の制禁有レ之候て、何卒右の法立申樣には僉議無レ之、良法を打破り申樣に人に申事候、上には良法と被二思召一候と相見へ申候、日下部も器量の人に候哉不レ存候、中々貴賤一同にいやがり申事に候間、此法立申樣には難レ成可レ有レ之と奉レ存候、其上是に限り不レ申、上には尤に被二思召一候ても老中牽制有レ之候故、壅蔽仕事而已にて候、然ども所レ賴は上の御英斷にて候、一兩年內其効可レ有レ之候樣私は存申候、其上只今迄の通に候ては、兎角埒明不レ申物に御座候、いやともに御裁決無レ之候ては成申間敷奉レ存候、朝鮮の儀なども何やらん昭廟御代定の通に可レ被レ成候樣に被レ存候、其機を見候て東五郎なども、筑州へ示談の事共有レ之と奉レ存候

一 頃日御城に御平産有レ之由に候へども、すきと沙汰無レ之候、中々輕き御樣子に候故外に存不レ申候、長藏樣御そだて被レ遊候も至極輕き事共に承申候、先頃江戶近邊の巡見の御目付罷歸、何の替申儀

も無之旨申上候處、一事も不申上候段巡見被仰付候甲斐は無之由にて不首尾に候、江戸廻は不殘御老中御近習衆の領地にて老中の威に恐れ候て何事も不申樣に被思召候かと奉存候、夫々承り候て井上殿百姓、阿部殿駕籠にすがり訴狀上げ申候、阿部殿おさへ申儀不罷成河内守殿へ被申候へば、早速被上候樣にとの挨拶にて候故達上聞候處、河内守殿御前へ被爲召右訴狀御渡被遊、此儀は其方存知候儀に候哉御尋候處、曾て不存儀に候由被申上候へば、領地の民政の事不存儀油斷に被思召候、向後心を付候樣にと被仰渡候て、右訴狀をば河内守殿へ被下し由に候、度々御成も可有之と存候へば存の外無之候、是も御老中方より御成被遊候樣にと被申上候へば、御鷹野抔に御出被遊候事は下々の事をも御聞被遊、耕作の樣子も御覽可被遊と被思召候ての儀にも有之候處、却て下々難儀の樣に御聞被遊候處、御出可被遊旨上意に候由、其故か先日舟にて御出の時分などは、すさと御通筋かまひ不申候、向井將監よく働とて船中にて御盃被下候由にて、殊の外首尾宜敷旨申候、先頃横田備中守御加增の時分も、其前日備中守御前へ被爲召候て、一人何やらん申上候、其翌日實體に勤申候由にて千石御加增にて候、只今は諸役人獨身にて御前に被爲召候故、御老中を始め氣遣候體にて候、御前代終に無之儀と申候、然其天下御取被遊候て未日淺候故、諸事遠慮有之體に相聞へ申候、下にて存候とは相替り成程御遠慮可有之儀と奉存候、前に御兩殿より被繼統候とは替り一等疎遠にて御老中勸進の事に候へば、世にても擁立の臣と申候て、中々人主も自由

には難レ被レ成、急に抑へ候へば君臣離間致し禍難も出來申候、日本にても北條の世如レ此にて候、唐の末か門生の天子と申事有レ之其時分王室度々無嗣に付、當時の權臣外より援立いたし候故門生天子とは申候、明德記とやらんにも新座の主人譜代の家人に向て箇樣の儀を申など丶有レ之候、唐日本同事に候、此場合に臨んては、第一人心はなれ不レ申樣に用意候て、そろ〳〵大臣の威を抑へ候樣に仕事明智の君たるべく候、如何樣近年の中相知可レ申と奉レ存候、右の件は御他言被レ成被レ下間敷、御讀過被レ成候て此紙面火中に被レ投可レ被レ下候、遠方不レ入儀と奉レ存候へ共、ケ樣の儀外より御聞被レ成まじく候の間御知らせ申度如レ此候、以上　（八月八日賜二齋賢修遲一書以上五件）

當地世事無二替儀一候、水野殿和泉守御老中石川近江守殿若年寄衆は御開可レ被レ成候、松平右京大夫殿只今御政務も預り被レ申候、先頃より惣下座にて、只今殿中にても御先代護持院溜の間に獨座にて、日々御前へ被二召出一候由に候、小笠原佐渡守入道殿只今峯雲とやらん申候、是も毎度被二召出一候て御閑談候由申候、ケ樣の衆何卒輔益の功も有レ之候へかしと奉レ存候、抱屋敷抔の事も畢竟驕佚を御禁戒の御下心とは見へ申候へ共、指當難儀の者多有レ之候、新井氏只今被レ居申處も無二心許一候處、是は百姓地にては無レ之、格別の事にて少しも構無レ之旨先日新井氏被レ申候、彌左樣に仕度候、作事大半出來申候、役者より出申候者先頃より御吟味御座候、御存知之通り中條藤平抔は只今諸大夫に成申事に候、其外輕き者に多有レ之候、是等は跡目不レ被レ下筈に成申抔と申候、いまだ慥成事は相知不レ申候、何卒

嚴酷に成不申樣に仕度奉存候、以上 （十月十四日賜書）

一 十七日の事か、森川出羽守殿役儀御免にて御座候、殘忍至極の人にて一統にくみ申し候處、此の度人心を快し申儀に御座候、飯高七兵衞と申御祐筆有之候、如才も無之人にて候へども天然不恭に見へ申候由、森川氏不合口にて、常に自分身上にかへても罸し申し度者に候由被申候、此の一事にて殘忍刻薄の處御了簡可被成候、恩讎分明有道の言に非らずとさへ申し候處、小人の心底と奉存候、私共支配にて候故別して氣の毒に候處、此の度はたして右の仕合に成申候、兎角剛明成る御儀恐なから奉感候、右羽州抔上へ諂申事は衆に越と申す事にて候、吹上御殿へ御成の時より、自身に酒のかんを致し申す體にて御察可被成候、不明之君に候はゞ被蔽申儀無疑候、兎角諂申す者阿侫の者御意に入り不申由申候、此の度石川近江守殿若年寄に成被申候事も、本願寺と高田門徒の公事よりと申し候、高田門徒は勢州に候哉、伏見殿の御子養子に參候、紀州に被成御座候時より、御籠中樣より御連枝にて、內々此の公事の首尾能御存知被成、十分本願寺無理の樣に御聞被成置、此の度段段僉議の處、近江守殿寺社奉行にて、始終本願寺の方道理の由被申候へども、いまだ先入者爲主候哉御理屈被仰立候故、殘の衆は御裁斷の通りに御請被申候處、近江守殿兎角理非に御構不被成、御意の通り可被遊との儀に候へば、如何樣とも御意次第可仕旨被申候由、左樣にても無之候間、彌所存可申上旨にて、其の上にて御をれ被成、御聞誤り被成候由被仰出、本願寺勝に罷成申候、

其れより十日過候て若年寄に被レ仰付一候由申候、先今日迄は聲色の好曾て無レ之候、巧佞の人すきと御意に應じ不レ申候、毎度御鷹野吹上とは大方毎日御成、此日も御拳にて鶴抔御取り被レ遊候由、至極御數寄と相見へ申候、禽荒み氣遣のみにて御坐候、倡椒房の驕すきと無レ之候、頃日も御城女中の衆承り候、哀れ成程の事にて是れも過可レ申も不レ存候へ共、御先代抔は各別の儀にて候、此人于レ今鳥幷蟲介の類すきとたべ不レ被レ申候、家中へも法度に被二申付一、常憲院樣御代の通少も違ひ不レ被レ申由、阿部殿御老中御免の時分、此方より先達て若御老中役被二仰付一候ても御斷申上候間御免可レ被レ成候、被二仰出一候以後は難レ申儀に候故申上置候由、是も老中抔に被レ成候はゞ、常憲院樣生類御憐の御志に違申事も不レ得レ已候て被レ致可レ申哉との氣遣に候由申候、愚成事には候へども一筋成人と存候、果敢而窒との類にても可レ有レ之や、松平右京大夫殿御用候も、諂無レ之人にて一筋成處御意に應じ申と見へ申し候、頃日も承候へば、御鷹野御供御免可レ被レ成候由被二仰出一候、御供被二仰付一候以後御斷申し上候へば、上意違背に罷成候間、兼ねて申し上置候由斷りに及ばれ候由申候、ヶ樣の儀は結句御意に應じ申と見へ申し候、其の外少々の事共兎角質直成事共に御座候以上（十一月九日賜書）

森村先年有章院樣御他界の前年御大切に見へ候時分に候、御相續の僉議にて紀州樣に極り申候由、去共廟堂の秘事にて候處森川氏より密に紀州へ内所にて申進候由、松平紀伊守殿と兩人より申來候由密に承り申し候、是れ等反復の臣と可レ申候、ヶ樣の事、只今は却て身の禍に御座候、小人の愚成る處

と奉レ存候

一　先日申進候通、森川出羽守殿若年寄役御免被レ成候、此人衆のにくむ處にて候處此度一統に歡申事に候、殊の外奸智巧邪の上殘忍刻薄の人にて候、頃日も人々御承り候處に、或は當代の大惡人と申人も有レ之、或は羽州斯樣に被二仰付一候事直成御代の印に候由申人も有レ之、又は此儀承り候て正月を小兒の待申心いたし候て、何となく歡敷候由申人も有レ之候、是にて御推察可レ有レ之候、御鷹野抔に御威の時分も、御威光をかり候て權威を肆し候由、其故下々の難儀の事も每々有レ之候、其上に西丸御作事神田橋御造營の事見廻候樣被二仰付一候の處、此儀に付己が權威を快し候事、此度御意に合不レ申由申候、久世大和守殿は御月番にて、只壹人にて被二仰渡一候故如何樣の儀に候哉憶成事存知たる者は無レ之候、遠慮には及不レ申候由に被二仰出一候へども、席を不レ被二仰出一候故今以屋敷に引籠被レ申候、此日又大島因幡守、三島淸左衞門と申す御目付役儀の勤め樣不レ宜候に付御取上被レ成、大久保佐渡守宅にて被二仰渡一候、是は遠慮可レ仕旨にて候、是も羽州同類と申候、西丸御營作初り申時分、右兩人は御前へ被レ召出、御直に段々被二仰付一候筋も有レ之由、然處に羽州被レ致樣相違候へども同じ申由段々其品有レ之候て、役儀御取上と申候、只今戸田殿、水野殿御前宜由、久世殿は其次と申候、久世殿餘程器量も有レ之候樣申候、是も御前惡敷は無レ之由申候、松平右京大夫殿とは合不レ申由候、井上殿は此間不首尾の樣に取沙汰いたし候、是も久敷續申間敷由、先日申進候高田門徒の事、井上殿高田の方引被レ申候由、石川殿

其故御選擧と申候、ヶ樣の儀にて井上殿不首尾の由取沙汰いたし候

一　鋸町住人桐屋藤八桐木商賣仕候者にて主人の妻子を養育仕候處、諸物高直にて兎角及二餓死一申躰に付、其身股肉を切大根を以包箱に入認候て、上に御本丸御用と書付上野邊へ捨置申候に付、其趣上へ相達候處、內に鋸町桐屋藤八と書付置候間、御吟味の處主人の妻子をばごくみ候へども、段々困窮最早可レ及二餓死一體に付、此度訴申度候へども、何を以私の眞實可二申顯一樣無二御座一候に付、幸肉厚く御座候故股を切候て如レ此仕候、何卒相應の金子被レ下、私儀は肉厚く候間御ためし物に被二仰付一候ても宜奉レ存候間、右の金子を私の胴にかへ申度願にて御座候由申上候へば、忠義の志御感被レ遊候て、金子三十兩被レ下候趣本書の通にて、同町の者へ妻子の者不便を加へ養育可レ仕旨被二仰渡一、尤右の者只今之通り彌奉公情入申候由

一　先日申進候桐屋藤八事彌實正に御座候、上野寺中へ御用の物と書候て、箱に己股の肉を切候て入置申候、町奉行所へ被二召出一、謀書致候事は不屆に思召候へども、主人の難儀を救ひ可レ申爲仕候段きとくに被二思召一候由、闕所金三十兩被レ下候由、去年被二申進一候白須賀之義僕平八事も、二三日前萩原源左衞門に逢候て、尋候へば、成程實正にて、此度田宅買戾し申候、金子を四十兩餘被レ下候由に候、是は主人の田宅公儀へ沒收にて候處、御拂の直段に借金いたし候て買もどし申候、其金は豆腐屋孫兵衞と申候江戶にて平八當分の主人才覺致し申候由、其金子をば公儀より被レ下候樣に致度とて、源左一

人世話にいたし、此度も源左より最前の同役中へ委細申入候て、久世殿へ申達、ヶ様の辨明申由に候、源左奇特成事に存候、ヶ様の儀も下より申上候へばすなほに御用被レ成候と相見へ申候、剛毅木訥近仁にと有レ之通に御座候、以上 （與二大塚甥一書）

十二月四日

一 當地時事何の替申儀も無レ之候、毎度御鷹野に御成被レ遊候、御鷹野還御之後、諸大名より御機嫌伺無用の由にて、安藝守様などよりも此一事止申様に承り候、御鷹野先人を拂申事抔も殊の外ゆるがせに成申候由、毎度の儀に候へば、左様にも無レ之候ては、人の難儀にて御座候、其さへいまだ難儀の事有レ之由申候、段々御耳に達候て改り可レ申と奉レ存候、水野和泉守殿も十八日か京都より參着の由申候、只今御老中の中久世殿第一に御用をも被レ承候由に御座候、一統に擧申候、餘程器量の有レ之人と相見へ申候、近頃病者に被レ成申候、此間別て悪敷由、其故毎度引込養生にても快氣有レ兼可レ申と申候、秋元但馬守殿の様子にて御座候、當春火災以後又神田橋内本の屋しきへ歸被レ申候、其迄被レ居候大手の屋敷を差上被レ申候、其時分迄は阿部殿と合不レ申候、井上殿威勢盛に候故引籠可レ被レ申體に候處、阿部殿御免、井上殿も此間は段々威衰申體に候故、久世殿第一御信用に付思案も違申候哉、病氣をも押て勤被レ申候の御奉公仕死の覺悟由被レ申候由に御座候、火事後新井氏見廻被レ申候處、此節登城の節にて玄關まで出被レ申候處、新井氏其外大勢被二差扣一候處、新井氏のそばへ近付候て類燒笑止に候、昔稀

燒不㆑被㆑申候哉と尋被㆑申候由、新井氏書物は燒不㆑申候由被㆑申候へば、天下後世の爲と申一段の儀の由挨拶にて候、是も外の衆の不㆑申儀にて御座候、只今井上殿抔は新井氏をば見ぬふり位にて候故格別の事と申候、阿部殿と不㆑合由に候處、役義御免の節即日に見廻被㆑申候、只今迄同役にて相勤被㆑申候處、殘念に奉㆑存候由被㆑申候由、ヶ樣の儀取合考候處に、兎角器量人と見へ申候、重病おしき儀に御座候、此十五日萩原源左衞門へ新井氏御城跡に被㆑寄、私にも參候樣にとの儀にて、終日夜半過迄緩々語申候、朝鮮の一事も天和の格に可㆑被㆑隨との事にて候處、此間は少し違候樣に聞申候、正德年中來聘の節前格を被㆑改候思召を委細新井氏に被㆓仰付㆒、かなにて記候來聘事略とやらん申候て御老中役所に被㆓指置㆒候、儀式等は外へ被㆓仰付㆒、高階半治郎付候て錄置申候、右之事略を此程御尋被㆑遊候樣子と申候、只今御城に無㆑之と見へ申候、昭廟時分の記錄は御當代に至候て、老中方もすきと御用無㆑之候故致㆓紛失㆒候哉、又は態とも燒捨申候も不㆑存候、いかゞして此記有㆑之事御耳に立申候哉、此禮天和の格と申儀は井上殿林大學頭など示談候て起り候て、十分上の思召にては無㆑之と見へ申候、比日上の旨を受候故か、林氏も口達にて、筑州改置候朝鮮の事皆惡敷にても無㆑之候、只々不㆑捨事も有㆑之由申由に候、來年に至り候はゞ、樣子段々相知可㆑申と奉㆑存候　（十二月廿六日書）

一　世上相替儀承不㆑申候、十九日小石川筋御鷹野に御成にて、還御は夜に入申體に御座候、鶴一ッ鴈二ッ御手に入申由申候、其日より被㆓仰出㆒候て、還御已後御機嫌御伺御大名方より被㆓仰上㆒候儀無㆓御

座一候、向後御鷹野并御堀廻御成之邊御には御伺入不レ申候、御道筋之掃除、且又御道筋に火を出申儀も無用に可レ仕旨被二仰出一候と申候、町之風呂も無レ構たかせ、人留も御成先迄暫の内留申候て、諸職の業作商買等も無レ構仕管の由申候

一　高野山に數百年來集候金銀、際限も無レ之儀に候由に御座候、今般不レ殘公儀へ御借用被レ遊、高野へは只今まで二萬千石の寺領の上、一萬石被二下付一候由に御座候、過分の金銀無用の地にすたり居申候處、乍レ恐近比御尤の御儀と申候事に御座候、是は水野和泉守殿御裁判共、又は紀州に被レ成二御座一候時分能被二知召一候故、上の思召より出候事抔共とりどり風聞仕候、無二際限一夥敷儀に御座候、是を以御旗本衆御救可レ被レ遊哉と申儀に御座候、四十六億七千萬歲の年季にて相濟可レ申と笑顏仕候、御英明の主には相極り申と申儀に御座候

一　此間廻狀有レ之由、私共へは不レ參候、御鷹野道商買其外何事も平生に聊替り不レ申樣可二申付一候、若役人共御奉公だてに諸人難儀に及申も不レ顧も有レ之候はば、御慰の妨を仕にて御咎に被二仰付一候、御鷹野は御慰に御出被レ遊候處、諸人難儀にては御慰に不二罷成一候、此思召を能々合點いたし被二仰出一候儀にても、諸人難儀に成申儀は隨分心付候て下知可レ仕事、且又御鷹野先にては御不自由被レ遊候覺悟にて候處、自然入可レ申哉と無用の者抔致二持參一候事、一向思召に叶ひ不レ申候、隨分事少なに可レ仕事、此外委細の儀に候へども失念いたし候

一　彌御鷹野還御已後御機嫌伺は諸大名より指上不㆑可㆑申由被㆓仰出㆒候、尤國許より勿論候事

一　小石川堀の内に、鐵砲十挺泥之内に捨有㆑之候、先頃見出候て公儀へ其處より申上候處、主を御尋ねにて、去月の事歟廿八日前に早速可㆓申出㆒旨御觸にて候處誰も不㆓申出㆒候、其後又被㆓仰出㆒、廿八日已後出し後れ候故不㆓申出㆒儀も可㆑有㆑之候、少しも不㆑苦候間相知候はゞ可㆓申出㆒候旨にて候處、鈴木主膳とやらん申候人鐵砲にて候、當春火事の時分急候て家來之者打込申旨にて、御吟味の上彌無㆑紛候故、主膳へ被㆓相渡㆒候時分被㆓仰出㆒候は、御吟味の上其方鐵砲に無㆑紛候故御渡被㆑成候、但し武器をそまつに仕候事不念成儀に候間、向後相嗜可㆑申旨にて候、是等も御尤成儀被㆓仰出㆒候由申候

一　役者より出申候者共跡目無㆓相違㆒兩三人被㆓仰付㆒候、これは出羽守殿上聞に立ち不㆑申中にて滯らせ申事と聞へ申候、此頃は一統役者より出申候衆安堵不㆑仕候、其儀御耳に立候歟、常憲院樣時分御廊下番之內、兩人御扶持放され申者有㆑之候處、先頃被㆓仰出㆒候は、御番帳御覽被㆑遊候處、兩人只今見へ不㆑申候者有㆑之候、是は如何樣の儀にて御扶持被㆑放候や、其時より番頭中條丹波守、藤本筑後守に御尋被㆑成候處、此者共番頭被㆓仰付㆒候前の事にて存不㆑申候由申候、只今在所存候やと御尋被㆑成候故、在所及㆑承申趣委細申上候樣子により、被㆓召返㆒候半かと申沙汰にて候、是にて役者より出申衆一統に安堵致申候、是は出羽守致方委曲御聞被㆑成、上の思召にては無㆑之段相知れ候て、諸人安堵いたし候爲にと態々御尋にても可㆑有㆑之かと申候

一　有馬次郎兵衛と申御書院番衆七百石取申候、其嫡子傳四郎五十に及まで次郎兵衛息才にて勤申候、傳四郎は別に被ニ召出ニ三百俵被レ下候、是は御先代の事にて候、然處次郎兵衛相果候以後、傳四郎病氣大切に候故末期養子書付出申候、五十以後の末期の養子は成不レ申御格にて候故、出羽守殿中々請不レ申候、然ども傳四郎部屋住にて、養子願可レ申樣も無レ之候、此筋にて是は格外の儀にて候處に、出羽守殿聞不レ申了簡と申候、其内傳四郎は相果彌斷絶に究り申候、先頃上より被ニ仰出ー、傳四郎願申候養子有馬玄番頭殿家來にて筑後に罷在候、急に呼に遣し可レ申旨被ニ仰出ー候故、定て傳四郎跡三百俵被ニ仰付ーにても可レ有レ之哉と一門歡相待候處に、此度祖父次郎兵衛七百石無ニ相違ー被ニ仰付ー候、諸親類難レ有かり申事とかく不レ被レ申候由物語りにて候

一　御成の日は、只今迄堺町見物一日御停止にて候、一昨日は御成の時分より、是以商賣同事に候へは無レ構可レ仕旨被ニ仰出ー候、歲暮故勘三郎はもはや其前日仕廻申候、竹村市之丞は未レ仕候處に其日其儘致申候、勘三郎にも此被ニ仰出ー候間、兎角仕候樣に町奉行より申渡、當年は最早止申候處、態々法樂一二番致申旨今日の噂しにて候、仕廻候はゞ其分の事にて候處態と致させ申事是もはや上の思召にあわせ申氣味に候、思召には叶間敷候、兎角御嫌に候へども諸役人くせに罷成候間、合せたがり申由に候

一　頃日徒目付の者兩人が賄賂取申事相知、改易被ニ仰付ー候、日比猾吏共、此間は殊の外戰慄いたし

候由

一頃日大久保佐渡守殿に、御鷹野場に於て御羽織時服被ㇾ下候、御羽織は召候を直に被ㇾ下候、小倉木綿にてゑり抔少々すれ破れ有ㇾ之由に候、此間も木綿頭巾を召候て御鷹野に御出被ㇾ遊候由に候、是にて老中始め華美は不ㇾ成筈に候間、何の被二仰出一は無ㇾ之候へ共世上にも移可ㇾ申候、珍重に奉ㇾ存候、此間江戸中の樣子餘程改り申樣に見へ申候

一天文御好被ㇾ遊、每日猪飼豊次郎と申、只今は御徒にて候保井助左衛門高弟にて天文達者の由に候、此者罷出申候、追付天文者に可ㇾ被ㇾ成と申候、何卒經學に罷成候樣仕度候、來年あたりはこれも知可ㇾ申候

一先日申進候股切の僕町奉行冣前溜へ入置申候、たまりと申候は、死罪流罪等決し申者を、其刑に行はれ申迄溜置申所にて候、此段御耳に立仕方如何樣にも致候へ、忠志の者を溜へ入置申事不吟味千萬の由、以の外上意に應じ不ㇾ申、俄にあがり屋へ遣申候由、かりそめの儀ながら奉ㇾ感事に候

一今日は御拳の鶴御ひらきにて、御三家の御連枝方、御譜代大名衆、御老中諸役人於二御城一御振舞にて候、以上（賜二修運一齋賢書）

十二月廿三日

兼山秘策 第三册 終

兼山秘策 第四册

起享保三年至五年

一 昨日上野より還御の節、下谷茶店の亭主直奏いたし訴狀指上申候、元來阿部豐後守殿百姓の處罪科㆒候て田地沒收せられ、江戸へ參り茶店を業といたし罷在候由、先年罪科服し不㆑申寃を訴申由に御座候、是も豐後守殿爲宜しからぬ事と申候、舊臘火事の時分は御差圖も無㆑之處、阿部殿にも人數引連れ候て被㆓罷出㆒、增上寺防と申候て一段の首尾御感の御意有㆑之候由御坐候、年明候て每度御鷹野に御出被㆑遊候、夫とも御鷹野場百姓は年貢十分一差上可㆑申旨被㆓仰出㆒候て殊の外忝かり申由に候、御國用不㆑足候て舊臘も町方御拂無㆑之、町人共難儀の由申候、其故御簡略第一と見へ申候、對馬守殿被㆑出候人參抔只今迄は惡金にて定りの價に致し、朝鮮へは惡金成不㆑申夫に付惡金をば公儀より精金に御替

被ニ成下一候に付、公儀より半分御償被レ成と申物に御座候、是等も此度公儀より御償不レ被レ成候間、人參代金一倍に可レ仕旨にて俄に一倍に罷成候、斯樣の儀ども色々有レ之候て、下々難儀にも罷成候由申候、去共上に聲色の御好曾て無レ之故か、下情も服し申候て怨申者も無レ之候、畢竟是は憲廟御一代の華奢より出候て、其弊中々急に救可レ申事にても無レ之と見へ申候、舊臘など御米も無レ之候て、小身の者共切米扶持抔極月廿七日迄渡不レ申、殊の外致ニ難儀一斯樣に手つまり候ては如何成可レ申哉と、執政の衆難儀と存候、上にも宵肝の節に候處、毎度御鷹野など有レ之事御苦勞にも不レ被ニ思召一候哉と奉存候

以上

正月十一日

一　前書申進時節御承知被レ成候旨、此間は替申儀も不レ承候、少宛の儀は毎々有レ之と見へ候へども、私も只今新井氏抔へも疎遠に罷過候、其外交接寡く候故何も承り不レ申候、朝鮮事略の抄出申哉と奉レ存候、其後沙汰無レ之、一ッ橋外護持院跡、幷其邊悉く畠に被ニ仰付一、麥を蒔、頃日出來申候、是へも頃日も御成被レ遊御鷹野被レ成候、先日本庄へ御成の時分、百姓荷擔候桶の樣成もの貳ッ棒にて御荷ひ被レ成、御半着物（木綿の樣に見へ申候よし）一ッ此の寒氣に被レ召候て御供申すきと御殘し被レ成、左の御手に鷹御すへ候て一人野邊を御越被レ成、御拳にて鶴御合せ羽を御自身に御抑へ被レ成候て、御鷹に又御自身に御餌飼被レ成候、其鶴の血を御茶碗にて被ニ召上一候、御手に付申血を御鷹匠の頭巾にて御拭被レ成候由、

其時分御供の楽物語にて候、其後百姓の家へ御入御酒上り申候、御供中へも御すゝめ被遊、大久保佐渡守抔酔顔に見へ申候、其外承り申事共皆無類にて候、至極御輕き儀に見へ申候、「君子不重則不威、且又望之不似人君」と申聖賢の戒には御違被成候儀と奉存候、火事をば殊の外御苦労に被遊、舊臘廿七日火災の時分も、御城樓へ御成被遊御巡見被成候て、火事場へ度々御下知候て、奉書火消もひた物被仰付候、夫故其時分火事も脇へはひろがり不申、風強く風下の方へ長く燒申計にて候、是は御威光故と皆々申事に候、翌日火消衆御城へ被為召、段々消様の事御尋被遊候、初は御近習衆を以御尋被遊候へ共、後には火消衆御前へ被為召候て何も罷在候處、御白衣にて御刀を脇に指置れ候て、御直に御意は、昨日火災の時分、面々手下の者迄も精出し候事委細御承知被遊候、少も不精と被思召候にては無之候へ共、市ケ谷の堀をば越させ申間敷儀と被思召候、あの處にて消様可有之儀にて候、向後も可有之儀に候間、堀を越し申時分越させ不申様には、如何いたし候はゞ能可有之哉、此儀存寄申上候へとの儀に候へば、當座には孰れもはつきりと御請無之故、兎角只今除所へ御出被成候（余所へ御出と御意は、定て二丸抔へ御出の事と存候）追て了簡可申上旨にて何れも退出の由申候、關兵部と申候寄合下谷金杉に居申候、正月十二日御成の日火出し候て自分遠慮いたし罷在候處、其後大久保長門守へ被召候て、石川近江守幷御目附鈴木伊兵衛立合、御成の内と申別て火の元可愼處出火、其上平生身體不相應の人も所持不仕候て火の消方も不宜候、旁不屆に被思召候旨にて逼塞被仰付候、先日上野還

御の節、下谷茶店の主人直訴申上候、其時分御目付衆（名は失念いたし候）不案内にて目安を町へ預け、勿論其人を
ばしばり候て預け置候、御城御玄關へ御上り被レ遊候て、其儘先刻の目やす上げ可レ申旨に候處、町へ預
け置申候付取に遣し候不調法の仕方に被二思召一候由にて遠慮被二仰付一候、向後は直訴の者有レ之候はゞ
しばり不レ申、其儘町へ預け置可レ申旨被二仰出一候由に候、西ノ丸御普請御手傳松平甲斐守殿被二仰付一、
去秋より取掛り去年中に奥は出來候て、一位樣御移被レ遊候、總奉行は森川羽州其外に御目付兩人御付
被レ成候、然る處に森川不首尾にて御役儀御取上げ、兩人の御目付も役儀被二召放一、是は其上にて遠慮
被二仰付一候、森川と一ッに罷成甲斐守家來家老用人、此度御手傳に懸り申者ども三四百人も、一時に
指扣何れも國へ被二追返一申候、是も森川を恐れ候て色々手入いたし候由申候、森川ひきにて指置候事不
レ被レ成候由に候、加藤右近並御目付すきと申上候由、右近は早速役替被二仰付一諸大夫に罷成申候、只今
何とやらん申候、甲斐守殿不首尾、當正月御謠初の時分、例年御盃被レ下候處、阿部豐後守殿、間部越前
守殿、松平甲斐守殿三人は金御盃被レ下候、其故殊の外甲斐守殿君臣共に迷惑に被レ存體と申候、去と
も西ノ御丸未いまだ不二相濟一候て、當春も其儘甲斐守殿へ御手傳被二仰付一候間、指て氣遣成儀とも不レ
存候、只今町奉行、勘定奉行、寺社奉行、大目付中抔毎度御前へ被二召出一、御直に諸事御聞、且又御直
に被二仰渡一候、御老中曾て知られぬ儀御座候に付、各別の世には罷成候、上下の情者すこしも塞不レ申
何もかも相知申と見へ申候、其故にも候哉、當年は元日より天氣長閑に、此間は終に此節覺不レ申好

雨ひたと降候てしめり不レ絶候故、火事沙汰もやみ申候、此通りにて段々天氣和順に候へば、人心も自然と安堵いたし申候、是は御手柄かと乍レ恐奉レ存候、高野金銀等御取上の事は虚談の由申候、如何様少々は沙汰も有レ之儀にて候哉、不レ慥成儀に御座候

一　當地何の替儀も不レ承候、紀州へ太母御迎の儀被二仰出一、御迎の面々大勢相極り申候、若年寄石川近江守殿總頭と聞へ申候、是はとくに御迎可レ被レ遊儀と皆々申事に御座候、何とか思召も候て只今まで御延引被レ成候かと奉レ存候、松平右京大夫殿頃日は御前宜しからぬ體に候様申候、是は鶴の御料理賜候處辭退候てたべ不レ被レ申候、且又御鷹野一事御斷申上候て貪着不レ被レ致候故と申候、是も馬淵氏同品にて少偏塞成處有レ之人と見へ申候、左候へばたとひ大に被レ用候ても何の賴も無レ之と奉レ存候

一　當月二日深見新右衛門次男久之丞事逐電いたし、七日迄内所にて相尋候へ共見へ不レ申に付、八日の朝申上候、斯様の儀同役より申上候御格の由に候、其故私へ賴候故拂曉に罷出、石川殿月番に候故申入候、遺書も有レ之候、紙二三枚とぢ候て長き事に候へども、畢竟神仙を學び大道成就いたし度念望に付、山林へ入申旨に御坐候、不孝不忠の處は如何に候へども、小節に拘り候ては大道成就不レ仕候故存切り申旨にて、其外に長生訣と歌行長篇の詩を殘し置申候、是は近江守殿へ見せ申物にも無レ之候へども、右の遺書の中に此詩の事書入置候故、遺書を出し候へば、此度もひかへ申儀不二罷成一候、其儘

出し申候、右の遺書幷詩共一々近江守殿私へ被ニ相尋一、扨々難儀に逢申候、詩は深見家の草書にて唐紙に書ちらし、中々私共よめ申物にては無レ之候、其上、當地に谷口一雲と申百歲に及申由にて仙方傳授候老人、近比江戸中取はやし、還童丸と申藥を出し方々爭傳候て、此藥にて大分金銀出來申由に候、此老人へ久之丞も當春出合申由に候、其節も山林へ入度旨申候處、一雲申候は、其儘市朝に居候ても仙方は成申間、必無用に候ととめ申旨只今一雲申候由にて、兎角左樣の儀に付仙方存立申候、右詩中に一雲無中の翁とやらん申句有レ之候て、近江守殿何の儀に候哉と、私氣付候へども、有樣に申候ては、一雲手前抔も御吟味も候ては、無益の儀に六ケ敷罷成候ては如何と存候て、音にて讀候て谷の雲中の仙翁と申儀と存候旨申候、是に付候て存候は、世に交接候ては斯樣の儀直にばかり意得候ては不ニ罷成一候事と奉レ存候、小事ながら權道とも可レ申候、然る處に九日晝立歸り申候故、十日曉天又近江守殿へ罷越其段申上候、久之丞申候は、二日朝ふと罷出、日光迄參候て御宮拜し候て正氣に罷成立歸申旨に候、立歸り候ては成程正氣にて候旨、新右衛門物語いたし候趣も近江守殿へ申入候、其後六日に呼に參候て罷出候へば、久之丞立退候事、畢竟亂心の仕方に付御扶持被ニ召上一、其身は新右衛門宅に押込可ニ指置一候旨被ニ仰渡一罷歸候、其段新右衛門に申渡し、直に夜に入候て御老中若年寄衆へ新右衛門名代に御禮に罷越候、不ニ存寄一宜しからぬ儀に世話いたし申候、折節脫肛痛にて指出難儀仕候、去とも早速輕く相濟此上珍重に存候、新右衛門老年に罷成散々の仕合と申儀に御坐候、不レ入儀ながら珍敷

儀に御座候故申進候久之丞事當年廿六歲に罷成先年別に被二召出一貳十人扶持被レ下候

一　先日申進候中川正軒（字はしかと不レ存候）對山樣御遺腹とやらん申候て申出吟味被二仰付一候處、白狀いたし虛誕に相極り、此日獄門に被二仰付一候、至極惡敷奴にて候へても、大膽者の由取沙汰にて候、町奉行所にてしかり被レ申候て、事にこそより候へ、斯樣の儀たくみ出候事大罪至極の由被レ申候處、正軒居直りあざ笑にて、初心成儀を承り申候、古來大惡を巧み申者、必仕得可レ申と存候て仕候者は無レ之候、仕そこなひ候ては死申外は無レ之候、覺悟前の事にて候、其上われら式の者公儀の御詮議に逢候て、天下の人に知られ申儀は生涯の面目と存候、むだ／＼と追付老死仕には拔群ましたる儀にて候由申候へば、誰も一言申出人も無レ之候、扨籠屋にて頸を打れ候時分穢多に申候は、總じて死人の衣服はおのれら取申候由兼て承り候、彌左樣に候哉と尋候故、其通りに候由申候へば、左候はゞ血のつかぬ先に其方へ遣し可レ申とて裸に成候てきられ申由に候、此事不レ承候以前、去人參候て獄門の頸を見候處、殊の外顏よろしく見へ申候、正軒只者にては無レ之と見へ申候由、正氣靜り候て覺悟よき人の顏は色よろしく見へ申由にて、其後此事承り候て扨はと存し候、右の者もよく見へ申候と存候

一　當月十日終日風雨、夜に入候て雷地震も有レ之候、其後本鄉本多帶刀殿の長屋三十間程龍まき上申由にて崩れ申候、遠藤氏之進長屋も十間計取申候、本多長屋は遠藤方に落し、遠藤長屋は本多方へ落し置申候、龍のめぐり申度々に落し申故にても候哉、但旋風にても可レ有レ之哉と申候、羊角風と申物

にて候、いづれにいたし候ても珍らしき儀と申儀にて候、本多長屋は只今新井氏宅の近所に候故、新井氏子息被レ參候て見　旨先日物語にて候、帶刀殿へは御由緒も有之候、御尋被レ成候ても可レ然儀と存候、火災以後又斯樣の破損にて難儀と存候　（二月廿五日）

一　當地何の替申儀も無レ之候、頃日紀州へ國母御迎の事被二仰出一、大勢相極り申候、若年寄石川近江守殿惣頭と見へ申候、西丸御作事も奥は去年相濟、當春以來表御修復被二仰付一、段々相濟申旨に候、此儀に付森川出羽守殿去年役義被二召上一候、權威を振ひ賄賂など收候沙汰にて候、御手傳松平甲斐守殿も不首尾に候へども、其儘當春も御手傳被二仰付一候、頃日承り候へば、甲斐守殿家老豐原周防甲府へ追返され、已後切腹被二申付一候由に御座候、公儀御役人へ取入御材木抔押領いたし候共申候、其外或は追返され又は預けられ候者にて、元の役人は纔十人計ならでは殘り不レ申よしに御座候、頃日私同役の內變事出來候て、其儀に付度々石川近江守殿へ逢申候、殊の外溫和平易成人に御座候、箇樣の人御意に應じ候事珍重に奉レ存候、同役中變故の事は青藏人殿まで委細申進候、勢州神戶の百姓共堅人の樣に申候より、若年寄被レ成被レ申候て所替可レ有レ之と申候て、殊の外氣遣がり申候由に候、いかさまよほどよく見ゆる人にて候　（與二奥子復一書中）

二月廿五日

一　當地時分指て替申儀無レ之候、紀州御迎も前月廿八日歟發足にて候、京へ御寄被レ遊などと申候へ

ども、何方へも御寄不レ被レ遊由に御座候、石川殿にも一萬兩程も入申候由、難儀被レ致候由申候、其外小身の衆拜領金僅の事にて何れも借金いたし申候、勝手ひしと參り申間敷と申事に御座候、この儀に付小身者には拜領金少々被レ下、難儀不レ仕候樣に致度旨、水野和泉守殿再三井上殿へ被レ申由に候へども、最早何申事濟申由にて許用無レ之候、久世殿兎角の事不レ被レ申、是にては定て何も難レ有かり可レ申と態と挨拶被レ致候由、兎角井上殿權を專らに被レ致候體に見へ申候、折節爭被レ申候は大和守殿和泉守殿にて候由、戸田殿は井上殿次第に被レ申候由、いかゞの儀に候哉、是にては大政埒明不レ申儀と奉レ存候、頃日兩番（御書院御番小性組を兩番と申候、）不足仕に付御旗本嫡子被二召出一御補被レ遊、貳百人餘も有レ之由に御座候、嫡子までに御座候、それも父たゞ今まで勤罷在候者にて御座候、ちとは御褒美の心も有レ之と存候、おつて承り候へば、嫡子被二召出一にては無レ之候、小普請の内より兩番へ被二仰付一候由、然處中川淡路守組小普請の内より、一人何とやらん申者嫡子を出候て跡にて相知れ、その者は閉門被二仰付一候由にて、淡路守も遠慮にて候由、是等は有間敷事に奉レ存候、如何の間違にて候哉、其とも兎角上を欺申筋に罷成候へば、重く被二仰付一候ても御尤の儀に候處、結構成事に奉レ存候、無造作にはかの變たる儀に御座候、兎角冗官を沙汰被レ成候、是は中國にて歷代沙二汰冗官一と申旨有事に御座候、無用の人を減じ申事に候御樣子に候、夫故五十年以來新參の者は、一代にて跡不レ被レ下抔申沙汰も有レ之候、是は頃日新村何某と申者、櫻田より文昭廟の時分付參候、弟は別に被二召出一候、右新村の家は何某頃日病死、

外より養子願置申候處叶不レ申跡斷絶いたし候、御老中御詮議承り候に、弟が方にて新村の家は立申候、然ば養子致候て立申儀不レ叶儀に候由、向後此御格に成候へば、新參は同姓兩家有レ之候へば一方計に成申事に候や、斯樣の事ひたもの有レ之候て、何角御老中御詮議の上、誰やらん御取立の由緒申上候て跡を願申者有レ之候處、戸田殿の挨拶に左樣に候ては、御人減じ不レ申由被レ申候由に御座候、此一言にて扨は御人減ぜられ候儀と諸人申候、しかといたしたる儀は知不レ申候、いかさま何方もと申ながら、公儀には別て冗官多く有レ之候事に御座候、是を沙汰せられし事政事の一端にて御座候、但唯今の勢にては人情に叶ひ不レ申儀に候間、御威光にていか樣とも可レ被レ成候へども、人心安堵不レ仕候ては、天下の御爲如何とも奉レ存候、新參者は跡斷絶の格に罷成候はゞ、私共は子孫御奉公の望は無レ之候へども、夫は私事に候へば少も遺恨は無レ之事に御座候、夫ども一統に新參の者跡斷絶と申儀にても有レ之間敷候、頃日毛利右京殿十五歲とやらん疱瘡にて死去、跡斷絶にて御座候、笑止に候、近年毛利家不仕合にて御座候、(百)五萬石かにて候本家へ御返し可レ有レ之と奉レ存候、但御朱印別に候哉と申者有レ之候、左候はゞ如何可レ有レ之候哉

一　養仙院樣御用人宿屋源左衞門事、一柳對馬守殿へ御預被二仰付一候、先頃の事に候間御聞可レ被レ成候、諸行不レ宜勤方不レ愼急度可二仰付一筈に候へども、御宥免を以右の通り被二仰付一候由に候、御鳥見より立身いたし、去年も貳百石御加增被レ下、七百石にて布衣にて御座候、御老中の權をかり御守殿に

てをこり中體にて候由、其上醉狂いたし女中に對し候て脇指拔申事も有レ之由、積惡と申候、此度は水戸樣よりも御斷も有レ之樣に申候、御守殿付の者是にて心付可レ申と申候、貴濟御守殿大岡も沙汰不レ宜候、御守殿にて大酒など致し申取沙汰にて候、愼み可レ申儀と存候、宿屋事無二忌憚一の小人と見へ申候、先年湯治の願申上候時分、子息縫殿に其方命をもらひ度旨申候由、縫殿承り候て如何の儀に候や無二御心許一候、勿論御用の儀に候はゞ、只今にて成共自滅可レ仕候、不レ及レ仰儀と申候へば、只今の儀にては無レ之候、此度湯治いたし是にかこつけ京大坂見物可レ仕と存候、かくしおほせ候はゞ其分に候、自然相知候はゞ其方迄御法に可レ被二仰付一候間左樣に心得よと申候て、湯治より京都見物に罷越候、罷歸候て人前にて近頃其儀申出候て、御法度そむき申候もおもしろき物に候由、定て醉中の儀にて可レ有レ之候へ共、世上には斯樣の者も有レ之候、驚申候、然處に世間上手にて御老中氣に入申候て、已に去年まて加增致し候處に、此度不二存寄一斯樣に被二仰付一事、水戸より御斷は不レ存候へ共、御明斷の事と奉レ存候、惣て諸頭御役人すきと或は一人或は貳人參人宛、每度御前へ被二召出一、御直に御問答共有レ之、諸士の賢否よく御存知被レ成候體に御座候、當月御法事も相濟候はゞ、被二仰出一候儀ども有レ之由沙汰仕申候、いかゞ可レ有二御座一候哉、以上

四月廿三日

一　前月晦日增上寺御成還御の節、尾張中納言殿宿坊より熨斗目着用の者のぞき申旨御近習衆見候て、

御目付稻葉多宮へ被ㇾ申候、其段宿坊へ其日參居申候尾張殿御家來へ斷候處、詮議いたし候へども覚き申者無ㇾ之旨申候、慥に見申候由申候處、左候はゞ其紋など見屆被ㇾ申候哉、其儀承り候て詮議可ㇾ仕旨申候處、紋は見屆不ㇾ申候へども、慥にのぞき申由申候へども、尾張殿家來中一向承引不ㇾ仕候て、左樣に候ては何を以詮議を可ㇾ遂樣も無ㇾ之候、此方吟味候へども一人ものぞき申者無ㇾ之候、證も無ㇾ之儀をいか程御申聞せ候て難ㇾ提候よし申切候、多宮も互ひに聲高に罷成候て先つ言被ㇾ申候、其跡へ御徒目附中參候て、只今被ㇾ參候は稻葉多宮と申御目付衆にて候由申聞候へども、尾張殿御家來多宮にもいたせ、何宮にもいたせ、不埒なる事は難㆓承知㆒候旨申由にて、其御成の節警固等いたし候御徒の衆兩人御徒頭雀部新六へ御預け被ㇾ成候、一兩日以前兩人共に闕處に被㆓仰付㆒候、新六は閉門いたし候内へ申付方不沙汰に候由に御座候、尾張殿方何とも不埒なるものに御座候、其後尾張殿よりのぞき申者は無ㇾ之候、但し其日當番にて宿坊へ詰申頭分の者、切腹にても可㆓申付㆒哉其段は御指圖次第の由、御老中へ被㆓申達㆒候旨承り申候、先是にて御沙汰無ㇾ之埒明可ㇾ申と奉ㇾ存候

一 當月朔日淨圓院樣紀州より御着府被ㇾ遊候、御祝儀御能も有ㇾ之候

一 當月十八日儒者役人見又兵衛友元子、同七郎右衛門、林又右衛門三人被ㇾ爲ㇾ召候て講釋被㆓仰付㆒候由に候、向後聖堂へ罷出講釋可㆓相勤㆒候、何卒聖堂聽衆不ㇾ絶有ㇾ之候樣被ㇾ遊度被㆓思召㆒候て被㆓仰出㆒候よし承り申候

一　先月晦日増上寺御成の時分、増上寺前住祐天和尚へ御逢可レ被レ成候間、寺へ呼寄置可レ申旨被二仰出一候に付、只今麻布に隠居いたし腰立不レ申老衰至極に候、其段申候へば、中々罷出可レ申とは不レ申候、斯様に腰も立不レ申候を御覧被レ遊、何の益も無レ之事に候間、其段可二申上一旨申上候へば、上意の儀に候間兎角不二罷出一候ては難レ叶事に候、其上御前にて死被レ申候ても、宗旨の爲にも眉目にも候間、達て罷出候様僧徒中もしゐ被レ申候へば、左候はゞいかやうにも致し候へと申候故、御次迄蒲團にのせ候て移置申候て、還御の節御唐紙明候て御逢被レ成候首尾に有レ之候處、御立被レ遊祐天側まで出御に候故、祐天少蒲團よりにおり下り可レ申様にいたし候處に、其儘と上意有レ之候て久敷て御逢被レ成候よし御意共有レ之、退屈にて可レ有レ之候間歸し候へと上意にて御座候、其時分祐天落涙いたし申候、御近習衆如何の存念にて落涙いたし候哉、何もか心得の様祐天へ相尋候様に上意に付、近侍の僧を以相尋させ申候へば、祐天申候は、忝くて落涙するにては無レ之候、今日有章院様の御忌日にて候、御在世にて候はゞ此節最早御成長にて、此寺抔へも御參詣被レ遊御言葉などかけらるべきに、御他界にて時世も替り申候、夫に付候ても、世の無事を一入存候て及二落涙一候由申候、其段御耳へ達候へば御感被レ遊候て、左様にて可レ有レ之候、さすがの出家の由上意有レ之候由申候、祐天仕方出家には相應の事潔白に相聞へ申候、感入申事に御座候間申進候

五月廿三日

一　水戸中納言樣當月十一日御逝去にて御座候、卒中風にて八日より二三日御煩にて御逝去の由、七日は鳴物停止候由觸申候處、十五日神田明神祭禮神事障無ㇾ之由にて其儘有ㇾ之候、合點不ㇾ參儀と奉ㇾ存候、儲君御見物とて棧敷御用意抔も兼て有ㇾ之候故とも申候、先月十五日御鷹野にて俄に月次の御禮無ㇾ之候、これも大猷院樣御時有ㇾ之候、其後は式日に御鷹野にて出仕延申事は無ㇾ之由に候、八月十五日は八幡祭禮にて殊に放生會にて、御鷹野は御殺生にて候、然ば神事に御遠慮は無ㇾ之と聞へ申候處に、神事は格別にて御三家はおもき儀に候處、今度明神祭禮其儘有ㇾ之事前後不都合成事の樣に申候、何卒御詮議有ㇾ之候ての儀にては可ㇾ有ㇾ之候へ共、愚案及處に無ㇾ之候

一　聖堂にて毎日兩座宛講釋有ㇾ之候、四書の内の近思錄、孝經、小學にて候、正蒙の筈に候處耳遠き物に候由にて候、孝經被ㇾ成候由に候、丁の日は直參、半の日は貴賤入込承候へとの御事にて候、先日に直參の人七人有ㇾ之由に候、其後も半日共に聽衆わづかの儀と申候、後には有ㇾ之間敷樣に申候、此儀先日大學頭御叱被ㇾ遊候は、聖堂講釋聞手無ㇾ之由御聞被ㇾ遊候、紀州抔にてさへ大勢有ㇾ之候、殊に江戸の事にて候處、ヶ樣にはやり不ㇾ申事大學頭抔不精に候故と被㆓思召㆒候由、大學頭御請には迷惑至極に奉ㇾ存候へ共、不㆓罷出㆒候を罷出候へと私より促可ㇾ申樣も無ㇾ之候間、御威光をかり候樣仕度旨願にて、講師御ふやし、旗本へも町中へも勝手次第罷出承り候樣にと觸有ㇾ之候、然共此邊抔に居申直參の人罷出候かと尋候へば、罷出候者は聖堂にて帳に書付け置候、然ば一兩度二三度罷出候ても、末へ續き不

㆑申候ては結句見苦敷可㆑有㆑之候、又續て承程の心懸も無㆑之候故、何れも扣へ候て不㆓罷出㆒候、比日深川本誓寺とやらん申寺のらん塔に石地藏有㆑之、ふと何とやらん利生有㆑之と申はやし群集致し申候、夥敷事にて御座候、俗に申候は、賽錢二千兩程はや有㆑之由申候、五六日は少薄く成申候由承候、大學頭比日御老中前へ罷出、聖堂講釋に衆聽無㆑之候、急度重て被㆓仰渡㆒候樣にとの事に候故、不㆓罷出㆒候とて重て必罷出候へ共難㆑被㆓仰渡㆒候、兎角今少見合候へば次第に出申者も多く可㆑有㆑之と被㆓仰渡㆒候へば、大學頭せかれ候て、此程深川の地藏さへ大分群集致し候處、講釋に參候者無㆑之候は沙汰の限りとて腹立候由、何れも笑ひ申候、深川地藏をひかずともと申候、脇より承候へば、公儀よりは惣樣儒役の者は、替る〲聖堂へ罷出講じ候樣にとの思召に候處、大學頭より被㆓申上㆒筋何かと有㆑之候て、林家の學者に限り申由に御座候、先日共人參候て、是は大學頭心得惡敷御座候、此方より望候て成共、いづれも儒者中へ罷出候樣致度ものに候、左候はゞおのづから聞手も多く可㆑有㆑之由申候故、私申候は、講談と申者境町の珍敷役者仕候とて、大勢見物有㆑之候樣成儀にては參る物にて無㆑之候、ケ樣に候ては四五日の事にて續き申物にて無㆑之候、外に學文はやり候樣に被㆑成筋も可㆑有㆑之儀と奉㆑存候、偖私共へ罷出候へと有㆑之候はゞ、上意にて候へば兎角罷出にて可㆑有㆑之候、中々辻談義樣成中へ打交り候て成申物にては無㆑之候、却て不㆓罷出㆒が仕合と存候、此程も共人におとけながら申事に候、私共罷出候はゞ賓盛齋と存候、若との原と爭て先をかけんもおとなげなし、又老武者とて人々にあなどら

れんも口惜しかるべくと申物と存候よし申候へば、笑ひ申候

一　佐藤五郎左衞門當地にては理學者と申候て、井伊掃部頭殿、土井大炊頭殿と其外大名中にも尊敬の方多有レ之、第一酒井勘解由殿前々より信仰にて下屋敷に急度あいしらひにて被二指置一候處比日勘解由殿は不首尾に致し上京いたし候由に候、當地に妻子など指置罷越候、追て又罷下り申候由申候、先づ一往勘解由殿手前を立去り申候に付、湯治致度由にて上京仕候由申候勘解由殿家來中抔噂承候に一年に百兩宛合力有レ之候處、近年屋敷類燒にあひ被レ申、其領地不作等にて不勝手に付、家來中知行もかり被レ申候、夫に家老共詮議にて、五郎左衞門は格別には候得共、百兩を兩度と致し度由にて五十兩遣、今半分は來春進可レ申由家老共申遣候處に、五郎左衞門家來中と同格に家老共致し候事を不快に存候哉、五十兩を返し候て請取不レ申候由、其段家老共より勘解由殿耳へも立、不屆の様に罷成、去り不レ申候ては不二罷成一候様に成候て去り申候由に候、是は五郎左衞門金銀の事にては有間敷候、只禮待の衰へ申處にて去り申にても可レ有レ之候得ば、此度の端合力より起り候故、諸人は金銀の事故と申候て笑止に存候、五郎左衞門處置何卒可レ有レ之事に奉レ存候、惣て勘解由殿家老初家中一統にくみ申由に候、殊に淺野家四十七人を亂臣賊子と申議論より見限り申由承り候、此度上京の時分も掃部頭殿領分掃除など致し殊の外馳走、家老抔出候由沙汰致し申候、掃部頭殿いまだ若輩の人に候處奇特に奉レ存候、定て家老共申入候て學文に志被レ申候哉と奉レ存候、五郎左衞門も餘程の老人と聞へ申候、

當地にて大名衆懇意の方多く、大分富有に罷成候抔申者も有㆑之候、いやなる沙汰に奉㆑存候、殊の外吝嗇成人の由に候、毀譽相半致し候、兎角是も山崎流の高慢のくせ有㆑之候て、下開を耻申體に候故此後出合申望も無㆑之人にて候、(以上三件　九月二十三日與㆓小谷勉善㆒書)

一　當地何の替申儀も無㆑之候、宗對馬守殿死去の事申來候、舍弟養子の願と申候、兎角來年の朝鮮人來聘はのび可㆑申旨申候、夫共に上次第に候へ共、對州代替りには朝鮮より符節の樣成物相渡り申候、此符節調不㆑申內は、往返の事難㆑成事に候由申候、此符節國王より下り申事に候故、中々急には難㆑調申候、左候へば來年抔は埒明申間敷と申候、如何可㆑有㆑之候哉、當地一統に延申樣に人々願申候、國家の費用も大分の儀に候へば、此節不㆑入物とも奉㆑存候、只今公儀第一冗費を御除被㆑成思召に候故、御老中より諸役人迄の心得にて御座候、華麗の風は次第に薄く可㆓罷成㆒候へ共諸事苛酷に罷成、忠孝の氣味段々なく成可㆑申と奉㆑存候、比日も闕所金を掠取候て公儀へは僅かに沒取候事相知、御目付方は其者頭中より大和守殿へ伺㆓御吟味㆒可㆑被㆓仰付㆒哉と申候、久世殿被㆑申候は、其分に仕置候へと御申候由、去とも外より相知れ候ては不吟味に罷成事を恐れ候て、再三久世殿へ申入候へ共、久世殿頓着無㆑之由に候、三度目とやらんに久世殿被㆑申候は、公儀より闕所被㆓仰付㆒候事御本意を如何合點被㆑致候哉、是は御法へ懸り候て闕所被㆓仰付㆒候事に候、金銀の多少御詮議にては無㆑之候、闕所と有㆑之候へば、其金銀は多候ても少にても貪着無㆑之事に候、惡敷心得に候由被㆑申候故、其人も御尤と申候て

重て久世殿へは不二申入一候へ共、とかく氣遣に存候て有馬兵庫へ申候へば、兵庫吟味可レ然旨申候間、右掠取申候者罪に被レ行申候、殊に舊惡に候處、斯樣の事は跡の儀遂二吟味一有レ之候へかし、目付輕者廻り候て下の儀早速相達申候、夫故にせ出來候て江戸中難儀仕候、下の事相知候故家々恐れて、此間はおどり子三弦抔の遊び殊の外薄く相成候、是はよく候へ共苛察に罷成申候、御目見不レ仕候御扶持人等は此日も大分御扶持被レ放、且又跡目立不レ申者も多く有レ之候、御目見以上も實子無レ之候へば、養子の分は跡目大方立不レ申候、昨日より增上寺御法事に候へ共、御儉約第一にて此度事體を失ひ申儀も有レ之と見申候、委細の事は筆紙に盡しがたく候、御近習衆被二仰出一候、御條目奉レ感候旨小寺氏より被二申越一候、一向に諸旗本は感不レ申と見申候、千里を隔候ては不レ被レ知事と奉レ存候、容易には不レ被レ申儀に御座候、但聲色の御好は今日迄すきと無レ之、椒房の奢抔はやみ申候、是は御前代に無レ之儀に奉レ存候、良輔さへ有レ之候はゞ賴母敷御代とも奉レ存候處に、可レ惜至に御座候

一　來年朝鮮來聘無二相違一候由、此比故對馬守殿御舍弟式部殿參勤早速御禮相濟、且又家督被二仰付一候、追々可レ爲二發足一候、來春に至候て可レ爲二歸着一候、其後朝鮮へ可レ參候間、來四五月時分にも來聘使あなたを罷立、秋末ならでは當地へ參着有間敷候、琉球人は先比參候て御禮申上候、最早罷立可レ申と奉レ存候、前に何の替り申儀も見へ不レ申候

一　此度金銀引替新法被二仰出一候て、關東筋は金遣にて候故、當分指て替申儀も無レ之候へ共、西國上

方借は御國抔も難儀の旨沙汰有レ之候、有馬玄蕃頭殿家來などこひしと行當りつぶれ申樣に申候、四分一の身上に成申同事に候へば尤に存候、此儀とくより相極り候へども衆議難レ決候て只今迄延引の處、此度上の獨斷にて被二仰出一候由申候、いかゞ成行可レ申哉合點不レ參候、定て何卒つかへ不レ申處置可レ有と存候、當地なども米價は日に賤く候て金半分に罷成候、一倍の用に立不レ申候ては不レ參候處中々左樣に諸物直段究め申事にては無レ之候、畢竟は金三四十匁替にとりやり不レ仕候はゞ物賣申間敷由申候、左樣に成候はゞ當地士中も困窮いやましと存候（十一月二十九日與二小谷成之一書）

大工作料の極

一　壹匁八分　　大工棟梁仕手大工一番作料

一　壹匁九分　　仕手大工上手の內七人分

貞享元年御勘略奉行山崎半左衛門を以柿葺大工ともに不二相渡一、貳分宛の增相渡候事

一　大納言樣御代より中納言樣小松へ御隱居被レ遊候迄、一番作料米九升宛、夫より五升迄段々有レ之候

一　壹匁六分　　大工壹番作料

一　壹匁七分　　棟梁役但柿代壹匁宛增レ之

右は寬永十九年米石に付貳拾目仕に付、銀子に御直し被レ下候樣棟梁共奉レ願、壹匁六分宛に相極め、萬治元年迄此通被レ下候

一　三分宛　　　大工壁塗増銀

一　貳分宛　　　大鋸、木挽、屋根葺、板批増銀

右は萬治二年米高直にて石六十目宛仕候に付き、増銀の儀奉ㇾ願、萬治二年より寛文元年迄此通増被ㇾ下候、寛文二年米石に付四十目に罷成に付き、右増銀被ㇾ指除ㇾ候

延寶八年米石に付き五十四匁餘仕候に付、職共奉ㇾ願大工、壁塗、板批、屋根葺、大鋸、木挽向後米高直の時節は貳分宛増銀被ㇾ下候樣に、同年七月御作事奉行及ㇾ御斷ㇾ候處、同年八月朔日より此の通増銀可ㇾ被ㇾ下旨、月番本多安房守御作事奉行紙面に付札印章を以て申渡候

但天和二年迄貳分宛被ㇾ下候、同年七月米下直に付、右の増銀差除申候

一　元祿九年夏米石に付五十六匁餘仕候に付、奉ㇾ願貳分宛増被ㇾ下候、同年秋より五十四匁より下直に罷成、増銀差除申候

一　元祿十三年一兩年打續米石に付五十六匁七分以上、段々高直に有ㇾ之候處度々職共及ㇾ斷、同年七月二日より貳分宛増銀被ㇾ下候

一　寶永四年七月朔日より貳分増銀大工、木挽等被ㇾ下候、此節米石に付六十五匁、同五年九月米石に付三十三匁餘仕候に付、九月十日より右増銀指除申候

一　正德二年七月米高直に付同月二十四日より貳分宛増銀被ㇾ下候、同年彌高直に付、十二月廿日より

又四分增銀被レ下候

享保三年宮腰の者と大野村栗崎村の者共爭論有レ之、於二御算用場一佐藤仲左衛門內々を以吟味の處、宮腰役銀小物成等、寬文十年村御印の趣き相違取立間敷、役銀を永々指上可レ申、役銀をも不足の體に候旨、依レ之仲左衛門御年寄衆に及二相談一諸方支配所小物成取立の樣子承り候へば、悉村御印の趣に相違仕候、是は時の指當り候處迄詮議を以て、每々御算用場印の紙票渡候故に候由、如レ此にては末々彌其本を取失ひ、御仕置の筋可レ致二相違一候間、此次の惣樣御改可レ被レ成候哉、左候はゞ主付承屆候て追て書立、上に達し御聽被二仰出一次第御改可レ被レ成哉の旨申入候へば、一段尤に候、追て可二相改一旨年寄を以御申渡候由、右御吟味の樣子有增承り候趣左に記レ之

一 宮腰村御印奧書に小物成の分は、十村見圖候上を以指引有レ之候はゞ其通可レ出旨の事

此通に候處、取立の儀宮腰町奉行の支配に罷成、下役人を定其者へ見圖次第にて、拜見人も無レ之、口錢取立等も不レ憚、勘定も此者共直に相遂申候、是は寬文二年年寄衆及其節御用人の紙面致二所持一、其趣を以勤候旨文書如レ左

覺

一 於二宮腰一諸魚商賣仕口錢取立候儀、同町菓子屋佐左衛門に被二仰付一候間、無二油斷一精を出候樣可レ被二申付一候事

一　年中取立候口錢の內、十分一佐左衛門へ被㆑下事

一　口錢銀取立候刻は、佐左衛門書付に致㆓奥書㆒直に上させ、一ヶ年切に爲㆑懸勘定可㆑申候事

一　諸魚猥賣買の作法以下、金澤魚問屋聞合、相違無㆑之樣可㆑仕事

右の通無㆓相違㆒樣念を入、度々改可㆑被㆓申付㆒事、以上

寬文二年五月廿七日

今枝式部　判　　伊藤內膳　判

前田七良兵衛　判　　奥村因幡　判

奥村河內　判

寬文十年村御印御改の時分、此紙面可㆓相改㆒處此通に罷成儀如何、其後被㆑下銀は拾枚に相極、御算用場紙面有㆑之、今以其通に取申候

一　宮腰三歩半口錢取立人と申候て、肝煎の內三人極有㆑之候、此處に三歩半口錢と申儀は、村御印にも無㆑之事に候、此三人は高田彥太夫奉行の時分申付候、其以前の儀は不㆑存由三人共に申候、右三人裁許の內諸魚鬻仕候程に大どれ不㆑仕候故、終に口錢取立候事無㆑之旨申候、夫故馬淵友之進勤候內、終に三歩半口錢取立不㆑申、彥太夫勤候時分只一ヶ年三歩半口錢取立申候、御定に無㆑之口錢取立候段難㆓心得㆒に付、仲左衛門相考へ候は、惣て魚口錢の事、生魚にて金澤問屋へ着申分は六歩口錢にて、遠所の分は鹽魚に仕り他國へ出候に付、いづれも三歩半口錢の御定に候、三歩半は他國へ商候口錢な

り、依ㇾ之宮腰を近邊浦方にて諸魚多く取れ候時分、鹽を致し他國へ渡し申度儀旨御爲の樣に申成候て相願候を、奉行も口錢上り申達へ迄心付取立候と被ㇾ存候旨、仲左衛門申候事

一　同所魚口錢取立候内に、八歩口錢と申事有ㇾ之候、且又村御印も其外にも御定無ㇾ之事に候、宮腰の儀諸事金澤問屋並に相勤候樣にと有ㇾ之候て、金澤問屋方に六歩取立候故其通に仕候、金澤問屋手前にては八歩口錢の事は、其子細は問屋共も不ㇾ存候へ共、先役人以來取立上來候故其通に仕候旨申候、八歩口錢は、小魚の方に取立申候旨に候、口錢兩樣有ㇾ之候はゞ、大魚は八歩、小魚は六歩にて、可ㇾ有ㇾ之の處、却て小魚は八歩と申儀は先年金澤問屋最前運上にて、一ケ年何程と請合相勤候時分、數取魚の分は問屋方にて數取と名付、其内にてよき魚を撰み候て其分を問屋取分に仕候故、浦方の者致ㇾ迷惑ㇾ候、右數取魚用捨仕候は、小魚之分は六歩の上に貳歩を八歩口錢に仕可ㇾ差上ㇾ旨相願、兩樣に罷成候て浦方に覺書仕置候、然ば問屋手前にて自分に相增候口錢に候、小松問屋にて今以右數取の魚百に貳ツ宛取申由に候、此趣きに候へば、八歩口錢御印物御定にも無ㇾ之口錢に候間被ㇾ指止ㇾ、勿論數取魚も取不ㇾ申樣可ㇾ有ㇾ之哉と存候、金澤問屋に問屋相場と申義を極置、外に無ㇾ之指引仕候、左候へば銀壹匁の代錢渡しの刻、其時分何程の錢相場にても、其相場をば用不ㇾ申、壹匁に錢五十文餘にも仕取申候、其外日錢抔と申指引も仕候、依ㇾ之御家中へ求申候魚、直段もおのづから高直に罷成候

一　材木被ㇾ召上ㇾ候時分、直段極人と申候て宮腰にて三人、金澤にて一人、都合四人役人を極置、御

材木直段付仕候、能登越中にて被二召上一候時分も、此四人の者共罷越直段相極申候、此者共最前相極候時分御算用場の紙面に被レ下銀は被二召上一候間、御材木代銀之内にて木主より請取筈に候間、彌可二申渡一旨被二書記一候て、何程と申極も無レ之候、依レ之前々より御材木代銀百目に付一匁六分宛請取申旨に候、左候へば百貫目の御材木には壹貫六百目取申候、同所の者に候へば材木問屋と申合申儀に候へば、何程に仕取申候哉難レ計儀に候、右銀高に仕候ても四人取候へば、大分の銀高に御座候、賣主は其分を御材木に懸申候故、高直に罷成候はでは不レ叶事に候、御作事被二召上一物は年中大分の銀高の處、ケ樣の儀にて高直に賣上候へば、過分の儀第一右の首尾に候へば、此者ども直段極候節下直に積り可レ申樣は無レ之事、壹貫目下直に圖り候へば、其内にて自分の拾六匁減申候故、兎角下直には圖り不レ申候筈に候、仲左衛門儀は御勝手勘辨の儀も沙汰仕候役儀に付、旁以御作事奉行へ申談、御大工の内功者を相撰、見圖候樣には罷成間敷哉と致二相談一候處、御作事被二召上一物を大工に直段爲レ圖候儀は難二相成一筋と申候、此儀も尤に存候へ共、兎角今迄の者共は被二差除一金澤木屋共の内を撰み、少々骨折銀被レ下候て爲二相勤一候樣にも有レ之間敷哉と、重て仲左衛門申談候へば、於二御作事一致二詮議一只今迄の通にては御材木下直には不二相成一筋と存候間、安江木町、傳馬町四丁木町三ヶ所材木商賣人の内撰壹人宛可二相極一旨申候、仲左衛門存候も御作事奉行申候通材木屋に申付候へば、自分商賈の材木求候相場にも罷成候故、高直にて直段極不レ申筈に存候由申候

一　本吉、湊村兩村も村御印御文言腰同事、

然處是又小物成之儀十村不承知、肝煎取立候故不埒に御座候、小物成の內潟役銀近年指上不レ申候、他國船着岸仕候はば紛無レ之候故、少々取立上不レ申段仲左衞門承屆候へば、尤村御印には有レ之候へども、御算用場印取立帳に無レ之候故、前肝煎ども申送も不レ仕奉行も不二申渡一候に付取立可レ申事共不レ存迷惑仕候由書付出申候、他國船入候儀紛無レ之候故、已來取立指上可レ申旨申候、右村御印に有レ之候を取立帳に漏候は、前に其節の算用承り候へば役人心得違有レ之候、惣て小物成は年により增減も有レ之、或は少々も取立不レ申品も有レ之候、其子細を承り屆勘定の書替目錄相渡申事に候、奉行又は役人の代り目には入帳と申候て、取立申品に書記御算用場印を取相渡候極に候、左候へば其時に必村御印の表に有レ之品々不レ殘書立可二相渡一處、前年の御算用目錄表を寫し、此通り取立可レ申旨相調取立帳遣候に付、前年の取立帳に無レ之物はおのづから洩申候、末々にては御算用場の印有レ之紙面故、夫を證據に仕、不レ截分はたとひ村御印に有レ之候物にても、取立不レ申筈と心得取立不レ申由に候、又は下よりは取立ながら、指上不レ申族も可レ有レ之哉と仲左衞門は存じ候、向後取立帳相渡し候節は、御役銀有無に不レ拘、御意の名目を以て相記し相渡し候樣今般小頭どもへ仲左衞門申談候有無之儀は其年切の儀に候、右の筋にて渡置候帳面の分は不レ殘取返し、御印の名目書落不レ申樣調替可レ被二相渡一事歟

一　同所魚六步口錢の儀仲左衞門致二吟味一候處、前々は銀高指上候へ共近年次第に致二減少一、享保元年

貳百六匁七分五厘、同年湊村貳十七匁九分六厘指上申候、年中大分の獵仕候へ共少分の口錢指上候段、肝煎共手前仲左衛門吟味仕候處、肝煎共も兼々左樣存罷在候、乍㆑去先年金澤町人の内、本吉魚口錢年中貳十貫目の運上取立指上可㆑申候間、其内五貫目諸入用に被㆑下候樣相願候に付、其通に被㆓仰付㆒指上申儀も無㆑之哉の旨御算用場より申來、其時分所の奉行石川三之丞獵師共へ相尋候へば、運上に被㆓仰付㆒候ては迷惑仕候由及㆑斷、其以後兎角之儀被㆓仰渡㆒候故、獵師共何れも口錢は御用捨の樣に數年相心得、右銀高も爲㆓冥加㆒上㆑之候抔と申候故、彌減少仕候由申候、其時分町人も右の通願候へば、慥に銀高上り可㆑申處と仲左衛門考申候、去れば久々癖崇敷罷成候處に候條、只今俄に銀高指上申間敷候間、望人有㆑之候はゞ一ヶ年運上に被㆓仰付㆒、其格を以已來指上候樣可㆑有㆑之哉、町人數年相勤候儀は又所の者難儀可㆑仕候、惣て肝煎口錢等吟味仕候樣不㆓縮成㆒體と相聞候由同人申候

一　能美郡安宅浦小物成村御印御文言同事、

是又十村指引仕儀無㆑之、小松町奉行支配罷在町肝煎共取立申候、其内葭役銀は十村より今江村三左衛門支配仕候、同所魚口錢は、諸魚不㆑殘小松町問屋へつけ六分口錢指上申候、右問屋九津屋治太夫相勤申候、則治太夫手前口錢取立候樣仲左衛門承屆候へば、安宅の外近邊の浦々にて捕申候諸魚大小共、不㆑殘問屋に持參仕候て、如㆓御定㆒の六步口錢取立上㆑之申候由申候間、右口錢の内十ヶ一其方へ被㆑下候や、又は金澤問屋並入用銀何程被㆑下候や承屆候へば、私被㆑下銀の儀は前々より極不㆑申旨

申候故、受取切の運上に候哉と相尋ね候へば、先左樣の筋にて前々年に差上候口錢高書記出申候處、段々銀高多少有ㇾ之、殊に魚鳥多少により指引仕候由前々書付も有ㇾ之候間、左候へば決て運上と申筋にても無ㇾ之候、只今迄運上銀取立申內、其段勝手次第指上、相殘候分は自分に取申段紛無ㇾ之に付其段申聞候へば一圓申分無ㇾ之、其段先祖上使循仕候に付、正德四年微妙院樣御意に付、祖父次郞左衞門上使循仕候扶持と同事に、小松魚問屋被ㇾ仰付ㇾ候に付、其年より九ヶ年の間銀七拾枚宛指上、其次は二ヶ年五十枚宛差上、又三ヶ年目より天和三年まで廿二ヶ年の間は銀三拾枚宛指上申候由申候、其後又六拾枚九拾枚指上申候年も有ㇾ之候へ共、夫にては自分の勝手に合不ㇾ申候故御斷申上、六拾枚の割を以增減指引仕指上來申候由、運上銀に請合候へば指引は無ㇾ之筈に候、右微妙院樣御意の趣書付申物にても有ㇾ之候哉と相尋ね候へ共、一圓紙面も無ㇾ之、右先祖より申傳候迄の由治太夫申候、左候へば自分勝手次第に取込申段紛無ㇾ之候、十年以來の運上銀高爲ㇾ書出ㇾ、其內何程上納何程自分に取候段爲ㇾ書出ㇾ候處、年々上納銀よりは自分の方へ多取込申候、享保元年は惣高九貫貳拾八匁八分一厘の內、四貫參百八拾九匁七分壹厘六毛指上、殘る四貫六百三十九匁九厘四毛問屋爲ㇾ入用ㇾ自分に取申候、同二年は惣高拾壹貫九十五匁五分の內、五貫三百九十六匁四分六厘五毛指上、殘分は自分に取申候、如ㇾ此に仕度まゝ成儀、數十年大分の銀子を自分の心得を以取込申事不屆千萬、御仕置も立不ㇾ申儀と仲左衞門被ㇾ存候、年ㇾ去如何の儀に候哉、先年より御算用場奉行改作奉行先役の者共、小松町奉

行等不ㇾ及二貪着一、且又先年山崎半左衛門斯樣の品々吟味仕候時分も其通に仕置候、左候へば只今の治太夫決て不屆共難ㇾ申奉ㇾ存候、上使宿の儀申立候へ共、上使宿仕候者は御領國何程も有ㇾ之候へ共、每度入用被ㇾ下自分の費無二御座一候、其時分定て上使宿も仕者故、御褒美に問屋被二仰付一候抔と申儀にて可ㇾ有ㇾ之哉と被ㇾ存候、其上彌承屆候へば問屋も下より願候躰に御座候、祖父治郎右衛門に被ㇾ下候御裏書物の寫の旨にて、其寫見屆候處、尤被ㇾ下候趣の證據にも罷成物にても無二御座一候、右紙面如ㇾ左

乍ㇾ恐申上候

一　魚問屋口錢の儀、金澤富山並に六歩に可ㇾ仕は不ㇾ及二申上一、魚鳥通り荷物に口錢取申間敷候事

一　御運上銀七十枚の銀子、金澤並に每年正月中に指上申樣被二仰付一可ㇾ被ㇾ下候事

一　魚屋方の外、當地商人他所より罷歸候砌、干魚の類荷物の差合に仕罷越、直に賣申分は少も構無二御座一候、但魚屋方並振賣の者に卸賣に仕候はば、金澤並に口錢出し候樣被二仰付一可ㇾ被ㇾ下候事

一　鯉鮒の分口錢取申間敷候、其上魚屋の外浦方より魚買寄に、自分に遣申儀構無二御座一候事

一　魚屋方並振賣の者方々へ罷越魚鳥買候て、自分振賣仕候儀構無二御座一候、過分買罷越候て問屋へ案內不二申入一、直に見せ候て賣不ㇾ申樣、金澤富山並に被二仰付一可ㇾ被ㇾ下候事

右の通被ㇾ爲二聞召屆一被二仰付一被ㇾ下候はば、難ㇾ有忝可ㇾ奉ㇾ存候、以上

正保四年八月朔日　　九津屋次郎右衛門

淺野藤左衛門様

神戸藏人様

表書の通無相違様に可被申渡候、以上

前田內藏允判

此外に曾て紙面も所持不仕候由申候、此紙面を以考候へば、最初運上銀七拾枚と相極請取切々相違無之候、其以後一兩年七十枚より過を指上、御爲の様に申立、運上銀最初の極高の格を亂し、二十二ヶ年の間一ヶ年に四十枚宛の不足を指上、其後又五十枚六十枚と一兩年相增、畢竟運上と取立人との差別を紛はし申仕形、たくみ成仕樣に奉存候、たとひ先祖に如何樣の御奉公仕候ても不埒成儀、如斯の役儀相勤候者終に不及承儀に候、浦方の者尤渡世ながら、風波の難を凌ぎ身命を擲、捕申候魚の口錢を全く上納不仕、數十年來町人の潤色に仕候儀近比難心得儀に御座候、乍去祖父以來の儀、其上代々役人中も心付無之斷樣に成來候へば、只今越度にも難被仰付可有之候歟、六步口錢も紛敷仕樣の旨承候間、問屋を取放外の者へ可被仰付候哉、左候はば金澤問屋並入用銀可被下候哉、當地にて問屋兩人へ銀子拾貫目被下候、小松の義に候間十貫目割を以或は三ノ一四ノ一計も可被下候哉、十分一の被下銀例も有之候

元祿十六年御算用場より諸運上の儀伺候節も、段々被仰出候內運上の內先年と違、其請合の者過

分に取込、又は取おとり候品も可レ有レ之候、斯樣の儀連々致ニ勘辨一沙汰仕候樣被ニ仰出一候得ば、此者の手前にはひしと合申趣と同人存候事

一 （不）今石動町小物成村御印御文言同斷

是又十村不レ及ニ沙汰一御奉行支配に付、町組合頭共出來退轉相志らへ、帳面肝煎吟味仕、奉行加ニ奥書一御算用場へ出申候、役銀等の儀は相替品無レ之候、川役銀計は帳面相添、町肝煎入方より十村御扶持人へ相渡申候、川役は散小物成に付右之通に候歟

一 氷見町右同斷

是又町肝煎共取立、其品々年の暮に帳面相添上レ之申候、但散小物成は取立代銀十村へ相渡す

一 城端町右同斷

是又町肝煎指引仕候、散小物成は右同斷

右三ヶ所散小物成は十村御扶持人等へ相渡候故、御印に合申樣御座候へ共、增減差引は定小物成には無レ之、散小物成に有レ之處、其見圖の指引組合頭肝煎等仕候儀、御印の表相違仕候事

一 埴生村傳馬役銀支配の外に候へ共、鹽川安左衞門取立申候、埴生村本宿にては無レ之、常々在所にて農業第一の處に候處、今石動倶利加羅峠の下にて宿馬立乘滯候間、加宿に奉レ願、寬永十五年共通に被ニ仰付一候乍レ去開作つかへ迷惑仕候段及ニ御斷一一ヶ月の内五ヶ一六日相勤候樣被ニ仰付一候、右の首

尾に付傳馬役銀は石動へ上候事

一　魚津町小物成、村印、文言同斷

萬治三年岡田十右衛門町奉行の時分より、十右衛門方へ役銀取立上ㇾ之、今以其通に候、勿論小物成見圖も同所肝煎へ指引仕候、小物成の内獵船外海船擢役出來、退轉は生地村半之助へ相達、半之助加ニ奥書一奉行より御算用場へ出申候

一　所口右同斷

是又町肝煎共取立申候、魚口錢は山下屋仁兵衛と申者取立申候、宮腰同事に口錢勘定直に相逐申由に候、拜見人の儀は家來を兩人極置候由、不埒成事に候、其上村御印に無ㇾ之三步半他國出之口錢取立申候、是は延寶四年山崎半左衛門奉行の時分始て取立申體に候、其以後代々奉行其趣を請、代りの時分御算用場より取立帳相渡候故、今以取立申候、最初半左衛門取立候は如何の儀に候哉、聞違にても可ㇾ有ㇾ之候

一　高岡町は村御印無ㇾ之候

一　金澤町は村印も無ㇾ之候へ共、小物成算用等御算用場より承屆、畢竟改作奉行引合仕儀故、今般の次て仲左衛門相尋候處、惣て小物成、諸魚役銀等取立候儀は其品承屆、書替目錄渡申儀と存候へば、左樣にては無ㇾ之、江森半左衛門、和田小右衛門支配之時分、貞享四年六月十八日と有之、御算用場

の印に帳面を以取立申由に候、右帳面に有レ之品々定て其以前の帳面を以書記申儀と存候に付相尋候へ共、其時分の古帳は反古に成無レ之候、右在家の小物成の格を以相考候へば、御算用場印帳も不慥に候、根本御印帳無レ之、御算用場町奉行等の了簡にて小物成相定候儀は一圓有レ之間敷事に付、御算用場町會所等も相尋候へ共、御印等の物無レ之由申候、斯樣之重き品下にて可二相極一樣無レ之儀奉レ存候、先年御領國中村へ被二下置一候、微妙院樣御印の小物成御目錄、先年御算用場へ取上置、其後御前へ上り候由毛利故又太夫申候、其時分金澤町御印物も一所に上り申候哉と奉レ存候、但御印物は何れも定小物成にて候、在方も散小物成の准にて、御印物は無レ之候哉、夫にても最初散小物成相極候發端の紙面は可レ有レ之事に候、微妙院樣御印物石川郡田井村次郎吉、村井與三右衛門、河北郡五所村源兵衛方に三通所持仕候に付、仲左衛門寫置申候、是は一統取立候御算用場詮議にて毛利又太夫申渡候故、ヶ樣之物不レ殘指上候ては、以後取立候儀も區々に可二相成一と奉レ存候、右三通以來の證據に殘置申度旨次郎吉相願所持仕候由申候

小物成指引取立候儀、村御印の通向後十村へ被二仰付一候はゞ、左に相記申通に候

宮腰町　本吉村　湊村　安宅　石動　城端　氷見　魚津　所口町

〆九ヶ所、此內宮腰・本吉・湊は別て不埒に御座候

一、十村に小物成取立候は、其組々十村に不レ限、御扶持人十村等骨折申者に申付候儀先格有レ之、取

立銀の儀五十ヶ一可レ被レ下候由の事

一　十村支配の内村御印無レ之者、他國出し三歩半口錢取立候處々、

高松村　松波村　遠塚村　北村　白尾村

右村々小物成取立人御所村源兵衛、能瀬村彌右衛門に候、御印無レ之候處取立候は如何と、仲左衛門被二相尋一候處、延寶四年九月御算用場より相渡候取立帳に、書記有レ之に付取立申旨申候間、右取立帳見屆候へば、三歩口錢書記有レ之候、御代官制仕役人へ相尋候處、先格にて役人代り申節、前々帳面を以相調候定にて、其前の帳面に有レ之候故、其通相調候ものと存候由申候、依レ之十村共手前越度共難二申付一候、乍レ去たとひ御算用場より申渡候ても、村御印に無レ之儀に候へば一往可レ及レ斷儀共以後にても心付可レ申處、其通仕置候儀十村に不二似合一事に候、今般仲左衛門浦方十村高松村平兵衛白尾村理右衛門に急度申渡誤書付を取申候、取立人に如在は無レ之事仲左右衛門申候事

一　小物成取立帳は、向後御印帳の名目を不レ殘相記可二相渡一事に候、寛文十年村御印御改の時分、安宅三郎左衛門、近藤四郎左衛門兩人仕立候、覺帳にも先村御印に有レ之候、小物成の内只今退轉の品品指除可二相調一哉の旨年寄衆へ相尋候處、退轉にても又以來出來候樣に候間、御印の通相調脇書に退轉と書付置候樣御申渡、其通に調候由記置申候、是を以相考候へば、前々御算用場より相渡候帳面に、村御印の分書洩候は彌心得違と存候由仲左衛門申候

右仲左衛門物語の樣子承候故、咄候趣覺書に仕置候條、尤相違も多く可レ有レ之事

一　當地の事御察の通、此間風高にて毎度火事沙汰さわがしく御座候、當五日十一日度々大火の儀御聞可レ被レ成奉レ存候、五日の火事染井御屋敷も危程に候處、御別條無レ之目出度奉レ存候、西南風强く方々火飛候て行先ふさがり候故、大分燒死の人有レ之、不便千萬成儀に御座候、近所より早速かけ付候樣御新令有レ之候故大勢入込、火消の衆追々に馳加はり、小火の時は早速得物候得共、烈風に相成候ては夫も何の益も無レ之候、けつく大分人數急に詰かけ候故、足弱の者共ふみ倒され又はのき場を失ひ候て、是にも燒死候由申候、太平の御代には有間敷儀どもにて苦々敷奉レ存候、只日夜火を消し申候御詮議のみにて候、火事出來不レ申樣に仕度事にて候、第一風俗惡敷候故慓輕遊惰の人多く候故、火を警申事無レ之候、只今江戸中在家に雜り居申候遊女遊民等無レ限候、失火は皆これ等より出申事に候、風無レ之日は其儘消申候へ共、風高成日に出合候へば其儘大火に罷成、人の力にも及不レ申、萬人の害をなし申候、斯樣の御吟味第一有レ之度物に奉レ存候、速々風俗淳厚に成吹風枝をならさぬ御代に成候て、火消も入申間敷奉レ存候、斯樣の事世人承候ては、腐儒の迂談と申候て聞入申者も無レ之候、中々肉食の人信じ申儀にて無レ之候、無二是非一事に奉レ存候

一　此度金銀通用御新令諸國一統に被二仰出一候、其御地抔も御詮議にて諸士中も難儀之由承申候、左樣に可レ有レ之と奉レ存候、京都西國一統つぶれ申樣に申候、當地抔は金遣に候故當分夫程難儀は不レ仕

候得共、物價くるひ候て間違候もの有レ之候、金納の所々抔は急に一倍に成故ひしと難儀仕體に候、其上物價四倍に罷成候て、又は金子三四十匁替に変易不レ仕候ては、京都の賣人も續申間敷由申候、左候へば、當地も可レ爲二困窮一候、高野の金子五十萬兩程も有レ之候、此金子公儀へ御かり被レ成候由、當年中に被二召上一候由、此金子上方の町人どもかり候て、米はじめ諸物買置候て廻し申候、急に御取立被レ成候に付難儀仕候由申候、其外代官の預り金子抔も當年中御取立被レ成候、是以方々へかし置まはし申事候處、此度集申候に付江戸中金銀のかしかりも不自由に罷成、是にて困窮の者は指當り難儀仕候、高見の如く行々は古風に歸り申端にも可二相成一と存候、ちと急に御座候故諸人行當り難儀仕候、此度の御新令三年早く候由、先日御先代金銀吹替の事に預り申人被レ申候、いかゞ成行可レ申哉愚見に及儀にて無レ之候、私共御切米とくに請取申候、五十兩を新金貳拾兩にて相渡し申、上納金は五十兩をば新金にて上レ之申候、斯様の儀も不都合成事にも人心服いたし不レ申候

一　來秋朝鮮來聘いよ〳〵相極り、先日宗式部殿對馬守殿御舍弟に御座候、當地へ被レ參早速家督御禮相濟最早發足歸國と奉レ存候、來正二月時分國へ參着にて、早速朝鮮へ參候はゞ、朝鮮使者來夏あなたを可レ爲二發足一候、無レ左候ては當地へ秋參着の事成兼可レ申候、十一月の火事には宗殿屋敷殊の外危候處、のがれ候て一段の事に奉レ存候（十二月廿四日）

享保四年

一　今日增上寺へ御廟參拜候、誠に堂宇金玉をかゞやかしいと殊勝には見へ候へ共、戶外に番僧番つとめ守り居申外は人の獨もなく、折々參詣の人顏見へ申計にて候、寂寞として春とも見へぬ有樣にて候、御在世の時は、年初には群臣列座し、私ごとき賤しき者は遙に奉ㇾ拜事にて候ひつるに、斯樣に御あたり近く拜謁し奉り候事ひとへに追慕し奉り候、夫より服部越前守殿宅へ參候て賀儀を申置候、是は只今在所居申され候、門前車馬の跡無ㇾ之候て、禮をつとめ候人も、折しも私より外には見へ不ㇾ申候、そのかみはさしも權門に群集致し候事まのあたり見申事にて候、時世の移替候事よと心をいたましめ申候、其歸りに高階半次郎許へ立寄候て暫話申候、亭主酒抔すゝめ候て、古今の物語の序に、當代風俗の無下におとろへ候て、廉恥の風たへはて候事を申出し互に眉をひそめ申候、舊臘の事に候、久世殿御目付中を以の外譴責いたされ候事有ㇾ之候、有馬兵庫殿、加納遠江殿兩人勢盛にして君邊の柄をとられ候故、老中抔いづれも彼に媚申さるゝ事目ざましく候、水野殿抔日比人のおもひ入とは大に違ひ候て望を失ひ申候、夫故目付中下の陰事抔承り出し候て、執政の詮議をもひそかに彼兩人の衆迄達し候事共有ㇾ之候由、久世殿目付中を不ㇾ殘呼連候て、各役儀をばいかゞ心得候て勤被ㇾ申候哉、人の陰事を聞出し候て、此方へも不ㇾ被ㇾ申候て、詮議をも歷す御近臣へ達し候事は、一分の立身をのみ心懸候て、法式も武士の儀をも忘候事に候、只目あかし抔の所存にて勤被ㇾ申候と見へ申候、沙汰の限り成事にて候、此後斯樣の事候はゞ、手前より願候て身をはたし可ㇾ申候、手前など斯樣に勤候得共、

立身などに心懸申事はなく候由被レ申候へば、御目付中苦々敷儀の由にて候、是は御目付中計にても
なく、外へもあて申さるゝ體にて候、又兵庫より御用申談度事候間是へ御出候へと申まいり候、久世
殿被レ申候は、表向の御用は大切の事共にて、左様に立さわぎ候ては御用半着に成申候、御相談の事候
は是へ御越候へと被レ申候由、外の御老中は右兩人の被レ申事候へば、足を倒にして飛廻り被レ申候、其
中に居られ候て流石と申て人々感申候、今に大臣の體を失はぬ人は久世殿一人と申候、是に付ても過
し世の事思ひ出し申候、日光御社參の時にや、道中絹幕御法度の由に候處に絹幕見へ候とて、御老中
誰やらん御目付中を呼ばれ候て、急度可二申渡一由被レ申候へば、其人申候は、昨日迄申付候、今日より
申渡候事成不レ申候、たとひ申付候ても聞申間敷候由被レ申候へば、御老中氣色そんじ候ていかゞの儀
に候哉と被レ申候へば、其儀にて候、昨日迄絹幕打候者一人もなく候、今日御自分様御宿絹幕見へ候故
如レ斯にて候、然は私共何共難二申付一由申候由、此時分は御目付中も斯様にて候、御老中へも此方より
急度申候故諸事正敷候、近く斯様に候ひし者をいつの間に替り果候やとて、高階歎き候て申聞候

正月五日

一　御前代以來長崎ぬけ賣と申事堅御停止候處、とかく止み不レ申候、公儀より御定置候外は賣買不レ
被レ成筈に候へ共、唐人日本人共に利を要とし申に付、竊に船上にて夜中抔致二交易一候事に候、當御代
に至てぬけ買の張本大勢被レ捕候て少やみ申候、ぬけ買の者御法度背申に付必死罪に被レ行候處に、御

代如何の思召候哉、耳鼻をそぎ候て命を御ゆるしにて候、舊冬は別ての張本二人耳鼻をも構不レ申其儘御助にて候、其節奉行中申渡候趣は、死罪にも被レ行程の罪に候へ共、大勢同類を指申に付耳鼻もそぎ不レ申、其儘助可レ申旨被二仰出一候、是殊の外成御慈悲難レ有可レ奉レ存候、此御奉公に何とぞ先生(シャンスイ)金右衞門を己等三人申合候て捕出し候はゞ、一廉の御奉公に可二罷成一候、此度の御慈悲を難レ有奉レ存候て、此儀隨分心懸可レ申候旨申渡追放申候、然る處右三人して金右衞門を捕へ當地へ罷越申候、此金右衞門と申者第一の首魁にて、唐人の服着用いたし唐人と合體いたし、唐人の船中にて唐人に罷成、日本の案内いたし日本人を招集め、此者被レ捕不レ申内は、ぬけ買やみ申間敷と申候へば、此金右衞門と申者は唐へも渡り、唐人と申合候て海上を自由に廻り候故、中々難レ捕候、唐人の海賊どもの首魁をば先生と號申候、福州音にてシャンスイと唱申候、然處に此金右衞門を此度右三人捕へ出し候事諸人驚申候此三人金右衞門と一躰の者にて、此三人より外には金右衞門を捕へ申事成間敷と申儀、上によく御合點被レ遊候故、右三人死罪に御老中先として決斷有レ之候上を、特命にて御免しさて右の通被二仰渡一候へば、果して御手に入申事、御智惠の程御老中初諸役人も奉レ感由申候、箇樣の儀は御得物と申事に御座候、是類の事は察と申物にて可レ有レ之候、「人君貴レ明不レ貴レ察」と有レ之候、箇樣の盜賊を捕申類の儀には察にて能く御座候、向上之事にはいかが可レ有レ之候哉

二月七日賜二修遲齋一賢成之書

一　毛利飛驒守殿事御聞可レ被レ成と奉レ存候、不二存寄一御免被レ成隱居被二仰付一、子息を家督願候樣にと本家へ被二仰渡一候、元來御先代に民部殿より飛驒殿隱居いたさせ、子息へ家督被二仰付一候樣にと願にて候由、此度願の通被二仰出一と申物に候へ共、何とやらん本家不首尾の樣罷成申候、御先代此事井上殿始終本家よりの付託を請取申候て、戶澤殿へ御預けに罷成候由に候、井上殿も不首尾に候由申候、是は第一此度本家吉川殿申分により被二仰出一事と申候、吉川只今は幼少にて候、本家百姓と吉川百姓と申分致し候てむつかしく罷成り本家より吉川領知を所替爲レ致可レ申旨に候處、吉川家老合點不レ仕候て、互に及二異論一餘程六ヶ敷候由申候、本家無理と申候、此度俄に御免は本家にあて被レ成たる故と申候、いかゞ左樣の儀候や、民部殿隱居願に候由、是も何とも不レ被二仰出一候て不二埒明一候由申候、是に付候ては、淺野又吉殿家督藝州侯より御願可レ被レ成などと申候

一　二三日以前に小普請支配役と申物を新規に被二仰付一候、只今迄小普請は御留守居中の支配にて候、御留守居の手を放し可レ申事に候哉、いまだ委細の事は不レ承候、此儀小普請支配役と申物、寄合番頭の中十人被二仰付一候、何卒思召も有レ之候ての事と奉レ存候、藝侯へ出入の瀧川讃岐守なども右十人の内にて候

一　或人の物語にて承候、馬を馭するの道にて、天下を治る道を御得心被レ成候由申候處、其大儒申候は馬の儀は不レ存候へ共、御尤成御事と申上候、其時汝馬をしらずして尤とは難二心得一御とがめ候へ

ば、迷惑して思召承度奉レ存旨重て申上候處、されば馬といふ物やわらかに乗ても不レ參候、又きつく責候ても參り不レ申候、其間に乗樣有レ之事に候由に候へば、大儒稽首して古より聖々相傳候分如レ此にて候、中庸の御覺悟の事名譽に奉レ存候旨しきりに奉レ感候由、是は寛猛互に用候て一偏に無レ之と申儀にて、中庸と申にて可レ有レ之候、去とも寛猛を互に用ると申計りにては參間敷候、馬さへ稽古無レ之候ては不レ參候、況民を治る事古の聖賢の法を學び不レ申候て、寛猛兩用と計にては參るべき事にて無レ之候、されば箇樣の處よき機會にて候間、政は寛猛互に用る事御尤成御心付にて候、但寛猛を施し申處に當否可レ有レ之候、其處は聖賢の道を學び不レ申候て、一分の智にて行ひ候ては過失有レ之物に御座候抔申開度事に御座候、夫を中庸を被レ得候事、聖々相傳の意に御叶被レ成候抔申儀いかゞの儀にや、彌以驕慢の意を長し申にて可レ有レ之候、阿世曲學と可レ申候、惣て比譬と申物一通りの事にて候、右のたとへも爲レ政寛猛の事計にて候、是にて聖々相傳候旨と申候て、禮樂等の事は如何無益の事にて候哉、人は萬物之靈にて候、馬を馭し候道にて埒明申儀にては有レ之間敷候、去とも馬を馭し候に付此品に御氣付の事、是は一理有レ之事庸主の可レ及處には無レ之候、其美を獎順して大道へ導申事無レ之候て、却て阿諛して驕を長し候樣致し候事無ニ是非一事と奉レ存候、白石と比日此事申候て嗟嘆仕候と、今奥村殿青地殿へも御物語被レ成、此紙面御火中可レ被レ成候（六月廿九日　賜ニ勉善一書）

一　先日ちよと申進候、高倉屋敷にて講談の事いまだ相極り不レ申候、木下家門人計にて講じ候樣に

被二仰渡一候由、石川近江守殿平三郎迄被二仰渡一候、上には平之丞門下大分有レ之樣に内々被二聞召一たると奉レ存候、御直參には老夫服部藤九郎二人計にて、陪臣にも只今故老皆歸泉候故誰も無レ之候、雨森抔類少々候へ共、是も在國の事おほく、當地に在合候は兒島平兵衞、其外紀伊國殿に岡田文藏兩人より外無レ之候、其故平三初老夫藤九郎右の兩人合候て五人有レ之候、五人にて毎日ならば式番に勤申歟、隔日に相勤候樣に可レ仕旨平三より近江守殿迄被二申上一候、新井氏は寄合組にて儒官にて無レ之候へども淺間敷候、先日高倉屋敷も見分に參申殊の外狹く御座候、上段の間を除候て玄關共三間有レ之候、二十疊程の間にて候、林家聖堂の講話は御直參を陪臣町人等と口を違へ候故、彌聽衆すくなく候間、同日にいたし席を違へ候樣致し可レ然旨相談候て其通申上候、昔は大學、中庸は平三初日、次に論語老夫、次に孟子藤九郎、次に近思錄文藏、次に小學平兵衞と内談相定申候、老夫藤九郎へはいまだ何共被二仰渡一も無レ之候、いかさま相極り候はゞ兩人へも被二仰渡一可レ有レ之と奉レ存候、平三より申談候計にては濟ぬ事と存候、兒島、岡田へも御老中方より御主人へ被二仰渡一可レ有レ之儀と存候、右五人の事幷講書等先日近江守殿迄平三より申上置候得共、未何の儀も無レ之候、此日朝鮮人の事にて他事は延引と見へ申候、朝鮮人發足候はゞ可レ被二仰出一存候、聖堂へ罷出林家の衆へ加り講じ候へと有レ之候ても、上意に候へば難レ辭事に候、此度ヶ樣に此方學者別式に被レ仰付レ候事一段の儀と奉レ存候、何卒聽衆も不レ絕有レ之候て、學風おこり候へば能候、中々左樣には有間敷と存候、聖堂も只今は彌零落

室谷足音位と申候

一　先日林家の高弟桂山三郎左衞門老夫抔同役にて候、詩材有レ之候、詩は林家にならひ申者は無レ之候、外にも餘り澤山には無レ之程の詩人にて候、其外經學等も好み申由兼て承申候、先日御城にて逢候へば拙者へ尋可レ申旨申候、大學を講じ申時分、新疏の賜を大分得申候故、始て承り合點不レ參候故、篤と承候へば、新疏を下見の時分見申候て益を得申との事にて候、天下の寶にて候、何卒中庸も出來候樣にと申候、中々只今時分林家の門下など、他門の學者にケ樣の事不レ申候處、右桂山氏奇特成事と感じ入申候、被レ尋候はゞ語り可レ申候、夫にても學力も相知れ可レ申と存候、此三郎左衞門、梁田才右衞門と詩友にて別て語申候、拙者才右衞門を送り申序をも見申旨被レ申候、此日才右衞門文柄と申文章を著し越申候由三郎左衞門物語にて候、偖如何樣の文にて候哉と尋候へば、當代文章の權柄を持申名儒を悉く擧候て評を致し申候、老夫事は鳩巢先生は醇乎醇者と書候由桂山氏物語にて候、不レ覺失笑致し、又は恥かしくも有レ之候、才右衞門口きゝにて候、此病いまだ依レ舊候と存候

一　朝鮮人前月廿七日に當地へ到着、當月朔日に登城直に御三家御相伴にて御饗應相濟申候、五日に曲馬御上覽、來る十一日は御暇被レ下候由申候、十五日十六日時分發足候て三使へ日外姓名申進候、學士は申維翰字は周伯、靑泉と號候由、張書記名は應斗、菊溪と號し候、成書記名は夢良、長嘯軒と號し候、姜書記名は柏字は子靑、耕牧子と號申候由、此日斯樣に承り候、追て慥に相知れ候はば可レ申

入一候、其内わきよりも段々相聞へ可ㇾ申候、偖學士初扨々文辭劣弱と見へ申候、正徳中に參候人より
各別下り申候、林家の學者一兩度も筆談贈答有ㇾ之由、其外は此度殊の外すくなく候、對州よりの制し
申候と見へ申候、中學士など遲吟にて候故、前の如く大勢筆談候ては難ㇾ儀可ㇾ爲との事と見へ申候、大
坂にて唐金喜右衛門贈答の詩も新井氏迄指越見せ申候、比日當地にて川口庄三郎筆談に罷出、贈答の
詩文見せ申候、庄三郎殊の外稱美の由東五郎物語にて候、東五郎も脇にて見申候、庄三郎敏捷にて朝
鮮人も感申候由、此度日本へ參候て贈答の第一たるべきと東五郎は被ㇾ申候、毎日參候と見へ申候、只
今我等など門人と申候由、我等など當年筆談に出不ㇾ申儀を不審申候由東五郎被ㇾ申候、觀瀾死をも承
り候て驚き申候由、あなたにても李東郭去年七月相果申候にて、三宅は八月にて候、一月違にて不思
儀に存候、當地にても先年筆談の一人宛も同年に歸泉にて候、感慨此事と存候、東郭は六十五にて候
由、先年我等年詮議致、其時拙者より三四年程兄と承候、左候へば六十五の筈にて候、夢の樣に被ㇾ存
候、東郭は能書にて候、小谷殿一卷得被ㇾ申候、定て其許にて見可ㇾ被ㇾ申候、見事に御座候、此度の學
士は手跡能無ㇾ之候、第一學術何とも難二心得一候、川口生への挨拶の文章に三世宿縁と申候、是にて御
推察可ㇾ有候、勿論朝鮮にて俗語に三世宿縁と申習の事故書中にて可ㇾ有ㇾ之候へ共、學士抔と申もの外
國の人へ申候文に斯樣の事書申候事、學術も量り知られ申候、其外詩なども一句も面白からず候、老
夫文章を寫し候て呉候へと川口生へ申候由、詩文ともに舊作を得て參度旨申由に候、又菱柏の唐金書

右衛門への文章に、文章是萬古之一器物と申事有レ之候、日域見二儒臣一申句有レ之候、何の事に候哉、儒臣は唐金事と見へ申候、日域に見へ申事一圓通じ不レ申事と存候、是にて御察可レ有レ候（十月九日與二大地昌言一書中）

享保五年

一　當地何の替御沙汰も不レ承候、比日承候へば、廿日御佛殿（今年三月廿七日燒失）御造作、大名衆御手傳不レ被二仰付一、公儀より被二仰付一候、三萬兩にて仕廻候樣に可レ仕旨被二仰出一候由申候、事實に候へば乍レ恐御尤成御儀と奉レ存候、總て御無欲成被レ遊方とも彼是少事にも承申候、今日迄は御好色御遊興も曾て無レ之候、先日も去人被レ申候は、唐太宗よりは賢君と存候、太宗も閨門の中はおさまり不レ申候、當上樣の御儀は、椒房の內寂寞いたしたる事古今無レ之と被レ申候、成程其通に私ども奉レ存候、偖又諸役人共に御先代より兎角賄賂止不レ申處に、當御代ひしと無レ之候、御老中御近習衆權威の事すきと不レ承候、是等近代不レ承儀に奉レ存候、比日も萩原源左衛門と申候、御勘定吟味役にて候處、有章院樣御代、井上殿抔不相口にて二丸御留守居被二仰付一候、是は同格の役柄と申內、結句左遷の方にて御座候、然る處に先日不二存寄一御前へ被レ爲レ召候て、御直に段々勤方の儀被二仰含一、元の吟味役に歸役被二仰付一候、諸役人不二存寄一事とて驚申候、此人文昭院樣御代に御擧用被レ成、新井筑後守と別ての人にて候故、思召も無數候樣に諸人も申候處に、右之通にて候、兎角上には公成思召と見へ申候、下の了簡とは格別成事に奉レ存候、何卒段々御法令も出來候て、此後御旗本の風俗改り候樣に致度存候、近比は御威風にを

されて少は改り候へ共、華麗を好み遊興に耽り申事はやみ不㆑申、上に是程御儉素且又遊興の事すきと無㆑之候へ共、曾て合點不㆑仕候、兎角急度御法令出不㆑申候ては、埒明不㆑申儀に御座候、（五月十四日書中）

尚以老夫など高倉屋敷へ毎度罷出申候、聽衆も不㆑絶三四十程宛有㆑之候、是も承候處に、御書院、御小性組などの中に出申度と申人もおほく有㆑之候得共、相番の中過半は嫌にて、自然出申候へば隔申候故、夫を恐候て出不㆑申由に候、風俗惡敷候故と奉㆑存候、斯樣の儀も勝手次第に罷出可㆑承旨被㆓仰渡㆒にて候故罷出不㆑申候、急度可㆓罷出㆒と候はゞよく可㆑有㆑之と申候、中々學問などはやり可㆑申勢には見へ不㆑申候、以上

一　當地時事替儀も無㆑之中、久世大和守殿大病にて候、たとひ本復候とも最早御老中は御勤被㆑成申間敷と申候、京へ松平伊豆守殿よびに參申候、御老中に成候哉と沙汰にて候、戶田肥前守殿御書院番頭より比日御側衆に成申候、是は青山備前守殿替りにて候、千石御加增にて番頭より御側へ參る事先例無㆑之事にて候、肥前守殿手柄と申候、殊の外實體成人の由申候、河村彌兵衛と申は河村平太夫跡にて、久敷小普請にて罷在候處、比日不㆓存寄㆒御代官に被㆓仰付㆒候、小普請の者役儀被㆓仰付㆒候事珍敷由申候、又小普請の內猪股何某と申者貳百位の者、父子兩人外に大番壹人平生不行狀至極之由、御聞被㆑遊候由にて御改易被㆓仰付㆒候、是等皆諸人存よらぬ事にて御座候　（六月十一日書中）

久世大和守殿死去の事

六月廿七日夜大和守殿於深川下屋敷死去にて御座候、依て來月朔日迄鳴物停止と申儀に御座候、御尤成御儀に奉存候、此人當代にては拔群に相見へ、御老中壹人の樣に申候處、おしき儀と諸人申儀に御座候、享年も六十一に御成候由、未盛にも候處國家の不幸と奉存候、其故上にも殊の外御おしみ被遊體と相聞へ申候、前日病氣散々にて廿日餘絕食にて麪類など少し給られ御續き候處に、廿九日おして登城諸人承驚申候、上への御暇乞と被存被罷出體に御座候、御前へ被罷出良久御閑談の由、何を被申上候哉承人は無之、定て御用の儀と奉存候、夫より退出の砌有馬兵庫殿を（御側衆紀州より被召連候）尋被申候へば、有合不被申候、逢申度由奥へ被申達候得ば、其儘有馬被罷出候、段々上の御懇意難有被存候趣一禮有之、其以後御自分に懸御目候事御暇乞共存候、偖常々御自身御覺悟の處承度事有之候、御奉公と申物の役儀と勤方二ッ有之物に候、いかゞ其差別御意得候て御勤被成候哉、御所存承度由被申候、有馬殿何とも急に御返答難申上候、思案仕見可申旨被申候へば、最早ふたゝび逢被申候意得にて無之候故、其儘被申候は、總て能合點致したる事は早速出申物にて候、指當り御了簡無之と御申候へば、此事御合點無之と存候、御奉公の筋と役儀筋とは違申事にて候、御奉公の筋と申物は、何にても上の御爲に存寄候事は、一分の覺悟一ぱいに勤申事にて候得共、役儀の筋は格別の物にて候、役儀の筋は老中は老中の役儀、若年寄は若年寄の役儀、御近習の役儀少も亂申儀は不罷成候、御爲の儀と申にても夫々の役儀有之儀に候へば、其格違候ては天下之害にて候、其處を能御

了簡候て御勤候事簡要に候、最早御暇乞に候故所存申入候由被レ申候、偖翌晦日増上寺へ御名代被二仰付一樣にと願被レ申候、病氣にて成申間敷由同事に被レ申候へども、達て願被レ申候て翌日増上寺へ被レ參候て、直に引籠被レ申候、呼吸も途中にて度々絶申由に御座候、是は有章院樣御代に御老中に被二仰付一候に付、御暇乞御禮可二申上一爲と聞へ申候、扨死後葬送の式迄すきと被二申置一、家老壹人被二申付一五百石加増、其外家來恩賞段々被二申付一、府庫の中絹帛の類すきと末々まで施し被レ申候、御子息隱岐守殿も亂舞方を好被レ申候に付、少は不レ苦候、長じ不レ申候樣と被二申置一候由、其外遺言も有レ之由に候へども、委細は不レ存候、晝夜見廻衆門前市のごとくに候、夫もいやに被レ存候哉、當月廿日北深川下屋敷へ引込被レ申候、中々絶食身を動かし申事も難儀の體候處諸人驚き申候、川船幕など打候てりつば成事にて被レ參候、御嫡子隱岐守殿は上屋敷に罷在、御城邊にて候間火の用心等急度相守り候樣に可二申付一候、深川へ見廻りに參り申間敷候、參候ても逢不レ申由被二申渡一候、次男ばかり看病の由にて、其外一類中見廻被レ申候ても逢不レ被レ申候、御役儀の斷も病中度々申上候得共、上より御赦し無レ之候、上屋敷に被レ居候内も度々上使にて御肴御菓子など被レ下候、前廉に御内意有レ之上使御挨拶等には隱岐守罷出候て、大和守にはすきと構ひ申間敷候、若上使に對顏候はゞ却て思召に叶不レ申候由嚀く被二仰付一候故、御請は隱岐守殿被二申上一候由に候、去共上使には顏對致度由にて被二罷出一候由に候、深川へ被レ參候てもひたと上使も有レ之、何卒少しも口にあひ申物にて食氣も出來候樣にと思召候哉、色々賜物被二下置一

候、必上意と申聞敷由、被二仰出一候由上意と申候はゞ頂戴致し候とて、苦勞御かけ被レ成候事御用捨と聞へ申候、上よりの御待遇も無二殘處一御樣子にて、其身も死に至り申迄被二申出一候て落涙に及被レ申由に候、寺は上野近邊に有レ之由に候へども、御亡父の墓同所に葬候樣にと被二申置一候て、宗旨も違候へども法華寺へ被レ參候、長明寺とやらん承り申候、丸山邊にて候故、此人壹人に諸籏本も目を付候て賴母敷存候處、扨々殘念成事と江戶中一統に火も消へ申樣に申候、是は手柄にて候、息災にて被レ勤被レ申時分の事にて候、堀隱岐守豆州下田の御代官被二仰付一候、先例船にて參申候、然處に隱岐守舟不得手に候間、陸地を參り申度由大和守殿迄願申候、是は陸にて參り候へば延申に付、船にて先官罷下り申候所を陸を參り度と申事願立不レ申候ては、難レ成御格と聞へ申候、其段大和守殿聞被レ申候て、成程不レ苦候事と存候、同役中へも可二申談一候間左樣に心得可レ申旨被レ申候處、直に有馬に逢候て右の事大和守へ願申上候、何卒成候樣に仕度旨隱岐守被レ申候へば、有馬聞被レ申候て、夫は少も苦しからぬ儀と存候、窺可レ申旨にて其儘窺被レ申候處、其通に被二仰出一候、其段又大和守殿へ隱岐守被レ申候處に、大和守殿申され候は、先以早速埒明一段の事に存候、向後御役儀の事兵庫を以て直に御伺可レ有レ之候、手前など年寄候て御用の事早速埒明兼申候由被レ申候故、殊の外迷惑致し候て兵庫殿を以願申にては神八幡無レ之候、只御自分樣迄願置申と物語仕候處、早速御伺候て右の通に候、近頃迷惑仕旨斷にて候へ共、聞入不レ被レ申候て其儘座を立被レ申候故、可レ致樣無レ之候て、一類中大和守殿へ出入の方へ被レ參候

て、右の御詫言申上度旨隱岐守被レ申候得共、其人請合不レ申由、併其翌日か御登城にて老中列座の處へ兵庫殿を呼出し被レ申候て、大和守殿被レ申候は、堀隱岐守陸にて下田へ參度旨手前迄願置申候、然處御自分より被二申上一相濟申旨隱岐守爲二申聞一承候、手前共より奉レ伺候て下へも申渡候事を、中より御自分に被二申渡一候は如何の御了簡にて候哉、急度承屆度由被レ申候處、有馬殊の外難儀兎角の返答も無レ之候、水野和泉守殿傍より兵庫殿不出來至極の事に候、大和守殿只今仰の通り、各より此方の勤方を指越候て、上へも伺下へも被二申渡一候事法外の仕方と可レ申候、急度あやまり申旨只々被レ申候へと被レ申候得ば、兵庫も兎角可レ申樣も無レ之、意得違候事あやまり入申旨被レ申候て事濟申由に候、右故後に兵庫御奉公の筋と役儀の筋と被レ申候儀も、此事などを以被二申置一と見へ申候、只々小普請支配新規に被二仰付一候、其中に石川兵庫と申人の支配に何某と申人、常憲院樣御時分役者より被二召出一只今三百俵被レ下候て、小普請にて候、此者實子無レ之に付養子願兵庫迄申入候、常憲院樣以來被二召出一候者は實子有レ之候へば跡目相違無レ之、實子無レ之候へば、跡御立不レ被レ成候樣に候由、慥に被二仰渡一は無レ之候得共、常憲院樣以來の奉公衆は養子願すきと取次不レ被レ申候、去ども其格慥に被二仰出一無レ之儀に候處、頭衆も殊の外處置にしがたく由申事に御座候、右何某が願書附を兵庫持參致し井上殿へ申上候處に、是者成不レ申筋に候由にて返し被レ申候、一度にて指止申事無味に覺候ゆへ、また持參候て何卒奉レ願旨被二申上一候へば、先日申通に候由にて又返し被レ申候、其上を又持參致し候て、兩度御返しの上を申上

候事は不調法に候得共、此度は私願にて候、何卒養子被二仰付一候樣御了簡も被レ遊被レ下候へと申候へば、河內守殿以の外腹立、再三成不レ申旨申渡候處に不合點成由にて、最早取付可レ申樣も無レ之候故、右の者不レ及二是非一罷歸り右何某を呼に被レ遣候て、三度迄何卒と存候へ共不レ成候由被二申渡一候へば、右の者殊の外せき候て、偖々無二是非一仕合にて候、私事常憲院樣御時分被二召出一候節、達て御斷申上候處、子孫迄相續可レ被二仰付一由にて候故無二是非一御請申上候、然處に只今跡目御絕し被レ成との儀、御法の事に候へば不レ及二是非一候とて座を起ち申樣子、顏色慥に自滅も可レ仕躰に兵庫見請被レ申候故、いつも支配中被レ參候時分は送り立不レ申候へども、わざと送り候て又呼返し申候へば、右の者不二存寄一事にて驚き候て立歸申候、其時近く寄候て兵庫被レ申候は、御自分樣子殊の外せき被レ申躰に見へ申候、尤至極の事にて候、去乍此度は何共可レ致樣無レ之候、然共此儀は手前一生心に懸罷在候、又時節も可レ有レ之候神八幡捨置は不レ申候間賴母敷存候て時節を待可レ申候、若萬一の事抔候へば、即時に斷絕の事に候、必短慮有間敷由被レ申候へば、右の者落淚に及び罷歸り候、直に養子の親の處へ立寄候て、右の段々申聞せられ不レ及二是非一事と可レ存候、最早手前存生無益の事に候間罷歸自害仕候、暇乞に候間酒出し候へと酒を乞申候處、亭主成程承屆申候とて酒を出し盃事致し、其後近く寄候ていかゞ思案にて自害いたし候哉承度被レ申候へば、別に仔細は無レ之候、足腰も立不レ申時分養子も致候て助り可レ申候との事にて候、其儀不レ成御法にて候へば、左樣に見苦敷罷成不レ申內に自害して埒明可レ申事にて候、亭主承

り候て成程聞へ申候、去共不忠不孝と可㆑申候、其仔細は子孫相續可㆑被㆓仰付㆒との上意も重く、親の名跡も重き事に候、然ば此上は何卒時節をも相待候て、上の御言葉も立、名跡も絶不㆑申儀に隨分心を盡し申筈にて候、然る處に支配衆も時節も可㆑有㆑之候間相待候へと被㆑申候上を自害いたし、端的に跡をつぶし申儀無分別と可㆑申由委細爲㆓申聞㆒候へば、右の者合點いたし候て、手前せき候てあやまり申候、自害存とまり可㆑申候、存とまると申候ては最早氣遣致間敷由申候て罷歸候、偖て右の被㆓召出㆒候時分の首尾此度再三願候へ共、井上殿取上無㆑之事委細紙面調候て久世殿へ持參、用人に逢候て何の何某と申者にて候、終に御玄關へも罷越不㆑申處に、奉㆑願候事有㆑之參候由にて右の書付渡候處、用人一覽致し成程承置申候、去共御支配兵庫殿へ被㆓仰入㆒、兵庫殿より此方へ被㆑仰候樣に可㆑被㆑成由申候て書附返し候へば、右の者申候は、成程御尤に存候、其段はとくに私も了簡いたし候へども、兵庫殿三度迄井上殿へ被㆓申入㆒不㆓罷成㆒事に相極り候、只今其上を兵庫へ申候ては、中々請取被㆑申事にて無㆑之候、是は私無分別にて大和守殿御人柄を見請候て驅込同事の存念にて候間、兎角被㆑入㆓御覽㆒候へば念願相叶申候、其上不㆓相成㆒事は不㆑及㆓是非㆒候由申候處、用人承屆申由申候て、早速大和守殿へ參候て爲㆑見申候、一兩日過候て、右の者又大和守殿へ參り候て、右の用人に逢候て樣子尋候へば、早速大和守殿へ爲㆑見申候、大和守申渡候は、定めて重て御出候て樣子御尋可㆑有㆑之候間、大和守請取候由申渡候と可㆑申旨に候間、左樣御心得候へと用人申候、右の者偖々本望先相叶申候、此儀大和守殿へ御耳に立置度と

存候處、憐に書附御請取被レ成との御一言にて先致ニ安堵一候由申候て罷歸り申候、大和守殿は此儀始終不同心にて候へ共、井上殿第一被ニ申上一候て新座者の養子相叶不レ申候、常憲院樣御時分被ニ召出一候人人には役者多く候故、第一是を御沙汰被レ成度との儀より事起り、實子無レ之者斷絕致し候へば次第に減じ申積りと聞へ申候、乍レ去是にて斷絕の者多く候ては、妻子流浪不便成事に存候、且又只今存生の風を敗り候てよろしからぬ儀と存候、夫故大和守殿は右の願書附など、其外にも請込置被レ申、時節を以相續候樣に猶願可レ申と被レ存候體に御座候、其故此度の死去さやうの者どもは、別て力を落し申候

備後國甲奴(カツヌ)郡有田村百姓名主甚三郎、庄屋一郎右衞門、並孝子又右衞門事

備後に御貢料六拾餘ヶ村有レ之候、風俗桀黠成と見へ、御代官の非を訴へ、每度公事をいたし申候、其上御年貢をも每度踈略にいたし候て難レ治處の由にて候、然處に右六十村の中に有田村一村ばかり終に公事不ニ申出一、每歲御年貢をも隨分理直に致申候、只今迄不思儀の事に申候へ共、いかゞの仔細と申儀誰申人も無レ之候、先日萩原源左衞門御勘定御吟味役に歸役被ニ仰付一候以後、一夕逢候て直に承申候、上の御盛德の事奉レ感申候、歸役被ニ仰付一三四度御前へ被ニ召出一、直に勤方の儀抔委細被ニ仰渡一一々驚申儀共候へ共、是は他言不レ成事にて候、其外同役中へ一統に被ニ仰出一儀は別て秘し申儀にても無レ之、其上外樣の衆へも爲レ聞置申度事も有レ之候、先日御直に御意被レ成候は、御代を御取被レ成候て以後、惡の儀のみ御耳に立、終に孝子又は志正しき者有レ之と申儀、一度も御耳に立不レ申候、是は何も

法度を第一にいたし法に背き申者有レ之候へば、其後致二吟味一申上候、行よろしき者などは法にかゝら
ぬ儀に候故、承候ても耳にとめ不レ申物と被二思召一候、上の思召は左樣にて無レ之、惡人吟味よりはよ
き人を御吟味被レ成度候いづれも役儀品もおほく候へども、向後は郡國民どもの中人柄よき者の儀隨
分心懸け承出し、御恩賞行はれ候樣に可レ仕由被二仰渡一候故、夫より吟味致し候へば、右有田村の事出
申候、有田村名主甚三郎と申者常に申候は、御代官惡敷候ても、公儀へ對し民として疎略の儀仕筈に
て無レ之候、手前作り申高は勿論の儀、此一ヶ村少にても年貢延引仕候歟、又は上へ對し慮外成所存候
はゞ手前どこまでも申出候て赦し申間敷候由申候、近頃も右六十村の名主共申合、上へ訴申儀有レ之候
へ共有田村計同心不レ仕故、殘の村も難儀に付、右名主共甚三郎宅へ罷越惣樣同心致し候事を、此村一
ヶ所同心不レ致候事不屆千萬の事也、此村も百姓中同心の者も候へ共、其方申渡故色々にて同心無レ之
候間、其方同心無レ之候はゞ、惣樣の者推込候て意趣を致し可レ申由申候、甚三郎自若として罷在候、
多勢に無勢に候へば如何樣にも可レ仕候、いきの有內は同心仕事は不二罷成一由申候、其後にも六十人計
甚三郎宅外へ罷越、是へ出候へと惡口いたし候へ共、甚三郎取合不レ申外へ罷出、右相手には不二罷成一
候間、是へおし込候て手前一人の儀に候間如何樣共致し候へとて、其後は一言も不レ申候、さすが殺申
儀も不二罷成一候て、思ひのまゝに亂暴いたし罷歸り候由、其手下の百姓に又右衛門と申者、繼母に至
て孝の者にて候、わづか高六七石程の作り百姓に候處、朝夕母には美膳を備へ、三百六十日朝夕自身

に配膳致し、其食の餘有之候へば、母に請候て母前にて頂戴いたし、さて妻子にもたべさせ申候、近鄉の百姓共常に親に孝をいたさば、有田村の又右衛門を手本に致せと申習候由、此度委細言上の由、定て御恩賞可被行と奉存候、珍敷儀に奉存候、右又右衛門至孝の感に候哉、每度隣の田迄は旱損有之候へ共、わづか五六石の高の田地終に旱損無之候由、旱損多き處と相見へ申候、右二件感心に存候故、御慰みに申進候、（六月廿八日賜書）

一　廿日御佛殿御建立不被遊、萬年後御自身にも御牌銘計り被殘置、御靈屋は被遊間敷御覺悟に候、然上は上野增上寺にては各御一廟にて被指置由、上野御門主へは戶田山城守殿を以被仰進候、增上寺僧正は御城へ被爲召候て被仰渡候、其故廿日御位牌は八日の御佛殿へ被收置候、此度御法事にも例年は上野にて萬部被仰付候へども、增上寺にては千部被仰付候處、增上寺千部可被指止由被仰出候、此後上野の萬部も有之間敷由申候、此被仰出の前に上野慈眼大師の堂頹破に付、修復の儀御門主より御願に候へば、何れも明申候堂へ收置可申旨被仰出候由、御門主より重て御願も有之樣に申候處、此度御佛殿の事被仰出候に付、沙汰にも及不申候、諸寺とも向後堂塔建立候はば、燒失前に半分に可仕旨御制禁にて候故寺に衰微の由申候、乍恐御尤成御儀に奉存候間、間部越前守殿も死去忌明候て、此間家督無相違下總守殿へ被仰付候、村上は被召上越前の鯖江へ所替にて候、御家中は難儀可仕候へ共、無相違被仰付難有仕合の由申候、頃日被仰出末々

同心體の者迄も、御政務の事言上の事有ㇾ之候はゞ可二申上一候、御奉公と可ㇾ被二思召一旨に御座候由嘗成事と申候、然共私へは曾て御觸も無二之候、上の思召は右の通に候得共、中にて滯申と見へ申候、暫く滯共上に右の思召にさへ候はゞ、追て相知れ可ㇾ申と奉ㇾ存候、斯樣の儀終に不ㇾ承候儀と奉ㇾ存候、何卒風俗も改り、末々迄御仁澤を蒙り候樣にと奉ㇾ願候儀に御座候、此日又覚平太夫と申人、只今迄御目付にて五百石取被ㇾ申候、此度御勘定頭被二仰付一（勘定頭は寺社奉行、町奉行、三奉行と申候て江戸にてはおもき御役儀と申候）此人平生至極朴實成人にて材智の沙汰は無ㇾ之候、諸人不二存寄一事と申候、五百石の御加増にて千石に成申候、兎角被ㇾ用人も質直成人を御好の體に御座候、是も結搆成事に奉ㇾ存候

小瀨復庵書、新井殿へ申候、上野の事、其砌大猷院樣御草創の地に候へば、外の御廟はたとひ外へ御遷座被ㇾ成候共、大か小か大猷院樣御廟は別に可ㇾ有ㇾ之候、清水にて申候へば、坂上田村丸にて候、先此上野へ被二仰渡一有ㇾ之、則日光宮樣より被二仰進一候は御再興被ㇾ成間敷旨當時御指止の儀御尤候、惣て上野、日光、叡山等莫大の寺領被二下置一候、是を以年々造營料被二指除一候はゞ、近年の内小分にも御廟御自力を以何卒可ㇾ被ㇾ成候、公儀より御手傳曾て入不ㇾ申樣に可ㇾ被二仰付一由御答の由、近比御殊勝成御事に候、夫故か燒殘候二天門取拂申筈に候處、先其分に成有ㇾ之候、是は宮樣御願の筋有ㇾ之故かとも申候

一　劣甥小池源太左衞門水戸史館に罷成候由御聞被ㇾ成候、此前藤田内藏亮殿系譜も彼史館へ御賴相知

申候間、幸源太左衞門へ申候て佐々木氏前代の事跡、又は貴家本並本田氏の儀共委細御聞被レ成度御紙上奉レ得二其意一候、先頃私も氣付候て、佐々木氏先年吟味候て相知不レ申儀ども承に遣度儀と存候へ共、多事取紛其上只今老衰記憶一圓無レ之、先年佐々木系譜の內相知不レ申候處、何にてもすきと失念仕候、只今史館西山樣時分とは各別に罷成、第一其時分の宿儒すきと死果申候、只今は當代風の男共にて候日夜酒色に耽り、史館の職も修り不レ申體に御座候、中々藤田殿系譜の事御尋被レ成候時分とは違申候、私甥を先といたし記錄等の事不案內御座候、こゝに壹人有レ之候安積覺兵衞と申候は、西山樣時分より史館の總裁にて、只今に殘申候者此人計にて、隨分史學に博明、其上記錄等の事に心入深き人に御座候、夫故如レ此覺候て居申候、此人老夫を一兩年以前より信向致し不レ絕書通致申候、此度讃岐守殿を以て西山公へ被二仰付一候大日本史出來候由、上聞に達候間、可レ致二獻上一旨被二仰出一、彼御家急に吟味被二仰付一、晝夜劣甥ども此儀に取懸り申候、夫に付本紀列傳はすきと出來候へ共、論贊いまだ加り不レ申に付、近き比御逝去被レ成候中納言樣謚を肅公と申候、西山樣をば義公と申候、肅公より右安積氏へ論贊被二仰付一、段々論撰いたし懸り申內、急に獻上の筈に罷成候故、晝夜取懸り論贊著し申候、每傳に論贊を加候故數百篇に及び申候、私事など文辭の事多年意を用申候樣に安積承及候て、去々年か當地へ一寸罷越候時分、知人に成候故、いやとも難レ申請合申候へば、其後水戶より段々指越候て老夫駁語を請申候殊の外得レ益候由申候て悅び申候、私もふと請合候て殊の外心勞致し申候、夫故私方より賴候事

不精には不㆑仕筈に御座候、この者方へ佐々木家事など尋に遣可㆑申候、十に一ッも知れ申儀に候へば珍重に奉㆑存候、かさねて佐々木家譜の内富士川合戰の事などその外知不㆑申儀、御書き出し候て被㆑遣候樣兵庫殿へ可㆑被㆑仰候、ふじ川の事もいつ時分の事にて候哉覺え不㆑申候、すきと只今失念致し申し候、その外叡山にて自殺の事など如何の儀に候哉知不㆑申かと覺え申候、すべて是等の儀ども委細に御書拔可㆑被㆑遣候へば問に可㆑遣候、その時分靑地、本多兩家の儀も御不審の事ども一ッ御書に被㆑成可㆑被㆑遣候、隨分精力ある人にてすこしも疎略は無㆑之人にて候間、私方より賴遣申候はば成次第は申越にて可㆑有㆑之と奉㆑存候、安積只今はあなた御家にて小性頭と申候て、おとなしき役儀勤め、史館のことは構ひ不㆑申候へども、博學宿儒にて候故、肅公より右論賛被㆓仰付㆒候由に御座候、論賛も當夏迄に不㆑殘仕廻申候て淸書も相濟申候、追付水戶樣より獻上被㆑成筈にて候、三百卷計有㆑之候と相見申候、神武より南朝滅申迄にて御座候、義公元來日本史御編集の御本意、大友皇子を帝統の數に入れ、神功皇后は帝統の內より差除、是は皇后の傳に被㆑入南朝を正統に致し、南朝滅候て以後より北朝を御用被㆑成候、是等名分を正し、千古の誤を御改可㆑被㆑成との思召にて候、先は御尤成事に候、然ば此度の日本史日本の正史と奉㆑存候、文辭はいかが餘り能は有間敷候、大分の儀に候故、史館の學者ども大勢にて請取著候ては、覺兵衞並の總裁とも筆削いたし相究申にて御座候、文辭の善惡はともかくも、事跡は義公威勢にて、日本の寺社初め公家武家の記錄共、多年御搜索御編集の事に候へば、隨分慥成

事と聞へ申候、本紀と列傳迄にて世家は無レ之候、帝紀の外は悉く列傳に致したるものにて候、前漢書の格にて候、肅公の時に至り義公の御志御繼ぎ候て、南朝以後豐臣氏迄の事跡を御編集被レ成度と思召に付、右安積など御相談候て其用意にて御座候、先夫より前に右の日本史に、地理志、天文志、職官志等著し附申筈に候得共、是もいまだ出來不レ申候、中々埒明申間敷樣に候、先此度は帝紀列傳迄論贊ともに出來候分献上に成申候、三浦源八郎拙者も知人にて候、多年御城附にて世上風の男にては中々埒明申間敷奉レ存候とかく右安積に過たる人は無レ之候間、いつにても御問目條々書に被レ成可レ被レ遣候

一 公家衆も當月十八日歸京にて候、追付御法事に付段々公家衆又參向候由申候、青蓮院御門主抔御下り被レ成候由に候、此度奈良大乘院、一乘院兩御門主一度に御下り被レ成候、御使者を以寺社奉行土井伊豫守殿へ被レ仰候は、兩御門主被二仰合一被二仰入一度事有之候、其日御門主御出合被レ成候間、其間伊豫守御旅館へ可二罷越一候、若公儀御用繁難レ參候はゞ豫州宅へ兩御門主御越可レ被レ成と申來候、伊豫守殿下にて返答難レ成に付、御内意伺候處へあなたへ可レ被レ參と被二仰出一候に付、伊豫守殿被二申上一候は、左候はゞ私壹人にてはいかゞに奉レ存候間、今一人同道仕度旨被レ申候、成程尤に被二思召一候由にて、酒井修理殿を被二仰付一、兩人被レ參候處別事にても無レ之候、南都興福寺の事上代より大伽藍にて候處、先年燒失致候事歎かはしく被二思召一候、御建立候樣にと御願被レ成候、兩御門主計にても無レ之候、則天氣をも被レ經候處に、此度江戸へ罷越候はゞ右願可レ申旨叡慮にて候間、達て御願被レ成候條此段可二

申達旨に御座候、兩人の衆とかく老中へ可申聞旨被申候て、右の趣老中迄被相達候、則御內意を被得と見へ申候、兩人の衆御門主御旅舘へ參り被申候は、御願の趣老中共に爲申聞候處に、只今時節柄寺社建立の事言上難仕候間、左樣御心得被遊候樣にとの事にて、兩御門主も御困被成空敷御歸被遊候由に候、天氣と申興福寺の儀に候へ共如此に候得ば、此以後寺社は年々頽破に及び可申候

一 當地何れの御町にか、新右衛門と申者御法度の場に遊女を抱置、然處に浦賀にて邑人久右衛門と申者、右の女を盜出し江戶へ召連參候て、新右衛門逢候て右盜出し申由有樣に申候、其上にて右の女を異候樣にと望申候、新右衛門中々合點不致、浦賀へ預置申者へも不申候て盜出し、其上にて無理に所望致候事沙汰の限りの由申候、金子抔出し可申と申し候へ共、中々少分の事にては合點不致候、其內右の女町奉行所中山出雲守番所へかけ込申候、下奉行の者樣子尋候處に有樣に申候、偖申候は、當地は御法度にて候へば居住難仕候、浦賀へ歸り候事も右盜出し候首尾に候へば難成候間、御慈悲に新右衛門へ被仰付候て、久右衛門へとらせ候樣に被成可被下由申候、出雲守聞被申、早速右新右衛門、久右衛門共呼出し相尋られ候へば、女申通に相違無之候、先久右衛門事人盜に候へば第一の罪人にて候、新右衛門儀も御法度違背候て町に指置申候、尤御詮議候時分は鎌倉へ遣候へども、最前御法度を背候ものにて候へば是も罪人にて候、三人共籠舍被申付候其上にて罪名を付上げ言上にて候、斯樣の者言上の時分は先下にて僉議の上罪科の品を付候て言上仕事にて候、定て久右衛門事第一罪重

く候へば流罪とか、新右衛門事追放抔申儀にて有レ可レ之候、其科付けはしかと不レ承候、然處に被ニ仰出一候は、是は町奉行共さばき違申由、第一の罪は新右衛門にて候、法度を背候て遊女を指置申事、急度遠島可ニ申付一候、右の女は久右衛門にとらせ可レ申候御構ひ無レ之候、向後も御法度を背候て指置候遊女は何程も盜ませ可レ申候、盜徳に可レ被レ成由被ニ仰出一候由、何れも存の外成事の樣に申候、是にては此以後隱候て遊女指置申者無レ之筈にて候、御尤成儀と皆々申候、又牛込圓福寺と申法華寺談議はやり群集致申候、念佛宗を殊の外譏り申候間、一日淨土宗參り候て宗論いたし爭鬪有レ之由に候、左樣の意趣有レ之者の所爲に候哉、江戸中十四五ヶ所張紙致申候、同筆にて同紙の由に候、牛込圓福寺公儀を調伏仕候由書付申候者、所々より町奉行所へ指上申候、則言上に及び候へば、御笑被レ遊、斯樣の事取上候事にては無レ之候、何程も調伏致させ可レ申候、御構ひ無レ之候、但此後斯樣の落紙等有レ之候はゞ公儀へ斷に不レ及、見付次第に其所の者へぎ候て捨可レ申候、張申を見付候て其者をとらへ可レ申由被ニ仰出一候、古の良吏日本の板倉周防守殿抔さばきの風に似申候、御頓知被レ成候儀と奉ニ恐察一候、是等の事ひたと承候へども忘申候、只今存知の分書付に進候　（九月二十四日賜書）

一　いつぞや申進候、備後有田村孝子名達申候、又右衛門と申候、名主甚三郎庄屋市郎左衛門と申候、右三人の儀備後御代官飯塚孫四郎より言上の處へ、彌隣合の沙汰も承合可レ申旨被ニ仰出一候に付、其邊の公領私領の名主、庄屋共へ尋可レ申旨にて、安藝の御領分よりも書付出し申候、其外數十通に及び申

候處、いづれも異論無之候、右紙面共の内別て感申候は、甚三郎、市郎左衛門常々御年貢毛頭如在不仕候、殘り六十村公領の名主共年貢疎略に致し、色々僞を構へ御代官を欺申候處に、甚三郎少も同心不仕候故各申合、右甚三郎、市郎左衛門を打果し可申由にて大勢押よせ申時分、甚三郎申候は、公儀を敬ひ御年貢等理直に致し候事不屆とて、各の手にかゝり申事此身の本望にて候、早速某が首を取て參り候へと申候て、少も敵對も不仕候、安然として罷在候、さすが右悪黨人ども恥かしく存候哉、仇を不得仕候て罷歸候由申候、此事いづれの書付にも書載申候、昔の義士の覺悟にも恥かしからぬ事と存候、不學の土民に斯樣の心底有之事、兎角生質の美と申ものは格別と存候、又右衛門米五六石程も高作り申百姓にて貧窮に候へども、繼母には相應に朝夕の膳美を盡し申候、朝夕自身に配膳致し、其餘をば母前にて頂戴致し候て、妻子ともに次の間にて被下候、天の加護にて候哉、隣の田地迄は度々旱損等有之候へ共、又右衛門田地は毎の如く出來候故、近郷にも不思儀成事に沙汰いたし申候由に候、奥州にも一人此類の者注進有之候、是によつて御褒美の事御僉議有之候、先年駿河孝子五郎右衛門に常憲院樣御代御恩賞被仰付、代々高何程やらん作り取と申儀に御座候、是等は御同心に不思召候、右の者共行跡元來人たる者可仕事にて不珍儀に候へば、只今風俗悪敷候て外に無之候故御褒美被成候事にて候、畢竟は人に如此に罷成候樣と被思召ての事にて候處に、右五郎右衛門ごとくに代々作り取と有之候ては、大勢出來候時分あまねく左樣に難被仰付候、名主庄屋又は其在所

にて高も大分有レ之、頭立たる者に候はゞ、名字被レ下並刀御免被レ成、白銀何程も被レ下候てよく被二思召一候、若し又右衛門ごとき百姓に候はゞ白銀三十枚計被レ下、是は脇差を御免可レ被レ成候、此格に心得申樣にとの事と申候、先日其方にて此咄にていづれも奉レ感候由、私乍二推參一申候は、結構成御事不レ及レ申候、但百姓よりは第一江戶御旗本御家人の中を御僉議被二仰付一、御賞罰候て群臣の風俗改り候樣致度候、其後には國々へも及び候て可レ然候、定て此儀も何卒御英斷有レ之にて可レ有レ之候

一　奈良興福寺再興の事一乘院、大乘院兩門主御願も調不レ申候事先日申進候かと存候、其後被二仰出一候は、向後日本諸寺、諸社上より御興立不レ被レ成候て不レ叶堂社佛閣は、上より御再興可レ有レ之候、其外は御構被レ成間敷候、但古き寺社等頹破致し申事、寺社の者共難儀にも候はゞ、相對勸化御免可レ被レ成候、左候はゞ傳馬抔をも被二仰付一可レ被レ下候、偖其所々に集候金銀等其寺其社へ傳達致し候樣、公儀より御下知可レ被レ成候間、其段々いかやうにいたし可レ然哉、評議可レ仕旨被二仰出一候由に候、大坂天王寺、京都の大佛樣成ものにて可レ有レ之と奉レ存候、頹破の時分公儀より被二仰付一事國家の費にて候、斯樣の儀も如何樣御手段有レ之事に聞へ申候、二三年も過候はゞ、御新政も可レ被二仰出一と奉レ存候、何卒風俗改り候樣に致度候、當代武士に華麗の弊有レ之、商賣に專利の弊有レ之候、斯樣の儀急度御禁令出候樣に仕度候、殊の外御政務に被レ盡二御心一候樣に聞へ申候、賴母敷被レ存候、比日林大學頭子息七三郞事講釋委く無レ之、人柄儒者に不相應に候由にて、御叱被レ遊候由沙汰致し候、虛實は不レ存

候、虚文をすてゝ實を御好被遊候と見へ申候、御尤成事に乍恐奉存候、先頃筧平太夫を御勘定頭に被仰付候時分御前へ被爲召、御直に段々被仰渡候由、平太夫御請に不調法者に候由申候へば、不調法成は少も不苦儀に候由上意の由、是計は承り申候、其外の被仰渡は外に誰も不存候、當地の事各樣へ爲御知申度如是に候　（十月十八日　賜書）

一　御別紙拜見仕候、此度御守殿御凶變の儀、被仰付候通とかく奉絶言語候儀に奉存候、此儀も先書に申上候、其後橘隆庵に逢候て、其節御守殿へ談被申候樣子相尋候處、前月十九日の早朝戸田山城守殿より奉書到來、早速御守殿へ罷越可奉伺旨上意に候、早々參上可仕旨に候處、其儘參上仕候處、御醫師女中衆御交りに七八人口を揃へ候て被申候は、御持病の肝癪度々指込申候、此度も御持病と見へ申候、夜前はつよく候へども今朝は少御快被成御座、御粥も十何匁とやらん被召上候由取々被申候、内々はやく／＼と引立候、御前へ罷出申候、斯樣の上々樣御前へ始て罷出候時分御挨拶は無之候、御言葉なしにて御熨斗を御取被成下、其後御手を被出候て御脈伺申儀に候、左候へば、此度も御言葉は無之筈に候故、不審とも不奉存候て御容體を伺候處に、御目をばすきとふさがれ御寄懸り被成、右の御口が引つけ被成候て、ちよと見候へば隆庵への御挨拶に御笑ひ被成候かと奉存候、偖御脉と申上候へば、御手を御出し被成候樣奉伺候處、火の如く御熱氣にて候、御脉は鐵砲の如く強く急にて候、隆庵被申候、左候へば至極の御熱と覺へ申候、御腹をと願候へば、女中衆など

寄候て少御衣服をくつろげ申候、中々とく被レ伺申儀にては無レ之候、少手を添へ候て奉レ伺候處、右の御脇より柱の如く指込有レ之候、御左も其通にて候、初中後御目はあき不レ申候、其より罷出直に登城候處、上樣にも御待被レ成いかゞ致候哉と御尋被レ成候、隆庵も其外醫師中同意、御肝積の熱と奉レ存候故其段申上、大方御當分の儀にて可レ有レ之奉レ存候、段々御熱氣退候て御快可レ有レ之哉と申上候由に候、又參候樣に上意に候故罷越候處、先刻の通少もさめ不レ申候、其時分若狹守樣被レ仰候は、とかく養安院御藥も數服被二召上一候へ共替儀無レ之候間、隆庵藥指上候樣御意に御座候、其より前に養安院も隆庵へ御藥の事被レ申候得共、大事の御病氣の事御自分申分にて、中々成申儀にて無レ之由堅申由にて候、右の通り若狹守樣被レ仰候故、其節も此儀は御意は重く候へども、御意計にても難レ仕由申候へば重て被レ仰候は、其方を上より御附被レ遊候は左樣の爲と申候、無レ左候ては何の爲に可レ被レ遣哉、早速御藥可レ上候由の御意候故、隆庵申候は、一々御尤の御意に奉レ存候、此上は如何樣共仰次第に可レ仕候旨申上候て御藥調合、人參壹分とやらん加へ候て上レ之申候、此藥殊の外に相應と見へ候て、御目を始て御明き被レ成候て、隆庵と御言葉を被レ懸候、去ども前朝のまゝにて御食氣無レ之候、御藥も中々いなみ被レ成ろくに不レ被二召上一候故、隆庵申候は、何卒御藥被二召上一候樣奉レ願候由申候へば、藥と御意にて候、銀の御茶碗の小さきに少上候を、ちよと御吸被レ遊迄の事にて候へども、兎角强くも不レ被レ申候故、又申上候は、とてもの儀に御粥を少被二召上一候樣にと申上候へば、女中衆抔も御粥を被二召上一候を、

隆庵奉レ見候て、上様へも申上候はゞ御安堵可レ被レ遊候間、少上り候様にといろ〳〵申上候へば、かゆと被レ仰候故、おも湯の少こき様成を上候へば一口被二召上一、其より登城候て御様子申上候、其時分夜半前にも可レ有レ之由、其より前に段々御快候由注進有レ之候て御聞被レ遊候、隆庵罷出候へば、宜候て一段の儀に候由被レ仰候故、隆庵申上候は、先少御快方に候へども、至極と申上候へば段々御快を奉レ見ながら左様に申候事澁き生付と被レ仰候故、態と大事に奉レ存候計にて申上候ては無レ之候、心底に請合不レ申處有レ之候故申上候由申候へば、暫く御了簡の體にて、兎角罷越候て附候て居可レ申候旨御意にて候故、奉レ畏候由申上候て罷出候へば、大音にて御呼返し被レ成、薬事不レ及レ言儀ながら外の醫師などへも申談候様にと御意に候故、奉レ畏由申候て又罷越候へば曉天に罷成申候、偖又御脉など奉レ伺候處に少も御快御様子には無レ之候、御熱同事に御座候、其上隆庵罷歸り候以後御薬一度も不レ被二召上一候由に候、隆庵遣て御斷申上、外の醫師へ御薬上候様にと願申候、先呼に被レ遣可レ然由にて齋藤長八郎へ申談候へども、中々埒明兼申氣の毒にて、其内岡道漢抔も參候て伺申候、道漢抔輕く申候由申候、とかく道漢能可レ有レ之由にて、其より道漢薬に罷成申候、去ども申談候て、煎湯の外に獨參湯を上申候由に候、其より何の替申儀も無レ之、夜に入候て段々彼是申うち御指つまり被レ成候、無二是非一事にて候とて物語にて候、其後日數經候て御黒書院へ井上河内守殿、戸田山城守殿抔御出、醫師中被レ召出一委細御僉議被レ成候、惣て不レ殘御灸熱故にて有レ之間敷候、御持病の肝癪にて御さしつまり被レ遊

候由御請にて候、御前より隆庵を御呼出し被レ成惣醫の申樣ども御聞被レ成候、御灸熱故の樣に申候得ば、迷惑仕者も出來候てむづかしき事と被レ存候故か、御老中初として惣醫の申樣同心にて候、又惣醫も右御老中の存意を合點なく、とかく御持病と申候、偖隆庵はいかゞと御老中御申候故、隆庵申候は、勿論御灸熱にては有レ之間敷候へども、御灸不レ被レ遊候はゞ餘の事にて指出可レ申候、然ば御灸にてさそひ申にて可レ有レ之候、肝積と申儀に候へども、私は左樣には不レ奉レ存候、肝積にて急に指詰り申物にては無レ之、腎積と申物は急に指詰り申物にて候、此度つかへも腎積たるべく候、御灸ばかりにては無レ之候へども、御灸もよろしきにては無レ之候、是程に申置候へば、惣醫の中に小兒の驚風の類に候由申人有レ之、老中何も尤と有レ之儀にて其段被二申上一、先無事に相濟申候、十五日以前御氣分御勝れ不レ被レ遊候處に、 十五日には御庭へ御出被レ遊御氣分御快候、夫より前御經行不順にて御灸御延引被レ遊候故、第一御氣分も御勝れ不レ被レ遊由女中衆被レ申、十五日御快を幸に十六日に御灸被レ遊候由に候、御灸も御脊腰脇とやらん申候、左候へば隆庵被レ申通に御腎積を動し申かとも被レ存候、此度中村玄悦は御灸能有レ之間敷候由申候處に、女中衆第一梅津指圖にて被レ遊候由に候、醫師などへは隱し候て御内所にて被レ遊候樣にいたしたりと申候、其故此度梅津さん〳〵の樣子にて尼と成候由申候、尼に成候ては濟不レ申儀に存候、姬君樣御兄尾張樣も御急死にて候、是は女中局へ御越被レ成候處、其女中衆局の庭に覆盆子有レ之候を取候て進申候へば、風味宜由にて候被二召上一處、其覆盆子にて食傷被レ成御逝去

の由にて候、然處右の女中致㆓書置㆒自滅致し申候、書置には、私事ふと亂心いたし自害仕候由に候、此咄を此度御病中に御守殿にて梅津板花検校に被㆑申候由に候、御快氣の樣子に被㆑存候て、若變も候へば、其身も覺悟の事に候處にと申儀にて被㆑申哉、左候はゞ此度いかゞと奉㆑存候、右尾張の女中はいさぎよき事と存候、よき手本と存候、不㆑入儀に候へども此度の儀當地の沙汰共御聞被㆑成度由被㆑仰候故承申體に申上候、長公並源左衛門殿抔小寺抔もそつと御見せ被㆑成候て、其後火中被㆑成可㆑被㆑下候、斯樣の儀申進候時分も必小谷殿をも書加へ候處に、事闕候樣に被㆑存偖々殘念に奉㆑存候、老境一ツの樂なく成事にて候、頓て同じ道に可㆓罷成㆒候、以上　（十月廿九日賜㆓直幹㆒書）

一　安積覺兵衛儀當代にてよき儒者にて御座候、中々當地抔には無㆑之候、其上史學に殊の外多識にて候、二十一史など何れも慥に覺候て居被㆑申候、拙者も益友と存候、別て申通候儀に御座候、第一無我成生質にて人の善に服申事天性難㆑及處有㆑之候、此度論賛の中抔ひたと往復致し、愚案を尋候て、愚按千慮の一得候へば、早速服し候て殊の外得㆑益候由にてよろこび被㆓申越㆒候、さすがと感じ申儀に御座候、其内此方存謂候事は又急度申越候故、此方の益に罷成申候、先日も安倍仲麿事日本より渡唐いたし、羈旅の臣を以大唐の歷々の詩人英材どもと交遊いたし名譽を施し候事、論賛の中にも少々褒稱の詞無㆑之候故いかゞと申遣候處、安積申越候は、仲麿入唐して異朝の官爵を請け、唐に臣たる事不義の人と申物に御座候、斯樣の人大義にをゐて闕申事有㆑之候處、材を以稱美致し候故、我朝にて古來

仲麿が罪を不レ存候、名敎の罪人と可レ申由に御座候、是にて拙者も初て合點いたし、只今迄氣付不レ申事に存候、斯樣の所學術大筋正しく御座候、其故此度論賛一ッも議論正しからぬ事は見へ不レ申候、只勝れて菊數寄にて當住菊の栽植にかゝり居申候、是はいかゞに候へども其外の儀は赦し不レ申候て成不レ申候、此度論賛相談の事安積が內所にて拙者へ相談と存候趣、下問を恥ぬ心底を感入候て、隨分不レ殘心底を申遣候、去年より一年餘りの事にて御座候、此度論賛出來に付、大日本史二百五十卷水戶侯より御献上被レ成候處に、上にも內々御望に思召候物を献上候事御滿足被レ遊候に付、即日有馬兵庫殿爲二上使一被レ遣候、首尾無二殘處一由にて水戶侯御大慶、劣甥始め史館の役人不レ殘御祝儀など被レ下候、然る處拙者論賛の事相談頗勞二心力一候由、役人中迄安積內々にて申達候處、水戶侯にも內々にて御聞被レ成御滿足の由にて、安積より水戶出產の品など大分給候、態々水戶侯より表立候ては御付屆無レ之候故、安積より申達候由不二存寄一事と存候、かやうの儀も安積有樣成生付にて、人の善を我致し候樣搶候事仕間敷と存候故と見へ申候、よほど生付も能見へ申候、今度大日本史の序、當水戶殿御代作を安積被二仰付一候て書申候、其節急に候故、先達て拙者へ草稿をば相談いたさず殘念至極など申越候、跡に成候へども向後の爲に候間、見候て吳候樣先日越申候、大方よく調申候、其內少々愚見候處申遣候、未返事は無レ之候（十一月廿九日　賜書）

尙以當地折節雨降にて不レ絕ゝめり有レ之候、風も吹不レ申今日迄隨分靜に御座候、何とやらん天氣も

各別に罷成候樣見へ申候、とかく泰平のくせにて段々驕至極に候故、天氣も高ぶり風高に候處、御當代御儉素古今に不レ承候程の事に候故、天氣も改り申候と奉レ存候、水戸侯も此日御半元服被二仰出一、當廿五日御祝にて候、只今迄駒込御屋敷に御座候處、先日小石川御作事出來御移徙被レ成候、御弱齡に候處、當代めづらしき御秀發にて江戸一統ほめ申事に候、上にも殊の外御懇意に見へ申候、先日有馬兵庫殿、加納遠江殿御加增として金子五百兩宛被レ下候由、御加增にて候へば毎歲の事と聞へ申候、其時分被二仰渡一候は、御前代は藩邸より御知行直に御合被レ遊候故、潛邸の臣へ御加增被二仰付一候、御當代は最前の御領知御取不レ被レ成候故、紀州より被レ付候臣下へ可レ被レ下知行無レ之に付、金子にて被レ下由被二仰渡一候由申候、是も珍らしき儀と存候、とかく紀州よりの御家來、御前代よりの直參へ驕り不レ申樣にと常々御心遣と承候間、是も左樣の思召と奉レ存候、其外何角承合申候處當の御事にては無レ之候、偏に無レ之中正成筋を御合點被レ成候樣に仕度候、御學問御好み沙汰は曾て不レ承候、林大學頭いかゞの儀を申上候哉、大方は御推察被レ遊候て可レ有レ之候へども、是も累代の儒家に候故、御用に罷成候て可レ有レ之奉レ存候、以上（同書）

一　先日御城中女中衆御前代より大分有レ之候處、容色よき女中をゑらび候て不レ殘申上候樣にとの事に候故、定て御あたり可レ申歟とて、容色有レ之候女中の父母等殊の外悅び候て、前に祝などいたし候由憐成事にて候、五十人餘名を記し候て申上候時に、此分御いとまと被レ下候、容色見にくき女は人の

妻にも望申間敷候へば、御暇被レ下候はゞ難儀におよび可レ申候間、容儀悪敷分は其儘可レ被二召仕一由に候、斯様の儀終に不レ承候と奉レ存候、古代たまゝ有レ之候へば盛德の事とて申傳候、此度松姫君様附の女中へも金子千兩被レ下候、其内當地に宿無レ之女中三人有レ之候、其儀御聞及び被レ遊御城にて可レ被二召仕一由にて被二召出一候、御慈悲とて何れも申傳候、此事新井氏とも申候て御仁慮と申候へば、何角異論有レ之候、程子の言に候哉、君子は人の有レ過の中にて無レ過を求る由有レ之候、況や無レ過の中に有レ過を求る事心の公ならぬと申物に候歟の事、（此外有二數條一可レ觀小說の内に記レ之、）

右御慰に書付進申候、拙者只今各様知己の恩に報じ可レ申様無レ之、斯様の事申進候儀、其御地にて折節得二貴意一候時と同事に存候故、無益の儀ながら自分におもしろく存候事は申入度存候て如レ此に候、小寺殿、成田殿、兵庫殿などへも御見せ可レ被レ成候、紙面の外人に見せがたき事もまじり候間、其御心得被レ成可レ被レ下候、以上（十一月廿九日　賜二奥村子復一齋賢[illegible]幹書）

兼山秘策 第四册 終

兼山秘策 第五册

起享保六年至七年

一　當月十三日暮時、石川近江守より御奉書參り、明十四日四ッ時御城へ可ニ罷出一旨申來候、御請紙面調進候、斯樣の時分追付奉書の御方の宅まで參候て奉レ提候旨申上筈に候故、夜中近江守殿宅まで參候處、用人を以明四日四ッ時とは候へども四ッ前罷出可レ然候、衣服は服紗麻上下にて候得共、萬一入可レ申推量候間、熨斗目は狹箱に入持參可レ申旨御申渡候

一　翌十四日五ッ時登城候處に、木下平三郎、服部藤九郎、土肥源四郎段々罷出候、四人揃候以後御目付を以近江守殿へ御案內申入候、躑躅間に四人共にたまり候て、脇へちり申間敷候旨御申渡にて候故、四ッ時より八ッ時まで相待申候、其日は寒氣つよく老身別て難儀いたし候、近江守殿御氣付被レ仰候て、御臺所へ參候て罷在候樣にとの事にて御料理被レ下候、酒など少被レ下候へば少し寒氣を凌ぎ申候、追付奥へ參候樣にとの事にて斗圭ノ間迄は渡邊外記（是は御側衆戸田肥前守殿の兄にて候、肥前守殿は戸田家へ養子にて候）同道被レ致、夫より末は御目付衆も御入申儀不レ罷成候、近江守殿御出御迎候て、夫より近江守御連にて御廊下傳ひ幾間も參り申候、御座の間次に暫くたまり、脇刺取候て罷在候內に、近江守殿御出四書の內いづれなりとも一二章講じ可レ申候、はやく埒明候樣短く講じ可レ申旨にて、私は不案內と被ニ思召一候哉、近江守

殿必長く申間敷候、大義さへ聞へ候へばよく候間其心得可レ仕旨御申候、扨何を講じ申候哉はやく上候樣にとの事、殊の外調子急迫成事にて候、不二取敢一論語學而篇首章前一段を平三郎、朋自二遠方一來と人不レ知云々の二段を新助、餘の兩人は其すへいづれの章成とも短きをと有レ之候て、有子信近二於義一の章を藤九郎、君子食無レ求レ飽の章を源四郎と相究書付候て指上申候、追付近江守殿御書講釋前、於二御座之間一御目見可レ被二仰付一候間、左樣に心得可レ申はやく參り候へとて罷出候、御座の間杉戸の内近江守殿着座、杉戸の外に御側衆三人（戸田肥前守、有馬兵庫、加納遠江守）伺候にて候、其脇の間に御小性衆、御小納戸衆伺候にて候、平三郎より一人宛罷出候へば、近江守殿名を御名のり御目見致し候、上樣には御上段の際に御成被レ成候壹人宛御目見致し、直に御目通に着座いたし申候、上樣との間貳間ほども御敷居にて隔てゝ殊の外近き事にて御座候、四人着座兩手を突罷在時、近江守殿四人の者御前へ被二召出一御目見被二仰付一難レ有奉レ存候旨御禮申上候時、御唯諾の御挨拶有レ之候、日比諸役人中ものを申上候事、老中よりは心易き由物語にて候、成程左樣に被レ存候、さて大音聲にて高倉屋敷聽衆の多少御尋被レ遊候、近江守殿脇よりたへず聽衆有レ之候由御請にて有レ之候へども、おしかへし被レ成平三郎いかほど有レ之候哉と被レ仰候時、近江守殿直に申上候へと御申候時、平三郎五六十人ほど有レ之由申上候處、重て御意は何とぞ聽衆多く有レ之候樣に被レ遊度被二思召一候番等勤申者なども隙の時分は罷出承り候樣にと被二思召一事にて候、其方ども講じ樣にて又聽衆も多く可レ有の事にも被二思召一候間、隨分精出し講じ

候樣にとの御意にて候、四人ともに奉レ畏の旨申候て平伏致し候時、今日講釋御聞可レ被レ成候間、左樣に心得候へと被レ仰候故、近江守殿脇よりはやく立候へと御申の時、四人ともに退出御次の御緣頰まて罷出候處、早平三郎罷出候へとの事にて、右の着座の處に御見臺に論語のら出候て平三郎より段々に四人ともに講じ候て退出いたし候、其後は何の上意も無レ之候、扨御次へ罷出近江守殿御禮申上候處、御月番井上河內守殿御壹人へ御禮に參り可レ然、若年寄衆三人へ不レ殘參可レ然旨御申候、三人の內壹人は近江守殿にて候、近江守殿殊の外すなを成人に見申候、只急迫にて是に難儀いたし候、御側衆三人へも近江守殿四人を御引合候て御禮申入候、四人とも唯相濟申を第一に意得候故、何を講じ可レ申樣も無レ之候、殊に老夫儀は終に罷出不レ申候、調子急に候故不二取敢一間にあはせ申迄にて候、殘は常憲院樣御代に毎度御座の間へ罷出講釋致し付申候、藤九郎、源四郎は文昭院樣御代毎月御座の間にて講釋致し來候、此邊案內者にて候、老夫事は不案內至極のことにて定て不調法に可レ有レ之と奉レ存候、去ども先大方に仕廻候間御心安被二思召一可レ被レ下候、少調子ゆるやかにて長く講じ申儀能成候はゞよく可レ有レ之候、近江守殿初め無學故、たゞはやく濟候て上にも御退屈無レ之樣にとの心遣ばかりにて候、何方も同事と奉レ存候

一　翌十五日本鄉御屋敷へ罷越、佐々木左兵衛殿を以右の御禮宰相樣へも御序に被二仰上一被レ下候樣にと申置候、然處に藤田內藏之助殿御出にて、右の委細紙面に調申上候はゞよく可レ有レ之由、老夫も

左樣に存候へども、結句子細らしくも可レ有レ之かと存候よし申候へば、餘の事とは違申、老夫事御家出のものに候へば、宰相樣にも御聞被レ遊候はゞ御悅も可レ被レ遊事に候間、委細紙上にて申上可レ然の由御申候、成程御尤至極に候、能御氣を被レ付被レ下候由申候て、則御屋敷にて大野木舍人殿への紙面調遣申候、其晩早速御直書被二成下一、右の事御聞被レ遊御悅被レ遊候、且又私紙面に私相應に學文仕候事、御家に御取立にて候へば、此度の儀も御厚恩故と難レ有奉レ存候旨申上候處に、鄭重の謝辭御感涙被レ遊抔結構成御書頂戴仕、是又難レ有奉レ存候、各樣日頃老夫事御心に被レ懸被レ下候故、委細申上度如レ此御座候、此紙上の事中にも少し他見難レ仕事も少々有レ之候間、各樣御覽後火中被レ成可レ被レ下候、以上

正月十八日　　室　新助

奥村源左衞門樣　　青地藏人樣　　同藤大夫樣

小寺武兵衞樣　　成田宇兵衞樣　　佐々木兵庫樣

稻垣與三右衞門樣　　大地彥右衞門樣　　同新八郎樣

亡友小谷伊兵衞殿事存出し申事に候、日ごろ私侍講の儀相待申抔と御申越候事存出し、今更咽二悲涙一存生に候はゞ嘸悅にて可レ有レ之と存候、已上

一　扨申上候、當月十四日不二存寄一於二御座間一御目見被二仰付一、且又講釋も御直に被二仰付一候、委細は別紙に書付進申候、誠以難レ有仕合奉レ存候、只今まで高倉屋敷の事事體輕く、たとへば誰に成とも儒

者に申付候へと有㆑之事かと被㆑存候處、此度の儀にて慥に罷成珍重成事に候と新井氏も被㆑申候、成程左様にても可㆑有㆑之候、其上何とぞ世間にも儒學流行致し候様に被㆑成度被㆓思召㆒候段、御倉に御意承欣幸成事とも可㆑申、此度急度御目見抔被㆓仰付㆒講釋被㆓仰付㆒候も、第一高倉聽衆有㆑之候様に被㆑成度、又は私共油斷不㆑仕候様に被㆑成度との思召と奉㆑存候、聖賢の道を御好み被㆑成、御自身に御聞被遊度との御事にては無㆑之様に相見え申候、乍㆑去其段はいまだ難㆑量奉㆑存候、此後の御様子にて相知れ可㆑申候と奉㆑存候

正月十八日　室　新助

青地藏人様

右一書の内

一　佐々木系譜安積氏へ申遣事前書に申進候、當春の書狀到來、又申越候は、右系譜其後致㆓熟覽㆒候處、文辭記事等精密無㆓殘所㆒相見へ申候、何とぞとてもの儀に、疑問の事件一事にても相知候様に致し度存候、急には難㆓考出㆒候間三月中までも掛り可㆑申、夫共に考出可㆑仕とは請合がたく候へども、隨分考可㆑申旨申越候、其返書先日遣申候、右考の事少もいそぎ不㆑申候間、當秋中までに考給候様にと申越候、安積も疎略は無㆑之體に候間、何卒一兩事成とも相知れ候様に致度候、本多の系譜は結句相知れ申事も可㆑有㆑之かと奉㆑存候、佐々木の事實は久しき事に候間難㆓相知㆒可㆑有㆑之存候、比日承候へば、

あなたに日本の社寺等の文書すきと御取集、一ッに被レ成文書纂と申物大分有レ之候、且又諸家の系圖方々御集め、一ッに被レ成系圖纂と申物是又大分有レ之候、第一老夫申は是にて御座候、彼丸山雲平と申者佐々木助三郎と申、西山樣時分の儒臣と同道にて、諸國巡行致し文書を搜索致し申候、其故文書の外に聞書の事も多く有レ之候由、助三郎はとくに泉客に罷成、只今は右の雲平壹人殘り申候、是も老人に候故昔の樣には有間敷候へども、今以系圖等の事は此者にて埒明申事度々有レ之、重寶成者に候由承り申候、然ば此度の事には天下一の人と奉レ存候、右雲平諸國巡行の時越後極寒の時分一宿いたし候て、水風呂に入候へば其まゝ耳聾、夫より大聾に罷成すきと物を承事不二相成一候、是も相談などの時分は餘程の妨と存候、安積への御挨拶の趣も重て書狀遣候時分可二申達一候、其元より被レ遣候御問目成程よく聞へ候則其儘遣申候、去ども外に私より條子書を調添て遣申候、是は水戶の風あしく候故、萬端數多く候へば見落申事有レ之候、其故是々の儀第一承度候、次には是等も承度と申樣に申遣事に御座候、尤とへば佐々木系譜の中には藤川戰死などの事第一御考賴申抔と申遣樣成儀にて御座候、水戶衆のあいしらいには口傳有レ之儀に御座候

一 水戶安積覺兵衞より前月十八日の書狀參り候、佐々木系譜其他靑地氏等の事件に、前月十三日より水戶史舘の事始にて、各寄合申に付丸山雲平へ委細筆談仕候、雲平事大聾にて杜微徐仲車か類にて御座候、筆談にて無レ之候ては少も不二相叶一候、然處に十四日は世上の年越、十五十六日は例年相定り

史館の休日に候故、十七日又史館へ右の系譜並問日箋覺兵衞持參致し、猶又委細致二筆談一候處、精力の所レ及隨分考索可レ仕旨雲平申候、覺兵衞も存寄記錄ども相考可二申旨申來候、然處に同月廿九日の書狀又到來、佐々木系譜の事丸山氏前月中旬より取懸り隨分吟味いたし候、尤覺書も記錄とも致二考索一候、先只今まで指て考出候事も無レ之候へども、此以後隨分致二考索一、當月中には大概樣子も可二申越一候、全く相濟系譜等返し申儀は三月中に至り可レ申候間、兼て左樣に意得可レ申旨申來候、此趣にて候へば兩人とも隨分心懸考索の體に相聞へ致二安堵一候、只今系譜等の事は此兩人に過たる人は有間敷と奉レ存候、就レ中雲平事は西山中納言殿御代、系譜の事佐々助三郎と申人と兩人請取候て、諸國へも經歷訪問仕候故、耳聞の儀も多く有レ之候由に御座候、此兩人考候て不二相知一候へば、無二遺憾一事に奉レ存候、右の趣兵庫殿並小寺武兵衞殿へも被二仰達一可レ被レ下候

一　先日正月十四日侍講の事申進候、定て相達可レ申と奉レ存候、其後石川近江守殿まで被二仰出一、彌講釋承候もの多く有レ之樣被レ成候間、平三郎始四人とも料簡可レ申候、其上にて上に御取捨可レ被レ成候間、いかゞ致し候て承者多く可レ有レ之哉と、平三郎を近江守殿被二召寄一御尋に御座候、平三郎歸宅候て私共宅へ呼候て承合候故、拙夫申候とかく講釋仕候はいか樣共私どもも料簡可レ有レ之候、聽衆の儀は私共力に不二及申一儀、夫ともに料簡申上候樣にとの儀に候はゞ、指當り今少し急度被二仰出一候て承申者可レ有レ之候、只今の樣に勝手次第に可二罷出一抔にては向後も聽衆も有レ之間敷奉レ存候、大番中番の頭

中へ被二仰渡一、御旗本中學文仕候樣に被レ遊度被二思召一候はゞ、頭中初隙の時分は罷出可レ承候、勿論支配へは御番等の隙には、心懸候て罷出承候樣可二申渡一旨被二仰渡一、扨又諸大名諸役人も上の思召如レ此に候間、折節罷出承り候樣に被レ致候はゞ可レ然などと、御老中より被二仰渡一候はゞ先いやとも可二罷出一候、其內會得致し實に志し候も出來可レ申候、是より外に聽衆有レ之候樣には仕候樣は無レ之旨申候、殘り三人ともに同意にて、其段委細書付候て近江守殿まで進候處、先御請取被レ成候、尤是は少し難儀の筋有レ之候間、彌此外にも存寄可二申上一候、場所など替候はゞ聽衆も可レ有レ之候哉、少々費用掛り候ても不レ苦候間、外に料簡も候はゞ追て可二申上一旨に御座候、然處に追付浦上彌五左衞門と申候御小納戶衆（是は御小性衆など同事に御近習相詰申候）平三郞宅へ被レ遣候、先達て平三郞へ上意に付參候間、他客無レ之候樣致し可レ申旨申來候由、追付被レ參候て被レ申候は、上意には四人の者ども料簡近江守に承候樣被二仰出一候へども、いまだ返答無レ之候、四人の者共近江守へ直には難レ申處も可レ有レ之と被二思召一候間、其方事幸平三郞と知人の由に候間、平三郞宅へ罷出、直に心底を承候樣にとの儀に御座候、勿論殘り三人ともに申談料簡申上候樣にとの御意に候へども、先御自分料簡を以御請可レ被二申上一旨被レ申候由、平三郞則近江守へ申合候趣を申候へば、其儀は御同心無レ之儀候、たび／＼林大學頭より上より被二仰渡一候樣にと、聖堂講釋の儀に付願申上候得共、御承知不レ被レ遊候、其子細は上の思召に、學問と申物は權威を以人にさせ候ては何の益も無レ之候、面々に信じ候て自然に趣き不レ申候ては仕形ばかりに罷成申候、既に

常憲院様御代人々に無理に學文被二仰付一候て、殊外難儀致し至二于今一懲り申候様に罷成候、外の所存を申上候様にとの儀に御座候由小三郎申候、殘りの者は不レ存候、私存候は、右の外には講堂御建被二成、講師も多く被二仰付一、書籍も御文庫の書籍拜借自由に被二仰付一、扨とかく師儒輕く候ては人々思入薄く難レ信候、然處藤九郎、源四郎など至て小扶持貧窮にて難レ勤體に御座候、新助拙夫抔も其通に候、斯様の儀も難儀不レ仕様に被二成下一候へば、人々存入もよく可レ有レ之と申候由申候、彌五左歸り被レ申候以後、私ども呼びに越右の趣爲二申聞一候末に申様、物語ながら扨々不レ入事と存候へども無二是非一候、とかく私申候は、講堂被二仰付一師儒等多く罷成候ても、此通にては替る儀有間敷候、其證據には、大學頭すでに聖堂に在レ之講師數多く候へ共、彼の如くに御座候、學文權力にて無理に被二仰付一候事、御同心に不レ被二思召一候段は乍レ恐御尤至極の思召には候へども、只今の風俗にて中々自然に信じ候て趣申者は有間敷候、先一往御威勢にて被二仰付一、其内世上にはやり出候はゞ、自然と趣き申様にも可二罷成一、又の子に學文爲レ致候様成事にて候、いやがり申者を初はしかりなどいたし無理にさせ候へば、後には己と合點いたし候様に罷成申候、子次第にいたし候ては學文好申事は無レ之物にて候、とかく教と申物は、嚴勵に無レ之候ては難レ行奉レ存候、とかく幾度も此段申上度奉レ存候、扨は世上に學文はやり候様に被レ遊候事は、講釋一通りにても難レ成奉レ存候、連々上の思召に可レ有儀と奉二存候、去ども此度は聽衆多く罷成候様御尊の儀に候へば、先右の通りより外は私所存は無二之候と申候、殘りの者も左様に申入候

て、平三郎も合點致し被ㇾ申候へども、とかく講堂建立の事を可ㇾ申旨に候故、夫は如何樣ともと申罷歸候、講堂を外に被㆓仰付㆒候樣に致し、木下家に學流を一派立、林家と並申度所存も候故、其方へ引付願被ㇾ申樣聞へ申候、左樣にてもすでに聖堂聽衆も無ㇾ之候へば、同事たるべき事分明に御座候、上の御尋の筋には叶不ㇾ申事に御座候、御聞被ㇾ遊候はゞ迂濶に可ㇾ被㆓思召㆒と奉ㇾ存候、其後近江守よりの御請を御待被ㇾ成御座候間、右浦上氏へ申入候、講堂を立場所を替申所存の儀も近江守殿へも申入、則浦上氏を平三郎迄被ㇾ遣料簡も粗御聞被ㇾ遊候間、最前申上候趣と兩樣とも、早速被㆓仰上㆒候樣にと申入候樣に浦上より申來候、則近江守殿へ平三郎罷越右の趣書付申上候へば、近江守殿請取被ㇾ申候、平三郎へ御小納戶衆を被ㇾ遣事を近江守へ申達可ㇾ然候、少しもかくし申儀にて無ㇾ之由に御座候、斯樣の處各別手段と奉ㇾ存候、其後は何の事も無ㇾ之、當月二日より其儘高倉屋敷講釋前の通始申候、いかさま何卒品付可ㇾ申かと奉ㇾ存候、先日萩原方にて橘隆庵に參會候、隆庵尋被ㇾ申候故有增咄申候、隆庵被ㇾ申候は、中々其分にてははさ〳〵聽衆有間敷候、比日御側衆へ申入事に候、とかく御近習より始り不ㇾ申候ては外へ移り申間敷候間、此後不ㇾ絕四人の者にも、一人宛御座の間へ被ㇾ爲ㇾ召候て、每度講釋仕候て、御前にも御用被ㇾ遊、且又御近習拙者式までも承り候樣に被ㇾ遊候はゞ自然と表向へもひゞき候て、學文好み申衆も出來可ㇾ申、御前には御政務等にて御用可ㇾ有ㇾ之候歟、又は御鷹野に御成被ㇾ遊候はゞ御勝手に被ㇾ遊、とかく御近習の衆不ㇾ絕承候樣に致し度候、有馬、加納などへ申入候へば、

其通り御前へ申上候樣にと被レ申抔と隆庵物語にて御座候、隆庵存の外學文を好み申人にて候、是程の人も當地にて難レ得候、御意に入被レ申候と見へ申候、只今拙夫に易を聞被レ申候、其外萩原氏にて孟子講釋の席へも不レ絶出被レ申候、其儀も御前にて御物語申上御聞被レ遊候由申され候、侍講の事前書に申上候通、只短くよみ早く埒明候樣に致し可レ申候、必長く仕間敷との事にて、論語の首章を兩人にてよみ申體に候へば、眞の世上に申祝儀一通りと申樣成事にて、其上江戸の學文御前代より講釋も林の格に心得候て、講じ申者さらりと耳に當り申事無レ之、聞よき樣にとまで講じ候よし、義理の聞へ不レ申事は構不レ申候、親切に講じなどと申儀は曾て無レ之候、人も左樣に講釋を承付候故、精しく說申さば却て譏り申事にて候、老夫抔講釋はいかなる講釋とて笑申位にて候、先日侍講抔の御精義は不レ申、其上朋自二遠方一來抔の段は、指當り人主の上にあづからぬ儀に候故、何を述可レ申樣も無レ之間を合申迄に候間、御前に御聞被レ遊候ては、結句辭の面白き方を宜敷被二思召一候筈と心得候處、先日河野昌庵と申御側醫師、隆庵などと同事にて候、此人被レ申候由にて或人被二申聞一候は、私講釋御聞被レ成能候由御意に候由、左候へば御聞わけ被レ遊可レ有レ之哉と奉レ存候、殊の外御聰明に候故、世話の料簡の外の儀每々有レ之候、此間も深川邊醫師の草履取主人を殺し、主人の妻取付候處を妻をも殺し候て逐電いたし申候、此程人形を以御尋にて御座候、何卒はやく尋出候樣にと上下一同に願申候、主人を兩人殺申事重々逆罪、承程のもの扨々惡き奴と申處、御聽被レ遊にくき事と必可レ有二上意一と奉レ存候へば、

左樣には不レ被レ仰、遠國邊土抔にかやうの者有レ之候さへ有間敷儀に候、されども夫はいまだ有まじきにても無レ之候、江戸御城下御膝下にて斯樣の者有レ之事、御氣の毒千萬成儀と上意の由申習候、實にて候哉いまだ慥不レ成儀に候へども、御尤至極成思召と乍レ恐奉レ感候、先日隆庵に咄候へば、其儀は不レ承候へども常々の思召左樣の趣にて候間、實にても可レ有レ之と被レ申候（二月十三日 賜二齋賢一書中）

一 大坂城御番衆の內物語、近頃奇怪の儀ながら慥成人の物語にて候、御城中の事沙汰不レ仕筈に候へども、年來心安候て咄合候故、唯今は誰にも不レ及候、前々より御番人夏中蚊帳を釣り不レ申、紙帳を用申候、是に子細有レ之候、然處或人無レ構常の蚊帳を釣候て臥り、夜深蚊帳の上を見あげ候へば、大成人の首は無レ之十足體計横はり少もうごき不レ申候、とかく寢入も不レ仕夜明まで致二難儀一候、翌日相番中へ語候へば、夫故いづれも蚊帳を釣不レ申紙帳を釣り申事に候、必驚被レ申間敷候、此方へあたり申事は無レ之候、又或る時は奥の間の方より、大成男二三人も致二同道一襖障子より首計を出し人の咄を承り、いつともなく消失申候、又或時御書院の庭に人馬の音躁敷聞へ申候、戸を明候て見候へば何も無レ之候、斯樣の類毎々有レ之候、寃氣の結たるにて可レ有レ之候、此咄白石承被レ申候て、福島大夫配所にて老年の伽に罷越、直談仕其者見申由にて物語有レ之候、大夫殿は向に座し居被レ申候、其對座に二三人咄罷在候處、一時に首を伏て仰ぎ見不レ申候へば、大夫殿また出申よなど被レ申、振返り脇刺をねぢ廻し叱被レ申事毎々有レ之候、其樣子如何と見候へば、大夫殿御座うしろへ、色々樣々の首幾ツと

いふ數を知らずあらはれ申候、一目見申者はとかく仰見申事難ㇾ成ひれ臥申候、夫大殿叱候へば、湯の
消たる樣に消失申候、是等も寃魂の欝結したる成るべし

一　鳩巢先生印文、池田道雲篆文幷刻（道雲事第三四記）可觀小說
備中丹姓英賀郡人、字靜儉齋（印條印）魯有二大臣史一、失二其名一（揚子法言叔孫通故事）

一　鳩巢先生少年の時、北野菅廟へ參詣通夜候處、內陣より白雲出で感應のしるし有ㇾ之と申儀、禮幹
先年より傳聞仕候へども、神怪の儀請問仕候事も致二遠慮一終に不二申出一候處、享保四年九月於二江戶一
禮幹御小屋へ御見の刻、偶菅廟靈驗の事ども座談の序に此事申出候へば、御物語候は、十八歲の時於二
京都一順庵に從ひ勤學せしめ申時分存寄候は、學問といへども神助ならではと存願書を調申候、其趣は
名を後世に揚て父母に令名を遺すは孝の一事なり、むなしく生候ては百歲を保ちても何の詮も無ㇾ之
候、文章を以て天下に聞へ候樣に神助を奉ㇾ願候と申事に候、扨一夜致二通夜一度心懸候得共、北野邊は
遊女町多く候故、若年の間師友の聞を憚り、此事を順庵に達し、二月頃と覺え申候社參致し、願書を
內陣へ捧候て、こもり屋と申板さくみの內へ唯獨り參籠致し候、社僧の方より行燈に竹筒に油の入を
添へ差越候、夜着の物も差越候へども、拙者存候は、七日七夜參籠の者さへ有ㇾ之候、只一夜臥り申に
は不ㇾ及儀と存じ臥り不ㇾ申候、深更に及候て頻々に眠を催候故、兩手を組み夫に額をのせ少し眠候樣
に有ㇾ之候處、內陣より雲起り全體を覆ひ候樣に覺候て眠覺申候、是は感應のしるしと存、彌其夜致ㇾ

勤學ニ先年十六七歳の時、自誓の誓詞別目錄有レ之、此願書と合考ふへし右雲色いかゞ御覺へ被レ成候哉と御尋申候へば、罷く覺候由被ニ仰聞一候、扨御物語は、其後加州にて結構に召つかはれ文章の御用相勤、江戸へも被ニ召出一候上にて見候へば、菅廟へ此方よりの願は御叶被レ成候と申物にて候、一身の幸不幸は天命有レ之候、然らば菅廟へは急度御禮を可ニ申上一候事と存候へども、薄祿の身に候へば力不レ及候、せめて一月に一度宛參拜可レ仕儀と近年に成候て心付、每月廿五日には湯島天神の廟へ拜し申候、前月廿五日には雨に逢濡候に付歌をよみ申候

村雨のかゝれる袖におもへとや
　神もぬれきぬきにしむかしを

禮幹承り、私儀正德二年の比二三月と覺申候、一月の內に五日十五日廿五日三度に、夢想の句三首を得申候、其內二首は忘申候、一首は

ぬれきぬをきた野のすへにぬきすてゝ
　うつりぞきぬる梅の花垣

扨御物語候は、住吉內藏助咄申候、京都或町人浪人の方より名物の茶入を預り置、年を經て後返し候へと申に付尋候へど見え不レ申候、此町人貞信なるものにて致ニ迷惑一一分も難レ立存、此上は神力を賴可レ申外無レ之と存北野へ參籠いたし候處、感應の奇特を覺候間、罷歸布上下の儘煙草を給候て罷在候

處へ、臺所へ乞食體の者能越、此作花買て給候様にと申聲聞へ候、兼て作花入用の事有レ之候に付、其作花求候て何とぞ箱へ入置度存、棚にいと古き箱の有レ之候を、それへ入可レ申とて蓋をひらき候へば、其内に彼の茶入有レ之候、ひとへに靈驗と存候由その人內藏助に咄申候、則茶入浪人に返申候、本藩より御代參として前田修理被レ遣候、御太刀奉納の時に修行齋能順抔も有合申候は、七百五十年時は雷鳴致し奇特の事と申候、今日は如何可レ有レ之哉と申候處、間もなく雷鳴仕候、各不思儀の事と致二感動一候（寺西十左衛門話）

一　文昭院様御即位以後、瑞春院様（德松様御生母白須氏、常憲院様御代五丸様と云）常御機嫌伺のために御醫師養安院祗候の節、松平美濃守最早剃髮にて保山と稱し、先達て瑞春院様御前に被二罷在一候、保山事時御仕置の改候事とも色々被二申上一候は、近年御徒の內何某深川にて魚を釣り、生類御憐の御法を使候に付流刑に被二仰付一候、然る處其者を被二召返一御赦免被レ成候までにても無レ之、此間上野御供も無レ構相勤候様被二仰出一候、是は餘成事に御座候旨被二申上一候處、瑞春院様急度御言葉を被レ改、扨は常憲院様近年の御政道を御尤成事と被レ存候哉、すきと斯様の事ども其方抔被レ致事に候、此度段々御改被レ成候を、却て左様に被レ存候儀は彌聞へ不レ申儀と被二仰出一候處、保山一言も出不レ申退出に候、其後女中を以向後御用候はば可レ被二召出一候、其方より被二罷出一候儀は無用に可レ被レ致旨被二仰聞一候（養安院直に咄候旨、瑞[illegible]順話）

一　當月四日吹上御殿にて公事御聞被レ遊候、一兩日以前に公事不レ殘書上候様にと被二仰出一候、唯今

訟三十六有レ之内十五御撰被レ成、此分は御聞可レ被レ成候間、前に能吟味いたし置可レ申旨被二仰出一候、右三十六の内には井上殿有馬殿領分の百姓の公事も有レ之候、左樣の公事御聞候はゞ度々御兩所の名も出候て氣の毒成物と存候處に、上にも其段御氣付有レ之候哉、左樣の公事はすきと御指除被レ成候由に候、吹上御殿の御玄關の上御緣頰に御簾かゝり其内に御成被レ遊候、御簾の外左右に御老中、若年寄御側衆、大目附抔列座にて候、扨白砂の上左右に板を敷候て假屋を拵申候、板の上うすべりを敷候て、其上に寺社奉行、勘定奉行町奉行列居、むかひには御目附中列居の由に候、酒井修理殿抔白砂板の上に座せられ候事、是一代の始たるべきと存候、扨訴訟人双方其中の白砂へ引出申候て對決いたさせ、右三奉行さばき申趣を御聞被レ遊候、其日のさばき殊の外出來候由に候、朝より暮過までに濟申由に候、八ッ時分御中入にて候、其間に小用に立少休息有レ之由に候、相濟候以後に御二階の上に入御被レ遊、三奉行始其日の諸役人不レ殘御二階の下へ參候樣にとの事にて、揃申時分御おり被レ遊御立被レ成候て、今日の樣子御覽被レ遊候處いづれも心苦仕事と被二思召一候、さばき申樣も一々宜敷被二思召一候由御感にて、三奉行へ時服五ッ其外三ッ二ッ宛拜領被二仰付一候、萩原源左抔も時服二ッ拜領の由一段首尾よく相濟申候、是は向後三奉行初精出させ可レ被レ遊との思召と奉レ存候、此後は折節御聞可レ被レ遊と沙汰にて御座候、高倉屋敷講釋の事に付先日申進候通、講堂を建候て御書物など御貸被レ成、出精に學文仕候樣にも被レ成候はゞ、講釋の聽衆も可レ有レ之と平三郎方より申上候、其後浦上を以平三郎方まで

被二仰出一には、とても儀に學校御建被レ遊候間、相應の地並學校の堂舍門廡等の制法、中華の式を以書上候樣にとの事にて、勿論殘り三人へも相談いたし候樣被二仰出一候、此間有増書き上候、此紙面表より石川近江守を以上げ候へと被二仰出一候故、平三郎近江守殿へ持參致し、右浦上を以被二仰出一候子細申入相渡し申由、定て早速近江守殿より被レ上レ之と奉レ存候、其後何の被二仰出一も無レ之候、五六日以前の事に候、所は小石川御殿跡か、小石川馬場の上松平備前守屋敷か、幸是は此度類燒にて候、扨は牛込酒井修理屋敷か、是も類燒かと存候、とかく高燥の地にて無レ之候ては不レ可レ然由、何れも申候て右の通相定申候、此上いかゞ成可レ申も不レ被レ存候、先御沙汰は御無用奉レ存候、去ども例の御樂へは可レ被二仰入一候、是等はよき沙汰と可レ申、此日朝鮮人往來候國々へ其時分の費用割賦有レ之、公領私領とも金銀出し申候、御先代すな金の樣成事と聞へ申候、大分の事と申候、比日町々へ被二仰出一候火を出し申者ども只今迄は手鎖おろし籠者いたし候、其後火を出し候町人百姓は、日本橋兩國橋にさらし申候樣被二仰出一候、其間にても出火やみ不レ申候、此度は火を出し申家は、其地主より其地に有レ之家數不レ殘家賃指上可レ申由に候、出火以後三年の宿賃指上申筈の由申候、委細は未レ承候、箇樣の儀にて町方百姓中などは殊の外嗷々議論に及候由申候、何とやらん聚斂の樣子相聞へ申候、事氣の毒に奉レ存候、火消役の衆へ被二仰出一も、とかく大風の時分火を消し不レ申、何町程の脇にひかへ候樣にとの御令有レ之、夫を背候へば御罰責に候故此度など火にかまひ不レ申候、前には風下は力に不レ及候へど

も、脇を防候故火口廣がり不ㇾ申故此度の樣にては無ㇾ之候、此度は火にかまひ不ㇾ申候故、火廣がり候てはゞ廣に吹付候故大分人も燒死申候、只今は火消役中も掣肘の意味有ㇾ之候間働申儀不ㇾ罷成ㇾ候、箇樣の儀凡慮の所ㇾ及にあらず候、如何の儀に候哉と奉ㇾ存候、何卒來春など大火無ㇾ之候樣にと奉ㇾ存候、此上に又大火有ㇾ之年々左樣に候ては、武家商家ともに取續き申間敷と奉ㇾ存候、當年焚死人夥敷有ㇾ之候間、箇樣の翌年は凶年たる由是も氣遣奉ㇾ存候、此紙面各樣御覽の後火中被ㇾ成可ㇾ被ㇾ下候

（四月十三日賜書）

學校の儀其後は私共方へは何の御沙汰も無ㇾ之候、如何樣表向の御詮議に罷成候處、平三郎申上候通に大成御造營被ㇾ仰付ㇾ候ても、講釋聞申者無ㇾ之候ては畢竟無益の儀と被ㇾ申衆も有ㇾ之と見へ申候、其衆に候哉、此間ひた物衆議を御聞被ㇾ遊候、唯今隱居致し法體名付申人姓名は聢と不ㇾ承候、此日石川近江守殿宅へ被ㇾ召候て、只今聖堂高倉屋敷兩所にて講釋被ㇾ仰付ㇾ候へども聽衆しか〲無ㇾ之候、いかゞ被ㇾ成候はゞ聽衆も段々有ㇾ之學文世にはやり可ㇾ申哉、所存申上候樣にとの儀にて候、此人申候、指當り存寄無ㇾ之候、但一ッ存寄には、法中宗門の儀にて考候へば同佛法に候へども、宗旨替故面々の宗門に歸依致申候、儒者も流々可ㇾ有ㇾ之候、一流に限り不ㇾ申、其流々の儒者に被ㇾ仰付ㇾ候て講釋致し候樣に被ㇾ遊、江戸中に幾ヶ所も講堂有ㇾ之候て、世に學文はやり可ㇾ申と奉ㇾ存候旨申候由に候、其外委細の儀も申上候樣に申候へども慥に是は不ㇾ承候、此人も定て常に學文致し相應に志も有ㇾ之候樣子

上にも御聞被遊候て御尋被レ遊たる儀と聞へ申候、然ども邪正の差別なしに多流にいたし度との申分さながら俗人の了簡と奉存候、伊藤仁齋流など打まじり候ては何ほどはやり候ても却て害に罷成候、三輪善藏と申て當地飯田町邊に住居數學の者有レ之候、餘程發向致し私も兼て知人にて候、王氏の學を好み專門學の趣にて御座候、松平紀伊守殿京所司の時分尊信の由に候、近頃まで當地にても彼家より宛介（アテガイ）取申處に嗣君に合不レ申哉祿を辭し申候、出處進退守り有レ之儒者にて候、此者も右の御尋有レ之候て所存申上候樣承申候へども、是はしかと不レ承候、酒井修理大夫殿の家に居申候儒者松田善三郎と申者、是も當地にて人の存知たる者に御座候、元は人見友元に學び申由、其後山崎嘉右衛門學流を信じ候て經學を專にいたし申候、爲レ人隨分嚴正成者の由承申候、私儀もいつぞ逢可レ申と申置候、此者に學び申人に武藤庄十郎と申候て唯今隱居いたし子を大御番に出し申候、當年四十餘りの人にて御座候、公儀は四十以後は病氣に候へば申立候て隱居いたし申候、此人松田善三郎と心易く候故、此人物語にて比日承り申候、御城にて石川近江守殿修理大夫殿へ被二申入一候て、其元御家來松田善三郎と申者へ御用の儀候間、私宅まで被二差越一候樣にとの事にて候、善三郎事當三月火災に小日向に罷在類燒いたし、是も先年私同事に土藏に火入候て、書物はじめすきと燒申候、只今小屋がけにて罷在候、然處に不二存寄一近江守殿へ罷越致二同道一罷越申候、近江守殿御逢候て又右の御尋にて候、善三郎申候は、御用と有レ之候故何の御用とも不レ奉レ存候て先參上仕候、然ば只今差掛り了簡等難二申上一奉レ存候、其

上修理大夫儀もヶ樣の御尋とは不レ奉レ存候哉、私了簡の趣申上候樣にとて不二申付一候へば、旁先罷歸候て修理にも爲二申聞一候て御請申上度奉レ存候旨申候て罷歸申候、其後修理大夫殿へ近江守殿御城にて被レ申候は、重て手前より善三郎方へ直に可二申遣一樣候、左樣御心得候樣との事に候、其後修理殿其段善三郎へ被二申渡一、近江守殿より案内次第に早速罷越、其方了簡の通申上候樣にとの事にて御座候、翌日とやらん近江守殿より申來善三郎又罷越候處に了簡の趣にとの事にて候、善三郎申上候は、此儀一旦講釋聽衆有レ之候樣に被レ遊度との思召に候哉、但其實より人に學文を好み申に被レ遊度との事に候哉、此段承候て了簡申上度奉レ存候旨申候、近江守殿御申候は、學文は人に不レ仕候て不レ叶物と被二思召一候、然ば眞實より趣候樣に被レ遊度との事に候間其段了簡申上候樣にとの事に候、善三郎申候は、人々眞實に學を好み候樣に被レ遊度との事に候はゞ、先各樣より眞實に學文御好み被レ遊候て御見せ被レ成候はゞ人々興起致可レ申候、各樣にも學文御嫌にても有レ之間敷候へば、眞實に御數寄被レ成候とは見へ不レ申候、唯一通り學文いたし候と、眞實より好み候とは各別の儀に御座候、たとへば親類を不レ存候て他人と存候て交り申候と、親類にてのかなはぬ中と申儀を存候て交り申とは、其親切はいかばかり違申と被二思召一候哉、唯學文を仕候と學文は元來吾性に具り申道にて、人としてはのがれ得ぬと申儀を存候て好申とは、虛實大成相違にて候、然共聖人の敎世に廢り申候故、人々學文を實に好み申事無レ之候、まして各樣には御幼少の節より、唯御氣の盡き不レ申樣に御氣に入申事計を御好被レ成來候故、

中々學を實に御好み被ㇾ成候儀は無ㇾ之筈にて御座候、夫に入らせ候ては、ヶ様の御大役を御不學にて御勤被ㇾ成候事乍ㇾ憚奉ㇾ感候事に御座候、能々御生質宜敷故と奉ㇾ存候、乍ㇾ去御生質の御美は限り有儀に御座候、御學文不ㇾ被ㇾ成候ては畢竟御安堵は難ㇾ被ㇾ成儀と奉ㇾ存候、然ば眞實に御心懸候て段々下へ移り、自然と人々學文好み候樣に可ㇾ被ㇾ成候、此外に存寄は無ㇾ之候、若又一旦聽衆多き樣に被ㇾ成度との儀に候はゞ、何の手間も不ㇾ入儀に奉ㇾ存候と申候へば、夫は如何と被ㇾ申候故、善三郎申候は、上に學文致し候樣被ㇾ成度被ㇾ思召ㇾ候間、各御奉公と存候て講釋承り候へと被ㇾ仰渡ㇾ候はゞ、早速聽衆出來可ㇾ申候、然れども是にては何の益も無ㇾ之と奉ㇾ存候、近江守殿にも成程尤と被ㇾ存候由、此方身上の儀まで申聞せ候て滿足被ㇾ致候旨御申にて、善三郎歸申候、善三郎申樣一々尤に存候、さすがと感申儀に御座候、畢竟如何成可ㇾ申哉不ㇾ存候

一 御城中ノ口門番山本作左衞門と申者有ㇾ之候、當地には御小人同心と申者有ㇾ之候其御地の足輕なみの者にて候、右作左衞門事其格の者にて候、當年六十に近き者の由、若年より學を好み、谷三平と申當地に昔居申候儒者有ㇾ之候、此直弟子にては有ㇾ之間敷候、又弟子に候哉、三助(平)弟子の由承申候、此者先年父の死申時分三年心喪勤申候由、平生貞實御奉公精出し申候由、左樣の者只今まで埋れ居候て誰申出し候者も無ㇾ之候處、先日ふと御側衆部屋まで被ㇾ召出ㇾ講釋被ㇾ仰付ㇾ御側衆聞被ㇾ申候由に候、此以後御感賞にて進上の番所上番と申役に罷成申候、是は上下御免にて御徒目付位の格にて候由、大

成立身と申候、右の通の者に候へば、いか程立身被仰付候てもはづかしからぬ者と奉存候、去ながら先ヶ樣に御取立被成候へば、諸人耳目を改申事にて候

一　當年より山王祭家臺無用に可仕旨被仰出候、當年端午より御前にはさいみ帷子御召被遊候、是は下へ被仰渡候にては無之候、向寄の外樣の衆へも話し聞され候へと、先日御近習衆或人に物語の由に候

一　先日被仰出奥方女中帷子常に着仕候はゞ、染帷子に可仕旨に御座候、其後は御前に被居候女中には何とも不被仰出候へども、是に自然と結構成物遠慮致し候由申候、淨圓院樣、小次郎樣、御袋樣被召出候、女中いづれも當春より縞着物の上にさげ髮致候由、縞の着物はしまり則もやうにて候處、其上に切付紋など致し候事無用可仕旨被仰出候由に候、女中の又者などは一統に木綿着用仕由に候、御儉素至極古今珍敷儀に奉存候

一　先年藏人殿より悴七十郎へ御土產に被下候明君家訓、御前にも上り申樣成さたに御座候、左樣の故に候哉此間殊の外はやり、御近習衆よりも書物屋方へ度々取に參候由、夫故當地草紙屋に重板仕者出來候て、最前の板本京都の書坊茨城多左衛門手代當地に罷出、書物屋の法にて重板は爲致不申由にて、わきの板を毀らせ申候、とかく作者無之候故色々沙汰致し候、水戸西山中納言御作などと申者も有之候、私作と申儀承候間其段を奥書いたしくれ候樣に比日賴候故奥書致し遣申候、明君家訓又は序

を除候事いかゞの儀に候哉、此度序をも望候故遣申候、大方楠諸士教と元の名に復し序を加候て板行致し直申候にて可レ有レ之と奉レ存候、ヶ様の物只今世に申様に罷成申候、そろ〳〵と風俗も改り可レ申哉と此日は餘程頼もしく奉レ存候、此外少宛奉レ感心一に及儀ども度々承申候、筆紙には難レ盡候、氣根よはく成、ヶ様の儀調候も致二難儀一候間省略いたし申候、筆に任せ候間文言聞へ兼可レ申候、筆跡も正體なく候間御よめ被レ成がたく可レ有レ之候、御推量にて御讀可レ被レ下候、以上

五月十九日　　室　新助

奥村源左衛門様　　青地藏人様　　同藤大夫様　　小寺武兵衛様

其餘例の御衆並劣甥にも御見せ被レ成可レ被レ下候、以上

一　其元御家中へ被二仰出置一候御條目、又は御定書等拜見仕度奉レ存候、比日佐々木左兵衛殿へ申進候處、當地へは御持參不レ被レ成由に御座候、勿論他所へ御出し難レ被レ成筋の儀は格別に奉レ存候、左様にも無レ之御家中へ一統被二仰出一國中諸人兼て見聞仕候、御定書等は少も御秘し可レ被レ成物とても無レ之候、左様の御定書等有レ之候はゞ劣甥新八郎まて御借被レ成可レ被レ下候、此書同十四日到來、十九日家兄兼山より御返答申上候、但被二仰下一候通の御定書は覺無二御座一候、一通五冊の御定書と申物有レ之候へども是れは公事場、算用場、割場、會所、普請作事等の場切二一事二事宛覺書の物にて、國中一統に申渡候品などは無二御座一候、其類の品見當り候はゞ進覽可レ仕と申進候、將又此御書中の趣は一通の儀

にては無レ之、相公樣御噂居多有レ之入ニ御内覽ニ可レ然御書面に付、則先生への進書も寫相添大野木舍人、成瀨内匠まで副狀を以差上候事寫候て指越候樣にと新八郎方へも申遣候、先年私共其御家へ被ニ召出一候時分は、始て御奉公仕候者どもへ頭中より御定書の物四五卷廻し被レ申、奉レ得ニ其意一候由の御請を取置被レ申候、其時分私儀寫置申候處、年久しき儀に候故いかゞ仕候哉其後失申候、其は江戸詰の時分の御定書にて御座候、定て各樣御手前には可レ有レ之と奉レ存候、夫に限り不レ申、御定書御條目の類御遠慮の筋さへ無レ之物に候はゞ、御見せ被レ成可レ被レ下候、御手前に有合不レ申候はゞ御才覺被レ成可レ被レ下樣に仕度候、少々にても外へ御出し被レ成がたき物に候はゞ勿論御無用に奉レ存候、左樣も無レ之誰見候ても不レ苦筋のものばかり數通にても、又は一二通にても御有合次第に新八郎に御寫させ候て御越し可レ被レ下候、不レ苦儀ながら此儀申進候事も御沙汰無レ之樣にと奉レ存候、但例の御衆は格別に御座候

一　比日安積覺兵衞へ内々賴置候佐々木系譜、並靑地、本多、小寺等先祖の儀共考の趣委細に書付越申候、佐々木は名家故、あなたにも系圖文書等も數多有レ之候故、彼是考隨分精力を盡し申樣子に御座候、丸山雲平よりも答目一冊仕立候て逐一返答に及申候、去共富士川戰死、叡山自殺等の事は相知不レ申候、去共是も少々考略の儀は申來候、此後考索の便りには可ニ罷成一かと奉レ存候、私著し申候佐々木系譜の中も所々批判申來候、長き物候處委細に見被レ申と存候、精力の程感入申儀に御座候、其上一々

尤成儀共に奉レ存候、是は追て系譜の面を改申歟、又は系譜は宰相樣へも被レ上に相極り申物にも候間、別に附錄の樣成物仕立候て添置候樣に成共仕可レ然候、其段は其元にてとくと御料簡被レ成御尤に奉レ存候、私事此間公私用事有レ之不レ得レ已儀ども指集一圓不レ得二心隙一候故、右の書付共入組申儀に付とくと吟味仕候事難レ成候、等閑の返書はいかゞと安積氏へもいまだ返書さへ不レ遣候、劣甥小池源太左衛門まで先一禮は委細に申遣候、其内得二閑暇一候はゞ委細に檢閱仕候て、其上にて其元へ其儘可レ進候間始終とくと御覽被レ成、此度考の趣にて御考案の筋も候はゞ御吟味被レ成候樣にと奉レ存候、私事只今精神衰耗其上類燒以後は東鑑の樣成物さへ手前に無レ之候故、委細考申事は難儀奉レ存候、其元にて兵庫殿など隨分御吟味被レ成可レ然奉レ存候、御吟味濟申以後了簡共相極候はゞ、其上にて右の系譜相改申儀は此方へ可レ被二仰下一候、其節最前新井氏紙面の趣なども打合候て、系譜の文言改候樣に可レ仕候、左候はゞ佐々木系譜を兵庫殿にて成とも册物に御寫しかへ被レ成、册にて被レ遣可レ被レ下候、卷物にては前後考合候時分紛はしく候てあしく御座候、其册子紙面を改候て可レ進候、とかく頓て其元へ進可レ申候間、其時分委細可レ得二御意一候、安積氏丸山氏など精力を用ひ候儀も御目に懸申し度候間、旁其まゝ可レ進候

一　内々學校の儀も、其後は御僉議の上とかく只今大き成御造營被二仰付一候ても、講釋など聽衆も同事に候ては無レ詮儀候間、先有來候處にて講釋被二仰付一、其上の樣子次第に追て學校可レ被二仰付一に相極

り申候、其に付此間毎度木下平三郎宅へ參會仕申候、いまだ慥には相知不レ申候へども、大方濱御殿に被レ成候樣子に御座候、高倉屋敷は餘り見苦敷候間歷々など被レ參候儀も難レ成候、向後濱御殿にて講釋有レ之候はゞ、いか樣上よりも急度御下知も可レ有レ之樣子に御座候、講釋ばかりにて無レ之素讀の指南も仕候者なども御僉議被レ成、毎日罷出御籏本中の子弟罷出候樣に可レ被レ成との事に御座候、とかく急度被二仰渡一さへ候はゞ何れも罷出可レ申かと奉レ存候、濱御殿に罷成候はゞ當分私などは難儀と存候、私宅よりは一里半も可レ有レ之候、老人と申御存知の通痛も有レ之候、駕籠にて通ひ申にて可レ有レ之候、不勝手ものに候へば毎度日用の者やとひ申儀も難レ仕候、成次第に相勤不二罷出一時分は御斷可レ申心得に御座候、先頃大坂より古林見宜被二召寄一候、前月廿八日より神田橋外御借し長屋に、紀州より被二召連一候醫師林良意と申人居申候、其宅にて見宜醫書の講釋始申候、先立て公儀醫師中又は町方醫師も一統に相觸候て罷出候樣にとの事御座候、三百人程も聽衆有レ之候、勿論皆醫師にて御座候、良意宅せまく地上に席を布候て罷在體に候、其故昨日より是も高倉屋敷にて講じ候儀にとの事にて、私共とは刻限を替候て罷出申事に御座候、私共は四ツより九ツ迄、見宜は八ツより罷出申候、見宜は一人にて講じ候故隔日に罷出申候、難經を講じ申由に候、是は大坂にて自分に講堂を建候て多年醫書を講じ、常に醫生を大分學寮に指置取立申候由承候、左樣の儀御聞被レ遊此度被二召寄一候哉、名人の見宜が孫の由申候、奇特成事と奉レ存候

一　明君家訓の事前書にも申進候と覺申候、只今當地一統に取はやし申候、此日は拙者作と申儀存候て方々私噂も有レ之候、替たる儀と奉レ存候、此書板行候て十年餘にも可二相成一候、只今迄しかと見ものも無レ之處に、ふと御近習に取はやし候故、俄に江戶中流布致し候、とかく萬事時節と申事有レ之と奉レ存候、當春火事以後にて候、小宮山友右衛門と申候御勘定所組頭有レ之候、此子息杢之進と申人先年より學文の志も有レ之申通候、實は辻氏にて小宮山氏へ養子に參申候、此人被レ參候て明君家訓の事被二申出一拙者作の由承申候、此間打寄申候は、ケ樣〳〵の事申出し候ものはおよそ近代にも無レ之候、誰の作にて候哉、ひたと承候處拙者作と申事相知れ、扨こそと存、其に付御近習の衆へ緣にて右明君家訓を遣申候、何卒斯樣の筋上へ達候樣にと奉レ存候、大方上覽にも及可レ申と珍重に候由物語にて候、此筋にて御覽被レ遊候哉、御覽被レ遊簡要成事どもに被二思召一候由、且又御近習の者へ求候て見候樣にとの御下知有レ之と聞へ申候、其以後御近習衆家々に求候故、御城へ罷出候程の者求申候由、日本橋南一丁目に茨木多左衛門と申京都書肆の出店有レ之候、是板本にて御座候、俄に大分の利を得申とて、先日私方へも罷越悅申候、私序文をもらひ、且又奥書を望候故其通に致遣申候、大方は楠諸士敎と題を改、私序を加候て改て板行致申候にて可レ有レ之候、其後御小納戶衆より平三郞まで申來、私序文望の由にて寫候て遣申候て、是も上よりの事と聞へ申候

一　前月廿四日木下平三郞御用にて登城候處に、有馬兵庫殿を以加州には學校有レ之候哉と御尋にて、

平三郎申上候は、學校の儀は承及不申候、然れども私事は終に加州へ罷越儀無之候、委細は右新助存知可罷在候由申上候へば、明日新助同道登城可仕旨にて、翌廿五日四ッ時平三郎致同道罷越申候處、四ッ時分まで燒火の間と申間に相待申候、其後山吹の間へ參候樣にとの事にて平三郎兩人罷出候處、有馬兵庫殿被出候て私へ尋被申候は、加賀殿多年學を好み被申儀に候間、國中に學校か又は教授の場所も有之候哉承度旨に御座候、私申上候は、如仰年若の時分より學を好み被申、只今老人に至る迄其通に御座候、學校等の儀は遠慮も有之候哉終に相極り不申候、折節近習抔にて講釋又は素讀被申付候儀は有之候由申候、兵庫殿被申候は、加賀守殿國政の儀常に被掛心、萬端詳成樣子共紀州にても承及候、大國の儀に候へば品多き儀にて可有之候へども、先家中へ被申渡候筋如何樣の儀に候哉と被申候、私申候は、私事加州にて輕き者の儀に候故、委細の儀は承知不仕候、乍去兼て承候は、領國の儀は上より御預け置被遊候儀に候へば、國政の事各油斷仕間敷候由、家老以下の者どもにも精誠被申付候、左樣の存念に候哉國政の事大小によらずすこと自身に聞被申候、別て民百姓の儀は大切に被存候、先年凶年の時分抔にも、民の衣食等の儀まで自身に被申付、飢寒に及不申樣に被致候、勿論郡奉行など申役人は其の人を被選候て、百姓共難儀不仕候樣に心を付被申候、さて諸役人並私式輕者共迄常に被申渡候は、公儀御法度の筋相背不申樣に、是を第一に心得油斷不仕候樣にとの事に御座候、先ヶ樣の儀を慥に承及候由申候、兵庫殿被申候は、大國多事の儀に候へば、自身に聞

被㆑申候事難㆑及事に候、其故に候や終に粗略成事承不㆑申萬端能熟候樣に承候、暫待候へとて奥へ被㆑參候、平三郎脇にて承居申候、其後又前の處へ兩人參候へとの事にて罷出候へば、兵庫殿十村と申者有㆑之候由いか樣の役にて候哉と被㆑申候、私申候は、郡方の事は私別て不㆑存儀に候、去ども承候は十村と申者は、關東などにて申候名主庄屋などゝ申類の者にて、其村の百姓を支配致し候、たとへば年に豐歉抔申立申事抔は役人共右十村などへ承合申事にて候、去るに其所にて地方の事至極巧者の者を撰候て申付候、惣て春耕申時分は、其村に米倉有㆑之民共飯米不足不㆑仕候樣借し渡申候、秋以後又收置申候、ケ樣の類常格の事共有㆑之候、其を掌どり申事にて候、此時中言に兵庫殿それはあなたの常平倉遺法にて候由挨拶に候故、成程其通に奉㆑存候旨申候、此一言にて兵庫殿學文有㆑之と奉㆑存候、常平倉抔と申事當地役人など中々存候儀にて無㆑之候、何の益も無㆑之唐にての詩と申す事は心を盡し候て、それを學文と存罷在候、兵庫殿手中に覺書持被㆑申、それを見被㆑申候ては尋被㆑致候、さて被㆑申候は、役人等被㆓申付㆒候時分は定めて諸士頭中より其の人を選申出し、其上にて其器量を以被㆓申付㆒にて可㆑有㆑之候、但左樣にも無㆑之目がねにて被㆓申付㆒候哉と被㆑申候、私申候は、役人等相極申時分は自分目がねにて被㆓申付㆒儀も有㆑之候へども、平士抔より取被㆑申候時分は、必其頭々より吟味致し候て申出候、其内に自分には不心得に被㆑存候者有㆑之候ても其頭たしかに宜敷由申候へば、先其通に被㆓申付㆒儀も有㆑之候、其故諸頭も組の者共事無㆓油斷㆒吟味致し候由申候へば、兵庫殿又被㆑申候は、定て賄

賂等の事、又は惣て依怙贔負の筋は堅く制禁たるべきと被レ申候故、私申候は、賄賂抔と申儀は不レ及レ申候、少にても依怙の筋有レ之候へば急度吟味被二申付一候故、家中諸役人此儀は平生別て相愼候故、只今などは賄賂抔と申儀はすきと絶へ申候由申候へば、兵庫殿何れも感心の體にて奥へ被レ參候、其後又前の所へ參候へとて兩人參候へば、加賀守殿學文は定て無點の書も讀め申程の事にて可レ有レ之由に被レ申候故、私申上候は、學文の事私平生役儀にて候故よく存罷在候、和漢の事餘程博學に御座候、無點の書は書により候て私どもさへ讀不レ申物も有レ之候へば、一概には難レ申候へども、私共よめ申程の書は大方よめ可レ申と奉レ存候、平生外の好みすきと無レ之、若年時分より晝夜書を好み被レ申候故、學文の儀は近代大名の中には無類成事の樣に私共は奉レ存候旨申候へば、左樣に承及候由被レ申候、其外相尋被レ申事私不レ存候儀は不レ存由申候、存候事は返答申上候、非人小屋の儀抔も尋被レ申候、扨御尋の儀など相濟、其以後兵庫殿被レ申候儀は、此間各はじめ何れも料簡共御聞被レ成候、いかゞして世に學文はやり可レ申候哉、講釋承申者も多可レ有レ之と存候哉と被レ申候故、私申候は、此儀は先日より平三郎私共へも申語候て、料簡の趣申上候、其外別に料簡も無レ之候、但私乍レ恐存候は、上より行はれ不レ申にては畢竟下へ及不レ申候、上に眞實に御好み被レ遊、第一は御近習より學問仕候儀に罷成候はゞ、自然と外樣にも及、又は江戸中へも及、其より諸國へも及可レ申候、比日明君家訓にて別てよく存當り申儀に候、此書十年以前より板行に有レ之候へども、しか〲見申者も無レ之候處、比日此書御近習に

はやり可レ申由承候て、江戸中方々取はやし申候、輕き儀にてさへ如レ此に御座候、まして學文の事は誰否とは不レ申儀に候へば、御近習より段々發向仕候儀に被レ遊、其上にて弓馬同事に心懸候へと被レ仰渡一候はゞ慥にはやり可レ申由申候、是は兵庫殿別て感心の體にて御座候、其後奥へ被レ參候て暫有レ之、又前の處へ兩人共に參候樣にとて參候へば、兵庫殿被レ出候て最早御用相濟候間兩人とも罷歸候へと直に被二申渡一候、及レ暮罷歸申候、不二存寄一儀に出合候處、先首尾よく餘り不調法成事も不レ申候て致二安堵一候、かりそめながら私一人の身の事とは違候て、宰相樣に懸候儀に候間、不調法成事などふと申候ては迷惑千萬成事にて候、勿論御取成にて無レ之、悉皆有體の事にて候、上にも殊の外御國御政事よろしき事兼て御聞被レ遊候故、私御國出の者に候故、彌慥に御聞被レ遊度との事と奉レ存候、今に不レ始儀ながら宰相樣御手柄なる御事と乍レ憚私儀も恐悅此事に奉レ存候、御內意にて御尋候事はすきと沙汰不レ仕事に候へども、各樣の事は格別に奉レ存候故申進候、夫とも少も御穩密がましき儀に候はゞ中々遠方申進候事にては無レ之候へども、右の件には差てかくし可レ申儀に無レ之候故申進候、必外へ御沙汰は御無用奉レ存候、此紙面御一覽の後火中被レ成可レ被レ下候、以上

六月四日　　　室　新　助

青地藏人樣

一　五月廿五日登城の事に付申進候件々、御承知被レ成御同志の御衆へも被レ達候へとも此間有馬殿、加

納殿より召に參候間登城仕候、於二御御黒書院廊下一木下平三郎私兩人へ段々御尋の儀も有レ之候上、並書付にて御請申上候、兩人不二申合一銘々料簡を以可二申上一旨被二仰出一候に付互に不二申合一候、此間も言語を被レ聞候事、又は御先祖樣へ御孝敬の筋など所存の通申上候、委細は筆紙に難二申進一候、此體に候はば此以後も愚見御聞被レ遊にて可レ有レ之奉レ存候、平三郎儀は父平之丞をよく御存知被レ成、且又平三郎も紀州に被レ成二御座一候時分より、書物の樣など御用承り御馴習の者にて候、私事は曾て御存知被レ遊筋の者にても無レ之候處、同役の中より平三郎私兩人被二召出一、ケ樣の儀御尋被レ遊候事難レ有仕合奉レ存候、此上の御奉公は唯身かまへを不レ仕、所存の通少も枉げ不レ申より外は無レ之と覺悟相定罷在候、遇不遇は畢竟天にて御座候、何とぞ五常の筋へ參候樣にと奉レ願候、何とやらん仁義を假り申樣に被レ存候、是のみ氣遣に奉レ存候、段々相知れ可レ申候、近々御誕生の御沙汰にて島田彈正忠墓目被二仰付一筈に御座候、其に付先頃京より名譽の產母被二召寄一候故、方々難產の家より賴來候、先日御城より召に參り候處に、外へ罷越有合不レ申候に付、町奉行中右產母呼寄殊の外しかり申候、其後は何方より申來候ても不二罷越一常に在宿いたし罷在候、此儀御聞被レ遊町奉行中山出雲守を御前に被レ爲レ召候て、御直に被二仰渡一候は、其方共の心得も尤には候へ共、御城は御急用にても無レ之候、御臨月に被レ爲レ成候はゞ他出やめ候て罷在樣に可二申付一候、其より前は難產の者有レ之候て申來候はゞ、御城をかゝし候て成共先急成方へ罷越候樣に可二申付一旨被二仰渡一候、輕儀に候へ共扨々結構成御儀と乍レ恐奉レ感事に御座候、

比日主人殺し申者兩人日本橋にてさらされ、其後品川口にて張付に被仰付候、一族の儀は御構不被遊候由早速被仰出候、御前代に主人殺し申者有之候へば、父母兄弟も刎首に被仰付候、是は不易の法の樣に一統に心得罷在候處、此度御獨斷より被仰出と奉存候、聖人殺人不孥と申に御叶被成儀と奉存候、三族を夷ぐると申儀は三代の時分其沙汰無之候、秦の始皇より始り申儀にて後世は逆罪の定法に罷成申候、其身は逆罪に候へ共、父子の間にても曾て不存事に御座候、然るに父子兄弟等に及候事ある間敷事に御座候、御尤至極成事に奉存候、當地にても半合點不仕者も有之候て何角と申候へども不宜申儀に御座候、惣て御刑罰餘り寛に過候樣に沙汰仕申候、比日も上州邊にて御法度を背鐵砲打申者有之、久々禁牢の上流罪に相極り申候處、去年か流罪の者島よりのがれ出申をとらへ候て籠へ入候、右鐵砲打申者へ同居致し、籠の中にて島の樣等咄し承候處、島へ參候ても餓死に及候故、とても死なぬ先のがれ出、數日の命成共のべ申度とらへられ申覺悟にて島より逃申候物語致し候を右鐵砲打申者承り、ケ樣に候ては死罪を御宥免被成島へ被遣候詮も無之儀にて候、何とぞ島を今一統輕く被仰付候樣に仕度、其代に只今迄不申上候へ共、同類多有之候間さして可申旨申候、則町奉行中へ其趣を籠の番人達候處、同人さゝせ可申旨にて數輩さし申候、此者共始は陳じ申候へ共、去年霜月とやらん獸の皮をはぎ賣申候を、買申者さし候ゆへ此者罷出、なる程右の者共皮を賣候事分明に候由にて、是も同罪に候間流罪可申付旨寛申候、然共去年霜月迄は渡世可仕樣無之候

故、かくし候て鐵砲打申候へ共、御詮議つよく候故、去年極月より鐵砲をやめ申候て土に埋み置申旨上聞に達候處、其埋申處へ人を被㆑遣御見せ被㆑成候へば、成程鐵砲ほり出申候、其上にて被㆓仰出㆒候は、去年霜月迄は罪人にて候へども、極月よりは改め申候上は舊惡の事に候間、不㆑淺過料申付候てゆるし在所へ返し可㆑申旨被㆓仰出㆒候、扨各々同類さし申者は同類さし申によつて過料にも不㆑及、早速ゆるし候樣にと被㆓仰出㆒候何れも忝がり泣申由に御座候、ヶ樣の事にて御座候、最前二ノ丸へ被㆑成㆓御座㆒候時分、林大學頭召候て孟子梁惠王篇不㆑嗜㆑殺㆑人の章を御聞被㆑遊候由承申候、さやうの儀により御心付被㆑遊候哉と奉㆑存候、（後七月四日賜書）

一　當月十三日木下平三郎同時登城候處、不㆓存寄㆒御前へ被㆓召出㆒、結構の上意冥加至極難㆑有奉㆑存候、先頃以來御尋の儀共有㆑之申上候處、六諭衍義と申書物御前より御出し被㆑成、かなにて和らげ可㆑被㆑遊候、如何奉㆑存候哉、宿へ持參仕候て熟覽可㆑仕旨被㆓仰出㆒候、其故十三日兩人右の書物持參、所存の通申上候、然處に俄に兩人御前へ被㆓召出㆒、先日以來兵庫、遠江を以御尋被㆑遊候儀よく申上候と被㆓思召㆒候、此儀も御尋の儀可㆑有㆑之候間無㆓遠慮㆒可㆓申上㆒候、とかく御前に成替り了簡仕候樣に心得可㆑申旨御直に御意に御座候、其外高倉屋敷の事なども御尋被㆑遊候、退出以後兵庫殿を以書物御出し被㆑成、兩人の內新助に被㆓仰付㆒候間、此書かなにて和らげ可㆑申旨被㆓仰出㆒候、只今高倉屋敷講釋も御斷申上引籠り、右の御用に取懸り罷在候、先日以來兩三度御尋の儀有㆑之、私體に過たる儀ながら申

上候品共有之候、いかゞと無心元奉存候處、右の通上意にて安堵、此上彌所存御尋候はゞ申上にて
可有之奉存候、此事御老親はじめ靑地殿、奥村殿其外例の御衆へ御物語候へと、此度御用に取懸
り心いそがしく候故、何れも書狀を以不申進候、不諱の朝に逢事老後の幸とも可申候、此度の書も
來月中には出來可申かと存候、何とぞ御意に應じ候樣にと願申候、餘程風敎のためにも成可申かと
存候、是も楠諸士敎御意に應じ申故と奉存候

閏七月十九日　　　室　新助

大地新八郎殿

尙以當十五日夜御城御誕生、御男子樣にて御母子樣共に御機嫌候由、恐悅の至奉存候、段々御繁昌
と奉祝候、當地此間色々浮說も有之、且又半は實にても有之候、委細は筆紙に不及候、已上

一　御用の物上中下三冊に書立紙數六七十丁程有之候、先日首尾よく指上候、書の仕立並詞つゞきよ
ろしく、御近習衆にも御きかせ被成候處何れも感通いたし候、是は御前に御とめ置被成候、但餘りく
はしく長く候て、末々の者へ御見せ被成候はゞいかゞに候間、短くいたし直し可上の旨重て被仰出、
只今又取懸り罷在候、先一段致し上候樣にと被仰出候て、一兩日前一段さし上申候、いまだ何の被
仰出も無之候、彌壹通に可仕旨被仰出候はゞ不殘仕立可申候、此間林家父子三人へ諸の抄被
仰出候、出來上り候處不應御意、致し直し可申旨被仰出、御返し被成候由に候、拙者此度さし上

候へば御前には御とめ被レ成候由被二仰出一候へば、御意に應じ申と奉レ存候、隨分首尾能候間御氣遣有間敷候、以上

八月廿四日　　室　新助

大地新八郎殿

一　目安箱の事御聞被レ成通に御座候、八月三日より評定所外腰懸の前に箱出申候、毎月二日十一日廿一日三度出申候、朝より九ツ迄出し候て九ツに徒目付申付にて御城に上り申候、一昨日は高倉屋敷へ罷出候時分、傳奏屋敷に居申人講釋承に罷出候人有レ之、承候へば、一昨朝も未明より訴狀上げ申共箱出申を相待罷在、箱出申と其儘打こみ申由に候、右の人見申由に浪人らしき者麻上下にて挾箱もたせ參候て訴狀取出し入申を見申由に候、此儀閏月に日本橋へ新に御制札出申候、其制札の趣は近き頃落し文等方々に致し置申候、其處あしく或は樣子により候て、罪科にも不レ被二仰付一候て不レ叶儀も可レ有レ之候、其に付來月より評定所外腰懸の前に箱出しおかれ候間、申上候儀は此箱へ入可レ申候、箇樣の場所被二定置一候上に、わきに捨置候とも御取上げ被レ成間敷候、申上候品は、御仕置に掛り御爲に罷成事諸役人裁判私曲の事久敷頭へ願候て埒明不レ申事、此類にて御座候、其外自分の利欲に懸り申事、人に被レ賴候て不慥成事など申上候はゞ、一向に御取上げ被レ成間敷候、品により科に被二仰付一儀も可レ有レ之由申候、然處に其後申上候儀ども、何も借金の事又は自分の爲に懸り申儀共多候間則右箱の前にて

燒捨其者を召寄其段を奉行中より被㆓申渡㆒候由に候、たとへば二日に上げ申をば、十一日朝箱出申時分に燒捨、十一日の訴狀をば、其次の廿一日の朝燒捨申候、其時分其訴狀上げ申者を呼置候て申渡候由に候、其に懲も不㆑致候てひたと燒捨申訴狀多く有㆑之候、とまり申はすくなく、去共是にて諸役人油斷不㆑成事に御座候へば、下より申上候事は無用の事にても、無益の事とは不㆑被㆑申候、其段は先日兵庫頭殿へも申入候、又其内志ある者有㆑之候て、御政事に付簡要の事など申上間敷物にても無㆑之候間、御心長に御覽候樣に先日有馬殿へも申入候へば、一言にてもよき事申上候へば御爲に候由被㆑申候、兵庫殿隨分すなを成人にて物の中よき人に御座候、是も上の御手柄と奉㆑存候、拙者などにても右箱へ封事を入候てもよく御座候、御爲に成候儀を申上候へと被㆓仰出㆒候、上を蔑候へば本意に無㆑之事に奉㆑存候、見合罷在候、其子細は私共へは直に御尋の儀も有㆑之候へば評定所へ出し候事不相應の樣にも有㆑之、且又きはの辻番所に、其日は御徒目付中罷出居被㆑申候て、上申者の姓名を承置申候、先日も旗本の中に家來に爲㆑持遣申者有㆑之候由、主人の名を承置候由申候、公儀へ上申物を家來に爲㆑持遣候は不敬に聞へ申候、私など申上候はゞ直に上下着にて罷越、右の御徒目付に私姓名名乘可㆑申と奉㆑存候、少も不㆑苦事に御座候、去共左候へば、おし出し世間の沙汰に罷成可㆑申と奉㆑存候故、見合候て罷在事に御座候、其内に急に御爲と奉㆑存候儀候はゞ上可㆑申候、其時分即日に御覽に入候故ちか道に御座候、以上

室新助

九月四日

奧村源左衞門様

一　六諭衍義最前被＿仰出＿候以後、かなに和らげ上中下三冊に仕立指上候處に、四五日過候て被＿仰出＿候は、書の仕立宜敷被＿思召＿候、御直にも御覽被＿成、且又御側の衆へも御讀せ被＿成、各へ御聞かせ候處、何も感通仕由申候、然ば和らげ樣も宜敷と被＿思召＿候、然共思召には是より短く被＿成度被＿思召＿、此度上候は一段の紙數七十程も有＿之候、一段を三枚位につめ可＿申、左候はゞ文意達しがたく可＿有＿之候間、只今の樣に感情うつり申間敷被＿思召＿候、とかく人に承候て感じ不＿申候ては、又詮なき事に被＿思召＿候、とかく本書の意を取候て短く致し、且又感情のぬけ不＿申樣に仕見可＿申候、先一段仕候て差上候樣にと重て被＿仰出＿候故、其後父母に孝行の一段短く仕直し、先さし上候處に、二三日前兵庫頭殿よりよびに參候て登城候處、一段宜敷候間此通に不＿殘仕立候樣にと被＿仰出＿、只今宅にて取懸り罷在候、けつく最前くはしく致し候よりは六ケ敷御座候、先は私兵庫頭殿へ申候は餘り短候て紙數無＿之候ては却て見申者輕く可＿存候、最前上候通に候へば、上中下にて一部の書と可＿申、其上文段長く候へば其品とも多候故、面白くも存候て見可＿申、然ば箇樣に被＿仰出＿候上に申上候事いかゞに奉＿存候へども、愚見は右の通に奉＿存候旨申候へば、幾度も左樣の料簡は申上候てよく候間、可＿申上＿旨にて被＿申上＿候へば、重て被＿仰出＿候は、成程長く候へば文段の移もよく、道理もくはしく候へ

どもヽ末々御見せ被レ成度との事に候、然ば三冊共有レ之候ては、輕者などは求めがたくも可レ有レ之候、一冊にて求候も心易候へば、遍く末々に取はやし申筈に被二思召一候、何程短くても、此度上より被レ仰付一御廣も被レ成と有レ之候はゞ輕は存まじく候間、とかく短く被レ成度と被二思召一候由被レ仰出一候、御意加り候て箇樣に手短く被レ成候儀に候へば、御威光にてはやり可レ申候、其段は乍恐御尤に奉レ存候由申候て罷歸申候、幸最前請書仕候時分書損の一段有レ之候間此度進申候、六諭は「孝二順父母一、尊二敬長上一、和二睦鄕里一、敎二訓子孫一、各安二生理一、毋レ作二非爲一」此通にて候、此度進候書損しは孝順父母の一段にて候、殘りも此格に和らげ申物に御座候、左樣御心得御覽可レ被レ成候、箇樣に致し候へば、上中下にて二段宛を一冊に致し、合て紙數六七十張も有レ之候、此度改て調申候、一冊に致し紙數も三十枚迄も有レ之間敷と存候

一 當地評定所外腰懸に目安箱出申事御聞可レ被レ成候、是も元來根有事にて御座候、早速の事と驚申儀にて、世に志有レ之者無レ之、末々には己が身上事にあつからぬ儀を申上候て、六ヶ敷事にもあい候へば不レ入物と存候、此間の書一統大方は燒捨申候 （九月四日 鳩書）

一 私御用の事六諭衍義、書體先日かなにて和らげ申候、初篇草稿有レ之に付長公迄進申候、御覽可レ被レ成存候其後事短につめ候て調可レ申旨被二仰出一、半分程に短く仕直しさし上候へば、奥の律の處御前にて御自身御考被レ遊、御前より調候て出申候、律は其通に可レ仕由に御座候、口の勸諭の處も今少和

らかに仕見可ㇾ申由、其外少づゝ御好共有ㇾ之候、只今に至り未相濟不ㇾ申候、愚見と合不ㇾ申候處共有ㇾ之候へども、とかく御好みの事に候へば、先其通仕候、何とぞ此後御學文被ㇾ遊候樣に致し度奉ㇾ存候、其所ㇾ教を臣とする事を好て、其所ㇾ受ㇾ教を臣とする事を不ㇾ好の弊、古より明主にも有ㇾ之事と見へ申候、左樣にては大有爲の望は無ㇾ之と奉ㇾ存候、以上　（九月十八日賜禮幹書）

一　今日高倉屋敷講日に付罷出申候、御用有ㇾ之候へば、此講の儀御斷申候へども只今土肥氏病氣無人に付、兼て相勤申儀に御座候、傳奏屋敷守の人高倉屋敷へ罷出物語にて候、當廿一日目安箱例の通評定所外腰掛の前へ出申候、只今まで目安上申者何も自分の事申上候故、過半は其箱の處にて穴をほり候て、次の箱出申日に燒失被ㇾ仰付ㇾ候、每度其通に御座候、せつかく右箱出申候處、其以後一人もしかと致したる御政事に懸り申儀申上者も無ㇾ之體にて氣の毒に存候、然處に當廿一日何者に候哉、一僕召連申もの兩人つれ候て罷越、たてふみの樣に餘程のかさ有ㇾ之物各一卷持參致し箱へ投し申候、一人は上書に御爲の儀申上候由調申候、一人は御忠節の事申上候由調候、其際辻番に必御小人目付（其元足輕日付の事）一人罷在候て、其姓名を承置申候、右兩人に相尋候處、各へ申入に不ㇾ及候、書付の內に調置候由申候故、左樣に候ても奉行中より被ㇾ申渡ㇾ候て、承申筈に候由色々申候へ共、夫に不ㇾ及候、總て只今の奉行中何れも物のわけ知たる人は無ㇾ之候、それとも不ㇾ入事にて候、散々に町奉行などを惡口致し候由、左樣の者を達てとがめ候は、向後上げ申間敷候間、强て申間敷由申し渡し候故、目付まけ候て、たゞ兩

人壹人宛供召し連れ書付兩通入れ申とばかり當番申す由に候、只今迄終に箇樣の者無レ之由に候、上書の致樣も一くせ有レ之候、たゞ者とは不レ被レ存候、何を申し上候哉、心にくう存じ候、先日も兵庫殿只今まで何の益もなき事ばかり申上候とて、氣の毒がりにて御座候、私事は此の方より申し出したる儀に候故氣の毒に存候、何とぞ直言の人も世に有レ之樣にと存事に御座候、今日承候故早々書付進申候、以上　（九月廿四日　賜書）

一　從レ是進申候六諭衍義和語の物も相違御覽被レ成候由致二承知一候、其後半分程簡略に致し候て不レ殘仕直し、前月廿七日指上申候、其後何の被二仰出一も無レ之候、如何相濟候哉難レ量奉レ存候、先日申進候草稿一篇其元に御留置可レ被レ成候此方に入不レ申候、殘篇も追々御目に懸可レ申候、此書鄉曲小民の爲に仕物に候故、君上の爲に成申儀は見へ不レ申候、此度和語に御直し被レ成候も第一在々所々町人百姓の教諭にて御座候、餘事致二省略一候

十月十九日　　室　新助

靑地藏人樣

一　六諭衍義先以長公へ草稿一段進申候、御覽被レ成候由致二承知一候、其後各別簡略に調直し不レ殘相濟、前月廿七日指上申候、其後何の被二仰出一も無レ之候、大方宜敷可レ有レ之由有馬兵庫頭殿御申候、去共此分にては中々いまだ相濟申間敷と奉レ存候、定て追て何とぞ可レ被二仰出一と奉レ存候、明君家訓比日楠

諸士敎と改名私序をも加、且又末に此度調遣候跋語をも附候て新に仕直し申候、尤板は舊板を用候て少宛相違の處は埋木を致し改申候、火葬の一段も此度加へ申候すきと原本の通に罷成申候、其上書柄も各別宜敷相見へ候故、早速入二御覽一度有馬殿まで遣し候處、少相違事出來滯申と見へ申候、元來新規に仕出し候ものは書物に限不レ申、先達て公儀へ相達し申筈に當夏か町人へ被二仰渡一候、右諸士敎は明君家訓と同物にて、少宛舊板を改申ばかりの儀に候故、序文等加へ候へば是以新規の物に候處、御屆不レ申事書物屋不念と申物に御座候、去共此儀は私は曾て不レ存儀に候、此書の儀は兼て上も御存知被レ遊候故、此度新製早速御覽に入度指上申事は成程尤に候間、先請取置樣子次第に御覽にも入候樣に可レ被レ致旨兵庫頭殿被レ申候、右書肆は京都にて茨木多左衞門と申候、柳枝軒と號申候、水戸御家書とも此者不レ殘請取印行いたし、印板殊の外念を入候て、此度の諸士敎なども隨分雅に仕申候ゆへ、私料簡には御覽にも入置候て、追て板行の儀など有レ之候はゞ、此者に被二仰付一候樣にもと奉レ存候處、右の間違にて茨木方不念の樣にも罷成可レ申哉と氣に毒に奉レ存候、新板とは違ひ申段は有馬殿へも申入置候、有馬殿も其合點にて御座候、さしたる御咎は有まじきかと奉レ存候、此事長公へも御物語被レ成可レ被レ下候、外へは奥村殿抔の外には御沙汰御無用奉レ存候、ふと書肆方抔へ相聞へ候へば、書物屋と申物は互に妬忌仕候故、沙汰仕候へば淺露に罷成候間、其御心得被レ成可レ被レ下候、以上、（十月十九日與二禮幹一書中）

一　先日黑書院へ出御、御譜第大名衆不レ殘被二罷出一、御直に被二仰渡一有レ之由、委細の儀は不レ奉レ存候、大抵御譜第衆の儀は別て御大切に被二思召一候、然處に近年風儀惡敷、思召に不二相叶一儀共有レ之に付ての儀と申候、其故御懇意難レ有と申段は何れも外にても被レ申候へ共、被二仰渡一候儀御沙汰無レ之候、追て諸大名一統に火事場並番所等へ出し申候騎馬人數減少仕候樣に御定被二仰出一候、且又日傭をさしやめ候樣にとの儀に御座候、「是は御書付出申候、定て貴藩抔へも被二仰渡一可レ有レ之と奉レ存候、只今迄は御城門御番など被レ勤候衆過半日傭にて御座候、侍分の者ばかり家來にて御座候由に御座候、火事場抔へ被レ出候時分も其通に御座候、是にては賴なき儀に候由、兼て世上にても申習候、連々御聽に達し申故と奉レ存候

一　會津近所公領十萬石ばかりの百姓、人數五萬人程御代官と確執に及び候て、此の間御僉議にて御座候、此處元來直江山城守領分にて、百姓共其の時分よりの地侍にて、兼ねて六ヶ敷候由に御座候、如何樣御代官の誤も有レ之に付、理非御吟味の上御裁斷被二仰出一にて可レ有レ之と奉レ存候、萬一百姓共礦はり候はゞ一々搦め取る樣にとの儀にて、會津の御家へ其の用意被二仰出一候、夫に付彼御家中此の間匆劇の由申候、十萬石の民共に候間徒黨いたし候はゞ、少し六ヶ敷可レ有レ之と申候、定て無事に相濟可レ申と奉レ存候

一　寺社方隨分輕く遣譽候樣に被二仰出一、修理等大方は指止又は延引に罷成候に付、方々寺社修理の願

等一圓難ㇾ調相聞へ申候、其に付上野中堂大師堂などの修復も宮様より御願埓明不ㇾ申、其上御本坊御願被ㇾ成候へ共はか取り不ㇾ申候由、其に付宮様御隱居御願可ㇾ被ㇾ成などと先頃取沙汰御座候、法皇様へ御窺も被ㇾ成候哉、俄に京都へ御家老罷上り申候、此儀風說にも及候て如何と奉ㇾ存候處、比日相濟候て珍重奉ㇾ存候、先頃御小納戶衆浦上彌五左衞門と申人を御城より直に被ㇾ遣、只今國用不足に付寺社方造營の願等諸方取次不ㇾ申候、上野の事は各別の儀に候故、外の寺社と同格に不ㇾ被ㇾ思召ㇾ候、其段は寺社奉行中とくと料簡不ㇾ仕候故、一統に御取次不ㇾ申と被ㇾ思召ㇾ候、第一御本坊は修理の事などは御延引被ㇾ遊儀にて無ㇾ之候、いか様にも御願の通可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候、乍ㇾ去近年寺社方以外華麗廣大に罷成候、無益の費と被ㇾ思召ㇾ候、此儀は宮様抔より急度御改被ㇾ成候へば諸宗の規範にも罷成儀に候、然れば天下の爲に候間、御居宅各別小分に被ㇾ遊修復御願被ㇾ成候はゞ、思召にも相叶可ㇾ然旨被ㇾ申候由、宮様にも御合點被ㇾ成すきと此度こぼち候て、此度慈眼大師の時の廣さに被ㇾ成、立家八百坪ほどに被ㇾ仰付ㇾ候由御座候、（是迄三千五百坪計有ㇾ之由）只今迄の御本坊は至極大なる事にて候、大方御城の少は狹き物に候由申候、傳通院も比日本堂出來申候、先日參候て見申候、七間梁ばかりにて卑狹成物に御座候、箇樣の寺より如ㇾ此に罷成候間、向後は寺社は段々輕く可ㇾ罷成ㇾ候

一　嶋田彈正御留守居組小身成人（山本喜右衞間と申人の由）比日封事を指上申候、彼箱へ入申旨申候、又は彈正に直に出し申共申候、御旗本困窮を御救被ㇾ成候樣との事に候、上にも金銀御不如意の事はよく奉ㇾ存候、金

銀の出處有レ之と御座候て御費用も懸り申間敷候、其儀は御尋被レ成候て可二申上一旨申上候由に候、いかゞの才覺にて候哉、此間の目付衆を以御僉議被二仰付一などと申候木下清平と申御目付衆を以、御僉議被二仰付一候由、一往申上置へば尤成事に被二思召一候由被二仰出一候由申候其身老人の事にて餘命も無レ之候間、如何樣被二仰付一候ても不レ苦候由申上候由申候、其籌策はいかやうの儀に候哉不レ存候へども、志は奇特と奉レ存候、小普請は不レ殘御留守居の支配にて候處、去年小普請支配十人被二仰付一候て、二百俵以上の面々はすきと此支配に罷成申候、貳百俵に未滿の人々計其儘御留守居の支配にて居申候、又は封事上げ申人は定て百俵二百俵ばかりの人たるべし

一 飯田町名主江塚五郎兵衛と申者日比學文を好み、近所に三輪善藏と申候て、只今江戸にて專ら王陽明の學を唱へ申人有レ之候、講席へ罷出申候、人がらも實體成者に候由兼て承り申候、高倉屋敷へも一兩度見へ申候、比日町奉行所へ被レ呼候て、奇特に被二思召一候旨御褒美にて候、何も賞は不レ被レ下候へどもいかさま町中の勸にも可二罷成一候

三輪善藏江戸に王學を以發向致し、歷々にも餘程信用の人有レ之候、先日若年寄衆へ被レ呼候由承申候、講談などいたし候哉、其儀は不レ承候、人がら實體の者にて候、私も知人にて候、久しく酒井雅樂頭殿に用人役勤申者にて、世間體もよく見へ申候、酒井修理大夫殿儒臣松田善三郎も、其後有馬兵庫頭殿へ重て被レ呼候て講談致し候由、達て辭退候へ共ゆるし無レ之由にて講じ申候由に候、是等の人畢竟被二召出一との御儀候哉、いかゞの思召候哉不レ奉レ存候

一　先頃より林大學頭父子には謠抄を被㆓仰付㆒、一通り相濟上げ候處にあしく候て聞へ不㆑申候間、仕直し可㆑申旨にて御返し被㆑成、于㆑今相濟不㆑申、人見又兵衛、林又右衛門、人見七郎右衛門三人へは令義解令集解（令義解は板有㆑之候、集解板に無㆑之候、定て板行可㆑被㆓仰付㆒被㆓思召㆒、點被㆓仰付㆒と奉㆑存候）加點を被㆓仰付㆒候、是もいまだ出來不㆑仕由に候、六諭衍義をば荻生惣右衛門に點被㆓仰付㆒候、惣右衛門は惣七郎兄にて御座候、父は元來荻生芳庵公儀の醫にて候處に、常憲院樣の御代歟、子細有㆑之候て御扶持を被㆑放候、其時分惣右衛門兄弟上總へ引籠候て、多年罷在候內學文いたし候由被㆑申候、牧野左平次殿と由緒有㆑之者に御座候、左平次殿舍兄新九郎も、其時分上總へ一所に引籠被㆑居申候、然處に常憲院樣御代惣右衛門事松平美濃守殿家に仕へ御目見など仕候に付弟惣七郎を被㆓召出㆒候、兄をさし置弟を被㆓召出㆒候事、いかゞの儀に候哉不㆑存候、美濃守殿殊の外惣右衛門を馳走被㆑致、死去候時分遺言にて加增被㆓申付㆒候、只今五百石取申由に候、美濃守殿全盛の時分勤候故、長崎へ申遣書籍抔大分搜索致し候由、只今甲斐守殿へ其儘仕へ候て罷在候、金銀書籍共に富有の者にて候、當地にて第一の博學と最負の人には申候、其身も殊の外自負致し罷在體にて候、只今五十餘の者に御座候、此度六諭衍義の點被㆓仰付㆒候事も、彼が門下にては規模に申と見へ申候、先頃六諭衍義本書も板に被㆑成度物に御座候、御聞被㆑成候へば中に俗語どもまじり合點難㆑仕由に候、唐の俗語よく存知申者をば承及不㆑申候哉と有馬殿被㆑申候、私申候は、俗語は字義にて不㆑參者にて候、前後の文段にて料簡仕候へば大方通じ申儀も有㆑之候へども、夫は推量と申物に候間、俗語を

よく存知申人に被二仰付一可レ然と奉レ存候、岡島援之と申者長崎に久しく罷在候、唐人と出合俗語も熟し申由承申旨申候、援之は是も甲斐守殿扶持人にて荻生惣右衛門より才子に御座候、其故惣右衛門も援之に唐音など承申候由に御座候、さやうの儀にて六諭衍義の點惣右衛門に被二仰付一たる物と奉レ存候、深見新右衛門父子などへ被二仰付一可レ然物に候へども、新右衛門父子には外に大清會典と申大部の書の和らぎを被二仰付一候大明會典と申書有レ之候、夫を清朝に至候て少宛增減致したる物と見へ申候、新渡の書にて外には無レ之候、大明會典は見申候、中々難レ讀物にて候、新右衛門父子も難儀に見へ申候、其故新右衛門家督久太夫比日長崎へ罷越、唐人に出會吟味可レ仕旨願申上候て追付罷立申候、太儀成事に御座候、來年一年も逗留可レ仕樣子に御座候、存出し次第に申進候、例の御樂へ御傳可レ被レ下候、以上

十月廿四日　　　室　新助

青地藏人樣

追て當地大手並櫻田下馬札立直り申候事御聞可レ被レ成と奉レ存候、已上

一　御書物御獻上の事比日承候へば、大名府志の類地志の書十四部御獻上の旨御座候、上にも御書物御好み被レ遊と奉レ存候、比日は時節に候故毎度御鷹野に御成被レ遊候、比日麻布邊に居申候山下廣內と申兼信流の軍者、一冊の軍書を目安箱に入候て上申候、近年不レ承直言の由承申候、勿論申所は謙信を聖人の樣に申候、畢竟軍術へおとし申主意と聞へ申候へば、信用には不レ足候へども、いかにしても申

度事只少も無㆓遠慮㆒申上候、委細は不㆑能㆓筆紙㆒候、然處御黒書院溜りの間へ御老中御列座にて、寺社勘定町三奉行並其外諸役人とも被㆑爲㆑召被㆓仰渡㆒候は、廣内事輕者に候處奇特被㆓思召㆒候、斯樣の儀御聞被㆑遊御機嫌に被㆓思召㆒候、各事は其役人に候處終に箇樣の儀不㆓申上㆒候、夫に付右廣内諫言も御見せ被㆑遊候由、夫故三奉行方には寫置申由に御座候、扨々上の御度量廣き事乍㆑恐奉㆑感候、皆承候者さへ推參の申樣などゝ申候て不快に見へ候處、上には一向に無㆓御構㆒却て御機嫌に被㆓思召㆒候旨、御老中はじめ諸役人に被㆓仰渡㆒事中々凡慮難㆑量事にて諸人奉㆑感候、小柳町に九歳と成申候竹松と申小兒、父盲目に成申を青菜など賣候て、毎日貳三十錢程を得候て、小米を買粥にいたし父を養申候、其身は去年以來豆腐の糟を給居申候、其段上達候て先日町奉行所へ被㆑召銀子など被㆑下、町の者に被㆓仰渡㆒養育候樣にとの儀に御座候、九歳とは申候得共七歳計に見へ申由、是等も前代未聞の孝子と奉㆑存候、飯田町名主江塚五郎兵衛と申者町人にて學文好み、人品實體にて其品にても人々譽申者にて候、先日町奉行所に被㆑召是も御褒美にて御座候、箇樣の者も出來候へども、又侍には盜賊有㆑之候、比日も追はぎなど致し候由承り申候、何とぞ上の御德化あまねく下へ及候て風俗改り候へかしと奉㆑存候、以上　（十二月九日　先生與㆓山本恭庸㆒書）

親類又は仲間出會の節覺

一　祝儀出會の節は吸物壹ッ肴壹ッ取肴壹ッ

料理平生の通に可㆑仕候、平生出會の料理一汁三菜、此内一菜は魚類にても、平生より心を付候儀勝手次第、其外に香物吸物壹、肴壹貳種、料理數堅く右より過不㆑申樣に相心得、其内可㆑成程は輕仕候樣に可㆑仕候、且又後段無㆑之、濃茶出候儀勿論無㆑之筈の事に候

但有合時分くわし一色程は、時により出可㆑申候

一 麪類出候節は、料理相止可㆑申、所望の者に計有合香物壹出可㆑申候

一 親類等も右の段兼て申聞置、先樣にても急度右の通相心得、先樣へ參候節、萬一右定を背候儀有㆑之儀に候はゝ、料理給候儀不㆑仕樣相心得可㆑申候

巳十二月十六日

右の通御側向の衆より被㆓仰聞㆒候間、定て此間仲間にても右申合何も可㆓相心得㆒候

一 荻生惣右衛門に和點被㆓仰付㆒、頃日書肆に被㆓仰付㆒印行仕候、當月廿日時分出來可㆑仕旨承候、去どもいまだ出來の儀不㆑承候、此儀は段々子細有㆑之儀に御座候、荻生門下にては殊の外規模に仕樣承候、とかく重て可㆓申上㆒候　以上

十二月廿四日

尚以先日山本源右殿へやらん有增申遣候、當地靑山に山下廣内と申者謙信流軍者にて候、先日目安箱へ一冊の書投進申候、題は武門大和大乘と申候由、其書去方にて一遍ひそかに見申候、さて〳〵

直言共にて御座候、去とては豪士にて御座候、去ども畢竟儒者にては治りがたく候間、日本は中國の風俗と違候由、又は儒佛神共に捨がたく候事、又謙信を聖賢の樣に稱し申事、是等にて御推察可㆑被㆑成不㆑足㆓信用㆒儀に候へ共、御當代事を少も不㆑憚論申候、其處にはいか樣尤成事も有㆑之候、明君家訓をも散々に申置候、かやうの小さ成事にて天下は治申事にて無㆑之由申候、其外委細は筆紙難㆓申盡㆒候、右廣內書中へ申置候事、其元長公源左衛門殿、武兵衛殿などの外へは必御はなし被㆑成間敷候、上には其一冊を御老中三奉行手前へ御出し被㆑成、且又御黑書院溜の間にて、御老中御列座にて廣內事奇特に被㆓思召㆒候、廣內など輕者にてさへ如㆑此事申上候處に、三奉行など終にかやうの事不㆓申上㆒候、廣內一冊共に付御見せ被㆑成候、則御老中被㆓仰渡㆒候、是も終に不㆑承事に存候、英主の所爲と奉㆑存候、右廣內書中には上の被㆑遊方は小器と申物に候、天下は左樣にては不㆓罷成㆒候、紀州を治られ候格に被㆓思召㆒候へども、天下と國とは違申候、御簡略と有㆑之候得共畢竟御手廻に罷成候、其段衆人よく存候、中々心服不㆑仕候、御鷹野は昔より有事には候へども民の難儀に及申候、此外に御慰に成申事も可㆑有㆑之、度々御出被㆑成候ては民の難儀を御慰みに被㆑成候事合點不㆑參候などと申事にて、さて〳〵何世にも人有㆑之と存候て感淚に及申候、明君家訓をば細川殿家來武士訓の作者と同事と心得罷在候滅板被㆓仰付㆒可㆑然などと書し、世に上の御作などと申者有㆑之候、左候はゞかやうの小き事、上の被㆑遊と存候ては、御爲いかゞ候間滅板被㆓仰付㆒候樣との事にて候、二十枚ほど

も可レ有レ之候、細かに書候て餘程長き物にて御座候、此事外御さたは御無用に存候、以上
追て廣内書中今一ツ尤成事は、古より明主名將終に金銀を大切に不レ仕候、不レ足申樣に候へども、近頃正學ごときの者にてもあれ程の事を存立候へ共、金銀に心は懸不レ申候、天下の金銀は上の金銀にて候、其を必府庫におさめられ度と被二思召一候事至て小き事の由書申候、さて〳〵申たる事と奉レ存候、已上（右嶋二髮帶一書）

享保七年

一六諭衍義に舊臘唐本を荻生惣右衛門に和點被二仰付一印行被二仰付一、臘月廿四日時分出來仕候筈に候由書物屋申聞せ候、其後出來の儀未承不レ申候、此書中國の俗語まじり候由御聞被レ遊候、左候へば左樣の儀不レ存候ては、和點難レ仕可レ有レ之と被二思召一いかゞ哉と去秋有馬兵庫殿御尋にて候故、前後の文體にて見候へば、大方は相知申物に候へども、俗語を兼て存知候者に被二仰付一候はゞ可レ然奉レ存候旨申上候、其後惣右衛門に被二仰付一、是は松平美濃守殿時分より彼家に仕へ、只今甲斐守殿家來にて御座候、惣右衛門弟惣七郎只今私共同役にて、高倉屋しき講釋も相加り勤申候、惣右衛門事只今江戸にて博學文章等をもて鳴り申候、門弟も數多有レ之候、六諭衍義の譯文は印行不レ被二仰付一筈にも罷成候哉何の沙汰も不レ承候、但先本書を印行被二仰付一、其上にかな書をも可レ被二仰付一被二思召一候哉難レ量奉レ存候

一舊臘少公より預二貴翰一候故、其返書に當地青山山下廣内と申者の事申進候、定て御聞可レ被レ成と

奉レ存候、其後何の沙汰も不レ承候、當年には段々御改格の儀可レ有レ之と申事に御座候、京大坂等の御番人向後は引越候て、定役に罷成可レ申などと申候、小普請の內病氣の者共は八王寺邊の在鄕へ可レ參などと申候、いかさま少し存當り申儀も有レ之候間、左樣の儀も可レ有レ之と奉レ存候、第一江戶餘り人多に罷成繁華至極にて、夫故火事も度々有レ之諸物も高直侍屋敷も拂底に罷成申候ゆへ、江戶の戶口を減候樣に可レ被レ遊との儀にても可レ有レ之と存候

正月七日　　　　　室　新　助

青地藏人樣

一　松平伊豫守殿跡結構被二仰出一候、乍レ恐御尤の儀と奉レ存候、去春か御城下乘へ松平源七郞と申人箱を捨置申候、即刻上り申候、舊臘か被二仰出一參州の內中根村とやらんにて芝地十三町被レ下レ之、此地田地に辟き代々領候樣にとの儀にて、左樣の入用とて白銀百枚被レ下候、於二御評定所一大目付橫田備中守御目付平岡市右衞門立合被二仰渡一候、但源七郞親市郞右衞門とやらんに被レ下候、源七郞儀は東照宮御判の物路次に捨置申儀、不屆被二思召一急度可レ被二仰付一候得共御宥免被レ遊候、當分は親市郞右衞門方へ指置、徘徊不レ仕候樣可レ仕旨に御座候、右市郞右衞門事只今老人に候、子源七郞右の通訴狀に及候、御前代も訴訟仕候得共御取上無レ之候處、此度御聞屆被レ遊候由御座候、市郞右衞門は淸泰院樣曾孫の由御座候、其後祖父か父か三州の內城主にて、其時分の儀に候哉東照宮御判物所持仕候、何とぞ子

細候て家督斷絕に及申候と見へ申候、是等も御筋目なる御仕置と乍レ恐奉レ存候、山下廣内事源右殿へ申遣候を御聞被レ成候由被二仰下一候、其後少公へ委細申進候、定て相屆可レ申と存候、當地にても委細存申者は無レ之候、私はちと存候筋候て左の諫書も寫を一覽いたし申候、其後何の御沙汰も無レ之候、畢竟御用に成人品とは不レ奉レ存候、其故歟御奉公の御沙汰不レ承候、去共當代には珍敷器量の人品と奉レ存候、只今人心安不レ申事は、常憲院樣御代以後新に被二召出一候者、御目見以上の者共實子は跡被レ下候、養子にはすきと不二罷成一跡斷絕仕候、舊冬以來は醫師別て多く不レ殘斷絕いたし候、實子有レ之ても代々實子可レ有レ之候にても無レ之候へば、一度は家絕申にて御座候、去年も儒者の內秋山半藏と申もの實子無レ之跡絕申候、俄に養子は四國實父の方へ罷歸、妻は男土岐重元と申醫官の者へ引取申候、其外老母妻女など有レ之者、實子無レ之候へば跡絕申候故、何れも存生の內より妻女など悲み罷在候、舊臘御右筆役神原三郎左衞門と申者、實子無レ之候に付養子願候處に、此者文昭院樣御代被二召出一候故願叶不レ申候、其故此間御暇申候由沙汰仕候、是に付新座の者共はすきと眉をひそめ罷在候、冗官を沙汰仕候事は唐太宗貞觀の時分も有レ之事候得共、只今の役料の樣成事にて候、新座にても被二召出一餘を一度被レ下候へば、是は常䌷にて候、子孫の事は我人大切に存事に候へば忠臣は不レ存候、其外の者は第一子孫の儀を存候て御奉公も精出候、然處にヶ樣に候ては此後御暇申者多く可レ有レ之と奉レ存候、御先代修に不レ承候に御座候、御藏入は百萬石と申候、常憲院樣華奢を御極に付、京、大阪、江戸等の御藏儲來

私方に暫逗留仕候内にも、權七郎定て笑止に存候事ども可ㇾ有ㇾ之と奉ㇾ存候、小谷久右衛門事を亡友伊兵衛殿苦勞に被ㇾ致私どもにも被ㇾ申候、只今身に存當り申候、何程愚痴にても小氣に候へば少理直成方有ㇾ之候處に、しかも小氣にも無ㇾ之候故至て危き物に奉ㇾ存候、無㆓是非㆒事に御座候、何卒其内天助も有ㇾ之少し宛も物の合點致し、禍を得不ㇾ申程にも罷成候へば仕合奉ㇾ存候、不ㇾ入事ふと申出候て事長罷成申候、是に付ても私身後文字の事は新八郎に託し申外無ㇾ之候故、此者息災を願申儀に御座候、濕瘡もすきと快罷成候由、大慶に存候

一　春來御用の儀被㆓仰付㆒、且又先日は御書被㆓成下㆒、御領國の絹御献上被ㇾ遊候由にて私へも被ㇾ懸㆓御意㆒、重疊難ㇾ有奉ㇾ存候、此儀苛地御兄弟其外御懇意の衆中へも被㆓仰達㆒可ㇾ被ㇾ下候

一　私御用の儀段々首尾よく相勤申候内、六諭衍義かな書の物も大方相濟、此間序跋被㆓仰付㆒候、近日相濟可ㇾ申と存候、追付判行可仕筈にて候間、當年中には其御地などへも可ㇾ參と存候、段々御好共有ㇾ之候處無ㇾ滯大方濟大慶不ㇾ過ㇾ之存候、委細は權七郎物語可ㇾ申候

二月廿八日　　室　新助

奥村源左衛門様

尙以山下廣内事其後何とも不ㇾ承候、拜領の事可ㇾ爲㆓虚說㆒奉ㇾ存候、志は奇特に候へども、申樣何とも未熟千萬成事に候へば、中々御信用には不ㇾ足事に候處、其後御沙汰無ㇾ之かと奉ㇾ存候、已上

二月廿二日の貴翰忝致二拜見一候、先以御健康無二御別條一、貴丈彌御堅固御勤被レ成旨珍重奉レ存候、正月廿二日の貴翰も相達申候、春來御用繁候て他事をば拋却仕候に付、其御地へも書狀を調不レ申、各樣へ御無音罷過候、前月廿二日の御書中には、賤息忠三郎事など被二仰下一御懇篤の御紙上共細讀、感淚にも及申體に御座候、此度取込是等の儀は省略仕候、追て可二申上一候

一　昨八日御用候て早々可二罷出一旨有馬兵庫頭殿より申來、罷出候處、御座ノ間へ被二召出一、書經大禹謨の內「人心惟危、道心惟微」の一段講釋仕候、首尾無二殘處一候間先々御氣遣被レ成被レ下間敷候、其節の有增左に申進候通に御座候、去年より私へ御用の儀被二仰渡一候は、御黑書院竹ノ御廊下迄罷出申候、昨日も右の處へ罷出候處兵庫殿被出、御先祖樣へ御勤の儀御尋被レ遊候處、當分存寄の趣申上候へば、彌相考追て委細可二申上一旨被二仰出一、其上にていまた御用候間ひかへ可レ申旨に御座候故、右の所に相待罷在候處、御近習衆大島雲平と申人被二罷出一、只今御前へ被二召出一講釋被二仰付一候、書經の內を御聞可レ被レ遊候、何れの處講可レ申候哉可レ然處を申上候樣にとの事に御座候、私申候は、二典三謨何れと乍レ申「人心惟危、道心惟微」と申一段別て肝要の段にて候間、是を講じ可レ然奉レ存候旨申上候處、追付御前へ可二罷出一旨にて右御黑書院より直に御座間へ罷出候處に、御直に近寄候樣にと再三上意にて候故、御成被レ遊候向ひの敷居際までにじり寄候處に、敷居の內へ入候樣に上意に付、敷居半に懸り候程ににじり寄候て平伏仕罷在候、然處に此間被二仰付一候六諭衍義のかな書彌出來仕候哉と御尋候故、段

段出來仕候旨申上候、其より高倉屋敷講釋の事其外御尋の儀共有レ之、一々御請申上候、其後宰相樣御儀御尋被レ遊候、年寄候へども健にて國政等の事今以自身に承候樣に御聞被レ遊候、其通に候哉と御尋候故申上候は、御意の通に御座候、生質丈夫の上に平生養生能候故、只今も年に合候ては並には勝れ候て達者に御座候、國政並家中仕置等の事大小共に自分に不レ承儀は無レ之候由申上候處、法律などの事日頃定置申儀は無レ之哉と御尋に候故、私申上候は、別におし立定置申儀は不レ承候、第一大法の儀は江戶の御法令を守り候て、其通に家中へも急度申渡候、其外少々の儀は時に依候て申出候由申上候處、又御意被レ遊候は、家老共の中加賀守目がねを以申付候ものは無レ之候哉と御尋に候故、私申上候は、代々家老職を勤申は相極り罷在候、其外は目がねにて申付候ものも有レ之由申上候へば、其等は拔群に取立候哉の旨御尋被レ遊候故、私申上候は、目がねにて申付候者も大方先祖家筋にて申付候故、厚祿の者共に御座候、拔群取立候者は承不レ申候由申上候、扨御意には、利家は武功と申隱もなき人がらにて候、其後はあの家に指繼國政等取立申は誰にて候哉と御意にて候故、私申上候、利家は元祖にて候、二代は利長と申候、是は病身にて候故差て承及たる儀も無レ之候、三代肥前守事は國政の儀に心慮を盡し、此代に立置申儀共今以不易の段に罷成申候、あの家にては名人の樣に申慣候、扨其子筑前守事早世仕候へども至極仁心有レ之者にて、忠孝ともに等しき生付にて、只今あの家の者共殊の外したひ申由申上候へば、其後私事加州には何年罷在候哉、加州雪は何程降候哉御尋被レ遊候故、夫々御請

申上候處に、只今講釋御聞可ㇾ被ㇾ遊候、見臺持て參候へと御小性衆へ被ㇾ仰付ㇾ候へば、其儘御見臺持參仕候處に御成被ㇾ遊候、御間敷居の內へ見臺直し候へと上意に候、拙私儀右御緣頰に平伏致罷在候處、御間の內へはいり候へと上意に候へば、相伺罷在候處再三上意に候へば、御見臺の際により不ㇾ申候ては講釋成不ㇾ申事故、乍ㇾ慮外ㇾ足を半分御間の敷居にかけ候て、御見臺の際へ寄兩手を突講釋仕候、其に付上意には文字等の義理上御不案內に候へば、委敷申上候ても御得心難ㇾ被ㇾ遊候間、文字の譯は不ㇾ申候て唯道理を第一に申上候樣にと、御笑被ㇾ遊ながら御謙遜の御樣子にて候、講釋濟候て其儘にじり下り候て退出仕候處に、御意には講釋能わけ立申事にて候、ケ樣に候へば御前の御耳などへも落申候、重ても今日の通にて心得候樣にと御意に候故、其儘立とまり候て御禮申上退出致し申候、先有增此通にて御座候、冥加に叶ひ難ㇾ有仕合可ㇾ申樣は無ㇾ之候、是も御家より罷出申故一ッは御心易も被ㇾ思召ㇾ候かと奉ㇾ存候へば、宰相樣御威光と難ㇾ有奉ㇾ存候、然共此段申上候事ほいかゞと奉ㇾ存候故、心底にはかり存罷在候、其元へは貴丈の外へは不ㇾ申進ㇾ候、講釋は人心惟危の一段蔡沈が註迄講申事に候、劣甥新八郎へも此趣被ㇾ仰知ㇾ可ㇾ被ㇾ下候、奥村殿小寺殿尤御舍弟樣へも被ㇾ仰達ㇾ可ㇾ被ㇾ下候、今日の便に早速申進候、此紙面昨夜燈下に調候間わけ見へ申間敷候、以上

三月九日　　　　室　新助

青地藏人樣

尙以左に申通講釋の時分、御側衆御小性衆、御小納戶衆、御側醫師衆不レ殘御次にて承被レ申候、何も罷出聞候樣にと上意にて候、八ツ半時の事に候故御老中などは不レ殘退出の跡にて御座候、扨々晴がましき事に出合候て、退出候へば汗に罷成申候、御威光故とは申ながら平生の養生不レ足故と今更耻入申事に御座候、御心安かやうの儀も申上候、以上

追て左の一卷例の御衆の外へは御沙汰御無用に奉レ存候、其段は私より貴丈に常々御心に被レ懸被レ下候得ば不レ及二申上一候以上

右紙面三月廿日頃到來、幸藤大夫儀廿二日令二首途一江戶へ罷越候に付、藏人方より舍人殿迄相達奉レ入二御覽一候、去年も此類の來狀有レ之候、但其時分は秘申度樣子の儀御座候に付、封印を以直に差上申候、此度は又左樣の品は無二御座一候に付、舍人存寄次第一覽有レ之候上にて被二指上一候樣に副狀も仕相達申候、四月三日參着仕卽日に舍人まで相達、且又口上に申含候は、去年一度並此度の紙面の御內見の趣新助殿には聊不二申入一候、承被レ申候ては若泥みも出來候ては如何と奉レ存候、夫故一向の趣は其心得可レ被レ成旨申述候、翌四日舍人被二申聞一候は、昨夜右紙面被二返下一相返可レ申哉、ケ樣の物は又御請被レ遊候儀も有レ之候故、此方に取置申度存候、如何可レ有レ之哉の旨被二申聞一候に付ひかへ置候間、本紙は其許へ御留置可レ被レ成候、其段藏人へも可二申遣一旨申述候

一　拙者事一昨十七日御用候て登城仕候處、又講釋被二仰付一候、皐陶謨の首二段註とも講申候、首尾

よく相勤候間可㆑御心安㆒候、知人安民の處、巧言令色孔壬の處隨分委細申上候、講釋過候て又上意共有㆑之無㆑殘處㆓首尾にて候、有馬殿、加納殿抔も御次にて聞被㆑申候、感心の體にて候、打續侍講被㆓仰付㆒雖㆑有仕合に候へば本望の事に存候、老後に至候に多年學申候效も有㆑之候間、寸志直に申上候事冥加に叶候儀に奉㆑存候、近日の町便に先草々申進候、青地殿奥村殿などへ被㆓申傳㆒可㆑被㆑下候、以上

三月十九日　　　　室　新助

大地新八郎殿

一　六諭衍義の事御尋被㆑成候、去年一通り下書相濟差上候處、當春に至り又御好共有㆑之やう〳〵前月廿日に相濟書坊へ相渡り京都へ遣申候、追付板出來參可㆑申と存候（四月三日　贈二小寺遵路一書中）

尚以高倉屋敷講も今以無㆓異議㆒相勤申候、只今拙者は易を講申候、豫卦迄參申候、此度巡講に付下見候て、易をば餘程合點仕樣に覺申候扨々世變物情に的中の儀共、聖人さへ太過なき事は易により候樣に被㆑仰候、左樣に可㆑有㆑之儀に奉㆑存候、木下平三郎詩經、荻生惣七郎は禮記、土肥源四郎は書經にて候、何も聽衆鮮少に候、荻生禮記抔は七八人十人位有㆑之候、平三郎詩經は二十人餘と相見申候、拙者易只今は總てよりは聽衆多御座候、四拾人餘五十人に及申候、以上

一　先頃青地長氏迄申進候、侍講の儀貴公にも御覽被㆑成候て、此度思召共被㆓仰聞㆒致㆓承知㆒候、右私

紙面は靑地兒に被二仰談一當地へ被レ遣候由不二存寄一儀に御座候、亂雜の紙面如何奉レ存候得共、最早被二指上一候儀に候へば其通に奉レ存候、八日以後十七日外の御用にて登城候へば又侍講被二仰付一候、先日早々新八郎迄申遣候御聞可レ被レ下候と奉レ存候、其日の首尾有增左に申進候、御慰に御覽被レ成例の衆へも御廻し可レ被レ下候、先十七日御用の儀にて罷出候處、四ッ時過より八ッ半時迄埒明不レ申、空腹にも罷成散々に疲勞の處、侍講可レ被二仰付一旨有馬兵庫殿を以被二仰出一候、いつも八ッ時迄も在城候へば、御目付中より頓て御臺所へ參食事調申候へども、其日ははや濟可レ申樣に存候て待合申內、右の通に御座候故支度可レ仕樣も無レ之候、扨先日講じ申候末に安民と申處有レ之候間、其處を講じ候樣にとの儀に御座候故、兵庫殿迄申入候は、只今空にて存付不レ申候、ちよと御本を御見せ被レ下度旨申候へば、御前より書經を被レ致二持參一、見候て上候樣にとの儀に御座候、八日に講じ候は大禹謨の內にて候、其よりよほど末に皐陶謨の內に、皐陶曰都在レ知レ人在レ安レ民一と申事有レ之候、此一段は前の段を承り候て記し申候故、前段より講じ不レ申候はゞ語意貫通は仕かたく奉レ存候、前段より講じ候てはよほど長く可レ有レ之候、御退屈も可レ被レ遊候間文段の續きはいかやうに候へ共、右安民の段ばかり講可レ申候哉の旨兵庫殿へ申談候へば、其儘窺被レ申候處、前段とも講じ候へとの儀に御座候、前段は「曰若稽二古皐陶一曰云々　都愼二厥身一脩思永云々、」其次段に皐陶曰都在レ知レ人在レ安レ民云々何畏二乎巧言令色孔壬一」と有レ之候、さて兵庫殿遠江守殿引導にて御座間へ罷出候へば、八日の通に御成被レ遊御見臺に御書物のせ候

て、御成被レ遊の間の内に敷居際に直され候、御日通平伏候て罷出候へば、づッと參候樣に上意に付其儘膝行いたし、右の御見臺に付候て兩手を突講じ申候、昔に候はゞ是程の儀にはよはり申間敷候へども、中々其御地に罷在候時分などと違候て、朝より相詰候故老衰精神疲候て聲も出にくき程に御座候、去共聖賢の御蔭にて根に強き處有レ之候故、急度辭氣を改候て講申候、勿論御側衆其外御近從衆、御小納戸衆など迄不レ殘御次にて被レ承候、四書と違候て五經は常に講じ申儀も無レ之、其上下見も不レ仕ふト講候故、何の料簡も無レ之書に向申候て一通本文を素讀仕候内に料簡いたし申候、講說の內私料簡にて申上候處計只今書付申候、「厥身脩思永云々」と有レ之候處、私申上候は、脩身と申候事大學八條目の一ッにて御座候、先手短に申上候はゞ、身の脩理を仕候事にて御座候、不義無道の人は僉議に及不レ申儀に奉レ存候、其外は大略さしたる惡も無レ之候へども、工夫無レ之候ては日々に破損仕候、一言一行にても氣隨成事有レ之候歟、道理に違申事有レ之候へば身の破損と申物に御座候、修理を加へ不レ申候て捨置候へば、段々に大破に及申事に御座候、殊に人の上に被レ成二御座一候御身は、一言一行も下々手本に成り、人々目をつけ罷在儀に候へば、日々に御修理を被レ加候事簡要に奉レ存候、是身脩と申物に御座候、思永と申は何事も一旦の料簡にて仕事は必後悔有レ之物に御座候、輕き事にてさへ左樣に御座候、況や天下の政事などは一旦の思案にては難レ仕事に御座候へば、末を慮り候て相定候を思永と申候、扨次の段に及び二在レ知レ人在レ安レ民一の處、安民と申儀人君の第一の事に御座候間、安民を先に申候て

知人は其跡にて可レ申儀に候處に、皐陶知レ人と申事を安民のかしらに被レ申事意味有レ之儀に御座候、安民は第一人君の急務に御座候へ共、御器量御座候ても御一人の力にて治り申物にては無レ之候、よき人を御擧被レ成候て夫々に役儀被二仰付一、手分被レ成御治め被レ成外は無レ之儀に御座候、然ば人を目きゝ仕事安民の道具を求申樣成物に御座候、刀鈍く候ては何程の勇士も働自由に罷成不レ申候、夫故其次に安民と申候は「知レ人則官レ人」と申處、百官各其職替り候へば、官人と申候は夫々相應の材ある人を其官に仕を官人と申候、凡人と申物、材に得かた不得かた有レ之物に御座候、一ツも用に立不レ申者とては餘り無レ之ものに御座候、知人と申候時は、其材の得かたを目利仕候て、相應の官職を命じ候へば皆用に立可レ申候、其用樣惡敷候はゞ用に不レ立の人多く出來可レ申候、去るに依て知人と申事聖人さへ難事に被二思召一候、其のみならず、今一ツ聖人の常々御油斷不レ被レ成事有レ之候は、巧言令色の人を風と用られ候へば大成害に候故是を氣遣被二思召一候、材を知て用ひ不材を知て不レ用と申迄にて候へば餘り難儀にても無レ之候へども、材有人の內輕薄者有レ之候、風と材有にだまさゝ候て用ひ候へば、國家天下の禍にて、此人材有レ之候故言葉を巧に致し、顏色をよきやうに似せ候て尤成事計申、又は正しき人の樣にも見へ申候故、ふとだまされ候て用ひ候へば、上の權をかり候て己が自由を致し人をそこなひ候得共、其非を巧言令色にてぬりかくし申候故、後にはあらはれ候へども初には是を用ひ候て後悔仕候事、唐日本古今共に每々有レ之儀に御座候、聖人の明智にてさへ是を畏れ給ふ儀に御座候、材有

人の中に此品の人必有之物に御座候へば、御油斷難成儀と奉存候大略此通に御座候、葉沈が註ともに講じ候故よほど長座にて御座候、相濟候て御前を其儘退出仕候へば御呼懸被遊、只今の講じ申趣に候へば、禹は此時いまだ天下の主にて無之候哉の旨御尋御座候、御意の通此時は皐陶と同じく舜の臣にて、互に政治を僉議被成候儀にて御座候旨申上候へば、また六諭衍義かな書はやく出來候樣に被遊度旨上意にて候故、二三日中に差上可申旨申上其儘退出仕候、有馬加納兩人御次にて講釋よく聞へ承事に候由被申候、六諭衍義かな書去年出來差上候處、當春御出し被成書中少し宛御好みの處有之、其をひたと改指上申候、其上序跋も被仰付旁板下末相濟候故、右の御ふり御尋に御座候、よき手にかゝせ可申旨被仰出候故、筆耕には如何に存候て、當地にて尊圓流の能書と世に申候石川勘助と申浪人の事申上候へば、勘助手を御覽の上に此者に可申付旨に爲申談候、二三日過候て勘助方より相濟候てさし上、跋は唐の文章に調可申旨に付、跋ばかりは私手跡にて調さし上候、其後相濟候て前月末に書坊へ町奉行中より被相渡、早速京へ遣し板にほり申候、近き内には板出來參可申候間其後諸國へも流布可仕候、隨分簡約に被成度由にて漸かな書四十枚程可有之候、六諭衍義大意と名付申候、是も御好みに御座候、末に詩每篇に有之候、詩をば其儘不殘日本往來物の樣に大きく調させ可申旨被仰出候、是は民家などにて小兒の手習仕候物に、幸手本にも仕候樣にとの思召にて御座候、今川庭訓の樣成類にて、其よりは風敎に助け有之物に御座候、本書を少宛取候て

一々直し申にては無レ之又一通りかな書の書體別の物に御座候、頓て其御地などへも參可レ申候間御覽可レ被レ成候

一　去年以來御用の品ども多端に候へば、一々は筆紙に難レ盡候、防火の儀治水の儀などに付御尋の事有レ之候、此間は御先祖樣へ御追孝の事去年ゟ御尋被レ遊候、又此度も被二仰出一候、今迄不レ被レ遊儀にても向後被レ遊可レ然儀と申上候へとの儀に御座候、是は委細に申上候、四時の祭忌日の祭被レ遊候樣に仕度、上野增上寺にて被二仰付一候ては魚肉は御用難レ被レ成可レ有レ之候間、御精進に成共御丁寧被二仰付一、酒は日本にて神前にもそなへ申儀に候間、儒者もさして驚申間敷候間、三献の御拜禮有レ之候樣に仕度候、若又紅葉山にて被二取行一儀に候はゞ、魚鳥の御料理にても無レ構事に奉レ存候、此段御料理被レ遊候樣仕度、さて每月朔望には御廟へ御名代として急度大臣を被レ進、御上香可レ然奉レ存候、其香をば於二御前一御直に御渡、勿論御頂戴被レ遊御濟被レ遊可レ然奉レ存候、御祭禮の時分は御自身に御配膳可レ然奉レ存候、但御膳を御持參被レ遊候には及申間敷候、御かよひの者持參し候を、御位牌の前にて御取被レ遊直に御居へ被レ遊可レ然奉レ存候、有增箇樣の事にて候其外ゟ御尋の儀共書付申上候、其度每に大形委敷申上候段爲二申聞一候へと被二仰出一候、推參成事ども每々申上候へども、少も思召に背申候樣子にて無レ之候、私申通尤に思召候へども、其通には御行ひ難レ被レ遊由、御意旨先日ゟ有馬殿被レ申候故、私申候は、向後にても御尋の儀有レ之候節は、上の御行ひ難レ被レ遊を考候て取繕ひ申上候事は

難レ仕候、私へ御尋に御座候へば乍二推參一私料簡の通を申上候、其上にて御用捨被レ遊候段は上の御料簡次第に奉レ存候、左樣に各樣にも御心得被レ下候へと申置候、只惜くは人材すきと無レ之御精力を被レ盡候事乍レ恐不レ堪二感歎一候、先日も衣服料理等式法御定被レ遊度由有馬殿被レ申候、内々私へも咄申置候樣にとの御儀に候由、先以難レ有仕合奉レ存候、衣服等も御式法定り候はゞよく可レ有レ之奉レ存候、左候へば私共召仕候若黨等の者は、木綿衣服相應の儀に候へども、御城下などへは絹の衣服にて無レ之候ては不二罷成一候故是に難儀仕候、左候へば私共召遣候者も、歴々の侍もさして替申儀は無レ之候、但諸事の式御定被レ遊候も、必竟天下の風俗改り候樣にとの思召故にて候、只今の風俗中々式法にて改り可レ申旨は不レ奉レ存候、元より前に急度御教令有レ之候て、諸人耳目を改候樣致し其後御法式出候樣に仕度奉レ存候、たとへば五穀の種何程よき種にても、地を拵へ無レ之沙石荊棘を去り不レ申候て其上へまき候へば、何程種よく候ても育ち申まじく候、先地拵へを被レ遊候樣に仕度由申候へば、有馬殿殊の外感心の體にて御座候、大方被二申上一たる物と奉レ存候

右の諫勿論國家の秘事にても無レ之候へ共、外へはすきと不レ申事に御座候、貴公靑地長公抔は小寺殿へは御見せも可レ被レ成候、新八郎へも御見せ置可レ被レ下候、扨御覽濟候はゞ、此紙面火中被レ成可レ被レ下候、御兩所並新八郎などへ御知らせ置候事別事に非候、私事迄居申候へば仕合と奉レ存候、餘り久敷は罷在間敷候、七十迄罷在候てもはや四五年にて候、死後に私數ならず候へども是程には身をも立

申段、文字の端にも申こめ置度との事に御座候、名聞の様に候へども、立レ身行レ道顯二名後世一は孝の終とも有レ之候へば、立身行道など申事の萬分ヶ一にも不レ足事に候へ共、少々平生の所學に負不レ申とも可レ申候歟、御憐察可レ被レ下候、尙期二後音之時一候、以上

四月九日　室新助

奥村源左衞門様　貴報

私儀昨夜御臺所町火事に付罷出候時分に、立野筋と申候に付石川町迄罷越、新阪へ懸り笠舞村通り罷越候處、笠舞村入口狹く火消の面々被二罷歸一候に付、尙又込合馬上にて難二行違一相見候故、馬より下立歩行にて道の左へ寄罷越候處、笠舞村中藪たゝみにて梯子持候者の跡より、若黨體の者火本を仕廻罷歸候樣子にて行違候節、先へ立候私提燈持を突のけ、其次に罷在候私若黨小﨑喜內と申者に提燈持突あたり、其次に罷在候私へも右喜內あたり申程の體に付、右喜內申候は、此方より道を除け罷通候處如何の儀とあなたを突のけ申候へば、右喜內胸を取候に付此方よりも彼の者の胸を取申內、私若黨の內草野政右衞門と申者、並町附足輕小頭岩脇太左衞門立寄、道脇の藪際へ押臥候へば、右若黨體の者名を爲二名乘一られ候へと申に付振放候處、其儘起上り藪の內通百姓家前へ逃申候、群集の內逃失申と存、右私家來共は最前の處に罷在候處、脇道より私罷在候道へ罷越、主人は何方に被レ在候哉と、又者體には慮外の口上にて聲を懸申に付、是に罷在候て先刻よりの樣子見屆候處、道を除け罷通候者を

突のけ段々不作法の體、何方の家來に候哉と申聞候へば不ㇾ及㆓返答㆒刀に手を懸私前へ間近く罷越半拔懸申に付拔打に仕候、藪の內にて提燈も間も隔有ㇾ之、闇にて見兼候へども面の內へ切付申樣に覺申候、右の疵にて後へ退候處を又切懸候へば、逃出候間追懸候へども藪の內へ入、其內群衆の內へ入交り逃失申候、私儀近年痛所御座候て行步も不自由に付、追掛切留不ㇾ申段心外の仕合に御座候、其邊家來にも爲㆓相尋㆒候へども、疵付申者も相見へ不ㇾ申候間、傍輩共なども引取申體に相考候故先其分にて罷歸り申候、手付申者の儀に御座候間奉ㇾ願度所存の品も御座候へども、私役儀にては火事場へ罷出候御役人中、每度於㆓火事場㆒致㆓參會㆒御用等も申談候儀に御座候へば、互の家來以來迚も如何樣の首尾可ㇾ有ㇾ之も難ㇾ計儀に御座候故其段は差扣申候、大方の儀は每々其分に仕置候へども、夜前の儀は右段々の首尾殊に私へ手向申候故無ㇾ據仕合に御座候、右若黨體の者何方の家來に御座候哉相知不ㇾ申候間、旁以御斷申上候、以上

三月十二日　　宮崎長太夫

奧村內記樣

右の儀に付同十四日月番內記殿の宅へ長太夫御招、江戶へ言上被ㇾ成候間自分遠慮可ㇾ仕旨被㆓申渡㆒候、其夜御用番をも同役金森內匠に引渡候、翌十五日內匠迄左の通紙面長太夫方より差遣別紙相添存寄有ㇾ之に付不ㇾ通者へも不㆓申聞㆒候條、寺西三郎平始め必沙汰無ㇾ之樣に申遣候

私儀今般於二火事場一大音帶刀家來手向申候に付、切害仕候趣先達て紙面を以申上候處、江戶表へ被二仰上一候間、自分遠慮可レ仕旨昨日被二仰渡一奉二承知一候、上より被二仰付一候遠慮にて御座候へば、兎角不レ及二申上一儀に御座候、自分遠慮仕候樣に御座候へば、今般の首尾先達て申上候通り、帶刀家來無法の仕形故、私家來も難二默止一仕合、私儀へも手向ひ申す上は切害可レ仕外無レ之儀と奉レ存候、帶刀儀も其場にも不二罷在一一圓不レ存儀御座候へ共、家來の儀に御座候へば、帶刀手前も何とぞ品も御座候はゞ何分にも可レ奉レ畏候得共、私共自分遠慮仕候儀、又は輕き者相手の樣に罷成候首尾に御座候ては、向後火事場へ罷出候ても、御役儀の締りも無レ之無レ詮仕合奉レ存候、重き御役儀も被二仰付置一、重々御厚恩の私儀に御座候へば、如何樣の儀に御座候ても何分にも可レ奉レ畏候へども、外の儀と違迷惑至極に奉レ存候、假令追て遠慮御免許被レ遊候ても最早御役儀難二相勤一首尾と奉レ存候、其節存念申上候ては御意の上恐多奉レ存候、各樣御心得を以被二仰渡一の節存念申上置度、覺書を以如レ斯申上候、以上

三月十五日　　宮崎長太夫

奥村内記樣

右紙面之趣に付十五日出仕の刻、於二御城一内匠内々を以野村勘兵衛次に伊藤内膳へも相談、内匠も同役の儀何とぞ指留候樣にも可レ仕候得共、今日其身の上に箇樣の儀有レ之候ても同事に存念候故、指留可レ申存寄は無レ之候、然共乍二此上一何卒御年寄衆御相談の筋も可レ有レ之哉と紙面扣置、箇樣にと

紙面私迄指出申筈に候、如何可レ有レ之哉の旨御内談申入候處、各御詮議の上十五日内匠迄内記殿御申渡の趣、右の紙面の通に候

只今金森内匠被レ參被二申聞一候は、内記殿より申談度儀候間可レ參旨申來候に付、則參候處、宮崎長太夫儀昨日御用差扣自分遠慮仕候樣申談候へ共、今日彌僉議いたし候へば、及二其儀一間敷候間遠慮無レ之罷出、御用も相勤可レ申候、不レ致二出仕一儀御帳にも難レ調儀に御座候間、煩にて罷出不レ申旨紙面相調可レ被二差越一候、明日も早速罷越候儀如何に候はゞ、先當分氣色相滯候分にて引罷在可レ然旨御申候由被二申聞一候付、被二仰越一候趣承知仕候得共、昨日より致二遠慮一御用番も相延、町中觸渡候上の儀に御座候得ば、一日遠慮も千日を遠慮も同事に被レ存候、差扣申儀は如何樣共可レ仕候得共、罷出御用相勤申儀は難レ成筋と被レ存候故相勤間敷候、私支配無二御座一候事に候はゞ、右任レ仰罷出御番等も可二相勤一候、右の趣にては御締にも難レ成趣に存候、且又今日出仕不レ仕儀氣分引の書付出可レ申旨、此儀は別て難レ成趣に被レ存候、數年御横目役相勤罷在候、私事箇樣の書付等差出候ては御後闇儀、又々支配有レ之者箇樣の儀仕候ては、支配中箇樣の類申出候時分、如何相心得可レ申物に御座候哉、決て私儀は指出申間敷候、此旨御申達可レ被レ下旨申入候、去とも内匠殿何卒私料簡不レ宜儀も御座候はゞ、被二仰聞一候樣仕度旨申入候へば、何とも不レ及二挨拶一旨被レ申、兎角其段内記殿可二相達一候、併從レ是伊藤内膳殿、野村勘兵衛殿罷越致二示談一宜料簡も御座候哉、其上にて内記殿へ罷越候歟、又是へ罷越候歟可レ

仕旨にて歸被レ申候、御案內如レ此御座候、以上

三月十五日　　宮崎長太夫

三郎平樣

右御披見被レ爲レ成候て、伊織殿、藏人殿、藤太夫殿、兵庫へ御廻可レ被レ下候、以上

右の趣に付勘兵衛殿宅へ內記殿、內匠殿參會相談の上、藏人呼に被レ指越一、罷越示談の上、十五日夜勘兵衛殿內匠殿藏人三人同道長太夫宅へ罷越、各存寄段々申入候上、如二前々一罷出可二相勤一に罷成、其夜內匠殿內記殿宅へ被二罷越一、今夜より御用相勤候段被二申達一候、十六日より出勤事濟申候、出仕の儀は長太夫存念の通御申達此方より不レ及二貪着一候、帶刀家來は□と申者にて右之疵不レ宜相果候旨□先達て長太夫殿一卷に付、御當地にて承及申趣有增申上候、其後慥に承申樣子は直に長太夫へ申遣候、御聞も被レ遊候哉、當地にては區々に申慣候、十五日重て御僉議有レ之候て不レ及二遠慮一候儀御近習の衆を初めにて、誰にも皆申樣は、豫州殿濕瘡にて引籠り最初の僉議に不レ被二相加一候に付、自分に遠慮可二申渡一候處、散々不同心にて沙汰の限成內記殿御取捌とて氣に入不レ申、重て不レ及二遠慮一趣に罷成候、流石の儀と皆々感申旨にて、私へ被二相尋一候表裏の儀何共返答に難儀仕候、並々の衆中被二相尋一方へは御僉議相替候趣は、金森氏殊外世話に被レ致候樣子の體に承及申候と迄返事仕置候、右兵衛樣御兄弟復庵、郡彌三兵衛、高田彌右衛門其外に庄田、青木兩人衆へは有增申聞候へば、皆々大違成推

量說とて我折に御座候、併此許の御沙汰若存ずる樣無御座候ては氣の毒成事と奉存候處、至極御尤成御沙汰共に御座候、此事も區々にて信用難成事共も御座候付、圖書殿へ潜に御尋申上、荒々被仰聞候て安堵仕候、定て其許にても潜に御聞も可被遊旨奉察候、但是も重て御僉議相改申趣は何故にてと申儀は、御存知無御座候故一々御物語仕候、爰許へ始て申來候は、其許十六日出の早飛脚廿二日に到來、早速達御聽候處、長太夫自分に遠慮申渡候は如何之儀に候哉、早々爲致出勤候樣早飛脚を以可申遣旨被仰出、廿三日朝其段申遣候、御親翰を以長太夫儀於武備拙き樣子は無之儀と思召候、但何卒武道に拙き子細も候哉、其段僉議仕可申上旨、三人の衆へ被仰出候旨各僉議仕候處、御意の通に奉存候旨御請上り申候體に承及申候、然處十九日出申飛脚廿四日到着、其節重て僉議仕候處、長太夫不及遠慮事に示談仕候に付、十六日より出勤仕候旨言上有之處、尤に被思召の旨被仰出、其段申遣候由被仰聞候、此趣に御座候へば、此度の巨細は先無言上事と奉存候に、今伊豫殿の御思案候て重て御僉議相改申と覺申候衆中多御座候、是程の大儀を御病中なれば迚、最初不及御相談事可有之候哉、夫は推察の說に存候間申入候得共、委細の首尾物語不仕候面々は合點不仕候、此紙面の趣尙更長太夫殿に御逢被成候節被懸御目、其上にて火中可被下候

一　右衞門督樣御參府當六日に御座候、御夫婦樣御間柄如舊被爲成、恐悅至極の御樣子に御座候、御着の日大塚久太夫を御呼被成被仰聞候は、近年御夫婦樣御間柄の事御あやまり被成候、今年よ

りすきと御改被ㇾ成候、依ㇾ之お聟長八郎樣御袋事は御殿出前緣に御付被ㇾ成候、當地にて御息女樣御袋有ㇾ之候、是は芝の御屋敷へ先遣し御上屋敷に有ㇾ之候、表御廣敷はこぼち可ㇾ申旨御直に被二仰渡一候、六日より晝夜如ㇾ舊御廣敷に被ㇾ成二御座一候、久太夫儀は去春御自分に鳥取へ罷越、近年御夫婦樣御間柄の御不出來をすきと存寄申上、偖立歸相公樣御前へ罷出、御夫婦御間柄實は御別條無二御座一候趣明細に言上仕、此上の事は私奉二談合一候などと直に申上置候由、然處今般右の樣子にて久太夫安堵大慶可ㇾ申樣無ㇾ之候、忠厚の至と奉ㇾ存候、私共迄恐悅の事に奉ㇾ存候、以上

四月十日　　青地藤太夫

藏人樣　密啓

先生其許迄被ㇾ遣候御書中に御先祖樣へ御つかへ被ㇾ遊樣御尋に付て、右の一件如何樣の儀に御座候哉、不ㇾ苦候はゞ其筋承知仕度旨申上候處、御祭の儀に候、今般被二仰上一候趣は、存生の父母先祖等へ年始其外振舞仕候時分、精進の膳部と申儀可ㇾ有ㇾ之樣は無二御座一候、上野增上寺等の御廟は寺院の內に有ㇾ之儀に候へば、魚鳥御用難ㇾ被ㇾ遊儀に奉ㇾ存候、幸紅葉山に御廟御座候へば、此品にて四時の御祭禮有ㇾ之急度魚鳥を以御祭有ㇾ之、三獻の儀御自身に御執行被ㇾ遊候はゞ可ㇾ宜候、上野增上寺にても酒の儀は不ㇾ苦儀に可ㇾ有二御座一候へば、三獻の儀は兎角御自身にて可ㇾ有二御座一候、扨御祭禮相濟於二御牌前一其御酒御頂戴可ㇾ被ㇾ遊歟、幸此儀は於二紅葉山一も權現樣御酒は只今迄御頂戴の旨承候へば、外の

御酒も御同前に可被遊候事歟、新物は只今迄も御獻上の儀に御座候、是も毎度御使者御前へ被爲召御自身御渡可被遊歟、御代香も右の通にて可然奉存候、中華の天子亦廟へ使者を以獻上等の節、香は必頭上に戴候て其上にてつかひへ被授候禮儀に御座候故、箇樣に有之度物に奉存候旨被仰上候處、一々尤に被思召候、但只今の時節何とも左樣には難被遊有之樣思召候旨兵庫殿を以被仰出、兵庫殿迄被仰入候、總て私御請の心得は聖賢の意に相叶可申と奉存候趣を以直申上候、時勢におゐて可宜哉否との考は、先は不仕心得に御座候、御用捨は御上の御裁斷に御座候、此以後とても左樣に御心得可被下候、平生學問の力を以存寄候通、眞直に申上候旨申述置候旨被仰聞候、此頃愚直の儀被仰忌諱に御觸可被遊哉と少御氣遣にも御座候處、一段の御首尾にて御安堵被成候旨被仰聞候、是は如何の御樣子に御座候哉と御尋申上候處、色々考物被仰付一々紙面に御請申上候、其紙面の内に一事申上候趣は、近年井上河内守殿なと御相談ばしらにて、常憲院樣御代以來被召出候者共實子の分は役目被仰付候、養子の分は一向御取舉被遊間敷旨被仰出有之、其後段々右の趣に罷成候に付、數年以來養子に致し置候者も實父方へ相返申すも數多有之候、實子有之者もいつまで實子つゞき可申も難計儀に候故、兎角憲廟、昭廟、章廟此御三代に罷出候者共は悲泣仕迄にて人心不安候、此一事にて御譜代の族迄も色々誹謗仕候、尤常憲院樣御代被召出候輩の内には役者如きの者共多く、醫師などにも膏藥一包指上候へば、早二三百俵宛被下候て官醫の列へ入申候、此等

の輩有レ之候につきての御新令には御座候へ共、是等の爲に左も無レ之者迄も一律に罷成候儀、人心不服の第一事と奉レ存候、何とぞ御處分有レ之儀と奉レ存候、且又御加増被レ下候分は一代限に御取擧可レ被レ遊との儀は左も可レ有ニ御座一候歟、周の代世祿と有レ之候は、士は士の祿定り有レ之卿大夫も卿大夫の常祿有レ之、其常祿を世襲仕事にて、位田等の類は世々仕可レ申樣無ニ御座一候、左候へば御役料同意に御加増の分は、御取擧被レ遊候とても是にはさのみ人心不服之患は有レ之間敷奉レ存候などゝ申樣成事共にて、此外にも少寸志を申上候、一々御覽被レ遊尤に思召候、只今御前へ被レ爲ニ召出一、猶更御直に存寄御聞可レ被レ遊と思召候へば、山里へ被レ爲レ入候刻にて不レ被レ召候、此旨可ニ申聞一旨兵庫頭殿を以被ニ仰出一候、總て御意に應候儀は大方御前にて御聞屆被レ遊候、左候へば御聞屆も被レ遊故と忝奉レ存候、只恐くは御寛大にて右の樣子成存寄相調紙面も封じ申儀成不レ申候、其故取次の衆御覽の前に内見仕候樣子に御座候、是は却て氣の毒成かたに被ニ思召一候旨被ニ仰聞一候

右兩件當廿八日御面語の節承知仕候、奥村丈御父子並小寺大地兩兄其外も不レ苦御衆へ御物語可レ被レ下候、以上

四月晦日　　靑地藤太夫

藏人樣

今度增上寺にて有章院樣御年忌の節、御茶湯は上樣御自身御備被レ遊候旨世間沙汰にて承申候、是は

先生被ニ仰上一候趣に付御感動被レ成、先御茶湯にても御備被レ遊候哉と奉レ察候、御代々終に無レ之儀の旨にて取沙汰仕候（右同人五月廿二日　書中）

三月十七日侍講以後、前月廿九日又御前へ被ニ召出一良久御直に御尋の儀共有レ之、其上にて私此度撰進仕候六諭衍義の跋を講じ候樣との儀にて御前にて講じ申候、委細は筆紙に難ニ申盡一、其より前御尋の儀有レ之候て段々書付候て上候處に、右廿九日御前に罷出候節、御直に上意有レ之御尋の儀、當時に一々引當申上候事別てに被ニ思召一候、其上所存の儀共申上候、是又御覽被レ遊候由御意に御座候、私申上候は、推參の儀共申上候處に、難レ有上意冥加に叶申候由直に御請申上候へば、御笑被レ成御會釋の御樣子に御座候、是にて餘事御推察被レ成可レ被レ下候、藏人殿へも其趣御達被レ成可レ被レ下候、只老衰精神日々減候樣に覺申候（五月廿四日　賜ニ里村修運一書中）

昨廿六日先生御殿迄御出被レ成、左兵衞殿を以被ニ仰上一候は、昨日有馬兵庫頭殿より御用有レ之旨申來登城被レ成候處、段々被ニ仰出一候趣御座候、就レ夫直に可ニ申上一儀共に御座候、急成御用とは不レ奉レ存候間、何時にても被ニ仰下一次第參上可レ仕候、先右□□□□承合に參候樣、推量と噂も可レ有ニ御座一と指し扣へ、來二日頃何とぞ罷越御物語承知可レ仕候、先此趣源左衞門殿新八郎殿へ被ニ仰達一可レ被レ下候、廿九日出に若其許へ被ニ仰進一候はゞ御狀の御寫一通私方へ可レ被レ下候、結句夫にて早も又委敷も承知仕候事可レ有ニ御座一候以上

禮　幹　拜

五月廿七日

密事の次第申上候、去暮の儀に候哉、林家より金子を過分に相公様へ御預被レ申、利潤の加り申樣にとの儀に御座候て、則會所奉行へ御渡置被レ遊候旨、左兵衛殿始承及申衆中の咄に御座候、御前へ事の外御隱密と相見へ、笠間氏などへ尋候へば、一向口も開き不レ申候、近頃不興成事市井の徒も可レ耻事にて御座候、是にて存當り候へば、安藝侯家への儀も同事と奉レ存候、御前に御難儀に可レ被二思召一候、是を笑止に奉レ存候、以上

一　先生御宅へ今朝御見舞申上候處、今度の一卷委細被二仰聞一、有增覺申趣左の通御座候

去廿五日有馬兵庫頭殿於二御城一被二申聞一候は、御自分存知の通近年以來御產所入少く御用も手痞候上、去秋御領過分の損毛に付、御藏米を以御切米等被レ下候儀も成兼申體に候、諸侯の家の仕置等方々御聞合被レ遊候處、家中跡目或は半分家督申付候も有レ之候、或は加增新知の分は指除、代々取來候知行迄も申付候も有レ之候或は家督の節知行は付不レ申族も有レ之候、只今公儀の御樣子にては御加增新知可レ被レ下候樣も無レ之候、常祿さへ指痞申積候故、此通にては末々に罷成御藏入拂底に及可レ申候、ケ樣にては埒明不レ申儀にて候、加賀守殿事は大國と申し、其上只今は年來に候へ共、ついに家來等に相違無レ之體に候、然處加增新知の類不レ絕、そこ〳〵に被二申付一候樣子に候、定て何卒心當の圖り考等の有レ之儀にて、數十年以來の格不二相替一儀と上にも思召候、御手前被二罷越一加賀守殿の料簡の趣

承候て可レ被二申上一候、則御内意に付申聞候旨被レ申候、先生被二仰上一候は、委細奉レ畏候、此等の趣以二紙面一は難二申達一奉レ存候、取次を以申述候儀は難レ成筋に御座候、直に相尋候樣に可レ仕哉と奉レ存候旨、被二仰達一候其儀は相伺可レ申旨にて暫間有レ之被二罷出一、上意には成程直に承候て可レ然儀に候旨被二仰出一候、依レ之翌日御屋形へ御出被レ成、佐々木左兵衛殿を以被二仰上一候趣は、則先書に申上候通に御座候、扨相公樣御居間書院にて御逢被レ成、御側衆を御呼被レ成候故脇差を取御寄候處、只其儘と御意に候得共、無刀にて御側へ寄候て御仕置方の儀に付、直に御尋申上候て思召承候譯にて御座候旨申上候處、御用の儀に候へば幾度も御逢被レ成て能候、又は紙面にても可レ然旨御意に付、紙面の儀と心付候へ共少難レ調筋も御座候、其上直に承可レ宜旨上意に付、何時にても御逢被レ下候樣に申上候處、早速御目見被二仰付一於レ私忝儀奉レ存候旨御挨拶申上、其上にて右御尋の趣申上候へば、近頃不レ被二思召寄一儀にて難レ有思召候、御尋にて被二思召一候へば、いづれも只今迄御家中家督等被レ下候儀御格無二相違一被二仰付一、但何故に指つかへ不レ申候と申御考も無レ之候、又此圖りとて御心當りの儀も無レ之候、此御尋にて御當座に被二思召一、當日は御家にて十五六歳迄の者は、知行の三の一被レ下、三の一被二下置一候者不二絶有一之候、且又有レ故て跡目斷絶の者間々有レ之候、扨は新開の地出來仕候も多有レ之候、此三色にてもあ合申かと思召候、此外に御考被二成置一候御圖りなどは無レ之候、差當、此外に御請は無二御座一候、只今は御老者被レ成候仕置の儀も思召樣も無レ被レ成候、そなたの儀にて能申心付候間若狹守へ

申合置、若狹守代り成候はゞ、ヶ様の考可㆓仕置㆒儀に候、最早手前代の內其間も無㆑之儀故、家中跡目等の差支申事は有㆑之間敷候、扨是は御請にては無㆑之候、御手前への物語に候

嚴有院様御代々御腰脚指痞申儀有㆑之、其上凶年にて何とも可㆑被㆑遊様無㆑之に付、諸大名より夫々知行米御借被㆑成可㆑然との御相談有㆑之候處、保科故肥後守殿達て其儀は不㆑可㆑然事と被㆓申上㆒、只嚴敷御儉約被㆑遊候事に候、扨は旗本中の知行の免御借被㆑成候て可㆑然哉とて、是にて事濟申候由、肥後守殿直に手前へ被㆓申聞㆒候、扨又當上様諸事被㆑遊様御尤成事共多、御代々の上様の內にも餘り無㆑之程に奉㆑存罷在候、此存寄誰へ可㆑申様も無㆑之候に付、家來共の內へは申聞候て御噂申上儀に候、下々に至候ては當上様はやぶさか成様に申慣候躰に承及申候、此儀は曾て無㆓御頓着㆒、專御儉約御守被㆑成候て可㆑然事と存候、御前代の內に御役人衆の內心得惡敷、無益の新法又は筋もなき事共被㆓取上㆒候て、公儀の廣き事にも御難儀成事共に成來、勿論是等の趣は御請にては無㆑之候旨御意に御座候に付、折節於㆓御前㆒講釋等被㆓仰付㆒候時分毎度御噂有㆑之、御大老に御成候へ共今以仕置等御直に被㆑成、數年以來何の御越度も無㆓御座㆒旨上意にて、私式迄恐悦奉㆑存候旨被㆓仰上㆒候處、左様の御噂も有㆑之忝思召候旨御挨拶有㆑之候て御退出被㆑成候、翌廿七日登城候て兵庫殿へ御請の趣幷御物語の儀共被㆓仰上㆒候處、委細達㆓上聞㆒候處、入組たる御使に候處、申達候様宜敷候に付、加賀守存寄も委敷御聞被㆑遊候て尤成事共に候、且又物語の趣御承知被㆑遊、是以尤に思召候旨兵庫頭殿を以て被㆓仰出㆒候、兵庫殿

被㆑申候は、加賀守殿何の考も無㆑之、心當も圖も無㆑之旨御申候儀はさすが老功と奉㆑存候、圖り考の無㆑之儀は有㆑之間敷候旨被㆑申候處、御前へ可㆓罷出㆒旨にて御座間へ被㆓召出㆒、上意には入込たる儀申樣宜敷候て、加賀守存寄も委細御聞被㆑遊候、外の物語も御聞被㆑成御滿足被㆑成候、加賀守氣色の體は如何見請候哉と御尋に付、私も久々にて側近く相寄顏色も見請申候、年來故形は御老衰の樣に相見申候、乍㆑然氣力口上等は指て昔に替不㆑申候、久敷持病にて乍㆑憚足の裏に痛御座候、其痛に指引御座候て、惡敷時分は前々登城も斷申儀每度御座候、昨日は朝より氣色宜敷候て、夫故御顏色も快相見申旨申上候へば、氣力達者にて別て一段に思召候、今日講釋御聞可㆑被㆑遊處、御普請被㆓仰付㆒候得ば其普にて紛敷候間、重て御聞可㆑被㆑遊旨上意にて退出仕候、此趣以㆓紙面㆒舍人殿迄申達候處、御直書被㆑下御親翰も加り候に付、即刻兵庫殿迄爲㆑持遣候へば、御書入㆓上覽㆒追て兵庫殿より被㆓相達㆒候、其段申上兵庫殿紙面又舍人迄遣候へば、又御書被㆓成下㆒其分に難㆑成兵庫殿へ遣候へば、未其返事は不㆑參候旨被㆓仰聞㆒候、右御書先生には餘御用にて御座有間敷候歟、私事先年親筆にて紙面も戴候へ共、如㆓御存知㆒留置申事難㆑成候に付所持不㆑仕候、此直書私へ可㆑被㆑下候哉と申上候へば、則被㆑下候、上樣の御手迄觸申御書、殊に一枚紙の御書に付別て重寶仕置候、御文言左の通御座候

尙以老境殊更手戰候故、乍㆓略儀㆒代筆を以申入候、以上

芳簡令㆓披閱㆒候、然ば兵庫頭殿へ御請の趣被㆓相達㆒候處、達㆓上聞㆒重疊難㆑有上意誠以過分忝仕合御

座候、且亦御前へ被㆓召出㆒拙者所勞の儀御尋の旨、別て畏入奉㆑存御事に候、重て兵庫頭殿迄次手の節可㆑然可㆑預㆓御心得㆒候、以上

五月廿八日　　加賀宰相

室新助殿

一　右御物語未㆑承以前御尋申上候は、去月廿八日芙蓉の間御役人、幷諸番頭、諸物頭其外布衣以上の御役人衆御老中列座、戸田山城守殿被㆓仰渡㆒候は、當春より段々可㆑被㆓下置㆒御切米の儀、去年御領損毛甚敷、其上打續御物入の儀有㆑之、御定の通相渡不㆑申候、此樣子にて候へば、尙暮可㆑被㆑下御切米等の御心當も無㆑之由、其譯は追て御書出を以可㆑被㆓仰聞㆒候間、面々兼て其覺悟可㆑仕旨被㆓仰渡㆒候由、是は如何の被㆓仰出㆒候哉、身に預り不㆑申輩迄も驚申候、指當先生御勝手等無㆑滯御切米相渡候てさへ、何とも難㆑被㆑成筈に兼々奉㆑察候處、此儀承候てあきれ申候、餘りの儀に何とぞ子細有㆑之態と被㆓仰出㆒、追て其譯立可㆑申哉と奉㆑存候、御救こそ無㆓御座㆒とも、輕き御切米取候衆はせめて御定の通可㆑被㆑下事に御座候、御勝手は如何に成候哉と申候處、當年春の御切米三の一渡候て、夏の御切米も沙汰無㆑之候、春夏二度を先相渡し、其後夏の御切米に及申筈に候へ共、其さへ沙汰無㆑之候へば、暮なども御切米はすきと渡申間敷候、切米取申輩ひしと潰可㆑申候、拙者など只今飯米さへ無㆑之體にて、藏宿より少づゝ金米共に借て一日送りに仕體に候、御切米の人々何も其通と見申候、去年の水損

莫大の事と聞へ、御藏入不足故と存候、何の仔細もなく彌難二相渡一趣、翌日に重て御書立も出て申旨被二仰聞一候、ヶ樣に御尋申上候は御日用御手當可レ被レ成と奉レ察候に付、少分ながら私方より金五兩計は進上可レ申候、十日過に月俸可二請取一と奉レ存候、其時分迄は御心當も御座候哉と申上候へば、指て御急切成事は無二御座一候、心入の程御滿足被レ成候旨被レ仰候、私月俸も四月より請取跡へ引足可レ申旨にて、自餘よりは少分に相渡り申筈の旨承知仕候へ共、私事は誠入用の時分は左兵衛殿も被レ成二御座一候へば、幾重にも罷成候故、難儀仕程の儀は無二御座一候圖りに御座候間御氣遣被レ下間敷候、扨木下平三郎殿一昨日此方へ御出、當春三十三俵可レ有レ之處、十一俵ならで相渡不レ申候旨御物語にて承り候旨申候へば、先生にはそれ迄も御請取不レ被レ成候由被レ仰候、平三郎殿は此方樣より過分に御合力有レ之、御子息へも此方より御切米御取候、先生には一向外の助無二御座一候、藏宿つゞけ申も定て高利の事共にて可レ有レ之候と御尋申候へば、只今迄に四十兩計つゞけ申候、最早御續難レ被レ成、先年火事に御逢被レ成候節、平三郎より御合力の儀相願被レ申候節、先生へも同事に御願候樣に被レ申候へ共、御不同心にて御願不レ被レ成、其節山本源右衛門迄御噂有レ之、新助は何故願不レ申候哉との儀にて、あなたより御助成可レ被レ下候旨有レ之儀を、事がましく可レ奉レ辭とは不レ被二思召一候此方より願の儀は如何に仕候にても難レ成事に候、其段は各も同事の料簡に候、去年娘嫁娶いたし、心外の費百兩計に及申候、然處當春以來右の趣に成申候、依レ之今年は不レ及二是非一候、幸相樣へ奉レ願五十兩も拜借

仕、年々に返濟仕候樣に仕度旨被仰聞候に付、只今に至ては不苦筋にて可有御座候、但御願可被仰入と思召候哉と御尋申上候へば、舍人へ相逹候儀は私へ迄御紙面を以可被仰聞候、其內其許樣へも御內談被成、御願の筋御相談可被成旨被仰聞候に付、成程私へ被仰聞候て可然奉存候、但今少御見合可被成候、私月俸も請取候はゞ、一二月御つゞき被成候程の儀は罷成可申候、藏人方へ申遣料簡も御聞被成、私も藏人存寄承候て其上の儀に可被遊候、ケ樣の趣藏人は存寄、格別の儀も有之宜敷御座候旨申上候へば、先生も其思召に候、頓て別て御用多難被仰遣候間、明日の便に私方より相談仕候樣に被仰聞候、思召奇特と可被仰進候、私へも可被仰付候、舍人內匠へ迄申逹樣の句面の事に御座候間、其元より草案にても可被遣候哉、此節の儀に候故御延引被成可然ど、是は私の內存の儀に御座候、先生へは不申上候、此日の御用も有増承知仕候、今般の一件さへ今日漸相調申候處、中々他事には難及候、追て可申上候

一　公儀向近年御物入と申事難心得御尋申上候處、常憲院樣御代莫大御費兎角可申樣も無之、御府庫虛耗に及候上御藏入の圖りもなく、新知加增多く有之、後々は可被成樣無之、專方なく金銀吹改にも及申候御代に成、急に金銀如舊被仰付候故、實に今以府庫空敷候、無益の醫師迄にも御知行高四十萬石に及申旨にて、當年又凶年にも候はゞ、如何樣の儀に可及も難計候、御切米迄も無之地方の面々も、兎御借の儀に可罷成候哉の旨被仰聞候、私差當存候は、京大坂等に富有の商人、

たとへば唐金喜右衛門如きの者何程も可レ有レ之候、此等の輩より金銀御借被レ成、御切米不足の面々へ金子を以被レ渡、天下の米穀御買上に成候はゞ、自由に事調可レ申處、人情含怨申様成令命にて、何とも御笑止事と奉レ存候旨申上候へども當春以來勘定方に色々利發成者共逢ニ穿鑿一、最早此外無レ之と申趣に成り候て、如レ斯相究り申體に候旨被ニ仰聞一候、此紙面大地見外奥村丈小寺見へ被レ懸ニ御目一可レ被レ下候、但御宅地へ御招可レ被レ懸ニ御目一候哉、其外の君は御了簡次第に可レ被レ遊候、先生も此儀被レ入ニ御念一被ニ仰聞一候、御前への一件は左兵衛へ潜に御物語仕筈に御座候、以上

六月三日　　　　　　　　　　　　青地藤太夫

藏人様

近頃不ニ存寄一御事御心安御内談等被ニ仰越一候段は恐悦成御儀、殊に外と違諸事御熟成の御手本にも被レ爲レ成候御事は、乍レ憚御手柄成御事、誠御喜悦にも可レ被ニ思召一候儀と奉レ存候、先生にもヶ様の御使御勤被レ成候御事、御首尾も宜敷故と奉レ察、次には此方様にも御親みも出來本望の至御座候、但御尋の御本意は何とも難ニ心得一事にて無ニ御座一候や、諸侯の家の不レ宜例を御聞合被レ遊候段、近頃失望申御事に奉レ存候、御請も乍レ恐瑣細成御意の趣に奉レ存候、只跡目等の儀は古例を以申付候、加増新地等の儀は賞罰難レ履事のみ了簡を加へ、心當の圖り等の儀は只今迄心付も無レ之罷在候、第一自分の上儉約を守の儀を後訓も心付申し候、ヶ樣の儀にて國用不足も無レ之候哉などゝと、御請被レ遊度物にて無ニ

御座一候哉と推參千萬ながら殘念奉レ存候、左候はゞ上樣にも急度御料簡も改り可レ申候、先生御取次被レ成候迄に御座候哉、定て何卒被二仰上一候事も可レ有レ之物と奉レ察候、此御使相濟以後不日御切米の儀、御役人衆へ被二仰渡一候も、いや成事に被レ存候、只今諸事先生御用御勤の御樣子、旗本衆新井氏の樣に沙汰可レ仕哉と氣遣に存候、御切米の事などは一二も無レ之常祿の儀に候處、御無理至極に相聞へ申候、不レ被レ爲レ成迄も御借銀にても被レ遊、先外の御僉議に不レ及、早速被レ下候樣御沙汰可レ有レ之事、人主の御本意たるべく候、扨其後は以來の御心當の圖被二仰渡一、其段は有司存候者可レ有レ之候、御自分御料簡の通、京大坂所々の富有の者より御借被レ成候はゞ、何程にても相滯儀無レ之筈、其上御切米の分何程過分被レ申候ても、公儀の上にては今年不足分纔の儀にて可レ有レ之候、夫を只今より當暮の御切米迄成かね可レ申被二仰出一近頃失望申候、夫よりは御醫師等四十萬石の費無レ之筋、被二召出一候面々は不レ殘御扶持被二召放一、或は甲州抔は元來其罪有レ之家に候へば、一萬石計に被レ成候て、其餘は御知行被二召上一ヶ樣の御償に被レ成方結句人情にかなひ、道理の筋も可レ有レ之は、跡目等のひゞき此方樣へも移可レ申幾微の樣に奉レ存候、近頃いや成事かと存候、近來本多彌兵衛外に國守衆在江戶の內國許にて跡目申付候、跡目の御格止申候、于レ今彌兵衛殿所爲の樣に御家中にて申慣候、近頃疎忽の儀ながら指當り候愚意眞直に書記申候、不レ苦思召候はゞ此紙面先生へも被レ懸二御目一候樣仕度候、昭廟は如レ形御篤實成御政務の節の樣に相見へ候へ共、少迂濶にて事の成就其功有かね申候、當上樣には御决斷格別の御樣

子、實に有爲の主と相見へ申候得ば、今度の御請など何とぞ被仰上趣も候はゞ、其功早速相見へ可申ものをと奉存候事に候、早々御火中〳〵、故肥後守樣御咄并御儉約の儀乍憚御尤成御儀奉存候、御切米の事は御儉約の筋とは難申候、御氣色の儀御尋等蒙以恐悅成事に候、御書御拜受の旨珍重存候藏人方より先頃の返事、私紙面に貼紙仕指越申候、其内に乍憚自分存寄の一料簡申越候、尤の樣にも奉存候間、御慰旁則藏人貼紙懸御目候、先生御事昭廟の御時新井氏を申候樣に、御旗本衆にても申慣候かと氣遣に存候哉、其儀も相見へ申候、御城坊主衆私方へ每々被罷越、遠慮もなき戲言同事に種々被申候に付、私も先頃以來傾耳承候へ共、少善惡共何の御噂も不承候、間番共も坊主衆同事色々浮說紛り咄し申内にも、耳に立申儀無御座候故安堵仕罷在候、先生事は右の通にて御座候、只今上の御儀を種々誹謗にが〳〵敷奉存候、人の言をも亦可畏にて御座候故、宜敷申儀を承候樣に無御座候、爰許へ御使に御越被成候樣抔も一向邪推にもとかく不申候、復庵事は近侍の者中村典膳并伊藤平太夫兩人へは無二の間柄にて、晝夜參會仕候故至て機密の儀も承り出し、彼是申儀のみに御座候へ共、此一事は聊推察にも參不申候、先是にて一段の儀と珍重奉存候、近日御面上可申上候、以上

六月廿八日　　青地藤太夫

新助樣

御覽後御火中可ㇾ被ㇾ成候

五月廿八日御老中被ㇾ仰渡ㇾ之覺

一　芙蓉ノ間御役人並諸番頭、諸物頭衆、其外布衣以上の御役人衆へ御老中列座、戸田山城守殿被ㇾ仰渡ㇾ候は、當春より段々可ㇾ被ㇾ下置ㇾ御切米の儀去年御領御損毛に其上打續御物入の儀有ㇾ之、御定の通に相渡可ㇾ申候、此御様子にて候へば、當暮可ㇾ被ㇾ下置ㇾ御切米等の御心當も無ㇾ之候、其譯は追て御書付を以可ㇾ被ㇾ仰聞ㇾ候間、面々兼て其覺悟可ㇾ仕旨被ㇾ仰渡ㇾ候由

覺

總て近年諸國風水の損毛相續、御藏納方不足有ㇾ之候に付、諸旗本御給米金渡り方、幷諸商人への御拂方等まで及ㇾ遲滯ㇾ候由達ㇾ御聞ㇾ彼是被ㇾ仰出ㇾ候品雖ㇾ有ㇾ之、當分の儀にて大勢の御給米金渡方行屆兼候處、去年は諸國別て不納の上、堤、川除等の破損等多く有ㇾ之難ㇾ捨置ㇾ數ヶ所御普請被ㇾ仰付ㇾ候、其のみならず、御領の百姓共及ㇾ飢渇ㇾ候者は御救米被ㇾ下置ㇾ其上於ㇾ御當地ㇾ御城邊は不ㇾ及ㇾ申、其外所々破損數ヶ所有ㇾ之、臨時の御物入多、諸職人御拂方等も不足に付、去年冬御切米金の內少々相減候故、別て御勝手向減省等の儀被ㇾ仰付ㇾ候、扨又御料所の內にても運送惡敷所は、御年貢米其所にて所相場に相拂、過半下直に相納事に候、然共御給米金渡方は御當地の時相場にて被ㇾ下候故、彼是御失脚多候、尤御切米等の儀別て無ㇾ滯樣にとの思召故、當春に至り去冬切米金減候分も不ㇾ殘被ㇾ下置ㇾ候、

夫故當春借の儀も未だ不レ殘は不ニ相渡一候、依レ之段々跡引に成、當夏御借米も早速渡候手當難レ成程の事に候、右の通の儀に候へば、當冬御切米渡方必定可レ爲ニ不足一候、然ば去冬の殘米金當春被レ下候分、當冬相減被レ下候にて可レ有レ之候、且又此上若水損毛等有レ之においては、大勢の人悉難レ被レ育儀にも成行候ては、公私の難儀以外成事に候、依レ之今度和泉守御藏入幷諸向御入用等吟味の儀被ニ仰付一候、大身小身の面々自分勝手の儀萬事相減候、覺悟專要に候條、右爲ニ心得一被ニ仰出一候、以上

寅六月朔日

當三日先生御物語の內一件追て記置申上候、公儀御臺所入近年以來以外減少仕、中々外人の推量に及申儀には無レ之候、其有増は先書に記候趣に御座候、依レ之御勘定奉行へ被ニ仰渡一、隨分御餘計出來候樣に日々御僉議候得共、はか〲〵敷存寄儀無レ之候、先生へも兵庫頭殿を以被ニ仰出一有レ之、存寄申上候樣にとの儀に御座候、乍レ然何れも存知の通算用等度支尙書の工夫は不レ被レ成候故、勘定所の儀別て御不案內に候、乍レ然隨分工夫も仕、若存付候儀も候はゞ可ニ申上一旨御請被レ成候處、被ニ仰出一候は、諸侯參勤の儀御代々御定法被レ爲レ成、隔年の參勤にて天下の諸侯大半江戶に相詰候、其故公私の費夥敷工商の類も準レ之致ニ充滿一候、中華の法は如何候哉相考可レ申候、五年三年宛にて參勤候はゞ可レ然物と思召の旨被ニ仰出一候に付、此事は天下の大事國勢の盛衰にも預申候故、輕々敷了簡も難ニ申上一候、追て相考中華代々の樣子も可ニ申上一候、京、大坂、駿河等總て遠所御城代の類、一倍の御加增御例にて御

座候、過分の御費に罷成候、此類向後妻子引越に被ニ仰付一、十年も十五年も相勤候樣に被レ遊候はゞ、引越の料は少かさみ可レ申候得共、數年の內にて御費用省可レ申候、且又小普請其外にも當時指て御用無レ之、諸旗本江戶近邊十里內外の地へ引込在鄕仕罷在、御用の年迄相勤候樣に被レ遊候はゞ、工商類も準レ之自然に減少可レ仕候、中華にて全盛の時の都にても、城下に如レ此天下の者致ニ充滿一罷在候事は無ニ御座一候、畿內近邊に散在仕事にて御座候旨被ニ仰上一候處、兩件共尤に思召候、但遠所御城番等妻子引越候はゞ、立身無レ之樣に存知氣欝仕間敷候哉、是さへつかへ不レ申候はゞ、一段に思召候旨被ニ仰出一候、引越候ても其頭幷御目付等指添申儀に候故、勤方御聞屆少にても宜敷者は早速被ニ召寄一、其々御役替等被ニ仰付一候はゞ、御奉公勤申間敷事とは不レ奉レ存旨被ニ仰上一候處、猶更御思案可レ被レ遊旨被ニ仰出一候由、隔年に參勤の事むかし牧野翁此事を被レ論候て、畢竟ヶ樣にては却て永久難レ成事、天下の困窮に成候事と被ニ仰出一候儀など被ニ思召合一候、先生にも其通に被ニ思召一候、何とぞ被ニ仰上一樣も可レ有レ之旨御咄に御座候、私申上候は是は、一大事の儀に奉レ存候、此等の儀迄も御內談に被レ及候事白衣の宰相と奉レ存候、恐悅の至奉レ存候、兼て私式も諸侯參勤の禮何とぞ改候はゞ可レ然と申事御座候、其上隔年參勤と申儀從ニ國初一の御定制とは不ニ承及一候、東照宮台德公御代には、或五年或三年にて相勤候體承申候、從ニ大猷公一以來隔年に相定候樣に承及申候、ヶ樣の儀は白石丈能僉議も被ニ仕置一候樣に承及申候、少御間合も可レ被レ成候哉、但八九年以來天下の諸侯隨從有レ之、在國よりも却て在江戶の方

宜敷様に成來候處、只今一旦御儉約の爲此制一度御ゆるめ被レ遊候はゞ、天下の大勢制弱に罷成申儀も可レ有レ之哉、此所如何可レ有レ之候哉定見成兼申候、尤其所へ御心付は可レ有二御座一候と奉レ存候旨申上候へば、成程にも其心付有レ之候、第一大猷公の御時分の通、御領本の方根づよく候へば不レ苦候得共、當時御領本の方至て困窮に候折柄に候故、此儀も大切に候旨被二仰聞一候、交代定期の儀白石へ尋可レ申も、只今は内藤宿へ住居中々對面も成不レ申旨被レ仰候て、廿日の御物語に相止申候、其後私に料簡仕見申候は、隔年の參勤只今御改被レ成、或は三五年とゝ罷成候はゞ、當分公私共各別可レ有候得ども、天下の勢の何様にも變可レ申も豫難レ計ものに候、然共此御心付被レ遊候事卒敷止候も、機會を被レ失候様にて殘念成ものに御座候、私の一策は只隔年と申御定制は其儘被二立置一候て、在江戸は六ヶ月在國は十八ヶ月に被レ成、一年半在國の様に被レ遊候はゞ如何に可レ有レ之候哉、左候へば自然と一年在國の輩も間々有レ之筈に候得共、隔年の格は立申候、ヶ様に心付申候に付、當十一月得二尊意一候節此一件も申上候、家人は不レ議レ政と申儀御座候へば、別て私儀可二申上一儀にて無二御座一候へ共、只自分工夫の爲存寄の趣申上候旨にて御物語仕候へば、皆々被二仰上一候に、諸侯參勤隔年の儀中華にも無二御座一候哉、或は五年三年にて一度朝覲の禮に御座候、國初諸大臣の衆永久の慮は無レ之、只江戸表御繁昌に相見申候處迄に被二心付一、隔年に被二相定一候儀と相見申候、此儀は私若年の比經濟の學に有レ志老人共は毎度申たる儀にて、迚も永久には難レ續可レ有二御座一候の僉議も仕候、但此御定制も久敷事に御座候處、俄に御

改め被ㇾ遊候はゞ、却て國勢の弱みにも罷成間敷ものとも不ㇾ存候、足利家の中葉天下の諸大名しか〳〵參勤不ㇾ仕、後には氣隨に罷成、將軍の召にも不ㇾ應、終に天下の大亂にも及申候、扨軍法を以考候時は軍形兵勢と申二つは孫子が書にも骨髓の事に仕候、凡軍を立候には先軍兵になり形を付候て、其なり形の內へ入候て用候處、自然にきほひ付候て勝を取申候、少も其なり形くづれ、きほひ薄成候へば可ㇾ勝樣無ニ御座一候、此意にて天下の治にもなりときほひ御座候、數十年のなり一旦にくづれ候はゞ、自然ときほひぬけ候て難ニ取返一儀にも及可ㇾ申歟、左候時は大事至極の儀に御座候間先此儀は御止も被ㇾ遊、只國々參勤の從者減少仕候樣急度被ニ仰出一、扨前にも申上候通御旗本無用の人に在鄕被ニ仰付一候はゞ、此兩樣にて大分御上下の人減可ㇾ申樣に奉ㇾ存候旨被ニ仰上一候へば、被ニ仰出一候には、諸侯從者減少の儀新助が身にて不ㇾ存筈に候、如何樣嚴重に被ニ仰付一候ても中々三の一にも減申ものにて無ㇾ之候、既紀州に被ㇾ成ニ御座一候內度々人數減少候樣にとの事にて、道中などは御減被ㇾ成候へば、一年御在府の內色々の儀にて御人御入用出來、終には可ㇾ有程の御人高に成申候、諸侯皆此筈に思召候、御前に思召候には、隔年參勤の儀元來權現樣、台德院樣御定にては無ニ御座一候、大猷院樣御代江戶御城下何と仕候ても淋敷候間、諸大名妻子共に在江戶有ㇾ之、隔年の參勤可ㇾ然との儀にてヶ樣に成り、只今は御城下に不充滿にて却て宜敷候、むかしの儀は各別に候、乍ㇾ然ヶ樣に成來候儀を三年五年などゝ被ㇾ遊候ては却て如何に候間、天下諸侯を四ッに分、半年は在江戶、一年半は在國仕候樣に御定可ㇾ被ㇾ遊歟

と思召、足利家の時諸大名參勤不レ仕事を新助は氣遣存候體に思召候、乍レ然是ゟ不レ苦候、左樣の勢にては無レ之候、たとひ諸侯の內二人や三人謀反仕候分は御手當何程も御座候、若大勢申合候ても謀反に候はゞ却て江戶にて大勢相集居候はゞ御圖難レ被レ成、國々にて左樣の仕形有レ之者御手當被レ遊よく候、とかく右の通四ッに御分、交代の圖を御工夫可レ被レ遊候、諸旗本在鄉の儀は一段尤成心附と思召候旨被二仰出一候、外ハ一圓可レ存樣も無レ之儀に候、私事故被二仰聞一其心得可レ仕旨被レ仰候、此趣の儀に御座候條、例の學友衆にても御咄も御無用に可レ被レ遊候、先生へも其段申上置候、唯御了簡の程承知仕度奉レ存候、私方迄其段可レ被二仰下一候、以上

六月十三日　　靑地藤太夫

藏人樣

今月廿六日尾張樣水戶樣不時御登城有レ之、於二御座間一御密談何事と申事一圓御沙汰は無レ之候、水戶樣御請の內に是は御代々無二御座一儀奉レ存候旨被二仰上一候儀迄相知申由、坊主衆廿八日罷越被二申聞一段、先生へ廿九日御來臨の節申上候處、先日又御前へ被二召出一御人拂にて、加納遠江守殿、有馬兵庫頭殿兩人迄にて候、御側に罷出候處兵庫頭殿迄御意には、諸大夫交代の儀に付其方へ迄申聞置候趣、委細兩人に申て聞存寄可二申上一旨上意に候處、有馬殿謹て被レ申候は、交代の儀彌在江戶半年圖りも可レ被レ遊思召候、新助儀以後天下のよわみにも可二罷成一哉との氣遣有レ之趣申上候、猶更存寄委敷申上

可レ然旨被レ申候處、上意には總て久敷事を改候儀は十分可レ宜儀にても、先は人々彼此申物にて候、其上新助存寄も一理有レ之儀に候へば、只今其氣遣は無レ之候、畢竟江戸人馬甚敷に付、自然と衰微の基に成候、諸大名從者減少候樣に何程申渡候ても、江戸詰仕候身にては可レ有レ之程の人數無レ之候ては難レ成事に候、御身ハ上に御覺有レ之候、決て交代の格此度御改可レ被レ成と思召候旨上意に候、御請は最前も申上候通、先年よりヶ樣の儀工夫有レ之候、老人共申候は、江戸の御繁昌至極仕、諸大名隔年に參勤無二懈怠一御威光盛に御座候へ共、ヶ樣にては永久の御法には難レ成事に候、畢竟は參勤の期にも參勤仕兼申樣にも可二相成一候歟、然ば何とぞ相改可レ然抔申たる者ども御座候、私申上候趣は、餘り奧を取候て萬世の後、御當家何代目の御代より交代の期御改め被レ成候てより、諸大名在國多く罷成、其より參勤も懈怠仕候など、後世に批判も仕候へば、御名の出申儀とも又は實に在江戸をしたひ競て參勤候處ゆるまり可レ申歟などとの遠慮過申了簡を以、申上候趣に御座候、乍レ然段々御僉議の趣にて存候得ば元來御定權現樣台德院樣より出申儀にても無二御座一候、大猷院樣御代江戸繁昌の爲、隔年に御定被レ遊候儀にて御座候、只今却て繁昌過候て江戸の御爲不レ宜候に付御改被レ成候儀、其上隔年と申御定も替不レ申、一年の内は江戸たるべき諸大名半分、在江戸と申ものに御座候故、上意の通私も氣遣に不レ存、江戸表の御政道さへ正敷候て寛怠無二御座一候へば、右の氣遣は無二御座一候旨被二申上一候處、遠所の御城番等は向後妻子引越の儀等彌其通に被二仰渡一候、御國用不足の儀は二三年も過候はゞ、御償相知可レ

申旨上意に付、私奉レ存候は、京、大坂等に富有の町人何程と申數も無二御座一候、此等所持仕候金銀は、皆上の御金銀と申物に御座候故、少々の利分を被レ下御取上被レ遊候はゞ、慥成御藏へ奉レ預と申物に御座候故、忝奉レ存候て指上可レ申ものに奉レ存候旨申上候處、左樣の儀は當分の儀にて、此度の僉議には不レ預事に候、御先代以來御藏も空虛に罷成、御臺所入も無レ之ものを人の存候て批判し笑可レ申かとて、色々の計略を以勝手を取續たるものに候、計略を以御取續可レ被レ成ならば、只今迄も可レ被レ成事に候得共、其は皆當分いや〳〵の儀にて御同心不レ被レ成事に候旨上意に付、御申上候は當分ながら此度は御切米等、先御借銀を以被二渡下一候樣に仕度旨奉レ存趣に御座候、計略の儀にては無二御座一候旨申上候處、兵庫頭殿比日新助へ御勝手方御不如意の趣實儀を申聞候へば、肝をつぶし奉レ驚候由御申上候に付、私式もケ樣に可レ有二御座一候は不レ奉レ存候、近比御笑止千萬成事に奉レ存候旨申上候御不如意の樣子或御勘定方の人申聞候は、暫詞の上の儀にて候故有體成事は難二申聞一候、只たとへを以可二申聞一候、其方身上貳百俵の内百俵は公開入用、百俵は內證日用の入用と有レ之に候へば、せめての事に候、貳百俵にて日用內證等の入用金貳步計有レ之候はゞ、今日立ち可レ申候哉、今の上樣の御勝手此二分位と被レ存候、無興千萬成事共に候

常憲院樣御代既に御臺所入過半の上出濟、何とも可レ被レ成樣無レ之候て、金銀改一倍二倍の吹出しを以當座いや〳〵に成、猶不足は砂除銀などゝ申名目を以て御取上被レ成候、其上文昭院樣へ移彌可レ被レ成

様も無二御座一候に付四寳銀に成候處、無レ間甍御、此間の御費用莫大成事に候處、當御代火急に四五年の內天下の悪銀不レ殘復本被二仰付一、然上に去年の凶年甚敷事にて、一時に御潰れ被レ成候趣に候、當上様思召候、此御様子少も御隱不レ被レ遊、押出して天下の者へ爲二御知一被レ成、其上にて大き成處より御取直し可レ被レ成御思慮に被レ成二御座一候旨

一 上意には左様に急度手をつき罷在候ては中々成間敷候、手もあげ候て可二申上一候、總て其方共の類存寄御尋被レ遊候ても、何も御尤〳〵と計申上罷在候に付、何とも御相手にも難レ被レ成候、其方事は存寄不レ殘申上候に付御心得にも成候、夫故切て御前へも被レ爲レ召候旨御意に付、兎角可二申上一様も無二御座一、難レ有上意冥加に相叶申旨御請申上候處、此間誰彼相識共申候は、旗本中風俗悪敷罷成候間、是は學校建立いたし急度敎を立候はゞ、可レ宜旨頻に申候、此儀は如何存候哉と御尋に付、乍レ憚學校の儀は御無用に可レ被レ遊候、聖人の御言葉は萬世の手本にて、如何様の時節にも不レ合事は無二御座一候、指當論語に民は富し候て扨敎ると御座候、敎は風俗を改申事に御座候、且又齊桓公は周末の霸王に御座候、桓公の宰相に管仲と申人は政務に事の外長練仕候て、御當家にて土井大炊頭、松平伊豆守抔の様に、千歳の後迄も手本に仕程の者に御座候、此管仲も衣食足て禮讓を知など申候、人世の大本は衣食の二ッに御座候、近年御旗本中衣食に足不レ申候故、敎の所へは參候儀にて無二御座一候、然處今の時學校等の御沙汰御座候て一圓心服は不レ仕候、却てあざみ笑ひ可レ申候恒の產無レ之に恒の心あるは、士

の事と孟子に御座候へ共、只今の士中々行儀にても無㆑之候、學校の儀は物識共すゝめ候故、是も雖㆑捨其方へ尋候事にて、申通の趣に候へば、不㆑入ものと上意に付、畢竟結構成思召寄に御座候間、二三年も過何卒其時節到來の儀も可㆑有㆓御座㆒と奉㆑存候旨御請申上候

此學校の儀は、定て林大學頭か木下平三郎より申止たる物にて可㆑有㆑之候、近時迂濶の至極、出家の吾宗旨を崇敬の脇ひら不㆑見に、寺院建立の心と同斷とて御笑被㆑成候

右の通交代の儀は大形御決定被㆑遊候樣に見申候、然ば廿六日水戸樣御請の御一言は此儀にて可㆑有㆑之候、水戸樣御生質事の外御發明にて、西山黄門樣の再來の樣に申候由、扨諸大名半年の詰の代には役銀出申圖に候へ共、少分の儀にて諸大名の勝手には莫大宜敷事共に候由に候、此御一策誠萬世の通令にも可㆓能成㆒事ながら、乍㆑恐惜き事は名あしく相聞、下民の唱氣の毒成事も可㆑有㆓御座㆒候旨申上候へば、其儀は可㆑有事と氣の毒に思召候旨被㆑仰候

一　能州の内日野小左衛門殿支配所御預地に被㆓仰付㆒儀に付被㆓仰聞㆒候は、去年笠島村公事有㆑之節、上樣思召には加賀、能登、越中三ヶ國の儀は一圓に領知の筈に付、少も御領は有㆑之間敷筈に候故、何故ヶ樣に御藏入有㆑之候哉と御尋に候へども、曾て覺申者無㆓御座㆒候、先生も御覺不㆑被㆑成候、然處誰にて候哉、是は前田大和守今の丹後守先祖へ新知壹萬石被㆑下候時分、能州の内にて壹萬石御引替可㆑有㆑之旨にて、ヶ樣に成來候て申上候者有㆑之、夫にて埒明申候旨被㆓仰聞㆒申に付、左樣の首尾も御座候

哉私共不二慥成一候へ共、承傳候は左樣にては無二御座一候、是は瑞龍院樣御時分、土方勘兵衞後に河内守殿と申方、則瑞龍院樣從弟の續に御座候、關ヶ原の時分佐竹家に蟄居有レ之候處、關東より加州の御使被二相勤一、其節の功に加州領の内を以壹萬石、從二瑞龍院樣一與合力分の扶助有レ之候、初は越中岩瀨邊にて領知の處、微妙院殿の時分岩瀨は江戶往來に障に罷成候に付、能州の内を以替地に被二相願一其通に罷成候旨、其後孫河内守殿何故にて候哉、領知被二召上一候て御領に罷成候旨承及申候、勘兵衞殿御直參の儀は最初よりの儀に有レ之候哉、左樣の儀私は慥に不レ存候、右の譯にても候哉、今以右代官所は土方領と加州にて下々申慣候旨御物語仕候、

此一件は聞捨難レ成事と奉レ存候候旨達二御内聽一候、私申入候趣も定て相違の儀可レ有二御座一と奉レ存候、尤相違の儀承知仕候はゞ、追て新助殿へ可二申入一心得に御座候旨、奥書を以上申候、晦日の夜の事にて御座候

一　比日六諭衍義大意板下相調候浪人石川勘助儀、町奉行所へ被二召出一白銀二枚被レ下、殊の外難レ有かり先生御宅へも御禮に罷出候、此者申候は、町中にて手習子供取申押立候者御改被レ成候得ば、八百人餘御座候、其内重も立申者十人計、勘助も其内にて名主召連罷出候處、手習師匠仕候者共無益の手本相調可レ申よりは、此書の内を可レ然樣に幾切も調候て子供へ敎可レ申候、夫故御上より被レ下候旨にて、右の者共へ一冊づゝ被レ下候、一段を手本六ッ宛に相調專敎申旨勘助申候由、御物語御座候

右昨日私御小屋へ御見舞曾被㆑成㆓御座㆒候內、御密談御座候條忘不㆑申內に有增相調懸㆓御目㆒候、以上

六月晦日

青地藤太夫

藏人樣

尙以七月三日萬石以上の御衆中不㆑殘登城有㆑之候樣に、今朝於㆓御城㆒被㆓仰付㆒候 （七月朔日）

先生御勝手方は御難儀千萬成儀何とも氣の毒存候、御自分にて少々被㆑立㆓御用㆒候ても當分の儀に候、中々後迄屆申にても無㆑之候、依㆑之舍人殿など迄可㆑被㆓仰達㆒趣、成程此樣子に至候ては成否は各別苦間敷儀と存候、被㆓仰達㆒樣は、何とぞ受許より草案調候て進上は難㆑仕事、其許の樣子紙面も又樣子と少づゝ違申物にて候、書不㆑盡㆑言とはヶ樣の儀と被㆑存候、畢竟隨分御無心等被㆑成次第不㆑被㆓仰上㆒思召に御座候へども、先年御類燒、去年御息女樣御婚禮も隨分輕被㆑成候へども、只今の時節故思召の外御費用は分限不相應に入增、當春以來扶持方米何程計、などて御請取不㆑被㆑成、此以後もしかゝ難㆑被㆑下被㆓仰渡㆒、當春以來只今迄は藏宿等より、何程計御借用候て御續被㆑成候へ共、最早左樣に打續候事も仕兼申體、只今に至候てはひしと被㆑及㆓御困窮㆒候、先年御拜借被㆑成候會所銀を何年以前御返濟事濟申候間、此度何程計何年計の年賦を以御拜借被㆑成度思召候、近比被仰上㆑兼候へ共、必至と御行詰被㆑成候に付、御自分迄被㆑及㆓御內談㆒候て、半切御紙面御調舍人一名にて、則舍人へ直に御達尙更思召の趣御口上にて被㆓仰含㆒御願被㆑成可㆑然存候、此間彼是上よりの御取次等御勸被㆑遊、左樣の序

に被レ乘候樣成邪推も可レ有レ之候哉、其段も尙更御遠慮に思召候へ共、尤左樣の處に御心付も無レ之、指懸り御行詰に付御願被レ成候段、御口上にて被二仰達一方眞直に可レ然かと奉レ存候、御自分など御取次、又は內匠連名などは却て不レ入物と被レ存候、萬一舍人好候はゞ、夫は尤勝手次第格別の儀と存候、此節は暫御延引可レ然哉と御申越に付右申進候、御內存と存候程拙者も同事に存候へ共、末に成候はゞ此方御參勤御禮彼是と申候て、舍人初事繁成一入調兼可レ申候旨、右申遠慮も有レ之候へ共と申儀、御口上にて直に被二仰達一可レ然樣に可レ存候、先生も別紙を以申上候樣に申越候へ共、同事兩樣に無益の儀、其上先生も御用多內一通りの書狀さへも比日は指控へ、暑氣見舞さへ未不二申上一、御自分御越以後は每便御樣子承候故、結局控へ申かた可レ然と存候間、此儀は尙更直には不二申上一候、此紙面を以申上賴入申候、先拙者存念は如レ此にて候、山本氏其許有合候はゞ一段の儀に候ものをと存候

先生御勝手一巻の儀に付、藏人存寄承合候處、是も附紙を以申越候間則入二高覽一候の通に可レ被レ遊哉、左候はゞ私彌藏人存寄一往御口上書拜見被二仰付一、其上にて舍人へ御達被レ遊候樣に仕度奉レ存候、乍レ恐傍觀意得ゝ有レ之間敷者共奉レ存候、一往拜見も仕其上の御事にも仕度候、私御取次仕候儀は不レ入事の樣に藏人付紙には相見へ候へども、金銀の一巻は我人平交の間柄にて直には難二申入一ものゝ御座候間、私取次仕一先舍人內證承候てゝ可レ然候はん歟などと奉レ存候、此段御獨斷の上にいづれへ成共御一定可レ被レ遊候、木下殿去比御內談の趣も御座候間、彌被二仰合一御同道被レ成舍人へ御直談も可レ被レ

成候哉、兎角はいづれにても御口上書は御達可ㇾ被ㇾ遊候間、近々御草案御調被ㇾ遊爲二御見一可ㇾ被ㇾ下
候、猶更藏人申越候趣共御座候へ共一々不ㇾ能二筆紙一候、其上不二差急一事に御座候間、其内奉ㇾ期二御面
謁一候、右舍人へ被二仰達一候事は不同に被二思召立一可ㇾ宜樣に奉ㇾ存候

一　一昨廿六日尾張樣、水戶樣不時御登城にて、於二御座間一御密談有ㇾ之、一圓何事と申儀相知不ㇾ申、
但水戶樣御請是は御代々に終に無二御座一儀と奉ㇾ存候趣被二仰上一候、御一言迄相知申旨と昨日も申慣
候、以上

六月廿八日　　　　青地藤太夫

新助樣

今朝室新助殿私御貸小屋へ被二罷越一、別紙口上書一通持參被二相渡一候、且又被二申聞一候は、此趣御自分
樣へ直に相願可ㇾ然樣にも存候へ共、御直談に及候ては御差圖難ㇾ被ㇾ成筋も候へば如何と存知、私迄
相達申候、但直に申達可ㇾ然樣子に候はゞ追て於二御殿一得二御意一可二申達一候、私勝手の儀は山本源
右衞門能存知罷在候事に付、御當地に有合候はゞ、源右衞門へ內談に及、御示談仕候樣に賴可ㇾ申所存
に候へ共、有合不ㇾ申候に付私迄申聞候、數年難澁の勝手に御座候處、今年に至り必至と可ㇾ仕樣無二
御座一候、依ㇾ之過分の願奉ㇾ存候へ共、只今は七八十兩拜借仕度存候、內五十兩計は去暮娘婚禮の節借
用の內にて御座候、藏宿手前へ返濟仕候ねば、飯米のつゞけも、いなみ申族に御座候に付、乍二迷惑一

拜借の儀奉レ願度內談仕候旨被二申聞一、則持參の紙面御自分樣迄懸二御目一候、以上

青地藤太夫

六月廿九日

大野木舍人樣

私儀先年私宅類燒仕候、其上去年娘婚禮爲レ致候、尤輕儀に候へ共不相應程費用もかゝり、旁不勝手に罷成申候、當分藏宿より金子飯米取替候て跡先取續き罷在候處、當年御切米四ノ一ならで相渡り不レ申、當暮御切米も減少可レ仕由に御座候、其故勝手難儀仕候間、可レ然儀に御座候はゞ、金子七八十兩拜借奉レ存候、私儀御家に罷在候內何の御奉公も不二申上一、其以後も何の御用にも相立不レ申儀に候處、ケ樣の儀申上候事迷惑至極奉レ存候、其故御無心等不二申上一覺悟に罷在候得共、當年ひしと勝手指詰り候に付、御自分樣迄御相談申入候、御料簡被レ成候て大野木舍人殿迄被二仰達一御內意を被レ得被レ下候樣に仕度候、先年御當地へ罷越候時分會所支配の銀借用仕候、是も去々年迄に返濟仕申候、此度拜借被二仰付一被レ下候はゞ是又年賦を以返上仕度奉レ存候、以上

六月廿九日　　室　新助

青地藤太夫樣

同日八ッ時比舍人迄右兩通相達、新助殿願の趣如何可レ有レ之候哉、私取次候て不レ宜候はゞ直に御示談有レ之樣可二申達一候哉、先は私申上候ては思召等被二仰聞一候にも宜敷筈の樣に了簡仕候に付、取次候て

申達し候旨、申述べ候處舍人殿被二申聞一候は、惣て拜借被レ申儀御家中を始め御出入の衆中にても決て難レ成候、その上木下平三郎殿毎度拜借の儀私へまで被二申聞一候、先比も拜借の儀達て被二申聞一候、達二御聽一候へば一向御頓着に不レ被レ及候、但珍敷書物等御慰に被二指上一候はゞ、御禮旁入用程金子被レ下候樣成事は又格別と思召に付、其趣示談仕候へば何やらん殊の外珍書、平之丞殿自筆の書入等も有レ之書物被レ致二獻上一候依レ之金子も被レ下積りに候、箇樣の儀共御座候間私へ直談に及候ては一向成不レ申候、取次仕候て一段と存候、先此兩通は預置申候旨被二申聞一候に付能き儀承知仕候、平三郎殿には左樣の珍書も有レ之幸の儀に御座候、新助殿には四書五經も無レ之、先年類燒の後私共同事の弟子中申談、少々書物も遣申候樣の體に御座候故、中々平三郎殿格には成不レ申候、紙面御請取私に於て忝奉レ存候、前年類燒の時分山本源右衛門御當地に有合、私と申談少許の合力など仕候へ共、御存の通の者共に候へばしか〴〵と申儀も及不レ申、依レ之同姓藏人奧村源右衛門など申談漸百兩計才覺仕遣候、小屋懸等も出來仕候、去年娘婚禮の時分も少々合力にも及候へども中々行屆申程の儀も無二御座一候、然處今年の樣子に罷成候ては何共可レ仕樣無二御座一候に付、不レ及二是非一箇樣の首尾に御座候、新助殿存寄は今年猶更御無心等申上間敷心得と相聞候、乍レ然昔の通候へば一僕にて、有にまかせ候て朝夕を被レ送候ても自由に罷成事に御座候へ共、去年以來は毎々御用有レ之登城有レ之、中ノ口にては御直參にても刀を爲レ持候て殿中へ入申格に御座候處、小者體に刀爲レ持被レ申候儀も何とも難レ成、心外の儀にて不レ任

所存レ候旨被レ申候、且又其品こそは口外も難レ成樣子に御座候、御用にも不二存寄一御使も被二相勤一候、箇樣の時分に乘じ候て拜借の儀も申上樣に有レ之候樣に有レ之候ては、數年以來遠慮仕候覺悟も無に罷成候樣にて迷惑さうに相見へ申候へ共、左樣の儀迄心附候ては最早可レ仕樣も無二御座一候に付、存切私へも被二申聞一候爲レ體に奉レ存候、此上は如何樣共彌御思案被レ成被レ達二御內聽一候樣に仕度旨申述候處、一々承届候、先請取置候旨被レ申候事

同日七ツ時前武藤庄兵衞を以御尋被レ成候は、新助に息女有レ之嫁娶も濟申儀曾て只今迄御存知不レ被レ遊候、何方へ何頃嫁娶相濟候哉の旨被二仰出一候、息女兩人有レ之候處、一女は先年御當地にて病死致し、一女は御右筆高階半治郎殿息へ去年九月婚禮相濟申候旨申上候、此御尋の體は舍八殿へ相達候、二通はや御指上と存候、又御尋は御切米は何程相渡り申樣子に候哉、承及申趣可二申上一旨同人被二申聞一候、先月末か當月初木下平三郎殿溝口七太夫殿へ被二申聞一候は、御切米春以來十三俵ならで渡り不レ申難儀被レ仕候旨咄にて御座候、此儀承候に付嘸新助殿可レ爲二難儀一と奉レ存候、其翌日尋に遣候へば平三郎殿も請取不レ申候と申來、員數は不レ被二申聞一候、十日計も過又尋に遣候へば、此間少々相渡り申候、定て段々可レ被レ下と存候由申來候、今朝面談にて承候へば、段々相渡候て四の一請取申旨被二申聞一候、俵數は不レ承候由申上候

一　廿八日夕水野和泉守殿御宅へ闘番御招被二仰渡一候は、能州の內日野小左衞門御代官所壹萬四千石

條、向後御領地に被二仰付一候旨にて御書立相渡申候、御禮若狹守様御勤可レ被レ遊候處、御痛有レ之御登城も御斷の儀に付、長門守様御名代の儀被二仰遣一候處御氣色惡敷候、依レ之如何可レ被レ遊哉の旨御伺候處、御家老を以可レ被二仰上一候旨御指圖有レ之、津田玄蕃被二仰渡一候、常の御使とは違候間聞番相副候はゞ尚更可レ宜旨被二仰出一候、扨右御旨爲レ聽長門守様、備後守様、右衞門督様、安藝守様、攝津守様、並日野小左衞門殿へ御使被レ遣候、室新助殿へ舍人内匠より紙面を以、昨夕水野和泉守殿へ聞番被二召寄一、能州の内日野小左衞門殿御支配の分御預地に被二仰付一、誠思召懸も無レ之儀難レ有思召候、重て御直書を以可レ被二仰聞一と思召候へ共、今日の儀事の外御隙入御座候に付兩人へ被二仰渡一、紙面を以爲二御知一被レ成候旨被二仰遣一候に付、八ッ半時分御祝詞に御出表向御悦、一通りは佐々木左兵衞を以御申上、右内匠舍人を以被二仰遣一候御禮の趣は藤太夫を以申上候、右の儀金澤への御使者は石黒太郎右衞門昨夜中被二仰渡一、御書出來次第發出候筈に候

一　右の趣源左衞門殿、武兵衞殿、新八郎殿へ被二仰達一可レ被レ下候何卒可レ然被二仰出一有レ之候様にと奉レ存候、已上

六月廿九日　青地藤太夫

藏人様

兼山秘策 第五册 終

兼山秘策 第六册

起享保七年至八年

一　七夕の朝先生御面諭被二仰聞一候件々、此間兩三度御用にて御登城被レ成候、御機密の事迄も御尋有レ之候、箇樣にては定て誓詞も可レ被二仰付一哉と存候、左候へば私とても一切被二仰聞一がたく候、今の內御咄可レ被レ成候、先昨日御登城の處、取次を以御尋被レ成候は、御籏本中年少の者など弓馬の儀は不レ及レ申事に候、學問も深き事は無レ之候とも、小學四書は素讀も仕得申程に心懸候樣被レ遊度候、馬など指當自分の用に立申程乘候へば能候、只今迄の樣子其處迄も不レ參候、唐にて士の及第など仕候法委細御聞被レ遊度候、相考へ可二申上一の旨にて委細承レ畏、考合追て可二申上一候、指當存寄候は、學問の道は畢竟上より不レ被レ行候ては、下々發起可レ申樣無二御座一候、只今御學問御數寄候樣に御座候へども、御眞實に御勤被レ遊候御樣子には相見不レ申候、上箇樣の體にて下々感發仕ものにては無二御座一候、扨御老中方並各樣などの內學問の筋御存知にて御用候へば、末々にも出精可レ申候へ共、御壹人も左樣の方無二

御座㆑候、初よりの衆は其通にても、只今御取擧の方少も其筋御存知の者に候へば、頓も出來可㆑仕候へ共、此度安藤對馬守御老中被㆓仰付㆒候へども、事外の嫌と申候、同列の内に酒井修理大夫は學問も數寄、人品も却て宜樣申慣候處、此人は御取出不㆑被㆑遊候て、對馬守など罷出候に付、私共は望を失申候旨兵庫殿へ迄申述候、有考物にて今日は隙入申候、扨先日も被㆑爲㆑召御尋の趣有㆑之、[illegible]存寄紙面を以申上候へば一段宜敷思召候旨にて、其紙面は御留被㆑遊候、此一件は蕃數事の樣に、[illegible]候故、申聞候旨被㆓仰聞㆒候、御尋の趣は先祖以來同じ程の官位に候處、其子孫の内拔群年齡も有㆑之、格別の趣を以官位御授候處、年若き同輩の內より其身も昇進の儀預申候例可㆑有㆑之哉、先は年少の者の方より辭退も可㆑仕候處、却て左樣に無㆑之時申付樣の趣も可㆑有㆑之候、何とも覺申儀は無㆑之候哉の旨被㆓仰出㆒候に付、廣き事共に御座候間、定て御尋の趣に似寄申儀も可㆑有㆓御座㆒候か、覺は不㆑仕候、[illegible]考可㆑申上候、指當存寄候は、後漢光武帝中興の時二十八將とて、武功の名臣、廿八人同樣に侯爵に被㆑封候へども、追て其內鄧禹と申人文武兼備の器勝たる人に付、擢て三公に被㆑任候、さればとて外の者共何廉申儀一人も無㆓御座㆒候、宋太祖の時趙普王韓琦など三人同樣被㆓召仕㆒候處、後に韓魏公一人勝れて子孫迄も宜敷御取擧候へども、外の子孫何廉申たる儀も無㆓御座㆒候、辭退も申上候は道にて御座候、何廉詮申者に候もそれは道に背候故、幾重にも可㆑被㆑遊事にて可㆑有㆓御座㆒候、彌相考可㆓申上㆒旨御請仕候處、諸儒の評論可㆑有㆑之儀に思召候間、左樣の儀も見當次第、書載可㆑入㆓上覽㆒旨被㆓仰出㆒候御考候

處、拓跋魏の代、專門地を以登庸する事今の日本の風に、能似申候、光祿勳于烈が子登例を引て官を轉ぜん事を請候趣、能此度の御尋に相叶申候、（于烈事見二于北魏孝文帝大和十九年通鑑一）門地を以官職を授候事不レ可レ然の趣は、李冲が論明白に候（李冲論見二同二十年一）此の一事を書拔能聞へ申樣に和解いたし上レ之候、何とやらん相公樣、中納言樣に被レ成度思召の樣に愚察仕候、大猷院樣御外孫と申御筋目も、又外に無レ之儀に候、御齒德と申誰あつて異論を容可レ申樣も無レ之儀と存候旨被二仰聞一候に付、此一件何とぞ寡君內聽にも達候て、可レ然と思召被二仰知一候哉と御尋申上候處、左樣にては無レ之候、若何とぞ御家御先例の內、被レ任二中納言一候例にても、たとひ兵庫殿心得にて被レ尋候首尾も候はゞ、大形推量はづれには仕間敷候間、左樣の儀も候はゞ重て可二申聞一候、只今の儀は至極の推察の趣に候故、疎末成事申候儀不レ入事と被二仰聞一候、是は恐悅成事に奉レ存候

一　此度交代の儀に付御書出拜見仕候處、乍レ恐御文言如何敷存處多御座候、其故考候へば、先生御潤色を經し物とは不レ被レ存候、作御直しも被レ成候哉の旨申述候處、少も爲二御見一不レ被レ遊候、御恥辱をも不レ被レ顧に有レ之儀など、近頃不レ入御文體、後世の議論も生じ可レ申樣に存候、御文盲被レ成二御座一候故、只御質直に被二思召一まゝ御調被レ遊たるものゝ、御旗本中にては風俗惡敷候故、却て御謀略にて態とケ樣に御調被レ成候物と申ものも有レ之候、曾て御謀略にては無レ之、御眞實に御難儀に被二思召一候に付、別に御近習に御役人中などへ御出被レ成候、御紙面抔にも諸大名へ斯樣の儀被二仰渡一、入別も難レ

被遊樣に思召候旨相見申候、兩通とも御自身の御文言にて、少御自慢の方に御座候旨被仰聞候、私申候は、畢竟己の詔等の御心持にて、誠に以難有御儀に奉存候、乍然辭令も又大事のものに御座候、此度の御書出は別て簡明にて、しかも天下一同に感動仕候樣の御文法も可有之物に候處、殘念成事に奉存候間申上候處、水戸殿御請出來仕候の旨申慣候、但し是にも浮說有之候、其內別て虛說は、此度上樣には諸大名中より十分一上納米可被仰付と有之候處、水戸殿達て不可然旨申上候て、百分一に罷成候抔と、歷々の內にも申慣候、全以無之儀、上樣には初發より至て輕く御借米被成、御切米の不足、並新田川除等の御入用の處さへつぐのはれ候へば宜敷候、諸大名とても近年困窮に候へば、何とぞ天下と共に有餘有之樣御改被遊度との御儀にて、交代も各別諸大名の爲に宜敷樣御改被遊候、但迚御借米被遊候間、十分一にて可然旨御老中の內より被相伺候へども、御用不被遊候、水戸殿御請被成候樣殊外宜敷、上樣にも再三御稱嘆被成候旨に候ところ、夫さへ如何樣の儀に候哉不相知候處、去廿六日水戸殿御歸舘の後、御もよりの內讃岐殿より御附置被成候老人御側へ罷出、御用の筋を私式承り度と申上候儀にては無御座候、御請は如何樣に被仰上候哉、不苦趣御座候はゞ御意承り度被申上候處、御用の趣御內談に付、尾張殿御請は、御代に無御座御儀に候へども、段々御僉議にて相極候上と御座候へば、私ども何の存寄も無御座旨被申上候に付、尾張御請の通御通議段々相極、其の上にて私共存寄も御聞被遊儀に御座候、外かに存寄は無御座

候へども、大切の御相談にて候間、退出以後追て存寄御座候はゞ可二申上一儀に奉レ存候、尾張殿如何と御挨拶被レ成候へば、上樣再三水戶殿存寄一段尤に候、指急ぎ申す品にても無レ之候間、追て如何樣にも料簡可二申上一上意に候、依レ之追て彌不レ苦儀可レ然思召候間被二仰上一候旨、右老人へ御咄被レ成候旨、小池氏潛に先生へ被二申上一候旨被二仰聞一候、以上

七夕　　靑地藤太夫

藏人樣

八朔には午前より安藝守樣御出、御兩公樣共悠々被レ遊二御對顏一、八半時過より右衞門督樣、攝津守樣御出何も御饗膳も出、前後二時計御對談一段御淸快恐悅の儀に奉レ存候、其刻先生も御出被レ成候へば、右衞門督樣いまだ御近附にて無二御座一候旨御聞被レ遊、御前御誘引にて御小書院迄御出被レ得二御意一候、先生殊外忝ながり冥加に御叶被レ成候旨被レ仰候、御機嫌克御樣子爲レ可二申上一右の樣子も申上候、此日本多帶刀殿潛に被二仰入一候御口上の內、端々承候趣申聞候、其趣は此間は殊外御氣色御快被レ成二御座一候左候はゞ御手今少御痛被レ遊候迄に御座候、近々御參勤の御禮も御願可レ被レ遊と思召候由、且又御國より近々年寄中御召寄可レ被レ成と思召候旨被レ仰候、是は內々の事と存候旨御申聞候、恐悅の至に奉レ存候

一　先生去頃此方樣へ御使御勤被レ成候趣、並諸侯交代の儀等に付、其元樣より被二仰下一候趣、懸二御目一候へば、其刻被二仰聞一候は、藏人殿、武兵衞殿などは、別てもどかしく御おもひ候事は尤に候、拙子

も色々致二工夫一思案候へ共、畢竟納約自牖の意簡要の時節と存候、聖賢の教を御信用の處難レ得事に候故、そろ〳〵其筋へ御趣被レ遊候樣にと存候、其上は天命の所レ使レ然にて候旨被レ仰御笑被レ成候、先頃以來御尋に付、紙面を以て御上被レ成候品々多御座候、或は川除、新開等、或は諸侯交代等、古今に通じ宜敷仕樣、又は撰擧詮撰の類、唐虞より三代、幷漢魏晉隋唐宋明に至迄、一世〳〵の法を擧候て、其代々の善惡を記し、畢竟當時通行被レ遊可レ宜樣子、先生の斷案を以被二仰上一候、御草稿もなく冊物も被レ成二御上一候事に御座候、明備詳書可レ申樣も無レ之儀に候、何とぞ御留書も被レ成候はゞ寫置申度ものと申上候處、後來御考察の物にても候に付、旁御扣に被レ成度候へども、事長品々御草稿さへも難レ被レ成候故、御扣は猶更難レ被レ成候、御自分にも氣の毒に思召候へ共、不レ及二是非一旨被レ仰聞一候處、權七幸罷出候間、早々爲二御寫一被レ成候はゞ如何と申上候へば、中々用に立つ物にて無レ之旨被レ仰候、夫故私申上候は、一度上覽相濟候へば事濟申候間、被二仰上一候て御申おろし被レ成、御ひかへ被レ成、重て御上げも被レ遊可レ然候哉左候はゞ私にても不レ苦候はゞ可レ被二仰付一候、寫候て御用にも立候樣仕度ものと申上置候、多分は右の趣には成申間敷候間、近頃惜敷ものに奉レ存候、權七事彌有馬兵庫殿へ相濟、晦日より勤仕と承申候

一 八朔於二御城一加納遠江守殿、兵庫殿御見屆にて誓詞被レ成候、兵庫頭殿挨拶には、是は結構成思召寄にて珍重に存候旨御申候由、元來從二先生一御願の筋にて誓詞被二仰付一候、前書は存寄の通可二相調一

旨被二仰出一候由、向後御尋の品々不レ依二何事一、存寄眞直に申上、すこしも身がまへ不レ仕、心底に殘し申間敷趣一ヶ條、御仕置の筋にて御内談の儀いさゝか他言仕間敷候趣一ヶ條、此二ヶ條心付申分に御座候、此外は尤被二仰渡一次第の儀と奉レ存候旨被二仰上一候處、此二ヶ條にてよろしく候旨被二仰出一候旨、先は兼々兩人の衆へ被二仰達一候趣は、毎々御機密の儀も御人拂にて御尋被レ遊御請等申上候處、退出候後如何樣の御用に候哉と尋申者多御座候、誓詞仕候へば致二遠慮一、自然と尋申者無レ之筈に候、且又返答も仕能御座候、實は誓詞仕候有無により申儀にては無二御座一候へ共、我不レ知御用の筋洩申間敷ものとも不レ存候、以二神文一誓詞仕候へば、心中にても有レ之、以來如何樣に疎遠の地にて指出候ても、述懐の氣味無レ之爲にも宜敷候、私式輕き者殊に新參者、大切至極の御用共承候處、不二存寄一御用の筋、外樣へ洩候儀有レ之候ても、各樣御疑も無レ之筈に存候、斯樣の趣を以誓詞も被二仰付一被レ下候へば宜敷、御用も勤め能御座候旨、七夕以前兩人の者へ被二仰達置一候處、委細達二上聞一候處、夫には不レ及儀と一旦被二仰出一候御樣子に候處、追て御僉議も候哉、八朔に被二仰付一候由、斯樣の子細有レ之候に付、兵庫頭殿挨拶有レ之候哉と奉レ存候

一　當月中旬頃御勘定頭、並其場御役人御目通遠慮被二仰付一候、如何樣の子細に候哉、先頃得二御意一候節御尋申上候へば、是は勘定頭中より申上候ての儀に候、其子細は上總下總の内に、多く新開に可レ仕田地有レ之旨訴申候浪人貳人有レ之、彼目安箱へ書付入置候、依レ之右浪人に御代官池田喜八郎、並

萩原源八被差副、東寄(トウザキ)と申所へ被遣候處、百姓どもは田畠に難開處の旨、色々願申候へ共、誠精吟味仕候へば、成就田地五六萬石も可出來の所と申候、見聞の處罷歸言上有之候處、源八は直に御代官に被仰付候、浪人も壹人宛喜八郎、源八へ御附被成候旨、依之御勘定頭以下役人中、只今迄心附不申、浪人式却て斯樣の處にも心附、言上仕候儀不念の仕合に御座候間、遠慮も可仕哉と被申上候處、尤に思召候、御目通遠慮可仕候旨にて、毎日御用は被相勤候へ共、御目通は遠慮に御座候、御目附萩原源左衛門は、當春より大井河の川堰御用に付被仰付、久敷罷越御普請出來に付今般罷歸候て此一卷不存候へ共、内々心付不申儀は同事に付、是も御目通遠慮仕候處、御勘定頭以下不殘同月廿八日御免被遊候、源左衛門川除御用は夥敷御費、御代々無御座程の御普請に付、是も成就仕候へば田地新開過分の儀に候由、（山下幸内上書の内に記し置候、川除の儀に御座候よし）源左衛門は最初被仰付候時分、於御前段段被仰渡、遠慮の儀彼此相伺候ては、事調申間敷候、大概の儀を被仰渡候、是に準じ候事は、御入用の品々構不申候、如何樣に成共存寄次第可申付候、御用金等源左衛門斷次第少も無滯相渡候樣、御勘定所へ被仰渡候其心得可仕被仰渡候、源左衛門彼場へ罷越段々申付候處、被仰渡候とは格別に違ひ申す儀五ヶ所有之、御入用も莫大の儀に付、一往相伺取付可申哉と存候へ共、御直に被仰渡候趣有之候に相伺候ては、上意に不應筈に候、乍然何とぞ達上聞度存、右五ヶ所の儀委細書記、繪圖寫相添候樣申付候間、達上聞候旨申上候處委細御聞屆被遊候、但最初に斯樣の儀有之

候共不レ及二言上一可二相勤一旨被二仰渡一候、尤相伺申にては無レ之候へ共、氣遣仕樣子に被二思召一候、向後は斯樣の儀に不レ及候條、右紙面等御返被レ遊候旨にて不殘被二返下一候、當夏御切米儀に指支申候も、實は御入用にて勘定所より急に取立逆候故に候、其故源左衛門を度々叱申旨先生被レ仰候今般能歸候ても、首尾能於二御前一御聞屆、拜領物等有レ之候旨、扨東金新開地百姓共難澁仕候事は、此邊先年より三奉行附の與力中御知行被レ下候地方の內近く候故、年々隱田に仕置、百石二百石計の知行も、御人百姓共過分の免の高に成有レ之候、此度右の樣子露顯仕儀に付、色々申立及二難澁一候、最初訴申浪人は、此趣能々存知候者故、申出候體に御座候旨、三奉行附[illegible]力共此度相改、御切米にも可レ被レ成哉と申候、然ば御勘定頭遠慮は此下心かと奉レ存候、此一件は[illegible]物語の外にて御座候、奥村丈小寺大地兩兄へ御物語可レ被レ下候

八月三日夜　　青地藤太夫

藏人樣

十五日本多君話、先頃肥後守殿を以追付宰相樣御隱居被レ成、若狹守樣御家督にて御入部被レ成候樣御願可レ被レ成思召、御內意の趣御月番迄被二仰入一候樣子に候處、御隱居の儀は暫御見合可レ被レ成候、若狹守樣御入部の儀は、御勝手次第との趣潛に承候に付爲レ知申候、尤外へ咄は不レ仕候樣可二相心得一旨御申候に付、是は兼て推察とは格別の品に御座候、何方より御聞被レ成候哉と申入候へば、雁ノ間御詰衆の內、御月番と肥後守殿と御內談の樣子を潛に承申方有レ之、其人被レ申候由、此儀暫御ひかへ有レ之樣

にとの御內意は、定て御隱居前に中納言に御轉任可レ被レ成との趣にて可レ有レ之候、若州樣御入部被レ成、來年三月御參勤にて可レ有レ之旨被レ申候、六郷主馬も今日申聞候は、若州樣御入部御暇來月と承及候旨、申候間御申聞候、此咄の次手に宰相樣御事は、上樣御內々には御後見などと思召との儀は、近頃不二存懸一結構成事に候、終に私式不二承及一儀にて候旨申候處、此儀を只今まで不レ承候哉、先年不時に若州樣被レ爲レ召候て、御直に御鷹被レ進、爲二御養生一御下屋敷等にて、御鷹野も被レ成候樣との御意等有レ之、前廉に御老中へ御直談有レ之被レ仰候は、只今天下諸大名の內、加賀守年齡と申、筋目と申、隨一の家にてしかも終に越度無レ之儀に候、若狹守も指つゞき樣子も宜敷候へば、三家同事に御鷹等御直に被レ下候ても可レ宜候、加賀守は天下の爲御後見にも思召候旨上意に付、御老中も格別に被レ存候、此儀は其砌水野和泉守殿、潛に御申聞にて致二承知一候、且又御三家へも其前上意には、只今三家皆々若年に成被レ申候、我等事も紀の國にて庶流に候處、不二存寄一本家を繼申候、今天下の爲に正統御歸被レ成候事は格別の儀に候へば、此儀は哲外に被レ成、御三家の上にて被二思召一候へ共、又は諸大名の上にても加賀守程家柄と申、筋目正敷儀は無レ之候、左候へば各仕置等の手本に被レ成可レ宜候、御前にも御後見と被二思召一候旨、上意有レ之候旨承及申候、斯樣の事共引合存候へば、今年八十の御事にて御隱居御願被レ成候ても御留被レ成候は、有段々の思召と存候、左候へば尾張紀伊國御年若に候へ共、大納言に御移被レ成此方樣中納言に可レ被レ成儀と申者共御座候旨被二申聞一候、先頃申上候一大事と符合仕候樣にも存

㆑存候、何とぞ事實に仕度候、此話共は各別の趣に候間、大方實說にて可㆑有㆑之候、

一　今年雲雀御拜領は養仙院樣御三家、並此方御父子樣其外には小笠原峯雲老迄に被㆑下候由、峯雲老には如何樣の儀に候哉と相尋候へば、此人器量有㆑之、常憲院樣御代柳澤美濃守殿へ甲府御城被㆑下、其上美濃守打物の願の由にて薙刀御赦免可㆑被㆑成と有㆑之節、兩樣共不㆑可㆑然存候へ共、甲府の儀は御預城ゟ御座候はゞ何時御取上被㆑成候ても、白餘の例ゟ御座候間、左も可㆑有㆓御座㆒候哉、薙刀の儀は御家門の内にも諸大名の内にも、御赦免無㆑之人々有㆑之程重き義に候へば、御無用に被㆑成可㆑然旨被㆓申上㆒候處上意に不㆑應、美濃守願の通薙刀御赦免有㆑之、佐渡守殿峯雲老御前惡敷罷成候、其以後文昭院樣御代、初て間部越前守殿能役者より段々出頭威勢つき候儀、此人氣に入不㆑申眼氣惡敷候旨申上、或時連署の判を態と見苦敷すへ、最早斯樣御座候由申上、御老中御免に御座候、今以壯健眼氣も指て惡敷無㆑之旨、或時眼氣の樣子御尋有㆑之候處、御代に相成不思儀に眼氣宜敷罷成候旨被㆓申上㆒候、斯樣の儀にて隱居の内には、此人常々御懇に被㆑遊候旨

一　此頃の儀に候由、松平右京大夫殿御老中迄存寄御申入候は、近年大名の内行狀不㆑宜候方有㆑之、一月に三度の出仕さへ氣隨にまかせ、爾々登城無㆑之候、郡大名の内には三兩人も其類相見へ申候、斯樣の類其分に被㆓成置㆒候ては、以來此類多罷成不㆑可㆑然候、只今の内急度隱居被㆓仰付㆒候歟、又は年わかく無㆑子者は、相應の假養子を以家も立、御用辨候樣有㆑之可㆑然存候旨被㆓申入㆒候へば、何も尤

に被二思召一候旨沙汰仕候、右大名と申は有馬玄蕃頭殿の儀にて可レ有レ之候か、都大名と申候は先指つけて備後守樣の儀と相聞申候、今度御參府の日も御並にはづれ、御月番一ヶ所迄御勤被レ成、其外へは御使者を以被二仰達一候、勿論道中より御氣色御滯おして御參府の旨被二仰入一候へども、當々の御樣子露顯の儀に付、此儀も其内の一事と申候由、御本家へ御無禮の儀も粗及二沙汰一申候由、此方樣へ前月廿七日御着の砌、暫の内御出被レ成御目見被レ成以後、御參府御禮被二仰上一候日など、御父子樣共御待被レ成候旨に候へ共御出不レ被レ成候、當十五日、當日御拜領雲雀御披、御一門樣方不レ殘御出に、もはや御登城御斷に付、晝の御饗應にも御出不レ被レ成候、しかも其夜は山崎權之亟小屋へ御成にて、寶生將監は直に參上仕候などとの事に御座候、今度長門守樣御見廻被レ成候へ共、終に御對面も不レ被レ成候由、野口兵部出頭彌增、道中御旅宿玄關迄駕籠御免、殊に横付に被二仰付一候、去年以前の儀はかぞへがたく候に付、その分に仕候へ共今度御參府以後二十日計の內、はや如レ此の御樣子に御座候、此間山崎權之亟儀何の御用に候哉、帶刀殿へ見廻に罷越、直談の上備後守樣御樣子申出し難儀かゝり候旨、依レ之帶刀殿內々存寄の儀有レ之候付、一料簡申聞候へば忝儀に存候、今暫御待被レ成、彌登城等被レ致二懈怠一、本家へも無禮止不レ申候はば、御相談可レ申旨罷歸候旨帶刀殿御申聞に候、右御料簡は如何樣の儀に候哉と御尋申入候へば、近年水野和泉守殿、備後守樣御噂每度被レ申候、その口振少し宰相樣へも申上候樣にとのおもはくと聞へ候へ共、謎の樣成事故終に不二申上一候、然處今般右京大夫殿存寄御老中も尤との儀に候へば如何樣にも

上様より御沙汰可レ有レ之も難レ計候、然ば何とぞ宰相様急度御異見被二仰遣一、先三度の御登城さへ被レ成候へば、公儀表は差て御頓着も有レ之間敷儀に候故、其趣の御異見一通の御使に御座候、私へ被二仰付一、次第罷越可レ申候、權之丞も內々を以私迄相願候趣に、宰相様へ可二申上一料簡に候の旨御申聞に候、是は乍レ恐感入候御心附共御賴母敷存候旨挨拶仕候、手前存寄は不肖乍ら、前田帶刀は病身にて爾々相勤得不レ被レ申候、横山數馬は扣へがちの思案にて、斯様の御使難レ仕可レ有レ之候、左候へば私相應の儀の上、和泉守殿御噂被レ申候儀數度の事にて覺罷在候、且又故彌兵衛殿存生の內、大藏大輔様御不行狀多有レ之內、常憲院様御代生類御憐最中に、於二御下屋敷一無レ構殺生被レ成、犬をも御殺被レ成候儀、且又御參勤往來に女中を御召連れ被レ成候、此二ケ條を相公様御自筆に御調被レ遊、彌兵衛殿御使にて急度被二仰遣一候、大藏様殊外御行當被レ成急度御止可レ被レ成候、忝き儀に思召候とて御禮被二仰上一候、當座は左様に有レ之候得共、存外又追て其通の御振廻有レ之候處、重て又彌兵衛殿御使にて被二仰遣一、御本家の儀故萬一自二公儀一御尋も有レ之候はゞ、如何可レ被レ遊候哉、相公様より外斯様の儀可レ被レ仰御方御心付無二御座一候に付、再往被二仰遣一候旨に御座候、大藏大輔様殊外御迷惑がりに御座候、彌兵衛此御使相勤被レ申儀殊忝がり候て遺言に被レ仕候、斯様の儀も御座候故、たとひ相公様思召に不レ叶候共、今一往和泉守殿御噂被レ申候か、又は權之丞存切賴に參次第可二申上一と存寄候、大藏大輔様へさへ兩度御異見被成候宰相様に候處、只今迄備後守様へ其御沙汰無レ之儀近頃不審千萬成る事の旨御申聞に候、誠に以

不二存寄一事共、初て承申趣にも御座候故旁委細申上候、尤以御沙汰被レ下間敷候、去春御在府の内、長門守様御舍弟様御假養子に御願被レ成、御書付御月番直渡しの儀通例に御座候、和泉守殿御用番の内に候處、朝御宅へ御越の儀は難レ被レ成候間、晩景御越被レ成度旨被二仰達一候處、和泉守殿より被二仰越一候は、登城前各得二御意一候儀は、御前代已來舊例にて、私の仕儀にては無二御座一候、未明より段々被二罷出一候御自分に限、晩景得二御意一候ては同役中存寄も可レ有レ之候、其儀は難レ被レ成候間朝御出有レ之樣に可レ被レ成候旨申參候、然處朝はいつも持病心にて難二罷出一候旨被二仰遣一、何とも埒明不レ申候、外の御用番の時に可レ被レ成哉との儀に候處、最早御發駕の砌に候、何とも無興に成申候、井上河内守殿御内縁有レ之候付、河内守殿より和泉守殿へ御挨拶有レ之外例に成申間敷候間、晩景御達有レ之候樣にとの儀に罷成、終に晩景御越候、其御越被レ成候樣も暮六ッ時に御越被レ成、彌和泉守殿不機嫌にて其時分も御噂有レ之候由、此外去年去々年の御行狀、筆を捨申事共不レ能二一二一候

一　仙臺只今の家老の內、本多伊賀と申者八千石取申候、佐州樣より御筋目有レ之に付、周防守殿、外記殿、帶刀殿へ筋目有レ之旨にて、切々付屆仕、周防守殿へも書通仕候由、乍レ然いづれもの筋と申儀外記殿にも御覺無二御座一候旨私も覺不レ申候、其許にて加藤次殿へも御尋被レ成被二思召出一候はゞ可レ被二仰下一候、伊賀方へ系圖寫差越候樣被二仰遣一候樣に申入置候

一　佐州樣奥方樣は戸田家と申儀、本多豐前殿にて相知申旨御申聞、豐前殿は伯耆守殿孫にて御座候、

彌委敷御聞出被レ成御書記被レ下候樣申入置候

八月二十六夜　　禮幹　再拜

一　勢州白子の人外海（トンカイ）玄伯は紀州領の者なり、依て當上樣御平生の儀能存知、御幼稚の時對山樣御子樣方御三人を召、御簞笥一ッ御出し、是は鍔にて候、各へ可レ被レ下候間御撰取可レ被レ成旨被レ仰候、則中納言樣御ひらき被レ成、御撰にて三ッ御取被レ成候、其次に内藏頭殿御同然御取被レ成候、主稅頭樣は暫御思案被レ成、是は不レ殘拜領仕度旨被ニ仰上一候、對山樣御悅被レ成例の大氣者不レ殘被レ下候旨御意にて候、扨御拜領被レ成候て、御附の御家來衆へ皆被レ下二三枚殘候を御用被レ成候

一　有章院樣薨御の日、俄に御城より召に參御出被レ成候へば、直に御繼統被レ成候付、再び紀藩へ御歸不レ被レ成候、然處終に御居間邊、御手道具の類一ッも御取寄不レ被レ成候、御近習の面々もいづれに參候へとの儀も無レ之、只其日當番の輩迄内外共被レ爲レ召候、此被レ爲レ召候衆心附にて、御召料の御鎧並御刀脇指の御指替、斯樣の御身に副申物一色づつ持參仕置、扨常々大屋武右衛門と申人御氣に入御召使候、其日當番にて無レ之候故不レ被レ爲レ召候、此人は格別に候間多分御呼可レ被レ成事と諸人申候處、終に御呼不レ被レ成候、今足輕頭相勤罷在候、斯樣の儀にて存候へば聖人の樣に奉レ存候、只今御吝嗇の樣に申儀は、一圓無レ之儀に存候旨申候

一　紀州にて或時川狩に御出被レ成候例にて、御川狩の前魚の集候樣仕置候事に候、然處其日の御狩に

魚壹ツも無レ之、何の御慰も無レ之候、前廉魚を集置候もの共覺へ有レ之儀故、近頃合點の不レ參事とてひた物致二吟味一候處、川岸に殊外泥のあかり申處有レ之、依レ之致二僉議一候へば、前夜の内捕候者相知申候、沙汰の限成事故爲レ致二牢舍一候、其段御聞被レ遊、此者の罪禁牢は過申候、元來有まじき馬鹿にて候、何者か我等が慰に仕候時節に臨て、魚を捕へあらはれずといふ事を不レ辨者のあるべき、其考もなく斯樣の事仕候は至て馬鹿と可レ申候、然ども其分にては恐る事を不レ知ものにて、國中へ難二差置一ものに候國境迄逐遣し追拂可レ申旨被二仰付一候、御弱年より常に大明律御數寄被レ成朝暮御覽被レ成候

同月日　　　　禮幹

御手紙拜見、彌御堅固被レ成二御勤一候由珍重奉レ存候、然ば一昨廿二日雨天故登城候處、八ッ時過如レ例御座の間へ被レ爲レ召、中華の儀などいろ〳〵御尋の儀有レ之、段々御請申上候、其後貞觀政要講釋を御聞可レ被レ成旨上意にて、御見臺に御書物相添御近習衆持參、御座の間の外しきゐの際に見臺指置候へば、御座被レ成候間の内へ見臺入れ可レ申旨上意にて御座候、私儀も御式居の内へ入候樣上意有レ之、一ッ御間へ入候て御膝下にて講じ申候、講過候て其儘候へば、又上意有レ之暫く罷在候て其後此以後段々御聞可レ被レ成との上意にて退出いたし申候、御側衆も御次にて被二聞申一候その外御近習衆も相見申候、退出の時分有馬殿、加納殿送り被レ申候が、わけよく立候て永事に候由挨拶にて候、首尾よくしまひ候て大慶此事に奉レ存候、段々御懇の上意共難レ有仕合奉レ存候、經書の儀は何とも不二申上一候、先此後も政

要御聞被ㇾ成候御樣子に御座候、其内序にても候はゞ、可二申上一奉ㇾ存候、以上

九月廿四日　　新　助

藤太夫樣

深美勘兵衛事、是は深美新右衛門姪孫にて浪人なり、去年以來息久太夫就二御用一長崎へ被ㇾ遣候處、勘兵衛も指添罷越、久太夫手助にも成申體に候、然る處當夏新右衛門病氣指重り看病人無之候、久太夫は不二罷越一候處、結句勘兵衛爲二看病一罷越候、然處新右衛門病氣不ㇾ宜、八月歸泉被ㇾ仕候、勘兵衛今月中旬先生へ御暇乞に罷越、今般態々數百里罷越候處、看病の詮もなく罷歸、久太夫へ對し候ても無二面目一候、扨は近頃申上兼候へ共、一篇の御送行の文を奉ㇾ得候て罷歸、責ての眉目に仕度旨急度願申候、乍然只今は日夜御暇無ㇾ之、何とぞ其求には難ㇾ被ㇾ應候、詩にても不ㇾ苦候はゞ、其内逗留中調置可ㇾ申旨被二仰聞一候處、詩は望に無ㇾ之候旨申罷歸候、然處廿四日に罷越、明後廿六日致二首途一候旨案内に罷越候、其日は高倉書院易經講釋、八ッ時前御仕廻御歸り候處に不時に被ㇾ爲ㇾ召、貞觀政要御侍講の儀申來、推返し御登城被ㇾ成候、暮前御退出被ㇾ成候、此日は朝より寒氣甚敷、江戸中灰降晝より北風强吹申候、講釋聲高に講じ候樣に上意にて、前々より長々と被ㇾ講候、扨夜中は萩原源左衛門殿へ兼約にて御越被ㇾ成候、右の通に付勘兵衛所望には御叶難ㇾ被ㇾ成候、然處廿五日に罷越、彌明日發足仕候、御作文は如何被ㇾ成被ㇾ下候哉と責申候、右之段に付一圓御心當無ㇾ之候、但浪人の儀に候へば一二日逗留有ㇾ之候ても

苦間敷候、明日の發出相止候はゞ、何とぞ一篇御結構可レ被レ成候哉の旨被二仰聞一候へば、一兩日逗留仕候ても不レ苦候間、御一言を奉レ得度旨申候、依レ之廿五日暮頃より御とりかゝり、夜明迄一睡も不レ被レ成御かゝり被レ成候へば、一篇御出來被レ成候、御覽被レ成勘兵衞方へ可レ被レ遣と思召候處へ、私御見廻申上候付則爲二御見一被レ成候、近頃御絕作と相見申候、御淸書被レ成候へば疊紙有レ之候、幸一律詩御作御添被レ成候、御老衰被レ成廿四日など途中御氣息短促、長く世間の物にても無レ之などと御狀にも被二仰下一候へ共、箇樣の儀御精力御强健壯年の人も不レ可レ堪二困倦一候、私參扣仕候は、四ッ時に御座候、一圓御草臥の體も無レ之候、大慶仕候

一　當主御容貌御詞氣等、牧野左平治殿に能く似申候、御音聲別して被レ爲レ似候旨先頃も被二仰聞一又此度も御申出し其儘に相聞申候、政要侍講も廿四日迄にはや三度御聞被レ遊候、侍講の外每々御前へ被レ爲レ召、御問答の儀御座候端々奉二承知一候へ共不レ能二一二一候

一　今月初四谷野へ御鷹狩の節、御先より只今鶴すはり可レ申體に御座候間、暫御扣被レ遊候樣申來候付、四谷村の內民家へ御入御待合被レ成候、其節其家の座敷に机案三四脚有レ之候、其上に折本にいたし候手本の樣成物有レ之候、御近習の衆へ被二仰付一御取寄御覽被レ成候へば、御代々の御條目を手本に仕たる物に御座候、家主に御尋被レ成候へば、百姓ながら醫者を仕手跡相調候間、村中の子供罷越手習仕候、其手本にも仕又は讀物にも敎申候、今川庭訓よりも此方ましに可レ有二御座一と奉レ存候旨申上候、還

御の翌日御勘定頭御付等不レ殘被レ爲レ召、昨日四谷にて箇樣の儀有レ之候、是は外の村々へも箇樣に仕候樣に奉行所より申渡置候哉、如何の樣子に候哉と御尋被レ遊候、曾て申渡候筋にては無二御座一候旨御請被二申上一候處、右之者奇特成事に思召候間、御褒美を可レ被レ下候旨被二仰出一候、何方にても暫の內御立留り被レ遊候ものへは、白銀壹枚宛被レ下候御格に候、此者へは外に被レ下物可レ有レ之旨御座候、扨御奉行中へ右之趣被二仰出一候、外の村々へも奉行中より申渡、ケ樣に有レ之度ものとの思召に御座候也

一　當主御事御近習の衆中御噂被レ申候は、終に御怒被レ成人を御叱被レ遊候と申儀見聞仕候者無二御座一候、御腹の立と申事無二御座一御生質に候哉、替りたる事とて不レ審被レ申候旨、御度量の廣大故にても可レ有二御座一候、何とぞ御德化の被レ及萬民悅服仕候樣奉レ希候、以上

十一月三日　　青地藤太夫

藏人樣

先月初頃上樣御鷹野先にて百姓の家へ御入被レ遊、其家の座敷に卷物の手本有レ之御覽被レ遊候へば、御代々の御法度書を集め候物にて御座候、此儀先達て有增申上候樣に覺申候、其砌四ッ谷邊と申上候樣覺申候、今日新助殿へ懸二御目一候處、右百姓へ四五日以前御褒美被レ下候樣子御咄被レ成候間、則左に申上候、右御鷹野先は、四ッ谷には無二御座一候、葛西邊島根村と申處へ被レ成二御座一候處、先より鶴居懸り候間、しばらく御待被レ遊候樣申來候、依レ之百姓の家へ御入被レ遊御覽候處、座敷に机多相見其上に

巻物相見申候百姓の家ながら様子宜候に付家主御尋被レ成候處、百姓ながら醫者を仕、吉田順庵と申者の由申上候、右巻物御覽被レ成候處、御代々の御法度書集申候間、如何様の様子に候哉御尋候處、順庵申候は、近所の子供罷越手習仕候に付、今川など教可レ申よりは御條目を教申候へば、手習にも又は讀習申にも可レ宜儀に奉レ存候、子供に教へ申候、今日は御成に付、子供參不レ申旨申上候、翌日御勘定頭不レ殘被レ爲レ召、昨日島根村にて斯様の儀御座候、御法度書讀習候様、奉行中より申渡置候儀に候哉の旨御尋の處、申渡候筋にては無二御座一候、右順庵様子も上意にて始て承候旨御請に御座候處、左候へば彌奇特成儀に思召候、何とぞ外の村々へも斯様に有レ之度儀に候、總て御法度筋其當座は覺候ても、程經候へば忘却仕候旨被二仰出一候、扨四五日以前右村々御代官伊奈半左衛門被レ爲レ召、右順庵奇特成仕様に候爲二御褒美一、白銀拾枚被レ下候、且又六諭衍義大意一帙拜領被二仰付一候、右の帙事外結構に相見申し候御認に御座候、就レ夫半左衛門殿帙の結構成儀を被二申上一候處、是は思召有レ之、結構に出來被二仰付一候、順庵拜領仕候はゞ定て所の者うち寄拜見可レ仕候、子孫へも相傳可レ申物と思召候、左様の儀蒡態と結構に被二仰付一候旨被仰渡一候、此村に不レ限、六諭衍義子供の手習にも持はやし候様、心懸可レ申旨被二仰渡一候由に御座候

一　此間日安箱の内に、伊奈半左衛門支配所の内、村の名は角田川小梅村庄藏と申百姓御尋に付、存寄の儀書物三册に仕立、紙面一通指添入置申候、御覽被レ遊御意に應候様子にて、翌日御勘定頭不レ殘

被レ爲レ召被ニ仰渡一候は、追付御前へ可レ被レ爲レ召候、差て可レ被ニ仰渡一御用は無ニ御座一、久不レ被レ成ニ御逢一候間、御前へ可ニ罷出一旨被ニ仰出一出座の處、右庄藏存寄申上候趣など有增上意にて、總て御役人中の手前勤方等の儀、去年以來目安箱の內へ書入置候事共品々有レ之候、善惡共末々の者申儀、其儘證據に被レ遊候儀にては少も無レ之候、其御樣子は去年以來何も存知の事候、然ば勤仕の筋に少も泥なく相勤候て宜く候、御用捨は上の御覺悟に御座候事に候、目安箱の內に有レ之候書付、夫々被レ爲ニ御見一被レ遊候ても可レ有レ之候、扨は段々儉約の儀被ニ仰渡一候、總て儉約の儀は事急に仕候ては下々難儀仕儀に思召候、事のゆるやかに相調候て、御儉約に罷成候樣可ニ相心得一候旨被ニ仰渡一候、何も退出に御座候、且又伊奈半左衛門被レ爲レ召、支配の內某村庄藏と申百姓存知の儀申上候、奇特に思召候、添紙面有レ之に付御覽被レ成候へば、三日は江戶に致ニ逗留一御左右を奉レ待候、三日過候はゞ在所へ可ニ罷歸一旨相調候、早速留置奇特思召候、可ニ申聞一候、段々御尋の儀も可レ有レ之候、必以て荒く申渡間敷候、右書物の外にも口上にて申上度儀候はば申上候樣、やはらかに可ニ申聞一旨被ニ仰渡一候由、右三卷の書物如何樣の趣に候哉相知不レ申候へ共、山下廣內諫言とは違ひ、成程實體成紙面忠孝等の事より、段々存寄書記候、元來神道の學を仕者のよしに御座候、以上

十一月廿五日　　靑地藤太夫

藏人樣

私侍講手レ今不レ絶被二仰付一候、先月晦日にも相勤申候、御前へ罷出候へば、講前常々御咄など被レ遊、私式には無類の御懇意難レ有仕合奉レ存候、老生無二材德一候へば中々可レ奉二感動一樣も無レ之、殘念に奉レ存候、去ども貞觀政要逐段御聞被レ遊候間、少々の御裨益には可二相成一かと奉レ存候、餘命無レ幾候へば幼少より學置候驗に、些少成共世の益に罷成相果候はゞ、如レ命本望の儀とも可レ申候、當年御同氏藤太夫殿御在江戶故、當地珍敷事は藤太夫殿迄御物語申上候間、相達可二申上一と奉レ存候、此間も少々好事有レ之、則藤太夫殿迄御咄申候て可二申參一と奉レ存候、言路もよほどひらき申候、其故下情通じ珍重成事に奉レ存候、只御先代以來府庫虛耗、年々の御使用も大分の事に候、何とぞ近年の內に御儲蓄も出來候樣に被レ遊度被二思召一候御樣子と聞へ申候、三年の儲なきは國非二其國一と申候へば、是も御尤と奉レ存候、其故水野和泉守殿を簡略奉行被二仰付一候、是によつて萬端吟味彌泉州少も無二用捨一候故、諸役人も難儀の體に先日比は相聞へ申候、其砌侍講の節何とぞ其筋の事も出て候はゞ講述可レ仕と存候處に、唐太宗良弓を弓工に爲レ見被レ申候へば弓工のいはく、此弓はいづれも木心不レ正候故、木の脈理皆邪に良弓に非る由申上候、太宗のいはく、弓矢を以天下を取り平生弓矢の事には習ひ候、其さへ相違有レ之候、まして朕天下を治る事日淺し、いよいよ存違可レ有レ之候間、群臣何も心底を無二遠慮一申上候樣に被レ仰候、胡致堂の論に、此弓工が申候は、太宗を諷諫致し候、木心不正と申は、君心不正のたとへにて候、其を太宗御合點不レ被レ成候由被二申置一候、是に依て私講じ候は、致堂の論尤にて候、但し不

正と申候は必しも惡を申にては無レ之候、たとひ其事惡にて無レ之候ても、君心の少にても偏に候はゞ不正と申物にて候君の心少にても偏に參候はゞ、群臣其旨を受候て下へいよ〳〵つよく申付候故、下の難儀にも罷成候事毎々有レ之候、たとへば簡略を被レ遊候事は御尤成事に候へ共、思召其方へ少にても偏に參候へば、其方の御用承候者共思召に叶候樣にいたし候故、御爲に畢竟あしき事をもかへりみ不レ申、人の難儀も用捨不レ仕候間、たゞ己一分の功を立たがり申候、當分は思召の通はか取候て、御意に應じ可レ申候へども、畢竟御爲あしき事にて候、あらまし如レ此に候、委細は簡略の事あまり急に仕まじく候、只其心得仕候て、漸々に致可レ申候、急に致候はゞ人々難儀に及び申事も可レ有レ之候、其處をよく簡辨致し候樣にと御直に被二仰渡一候、是程の益には罷成候間左樣に御心得可レ被レ下候、是程の儀も只今空谷の足音と可レ被二思召一候、及レ暮わけ見へ申間敷候、奥源左衞門殿などへもそと被レ仰可レ被レ下候、たゞ〳〵御仕置へ懸り候事は誓詞に候故、すきと他言不レ仕候、是は私講釋の趣にて候へば、格別の事に候故申進候、それともに御沙汰は御無用被レ成可レ被レ下候、且又最初講釋の節申上候は、人主常に講御聞被レ成候へば、御養生藥を被二召上一候樣成物に御座候、御病氣出候て申上候は、諫臣の仕事にて候、其故諫議大夫など御病氣を見てその的當の藥を指上申道理にても、常に侍講の官を被二指置一候は、養生藥をあがり候道理にて候、差當りの益は無レ之樣に候へ共、畢竟は御無病の本に罷成候由直に申上候、其故か其後不レ絕侍講被二仰付一候、是も序ながら申進候、以上

十一月四日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　室　新助

青地藏人様

當三日御書中に、大聚斂の臣は泉州にては無レ之候哉、御預地の儀に付候ても、其氣味有之體に御聞及被レ遊候旨承知仕、美事を申候様に無レ之儀に付延引仕候、只今左申に申上候、或時潜に御尋申上候は、當主御在位以來の儀ともは姑議論を止置、當春以來の御施行迄にても兎角非常の英主には相極申候、その上聖賢の道を御信用と相見へ、先生へも御知遇の體彌以御賴敷儀に御座候、然るに俗人の儀ながら、世上の毀譽相半仕候、甚敷は落首秀句にいたし醜惡を極申候、然ながら右の徒多は販商又は御旗本の内放逸の輩惡口仕候事の旨申候、少おとなしき者どもは中々左様には無レ之候、憲廟文廟兩代の極弊を御受被レ遊候へば、當主の被レ遊方にて無レ之、並々の事にては何の效も有レ之間敷と申候、頽御當家御再興の様奉レ存候、先生には如何思召被レ成二御座一候哉と申候處、世上の毀譽御取上候事にて無レ之候、子産が鄭國を治候さへ、三年の内は童謡にも誰か子産を殺さんと申程に候へ共、後には父母の様に申候、畢竟積弊を改候時は、善事にても一旦俗の耳目を驚し候故、誹謗起るものと相見申候、但當時の様子施を御好の方は稀にて、御吝嗇の方御見被レ成候故、迎合仕候者のみ聞候て、色々聚斂の道を開申候、第一御倹約方主付被レ申候、水野和泉守殿老中の權を執て、聚斂を事と被レ致候故、御勘定頭など其方へ參申候、有馬兵庫守殿なども指て學識も無之候へば、指當り泉州の被レ申候方へ傾被レ申候、昨夜も

萩原源左衛門へ參物語の樣子、此等の事に及び申候、御勘定方の内にては、源左一人聚斂は國家の爲によろしからずと存寄罷在人に候、此比も町中へ色々見苦敷事を巧出し申懸、あなたより運上差上候樣致成候に付、源左急度不レ可レ然趣を泉州へ被二申述一候、泉州不遜の言葉出申位に御座候由、源左申候は十年前迄に候はゝ、中々是程の儀申得候拙者に無レ之候所、慥に不レ可レ然事と存其趣を申述候は、皆先生御教誨の效と存候旨被二仰聞一候旨被レ申候、私申上候は御恥辱も不レ被レ顧候とて、天下の金銀を御借被レ遊候て、又此の度は切米衆へ百俵に四兩づゝ來年迄御借被レ成候事などは、別て天下への聞へも如何、又實に難儀に及び申徒多可レ有レ之儀に御座候、是は如何樣の儀に御座候哉と申上候へば、先生も苦笑被レ成、是故種々惡口も止不レ申候、不レ慥事に候へども承及候一事有レ之候、神祖の御時天下富有、其上佐渡國を始天下の寶山一時に開け、夥敷金銀御貯出來候に付、黄金六百枚に滿候へは、ふんどん一枚宛に被レ爲レ鑄、林道春に被レ命一枚／＼銘を雕付、御子孫に至り國家の御大事に成可レ申時、不レ得レ已候はゞ、御取出可レ被レ成候、御當用には必御無用と申意を記申候、此ふんどん三拾六枚出來仕候、然處憲廟の時、一枚も不レ殘御常用に御取遣被レ成候、それにても不足にて種々巧出候、砂除金等の事迄も起申候、此度此ふんどんも御先祖の御舊式に被レ遊可レ然被二申出一候、はや六枚とやらん出來候樣に申候、神祖の御代さへ餘不レ入儀に候、況此時代無益のふんどん夏石の樣に罷成有レ之事、甚不レ可レ然事に候、實正に候、其段は未御存知無レ之旨被レ仰候、扨被レ仰候は只今の樣に海の物とも山のものとも

難レ決候、天命の所在と被レ存候、但善き方は多き樣に存候、後醍醐天皇の御時、御政務人望に叶不レ申、楠正成種々諫言も奉り、謀略も運し候へ共、其効無レ之候に付、誰やらん天下は如何と相尋候へば、身不肖に候へ共某いまだ世に罷在候と御聞候はゞ御運は可レ全と可レ被レ存候と云申由に候、然に終に湊川にて戰死仕候楠は名將の事故、一言を以其信を取其効も有レ之候、私楠の眞似を申にては無レ之候へ共、似合に知己の主を奉レ得候上は、斯樣に仕罷在候内は先心安可レ存候、何とぞ縱も候はゞそれまてと可レ存候旨にて御笑被レ成候

右御談話、十月末つかた承知仕たる事に御座候、急々如律令

十二月十二日　　　　禮幹記

荻原氏泉州兵庫南人へ御切米の内又御借用の儀にと申分は追て可ニ申上一候、

當七日頃より施藥院と申事起申候、小石川御殿地の跡に御小屋かゝり（御小屋出來仕有レ之旨）其内へ江戸中町人以下病者願次第、右御小屋の内にて療治爲レ仕候、本服仕候迄は御扶持被レ下候筈、看病人の有無には不レ依候、看病仕候ては今日難レ續候はゞ、看病人は罷越御扶持も被レ下候筈とやらん、但病人迄とやらん、左樣の儀はいまだ慥に無ニ御座一候、御醫師の内林良適（是は良喜紀州出）岡丈庵（是は近年迄御守殿付文庵子）兩人付申候、御小屋へ附申役人多出來仕候由、いまだ廻狀には不ニ申來一候、是も永木新左衛門咄申候、先生には橘隆庵も承合候へば、施藥院と唱申候、專不告の者御救の趣に御座候旨承知仕候、以上

十二月十二日　　禮幹

昨廿六日殿中には布衣以上の御役人不レ殘、御譜代大名衆三汁七菜、大御饗應にて殊の外御祝有レ之、紅葉山神祖御靈前へは、戶田山城守殿を以御献上物品々御座候由、御三家へは安藤對馬守殿を以、三種二荷被レ進御三家よりは二種一荷御献上物の旨、如何樣の品に候哉と奉レ存候處、神祖御生日に御座候、壬寅は御同甲子に付、六十年に一度づゝの儀に付、分て此御祝に御座候、是等も乍レ恐御尤成思召寄の旨、同先生被ニ仰下一候

一　先日申上候、御拂方六十萬兩出申との趣は相違に御座候、慥成町人會所へ參喘候由、伊織殿被ニ仰聞一候、拾六萬兩の旨に候、十四年以前より相滯申分、但役人中より町人相對を以三分一減少にて可ニ受取一候哉、左候はゞ只今願者へ可レ被レ下候、若又三分一減少を不レ願者共へは幾年にても年賦に可レ被レ下旨の處、皆々三分一減じ納得仕相渡り申候、千兩の處は七百兩と申圖の旨御座候、歡聲滿レ巷候旨口々に申候、兎角下愚の族は恩惠を可レ先事御座候

一　今暮前備後守樣俄に御出、私有合御先達等も罷出候、御惣髮蓬々とし、鬢髮如レ雲と申樣に見事に被レ成ニ御座一候、相公樣より御杉重一組、鳧一籠、嗣君へ御杉重一組、御交肴一籠御持參にて、御献上被レ成候、相公樣には御踈入の旨にて御逢不レ被レ遊候、若狹守樣は御居間へ被レ爲レ召、御對面被レ成、追付被レ成ニ御歸一候、斯樣の御志らしき儀は此度初ての儀と皆々申候、是は本多帶刀殿被レ致候事かと

存寄候儀御座候故委細申上候、先達て申上候通り、諸大名御鷹の雁凫段々御拜領の處、備後守樣へも被レ下候筈と御沙汰御座候處、御拜領不レ被レ成候、是は登城數度懈怠し衆中へは可レ爲二御無用一との趣にて相止申候、彌其通と相見萬石位の衆へ迄不レ殘御鷹の雁拜領相濟申候、然處當月十九日俄に上使を以雁二ッ御拜領被レ成候、其日帶刀殿は德昌院殿月忌に付寺詣の處、途中へ早馬にて申參り寺詣も相止參扣有レ之、首尾能相濟申候、其日帶刀殿存寄を御側へ寄有增申述、世上の取沙汰不興千萬に御座候、御惣樣御願の以後も只今迄の通被レ成二御座一候はゞ、上の思召も惡敷可レ有二御座一候、第二には御本家へも御無禮言語同斷の御樣子、御八拾歲に被レ爲レ成候御親樣へ斯樣の御仕形、兎角可二申上一樣も無二御座一候、少御心付御改被レ爲レ成候樣仕度の旨被二申上一候へば、存の外御請樣宜敷、左樣の沙汰とは不レ存候、向後切々御出にて御申聞候樣被レ成度との趣にて、如何可レ有レ之哉と二十二日與潛に被二仰聞一候、今日不二存寄一被レ成方、先々一段かと奉レ存候、帶刀殿心入共近頃感入申事共御座候、以上

十二月廿七日　　　　　禮　　幹

先生無二御別條一昨今共御書通に及び申候、内々一件舍人殿へ尋見申候へば、曾以御沙汰無二御座一旨御座候、木下氏へは昨日も染絹五端、鹽鮭二尺被レ遣候、此衆四月以來見分仕候とも、三度か被レ遣物御座候、先生へは貴て一度の御沙汰も無二御座一候、定て有二子細一事共にて可レ有二御座一候

十二月廿八日　　　　　同

先生へ昨日以二紙面一申上候御返答候、廿七日被レ召御出候處、御內々にて御時服弐ッ拜領被二仰付一、則御前へ罷出御禮可二申上一候旨被二仰出一候に付御出候處、直に講釋御聞可レ被レ遊旨、上意にて、貞觀政要初冊一昨日より不レ殘講畢候、難レ有仕合奉レ存候、御首尾無二殘所一候間、氣遣仕間敷旨被二仰出一候、右の趣紙面に認奉レ達二御聽一可レ然趣に候はゞ、被レ達二御聽一可レ被レ下候旨、調舍人殿へ達候へば、成程可レ宜との挨拶にて被二差上一候、今以何の被二仰出一も無二御座一候、內々の一卷も御座候て終に今年一度の付屆も無二御座一、如何の儀と奉レ存候、先生御勝手春の事はしらず、先只今は跡先に成、藏宿にて取替御門へ遣被レ成候間、少も氣づかい不レ仕候樣に被二仰下一候、石黑氏も存外神妙に被レ懸レ心候間、春に至石黑氏申談、追て御相談可二申上一候、以上

除日　　青地藤太夫

享保八年

舊臘廿六日、東照宮御誕辰御祝有レ之儀は、先達て申上候通に御座候、此儀に付廿七日御侍講の御被二仰渡一候は、林大學頭父子、右御慶事に付、祝辭致二献上一候、新助も指上候樣にと被二思召一候旨被二仰出一候、依レ之廿七日より除日迄、御寢食も被レ廢御出來にて、兵庫頭殿を以御上被レ成候、誠御特命の儀別て珍重奉レ存候、御草稿は暫間有レ之爲二御見一可レ被レ成候、未レ經二照覽一の上、何の被二仰出一も無二御座一候に付、御見合被レ成候旨御座候、拜見仕次第寫入二御覽一、其後其元樣へも尤指上可レ申候、以上

正月四日

寺地藤太夫

此書狀相調置候處、今書佐竹右京大夫殿御出に付、俄に八ッ時御使に參候處、幸之儀先廣徳寺へ參詣仕扨擧河臺へ參上仕被レ得二其意一候、隨分御堅固御超歲被レ成候、去廿七日御侍講之節之儀委曲御物語も承知仕候、東照宮御誕辰御祝之儀も、前廉色々御内談有レ之たる御事御座候、御生日を御歿後に御祝被レ成儀候ても義理に叶可レ申歟、凡第一中華に例有レ之歟との上意にて、先生も御覺無レ之事、中古以上に可レ有レ之禮義にても尤無レ之候、但誠を以被レ起候ても、不レ苦筋にて可レ有レ之哉と被二仰上一候所、何とぞ中國の天子に有レ之例御聞被レ成度とて、色々御考被レ成候へば、永樂大典之内とやらんに、明太祖之御生日を代々に祭祀被レ成候事、御見當り被レ成候、生忌共祭り申儀御座候旨、群臣の賀表も相見へ申候、是に御もとづき被レ遊候て御極被レ成候、同支干故分て此度御大饗御催之儀は、思召より出申事と相見へ申候、此事は大典に相見不レ申候由、扨御祝辭の稿本拜見仕候、規祝之體を被レ兼候て、兎角可レ申樣も無レ之結構に御座候、一兩日には爲二御寫一可レ被レ成と思召候旨被二仰聞一候、九日出に何とぞ進覽仕度奉レ存候、此趣御學友衆其外山本氏へも爲二御知一可レ被レ下候、忠三郎殿一段〱御成熟、何卒春中御目見御願被レ成候樣、强て申上候、左樣にも可レ被レ成旨被レ仰候外、其元より可レ被二仰遣一候

一　先日申上候、帶刀殿、備後守樣へ寸志被二申上一候て、後廿七日暮比此許へ被レ成二御座一、御兩公樣へ の御樣子は、先達て申上候通御座候、廿八日にも御登城被レ遊、歲暮は此許へも御出、元朝も御登城直

に御出、叓元にて御祝被レ成候、終に無レ之儀に付、元朝帶刀殿へ廿七日以來之御樣子を申達、安堵被レ成候樣申入候故、廿九日に御自筆之御狀被レ下、今度心ざしの儀申上、殊外御滿足被レ成候、以來心安致ニ參上一、世上之儀も申上候、心得にも成申事共無ニ遠慮一申上候樣被レ成度候、御狀の御しるしとて、御在所より到來候御餌栖之鳧二つ被レ下レ之、近比以忝次第內々推察仕候とは違候て、御すなほなる事珍重至極之旨申候、末々何とぞ御遂被レ成候樣に仕度候、帶刀殿乘々心懸も有レ之上、此度の樣子近比乍レ恐感入申候、沙汰は不レ仕候樣に被ニ申聞一候へ共、其元樣へは申聞度候旨申入候へば、夫は本望の儀に候間、前廉よりの首尾申上候樣に御申候間、如レ此御座候、以上

正月四日　　　　　　　　　　　　靑地藤太夫

藏人樣

先達て申上候、先生御作文一冊寫候て、只今進上仕候、御前へ上候時分草々寫不謹の書體に御座候へ共先々はやく進上申度、其儘懸ニ御目一候、御寫直し可レ被レ遊候、先書に申上候儀承達候趣御座候條、左中に申上候、生忌共祭と申儀は、大明會典之內にて御見當被レ成候由、永樂大典は御文庫にも無ニ御座一候旨、且又群臣表賀之儀は、當今聖節之時迄之事にて、明にても表賀之文も定格有之、是は節行事例と申書に御座候、歿後に先祖の誕辰、會典に祭典之事迄相見申候旨御座候、御前にて先生御自筆一冊御留置被レ遊度旨にて、一昨六日指上置申候、先生も御滿悅に被ニ思召一候、殊一冊御留置被レ遊珍重

に思召候旨、先私方より御挨拶可ニ申達一候、追て御挨拶可レ被ニ仰遣一旨にて相濟申候

青地藤太夫

正月八日

一 今年も御切米取より、百俵に付金子四両づゝ御借被レ成候儀に付、萩原源左衛門執政水野泉州迄申入候は、近年御國用不足に付、御切米取より御借金被レ成候儀人々迷惑仕候へ共、去年迄は指上難儀にも不レ及候、春に至被レ下候へば同事に候へ共、今年米下直近來無レ之儀にて、輕き者共皆々被レ下候てさへ及ニ難儀一候、其上箇様之爲勞、諸大名より上納金も被ニ仰付一儀と奉レ存候、左候へば今年之儀は不レ及ニ御借金一様に被レ遊度者と存候旨申述候處、泉州以外氣色損じ、ケ様の儀は拙子とも申候ても、御手前などは左様に被レ成候ては、御費用難レ償候と可レ被レ申筈之義に候、惡敷心得之旨にて叱被レ申候、源左衛門重て被レ申候はゝ、來年之御收納方をも圖合候へば、御不益無レ之様相考候に付、此儀申上候、其上私支配之内にも御切米取多御座候、御知行にて地方取は皆高知の處、却て全收納仕、却て小給之者より御借金之儀を、近比不順成儀に候へば、私を初め地方取よりも御借被レ成候はゞ如何可レ有レ之哉、諸大名は御借金被レ成候へども、是は交替之格相改候に付、却て上納金よりも爲ニ勝手一は宜敷罷成候、然れば只今迷惑仕候者は切米取にて御座候、箇様之儀存寄候に付、乍ニ慮外一存寄申述候とて、言葉を盡し申入候へば、泉州も言葉屈候哉、手前迄にても無レ之候、兵庫なども一圓同心は有間敷候、兵庫へも可レ被ニ申聞一との儀に付、追て兵庫殿へ右之通申候へば、是も泉州同意に散々機嫌損じ、御自

分之役には別て料簡違に候、泉州御申之通手前共箇樣に存寄候とも、夫は難㆑成儀と被㆑申候てこそ宜しく候に、不㆑入事との申樣に付、源左衞門も最早致㆓閉口㆒候、然共兵庫殿聞捨に成がたく候故、其趣達㆓上聞㆒候と相見、翌日とやらん泉州迄被㆓仰出㆒、源左衞門料簡之通にて御收納につかへさへ無㆑之候はゞ御切米被㆑下候者共より御借金不㆑被㆑成程宜儀は無㆑之候、僉儀可㆑有㆑之儀と被㆓仰出㆒、重て源左衞門召出し、來年御收納に風水の損毛有㆑之、又は諸國廻船之場所難澁有㆑之候ても、少もつかへ無㆑之考相成、慥に其圖に候はゞ可㆓申聞㆒との尋樣に付、風水之損毛廻船之破損等は、豫難㆑計儀に御座候故、左樣之災難は無㆑之候ての圖に御座候、御前代以來不時之儀迄も相考候て、慥に有餘にて其餘計を以御切米等被㆑下候と、申圖は無㆓御座㆒事に候、只大數を以相考、此通にては御不足は無㆑之候筈と申儀に御座候、不時之儀は如何樣之變可㆑有㆑之も難㆑計候故、其儀は其時の樣子次第、又如何樣にも罷成候儀に候旨答申述候へば、萩原近江守利口過候て、何之圖も無㆑之儀共を申述候處、老中に被㆓問詰㆒候ては、跡へも先へも不㆑參事共を申出候、各の申樣皆其類にて候旨被㆑申候に付、源左衞門申候は、近江守不屆之仕形は徧く人の存したる儀に御座候、私儀此御用相勤、近江守仕形を似せ申儀は無㆓御座㆒候、無㆑考儀にて此度之御借金には不㆑及儀と、申上候事にては一圓無㆓御座㆒候旨申述候處、終には去秋之通御切米取一統百俵四兩宛御借金と申に相極り候由

此儀に付先達て申上候、萩原氏憤嘆は出申儀にて御座候、源左衞門殿も輕き役人にても無㆓御座㆒候、

御役料三百俵被レ下、御勘定頭之下へ屬申候、別て御儉約方主付相勤被レ申候に付、泉州並兵庫殿へも愚意を申述られ候

一　右之樣子先生十月廿五日夜御聞被レ成候、晦日は政要の侍講被二仰付一候節、御側に兵庫殿並加納遠江守殿兩人侍座被レ仕候、太宗良弓を十張御取出し秘藏被レ成、弓工へ爲二御見一被レ成候へば弓工是は木心不正候故、百理邪にて良弓にては無レ之旨奏聞仕候處、太宗大に感有レ之、朕弓馬を以天下を取候故、弓を觀事甚多し、然に却て此弓工には日利不レ及、左候へば天下を取て日淺ければ、治平候樣には候へ共、何程政治に不レ足所可レ有レ之も難レ計候、自今以後五品以上の京官每々罷出、政治之得失百姓之病苦を可二申上一との御儀に候、太宗御心附之程可レ申樣も無レ之結構成事共、誠に三代以來の賢主、貞觀之太平を御施被レ成候も是故と奉レ存候、但右弓工の木心不正と申上候は底意有レ之候て、太宗を諷諫仕候儀と相見へ申し候、此事は宋朝の胡氏が料簡に御座候、いづれに胡氏が申通弓工は太宗の御內心を見屆候て、諷諫仕候趣と相見申し、凡心の不正と申事、或は女色に耽り行跡を亂し、或は酒色を嗜て惡敷風俗に陷るなどゝ申儀は、一向惡事にて候故不正など申儀に及不レ申候、不正と申は善事にても、其事偏に成候へば不正に罷成候、大學に正心誠意と御座候も、意を誠に仕候上に、惡事は無二御座一候へども、心偏重する所御座候へば、不正にして邪に成行申候、たとへば儉約を守り申程之事は無二御座一候へ共、儉約に偏に成候へば、種々の弊出來申候、只今御儉約第一に被二思召一候て、御身之上を始質

素に被ㇾ遊候儀は、結構至極之儀に候へ共、是も偏に參候へば、諸役人共は人々の功を立申度、しかも不正の心を以偏急に萬事儉約を宗に仕候へば、一旦は御爲に相見候へども、末々之者へ移り候ては迷惑も仕、難儀にも及候て、畢竟は上の御爲に不ㇾ宜候、畢竟は御爲に不ㇾ宜樣に罷成候へ共、只一旦の御爲をのみ存候は、衆人の習に御座候故不ㇾ及二是非一奉ㇾ存候、扨太宗云々と本文の意に移し被ㇾ講候由

一　右の翌日十一月朔日、御勘定頭三人御前へ被ㇾ爲ㇾ召、御儉約之儀被二仰出一候へば、殊外急に申付候故、末々に迷惑仕候者も出來と御聞及被ㇾ成候、ゆるやかに仕候てしかも御儉約に成申仕樣は何程も可ㇾ有ㇾ之候旨、御直に御意の趣先書に記申通に御座候、泉州へも被二仰出一有ㇾ之體に承及申候、永原新右衞門先日罷越、頃日御儉約方餘程ゆるやかに罷成候御沙汰に御座候とつぶやき申候、誠に仁人之言有ㇾ利哉と奉存候

一　其次の段御侍講に太宗諫を納らるゝ事盛德の一事に御座候事は不ㇾ及ㇾ申候、群臣の上を恐れ言葉を盡しがたく可ㇾ有ㇾ之かとの御遠慮にて、御顏色を和申上よき樣に被ㇾ成候儀は別て難ㇾ有儀に御座候、玄宗皇帝は太宗の孫にて御座候、或時鏡を御覽候て御憂被ㇾ成候體相見申候、御近習の者相伺候は、何故御憂色御座候哉と申上候へば、思召の外御疲被ㇾ成候樣見へ申候故、如何樣の儀に候哉と御憂被ㇾ成候旨上意候處、近習の佞人共能幸に存申上候は、されば張九齡を宰相に被ㇾ遊候て、以來御窮窟

にのみ仕なし候故、日々に御疲候樣に内々何も申候、少御遊樂も被ㇾ成候て可ㇾ宜と申上候處、玄宗暫く思案被ㇾ成、されば九齡を用ひて以來、朕は疲候へども、天下は肥候樣に覺候旨上意にて彌九齡を御用被ㇾ成候故、小人共貌を改罷在候、貞觀の政を御慕被ㇾ成候故、開元年中天下大に治り、太平の天子と唱申程に御座候、此事には私存寄に不ㇾ審御座候は、玄宗の朕は疲たれども天下は肥たりとの上意、合點參らず候、天下肥候はゞ御身も共に御肥可ㇾ被ㇾ成事に御座候、此御疲被ㇾ成候と御覺被ㇾ成候御心根故、九齡もけふたく思召外には御崇敬の樣にて、内々は御疎ましく有ㇾ之候處へ、御近習の佞人とも乘候て、色々讒言も構申候、初の内は右の樣に被ㇾ仰候へども、後には御實心あらはれ、九齡も遂はれ、李林甫如きの惡人御登庸有ㇾ之、段々天寶年中に成、安祿山が亂出來終に蜀へ潛幸に及申候、然は畢竟李天子御身の上を舉候て、追從申者は、皆小人の流にて、一旦けふたく思召候もの共は多は賢者の流にて御座候旨御講候由

右講畢て退出候處遠江守殿迄り被ㇾ申候て、扨々御蔭にて拙子共迄結構成事共承候旨挨拶被ㇾ申聞ㇾ候

右舊臘廿一日調置候、十一月廿五日御物語の旨、正月廿二日到來（禮幹記之）

一 月迫に至町中に十四年以前御前代に相滯有ㇾ之候、御買掛大半被ㇾ下候、十六萬兩出申候旨町人共申候て歡聲充街申候、先生へ御尋申上候へば、十萬八千兩と御聞被ㇾ成候旨被ㇾ仰候、常憲院樣御代の御買掛莫大の儀に付、總高の内三分一引候て御渡被ㇾ下候ても、納得の者へは被ㇾ下候十分共可ㇾ請取ㇾ

旨申者へは、年賦を以可ㇾ被ㇾ下之旨被ニ仰出ㇾ候處、大半三分引にて請取候旨（右附錄）

一　舊冬十四日諸御用達當年分の御拂金不ㇾ殘被ㇾ下候、其節戌年より丑年迄の御拂金分三分引にて請取可ㇾ申候、且又外殘可ㇾ被ㇾ下候、諸方へ被ニ仰出ㇾ候、依ㇾ之諸御用達共得心の上、同廿六日御拂被ㇾ下候由、大抵四十萬兩程の由

正月三日聞番廻狀の寫

一　舊臘關東の百姓の中より訴狀差上申者有之、漢文にて調候て御勘定頭などよめかね候に付、辻六郎左衞門と申候、最前美濃の郡代にて候、只今萩原源左衞門などゝ同役にて候、此人少學文有ㇾ之候故、先日御前にて右之訴狀講釋被ニ仰付ㇾ何も御勘定奉行並萩原氏など迄、於ニ御前ㇾ聽聞の由に候、よく聞へ申樣讀申候由、源左衞門物語にて候、然處講過候て各へ御直に被ニ仰出ㇾ候は、訴狀の是非は先指置れ、上より被ニ仰出ㇾ候事を、かやうに批判致申上候事、御大慶の儀に被ニ思召ㇾ候、自今以後も箇樣に下より無ニ遠慮ㇾ異儀を申上候樣に被ㇾ遊度の由上意に御座候、一統に難ㇾ有儀とて奉ㇾ感候、段々御仁政相達可ㇾ申奉ㇾ存候（正月二十五日　賜ニ齋賢ㇾ書）

一　去廿五日先生御宅へ參上仕候、御物語共早々御聞被ㇾ遊度之旨有增筆記仕置候へ共、何とも此度は難ニ申上ㇾ候、當十一日私方へ御出の節御物語、且又昨夕あなたへ參候事候て承申趣など、中々大抵を超申儀ども筆紙にも先は難ㇾ及御座候、去共秘策には書留申候はゞ追て透も御座候節、寫可ㇾ懸ニ御目ㇾ

候別て昨夕承知の事共は君も君臣も臣千歳の一時に奉レ存候、殊に武藤庄次郎殿と申人出來、兎角可レ申樣も無二御座一候、筒樣には申上候へ共、其許御預地の儀に付野村殿物語の趣委細被二仰下一承知仕候、扨扨非道の事共不興に奉レ存候、皆以水野執事の取捌と奉レ存候、此人の儀に付候ても、當十四日到て御直言被二仰上一候、何と成行可レ申哉無二心元一程の事に御座候、大切至極の事も封事は御嫌被レ成候由にて、ひらき紙面に付有馬殿は一覽も有レ之由仰聞られ候、就レ夫無二心元一奉レ存候事に御座候、君不レ密則失レ臣と御座候故、少御愼密に有レ之度物に奉レ存候、是は外の儀にては無レ之、先生御身の上を氣の毒奉レ存候故にて御座候、此度野村氏物語の趣は幸頃日先生御心懸レ事共に候間、以二書面一可レ懸二御目一と奉レ存候（二月十七日夜　禮幹來書中）

正月廿五日先生得二御意一候節、當廿日不時に被レ爲レ召候は、御壽賀の儀にて御座候哉、御侍講に御座候哉と申上候處、兩樣の儀にては無二御座一候、去年以來存寄共申上置候事に付被二仰出一候品有レ之、年レ恐結構成思召共にて奉二恐感一候、追而表向へ相知可レ申旨被二仰聞一候、如何樣の御首尾に候哉と申上候へば、御領本中跡目被二仰付一候趣の儀に候、一々申上候通と申趣にては無レ之候得共、大抵申上置候趣に可レ被レ遊御樣子に候、廿日兵庫頭殿を以段々御老中若年寄衆へ被二仰渡一候處、此趣新助へも可二申聞一旨上意に候、わざ〳〵被レ爲レ召被二仰聞一候、御請申上置候上に、近比不二存寄一難レ有儀に奉レ存候、御老中、若年寄衆迄被二仰出一候儀を、私へも被レ爲二仰渡一候儀、誠以不二存寄一事冥加至極奉レ存候

旨申述候處、尤成心付候間其段も追て可㆓申上㆒旨、兵庫殿挨拶有㆑之候

一　頃日御勘定方仕樣不㆑宜奉㆑存候旨、御領百姓名主の子に學問有㆑之者紙面を以申出候、其紙面常體の文段にて無㆑之、文章に相調候に付、御奉行以下讀得申者無㆑之、兎角通不㆑申候、御勘定吟味役辻六郎左衞門は、萩原源左衞門相司にて昔より學問有㆑之候、右紙面今般於㆓御前㆒御老中以下御勘定頭等何も罷出僉議有㆑之候處、六郎左衞門讀候て、難㆑通所は一々可㆑致㆓講釋㆒旨被㆓仰出㆒候付、六郎左衞門被㆑講候、依㆑之皆通じ申候、其上にて被㆓仰出㆒候は、右名主の子被㆓仰渡㆒候趣を、とくと合點不㆑仕候付、斯樣に申候かと思召候、近日當地へ呼出、委敷申聞候はゞ得心可㆑仕儀と思召候、但斯樣の者共此方の非を心付、如㆑此以㆓紙面㆒申出候事、珍重成事にて無㆑之候哉、何も珍重に可㆑存候事と再往御稱嘆被㆑遊候旨、將又此間橘隆庵など御次へ相詰申內、色々物語の折に、唐の太宗と日本の秀吉と能似候、不㆑入合戰數寄にては無㆑之候哉、秀吉も朝鮮陣迄を仕出し、夫にて天下も不㆑治候、太宗も晩年迄高麗を攻られ其流矢にあたり終に崩御とも申傳候などゝ咄候處、御叱被㆑成太宗と言人は秀吉と同日に申人にて無㆑之候、但し不㆑入陣數寄は如何にも皆いふ通、不㆑入事と上意に候

一　先日被㆓仰聞㆒候は、御直に御尋被㆑遊候は、新井筑後守學問は如何樣に候哉との御儀に付、筑後守儀古今に通じ博識の者にて御座候、世間に博識の者多候へ共多は中華の事迄に博御座候處、筑後守は日本の事に殊外委敷、和漢の事引合候て能辯じ申候旨申上候處、暫あつて筑後は文飾の多きものと、

御聞被レ遊候旨上意に候、其通とも何共難二申上一儀に付、只謹て罷在候へば、外の儀など御尋に付退出被レ成候處、御近習の衆を以筑後守何ぞ御尋被レ遊候共可二申上一候哉、如何存知被レ成候哉との被二仰出一に候、是又可レ申様無レ之に付、上意を以御尋被レ遊候に、存知罷在候儀を不二申上一儀は御座有間敷と奉レ存候、但近年老衰仕候て物覺悪敷罷成候由申聞候、近年の儀も失念仕候事多く御座候旨申上候へば、其後は何の被二仰出一も無レ之候、其内筑後に逢候はゞ、此趣可二申聞一哉とも存候

一　上様至極御無欲の御事、皆とくと御見聞被レ成候、凡人君の類斯様程寡欲成御生質の出來仕候儀は、近比妙成儀に候、指當人々へ過分の者など御施被レ遊候儀無レ之に付、御吝嗇の様に世間申慣私式迄も其疑有レ之候處、眞實御不欲の儀無二比類一儀共に候、夫故聲色の御好自然と無レ之候、至て御生質の美可レ申様も無レ之候、新井筑後守御代始に沙汰不レ宜候て、御擯斥被レ遊候へ共、只今にても其身さへすなをに候はゞ、御用可レ被レ遊思召之體に推察仕候、御寡欲の儀此度慥に見屆候旨被二仰聞一候、日外外海氏物語の儀存申合候

一　私申上候は、去暮宰相殿へ御願の儀は先年至て御困窮の時分以來、終に被二仰達一候事も無二御座一候處、此度は同姓藏人以下金澤に學友中一同に私迄内談も仕、達て御願被レ成候ても可レ然旨申越候、私も尤示談の趣に任せ可レ宜と存候、御紙面も取次相達候處、今以兎角のいらへも不レ被二申出一候、たとへ氣に入不レ申候共、一往成不成との挨拶可レ有レ之處、其儀さへも無二御座一候、然ば去暮も被二申上一

候通、御願の品御指止被ㇾ成候間、御紙面相返候樣に被ㇾ成度などと、舍人迄一往申達候ても可ㇾ然樣に、心付及ニ御相談ー候へ共左候はば却て催促仕樣に相聞へ候へば、却て不ㇾ入事に候、第一拙老の方へ難澁成事を申懸候樣に候、非ニ本意ー候、左候へば一向此儀は齒牙にも不ㇾ掛と申趣に被ニ成置ー可ㇾ宜樣に御相談故、其分には仕置候へ共、畢竟は先生へ私の恥辱をあたへ申樣に罷成、近頃迷惑至極奉ㇾ存候、是程心外の迷惑は無ニ御座ー候に付、何とぞ神意を承り占決仕度存、今日天滿宮へ參詣仕、宮籤を取試候處、近比不ニ存寄ーをもしろき籤辭に御座候條持參仕候、此許に被ニ指置ー可ㇾ被ㇾ下候、此天龍の二字は、何れを指たる語にて哉、籤抔の儀先生御心中に不ニ相叶ー、無益の儀に心を用申事に可ㇾ被ニ思召ー候得ども、私心底不ㇾ得ㇾ已如ㇾ此に御座候、籤を取申儀此度初ての儀に御座候旨申上候處、籤辭も奇特の物にて、又能く合申候、我等身上の儀を先年是も天滿宮の籤取申者有ㇾ之候、其籤に「一朝良匹別」と申す句、其時分何等の儀と申儀、誰へも難ㇾ會候處、近年にて見候へば當上樣の事と慥に相見申候、且又十三年前辛卯の年、江戶へ被ㇾ爲ㇾ召候旨金澤へ申來候、拙者心には公儀へ被ㇾ爲ニ召出ー候事と相心得候故、別に占決にも不ㇾ及事に候處何も違て申候間、關帝靈籤取候得ば、「玉兎重生應發跡」と云句有ㇾ之候、此玉兎重生とは何等の儀に候哉、其時分皆々難ㇾ會候、今年癸卯の年にて段々不ニ存寄ー御用も相勤候に付今見候へば重ての卯の年は、其蹤跡も可ㇾ有ㇾ之との儀、其間漁翁の樣にて江邊に可ニ罷在ーとの趣に候、能く合申ものに候、心入過分に候とて、籤辭御取寄被ㇾ成候

癸卯正月廿五日　天滿宮籤辭　第四十四吉

　殺中黑白子　一著要ㇾ先ㇾ機
　天龍降ニ甘澤一　洗出舊根基

文昭廟御代取候由　天滿宮籤　第三十二吉

　似ニ玉藏ニ深石一　休下將ニ故眼一看上
　一朝良匠別　方見ニ寶光寒一

辛卯歲關帝籤

第十二籤乙丙中平　姜太公釣魚

　君今庚申　未ニ享通一
　且向ニ江頭一　作ニ釣翁一
　玉兎重生　應ㇾ發ㇾ跡
　萬人頭上　逞ニ英雄一

爲ニ御慰一旁委細申上候、籤辭の意御考被ㇾ遊思召可ㇾ被ニ仰下一候、以上（三月七日到來）

　正月廿五日夜　禮幹　再拜

一　二月十一日先生御來訪御物語の件々、比日被ㇾ爲ㇾ召候序被ニ仰出一候は、武藤庄十郎と申者御存知

候哉、學問如何樣候哉と御尋に付、私被二召出一候砌より心安仕候者に御座候、學問の樣子博識多材などと申類にては無二御座一候、酒井讃岐守儒臣松田善三郎と申者弟子にて、四書、五經、小學、近思錄の類迄、日夜相學候て爲レ人も實體に御座候旨申上候處、庄十郎儀封事を奉り候、其內に御旗本以下御救被レ成候て可レ然旨申儀を第一に書記申候、尤には思召候へ共、急に御救も難レ被レ遊候、其上先は御旗本末々迄も常祿を被二下置一候處、不覺悟にて不如意に罷成候者共は、なにと可レ被レ遊候哉、新助心安仕候へば一段の儀に被二思召一候、此旨庄十郎へ申聞御救可レ被レ遊樣幾重にも僉議仕候て、追て可レ申上レ旨上意に付奉レ畏候旨御請申上、扨庄十郎殿へ御逢被レ成、其段被二仰達一候處、殊外忝かり又は驚被レ申候、御尋被レ成候は、いつ比封事御上被レ成候哉と委敷御聞被レ成候へば、先生といへども可二申入一、とは不レ奉レ存候へ共、右の首尾に候條、前後の樣子可二申上一旨にて被レ申候は、四五年も前御尋にも罷成、御仕置の筋存寄の儀は可二申上一旨、諸頭中へ被二仰渡一由慥に承及申候、然は頭中より組中へも可二申聞一事と相待候へ共、一同に組中へは沙汰無レ之候、拙子小普請入の身に候へば、別て不二申聞一筈に候、然ながら斯樣に御明主樣に奉レ遭事は、千載の一遇、殊更御尋迄被レ成候に默止候儀無二本意一候に付、先年存寄封事に認、其時分小普請頭何某持參いたし候、（此人姓名、私致失念候、）其頭甚仰天にて小普請入申し、其身分際にて存寄等可二申上一儀甚不レ可レ然候、第一身の禍に可二相成一候間、取置歸可レ申旨再三被レ申候庄十郎申候は、禍の所は不レ苦奉レ存候、御尋にも可レ被レ成儀は可二申上一との上意、頭分平組

も差別は有レ之間敷儀に御座候、乍レ然御取次難レ被レ成子細御座候へば、不レ及二是非一儀に奉レ存候、さればとて自分の頭指置、外へ可レ申樣も無二御座一候、左候はゞ御返可レ被レ成旨申入候處、取次難レ被成哉と申一言にて、少氣付候哉、先受取置候條可レ被二罷歸一旨に付、忝存候旨申入罷歸候處、追て庄十郎不レ遁衆中を右の頭被レ招、右の段々申達、近比不レ入事に奉レ存候、其身の爲に不レ可レ然事と存候間留申候、此上は各料簡可レ有レ之儀に存候旨被レ申候、三宅忠七郎なども一家の内にて各寄合、其内宿老にて重職の衆、頭へ對し相止候樣にと被レ申候に付、無二是非一其封事取戻申候、扨存候は最早宿志難レ遂候、畢竟頭を憚候故にて、先致二隱居一三百石の祿子息に讓り、扨宿志の趣相調、去年の夏以來有馬兵庫殿宅へ持參致御上可レ被レ下と相伺候へば、少も構不レ被レ申一段奇特の旨挨拶にて請取被レ申候、此首尾にて今般不二存寄一上意、殊先生と可二申談一旨被二仰出一候儀難レ有仕合奉レ存候、此上は右封事隱置可レ申儀にても無レ之旨にて、先寫一冊被レ懸二御目一候由にて、便御懷中被レ成私へも爲二御見一被レ成候、折節左兵衞殿御出合の刻、是も御覽被レ成候、數十ヶ條の儀に御座候、皆以「堯二舜我君一堯二舜我民一の」意味にて、都て理質の第一等の事共に御座候、逐一感嘆に不レ堪候、我國開闢以來斯樣の封事は有レ之間敷奉レ存候、此一冊の外にも有レ之文言に相見申候、先生も殊外御善色に御座候

上樣御德量の廣大此一事にても可レ存候、御請に常々心安仕候旨申上候處、はや其儘封事の儀被二仰出一相談の上、御救被レ成候樣幾重にも相調可二指上一との御事は、何等の御德量に候哉と被レ仰候

一　紀伊侯に被レ成ニ御座一候內、日光へ被レ成ニ御參詣一候折節、東照宮神輿日光の町中を奉レ渡候、神主共へ御尋被レ成候は、幸の處へ被レ成ニ御座一候、神輿御渡被レ成候間、御供被レ成度候、如何可レ有レ之哉の旨被ニ仰聞一候處、神主申上候は、御指圖申上候儀は恐多奉レ存候故難ニ申上一候、御子孫樣の儀に御座候へば、御供被レ成候はゞ御先祖樣御喜悅可レ被レ遊儀の樣奉レ存候旨申上候へば、其方左樣に存候へば、東照宮御意と思召候、左樣に候はゞ御步供可レ被レ遊旨にて、神輿の跡より御步供被レ成候、然處町中に見物の男女、誰申共なく一々見せより下り候て、土の上に坐候て見物仕候、其樣子御覽被レ成、何故何も見せより下り候哉と爲ニ御尋一被レ成候へば、紀州樣御步供被レ遊候へば、見せに座居は何共恐多奉レ存如此の旨申上候處、是は不レ可レ然候、東照宮神輿御通りは、累年の儀に候、其時さへ見せにて見物仕候ものども、紀州樣にて下り可レ申樣は無レ之儀に候、何も每々の樣可レ仕旨被ニ仰渡一、皆々如レ本見せへ上り候、其樣子御覽被レ成候て、御供被レ成候旨、今度水戶宰相樣御元服の日前には、於ニ御前一御拜領の御腰物、代金七八十枚以上の物に御座候て、御献上物も夥敷例に候處、此度は只十枚餘の御道具にて、赤銅裝にて被レ進候、併御獻上物は可レ爲ニ御無用一との御事にて相濟申候、以上

二月十二日　　青地藤太夫

一　武藤氏上疏の寫、今一度見申度迫て先生へ申上候へば、早速取に越候て御返被レ成候、御寫は不レ被レ成候旨被レ仰候、數十條の儀一過讀迄の儀に付、一々は記得不レ仕候、其內警策と存候一條有增覺候

問書記申候、如レ左に御座候、人主の第一義可レ被レ遊儀は御學問にて御座候、其學問と申候に眞贋の二ッ御座候、先帝王の實學を御學問可レ被レ成とならば、師範の人を御選被レ成、專其人に御學可レ被レ遊事に候、經濟の功は皆此眞實の學問の中より出申候、今金銀を以譬喩可レ仕候、惡金銀又は贋金銀にても上の命令次第に、物貨には罷成候へ共、精金銀とは自然と違ひ、天下萬民一旦命令に隨ひ候迄にて、心服は不レ仕候、其故既に近年金銀の爲レ似ものは、悉御改易被レ遊候御事に奉レ存候、學問も同事に御座候、天下に學問より上の善事は無ニ御座一候へ共、是も爲レ似物御座候、只今世上に發向仕候て、大儒碩學の樣申候內に、大に爲レ似物御座候、金銀さへ爲レ似物は自然と合點不レ仕候、況聖賢の大道を似せ申分にては、害は出來仕候とも善には成不レ申候、然者一人の御師範を御見立被レ遊候儀、大事至極奉レ存候旨申趣に御座候、此外にも多警策相見申候、廣內が上疏とは同日の談にて無ニ御座一候、寫置不レ申近比殘念奉レ存候

一十六日先生へ得ニ御意一庄十郎殿に被ニ仰談一候儀は如何相成候哉、御尋申上候處、十四日迄に相濟、庄十郎殿紙面を主本にいたし、副紙面相調、兵庫頭殿を以即日上レ之申候、いまだ何とも御沙汰無レ之候、兵庫頭殿內見にて少氣に入不レ申口振顏色も見申候由被レ仰候、御副紙面の趣に有增如レ此、庄十郎紙面には專諸旗本御救可レ被レ遊謀略と、又御學問を無ニ御懈怠一可レ被レ遊と申趣を申述候、先達て被レ仰出一候者、御旗本末々迄一統に御救と申儀とくと御合點難レ被レ遊候、輕き者共皆常祿を被ニ下置一候處、

人々不覺悟にて不如意に罷成候を、御救被レ遊候へばとて、何ぞ不覺悟の處直り可レ申哉、其上到て御勝手方御不如意に付、諸大名より上納米被二仰付一、一旦の急を御償被レ成候趣、巨細の儀は庄十郎委敷合點仕間敷候間、此所も辨候樣可二申聞一候、御前の思召には大名なりとも、其常祿の內を以上納米被二仰付一候へば、畢竟御餘米を以追ては諸大名へ可レ被二相渡一事と思召候、斯樣の思召も承知仕候て、御救のたてを相考申候樣に、庄十郎へ示談可レ仕旨被二仰出一候、先生御別格に付、諸旗本御救も被レ下候樣に武藤庄十郎申上候儀に付、被二仰出一候趣奉二承知一候、末々輕き者迄も皆常祿被二下置一候處、人々不覺悟にて不如意に罷成を、人々御救可レ被レ遊儀は、とくと御合點難レ被レ遊旨乍レ恐御尤至極の儀に奉レ存候、但困窮及候者共、不レ殘不覺悟にて如レ此と申にても無二御座一候、第一御前代に上より華麗を御好被レ遊候て、二三十年以來日々奢侈に罷成斯樣には有レ之間敷儀と心附申者迄も、世の風俗に隨て質素を失候に付、自然と一統困窮仕候、二三十年以來の通にて不二相改一候はゞ、天下は禍亂に及可レ申候と、少智識御座候者共は潛に歎罷在候處、享保元年已來、當御代に罷成、御質朴の儀近代稀成御樣子に付、萬民眼を付替、有識の者共は再度天下の禍亂を免れ候樣に奉レ祝候儀、誠御中興の御美政と奉レ存候、乍レ然御身の上には御儉約を御行被レ遊候迄にて、下々急度仕りたる被二仰渡一はいまだ無二御座一候故、數十年以來馴染申候風俗故、一同には合點不レ仕、聲色に御耽不レ被レ遊事と御儉約を御守被レ遊候事も、只上の御物數寄御生質とのみ申慣候て、人々風俗を改申所へは心附不レ申と相見申候、今一事を

以て申上候間、是を以餘事を御計ひ可㆑被㆑遊候、火消役の儀は、火を消申儀専要の事に御座候へば、別て華麗の入申儀にては無㆓御座㆒候、嚴有院様御代より、常憲院様御代始迄は、革羽織の外毛織等着用仕儀は無㆓御座㆒候處、不圖羅紗織の類を用來、只今は壹人の身にて十餘り二十計も拵、紅白黒黄青紫其外異類異形の儀巧出し、一度火事の節着用仕候へば、二度着用不㆑仕輩も有㆑之様に申慣候、如㆑此の類中々筆紙に難㆑盡御座候、斯様の不覺悟の徒に何程御救被㆑遊候共、此通にては勝手續可㆑申様無㆓御座㆒候、然は急度下々迄も儉約相守候様御法式被㆓仰渡㆒候て、其上に候はゞ御救も立可㆑申候、扨不覺悟にて無㆓御座㆒候へども、勝手不如意の子細は前々申上候通、世上の風俗にひかされ不㆑得㆑已候て、分限を失申候處、近年毎歳に火災にて人々家財も燒却仕候のみならず、火事の費に乘じ、物價年年に高直に罷成、昔には數倍の直段に罷成候、且又不慮の損失にあひ、又は娘等多所持仕候者は、婚姻の費に無㆓是非㆒身代も仕損し申候、然處御仕置の宜故にても候哉、俄に米下直に相成候て、物價はさのみ違ひ無㆓御座㆒候故、侍中は内外の艱難にて甚困窮仕候へば、末々の者程御救不㆑被㆑遊候ては、難㆑續奉㆑存候、只今の御急務は下の奢侈を急度御正被㆑遊候と、物價の下直に罷成候様、御僉議被㆓仰付㆒候と此二ツにて御座候、是則御救の一事にても可㆑有㆑之候、物價下直に仕候儀、別て不案内の儀に御座候故、如何様に被㆓仰付㆒可㆑然と申儀は難㆓申上㆒奉㆑存候へども、第一京大坂等に富有商人ども、萬人日用の者を或は買置に仕、又は問屋の銀本を仕候て、米價の高下には無㆓貪着㆒只おのれ〳〵が厚

利を得候様に、物の直段を此者共の自由を得候様に仕來候て、奉行頭人も是には手を難レ下儀候様、度外の儀に仕候、夫を受候て商賈仕候者共は、多は一日過の者に候故、直段を下け賣候ては今日を難レ過候故、自然と高直の物下り不レ申候、日用の物と申候は絹、布、木綿、幷綿、麻の類、酒、油、薪柴等の物に至迄、皆富有の者共の手に落候て、自由を得申故と奉レ存候、何とぞ御僉議有レ之、官より直段を定候て、運漕等の費相應の利潤を得候様、相計ひ候て米價相當の物價に可二相成一様に奉レ存候

一　恐多儀至極奉レ存候得共、好御序に付所存の趣申上候、御身の御養生を第一に被レ爲レ遊候様にと奉レ存候、御壯健にて御無病に被レ成二御座一恐悦至極に奉レ存候へども、第一の御養生は御飲食と御色欲との二ッにて御座候、然に前にも申上候通、元來御質素に被レ成二御座一候故、自然と聲色の御耽は不レ被レ成二御座一候様外聞にても申慣候へども、衽席の上の儀は、外人難レ察事に御座候、誰々にても自身の工夫を以、過度すれば精氣を損し、養生に害ありと自得候て、其程を考申度儀に御座候、文昭院様御色欲深被レ成二御座一候様に、其砌外間にて申慣候に付、乍レ恐大事の儀と奉レ存、存よりの筋も申上度儀に奉レ存候へとも、其頃は中々私式の者一言も申上候事罷成候御様子にては無二御座一候に付、新井筑後守へ迄は再三此事申聞候へども、曾て外間に申御様子にては無二御座一候旨申聞候に付、其通と奉レ存寸志も不二申上一候處、果て御不養生にて俄に御病氣付被レ遊候、萬分一の御裨補にも可二相成一候處、寸志不二申上一候、只今以殘念至極奉レ存候、如何様に賢明の名君にても、御病身に被レ爲レ成候ては、太

平の望も無二御座一候、將又御酒を御好被レ遊候て折節御大酒も被レ遊候樣に外樣にては申者も御座候、御酒も被レ爲レ過候へば脾胃に濕熱を帶候て、疾病生じやすきものに御座候、たとひ被レ爲二召上一候と、も二三口づつも透間御やめ被レ遊、又好時節被レ爲二召上一候樣に、加減被レ遊候はゞ、御養生の爲に可レ宜儀と乍レ憚奉レ存候

一　御儉約第一の時節に付、御身の上を始、諸事其沙汰御座候儀は、誠以可二申上一樣も無二御座一候、結構成御思慮前々も申上候通御座候、但御儉約に付御奉行被二仰付一、御奉行の心得不レ宜候へば、却て御爲に不レ可レ然事も出來仕ものに御座候、是には別て御了簡御加可レ被レ遊儀と奉レ存候、たとへば上樣さへも、諸役人共物事申上よき樣に被レ遊、一往被二仰渡一候上にても、存寄申上候樣に毎々被二仰出一候、然處奉行として其身の權勢を專に仕、諸役人の料簡は不レ得二申出一樣に仕成、且やゝもすれば過言無禮も御座候體承及申候、諸役人とても皆御譜代の歷々にて御座候處、乍二御用一過言無禮に渉り、剩存寄も上へ不通にて、疑敷の上には不レ及二是非一、身を失ひ申儀も可レ致二出來一と心得、兎角奉行の指圖次第に仕置候へば、今日の上宜敷候故閉口仕族も御座候、若强て存寄も申述不首尾罷成候はゞ、一分難レ立候て其分には難レ仕ものも可レ有二御座一候歟、左候はゞ必定御爲に不レ宜儀も出來可レ仕樣に奉レ存候、此儀は別て御了簡被レ爲レ遊可レ然御儀に奉レ存候

右のヶ條、御文段等前後も仕、多分先生の思召を取失申處も可レ有レ之候へ共、十六夜乍二立讀一承候處、

大抵此通に御座候、此奉行と御座候は、水野執事の事に御座候、封事に候はゞ姓名も御顯可レ被レ成候へ共、披紙面殊兵庫殿一覽も有レ之旁、奉行と被レ成候兵庫頭事も申上度儀候へども、其儀は何とも難レ成候

泉州事聚歛數寄迄にても無二御座一、驕奢至極に付、諸役人皆々致二憤鬱一、精も出不レ申候、比日松平伊豆守殿何事やらん御用の儀被二申談一候へば、御自分は尻首にて物云樣成人にて候と申候、豆州御用被二相仕廻一候て、側へねじより私申候事は尻首にて申樣成者と被二仰聞一候、平生共に尻首にて物申たる覺は無二御座一候、別て御用の筋に左樣之儀不二存寄一儀にて御座候旨、急度被二申出一候處、是は手前申誤不圖申たる口上に候間、御免候へとの申樣にて事濟申候、斯樣の儀共居多の旨被二仰聞一候、此間も中川執事と同樣に相聞申候、式部殿不恭綏怠比日は別て甚敷罷成候、安藝守樣、前田伊豆守殿なども宰相樣御家にて、終に見不レ申風體の者に候とて、御噂散々の旨帶刀殿御申聞候、御客前にても手懷御座候、斯樣の仕形にて却て私共は腹をすへかね申候、扨は先生へ私寸志申上候は、御老中の儀など被二仰上一候時は、是非共御封印を以御上被レ成候樣仕度候、兵庫殿とても俗腸の人の儀、其上和泉守殿と內證は一致の人にて候も難レ計御座候、「君不レ密則失レ臣、幾事不レ密則害レ成」と申戒も御座候、第一は上の御爲、第二は先生の御爲かと奉レ存候、向後御伺被レ成とも、封事に被レ成候樣にと乍レ恐申上候處、當時の風俗には封密の儀も時宜に不レ叶候旨被二仰聞一候、紙面にても申

上、私は憂喜相交候と申上候へば、御返事別紙の通に御座候

一　先生被二仰聞一候は、兵庫殿此紙面一覽にて、御色欲の儀と御大酒との儀は、不レ入儀に存候、元來外聞にては左樣に申候共、嘗て兩樣共各氣遣候程の儀は無二御座一候、御酒などには中々御大酒は不レ被レ遊候旨被二申聞一候に付、左樣に御座候へば、別て恐悦の儀と奉レ存候、御身の上御覺無二御座一候へば、猶更御養生の御心附とも罷成候故、只此まゝ指上申度旨申述候處、即刻被二差上一候、奉行の一段は兎角何とも不レ被レ申候へ共、氣に不レ入顏色に相見申候、暫有て御一覽被レ遊候間、可二罷歸一との儀にて退申候、又被レ仰候は此日荻生惣七御前へ被レ爲レ召候由、講釋は不レ仕旨に候、惣右衛門弟にて異學の徒に候若此等申述候儀を御信用も被レ遊候樣に罷成候はゞ、最早賴は無レ之候とて、御憂色相見申候、私申上候は、紀州に七年か被レ成二御座一候內、紀國には伊藤仁齋が弟子共數輩可レ有レ之候、學寮迄被二仰付一候、然は必仁齋學流を御用可レ被レ遊候とて、源藏兄弟を始、彼徒時を得候樣申候處、終に御一言も仁齋が學問の類に及不レ申候由承及候、御聰明の程も知申樣に奉レ存候、此一事は別て天命に預申儀と奉レ存候、必しも御憂慮被レ成間敷旨申上候

一　十五日帶刀殿話、長門守樣御家中騷動先一鎭譯立申候、此日近藤主計御直に申上度事有之旨申候得共、去晦日御目見被二仰付一候以後、一度も御逢不レ被レ成候、斯樣候ては何共譯立不レ申旨申候處、不時の間と申候て、三間に五六間の土藏の內に窟室を御構、其內へ御入候て、誰々も不二罷越一候旨何も申

候、主計申候は其内へ可二罷越一は、不レ應二御意一御手討に被レ成候て其分に候由申候て、三ヶ條紙面に相調罷越申候、其三ヶ條は、御家中へ月俸可レ被二渡下一事、町人共へ御拂方可レ被レ下候事、三月へ入候はゞ早速御發駕可レ被レ成候事、此外は何も不二申上一候旨にて、押付其内へ入申候、紙面の趣被二仰渡一可レ被レ下候、若御聞屆難レ被レ成候はゞ如何樣にも被二仰付一可レ被レ下旨、直に申上候處、三ヶ條共如何樣とも主計取計可レ申旨被二仰聞一候間、退出仕、即御家中の者とも呼集、月俸被レ下候旨申渡、町人共も召集、去る暮御拂方滯候處能相勤候、此度不レ殘相渡候旨申聞候、扨三月六日、九日の內御發駕被レ成候旨申渡候、是にて事濟申候、扨は戶倉善佐私宅へ參申聞候、比日水野和泉守殿へ致二參上一候處、長門守樣御家中の樣子、幷御發駕の儀御尋被レ成候て被二仰聞一候は、何とも合點不レ參樣子にて、御本家の油斷に候、宰相殿より如何樣にも被二申付一、其上にも譯立不レ申候はゞ、隱居御願、舍弟の內被レ立候ても事濟申儀に候、如何樣子承候哉と御尋、何とも可二申上一樣無二御座一候、御自分樣へ可レ有二御尋一旨候、其心得候樣申候、とかく斯樣の時分罷越候事、不レ入事と存候て相扣、不二罷越一候旨御申聞候、其後承候へば安藤對馬守殿より聞番呼に參候て、參勤交代の儀は大切成事候、去冬の儀は雪中にも罷成候故、御願も聞へ申候、最早二月にも及申候、早速歸鄕被レ成可レ然旨、御申渡候趣有レ之旨に御座候

右窟室の事は、去夏比より下の申慣、土藏と築山とは俄出來、此方樣より見へ申候、暮合には長門守樣御羽織掛にて、小坊主二三人御供にて其上へ御あがり被レ成、四方を御詠候體相見申候、此所を

不時の間と申候旨、其内に幾日も被レ成二御座一候旨、御料理人も罷越候事成不レ申候、何者か何を揃

進上仕候哉、一圓御食事の樣子も知不レ申旨申候、以上

二月十八日　　青地藤太夫

右三冊の紙面一冊に書記、只今進覽仕候、以上

二月廿二日　　禮幹　再拜

右御返事御別紙の寫

向後封事可レ然の旨是又得二其意一奉レ存候、是等の事當地の時宜に叶不レ申候、只今迄有馬殿など執達の事に封事と申儀は無レ之候、とかく見合候て如何樣とも可レ仕候、此事執達の以後いまた登城不レ仕候、侍講も無レ之候、如何樣の樣子と奉レ存候、兎角二三日中には總體の善惡は相知可レ申、一二事の善惡にては難レ決候、以上

二月十九日

昨日先生へ得二御意一候、彌御堅固被レ成二御座一候、廿九日御侍講被二仰付一、未被レ講前、此間は久く御聞不レ被レ遊候、御内所御隙入共有レ之旨、御直の上意にて御座候、二月二日御講釋之後、長福樣餘程御氣色御滯被レ遊、且又小次郎樣御袋樣御病死等にて、御懈怠被レ遊候事に相聞申候、扨御講談畢御退出可レ有レ之と相成候處、色々上意共多く有レ之、大形一時計御前に御座候て、御次の衆も久敷御咄被レ遊

候と申程に御座候、御書物の儀にては無レ之種々御尋の事共御座候旨、去四日急度仕候旨諫疏御上被レ成候後、初て被レ爲レ召候儀故、如何可レ有二御座一候哉と、先生も被二思召一、私も御樣子如何と奉レ存候處、右の御樣子奉二安堵一候事に御座候、以上

三月二日　　禮幹

武藤庄十郎殿男子兩人有レ之候、一門廣き人にて千石計づゝの衆へ、養子入用にて次男を方々より養子に望候へ共、異姓の事故同心無レ之、何方へも不レ遣候、扨次男へ申聞候樣は、其方事何某〳〵より貰申度との儀に候へ共、我等は存候はたとひ一萬石取候方にても、養子に參取候は、知行取に參候と申ものに候、先祖の心より見給候はゞ、悅被レ申間敷と存候、我苗名を以令名を顯し候はゞ、先祖の心に叶可レ申樣存候、乍レ然人々の心得有レ之ものに候へば、其方心得次第とも存候、如何と被レ申候へば、次男も外へ養子に罷越申志無レ之旨、被レ申候て悅被レ申候旨、斯樣の儀迄心附無欲の者に御座候、御聞置候樣にと兵庫頭殿へ御咄被レ成候旨、先生被二仰聞一候　（禮幹　三月廿六日書中）

當廿二日岩松樣御供の內、頭分幷御抱守へ御饗應の後に、式部殿を以御目錄被レ下候、茨木（イ荻原）覺左誘引にて被二罷出一候、私は御馳走に懸り、其席に罷在候故、引しざり罷在候、右目錄御渡候節、前後共何も急度平伏仕、御禮をも被二申上一候處、終に手さへつき不レ被レ申御禮は無二御座一候、扨御目錄數通故、人々交名をものり付に致し候を、其儒御渡置候心覺故、せめて殿付にても候へば、堪忍仕にても可レ

有レ之候處、左樣にも無レ之段々不興成事と奉レ存候、醫師も兩人罷越候處、私少々挨拶仕り、小札は自分の心覺に候故取放申筈に候處、取込にて其儘に仕置候、是にて御取可ニ被一成哉と申候へば、其心得の旨申候、但頃日御横目前田源兵衛、高田善太夫兩人を、以外𠮟被レ申候旨、其趣などは大臣の器量有レ之樣に相聞申候、兩人罷出申候は當月へ入御門外へ罷出候者、甚多相見申候、頭分無ニ油斷一申聞候體候へ共止不レ申候、少し各樣より急度其心得仕候樣、頭支配迄被ニ仰聞一候はゞ、御締にも可ニ罷成一樣奉レ存候旨申述候處、各は一圓合點不レ參事迄を被レ申候、總て御横目の第一に可ニ心得一事は拔け候て、左樣の瑣細の事迄に被ニ心附一候、御內心の儀に斯樣に長詰に候へば、氣欝も可レ仕候間、爲ニ步行一罷出候事も可レ有レ之候、御近習の者共は御指圖にて罷出候品も候樣に承及候、惡所等へ參不レ宜筋有レ之儀は、人人の不覺悟に候へば、頭支配承候とても可レ仕樣は有レ之間敷候、左樣の者有レ之候爲に、御門の出入差止候儀有レ之間敷事に候、各勤方の儀に付ては、此方より可ニ申入一と存候所に候、樣子次第御聞にも可レ奉レ達と存候旨被レ申候付、如何樣の思召寄に候哉と相尋候へば、前月廿一日廿六日御能等有レ之節、各兩人御部屋へ兩御横目間ゝなく見物人不作法に無レ之樣とて、殊外の世話に相見へ申候、其樣子には達、手前共見物の席へ御近習の御小性中のみならず、御居間方の坊主共打交、始終見物仕候、此儀は一言のさしひきも見へ不レ申、兩御方樣付の面々始、狩野本阿彌等迄も、見物仕罷在候處、外見に如何可レ存候哉、見苦敷樣存候、斯樣の重立候處御心附無レ之候て、瑣細の儀迄何庬被レ申候故、一圓勤方合

點不レ參候旨被レ申候由、次にて承候者申聞候、若驕泰にて被レ申儀に候へば、彌如何にて御座候へ共、いづれに尤に相聞申候、斯樣の儀にても候哉、當廿一日御能の節は、表御小性幷坊主類は、表に付申候、但其日は御構の樣子違候故にても御座候哉、表と奥とのしきりとて、竹にて欄かんを張申候て、通路成不レ申候處、是も此度は止申候、（右同斷）

當朔日安藝守樣、大内記殿、幷備後守樣も御出合有レ之、御密談の品、誰可レ存樣は尤も無二御座一候旨先便にも申上候通り御座候、然處比日潜に承及び候儀御座候、是は聞番も手前にて、外より相聞候趣に御座候、水野和泉守殿前月末、大内記殿へ被二申入一候は、御手前は加賀守殿へ心安く被二罷越一候、御用の筋なども被二申通一候間申達候、此の度國許へ御暇被レ下候前日、若狹守殿を以て御願の品紙面を以被二仰聞一候、諸太夫闕人の儀も御願被レ成候、此の趣同役何も承知難レ仕候、拙子事は御心安筋有レ之候に付、存し寄申入候、加州の事は安房山城兩諸大夫有レ之以來、其筈の處致二中絶一候、就レ夫宰相殿いまだ中將の時、常憲院樣上意を以て、向後諸大夫兩人被二仰渡一候、四人に成候儀は、常憲院樣御成の時、格別の趣きを以被二仰付一候、此趣に候へば、四人の數は當分の儀にて、闕人は其儘にても可レ有レ之候へ共、只今迄段々連綿も仕候、此の度の事御暇被二仰渡一候時分、御願に付時節も不レ宜、其上迚極月ならでは叙爵難レ成候其內御隱居被レ成候へば、彌諸大夫の闕は御願不レ及事に存じ候、然れは御扣も可レ被レ成歟、但一生隱居無レ之例も候へば、御隱居の趣に不二罷成一候はゞ、諸大夫の闕御願置も可レ然候、此

両様の内に被レ成候様御申達可レ有レ之候、右の通りには存候へ共、拙子存寄には御隠居御願可レ宜様存候、若狭守殿年齢と申し、國の仕置可レ然儀に候、且又宰相殿近年御病氣御養生も有レ之、御暇被ニ仰出一候ても御願候て、在府被レ成候、去年參府御禮も名代にて相濟み、終に一度之登城も無レ之、御暇被レ下候、然らは養生に候へども、本腹の期も無レ之事に候、今年又爲ニ養生一滯府御願も如何候はんや、去年在府中責て一度登城有レ之、御玄關前迄成共被ニ罷出一、行歩不ニ相叶一是迄にて退出などゝ申す趣にも候はゞ可レ宜事と、拙子などは存じ候、諸大名の手本に罷成候宰相殿に候へば、格別の儀に候、外の衆にては年若く候ても、隠居可レ被ニ仰付一事に候、左候はゞ旁御隠居御願可レ宜存候旨御申含みの旨、當九日戸田山城守殿御用番に付き、湯原甚左衛門を以被ニ仰遣一候は、得ニ御意一申述度儀御座候に付、十一日、十二日、十三日の內、御透き次第罷越申度候、但今以所勞不レ宜殊に長座難レ成候間、松平安藝守殿を以て申上度候、御隙可レ被ニ仰聞一旨被ニ仰遣一候處、何も隙に罷在候條、御勝手次第安藝守殿御出候様可レ被レ成旨申來候、昨日北川久兵衛を以て御書を藝州様迄被レ遣候へば、十二日に山城守殿へ御越可レ被レ成旨御返答にも申し來候、多分右の趣にても可レ有レ之哉と申候、安藝守様十五日御發駕の筈に付、十三日に御餞別に此方へ御出の筈に御座候

一　備後守様、京都へ御寄の御願は難レ叶候間、御願不レ被レ成候、岐岨路通今朝御發駕被レ成候、昨夕御餞別に此方へ被レ成ニ御座一候

一　長門守樣又爲ニ御養生一御滯府の儀、此日六郷主馬殿を以御願の處、其通に被ニ仰出一候

四月十一日　　　　　　　　　　　　　青地藤太夫

別紙大密事申上候、尤御覽後御火中可レ被レ下候、安藝守樣彌昨十二日山城守殿へ御越被レ成、爰元へは御用人甲田舍人を以、御書被レ進尤御答書被レ遣候、定て彼一件にて可レ有ニ御座一候、何とぞ御首尾好樣に仕度事と、乍レ恐奉レ存候

四月十三日　　　　　　　　　　　　　同　人

兼山秘策第六册終

兼山秘策第七册

起享保八年至十年

廿日に六郷主馬殿御招、本多帶刀殿相伴にて御料理出で申し候、帶刀殿御歸りの節、御申聞候は、御

隱居御願御内意の分は、安藝守殿にて相濟み申し候、近々表向より御願紙面主馬殿を以て御上被レ成度候、就レ夫御文言長く罷成不レ宜候間、松平大隅守殿家督の節、薩摩守殿御願紙面の趣き宜き方に候間、其の紙面の寫御入用候間、御才覺候樣に御意御座候由、幸主馬殿大隅守殿へ被レ參候ゆゑ、寫取り可二指上一との儀に御座候旨、潜に被二申聞一候、昨廿二日主馬殿御出有レ之、右寫封印にて被二差出一候體に承り及び申候、被二罷歸一候節左兵衛殿に挨拶、御隱居御願の御書付廿四日に御渡被レ成、廿五日指上申筈に候、若御成候へば廿六日に上申筈に候、恐悦の儀と存候旨被レ申候處、左兵衛殿大きに御よわり被レ成、御障無二御座一候節御苦勞に奉レ存候と迄に被レ仰候由、則私へも被二仰聞一恐悦の至奉レ存候、町中には誰穩密可レ仕樣は無二御座一候故、今月中上使を以御隱居被二仰出一候筈と先頃より申慣候、段々御吉左右可二申上一候

一　駒ヶ原御狩の樣子、御承知被レ遊、御鑓、鐵砲にて五ッ御留め被レ成候儀、古今武家にても稀成る事に思召候旨、御尤奉レ存候、頃日護持院跡の、空地へ御成り御鷹狩御つかひ被レ遊候節、一ッ橋御門の御番所にて、御燒飯可レ被二召上一旨にて俄に被レ爲レ入候、疊除り不レ宜に付、毛氈二三枚敷き候樣に被レ成二御座一、被二召上一候、其の御廻り御番所傍の鐵砲御自身御取被レ遊候へば、さび候までにても無レ之、火の口處を貫錢よりにてくゝり有レ之候、御覽被レ成、脇へ御捨て置き被レ成候由、當番の方殊の外迷惑の體にて、則日御近習まで罷り出て御噂も有レ之候哉、御近習衆へ被二相伺一候とこそ、曾て何の御

噂も無レ之旨被レ申候由、乍レ然其の日より武具御改みがき餝り直し候、諸方へも移り其の通りに申し ケ樣には候へども、先生には潛に御歎息共多く御座候、頓て金子野(コガネノ)と申し、當地より七里餘有レ之候處に、御狩御催しに御座候由、御一宿の筈に御座候旨、ケ樣に禽荒し有レ之候ては、自餘の事も無二御心許一候、聚斂の臣多く指し出で候方に罷り成り候、如レ此に候ては、貞觀政要の方は遠々しく罷り成り候筈、氣の毒成る事と被レ仰候、學問博識にてさへ正路の方へ參り申すは稀に相見へ申し候、然らば御不學と申し候、此日の儀に候て、御歎息に御座候、「一薛居州獨如宋王何」と申儀候へば、尤成事に奉レ存候、然ども宜方は多相見へ申候、一昨廿一日松平左近將監殿御老中被二仰付一候、是は最前和泉守と申方、只今迄大坂御城代にて三十八歲に御成御座候、其の日紀州、水戸兩御家へ安藤對馬守殿不時に上使として御越被レ成候、水戸樣聞番より御老中可レ被二仰付一御內意にて可レ有レ之との御沙汰に候旨申來候、人々も左樣申候、乍レ然一統には左樣の趣にては無二御座一、上使御老中被二仰付一候以後の儀に御座候、且又安藤殿御老中に被二仰付一候時分、分て御三家へ上使も無二御座一候、是は何とぞ重き御用の品にて可レ有レ之と申候何とぞ〱此方樣御隱居の節、黃門に被レ爲レ移御內談にても候かと、成らぬまでも奉レ願事に御座候

一 今日俄に飯高重兵衞殿御招の處、八ッ半時過御出にて御對顏被レ遊候、私當番にて前後御使に罷出御口上等申述候、廿五日御上可レ被レ遊候御紙面の御相談と相見へ申候、殊の外御手振ひ被レ遊候に

付、御印章にて御上被レ遊度趣の體に御座候、其御例も有レ之旨にて御座候、今日は朝より御肩御痛被レ遊候に付御灸被レ成候、夫にて御宜敷御對顔も被レ遊候御樣子に御座候、一段御機嫌克御樣子奉二恐悅一候、段々御慶事ども可二申上一候、以上

四月廿三日夜　　青地藤太夫

藏人樣

御願書に付御印章に相極申候、但御添紙面にて御手振ひ申趣御調可レ被レ遊候哉、又は御肩書に可レ被レ遊哉との趣、昨日主馬殿まで石黒太郎左衛門を以被二仰達一、尤御書も參申候、主馬殿御返答の趣、御眼疾故御印章被レ遊候趣、御調被レ遊可レ然旨御申上候、御手振ひ申儀は御當分の御事故、不レ入樣子に御申上候體に相聞申候、昨日は御書付到來不レ仕候、今晝までには出來爲レ持可レ被レ遣候間、廿六日朝山城守殿へ御持參被レ成可レ被レ下、兼て今朝御待も可レ被レ成哉も爲レ念被二仰述一候趣を、太郎左衛門より主馬殿取次迄御紙面申達候樣に被二仰出一候、定て今日中被レ爲レ進候にて可レ有二御座一候、恐悅の至御同然奉レ存候但表向被二仰出一候品にては無二御座一候故、人々乍二存知一口外不レ仕候、甚御意得可レ被レ遊候、御印章俄に昨日御細工人共三人仕人々彫申候旨に御座候、段々御吉左右共可二申上一候、御火中

四月廿五日　　青地藤太夫

藏人樣

昨廿五日御願書付大河原彌左衞門を以主馬殿へ被レ遣候今朝主馬殿御上被レ成候、俄に此方へ御出御料理等も出申候、武藤左兵衞明廿七日當地發足の筈に御座候、段々御吉左右可二申上一候、以上

四月廿六日　青地藤太夫

藏人樣

御願の筋未何の御沙汰も無二御座一候、御吉左右次第に富田主税御國へ可レ被レ遣旨廿七日御内意被二仰出一候旨に御座候、總て此度の御願表向にても御返答、又は御口上書御帳には其譯相知候へ共、第一嗣君へは終に不レ被二仰進一由慥成人の物語承知仕候、玄蕃殿、内藏助殿も聊御聞無レ之故、御風を受候てひそ／＼と申候て、誰も口外不レ仕樣に仕候、如何の儀に候哉、右衞門督樣、長門守樣へは御直書を以被二仰達一、備後守樣へは御飛脚を以被二仰遣一候、何とぞ／＼中納言御拜任の樣にと日々奉レ待儀に御座候、定て爰元の御樣子日夜御左右御待可レ被レ遊と奉レ存候

五月朔日　青地藤太夫

藏人樣

昨日帶刀殿に懸二御目一候、御隱居御願の内に備後守樣へ三萬石新開の内不二存寄一御事に候、玄蕃殿は行步惡敷候故、御目見御願被レ成間敷旨、其外少々の事共承り申處も御座候へども不レ能二一二一候、帶刀殿と承申儀人々へ咄候ては互に不レ可レ然事故、聊口外不レ仕候、以上

五月二日

長州樣久々秋まて直に御滯留の御願、近々被ニ仰上ー候筈に爰元へも被ニ仰進ー候、先頃主馬殿取次被レ申候中々もはや誰も御使可ニ相勤ーとは被レ申間敷旨兩帶刀殿被レ申候、如何罷成候事に御座候哉、近藤主計、小塚將監兩人は御舍弟樣の內御家督候樣、達て爰元樣へも申上候處、富山に罷在候御家老ども餘り殘念奉レ存候間、一度御歸被レ成其上の儀に仕度被レ申候由、此兩端相公樣次第に可レ仕と伺候へば、富山の者ども申趣可レ然思召候との御事にて、いまだ譯立不レ申候旨、是は帶刀殿咄にて承候

五月三日　　青地藤太夫

藏人樣

今朝五時過若狹守樣御登城爲ニ御名代ー右衞門督樣御登城の處、於ニ御座間ー御兩方樣御一所にて被レ爲召、相公樣御隱居御願の通、若狹守樣御家督無ニ相違ー御直被ニ仰渡ー候、其頃右衞門督樣御直被ニ仰上ー候、恐悅の至御同前に奉レ存候、主稅は明後日頃發出候趣に承及申候、京へは吉野善八、安藝へは大村傳藏、會津へは御大小性の內高知にて可レ有レ之體に御座候、此趣は誰も不レ承事達可レ申も不レ知候、私にても可レ有レ之哉と無ニ御心元ー候半と先申上置候、以上

五月十九日　　青地藤太夫

藏人樣

佐藤故五郎左衞門弟子の內菅野彥兵衞と申者、御城下講堂を建候て、輕きもの共集め敎授仕度所願御座候へども、宅地も借可レ申樣無二御座一候、本庄の末六萬と申邊にて三百坪計の地御貸被レ下候はゞ、自分に講堂を構、射藝、御術迄も此處にて稽古仕候樣仕度奉レ存候趣に紙面に調目安箱に入置候處、町奉行今月十一日被二仰渡一、彥左衞門儀奉行所に罷出、願の趣被二承屆一候樣に被二仰出一候、彥兵衞願の趣委細承屆被二申上一候處奇特被二思召一候、六萬と申處は事の外程遠く候間、近き所にて屋敷貸遣候樣に被二仰出一、新大橋の向にて三百坪計の地借地相叶申候、且又追ては敎授候樣子次第、場所も御替竹木等も可レ被レ下候旨被二仰渡一、不二存寄一仕合に成申候、但其身學才指ての儀にて無二御座一候、佐藤氏へ就學仕候も二三年計の儀に御座候、彥兵衞內存は、其身にては信仰の者有レ之間敷候、佐藤は同學にて名望も有レ之候間、三宅丹次郎を以講師に可レ仕と存寄候に付其趣申談候處、丹次郎曾て同心無レ之、老後の儀旁難二罷出一旨申候由、是は前廉內談にも可レ及の處、少彥兵衞疎末に候旨先生被レ仰候、射御の儀は彥兵衞心安仕候內に弓の上手博勞に馬の上手有レ之、其兩人弟子共取立申望有レ之申合儀に御座候旨、箇樣の事どもに候へば、末々とても指て願有レ之程の儀にも有レ之間敷かと、是も先生被二仰聞一候、以上

五月六日

右彥兵衞樣子聞番廻狀にも十一日に申來候旨、今日久々にて駿河臺へ參上仕御尋申上候へば、被二仰聞一候趣に御座候、論語御講日にて拾人計聽衆有レ之外の事承不レ申、前月は一度も御侍講無レ之候、以上

五月六日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　青地藤太夫

藏人樣

昨九日内々御願被二仰上一の趣は町飛脚に早々申上候、追て飛脚も參候條先達て御承知可レ被レ遊と奉レ察候、昨夜成瀨内藏助殿若狹守樣御前へ被レ爲レ召、御普爲聽私共へも可二申聞一旨被二仰出一、四ツ時過罷出奉二承知一候、委細の儀は被二仰出一も無二御座一候、昨晝帶刀殿に賴候て右衞門督樣へ御尋被レ成候樣申談候處、追て被二仰聞一候趣有增左の通に御座候、御座の間へ右衞門督樣、若狹守樣御一所に被レ爲レ召、先右衞門督樣上意の趣加賀守隱居願の通三家へも相達候、則隱居被二仰渡一候間目出度思召候、數十年來國許の仕置宜敷家中無二異議一候、此上猶更若狹守家督後見有レ之樣に被二思召一候へども、久々御逢不レ被レ遊候、隱居の後とても痛所宜敷候節、何時によらず登城有レ之候樣被レ遊度候、養生簡要に思召候、此旨宜敷可二申達一旨御諚に御座候、若狹守樣へ加賀守隱居願に付家督無二相違一被二仰付一目出度被二思召一候、加賀守數年國許仕置等宜敷候條、猶更無二油斷一仕置の儀御心懸可レ被レ成との趣御諚に御座候旨、定て少々の相違可レ有二御座一候へ共、私承受申趣如レ此に御座候、恐悅至極の御事御同然奉レ存候、猶御座の間御直に被二仰渡一候と申儀は、御三家の外は陸奧薩摩も無レ之由、尾張大納言樣御隱居の時分の御樣子にて御吸物出不レ申候迄に御座候、右衞門督樣も御名代故初て御座の間へ御入被レ成候と被レ仰候由、右御樣子に候へば向後相公樣御同格の御事と相見へ申候

一　昨夜富田甚五右衛門、庄田五左衛門、中村吉兵衛、三人今般御兩公樣御獻上物等の儀可二相勤一候、伊藤平太夫富田主稅、水越三右衛門三人今般年寄中被レ爲レ召候に付、其御小屋等の儀主付可二相勤一候、間番三人今般御用猶更精入間合等可二相勤一旨被二仰渡一候、以上

五月十日　　青地藤太夫

藏人樣

一　若狹守樣十五日御登城如レ常御大廣間へ御着座被レ成候處、御目付御出今日より於二御黑書院一御目見の儀に候間、是へ御越候樣にと御挨拶に付、松ノ御廊下迄御越被レ成候處へ、大目付橫田備中守殿內藤日向守殿兩人御出、今日より宰相樣只今迄の御部屋へ御入被レ成候樣御指圖に付其通に被レ遊候、御歸以後尤相公樣へ被二仰上一、御三家並御一同樣方へ御普爲聽(フイテウ)被二仰遣一候、帶刀殿話に承候へば、御黑書院御禮の儀事の外重き品に付於二御前一可レ被二仰渡一哉との趣候處、是式の儀に候へば左樣の品には及間敷旨、御老中迄被二仰出一右の通に御座候、相公樣も元祿二年八月より始て於二御黑書院一御禮被二仰上一候、然處此度などはなんてもなき事と申位の御首尾に付、殿中にても諸人目も付替候旨に御座候、恐悅の至に奉レ存候

一　先生昨十七日も御侍講後良久敷御前被レ成二御座一候、御懇の上意迄も被レ蒙候旨先刻被二仰下一候、如何樣の御樣子に候哉、追て委細可二申上一候、以上

寺地權太夫

五月十八日

藏人樣

密啓御家督の後相公樣御前へ御出被レ成、此度御願に付御隱居被　仰出二私御家督相續被　仰渡一難レ有儀思召候、萬端不功に御座候間尤相寬候て相勤度被二思召一、殊に御仕置方の儀は無二覺束一候故、只今まてよりは切々御前へも罷出、御指圖御受被レ成度旨被二仰上一候處、何時によらず御出被レ成御伺可レ被レ成候、御仕置方無二覺束一被二思召一候儀尤に思召候、但御仕置の筋は御代々御違も有レ之、年寄中の手前に格も有レ之相寬可レ申候、夫とも何事に不レ依御伺被レ成候はゞ御指圖可レ被レ遊旨御意の旨、又重て御家督の御儀相濟候はゞ、御老中を始候て段々御振舞も可レ有レ之候、左候へば只今の御書院等跡略にて如何に候間、御造作の儀は思召の通如何樣とも被二仰付一候樣にと思召候旨被二仰出一候處一々奉レ畏候、但御書院等の儀先年以來、將軍宣下の御饗應さへ相濟申候間、少も手痞申儀無二御座一候、御家督の儀重き事に候へども御私用に候へば、只此儘にて御修復被レ成候て可レ宜と思召候旨御請被二仰上一候旨

一　當十五日八ッ時分林大內記殿、御城より直に參上於二御居間書院一御對顏候節、半藏、半太夫並のもの共拜見候處、大內記殿直に少御用の筋に候條何れも被二相控一候樣にと挨拶に付御人拂に成申候、何御用に候哉譯可レ存樣無二御座一候處、頃日潜に承及候筋御座候間申上候、內記殿被二申上一候趣は、今朝御前へ罷出候處、上意には若狹守、加賀守同事に於二黑書院一目見申渡候儀遲からぬ事に候得共、若狹守

殿は成立宜しく格別に思召候故、萬事加賀守同事に被二仰付一候、此儀其方罷越加賀守へ可二申聞一との上意に付參上仕候との趣御座候旨、誠以何も〱恐悦至極の儀に奉レ存候、大切の儀ながら憚成人潜に被二申聞一候、誰へも口外不レ仕約束にて承知仕候へども、恐悦の餘り潛に申上候、以上

五月十八日　　　靑地藤太夫

今度御隱居御願の砌橘隆庵へ御意被レ成候は、三年以前隱居の儀井上河內守殿迄申達置候處、未不レ遲儀に候間見合可レ申旨に付指控罷在候、今般は戶田山城守殿迄松平安藝守を以申達候處、相願候樣にとの事に付彌奉レ願候、次第に行步不自由其外痛處多有レ之候間、もはや交代御難儀可レ有レ之と存候の旨被レ仰候、御交代難レ被レ遊との趣は御國にて御隱居と思召候哉、但江戶表に御隱居可レ被レ遊との儀に候哉、其趣は何とも御意無レ之旨隆庵先生へ御物語の旨御話に候

一　伊勢屋吉兵衞話近年諸國へ被二仰出一和書の遺篇段々御搜索被レ遊候、御國よりは法曹類林全部類聚國史の內等被二指上一候、其外國々より多上り候處、林大學頭父子に被二仰付一眞僞爲二御正一被レ遊候て、林家より實書の極候て被レ出上にて相極り候、御文庫に納り申候、然處林家父子正本と極候て指上の內にも、僞作と見へ申物有レ之候、僞書に極候て指上申內に眞本と相見申物有レ之候、上にも御不審難レ晴候に付、三月傳奏衆中院大納言殿等參府の刻御近習御右筆下田幸太夫と申人學問有レ之、箇樣の儀心得申方に付此人に御書物等御渡、高家中條山城守殿へ指添被レ遣候て、眞僞の處被二聞召一度被二仰遣一候

處、傳奏衆しかと難レ辨候間、歸京の後何も僉議仕候て、其上に可二申上一との趣にて一圓譯立不レ申候、實は中院殿初何も和學無レ之、眞僞見定申程の識鑑も無レ之故と相見へ申候、然處山城守殿幸太夫へ御申聞候は、拙子心安仕候者に羽倉齋宮と申者有レ之候、是は京都稻荷社人に候處、神職は弟へ讓其身は隱逸仕折節當地へ罷出只今も參居申候、此者殊の外和學に委敷、僉議相極居申者に候是に御問合候てはは如何可レ有レ之候哉と內談被レ申候、其段達二上聞一候處、則山城守宅にて致二參會一爲二吟味一候樣に被二仰出一、每日〳〵校讐も有レ之、林家より極被レ上候內大半相違有レ之其趣申上候、法曹類林一部は眞本に相極申候、就レ中三代格並類聚國史の內に眞僞甚見やすく、一度齋宮辨決仕候へば誰も合點參申事に候、三代格は全部眞本と林家申上候處、其內にも後人の書加へ證據には、三代格曰云々と有レ之處に御座候、是にて相知申候儀の旨申候、御前より被二仰出一候は、大學頭能年にて箇樣妄成儀共申上置候、兼て御不審被二思召一候、今の大學頭召寄、幸太夫引合承屆候樣に有馬兵庫頭殿迄被二仰出一候、其通に被二承屆一候處父子共御請不分明成事共にて、此趣にては難二申上一候間紙面を以可二申上一由に罷成候、其砌兵庫頭殿幸太夫へ被レ申候は、拙子共不學文盲にてさへ能合點參候儀に候處、大內記父子箇樣に迄胡亂に仕置候て、極申事は如何の儀と噂有レ之候處、幸太夫申候は、私共も內々其儀を不審に存如何と申儀に御座候、あまりの儀に是程の書も讀得不レ申かと申事に御座候旨申候處、今の大學頭立聞仕罷在、其儘其席へ罷出、幸太夫推參成事を申候、拙子家柄にて相極置候を指出候て善惡を申上

候のみならず、是程の物を讀申間敷とは過言至極して、以の外聲高に罷成申候、幸太夫申候は、成程御噂を申過言に及申儀は紛無レ之候、御自分父子箇樣に僞作紛無レ之物を、眞本全きものと極被レ上候儀は如何の存寄に候哉と申候へば、三代格全部取揃御喜悦に思召候、是にて相濟候樣に思召候旨にて御渡被レ成候ものを、我等方にて全無ニ御座一候旨申上候へば、疵に罷成、御喜悦被レ遊候御邪魔に罷成申候、夫故眞本全無ニ相違一と申上置候旨被レ申候處へ、御近習衆被ニ罷出一何事を聲高に口論仕候哉との儀に付、幸太夫有增申上候へども、全部被ニ思召一候旨被ニ仰出一候處左樣に不レ存旨申上候へば、疵に成申との趣は相控不ニ申上一候、追て父子共不念至極の儀申上候以來、證據にも罷成候事に候處、如レ此申上置候誤書付可ニ指上一旨被ニ仰出一候て書付被ニ指上一候、此後林家の極不レ被ニ仰付一、羽倉頃日迄逗留大半直僞相辨申上候、御家より上り候法曹類林は眞本全書紛なく存候旨申候、林家眞本を申上候は大半常々心安贔負に存候衆より上り申分は僉議も無レ之、眞本と極置申候、皆利德の方にて極申沙汰に付、散々の樣子に御座候旨吉兵衛申候、先生若御聞不レ被レ成候哉、御尋申上候へば則頃日幸太夫直に御聞被レ成候旨被ニ仰聞一候、以上

五月廿六日　　青地藤太夫

藏人樣

六月十四日六鄉主馬殿御招、於ニ御居間書院一御對顏、本多帶刀殿も被ニ罷出一候、主馬殿を以御老中へ

可レ被二仰達一趣、御隱居御禮之節、相公樣には松平肥前守、若狹守樣には加賀守と御改稱被レ成度、且又酒井攝津守樣へ御婚禮の儀八月中御極被レ成候、此旨可レ被二仰達一旨御覺書御渡被レ遊候旨、右御改稱の儀先頃間番を以御伺被レ成候趣に候、小松宰相と御稱し被レ成度旨候處、小松御住居相定候上にては可レ然候、御先代も小松中納言と被レ稱候て公儀に被二仰上一候舊例も候哉、先早速今般の御禮被二仰上一、御稱號の儀は如何樣にも追て可レ成事に候旨申來候由、御先代の舊例可レ有レ之候へ共、年久敷事に付、其時分の留帳は加州に有レ之、御急用に難レ立候間、左候はゞ松雲軒と可レ被レ稱哉の旨御窺の處、三位の參議等に此稱號には不相當に可レ有レ之旨申來候、依レ之主馬殿を以表向より右の通被二仰達一候歟の事

一　若狹守樣御登城の節御供御家老七人、本多安房守、横山監物、奥村內記、今枝民部、津田玄蕃、成瀨內藏助、中川式部先達被二仰達一候處、玄蕃式部病氣に付兩人減申候、但玄蕃嫡子刑部爲二名代一登城候樣被レ遊度、此度御國より被二召寄一候段被二仰達一候處此者難レ成候、惣て病氣に付名代と申儀御直參にて、畢竟病氣本復の時重て御目見可レ仕筈に候へば、名代を以御禮と申上候、陪臣の儀は其時に當り人高を以の儀に候、最初拾人と被二仰達一候へば、其人には違候ても十人の數は不レ苦候、此度七人と被二仰上一候內、兩人難二罷出一候ても、獻上物は御納戶へ納り候へば、七人の員數に闕は無二御座一候、然らば名代と申す儀は難レ成候旨申來候、且又七人の內民部乘物の儀難レ成候、只分迄乘用前田近江守、奥村伊豫守、本多圖書、前田修理、玉井勘解由以上拾壹人にて候、其上に民部加り候へば拾貳

人に罷成候、元來拾人の處唯今迄壹人過有レ之候趣に候故難レ調樣子に申來候、重て被二仰遣一候は以後に若狹守樣御願候爲にも候間、此方樣御家並には乘物何挺御免と申儀被二仰聞一候樣被レ成度候、何挺と申員數も御存知無レ之候故、臨時御願も不都合に有レ之、如何に候と申趣被二仰達一候處、乘物員數何程抔と申儀は、役筋の儀に付難二申入一候、其時分可レ有二指圖一趣に申來候、依レ之勘解由長病にてはや江戶へ不二罷出一候間、勘解由代り民部乘用仕候樣被レ成度旨被二仰達一候處、致二承知一候旨申來候由

一　十五日晚景御用番より聞番被二召寄一相公樣、肥前守、少將樣、加賀守御願の通被二仰出一候旨、且又民部乘用も其通の旨申來候、以上

六月十六日　　　青地藤太夫

藏人樣

一　當十八日公儀御役人衆一統御加俸被二仰付一候、則別紙相調懸二御目一候、（耳聞錄載レ之）御代々にも前世にも不二承及一事に奉レ存候、是も根有レ之儀に御座候、日外先生に御尋にも御書記御上被レ成候內に、一件是にて御座候、目禮等の內官錄相應の儀明細に御書上被レ成候、御當時の儀も被二仰上一候條と被二仰付一候、御側衆も淨圓院樣御付人にも聊以無二御親疎一御定と相見、別て〳〵奉二感稱一候、此上は先生へ早速御加恩にても有レ之樣にも風說申候、此紙面例の衆へ御迴し可レ被レ下候、尤金澤中に流布は可レ仕候得共、右の趣は外に可レ存樣無二御座候一、潛に御物語可レ被レ遊候

一 今般は御禮大形十八九日の內にて可レ有レ之とて、十七日には萬端不レ殘御內習相濟申候、其內安房守殿以下御供の衆御老中若年寄衆へ御禮御勤の趣相極申候、安房守殿以下五人一列太刀目錄自身持參其外も同格と間番も申達候、御家老衆も共通に有レ之決定仕候、私は八ッ時より詰番故其砌樣子も不レ承候、翌十八日朝番にて罷歸候處、途中へ坂井伊平太罷越し、御使にては無二御座一候、篠井氏など申談私へ迄內談罷越候、昨日御僉議にていづれも樣御同列に相極申候、房州樣思召は先達て私へも被二仰聞一萬端昔の樣にとは可レ有レ之樣も無二御座一候、大形の儀は當時の例に御心得被レ成候旨被二仰聞一候、此度僉議も其心得に付御先格は違候へ共、其分に被レ成候由、御歸被レ成候ても被レ仰候由、乍レ然德昌院樣の時と違申迄にても無二御座一候、安房守殿御叙爵の節、御老中御勤共違申儀に付、私は如何存候哉內證申聞度伊平太差越候由、源五右衛門も被レ申候旨にて罷越申候樣子承届候へば、御老中方以下へ御勤の節、德昌院樣は御壹人分立間番も相副御勤、近江守殿以下は不レ殘一列に御勤、御太刀目錄も先達て使者を以被レ遣、近江守殿以下は自分持參にて是にて亦間番相副申候、御叙爵の時は勿論御壹人に付、如二先例一使者を以被レ遣跡より御勤に御座候、如何可二相心得一哉と申候故、私立歸間番中に承合候處、甚十郞甚八へ罷在候て被二申聞一候は、十七日御僉議の節、一圓此先例不レ存控帳にも無二御座一候故、御僉議次第御一列にも申談候、右の趣候へば、只舊例の通先達て御使者にて被レ遣可レ然候、但間番今一人罷越儀は決て難レ成候、少將樣御供に壹人御獻上物納候處へ、一人屆罷越、壹人殘候は年寄衆御誘引仕

候、若從ニ御前一御使番にても御出被レ成候へば相調候へ共、其儀は此方より難ニ申上一旨被ニ申聞一候に付、先御使者を以御勤の譯は相濟申候、內藏助殿前へ罷出右の趣申述、聞番中存寄も申述候得ば、あなた方にも舊例御存知無レ之、十七日の趣に申談候、聞番存寄の通に彌可ニ申談一候、安房守殿御壹人立御勤無レ之候ても一列に御勤にて、却て並と違申品も知可レ申旨被ニ仰聞一候、私存寄候は、安房守殿には左樣にて宜有レ之候へ共、監物殿以下各別に相見申處如何敷ものに奉レ存候間、何卒御窺被レ成聞番加人出候樣に被レ成度ものに奉レ存候、私御使番相勤候內、聞番不足の時相勤申事も有レ之旨申述候、其段御承知被レ成候間、內藏助殿より御伺可レ被レ成旨被ニ仰聞一候故、則其趣伊平太を以申上置候、十八日右の趣共達ニ御聽一候處、本多の家は以前御暇被レ下候時分、御馬迄も被レ下候家に候へ共、段々末に罷成候故御舊例もぬけ申候、せめて右の樣成儀にても、先格の通すたり不レ申樣仕可レ然旨被ニ仰出一、彌其通に罷成、依レ之御目錄も獻上の外は名乘無ニ御座一候事舊例に御座候、此度御右筆所にも一統に名乘記し申候、是も十八日に不レ殘書改被レ申候、御壹人立御勤の儀は、翌日頃內藏助殿御伺被レ成候處、聞番加人は從ニ御前一可レ被ニ仰付一候間、彌八日立被ニ相勤一候樣に被ニ仰出一、何も角も譯立申候、御玄關前御供の衆儀も、委細聞番衆へ申談上下供兩人に談置候、隨分御首尾も宜敷御座候可レ安ニ尊意一候、此趣圖書殿加藤次殿主水殿へ被ニ仰上一可レ被レ下候、以ニ別紙一不レ得ニ申上一候、以上

六月廿一日　青地藤太夫

藏人樣

廿六日先生話、今度酒井讃岐守殿大坂へ發出候、前日松田善三郎方へ兵庫頭殿より直に手紙を以尋に參候は、其方事大坂へ供に罷越候哉、若又當地に罷在候哉承度事に候間可二申越一旨申來候、善三郎儀今度御息金十郎殿の傅に被二申付一、悴某を大坂へ供に被二申付一、善三郎禮遇も厚く家老並に御申付候、兵庫頭殿へは從レ是御請可二申上一旨申遣候間如何樣に可二申遣一哉、讃岐守殿へ相尋候へば、右之品委敷申遣候儀は不レ入事に付、少用事御座候て當地に相殘罷在候と、申遣候樣に被二申渡一候故其通申遣候、其後兵庫頭殿より申來候は、留主に罷在候儀に候はゞ折々相招講釋承候樣に可レ有レ之候、其意得有レ之候て、此趣讃岐守殿へ申進置候樣に可レ仕旨申來候、此樣子兵庫頭殿御自分の御用には不二相聞一候、子細有レ之體に御座候、去年以來善三郎へ御尋の趣御請の樣子承事にて、上にも能學者と思召被レ成御座レ候樣子に御座候、江戶中荻生惣右衛門以下多有レ之儒者共候へ共、壹人も御脊顧の儀は無二御座一候處、善三郎事は武藤庄十郎師匠學術の宜敷處を御慕被レ遊候儀、御英明の程も奉レ察候儀に御座候旨被 仰聞、右金十郎殿今年九歲に成被レ申、聰明成事驚申咄御座候間申上候、讃岐守殿未當地に御座候內、四月頃或日善三郎方へ庄三郎殿被二罷越一咄被レ罷二在一候內雷鳴强仕候、善三郎申候は、此雷にては御子息機嫌伺に可二罷出一事に御座候、乍レ殘念二御歸被レ下候樣に申入候、庄三郎殿も尤とて被二罷歸一候、倅罷出候得は金十郎殿門の者へ御申付御上屋敷へ使を以御樣子伺可レ然旨自身心付にて即刻申渡候、其使輕き役の

者に申付候樣子被レ承候てヶ樣の時分御樣子を伺候には、重き物を以伺候て委敷承候て可二罷越一事に候迚、自身人指を被レ致候て重者罷越候、九歳にてヶ樣の儀は珍敷事と善三郎迫て庄三郎殿へ物語仕候

一　中根權七事一兩日以前壹人扶持に金壹兩加增被二申付一、長屋之內へ老母引越致二養育一候程の部屋被二貸渡一候に付、近々浦賀へ老母迎罷越候旨御座候、先一段に奉レ存候、此恩惠程の儀も、此度五千石に被二成下一、候故と相聞候

一　先生御宅地の內へ又櫻田團藏と申者罷越、自分に三四疊敷許の居所を構學問仕候、去頃申上候幸田庄太郞と兩人に罷成候、皆萩原源左衞門殿部下の者共と相見申候、權七程には未二相見一候、先生御爲には御邪魔の方にも可レ有二御座一候へ共、又宜敷事共も御座候、御家僕も多相見用心にも能御座候、誠所レ謂「所レ處成レ聚」と申類に御座候、以上

六月廿四日　　　靑地藤太夫

大地新八郞樣

御手紙拜見、彌御堅固御勤被レ成珍重奉レ存候、昨日小川作左衞門へ傳附仕候一紙御返し受取申候、內落申處へ御貼子被二成下一被レ入二御念一忝存候、是は本地の高に引合其役の定祿と相見申候、國元にて大身の者と同役罷成難儀の者も有レ之候處、向後一同に罷成儀と奉レ存候、此以後は役替にて領地の增も有レ之候て、其後預候て死去候へば、又本祿になり申つもりに御座候、乍レ恐御尤成儀と奉レ存候、唯今

迄本祿に役料合候ては、此度の御定にて少々減じ申人も有之候故、如何奉存候處に、昨日承候へば、唯今迄取來候は其分に被成向後は此格に被成候段被仰渡候由承申候、彌結構成儀奉存候、只今より三倍二倍に被成候人も多く有之、箇樣にては小身成者にても器量次第に進み、其役を去り候へば本祿に返り申格に罷成候故、人材を御擧用も自由に相成申候、御前代の樣に寵遇にて獨立候て、世祿を增候樣成事は此以後先は無之候、其も其人に德行など有之、特恩の人は各別にて可有之奉存候、萬々期貴面候、以上

六月廿一日　　鳩巣

浚新兄　拜復

追而御側衆の定祿存の外少く御座候、是も御前代などは各別と奉存候、兎角英傑の所爲と奉存候、其に付ても千歳の遺恨と奉存候、以上

廿八日御家督御禮の時分、爲御名代伊豆守殿御出の儀、是は御側衆へ上意有之候て右衛門督樣相止候由、其趣は御隱居の節は相公樣重候て先に被仰渡候、御禮の儀は名代と有之候へば家來にても其通の趣に御座候、其故御禮の時分は少將樣重候て先に被仰上候、依之此度は少將樣迄上意も御座候由、是にて譯聞へ候樣に奉存候

一　玄蕃殿式部殿獻上物は納り申筈に御座候處、其日に罷成病人にて御目見不申上候故、難納旨に

て相返り申候、彌以氣の毒成ものに御座候

一　先日申上候小松宰相と御調被㆑遊候事、其後林家父子六郷殿等へ被㆑遣候に、又加賀宰相と御調被㆑遊候由、如何の御樣子と不審に奉㆑存候、承合候處聞番を以先日申上候通御老中迄被㆓仰達㆒候處、兎角小松御住居以後の事に被㆑成可㆑然候、未㆑達㆓上聞㆒内に御座候間、先御無用と申趣に申來候由承及申候、以上

七月三日　　青地藤太夫

藏人樣

先日房州公潛に被㆓仰聞㆒候は、私同役の内に苦々敷樣子の儀有㆑之候、苦をまくり可㆑申候、但なき寢入にも成可㆑申かと被㆑仰候、近頃無㆓心許㆒樣子故追て御尋申上度候へ共、左樣の透も無㆓御座㆒候、先日帶刀殿にて只御相手向に罷在候故、先日被㆑仰候事は誰と申上候事は遠慮に御座候、當地の儀に御座候哉、金澤の事に御座候哉、夫迄被㆓仰聞㆒可㆑被㆑下と申上候へ共何とも不㆑被㆓仰聞㆒、人持の内にも有㆑之と迄被㆓仰聞㆒候、左候へば金澤の事に御座候哉、御聞及の趣は無㆓御座㆒候哉、偖其後帶刀殿へ潛に御尋被㆑成候樣に申置候處、帶刀殿御尋候へ共尤外の事に被㆑成不㆑被㆑仰候旨、但一事奇妙の事御座候、今般從㆓相公樣㆒少將樣に御親筆を以御家督初に候へば、被㆓召仕㆒候者共の内或は御取立被㆑成度、御加增役替等も被㆓仰付㆒度者候はゞ其段可㆑被㆓仰上㆒候、又は御奉公の樣子不㆑可㆑然者は急度被㆓仰付㆒候

樣にも可レ有レ之候、兎角賞罰の儀御心付可レ被レ遊との趣被二仰進一候處、其御請に御奉公の樣子不レ可レ然思召候は、中村吉郎兵衞第一番に御座候旨、帶刀殿物語にて濟に承申候、然ば當地の儀にても御座候哉、此人仕形の事は先達て申上候通一圓難二心得一事共、但心有レ之者共氣の毒奉レ存罷在候は、多分は十分宜敷者と思召可レ被レ成二御座一候、此處苦々敷奉レ存罷在候處、右申上候趣に候へば恐悅至極奉レ存候、中川執事は御病氣、左候へば是皆當公御幸の內にても可レ有二御座一候、御火中被レ遊可レ被レ下候以上

七月三日　　青地藤太夫

藏人樣

被レ陳書御上被レ成候以後、目安の內に何者にて候哉、水野執政の儀を丁ど先生被二仰上一候趣を相調、其上散々惡敷相調入置候處、其書付の姓名は御切拔被レ成泉州へ被レ下候由、泉州殊の外迷惑にて、其後我等のこまり候者は只々儒者共にて候と申儀を度々御つぶやき被レ申候旨風說の旨先生御物語に御座候、右の被レ遊樣にては猶賴母敷奉レ存候處、久々御侍講も被レ廢候儀は何とやらん御疎斥の氣味にも候哉と、私方より御尋申上候へば、何れに御あきの方にも可レ有レ之候、大臣を論候者は一旦宜敷樣にても、後來疎斥せられ候ものと被レ仰候、七月下つかたの御物語に御座候、乍レ然八月以來は折々侍講も御座候、當四日は御退出候處へ兵庫殿を以色々御尋も有レ之體、愛元樣の儀など有レ之旨私へも被二仰下一候故、則昨日三通迄紙面も上申候、昨夜は御夜は御朱章にて被二返下一御挨拶も被二仰出一則申上候、以上

九月八日　禮　幹

八月十一日雜司谷へ御鷹野に被レ爲レ成候刻、松平右京大夫殿屋敷の邊御通の處、原八彌居屋敷の前にて、八彌布上下着用直訴申上候旨申候、御徒目付見付扣候て直訴は御停止御大法の旨申候て、御目付大久保市郎右衞門へ被二相達一候、市郎右衞門御供に付則若年寄大久保長門守殿へ相達候、長門守殿承屆候へば一封の紙面差上候旨申候、直訴御停止に候へ共、先紙面は請取置候旨被二申聞一候、還御の後入二上覽一候歟、追て市郎右衞門迄被二仰出一候、御直參の輩直訴御停止の儀は權現樣以來御大法に候、其子細は其々頭支配人有レ之候へば、其頭其支配へ相達候へば指上申儀に候、但八彌事は不案內にて左樣の御大法も不レ存箇樣に仕候哉、若は乍レ存箇樣仕候哉承屆候樣被二仰出一、則市郎右衞門宅へ召寄被二承屆一候處、八彌申候は、權現樣以來御大法の儀能奉レ存候、總て御法度の儀は常々心懸承知仕候、此度寸志申上候品中々頭共へ相達候共可レ經二上覽一樣には不レ奉レ存候、左候へば本意も達不レ申、御大法を背候も覺悟の儀に御座候、如何樣に被二仰付一候とも、其段は御怨に可レ奉レ存候樣は無二御座一候旨申候、此段奉レ達二上聞一候處先閉門可二申付一旨被二仰出一候、只今は閉門仕候、如何樣の儀申上候哉、其段は尤不二相知一候へ共、寸志申上候旨申候へば、御爲に可二罷成一事にて可レ有レ之旨先生被レ仰候、幼少より學問の志有レ之、十八才の時先生も一度招請被レ申御越被レ成候、今年貳拾四五歲と御覺被レ成候、爲レ人も宜敷實體篤實の人品に相見申候旨御物語に御座候、以上

十月二日　禮幹

私侍講の事御聞及の通、七月晦日以後御沙汰なく候處、前月四日俄に被レ爲レ召御用被二仰付一候、即日侍講も被二仰付一、同月九日御禮式過候て及レ晩右の御用の物相調持參候所其日又侍講被二仰付一候、同月晦日又被レ爲レ召御用被二仰付一、其日侍講被二仰付一候、右御用は五常五倫を假名にて解候て上ケ可レ申旨に御座候、隨分短く候て能聞候樣に可レ仕旨御座候、九日に五常は濟し指上候處、晦日侍講の時分能聞へ候旨御直に御意にて御座候、則其日五倫をも右の通に可レ仕旨是又御直に被二仰渡一候、只今案じ見申候、假名にて隨分短く御好に候故申達しがたく致二難儀一候、大方是も濟し申候、是を追て藤太夫殿より御寫し可レ被レ進候間、御覽可レ被レ成候

一　去年より酒井攝津守殿へ折節參候て論語を講じ申候、大學は相濟申候、是は左衛門尉殿より去年私へ被二仰付一、攝津守殿へ何とぞ月に五六度も參り候樣被レ成度旨御賴に御座候、唯今高倉屋敷講釋其外御用も有レ之候間度々には罷成間敷候、御近所にも候間月に二三度は參上、可レ仕旨許諾仕候、此通の首尾にて參候處に、其後懈怠のみにて不二申來一候、攝津守殿只今御年若に候故第一御嫌と見へ申候、頭は加藤大貳と申家老を殘置被レ申候て、左衛門尉殿は御在所へ御越し被レ成候、大貳は佐藤五郎左衛門に書を承候て學文有レ之と見へ申候、其故攝津守殿學文の爲來春迄殘し置可レ申由に御座候、先頃左衛門尉殿御發駕前に御婚儀相濟申、以後學文大貳申入候へ共沙汰無レ之に付、左衛門尉殿へ急度申入候

由、左衛門尉殿より近習者を使に攝津守殿へ學問御心懸薄く候間、此後不㆑絶私方へ申遣候て講釋承られ候樣にとの儀に候由、頃日大貳方より內證申聞せ候、左衛門尉殿御賴の儀にて已に許諾致候へば、月に三四度は申來候はば可㆑參心得にて候、其も遠方に候へば難㆑成儀へ共程近にも候、其上あなたより駕籠供の人共に迎越被㆑申候へば行步の勞も無㆑之、只惜くは攝津守殿學文御嫌其上曾て下地無㆑之候間畢竟埒明申間敷候、家老何も學を好み候故左衛門尉殿へ進め申と見へ申候、其上左衛門尉殿も先年常憲院樣御代奧に御詰候時分、御不學にて御難儀被㆑成候由、依㆑之て攝津守殿には何卒學文被㆑成候樣にと被㆑申候由に御座候、右嚴父の命又は家老共の異見にて御難儀乍講釋御聞候體に見へ、折節講中眠も見申候、重ては急度可㆓申入㆒か共存候へ共先見合申候て罷在候、右樣の儀申入候て答有㆑之樣子に候へば申甲斐も有㆑之候、中々其所には及申程には無㆑之候、餘程氣の毒事と奉㆑存候、唯今は其御家御婚家にも候へば別て殘念共可㆑申候、不㆑入儀乍ふと存付候間申進候、御覽の後火中可㆑被㆑成候、以上

十月九日　室　新助

青地藏人樣

追て申上候、五月中御家督御祝詞申上候に付六月中貴報致㆓拜見㆒候、御返報共に候間一々再言不㆓申上㆒候、其內安積覺兵衛事被㆓仰下㆒候、其後覺兵衛閉門御免被㆑成役儀等無㆓相違㆒、此上の仕合奉㆑存候、覺兵衛嫡子不覺悟者にて水戶に遊女町有㆑之、遊女を盜み其外惡事共發覺仕候、同類も歷々

の子共有レ之、五六人親類へ御預被レ成候、死罪に究候樣に申候處追放被二仰付一、親共は無二別儀一御免被レ成候、其內覺兵衛事は學者の儀に候處常々子の不覺悟を不レ存候段似合不レ申旨別て水戸殿思召不レ宜候、去年先公中納言殿神主、始て水戸にて御祖廟へ奉納の時分萬端覺兵衛指圖の筈にて御廟へ未明に罷越申處、刻限取違殊の外遲參にて家老中其外御供の人々先へ罷越相待候へ共、以の外遲く不首尾至極にて候、其段御耳に立候て其時分も遠慮被二仰付一候、其上にて又嫡子の事出來散々の儀に候へ共先御免にて如レ前勤候て此上の珍重奉レ存候、當地保田縫殿と申候て四五千石取申人有レ之候、幼少にて當春死去跡斷絕仕候、此祖父越前守と申子無レ之候故水戸御家來佐藤伊兵衛と申者の兄內記と申者を養子に仕候、然處に其後實子出來候、其節辭し去可レ申物に御座候、如何の儀に候哉其儘保田を名乘候て彼家に養はれ罷在候、越前守實子名は覺不レ申其も致二早世一、縫殿致二相續一申候、越前妻は西山中納言殿御姪子の由、寡婦に罷成おせう院と被レ申候、此人の側に遣候女中を縫殿家來の中に緣組、右內記取持候處に相違の儀にて、右家來內記を討候て立のき申候、是により內記弟伊兵衛水戸を暇もらひ兄の讐をねらひ申候、曾て右敵を見知り不レ申候由、見知申下人を案內に致し方々廻り候由にて近き者に候由、本望達候へかしと奉レ存候、水戸殿にも伊兵衛は歷々の者に候處、右家來輕者に候へば、何とぞ被レ成樣も可レ有レ之かと色々僉議も有レ之と聞候へ共、いかにしても喧嘩の事にて候へば、公儀へ被二仰上一御尋と申筋も不二罷成一、暇を被レ下候其時分安積佐藤兩人同時に

難儀出來候て、何も笑止成事に御座候處先覺兵衛は事濟申候、右の喧嘩以後追付縫殿は死去斷絶に
及申候、屋敷は御弓町にて、本郷御屋敷御近所にて頃日五六人に渡り申候、移替申世と奉存候、以上

各樣御眷顧不レ淺候間、私侍講の首尾御聞被レ成度可二思召一と奉レ存候間、有增任レ筆候、前月四日御用有レ之由にて、有馬兵庫頭殿より申來登城仕候處、仁義禮智信の五字を頭へ置候て、和字にて其儀を二行宛解し申を掛物に仕候を、兵庫頭殿被二携出一候て如何存候哉と被レ申候故、手跡も能餘程古く相見申候、定て堂上方より出申物にても可レ有レ之奉レ存候、何も尤成事には候へ共、五常の譯すきと違申候、仁義禮智にはづれ申道理は無レ之候へども、各其筋有レ之候事に候處に、仁の下に斷申儀も、禮に似申候、義の下に斷申儀も智に混申候、五常の譯をとくと合點不レ仕者の仕たる物に相見へ申旨申上候へば、私に五常を如レ此手短く假名書仕候て指上申候樣にと被二仰出一候、私申上候には、此通短く申候ては中々申取り難く奉レ存候、何程荒く申述候にも假名の儀に候へば、是より餘程長く可二罷成一奉レ存候旨申上候へば、是より少長く候ても不レ苦由に候故、兎角調見可レ申旨申上候處、追付御前へ被二召出如レ例貞觀政要の講濟候て膝行退出の節、上意有レ之候故相控候處に、右五常のかな書の事被二仰出一候て、古來五常の儀を和歌などに讀置申は無レ之哉御尋に御座候、終に見及不レ申旨申候處に、私事は和歌をも好み申樣御聞被レ遊候、堂上方などへ承申儀も有レ之哉と御意に候故、左樣の儀は終に無レ之由申上候處、公家にては學文有レ之者誰と承候哉御意に候故、野々宮中納言殿學才有レ之候樣に

承及申候、唯今死去にて御座候、唯今は近衛前攝政殿御學文有レ之候樣に承申候、御文章なども少々見申候處、餘程の御學力と奉レ存候旨申上候處、其外に承不レ申哉と御尋候故、其外には未レ承候由申上候、偖公家にも儒者など寄合候て、學文詮議仕候樣成事も有レ之候哉と御意に候故、委細の儀は不レ奉レ存候、伊藤源助と申老儒京都に有レ之候、只今は相果申候、此者公家へも罷趣、堂上方に弟子も有レ之候樣に承候旨申上候へば、源助事は御聞及被レ遊候、如何の學文に候哉と御尋に候ゆへ、私申上候は、人物は宜敷ものゝ樣に承申候、學問は異學と被レ存候旨申候處、何とて左樣に存候哉と御意に候故、和漢ともに古來程子朱子を用申候處、源助事は自分の見を以程朱を譏り申候、兎角學文は程朱の學を正統と仕事に御座候、明の中比王陽明出申候て、朱子を譏り申候て一分に見を立申候、夫より唐(カラ)にても異見申者も有レ之候へ共、何れも皆一旦ははやり申候へども、畢竟は程朱に歸し申候由申上候へば、陽明が學はいか樣の事に候哉、朱子とは如何の違にて候哉、たとへば大學の明明德の事など朱子と陽明との相違をそれにて只今申候樣にと御意御座候故、私申上候は、事長き儀に御座候間唯今有增を申上候、朱子の說は明德と申すものは、聖人愚人共に天より受候て替儀は無レ之候へ共、聖人より以下は氣質人欲と申もの有レ之候て明德を昏まし申候、唯今是を明に仕べく候はゞ、善の善たる道理を窮め、惡の惡たる道理を窮候て、善惡の筋を委敷存知候て、さて私欲を去り元來の明に復り申に御座候、其故致知格物を最初の工夫に仕申候、致知格物と申は念慮の上より言行の上に至迄、事々

物々の上にて其理を窮め我知を盡し申儀に御座候、然處に陽明申候は、人ごとに明德具り候へば、事物の上にて一々究申に及不レ申候、左樣に仕候はゞ却て外に心はせ候て實を失可レ申候、只私欲をさへ去り申候へば、自然と明德は明に罷成候間、千萬專らに私欲をさり申修行にて候由申候、ちよと承候處は手短にて尤成樣にきこへ申候へ共、昨今平人の上にて頭より私欲を去り可レ申と存候ても、道理の筋を明に不レ存候ては、私欲と存ながらも道理に力なく候て、中々除申餘事罷成間敷奉レ存候、朱子の學に從ひ候て義理の筋を明に仕候はゞ、次第に道理を見付申候處慥に罷成候て、私欲を去り申儀も可二罷成一奉レ存候、先大略朱子陽明の相違此處にて御座候由申上候處、得と御合點不レ被レ遊御樣子に御座候故、私重て申上候は、明二明德一は陽明が申樣に修行仕候ても、少しは功を得可レ申候へ共、新レ民の工夫に罷成候ては、天下國家の事其事に即て一々其理を明に不レ仕候て、只私欲を去り申工夫ばかりにては如在なしに、ひたと道理に違可レ申と奉レ存候、新民も本來明德の內に御座候へば、新民の事相違有レ之候はゞ、明德も實は未レ明と申物に御座候旨申上候へば、其にて御得心被レ成たる御樣子に御座候、其後は御意も絕間有レ之候故見合候て、其儘御前を罷立申候

一　是より前に侍講の時分、鄭の國亡び申事を齊桓公鄭の父老に被レ尋候處、鄭の君善を善とし惡を惡とする故に亡び申旨申候、桓公不審被レ致候へば、父老されば善を善として用る事不レ能、惡を惡として去る事不レ能故に亡び申候旨申候、此處を講じ申時分、私申上候は、總じて古來名人の言はうらを

申儀有ㇾ之候、うらを申は必意味有ㇾ之物に御座候、是とは事違ひ申儀に候へ共、世に申傳候は、大猷院様御時伊豆守御右筆に御用の事に付調させ候時分、急ぐ事に候間靜に調候へと申候、急事に候間はやく書候へと可ㇾ申處を、却て靜に書候へと申事うらを申候て、殊の外意味有ㇾ之儀と奉ㇾ存候、總て上の御用と申候ては、誰もあつく油斷は不ㇾ仕候、然處に上に立申もの、權柄にまかせ候て急に迫り申付候へば、いとゞ心せき不㆓存寄㆒不調法仕出し申候、其處を伊豆守能致㆓合點㆒候て、急御用に候間靜に書候へと申候は、御祐筆の氣を落付申爲に御座候、早く急に調候へと申候はゞ、書損ひ又は落字など仕に究り申候、然れば調直し申候故却て遲く罷成候、物かゝせ申候に限り不ㇾ申、萬事此會得可ㇾ有儀に御座候へば、右伊豆守申候名言と奉ㇾ存候、總て急事には靜に申付候筈と奉ㇾ存候、唯今鄭の父老が申事も、善を惡て惡を好候故亡び申と可ㇾ申處を其うらを申候、善を善と不ㇾ知惡を惡としらずして、善を不ㇾ用惡を不ㇾ去とは不ㇾ知故に候故、もし知候はゞ善を用ひ惡を去り、可ㇾ申と賴も有ㇾ之候、善を善として不ㇾ用、惡を惡として不ㇾ去候へば、もはや賴も無ㇾ之、其處を桓公へ可ㇾ申と存候て殊に如ㇾ此よしを申候、是亦意味有ㇾ之儀と奉ㇾ存候、是は少有ㇾ爲而申上候儀に御座候

一　九日重陽の御禮衆退出以後、右五常の假名書調差上申候、直に又侍講被㆓仰付㆒、右假名書御好み有ㇾ之取りて罷歸候

一　晦日右假名書改差上候處に、御前へ被㆓召出㆒かな書能聞へ候樣に被㆓思召㆒候、迚もの儀五倫をも

此通に調可ニ申上一旨御意に御座候、奉レ畏候旨直に御請申上候、以後直に侍講被レ仰付一候、權萬紀李仁發と申者群臣の非を太宗へ申上候、太宗是を御悦にてひたと御近付群臣の事を御聞候、房玄齡が事などをも申上候、其故群臣危懼仕候て氣レ毒に存候へ共、誰も申上候者無レ之候處、例の魏徵身を捨候て申上候に付、右兩人を御遠ざけ被レ成候由、此處を講じ申候、私申上候には、通鑑其外歷史を以中國歷代の治亂を考申候處、創業の君は何れも能御座候、二三代を經候へば上の威光次第に強く罷成下へ遠く罷成故、執權の人々自然と威勢つき申候て中にて取はからひ申事、多くは上へはよろしき樣に申上候故下情通じ不レ申、總て有體に知れ不レ申候、其故日々に國政敗れ候て、終には衰亂に及申事何も其通に相見申候、然る處に太宗其處をよく御合點被レ成候て下へ近く被レ成、諫言を御容何事も下へいはせ御聞被レ成候故、天下の事有體に知れ、中にてまぎらかし申儀透と不ニ罷成一候、貞觀に太平を被レ致候は第一是故と奉レ存候、然共物は一得一失と申儀有レ之、太宗の下言を御採用御尤成事には候へ共、其に付下より權萬紀如き小人上の御好みを致ニ合點一、群臣の事をむざと申上候、太宗も一段重寶に被ニ思召一候、魏徵不ニ申上一候はゞ如何の害に可ニ罷成一も不レ存候、總て役人は其職を身に引受候て始終を考候て相勤申故、一旦の料簡にては難レ計候、當分は不レ可レ然樣に見へ申儀も有レ之候へども、末を考へて仕儀も每々有レ之候、然處を傍より一旦の了簡を以何角と是非仕候はゞ、上へ申上候ては諸役人さし足に能成物に御座候、是又甚不レ可レ然儀に御座候、魏徵申上候處至極と奉レ存候旨申上候、是も少

有レ爲而の言にて御座候、此間の講義大略如レ此御座候、此外も御察可レ被レ成候、如何樣少補には可レ罷成一と奉レ存候、只恨くは此方に誠の上を感動する事無レ之、只解說のみに候故其効無レ之筈と奉レ存候

一　去月廿二日曹司谷へ御成の時分、小石川御成道にて原八彌と申候て父は長右衛門と申候て私も知人にて候、八彌も長右衛門時分彼宅へそば切振舞申候て一日參候時分逢申候、當年二十五六の者にて御座候、長右衛門常憲院樣御代桐ノ間に詰申候、其後小普請に罷成此六七年以前病死仕候、右八彌屋敷門前御通の時、麻上下着用仕候て直奏差上申候、御成の時分御通り路は家の門を公儀の御徒衆固め、門內より壹人も出し不レ申候、然處に八彌罷出候故達て差留申候へば、寸志申上度儀有レ之直奏仕候間、左樣に意得候樣に申候、御徒頭土屋平三郎と申候人（是は私兩度出合講釋など聞被レ申候、荻原源左衛門など同事に詰申候）聞屆御目付中へ達候處へ、右直奏御目付請取にて指二上之一申候、其後大久保市郎右衛門と申者御目付の宅へ呼候て、段々御尋の儀も有レ之候由、何を申上候とも存じたる者無レ之候、右八彌は荻原源左衛門と少由緒有レ之候故、八彌近き親類早速源左へ知らせ、其親族の人何事を申上候哉と尋候へば、其儀は申候て不レ人物に候間申事不二罷成一候、兎角自身の儀にても無レ之、又人の上を申候儀にても無レ之候、只寸志有レ之候て申上候儀に候由八彌申由に候、左候へば何とぞ御政務へ懸り申事にても有レ之候哉、右大久保方にて御尋は、御代々直奏は御停止被二仰出一候、其段を不案內にて不レ存候哉と御尋に候處、八彌申上候は、成程其段能存罷在候、然共頭へ申入候ては中々取次申間敷と存候故、存切候て一命を捨申上候、如何

樣に被仰付候ても毛頭御恨に不奉存候由、申上候事は知不申候、先は隨分落着き宜しく相見へ候由申候、其後閉門被仰付候、是は御法度背き申候故先斯樣有之筈に御座候、申上候事忠義に御座候はゞ、畢竟は宜敷可有之候由申候、以上

十月九日　　　　室　新　助

奥村源左衞門樣

青　地　藏　人　樣

其外例の面々

一原八彌殿先頃御目付大久保市郞右衞門殿宅にて御尋の時分も、終夜對談有之候處、始終口上作法共に見事成樣子にて御目付衆被感候由、上よりも閉門被仰付候得共、寬に仕置一門共參會可爲致御大法迄に閉門被仰付置候旨被仰出候て、首尾は宜候由先生御物語、世上沙汰にも右の通申候、

一閉門の內御知行被召上候儀は、常憲院樣以來の御法に御座候處、近年は閉門の衆何れも御知行其儘被下候、御知行不被下候ては誰か養當可申候哉と被仰出有之、如此罷成候旨申候、御寬政に御座候

一頃日戶田山城守殿御主付、其下へ黑田豐前守殿御目付小笠原平兵衞殿、並林大內記殿等相加り御用御勤候旨、專ら御儉約の儀被仰出筈に申候、又家中迄も其內に有之樣に申候旨先日帶刀殿被仰聞

候、又或說に先生も御加り被レ成候由風說御座候に付、七日得二御意一御尋申上候處、曾て御加り不レ被レ成候、專ら婚禮の儀式御定候樣御聞傳被レ成候、華麗無レ之樣にと申より儉約の儀も取沙汰仕候歟、御目付小笠原氏被二相加一候ゆ其筋に被二仰聞一候、何れにも左樣の儀御沙汰及申事は恐悅成事に奉レ存候、以上

十一月九日　　青地藤太夫

藏人樣

先日從レ是進候細書御覽被レ成、學友中にも御廻し被レ成候はゞ得二其意一奉レ存候、當月も一度進講の處、講釋前御直に歷史の事など御尋被レ成良久及二問答一候、私並の者など斯樣に御前へ度々罷出御心易被レ遊事、比類無事に御座候へば難レ有仕合奉レ存候、何とぞ其効も有レ之樣に奉レ願候へ共、老夫不才不德の身故存樣に無レ之段氣の毒奉レ存候、其段筆紙には難レ申候、先日五常五倫の假名書被二仰付一候、後後は板にも罷成後世へも傳り可レ申候處、いつ出來候哉、誰が所作に候哉、相知不レ申候てはいかゞに候間、跋を加へ可レ申旨重て被二仰出一候、則撰進候處早速應二御意一候て相濟申候、何事も敏速成事にて少も滯着無レ之候、其故當分御用勤の儀も氣欝仕候事は無レ之候、是は德川の御家風と奉レ存候、此間水戶宰相殿の御樣子承候て驚入申事共に候、當年十八才に御成被レ成候處、御政務等の事透と御聽斷被レ成、家老中など思慮及申事にて無レ之候、其上學を御好み常々經書講釋御聞被レ成候、私甥小池源太左衛門並のもの共侍講相勤申、先日も論語子路衣二敝縕袍一の章を講申候由、講過候て被レ仰候は、今日

の講、人君抔には入不ㇾ申儀と聞へ申候、但講じ申者の心得あるべき事に候、此方などの身にても裝束衣服等の善惡にも構不ㇾ申心得と同事たるべし、此處を講じ可ㇾ申儀に候由被ㇾ仰候由、源太左衛門など驚嘆仕申候、十八才の大人には斯樣の賢識珍敷奉ㇾ存候、何とぞよき輔相を進候はゞ賴敷存に御座候、其外申進度事有ㇾ之候へども、筆紙に難ㇾ盡候間早々如ㇾ此御座候、以上

十月廿四日　　室　新助

青地藏人樣

一　五日先生へ立寄一時計得二貴意一色々御物語ともに御座候、從二公儀一儉約被二仰渡一候事彌御聞被ㇾ成候、慥成事にては曾て無ㇾ之、午年より急度相改り申候筈、各別替り申事の樣に申候由被二仰聞一候、婚禮の儀も入組六ケ敷事に相聞候旨、先生には御加り不ㇾ被ㇾ成候由、御存知無ㇾ之旨被ㇾ仰候

一　菅野彥兵衞講堂存外聽衆も多く御座候、但し佛老の非を甚敷誹り申候て、出家など聽聞に罷出候ても居申事も難ㇾ成程の事にて退出仕候、講堂の床に大懸物をかけ置申候、其繪は衣冠正敷貴人と見へ申者壹人書き、側に沙門に繩をかけ引居、扨又釋迦と阿彌陀の像を泥水へ投入申體を爲ㇾ書置申候由、是は定て守屋大臣にて可ㇾ有ㇾ之候、偖々不ㇾ入事を仕却て害を招き可ㇾ申旨思召の由被ㇾ仰候、石介が五賢一不肖の詩を作り候さへ、范希文は「爲二兒輩一害二吾事一」とやらん申候、不ㇾ入事と奉ㇾ存候

一　本多喜十郞殿御舍弟有ㇾ之樣申慣候處、御妹壹人有ㇾ之迄候旨、夫故か郡山城地は松平紀伊守殿へ

御預、三萬五千石の役高にて在番、外より申來候ば、郡山領の内三萬石御預内壹萬石の役高を以役ニ相勤ニ候筈の旨且又上屋敷御差上、家來共は下屋敷へつぼみ可レ申旨被二仰出一何れも下屋敷へ退散仕候、以上

臘月八日　　　　　　　　　　　　　　　青地藤太夫

藏人樣

菅野彦兵衛事被レ仰候通に奉レ存候、先頃町奉行所へ被二召呼一候て、此度講堂建申事、且又平生常產の儀など委細被二尋一候處に、此度作事は少々田地所持仕候を沽却仕候て建申候、常產の事は、少々門弟共有レ之是等助にも罷成、且又右田地の餘いまだ少々有レ之候故、飢渇及申程の儀も無レ之由御返答申上候由、其以後產に成申筋候はゞ何にても願候樣にと町奉行被レ申候由、其身申候は、右の通にて當分何とぞ暮し候間願事無レ之由申候、然處町屋敷表拾五間奥九間の町屋敷家も有レ之候、本所邊さいぎ町とやらん申所にて被レ下候常產の爲と被二思召一候事と奉レ存候、外に金三拾兩拜領被二仰付一候、其身難レ有儀可レ奉レ存候、陰徳陽報と奉レ存候、道學の爲に田地沽却候て講堂存知候事一器量有レ之者と被レ存候、異端を破し申候も「能言而距二楊墨一」の心たるべく候、碌々たる徒とは不レ存候、いか樣來春に處候はゞ知人にも可二罷成一候と奉レ存候、彼と懇の者頃日參り候て物語り申候、以上

十二月十三日　　　　　　　　　　　　　室　新　助

青地藤太夫樣

享保九年

一　日外申進候原八彌と申直奏申上候者も、頃日知行被㆓召放㆒在鄕へ被㆑遣外へ不㆓罷出㆒引込居候樣に被㆓仰出㆒候、何事を申上候哉相知不㆑申候へ共、兎角御仕置に懸り申儀を寸志を申上候樣人々取沙汰致し候、始終樣子落付此度被㆓仰渡㆒候時分も、少しも動ずる體にても無㆑之とて譽申候、おしき儀に奉㆑存候、閉門被㆓仰付㆒、一往相濟申候處斯樣被㆓仰付㆒候事、又頃日訴狀箱へ壹封入候哉と人々推量仕候、いかゞ候哉憚成事は相知不㆑申候、又去年春時分より私方へ參候内に飯室勝之進と申人有㆑之候、養父は飯室甚五郞と申候て小普請にて候、貳百俵計取申候、若き人には候へ共殊の外篤志に見へ申候、學力は無㆑之候へ共生質勇志にて、養父小身にて勝之進へ用金等もしか〴〵宛行不㆑申候へ共、私共所へ無僕にて木布位の裝束にて被㆑參候、左樣に候處に少も泥無㆑之體に見へ申候、日々武藝並學文に心懸申事無㆓比類㆒樣子に御座候、然ば唯今迄能師も無㆑之、學文に志有㆑之候へ共得と合點不㆑仕處に、私門下に遊候てより格別義理を會得仕り、養父母等に仕へ申を始、朋友等の交接に至候迄前非をさとり申候事、君父の恩にもおとり不㆑申とて老父を殊の外信向に御座候、然處此人養父方の一家に、町野宗八と申候て當年十四五才に罷成申候、父は早世候て祖父の家督を續候て罷在候、祖父は御代官にて御座候、死去仕候時分、一族の中鳥海伊兵衞と申者を宗八後見に賴候て相果申候、此伊兵衞大惡人にて宗八を害し候巧みなど仕候由、其上宗八幼稚の內に町屋敷其外金子なども過分に有㆑之候を己押領

致し申、右宗八母後家に罷成候て永壽院と申て、女中には珍敷程利發者にて、其段を頭へ直參致し訴へ申事毎々に及候故、頭より御內意得申候歟、先年右伊兵衛をば引離し、一門中にて後見可レ仕旨頭より申渡し候と申候、右永壽院は少子細候て兄の方へ參居申候て、宗八と一所に不二罷在一候、是も畢竟は伊兵衛永壽院一所に居申をいやに存候てたくみ申事の由にて、其子細は事長き事にて御座候、然處右の通頭より伊兵衛引離し候故、永壽院宗八方へ罷越一所に罷在候處、伊兵衛宗八祖父遺言にて、宗八と母永壽院一所指置申間敷候由、是は永壽院一度再緣いたし申候事などにて、祖父氣に入不レ申候　其外にも子細有レ之候て、とかく宗八と永壽院母子不通仕候樣にと遺書有レ之候由訴狀箱へ入申候、其故右の遺言をもて永壽院事向後宗八と一所に指置申間敷由若年寄中より御申渡にて、母子不二存寄一事にて互に涕泣仕候體何とも難レ忍候、縱ひ再緣仕候共、斯樣の儀にて祖父氣に入不レ申とも、唯今旣に宗八家督相續仕、現在の母を養ひ不レ申候て別居仕候ては、家督を領し候ても本望に無レ之事にて候、家督を差上候ても此儀は奉レ願度由幼少ながら申候、其上天下の御政務に付ても孝行の筋にも違申儀に候、然處伊兵衛不レ慥遺書を御取上被レ成、母子を義絕候樣との儀御政道の疵にも可二罷成一候間、母子一所に被二差置一可レ被レ下候、私推參成儀申上候はゞ其段は死罪に被二仰付一候ても毛頭御恨に不レ奉レ存候由、勝之進一封差上申候外に、母子も右の願銘々に差上候由、何れも訴狀箱に入申候、數度御僉議の上評定所へ

永壽院、宗八、勝之進其外一類中并伊兵衛被二召出一寺社奉行牧野因幡守殿町奉行一人御目付出合候て、御吟味候樣被二御渡一候、伊兵衛事は遠流、永壽院宗八は無二御構一候間勝手次第

に一所に可罷在候、其外親類中伊兵衛と致一味候者、又は伊兵衛手前より金子など致借用候者など、大勢御吟味候上閉門遠慮の者も有之候、偖勝之進事は訴狀箱に入申候一封、且又評定所におゐて無憚儀共申上候、其に付養父甚五郎に御預被成候、おしこみ置可申候、尤甚五郎家督は此者には被仰付間敷候由被仰渡相濟申候、其後勝之進より私方へ密に壹封差越右の首尾しらせ、本望の通宗八母子一所に被仰付候上は、其身事少も遺恨無之泰然と罷在候、是も私蔭にて候由申越候、右訴狀の内にも御政務の事申上、且又評定所にても當時御政務の非を不憚申上候由に御座候、ちと申過たりと見申候、頃日萩原源左物語にて承候へば、評定所にても此度の事宗八儀にて申上候にても無之候、是を伊兵衛申通に被成候て母子義絶に罷成候ては、三綱の道絶申候などゝ申候由、是又御政道には人才を得申事第一と私存申内に賢人壹人有之候、御尋候はゞ申上度などと申候由、斯樣の儀を承候に過言も有之と奉存候、去共勇義の士に候處、おしき事仕候と不堪嗟嘆候、一兩日以前に勝之進に書通仕度壹封調、本郷御屋敷へ參上の歸に町野宗八宅へ（上野門前廣小路うしろにて）持參仕候へば、永壽院出候て不存寄逢申候、宗八をば勝之進押籠られ候以後、私方へ早々罷越知人に罷成、向後參候て講釋なども承候樣に迚指越申候、此度の事共何共不存體に候、天王聖明臣罪當誅の事など頃日も申遣候、籠居の中隨分愼候樣にと存候、頃日世にも原八彌と飯室勝之進同事迚兩人並稱し申候、兩人共に惜敷事に奉存候

一　菅野彦兵衛事予今不相替講釋仕候て、聽衆も多有之候由に候、如來敎此人は傑出の士とも

可レ申候、終に逢不レ申候故しかとは不レ存候、頃日酒井右衛門尉殿家來旅川彌右衛門と申鑓の師仕候者江戸致ニ發向一申候、地を致ニ拜領一鑓を廣く教申候樣に其場を構申度候由、是又鑓を上覽被レ遊候樣に奉レ願旨訴狀箱へ入置申候、御取上不レ被レ成候由評定所にて被ニ仰渡一候處、再三入申候故左衛門尉殿用人被レ呼候て、右彌右衛門儀左衛門尉へ御渡被レ成候間、外へ出し不レ申候樣にしまり仕候樣との儀にて、頃日妻子引離し在所へ參り申候、散々の沙汰能成申候、是は彥兵衛まねを仕候ての儀と奉レ存候、不料簡者にて御座候、不レ入儀ながら申進候、以上

閏四月廿四日　　室新助

靑地藏人樣

御位牌題書の事被ニ仰下一、御發駕前本多圖書殿より私へ御意得被レ成度候間、所存可ニ申越一候旨御申越被レ成候、神主の儀に候へば、御姓名、御官位等陷中粉面調樣も愚見有レ之候へ共、俗流御位牌の事に候間、御法名御除被レ成候事は成申間敷候、御法名に御姓名等相雜候事いかゞに候間、只俗流に御名御官位計にて被ニ指置一可レ然哉と申進候、其に付參議の事は官位相當不相當にかまひ不レ申、首に題し申筈に御座候、院號の事は法諡にも準し可レ申候、御當家台德院樣以來御院號何も最首に題し有レ之候、是は勿論勅賜に候故にても有レ之候へ共、とかく最首に題し不レ申候ては不レ頓成樣に候間、私存候は、「松雲院故參議從三位行左近衛權中將兼肥前守德翁一齋大居士」一如レ此たるべく哉と申遣候、一兩日前

御屋敷へ參上候へば、圖書殿へ御出懸御目通候故、彌右の通りに申入候、不二存寄一儀御尋被レ成候と奉レ存候處に、長公よりの御紙上にて、さては長公より御伺被レ成候に付及二此儀一申と奉レ存候、此趣長公へ御物語被レ成可レ被レ下候、尤御代々の御牌の格次第には候へ共、御姓名をも元來加へ申度ものに候由先日圖書殿へ面上に申入候、御法名の中へ混し候事不都合如何にも奉レ存候故、不レ入物の樣に申候へ共、跡に能存候得ば、寺に被二指置一候御位牌ながらも、御姓名は有レ之度物かとも奉レ存候、此上は御僉議次第に奉レ存候、以上

七月廿四日　　室　新助

青地藤太夫樣

御位牌御法號御官位等の調樣、御自分の御意得に被レ成度被二思召一候間御尋被レ成候、御書付被レ遣兩樣の內何れ宜敷存候哉、且又官位前後の調樣は有職の人へも御尋被レ成度候、兎角無二遠慮一委曲申上候樣に被レ成度旨、御紙上の趣奉レ得二其意一候、御存の通唐の神主は粉面陷中二重に仕候て、陷中は官姓名等委細に記し、粉面には其稱號抔を記し申事に御座候、法號を神主に記し申儀は無二御座一候、然共此度御尋被レ成候は寺家の位牌の式にて、御寺に被二指置一儀にて可レ有レ之と奉レ存候、左候へば御法號を被二指除一候事は難レ被レ成可レ有二御座一候間、其通に相隨候て、愚案の趣左に申進候

一　御法號を御官位の首に記申儀は其例不承候へ共、日本近來歿後には寺僧の付け申候院號を第一に

當に稱し申儀にて候間、御書付の通御院號を首に置候ても可レ然奉レ存候、御當家台德院樣も御院號を
御官位の上に被レ成候、勿論是は勅賜にて候へば格別の品に御座候得共、是又例共可レ罷成レ儀に奉レ存候

一 參議の事位階の相當不相當に限り不レ申、位署の首に置申例に候由承被申候間、是以御書付の通
可レ然奉レ存候

一 御書付に左近衞中將從三位と有レ之候、此儀有職の事知申人へも承合候處、總て官にても位にても
少も高く候を先に出し申式に御座候、參議とても三位に叙せられ候事は、規摸に仕候儀にて御座候、
況や衞府などは不相當にて別て結構成事に御座候、然ば左近衞中將の下に書候事不レ可レ然奉レ存候、肥
前大守と御書付に有レ之候へ共、是は其儘肥前守に被レ成可レ然奉レ存候
有之通に付愚案の通署申候はば、「松雲院殿故參議從三位左近衞權中將肥前守德翁一齋大居士」、又位署
書法式の通に候へば、「松雲院殿故參議從三位行左近衞權中將兼肥前守德翁一齋大居士」、位階の方官
より高く候へば、官の上に行の字を加へ申例にて御座候、其式職原にも相見申候

一 御實名且又菅原と申儀も調申儀に候哉、御聞被レ成度旨御追て書に被二仰下一候、右に申上候通唐の
神主格に候へば、姓名は字迄も記し申筈に候へ共、此度の儀は御寺に被二指置一候御位牌の儀に候へば
御姓名と御法號と変り申候ては、不レ可レ然奉レ存候間、御無用に被レ成候樣にと乍レ憚奉レ存候

一 神儀と有之候儀僧家に申來候例に御座候はゞ、其通に被レ成可レ然奉レ存候、唐の位牌には官位姓名

等の外神主と書し申筈に御座候、唯今神主と書し申候はゞ、僧家の位牌には少しかたく開へ不都合にも御座候間、神位などと被ㇾ成可ㇾ然哉と奉ㇾ存候、同じ儀ながら神位に仕候へば、常に位牌にも相應仕候樣に奉ㇾ存候、夫ともに僧家に必神儀と仕候例に御座候はゞ、其通に被ㇾ成候とても後難有ㇾ御座間敷奉ㇾ存候

六月十八日　室　新　助

本多圖書樣

御手紙致ㇾ拜見ㇾ候、土用過候ても暑氣未ㇾ除候、彌御淸健御勤被ㇾ成珍重奉ㇾ存候、然ば重て被ㇾ仰下ㇾ候はゞ、別紙御書付の通承知仕候、愚案左に申進候通に御座候

一　加越能三州を被ㇾ領ながら又肥前守に被ㇾ任候事古代其例無ㇾ之儀に御座候故、古今位署等に其例相見不ㇾ申候、只今新規の了簡を以相加候はゞ、則御書付被ㇾ下候通、權中將の下に兼肥前守の上へ書入申外は有ㇾ之間敷奉ㇾ存候、然共乍ㇾ恐私奉ㇾ存候は、三州を被ㇾ領候儀は御代々の儀に御座候、御位牌の儀は其人々の稱號を記し置ものに御座候へば、御官位兼肥前守迄にて宜敷可ㇾ有ㇾ之儀に奉ㇾ存候、但御寺に御座候御代々の御位牌の面に加越能三州大守と有ㇾ之、其例に此度被ㇾ相極ㇾ候儀に候はゞ格別の事に御座候、以上

六月七日　室　新　助

本多圖書樣

御牌面寶圓寺和尚被書記候趣、且又御自分思召寄の品其段總御奉行へ御申達得心に候處、寶圓寺一向同心無之候由、扨々氣の毒千萬に候、爰元へも寶圓寺より被書出候趣致拜見候上に、御位階被記候儀相違候樣有之旨民部殿と申候得共、總御奉行より被上候儀、とかく彼是申に不及儀と申候て罷在候、廣德寺よりの書付は如被仰越大概宜敷樣に申事に候、されども爰元御牌面の御書付も近き頃出來候て、迚もの儀に室新助殿へ御內談有之、大內記殿へ畢竟御相談の上にて出來候樣に仕度儀と存候、新助殿へは拙者意得にて承合候處、委曲被申越候趣有之候、爲御意得御一覽候て御返し可被成候、則此度進候、如此迄仕候ても存候樣に力及不申候、其元にて二條樣御使者御院號等寫罷越申度旨に付、水島より段々の樣子岡田伊右衛門迄申越の趣も承知仕候、和尚かたく被申候へば、何とも難成儀と存候、畢竟御牌面の儀は、其時の住職の被調候事に候へば、後代心ある人見申候て、不案內成出家調候と存候て可有之との御沙汰にて御座候、廣德寺出來の御書付も寫候て懸御目候、以上

七月十三日　本多圖書

青地藏人樣

廣德寺御位牌の面

松雲院殿參議從三位近衞權中將德翁一齋大居士

酒井攝津守殿御奥方樣御安産以後、御母子樣ともに御安泰、御男兒樣追付御成育被レ成候とて、先日も家來中爲二申聞一殊の外悦被レ申候、先日も參候て論語を講じ申候、加藤淸左衞門と申大貳弟にて御座候、學力有レ之餘程慥成ものに見へ申候、其故左衞門尉殿より攝津守殿へ御付置被レ成と見申候、先日も私へ被二申聞一候は、私事は格別に存候に付爲二申聞一候、攝津守殿學を好み被レ申候樣常に御内助候樣にと、奥方年寄中を以申入候處に、新助講釋遠のき申時分は御氣を可レ被レ付候間、心安く存候へと奥より被二仰出一候由淸左衞門申候講釋御聞候時分氣をつけ申程の事は奥方樣を賴み可レ申候、只願申候は何程講釋御聞候ても、御心より趣き不レ申候ては無益の事に候間、只御心より御好み被レ成候樣速々被レ仰可レ被レ下候、御心體の事は私共得と不レ奉レ存候故御賴申上候、其外御行儀等の事は數ならず候へども、左衞門尉樣御付置被レ遊候儀に候へば、私申兼候て奥方樣へ奉レ願と申儀は無レ之由申候とて咄申候、氣散じ者に見へ申候、此事長公淸左衞門殿の外へは御咄御無用と存候、淸左衞門も私へならては不二申聞一候

一　侍講九月十四日に罷出候以後不二罷出一候、此間は御用多御樣子に相見申候、隨分御機嫌よく御鷹野には度々御成被レ遊候、當月十五日長福樣此後若君樣と可レ奉レ稱旨一統御弘有レ之、御老中御列座被二仰渡一候、同十七日御目通にて紅葉山御宮御社參、廿一日一統御目見被二仰付一候、其時分も御　父子樣御同道にて表へ出御にて御座候、二ノ御丸へ其儘被レ成二御座一、二ノ丸附の衆御老中より初め皆々相極

申候、委細定て其地へも可二申參一候間不レ得二申進一候

一　山田大助只今儒者役被二仰付一、私共仲間に罷成申候、荻生惣右衞門師範を受申候樣聞申候、師弟と申にても無レ之由に御座候、とかく博識を第一に仕候、いかゞ成行可レ申候哉難レ計候、先頃侍講の時分大助事彌勤學仕候哉、其後逢候哉など御直に御尋被レ遊候あたりに、御請申上退出可レ仕と存候處に、よき序と奉レ存候て直に申上候は、學問の世に大益に罷成事は、士の風儀も改り末々迄の風俗も移り申候へば、自然と惡人も少く罷成、天下の御爲第一の善事に御座候、然處に儒者たるもの義と理の僉議うとく、人を教申道に晴く候間、何の益も無レ之儀と奉レ存候、詩文などは只今如何樣上手に罷成候ても、世の爲何の益にも立不レ申候儀と奉レ存候、其故第一經學をいたさせ申度儀に奉レ存候、大助事唯今如何意得候て學問仕候哉、無二覺束一奉レ存候旨申上候へば、とかくの御意は無レ之候故、見合御前を罷立申候、此儀先達て有馬殿へも申入候得共、得と感心無レ之、是は荻生が博學を殊の外感じ被レ申由承り申候、其故とくと請合不レ申顏色にて候故、幸と奉レ存御直に申上候、定て異風成學問と被二思召一候哉と奉レ存候、此一見識にて松雲院樣御意にも入不レ申又此度も世に遇申間敷奉レ存候、只今江戸は荻生流の異學はやり申候、六經は注疏を用、歷史は通鑑綱目を禁じ、溫公通鑑爲レ讀候由頃日承申候、其外申度まゝの儀共に御座候

一　綾部新平頃日豐後杵築より書狀被二申越一候、無事に參着候由申越候、頃日又大坂より小林道本と

申ものの（元は大坂御城付與力、只今子に渡し、其身は隱居いたし罷在候處、身も自由に罷成申候、實學を好み七書の注などいたし申候）不圖私宅へ參候て、書簡致ニ持參一申候折節、拙者事病中臥蓐候て罷在候故對面不レ致、忰忠三郎出し申候、右の書簡見候へば、上へ壹封差上申合點にてはるゝ大坂より下り候處に、大坂にて私事只今侍講も仕候事承及、私取次候て上へ達候樣にと願申趣にて御座候、上書の條々半は理に不レ當候へども尤成事とも相見申候、折角私を目當にいたしはるゝ下り候處無下に返し候事も無ニ本意一、又私取次候て指上候事は不ニ能成一事に候、其故病中委細の返翰を裁し遣申候、其書中兎角指止候樣に申遣候、委細は筆紙に不レ能候、思の外感服いたし候、早速草稿を火中いたし存とまり可レ申旨申越候、其後兩度參候故乍ニ病中一致ニ參會一、緩々麁飯など振舞語申候、よほど志も有レ之、俗流の徒とは格別に見申候、右の草稿焚可レ申と奉レ存候へども、亭主居申所に間も無レ之、不圖見候て不審に可レ存候間、私方にて焚捨られ候へと先日致ニ持參一候故請取置申候、必しも焚捨不レ申候ても不レ苦儀に奉レ存候故其儘指置申候、來春御下向の時分草稿並私返簡共に懸ニ御目一可レ申候、流石江戶に罷在候へば、箇樣の人物にも出合申候、以上

十一月廿八日　　室　新助

青地藤太夫樣

先生御談話

一　兼々御聞及の奇童山田宗見事、唯今は山田大助と申候、貳百俵被レ下駿河臺先生御宅の邊に罷在候

問、此人奇材先生にも御驚被レ遊候旨被レ仰候、未レ被二召出一以前、先生御侍講の序此者の儀御尋に付、奇材の段被二仰上一候、被二召出一候以後、又御侍講の序學問は彌進み候哉などゝ御尋に付、段々御論被二仰上一候て、其上に被二仰上一候は、大助など學文の仕樣何と相意得候て學文仕候哉、其段無二覺束一奉レ存候旨被二仰上一候へば、如何の儀と上意に付、學文と申物天下の大益に御座候と申儀は、今日の言行より初候て風俗まで宜敷罷成候故に、大益と申事に御座候、學者經義にうとく理に暗く御座候て、何の益にも立不レ申候、詩文など巧に御座候迚も、天下の益には少も成不レ申候、然處大助など博識文翰等を本に仕候樣子に相見候故、天下の御用には立申間敷と氣の毒に奉レ存候旨被二仰上一候處（是は有[illegible]被仰上[illegible]に御座候）兎角の御意も無二御座一默して被レ爲レ入候旨被レ仰候

一　大阪に鈴木貞齋と申候て淺見門弟の學者御座候酒井讃岐守殿大阪へ御越の節、儒臣松田善三郎當地に罷在善三郎悴何某大阪に供に被二召連一候處、用事にて當地に被レ遣候其跡に於二大阪一家來の者共學文仕候爲にとて、被レ尋候て右貞齋被二呼出一候、貞齋儀右松田何某に書を寄候て、先生へ疑問四五ヶ條呈し申候旨、其疑問の趣餘程學力も有レ之體さすが淺見門弟程有レ之候と被二思召一候、あなたより俗書にて疑問申越候へ共、後世にも殘申ためと被二思召一、漢文にて批點被レ遊候旨右御文翰追て爲二御見一可レ被レ遊旨被レ仰候

一　豐後杵築松平市正殿儒臣綾部進平と申者、學者を教誨仕候に、專小學を以教導仕候事兼々先生も

御聞及被レ遊候、當年御當地に罷在候て先年御居宅へ參上仕候、御對談被レ遊候處篤實の學者と相見申候由、此者先生へ申上候は、學文と申もの高遠なる事は入不レ申、學者所三以明二人倫一にて御座候へば、とかく五倫の道を以學者を導より外無レ之候、五倫の上にて導候へば、上王公大人より下庶民の賤に至迄、君臣・父子・夫婦・兄弟無レ之ものは候はず、いやと申されぬ事にて御座候、左候へば自ら學者も信從仕候、夫を近世高遠の筋を以學者を教候故學者倦候て信從不レ仕候と奉レ存候、夫故私儀は專五倫の筋を以淺近に教諭仕候存寄に御座候の旨申上候由、餘程篤實に相見申者の由被レ仰候家庭指南と題し申候て、右の趣を文翰に著申候、文翰も餘程宜敷候旨被レ仰候

一　先頃大阪の人小林道本と申者、先生御居宅へ參上仕得二貴意一度旨申候て、金百疋臺にすへ目錄の上に贄と申一字を書申候外に書簡一通指添申候、右書簡を別紙に寫候て、此別冊には點を付候て持參仕候、折節先生御氣滯にて御平臥に被レ成二御座一候時分に御座候、右贄金は當座に御返し被レ遊候て、箇樣の類何方よりにても受納不レ被レ遊候に付御返被レ遊候、右書簡は只今急には御覽難レ被レ遊候處、天下の政事の是非を段々存寄相調候ものにて御座候、半中半否にて御座候旨被レ仰候、右の存寄目安箱へ入候て申上度候へ共、若燒捨られ候へば何の益も無レ之に付、先生迄相達候存寄にて候、先生御儀千里の外迄篤行の君子と奉レ稱候間身を危ふみ寵を被レ惜候て箇樣の儀被二打捨一候儀は御座有間敷候へ共、猶更左樣の儀無二御座一樣に奉レ願候、此度武州の士に尸を血ぬり候心得にて覺悟を窮罷在候、於二大阪一

妻子親族にも一言も不レ爲二申聞一候などと段々相調候て、攝州の隱士と稱候て書簡を本候旨、其には潔事に候へ共、是等時の事體に不レ通ものと被二思召一候、先生より右の趣可レ被二仰上一樣は決て無レ之事と被二思召一候、去其其分に被二打捨置一候ては埒明不レ申候故、御病中御難儀ながら御返簡御認被レ遣候、其趣大略は右書簡の趣尤と被二思召一候へ共、中々當時の勢先生など御取次可レ被レ上事體にては無レ之候間、其段不レ被レ爲レ成候に付御返し被レ遊候、定て此方身を遁れ寵を竊申者と可レ被レ存候へども、左樣被レ存候ても少も此方構不レ申候間相返申候、扨は此方存寄候儀有レ之候を默して止候も不本意に付申入候、御自分事書簡には攝州の隱士と被レ稱候へば、官守言責二の任は無レ之人にて候、然處上より御尋も無レ之事を被二申上一候は、事理に於て當り不レ申歟と存候、伊尹有莘の野に耕被レ申候も、湯の三聘有て罷出候、孔明南陽に耕も、劉主の三顧あつて後被レ出候、右兩人の衆彼三聘三顧無レ之候はゞ、一生耕種の業に身を終可レ被レ申候、隋の文仲子文帝に書を上り候て文帝不レ被二取上一候、是王道の罪と先儒論じ置候、左候へば其責無レ之候を、此方より申上候事自衒申にて、道理には不レ申と存候間、一往存寄申入候段被二仰遣一候へば、又返書指越候て、被二仰遣一候段々此方にて相考不レ申にては無二御座一候へ共、如何しても難レ默奉レ存右の通仕候へ共、被二仰下一候趣一々感服仕候間、右存寄相止候間書簡をも焚捨申由申越候、其後駿河臺へ被二罷越一候て右書簡焚捨可レ申と申上候へども、寓舍にて焚捨候ては主人怪み可レ申候間持參仕候、此元にて御焚捨可レ被レ下旨申候て持參仕候に付、御請取置被レ遊候、未御燒

不レ被レ遊候旨被二仰聞一候、右御文翰共追て爲二御見一可レ被レ遊候旨被レ仰候、道本書簡何とぞ密々御借被レ遊候樣に申上度奉レ存候へ共、餘の儀と違申事故如何敷先指控罷歸申候、右二三人の者共餘程の者共と被二思召一候由被レ仰候、道本儀は小出彌市右衛門と申候て大阪に罷在候與力にて候處、悴を名代に出し候て、其身は隱士に罷成、姓名共に改候て小林道本と申旨に御座候、此等一兩輩の外は少々學力御座候へば、文辭博洽を專として志行曾て無レ之、或は篤實の生質有之候は學力曾て無レ之候旨御嘆息に御座候、今日拜謁御物語承申候に付、先相調入二御覽一申候、記憶不レ慥候間相違の儀も可レ有二御座一候、其御心得御覽被レ遊可レ被レ下候、以上

十二月五日　　小寺武兵衛

奥源左衛門樣　　青地藏人樣

青藤太夫樣　　大新八郎樣

成宇兵衛樣

享保十年

一筆致二啓上一候、寒氣甚候へども、御清勝御勤仕被成候哉承度奉レ存候、拙者儀去る十一日御城に被レ爲レ召、西丸奥儒者被二仰付一、役料貳百俵被二下置一候旨御月番水野和泉守殿被二仰渡一候、誠不二存寄一儀難レ有仕合奉レ存候、即日於二御城一誓詞被二仰付一、翌日より毎日西丸へ相詰候處に、向後隔番三番に相勤可

一申旨昨日被二仰渡一、勤方も緩やかに罷成致二安堵一候、但奥詰被二仰付一、此間も御小納戸衆と同席に相詰申候、奥詰衆は外交の儀厳密成事に御座候、老夫事は品も替申者に候間、向後交接往來仕度方一々其姓名等書付にて差出し可レ申旨にて、此間書出し申事に御座候、其中第一其許御家の儀は御家來筋の私事に候間、向後も御饗應の席には指控候とも、寒暑の御見廻には不二相替一參上仕度旨願置申候、定て近日分け立可レ申と存候、餘事追て可レ得二貴意一候、恐惶謹言

十二月十七日　　　室　新　助

奥村源左衛門様

其外例の人々

十一日先生西丸奥詰御儒者役被二仰付一、御役料貳百俵被レ下旨昨日闘番廻狀にて承知仕候、早々先使を以成共御様子可レ承候處、御成夜に入候迄御門留不レ及二是非一、今朝四ッ時前罷出御挨拶旁參上仕候へばはや西丸へ御登城不レ得二御意一候、忠三郎殿御物語の様子如レ左御座候、十日に若年寄衆三人連署の奉書到來に付、十一日御登城被レ成候處、水野和泉守殿を以被二仰出一候は、近年高倉屋敷講釋の儀被二仰付一候處、精に入相勤諸人の爲にも罷成候旨御聞被レ遊候、然は西丸御近習被二仰付一御役料貳百俵被レ下候、大納言様御側の者共皆々學問指南仕候様にと被二思召一候旨被二仰渡一候、內通坊主衆相添候て西丸へ御上り、夫より御老中若年寄衆不レ殘御勤被レ成候得ば、御痛散々にて中途にて暫御座し御休被レ成候

位に御座候旨、昨十二日誓詞、御老中不レ殘御列座の中にて血判御誓詞被レ成候旨、兩上樣にも昨日御禮相濟申候、御直談承候はゞ委敷事も可レ有レ之候へども、先如レ此御座候、以上

十二月十三日　青地藤太夫

藏人樣

猶以先生御役料貳百俵、只今三ノ一ならでは渡り不レ申候、代金闔りにて年拾七兩相渡申筈の旨御家來申候、御加増に候へば公儀も不レ殘相渡申格の由御座候、以上

一　昨日駿河臺へ參上、今度の後始て悠々得ニ御意一候、御威光故にも御座候哉、御痛處も透と宜敷相見御快談に御座候、御詰番も隔日と三番と替候、御出勤に罷成申候、爰元へ御出入の儀も御樣子承候へば、賀州より被ニ召出一候私の儀に御座候間、加賀守方へは寒暑の付屆の外用事有レ之節往來仕度奉レ存候、饗應等の節は勝手等へ相詰候儀も相控可レ申と申趣にて、其外松平大和守殿、土岐丹後守殿、酒井攝津守殿等の衆中は不レ殘御書立候て、只今迄往來被レ成候旨と申て御調申候旨御座候、多分此方樣の御通路も可レ成哉と被レ仰候、御前向の儀は其日誓詞前書に候由、妻子不ニ相洩一趣の儀有レ之故一向何事も不レ入事と被レ仰候、尤箇樣に可レ有ニ御座一事故御尋も不ニ申上一候、御年來よりは御器量もすぐれ、御寛大の御生質と相見へ申候

一　御近習の衆中をしなべて、寛容にて、兄かおぢの介抱申樣にて御勤被レ成能御座候、詰所にも大

火鉢有レ之其廻りにて咄し御部合には幾つも火鉢有レ之寒氣御忘被レ成候旨、各別に悠々と有レ之由被レ仰候

一 御宅も火事以後初て疊も改り、天井なども張直し、いかふ見懸迄も宜敷大慶仕候、此旨新八郎殿へ御咄可レ被レ下候、以上

十二月廿三日　　青地藤太夫

藏人樣

兼山秘策第七冊、終

兼山秘策 第八册

起享保十一年至十六年

一 舊臘廿一日大納言樣御誕辰にて御祝など被レ下、御本丸へ御出の節雪降申候、新助に雪の詩は無レ

之哉と御尋被レ遊候、無二御座一旨御請にて御出被レ遊候、御近臣の内へ詩作無二御座一段申上置候、但作候て可二差上一候哉、それには不レ及候哉の旨御尋候處、御作候て被二指上一候はゞ可レ宜との儀に付、律詩二篇御上被レ成候處、此詩の講釋御聞可レ被レ成候、召出候樣御意にて、廿三日初て於二御前一右詩意を被レ講候、（淩新書中、詩稿在二別紙一）

正月元日

御手紙拜見、夜來より風雪寒威難レ淩御座候、愈御淸勝御勤被レ成珍重奉レ存候、老夫事愈肩脊の痛も全快、且又氣宇も淸快に覺候條貴意安被二思召一可レ被レ下候、當地中村玄春と申宮醫の子息にても近來相見候處に、殊の外篤學にて老夫門下に遊び申度旨達て被レ申候故任二其意一候、醫學も年少に候得共かたのごとく精確に候て末賴もしく相見申候、此人老夫氣分を伺、且又診脈等被レ致候て常服の藥考、今朝初て丸藥を製し候て給候、醫案を書付給候文字も當地醫家の中に難レ得奉レ存候、醫案尤と相聞申候、此丸藥當年中に用候樣に被レ申候、相應可レ仕と奉レ存候、いよ〳〵息災に可レ被レ成候間御氣遣被レ成被レ下まじく候、御序の節藏人殿へも被二仰遣一可レ被レ下候、侍講の御さたは無レ之候、昨今日非番にてゆる〳〵休息仕候、明日は罷出申候、東方朔が避二世ヲ金馬門一と申儀有レ之候、老夫も世を西丸に避と存候て罷在候、各樣御期望とは大に違申事と奉レ存候、以上

正月廿五日　　室新助

青地藤太夫様

老夫事無異に西丸御番相勤候間可レ安二貴意一候、先頃土肥源四郎を二丸へ小次郎儀御附け被レ成、只今迄二十人扶持御前代より被レ下置一候ところ、此度二百俵に被レ成候、是れも老夫同事の番を承申候、源四は壯年の人に候得ば長くつとめ可レ被レ申候、老夫事は先づ一日〳〵と相勤め申候、來年は七十に罷成候はゞ致仕の年にて御座候、昔漢賈誼新進の人を以、文帝のために俄に長大息して治安の策を陳じ候、絳灌が讒舌て同心不レ仕候、文帝も賈生が策を迂濶不レ足レ用と存候哉、長沙王大傅に被二申付一候、古來迂儒の論世に過不レ申事不レ珍奉レ存候、此所に至ては大人の德有レ之、人至誠を以感動候はゞ又格別たるべく候其は中々賈生など及可レ申儀にて無レ之候、況や老腐の才におゐて涓埃の効も難レ得事に奉レ存候

四月十四日　　室　新　助

青地藏人樣

享保十三年

拙者役儀斷の儀前書に有增申進候、奥詰の面々は總て願の儀先經二御内意一、其上にて表向より申上候、其故先頃中島備前守數主計頭拙者共此衆の支配に候故、右兩人へ書付を以申達候趣は、私儀先年西丸奥儒者に被二仰付一、御役領拜領重疊難レ有仕合奉レ存候、然處一兩年別て老衰仕、其上手しびれ端專一呼

吸短促、御城內往來仕候にも息切難儀仕候、其に付御役儀御斷申上度奉レ存候、此段日本神明僞無レ之候、以二御慈悲一役儀御赦免被レ遊被レ下候樣奉レ願候旨申入候處、十日程過候て思召も有レ之旨先願差止可レ申旨御側衆被二申聞一候故、先奉レ畏旨御請申上候處、此廿一日御側衆大久保伊勢守殿を以被二仰渡一候は、私事年罷寄勤方難儀仕旨被二聞召一候、向後御番相勤に及不レ申候間、氣分も宜時分は勝手次第可二罷出一候、朔望にも天氣惡敷時分は罷出に不レ及候旨被二仰出一候、拙者事西丸へ御附被レ遊間も無レ之役儀御斷申上候得ば如何願の通早速御赦免被レ遊候儀難レ計奉レ存候處、不二存寄一結構被二仰出一難レ有仕合奉レ存候、上にも老人の儀故御優恩にて如レ斯被二仰出一候事別て感戴仕事に御座候、此通に候得ば緩緩保養可レ仕と、先々致二安堵一候、以上

二月廿七日　室新助

大地新八郎殿

一　拙者役儀願候事優命有レ之候趣は前書に申進候、此間は大納言樣御疱瘡にて當月初より每日罷出申候、至極御輕段々御順快被レ遊、昨十五日三番御湯迄相濟恐悅至極奉レ存候、其故一兩日は拙者も在宿仕候、只今御番御免被レ遊候故緩々家居仕申候、折節御機嫌窺に罷出可レ申奉レ存候、拙者只今奥にての支配中島備前守藪主計頭兩人にて候、藪主計頭は其先祖藪內匠と申候て、秀吉相州北條陣の時分渡部勘兵衛と同じく、山中城を乘取申候中村式部責口にての儀にて候、其嫡流は細川越中殿家に罷在候右

主計頭は支流御座候よほど器量有之人と見申候、此度私優恩の命有之時分辭申入候處に、此上は隨分保養候て長命に可罷在候、御用有之段に候得ば、其元への御用は大切の事に候旨あいさつにて御座候、かやうのあいさつ申者は外に一人も無之候、さすが内匠子孫と存候

一　荻生惣右衛門死去の事も前書に申入候、日外其元へも遣候俗書をも板行候て、若年寄本多伊豫守殿序を書被申候、百世の公論を不待して世上に非笑仕由に御座候、人性善に候故是程衰申候得共、若年寄中序文にても上よりも特旨にて去年御目見被仰付候ても同心不仕候、上方邊の學者もいろいろ邪說を唱申候、頃日鈴木貞齋と申候人只今大坂に居申候、淺見重次郎門弟にて候、定て中泉氏などは知り被申候て可有之候、此人獨り山崎家の神道に同心不仕候、比日貞齋より申越承候得ば、山崎嘉右衛門などをも見限り果申候、湯武を簒弑と申候由、伯夷が見にて候哉、終に中國にても漢唐以來不承異說にて御座候、其外伊藤が門流異說を申候得共、是は結句其程の害は無之候、山崎の流神道に荷擔いたし候て大に正道を害し候由、不及是非事と存候、當地にても宋儒の跡を守候者は師儒と稱し申内には無之候、老夫一人にて候、大厦の顛一木の所支に非候得共、所聞を尊び所知を行て一生を終申覺悟にて候

一　岩淵氏より其後久書狀越申候、彌無事に官暇の時分は晝夜勤學無懈怠由申越候、只今姓氏を改芦孝七郎と申候、孝孺も改候て德林と申候由、字も申越候得共失念致候、此人雖得聰敏にて候、邊土

に居候て惜儀に存候（右三月廿九日自二大地兄一到來寫置と大地兄書レ之）

此比御本丸より御用の事被二仰出一、荻生惣七と申儒役の衆宅にて、足利學校より出申候十三經を以て、汲古閣の本と讀合せ被二仰付一候に付、私儀も折節見廻り、右の內山井善六と申惣右衛門門弟書入申候處有レ之候、彌其通にて能候哉吟味仕可レ申旨被二仰渡一候、定て近日初り可レ申と存候、左候得ば右惣七郎宅へ拙者儀折節罷越申候、斯樣の事も老衰にて相勤候事無二覺束一候得共、成次第相勤可レ申存候

（與二玥大地氏一書中）

七月二日

一　御聞及の通荻生惣七郎宅にて十三經校合被二仰付一、私事も折節見廻り可レ申旨に付最早兩三度罷越申候、大久保と申候四谷邊に居宅候て遠方にて御座候、是は上州足利學校に有レ之候十三經の內七經迄古板並に寫本有レ之、只今汲古閣萬曆版等の本とは所々相違有レ之、其故校合被二仰付一候、此日も論語を見申候處、學而篇、貧而樂、富而好レ禮」の處、「貧而樂レ道」と有レ之候、述而篇、舉二一隅一不下以二三隅一反上」の處、「舉二一隅一而示レ之不下以二三隅一反上」と有レ之候、惣七郎などは殊の外同心に候得共、愚見はさやうに不レ存候、多分後人の附益と奉レ存候、あまり聞へ過候て語意淺く御座候得共、異說を好み申風俗故さやうの處に氣付申者無レ之候、（賜二齋賢一書中）

八月十三日

荻生惣七郎方にて校合いたし候は七經並孟子にて御座候、七經は五經に孝經を相添申候、十三經不レ殘有レ之と相見候處、殘りは紛失と奉レ存候、其外文選なども參申候、是は金澤文庫の本に候處、北條氏政其時分の足利の住持に講釋聞被レ申、右文選を足利學校へ寄進被レ致候末に氏政の名印有レ之候、右七經の内書き本も有レ之候、印板の本も文字の形明朝以來には各別の物に候間、宋板又は五代の時分の板と存候、總て印板は五代馮道が時分より起り申候、其より前は皆書寫仕候、論語貧而樂、富而好レ禮」と申處、「貧而樂レ道、富而好レ禮」と有之候、道字只今の本には見へ不レ申候故、惣七など秘藏の事に申候て、樂とばかり有レ之候故、孔顔の樂何事ぞと周程など僉議に候得共、樂道と有レ之候得ば是にて何の僉議も不レ入事と申候、樂道と申は、いかにしても淺くきこへ申候、是は多分下の好禮に對して後人道の字を加へ申たる物と奉レ存候、其證據には其所何晏の解にたゞ樂と計畢候て道字は無レ之候、然れば彌後人の了簡にて此一字を加へ申と存候、述而篇の「擧二一隅一而不下以二三隅一反上」の處も、「擧二一隅一而示レ之不下以二三隅一反上」と有レ之候、是もよく聞へ候樣には候得共、後人の附益と存候、是皆書本にて書寫の人加へ申にて可レ有レ之候、當地の學者淺見にて好レ異申候故、かやうの儀申習し候て程朱を譏り申候、頃日承候得ば、長崎の沈燮庵と申唐人渡り候由、公儀よりも何角御尋の儀共惣七郎深見久太夫など承候而申遣候、如何樣の人品に候哉、定て何の替申儀も有レ之間敷存候、右の儀共劣甥新八郎へ御逢の時分御咄被レ成可レ被レ下候、別に申遣事勞倦いたし申候間御傳達可レ被レ下候、并比彼

方へ「執レ御乎、執レ射乎、吾執レ御矣」と有レ之候處吾執射矣と足利本に有レ之候朱子も執御にして、註せられ候得共、幸前漢書吾丘壽王が傳に、此論語の語を引候處に吾執射矣と有レ之候上は、足利本よろしく候、朱子も此本をば見不レ被レ申故何の僉議も無レ之と惣七郎申候故、是は前漢書慥成證據に存候故、早速前漢書をかりよせ見申候處大に違申候、吾丘壽王が傳には孔子曰、執レ射乎、執レ御乎」とばかり畢候て、下の吾執御矣の一句は引不レ申候、壽王射の事を第一に申候とて、此孔子の語を引申上、吾執射矣の筈と申すまゝに意得たるにて御座候、何れも粗淺輕薄此類にて候、此儀も新八郎へ御傳達被レ成可レ被レ下候、先日新八郎方へ前漢書を考可レ申旨申遣かと覺申候、存の外の相違にて候、荻生氏など申儀皆此類にてあらう儀と可レ被二思召一候、以上（賜二淺新一書中　壽王傳孔子曰、吾何執、執レ射乎）

九月十三日

一　今玆戊申十二月廿五日余兄伯孜君卒、享年五十七、鳩巣先生傷怛の餘、辭を千里に緘て余禮幹をして靈座の下に讀しむ、既に祭奠し畢て感泣の情に不レ勝、聊蜂腰一首を讀て懐を述る者也、于レ時己酉二月初七日、奠告し了て焚レ之

千里よりなけ木をつゝむ言の葉に
君がふたりの心をぞ知る

維享保十四年歲次己酉、正月十九日、室直淸、謹具二茶菓一、敬祭二靑地君伯孜之靈一、嗚呼伯孜、命止レ斯

耶、哲人其萎、古今所嗟、惟君孝友、爲政於家、方其在國、聲譽日加、既而登庸、利劍競磨、解紛治劇、英鋒莫遮、偉哉若人、大邦之華、況復崇儒、隆師親友、求之士林、罕見其偶、吾在關方、學行無取、君廼相信、不渝於久、三十餘年、眷顧滋厚、謂君強健、必得其壽、豈料忽亡、使吾在後、嗚呼哀哉、往吾東徙、尺素往復、千里雖阻、寸心可掬、中遭家災、生計縮縮、君爲經營、恩如骨肉、交誼之篤、聞者嘆服、辱知無報、老朽自惡、今也聞喪、不能匍匐、感念當時、失聲望哭、嗚呼哀哉、尚饗、

一　某伯孜先生と申談、鳩巢先生往復書簡の内世事に渉り、秘密の事外人の聞を恐るゝ品々には本書を焚棄て、兼山秘策、麗澤秘策と題し巾箱に藏め置、歿後に投火せん事を欲す、但急死難豫計の故に、互に卒死の時は相傳て焚べしと誓ふ、伯孜君雖非卒死、某看護せる故某に授て焚しむ、前に予所筆の秘策を投火し、伯孜君手書の秘策を存し置、相續て書加るのみ、聊愛敬の心を寓すると云爾

一　世事に不預人と共に可觀もの、並書中經義に及ぶ事共は、多は可觀小說の内に載之

一　國事秘談の類は、麗澤秘策附錄と題し若干卷有之、秘策と同じく一套にせるのみ

一　享保十五年庚戌四月大下諸大名參勤の儀如舊例、來年より一年詰の格にて御出、且久上納米も來亥年より御止の旨被仰渡候、御書立如左

覺

一　當三月御暇被レ下候面々、當秋九月參勤の時節可レ被ニ相伺一候

一　當三月參勤の面々、當九月御暇可レ被レ下候間、參勤時節の事は來年三月中可レ被ニ相伺一候

一　當九月參勤の輩、來年四月六日御暇可レ被レ下候

一　來春參勤の輩は、當九月中參勤可レ被ニ相伺一候

戊四月

御勝手向不調に付、近年上ケ米被ニ仰付一、御用も辨し御機嫌に被ニ思召一候、右上ケ米の儀今年にも御用捨被レ遊度被ニ思召一候得共、いまだ御勝手向難ニ相調一候旨役人共申に付、來年より上ケ米御用捨被レ遊候、依レ之從ニ來年一參勤交代の儀可レ爲ニ前々之通一候、來年參府の面々は、當秋參府の時節可レ被ニ相伺一候、其節可ニ相達一候、右の趣可ニ申聞置一旨被ニ仰出一候、但半年代の面々も、來年より可レ爲ニ前之通一候、以上

戊四月

朱書右如ニ舊例一被ニ仰出一候子細は、近年米價追て下直に相成候、十年以前に比べては半減の內に成候、扨諸物の直段絹布等類は米に應じ候樣に候得共、其外の品は價不レ下候、依レ之士家迄にても無レ之、四民共に困窮に及候旨申慣候、色々御詮議の處天下一同上納米有レ之候に、新開の地甚多罷成候と、扨は少直段宜敷成候はゞ、公儀御拂米有レ之と、此三色より米價下り候旨、商人共の手前より言上仕候由取沙汰仕候

一　御腰物備前義雍代金二十五枚　　老中水野和泉守

近來病身に罷成、大切の御役儀若仕落等も有レ之候得ば如何被二思召一候間、御役儀御免被レ成候、緩々可レ致二休息一の由於二御用部屋一松平左近將監を以被二仰渡一追て御前へ被二召出一、右御腰物拜領被二仰付一候

一　諸侯參勤前々の通一年交代に被二仰出一候、是にて米價少貴く罷成申事の由申候、此日水野和泉守殿老中役儀御免被レ成候、近年病身に罷成、大切の御用自然間違も有レ之候得ば、如何に被二思召一候間御免被レ成候、緩々養生仕候樣に御前へも被二召出一御懇の上意、且又御腰物迄も被レ下候、首尾能は御座候得共、久世大和守殿、戸田山城守殿など役儀御斷に候へ共御免不レ被レ成、一生御大老にて終り被レ申候、此度和泉守殿の儀はこなたより斷無レ之候處、御免被レ成候得ば能首尾とは難レ申候由取沙汰仕候、委細の儀は手叶不レ申候故、草々以上　（先生賜二禮幹一書中）

六月

一　追啓舊職當地御家人五百俵以下御奉公相勤候面々、下は與力並二十俵三十俵取申下役等迄拜借被二仰付一候、五百俵に金三十兩、其より段々減じ、私共二百俵にて十五兩致二恩貸一候、（私共御役料六百俵は不レ預候）總高十二三萬兩の儀と申候、當年より十年に返納仕筈にて候、當春儉約の法令急度可レ被二仰出一由、其迄の取續の爲に拜借被二仰出一由に候、其故小身の輩舊臟は不二存寄一難儀に及不レ申候、下々難儀言外御苦勞に被レ遊、去年以來段々御賑恤の上、又拜借被二仰付一候事忝御儀奉レ存候、然處此度恩貸の金を直に惡所

へ致ニ持參一候者有レ之由頃日承候、扨々歎敷儀と雖ニ默止一候てかな書の一篇當春錄し置申候、此間小寺市郎右衛門殿より歲旦の詩尋に被レ遣候故、かな書の物も一所に進候、大方市郎右衛門殿より御寫し被レ成其元へも可レ被レ遣かと奉レ存候、御覽可レ被レ成候、右の趣新八郎へも御物語可レ被レ下候、以上（辛亥正月賜書之內　假名書一篇載ニ可觀小說一）

正日廿四日

一　十六年二月萬石以下へ儉約の御定書出申候、諸侯の分は國方にて可レ准レ之、右御書出候寫は組用留帳載レ之

一　去年以來米價貴く成候樣にとの御仕置のみにて、諸侯交代迄も相改め一年詰に成候得共、米價猶下直に成申候（米書　予一策可觀小說十六卷に記レ之）

一　三月廿七日江戶米問屋共へ被ニ仰渡一同晚方より廿八日へかけ、江戶中米屋藏に封付に成、悉く有合候米被ニ召上一候

只今迄相場一兩に付二石二斗程
一　一石八斗五升　　上　米
同　二石三斗五升程
一　一石九斗八升　　中　米
同　二石四斗五升程
一　二　石　八　升　　下　米

右の直段に被ニ召上一晦日朔日に早速代金不レ殘相渡候、伊勢丁米問屋岩倉屋勘七方にて承屆候、伊勢丁

迄に米問屋四五十軒計有レ之米數六十萬俵計有之候、町々米屋共の米數は難レ計候

御勘定所張紙

一米穀下直に付公儀にて買上多被レ仰二付之一候、貳拾萬石以上の面々も於二江戸大坂一買米被二申付一候樣用意可レ有候時節の事は追て可二相達一候、買米致耶の儀は、大岡越前守、駒木根肥後守、稻生下野守內へ可レ被二承合一候

四月

紀伊中納言殿	尾張宰相殿	德川鶴千代殿
松平加賀守	松平大隅守	松平陸奥守
松平兵部大夫	松平大炊頭	松平筑前守
松平相模守	松平長門守	松平安藝守
松平土佐守	松平淡路守	細川越中守
松平信濃守	松平肥後守	佐竹右京大夫
有馬中務大輔	藤堂和泉守	伊井掃部頭

右命下り候處、近年以來諸國甚困窮、米穀の貯一向無レ之、各國用の米も無レ之程に罷成候、何を以東都大坂等にて買米可二罷成一候哉、近頃下情に不レ通被二仰渡一候と諸人申候處、同月十五日江戸大火、二

十萬石以上の諸侯大半燒失仕候、夫故にても候哉無㆑程右買米の儀は相止候

一　五月廿二日町人の内十四人米買被㆓仰付㆒、種々瑣細の事共有㆑之、米價も右に付壹兩計に成候、金澤の米價は漸三十目計に成候

享保十六年亥歳

一　七月六日御先手頭細井左次右衛門殿を以、松平左近將監殿奉りたるにて御屋敷へ被㆓罷越㆒被㆑申候趣、米價高直に成候樣に色々被㆓仰付㆒第一御買米も被㆑遊候、然處金銀御手痞にて思召の樣に御買米難㆑被㆑成候、外の諸大名方とは違候て此內急度御返濟可㆑有㆑之候條、金子拾五萬兩御借用被㆑成度との趣、御家老前田勘解由、玉井市正へ迄被㆓申述㆒候、兩人申候は、近年一統の困窮且又去々年暮上屋敷燒失、當春迄に少々家作も仕掛候箇樣の儀共にて未々家來共も難澁仕候、漸京大坂にて致㆓借銀㆒家作も半仕かけ、又は近年家來共へも少々は貸渡候得共、借銀さへも相調不㆑申、今以家中は救得不㆑申候、城附金銀の儀は私共兩人近年の役人故員數も不㆑存候、加賀守も年若家督無㆑間事故中々其樣子も不㆑知㆓案內㆒事に御座候、國許家老共へ相尋御用程の金高可㆑有㆑之候哉、其段相しらべ御請も可㆑仕の趣に申述候、畢竟細井氏直にも被㆓申上㆒、何とぞ速に御請有㆑之樣に仕度と被㆑申候旨、仍㆑之拾五萬兩御用に御立可㆑被㆑成趣の御挨拶有㆑之候、仍㆑之其段御書記被㆑下候樣にとの事にて御調被㆑遣候、翌七夕御登城の處出仕相濟候後、老中列座大目附も被㆓罷出㆒、此度御借金速に御請被㆑成御喜悅に被㆓思召㆒候旨

被二申遣一、御直の上意も有レ之と也、此旨御當地に早飛脚を以申來、御城付御金獅々の藏より拾五萬兩取出し諸方御土藏へ入置、段々九月より十月迄に京へ被遣候、京師へ持運候御費迄も四百貫目の餘入用の旨に候、但正銀を以被遣候、豐臣御代の朱封銀等御馬廻組定番組外より八人宛都合二十四人、並裁領足輕三百人指副銀座にて吹替申候、右獅々の御藏へ入有レ之金銀は徽妙公以來の儀にて、松雲公八十年御在位の內終に御手附候事無レ之候、此度初ての儀と申候

一　天下の事右の趣に成來候、大體を被レ失候儀不レ及二言議一事也(私記)

一　御別紙に被二仰聞一候一件、當地にては其砌より沙汰仕候、其故拙者もとくより承申候、此度上の御用に御立被レ遊御大慶に思召候由被二仰上一候由承レ之、乍レ憚御尤奉レ存候、此節一統困窮故外の諸侯成申儀にては無レ之候、さすが御大國故に候由當地にても取沙汰申候、松雲院樣御存世の節、御前代の時三十萬兩迄は御用に御立可レ被レ成候由被二仰上置一候由、是は二三年以前さる歷々の物語にて體成儀の樣聞申候、左候得ば左樣の儀にて此度右の半分被二仰出一候樣に奉レ存候、直に大坂へ被レ遣候由、成程大坂にて被二召上一候米代の御手傳の由當地にても申候、始終何角に御國の御世話ながら、無二比類一御用に相立被レ成候事乍レ憚珍重に奉レ存候(先生來書の內)

亥九月廿四日　　新　助

右御借金に付被二仰渡一並御請等の寫(半切紙面)

松平加賀守へ內意の覺

近年米穀下直にて一統難儀に付、於二公儀一御用意金を以去年當年買上米多く被レ仰二付之一候、此上も
猶更江戶大坂にて可レ被二仰付一候、併公儀計にても左樣には難レ調候、大身の面々へも買米可レ被二仰
付一候間、用意の樣に先達て申通候得共、面々にて買米有レ之候ては如何に付、御手傳候樣に可レ被二仰
付一處、當年類火に逢候面々も多候得ば、一同難レ被二仰付一候、此節の事に候間御手傳候樣にと被二
思召一候、金十五萬兩程被二指出一儀は罷成間敷哉、尤來年急度町人共上納致筈に候間、其節可レ被二相
返一候、此旨內意可レ承の由御沙汰に付申達候

御請の御紙面等左に記（半切紙）

近年米穀下直にて一統難儀に付、御買米被二仰付一候、就レ夫委曲被二仰渡一奉レ畏候、先般御懇の御內意
の趣忝仕合奉レ存候、被二仰聞一候通金拾五萬兩指出可レ申候、御請の儀何分にも可レ然樣御沙汰可レ被レ
下候、以上

七月六日　松平加賀守

松平左近將監殿へ細井左次右衞門殿より被出候紙面左に記

松平加賀守家老共私迄申候は、此度御買米の儀に付、拾五萬兩加賀守御手傳の御內意被二仰渡一、右金
高指出可レ申由加賀守奉レ畏候旨御請申上候に付、早速國元へ申遣取揃次第段々指越候樣に可レ仕候、

然共去春類燒別て不如意に罷在候故、遲滯の儀可レ有二御座一哉無二心元一奉レ存候、此段私に承置候様に申聞候、以上(右上卷に細井左次右衛門と書レ之)

七月六日

御書付寫

一 享保十七年右拾五萬兩の內、七萬兩九月八日御返濟、殘金に付被二仰上一筋有レ之、左の通御書付添

今年西國筋蟲付損亡に付て御領所夫食御入用も多、其上損亡有レ之輩へも拜借等被二仰付一候に付て當暮可レ被二相返一御金の儀延引有レ之樣に被レ致度由、先達て被二申聞一の趣達二御耳一候處、早速心付何れも迄被二申聞一候段御機嫌の御事に候、就レ夫西國筋へ廻米等も多入用に付、御買米をも被二仰付一事に候得ば、被二申聞一候通當暮被二相返一御金の儀は延引候て、至二來夏一可レ被二指戻一候間可レ被レ得二其意一候

十二月九日

一 大津重郎左衛門名跡可レ被二仰付一哉否と申儀に付、私存寄も可二申上一旨先日御意被レ遊候、兼て私も思案仕見申候、嗣男無二御座一上の儀ながら妻並娘も御座候儀に候、其身絆養子にても願置候事と候、尤其趣を御聞屆被レ下御知行は半知可レ被レ下事の樣に奉レ存候、名跡に不レ可レ及と申族も御座候、其趣は木村久平忠義の志を以打果し、言葉も掛打懸候處、脇指をも不二抜合一候、責て鞘ながら成共打合可レ申

處おくれを取候ものに候、左様のものに名跡可レ被ニ仰付一様は無レ之儀と御家中にても申體に御座候、一旦聞へ申様にて、却而武士道不吟味成族の申様と奉レ存候、其子細は久平元來忠義の志にて無ニ御座一段は明白に相知申候、其上比興成仕形共にて、御座敷の内にて而も一方口の役所に只一人御用相勤罷在候を、忍入ねらひ打に右手を切落し申程初太刀に仕負申候、千百人にも勝れ申強力者にても、右手に深手を得ながらも拔合働可レ申歟、平々の人何を被レ成可レ申哉、久平存貯候のみならず、刀迄も拔持忍入候儀に候へば闇打同事と奉レ存候、然ばおくれの沙汰には不レ及儀にレ被存候、若此度おくれの沙汰を以名跡御立不レ被レ下候はゞ、御奉公相勤候重職の衆も氣折て面白からぬ心底も出可レ申様に奉レ存候、筒様に存寄申儀に御座候故、たとひ重郎左衛門養子等の類遺書に不ニ相見ニ候共、可レ然家柄の人御見立被レ遊、娘と一所に被ニ仰付一名跡御立、夫を以後家をも養育仕候様に被ニ仰付一被下候はゞ、亡魂も忝可レ奉レ存候事歟と奉レ存候、將又久平老母も嶺廣院様御意被レ遊候通の子細も候得ば、少々御扶持被レ爲レ下候儀一段可レ然御仁恩とも奉レ存候、妻子とは違ひ母の儀に御座候得ば格別の事と奉レ存候、幸に是にて釣合も宜敷罷成、御陰徳の一事にも可レ成様に奉レ存候、乍レ恐愚意の趣如レ斯に御座候、以上

亥十月九日　　　青地藤太夫

安房守様

一　大津重郎左衛門儀常に悪事の趣も無レ之處、足輕木村久平疎忽の存入故、遂不慮の死候事寔無ニ是

非ニ仕合不便の至りに候、件の趣に候間重郎左衛門儀男子有レ之候はゞ、尤可レ及ニ名跡之沙汰一候得共男子無レ之候、且此間重郎左衛門遺書取上令ニ披見一候處、享保九年相調置候遺書にて、其節三歳のせがれを名跡願置候、此者先年令ニ病死一候、右の外願置候者も無レ之、其以來の遺書は無レ之候、然は唯今は一向其身願の趣は無レ之事に候得共、重郎左衛門儀代々全相勤、其上重き役儀迄も申付置候ものゝ跡及ニ斷絶一候儀無ニ本意一事と存候、娘一人有レ之迄にて同姓の內養子等可ニ申付一者無レ之候、依レ之南部兵左衛門次男只之進も年來も相應に候間、重郎左衛門遺知の內百石遣レ之名跡相續爲レ仕、右娘と一所に申付候、此段大津傳六へ申渡故重郎左衛門妻並娘へ可レ爲ニ申聞一候、尤南部兵左衛門並次男只之進へ可レ被ニ申渡一候、只之進儀重郎左衛門舊宅へ勝手次第爲ニ引移一可レ申候、組は大組へ指ニ加之一候條、此等の趣可レ被ニ申渡一候、以上

亥十二月　日

家老中

兼山秘策 第八册 大尾

大正三年七月十四日印刷
大正三年七月十七日發行

日本經濟叢書 卷二
非賣品

不許複製

編者 瀧本誠一

發行者 佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者 中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所
東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
電話本局三一八五・振替口座東京二六八一〇
日本經濟叢書刊行會

理事
高木範之丞
鹽谷壽作
佐藤卯兵衛

CONTENTS

of the second volume

BIBLIOTHECA JAPONICA ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. II

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO KANKŌKWAI
1914.